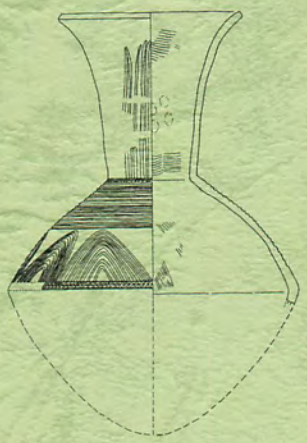
熊本県文化財調査報告　第128集

夏女遺跡

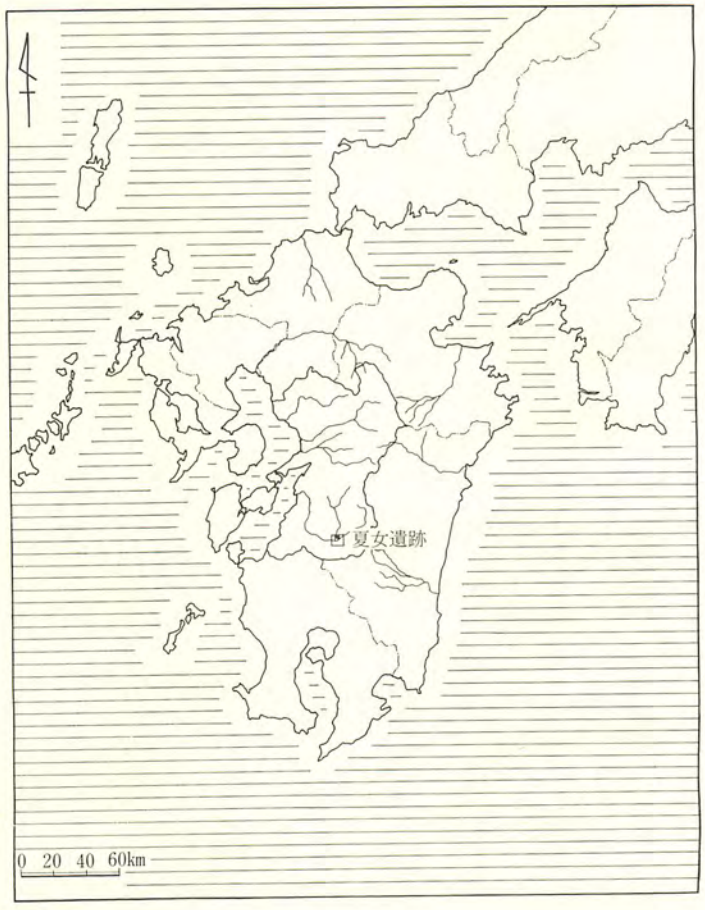


1993

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　　第128集

夏女（なつめ）遺跡

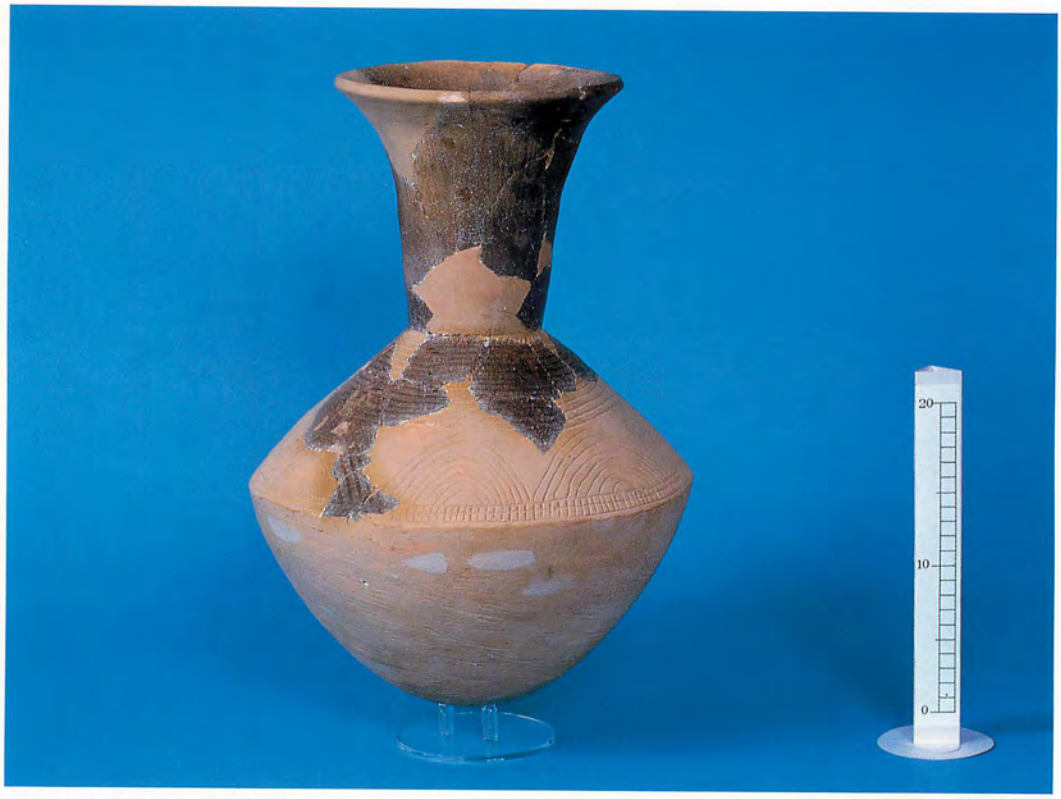


1993

熊本県教育委員会

遠景（東上空から）

57号住居跡



重弧文長頸壺（免田式土器）

ミニチュア土器

序　　文

熊本県には豊かな自然や歴史、風土のなかで培われた多彩な地域の伝統文化が数多く残されています。これらを守り、さらに新しい文化を創造し、後世に引き継いでいくためには、県民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力をいただかなければなりません。

本書は、球磨郡錦町の農免農道建設事業に先行して行なった夏女遺跡の発掘調査報告書です。弥生時代を中心とする住居跡が多く検出され、遺物のなかには青銅製釧や青銅製鏡など重要なものも少なくありません。従来、実体がよくわからなかった球磨郡の弥生時代について重要な資料を提供しました。

この報告書が、熊本県の歴史を学ぶうえで、また埋蔵文化財をより深く理解していただくうえで、御活用いただければ幸いです。

最後に、調査の円滑な実施に、御理解と御協力をいただきました地元の方々、並びに関係機関に対して厚くお礼申し上げます。

平成５年３月31日

熊本県教育長　道越　温

例　　言

1．本書は熊本県球磨郡錦町木上字夏女に所在する夏女遺跡の調査報告書である。

2．調査は農免農道整備事業に伴う事前調査として、熊本県農政部の依頼を受け、熊本県教育庁文化課が実施し、調査は平成元年９月～平成２年２月の第１次調査、平成２年７月～11月の第２次調査と２期にわけて実施した。整理・報告は平成４年度に行った。

3．本書に使用した地形図は、熊本県球磨事務所耕地課から提供を受けたものを基礎にしている。

4．現地調査に関する実測及び写真撮影は調査員で行った。また、遺物の写真撮影は白石巌が行った。

5．遺物の実測は主として園村辰実と木下俊恵が行い、弥生時代以前の石器（ナイフ形石器及び打製石鏃）を木﨑康弘が、鉄器・青銅器を宮崎敬士が行った。製図は主に中田弥生が行い、一部を藤原ゆり子、平畑信子、徳永みどりが行った。

6．本書の執筆は、主として園村がこれにあたり、一部を島津義昭（第Ⅰ章第１節）、木﨑（第Ⅱ章第１節・第Ⅲ章第１節の一部）が担当した。

7．本書の編集は熊本県教育庁文化課で行い、園村が担当した。

凡　　例

1．現地での実測図の縮尺は、遺構配置図を100分の１、竪穴式住居跡を20分の１、１号溝を40分の１・２・３号溝を20分の１、土坑を10分の１で行った。また、本書に掲載した縮尺は竪穴式住居跡、土器溜、溝を60分の１、土坑、基本土層図を40分の１に統一した。

2．遺構の方位はすべて磁北である。

3．出土遺物の番号は土器、石器、鉄器、青銅器をそれぞれ通して付した。なお縮尺は、土器を３分の１（一部大型のものについては６分の１、９分の２）、石器は、石包丁を２分の１、打製石斧、砥石、磨石、敲石を３分の１（大型のものについては６分の１）、台石を６分の１、ナイフ形石器、打製石鏃を原寸、鉄器を原寸、青銅鏡は実測不可能なため、写真によるトレースを行った。

4．出土遺物の解説は本文中に記したが、それらの計測値は計測表中に一括して掲載した。

〔本文目次〕

口絵（カラー）
序文
例言
凡例
本文目次
挿図目次
表目次
写真図版目次

第Ⅰ章　調査の概要……1
　第1節　調査に至る経緯と経過 ……1
　　1　調査に至る経緯 ……1
　　2　調査の経過……1
　　3　整理の経過……2
　第2節　調査の方法……4
　　1　調査方法および調査区の設定 ……4
　　2　遺跡の基本層序 ……4

第Ⅱ章　遺跡の概要……9
　第1節　遺跡の環境……9
　　1　地理的環境……9
　　2　歴史的環境……10
　　⑴先土器時代……10
　　⑵縄文時代……10
　　⑶弥生時代……12
　　⑷古墳時代……12
　　⑸奈良・平安時代……13

第Ⅲ章　調査の成果……17
　第1節　弥生時代以前の遺物 ……17
　　1　旧石器時代の遺物 ……17

(1)ナイフ形石器……17
2　縄文時代の遺物 ……17
(1)打製石鏃……17
(2)打製石斧……19
第2節　弥生時代後期から古墳時代にかけての遺構と遺物 ……26
1　竪穴式住居跡と出土土器 ……26
2　土器溜 ……148
3　1号溝〔条溝〕 ……172
第3節　時期不明の遺構 ……172
1　土坑 ……172
2　溝遺構 ……172
第4節　遺構外出土の土器 ……174
第5節　弥生時代から古墳時代にかけての石器……194
1　石包丁 ……194
2　砥石 ……197
3　磨石 ……202
4　敲石 ……208
5　台石 ……211
第6節　鉄器 ……216
1　鉄鏃 ……216
2　刀子 ……216
3　鉇 ……219
4　その他 ……219
第7節　青銅器 ……220
1　青銅鏡 ……220
2　銅釧 ……220

第Ⅳ章　まとめ ……223
第1節　竪穴式住居跡について ……223
1　竪穴式住居跡の平面形態およびその内部構造……223
2　住居跡の分布と時期の変遷 ……225
第2節　出土土器 ……225
1　甕 ……226

2　壺 ……226
3　重弧文長頸壺 ……227
参考文献 ……228
図版 ……231

〔挿図目次〕

第１図　農免農道路線図 …… 3
第２図　地形図 …… 5
第３図　遺構配置図 …… 6
第４図　基本土層図 …… 7
第５図　夏女遺跡周辺遺跡分布図 ……14
第６図　ナイフ形石器及び
　打製石鏃実測図 ……18
第７図　打製石斧実測図(1) ……22
第８図　打製石斧実測図(2) ……23
第９図　打製石斧実測図(3) ……24
第10図　１号住居跡実測図 ……27
第11図　１号住居跡出土土器実測図(1)……28
第12図　１号住居跡出土土器実測図(2)……29
第13図　１号住居跡出土土器実測図(3)……30
第14図　１号住居跡出土土器実測図(4)……31
第15図　１号住居跡出土土器実測図(5)……32
第16図　１号住居跡出土土器実測図(6)……33
第17図　２号住居跡実測図 ……35
第18図　２号住居跡出土土器実測図(1)……36
第19図　２号住居跡出土土器実測図(2)……37
第20図　３号住居跡実測図 ……39
第21図　３号住居跡出土土器実測図 ……40
第22図　４号住居跡実測図 ……41
第23図　５号住居跡実測図 ……42
第24図　５号住居跡出土土器実測図 ……43
第25図　６号住居跡実測図 ……44
第26図　６号住居跡出土土器実測図(1)……45
第27図　６号住居跡出土土器実測図(2)……46
第28図　７号住居跡実測図 ……46
第29図　７号住居跡出土土器実測図 ……47
第30図　８号住居跡実測図 ……47
第31図　９号住居跡実測図 ……48
第32図　10号住居跡実測図 ……48
第33図　11号住居跡実測図 ……49
第34図　11号住居跡出土土器実測図 ……49
第35図　12号住居跡実測図 ……50
第36図　12号住居跡出土土器実測図 ……50
第37図　13号住居跡実測図 ……51
第38図　13号住居跡出土土器実測図(1)……53
第39図　13号住居跡出土土器実測図(2)……54
第40図　14号住居跡実測図 ……55
第41図　14号住居跡出土土器実測図 ……56
第42図　15号住居跡実測図 ……57
第43図　15号住居跡出土土器実測図 ……57
第44図　16号住居跡実測図 ……58
第45図　17号住居跡実測図 ……58
第46図　17号住居跡出土土器実測図 ……59
第47図　18号住居跡実測図 ……60
第48図　18号住居跡出土土器実測図(1)……61
第49図　18号住居跡出土土器実測図(2)……62
第50図　19号住居跡実測図 ……63
第51図　19号住居跡出土土器実測図 ……64

第52図　20号住居跡実測図 ……65
第53図　20号住居跡出土土器実測図 ……66
第54図　21号住居跡実測図 ……66
第55図　21号住居跡出土土器実測図 ……67
第56図　22号住居跡実測図 ……67
第57図　22号住居跡出土土器実測図 ……68
第58図　23号住居跡実測図 ……70
第59図　23号住居跡出土土器実測図 ……71
第60図　24号住居跡実測図 ……72
第61図　24号住居跡出土土器実測図 ……73
第62図　25号住居跡実測図 ……74
第63図　25号住居跡出土土器実測図 ……75
第64図　26号住居跡実測図 ……75
第65図　27号住居跡実測図 ……76
第66図　27号住居跡出土土器実測図 ……77
第67図　28号住居跡実測図 ……78
第68図　29号住居跡実測図 ……78
第69図　29号住居跡出土土器実測図 ……79
第70図　30号住居跡実測図 ……79
第71図　31号住居跡実測図 ……79
第72図　31号住居跡出土土器実測図 ……80
第73図　32.33号住居跡実測図 ……81
第74図　33号住居跡出土土器実測図 ……82
第75図　34号住居跡実測図 ……82
第76図　35号住居跡実測図 ……83
第77図　35号住居跡出土土器実測図 ……83
第78図　36号住居跡実測図 ……84
第79図　36号住居跡出土土器実測図 ……84
第80図　37号住居跡実測図 ……85
第81図　37号住居跡出土土器実測図 ……86
第82図　38号住居跡実測図 ……87
第83図　39号住居跡実測図 ……87
第84図　40号住居跡実測図 ……88
第 85図　40号住居跡出土土器実測図 ……89
第 86図　41号住居跡実測図 ……90
第 87図　41号住居跡出土土器実測図 ……91
第 88図　42号住居跡実測図 ……91
第 89図　42号住居跡出土土器実測図 ……91
第 90図　43号住居跡実測図 ……92
第 91図　43号住居跡出土土器実測図 ……92
第 92図　44号住居跡実測図 ……93
第 93図　44号住居跡出土土器実測図 ……93
第 94図　45号住居跡実測図 ……94
第 95図　45号住居跡出土土器実測図 ……95
第 96図　46号住居跡実測図 ……96
第 97図　46号住居跡出土土器実測図 ……96
第 98図　47号住居跡実測図 ……96
第 99図　48号住居跡実測図 ……97
第100図　48号住居跡出土土器実測図 ……97
第101図　49号住居跡実測図 ……98
第102図　49号住居跡出土土器実測図 ……99
第103図　50号住居跡実測図 ……100
第104図　50号住居跡出土土器実測図 ……101
第105図　51号住居跡実測図 ……102
第106図　51号住居跡出土土器実測図 ……102
第107図　52号住居跡・土器実測図 ……103
第108図　53号住居跡・土器実測図 ……104
第109図　54号住居跡・土器実測図 ……105
第110図　55号住居跡実測図 ……105
第111図　55号住居跡出土土器実測図(1)…106
第112図　55号住居跡出土土器実測図(2)…107
第113図　56号住居跡実測図 ……108
第114図　56号住居跡断面及び
　　遺物出土状況実測図 ……109
第115図　56号住居跡出土土器実測図(1)…110
第116図　56号住居跡出土土器実測図(2)…111

第117図　56号住居跡出土土器実測図(3)…112
第118図　57号住居跡実測図 ……117
第119図　57号住居跡断面実測図(1)……118
第120図　57号住居跡遺物出土状況
実測図(1) ……119
第121図　57号住居跡遺物出土状況
実測図(2) ……120
第122図　57号住居跡出土土器実測図(1)…121
第123図　57号住居跡出土土器実測図(2)…122
第124図　57号住居跡出土土器実測図(3)…123
第125図　57号住居跡出土土器実測図(4)…124
第126図　57号住居跡出土土器実測図(5)…125
第127図　57号住居跡出土土器実測図(6)…126
第128図　57号住居跡出土土器実測図(7)…127
第129図　57号住居跡出土土器実測図(8)…128
第130図　57号住居跡出土土器実測図(9)…129
第131図　57号住居跡出土土器実測図(10)…130
第132図　57号住居跡出土土器実測図(11)…131
第133図　57号住居跡出土土器実測図(12)…132
第134図　57号住居跡出土土器実測図(13)…133
第135図　57号住居跡出土土器実測図(14)…134
第136図　57号住居跡出土土器実測図(15)…135
第137図　57号住居跡出土土器実測図(16)…136
第138図　57号住居跡出土土器実測図(17)…137
第139図　57号住居跡出土土器実測図(18)…138
第140図　57号住居跡出土土器実測図(19)…139
第141図　58号住居跡・土器実測図 ……140
第142図　59号住居跡実測図 ……140
第143図　60号住居跡・土器実測図 ……141
第144図　61号住居跡・土器実測図 ……141
第145図　62号住居跡実測図 ……142
第146図　62号住居跡出土土器実測図 ……142
第147図　63号住居跡実測図 ……143
第148図　64号住居跡実測図 ……144
第149図　65号住居跡実測図 ……145
第150図　65号住居跡出土土器実測図 ……145
第151図　66・67号住居跡実測図 ……146
第152図　68号住居跡実測図 ……147
第153図　68号住居跡遺物出土状況
実測図 ……148
第154図　67・68号住居跡出土土器
実測図(1) ……149
第155図　68号住居跡出土土器実測図(2)…150
第156図　68号住居跡出土土器実測図(3)…151
第157図　68号住居跡出土土器実測図(4)…152
第158図　68号住居跡出土土器実測図(5)…153
第159図　68号住居跡出土土器実測図(6)…154
第160図　68号住居跡出土土器実測図(7)…155
第161図　68号住居跡出土土器実測図(8)…156
第162図　68号住居跡出土土器実測図(9)…157
第163図　68号住居跡出土土器実測図(10)…158
第164図　68号住居跡出土土器実測図(11)…159
第165図　68号住居跡出土土器実測図(12)…160
第166図　土器溜実測図 ……162
第167図　土器溜出土土器実測図(1)……163
第168図　土器溜出土土器実測図(2)……164
第169図　土器溜出土土器実測図(3)……165
第170図　土器溜出土土器実測図(4)……166
第171図　土器溜出土土器実測図(5)……167
第172図　土器溜出土土器実測図(6)……168
第173図　土器溜出土土器実測図(7)……169
第174図　土器溜出土土器実測図(8)……170
第175図　1号溝実測図 ……171
第176図　土坑実測図 ……172
第177図　2号溝実測図 ……173
第178図　3号溝実測図 ……173

第179図　遺構外出土土器実測図(1)……175
第180図　遺構外出土土器実測図(2)……176
第181図　遺構外出土土器実測図(3)……177
第182図　石包丁実測図(1)……198
第183図　石包丁実測図(2)……199
第184図　石包丁実測図(3)……200
第185図　石包丁実測図(4)……201
第186図　砥石実測図(1)……203
第187図　砥石実測図(2)……204
第188図　砥石実測図(3)……205
第189図　磨石実測図(1)……206
第190図　磨石実測図(2)……207
第191図　敲石実測図(1)……209
第192図　敲石実測図(2)……210
第193図　敲石実測図(3)……211
第194図　台石実測図(1)……212
第195図　台石実測図(2)……213
第196図　鉄器実測図(1)……217
第197図　鉄器実測図(2)……218
第198図　青銅器実測図……222

〔表　目　次〕

第１表　周辺遺跡地名表……15
第２表　ナイフ形石器及び打製石鏃
　　計測表……21
第３表　打製石斧計測表……25
第４表　土器観察表(1)……179
第５表　土器観察表(2)……180
第６表　土器観察表(3)……181
第７表　土器観察表(4)……182
第８表　土器観察表(5)……183
第９表　土器観察表(6)……184
第10表　土器観察表(7)……185
第11表　土器観察表(8)……186
第12表　土器観察表(9)……187
第13表　土器観察表(10)……188
第14表　土器観察表(11)……189
第15表　土器観察表(12)……190
第16表　土器観察表(13)……191
第17表　土器観察表(14)……192
第18表　土器観察表(15)……193
第19表　石器計測表(1)……214
第20表　石器計測表(2)……215
第21表　鉄器計測表(1)……219

図　版　目　次

図版１　北より夏女遺跡を望む
　　夏女遺跡近景〔第１次調査〕
　　（東より）
図版２　夏女遺跡北側土層断面
　　基本土層
図版３　１号住居跡（南より）
　　１号住居跡遺物出土状況
図版４　２・３号住居跡（東より）
　　２・３号住居跡遺物出土状況
　　（西より）
図版５　２号住居跡組み合わせ土器出土状況
　　２号住居跡土器出土状況

図版６　４号住居跡遺物出土状況
４号住居跡遺物出土状況（接写）
図版７　５号住居跡（北より）
５号住居跡遺物出土状況
図版８　６号住居跡（北より）
６号住居跡遺物出土状況
図版９　８号住居跡（西より）
９・10号住居跡（北より）
図版10　11号住居跡（西より）
12号住居跡（西より）
図版11　13号住居跡（北より）
14号住居跡（北より）
図版12　15・16号住居跡（北より）
17号住居跡（南より）
図版13　17号住居跡土器出土状況
17号住居跡石包丁出土状況
図版14　18・19号住居跡（北東より）
20号住居跡（北より）
図版15　21号住居跡（東より）
22号住居跡（南東より）
図版16　23・24・26号住居跡（北東より）
25・27号住居跡（北より）
図版17　29・30号住居跡（北より）
31号住居跡（東より）
図版18　32・33号住居跡（東より）
34号住居跡（東より）
図版19　35号住居跡（東より）
36・37・38号住居跡（南東より）
図版20　39号住居跡（東より）
40・41号住居跡（東より）
図版21　42号住居跡（北西より）
43号住居跡（南より）
図版22　44号住居跡（東より）
45号住居跡（北より）
図版23　46・47号住居跡（西より）
48号住居跡（南西より）
図版24　49号住居跡（北より）
50号住居跡（北より）
図版25　51号住居跡（北より）
52号住居跡（東より）
図版26　53号住居跡（北より）
54号住居跡（南より）
図版27　55号住居跡遺物出土状況（西より）
56号住居跡（北より）
図版28　57号住居跡（東より）
57号住居跡遺物出土状況（北東より）
図版29　58号住居跡（北より）
59号住居跡（東より）
図版30　60号住居跡（北より）
61号住居跡遺物出土状況（北より）
図版31　62号住居跡遺物出土状況（北より）
63号住居跡遺物出土状況（南より）
図版32　65号住居跡（北より）
65号住居跡銅釧出土状況
図版33　66・67号住居跡（南より）
68号住居跡（南より）
図版34　68号住居跡遺物出土状況（南より）
68号住居跡石包丁出土状況
図版35　土器溜（東より）
土器溜遺物出土状況（西より）
図版36　１号溝〔条溝〕（北より）
１号溝〔条溝〕断面
図版37　１号土坑
２号溝
図版38　３号溝（南より）
住居跡発掘調査風景

図版39　1号住居跡出土土器－1
図版40　1号住居跡出土土器－2
図版41　1号住居跡出土土器－3
図版42　2号住居跡出土土器
図版43　3号住居跡出土土器
5号住居跡出土土器
図版44　6号住居跡出土土器
7号住居跡出土土器
図版45　11号住居跡出土土器
13号住居跡出土土器
図版46　14号住居跡出土土器
図版47　15号住居跡出土土器
17号住居跡出土土器
図版48　18号住居跡出土土器
図版49　19号住居跡出土土器
図版50　20号住居跡出土土器
21号住居跡出土土器
図版51　22号住居跡出土土器
図版52　23号住居跡出土土器
図版53　24号住居跡出土土器
図版54　25号住居跡出土土器
図版55　27号住居跡出土土器
29号住居跡出土土器
図版56　31号住居跡出土土器
33号住居跡出土土器
34号住居跡出土土器
35号住居跡出土土器
図版57　36号住居跡出土土器
37号住居跡出土土器
図版58　40号住居跡出土土器
42号住居跡出土土器
43号住居跡出土土器
図版59　44号住居跡出土土器
45号住居跡出土土器
図版60　45号住居跡出土土器
46号住居跡出土土器
図版61　49号住居跡出土土器
図版62　50号住居跡出土土器
51号住居跡出土土器
図版63　55号住居跡出土土器
図版64　56号住居跡出土土器－1
図版65　56号住居跡出土土器－2
図版66　57号住居跡出土土器－1
図版67　57号住居跡出土土器－2
図版68　57号住居跡出土土器－3
図版69　57号住居跡出土土器－4
図版70　57号住居跡出土土器－5
図版71　57号住居跡出土土器－6
図版72　57号住居跡出土土器－7
図版73　57号住居跡出土土器－8
図版74　57号住居跡出土土器－9
図版75　57号住居跡出土土器－10
図版76　60号住居跡出土土器
61号住居跡出土土器
62号住居跡出土土器
65号住居跡出土土器
67号住居跡出土土器
図版77　68号住居跡出土土器－1
図版78　68号住居跡出土土器－2
図版79　68号住居跡出土土器－3
図版80　68号住居跡出土土器－4
図版81　689号住居跡出土土器－5
図版82　68号住居跡出土土器－6
図版83　土器溜出土土器－1
図版84　土器溜出土土器－2
図版85　土器溜出土土器－3

図版86　一括取り上げ土器（免田式土器）-1
図版87　一括取り上げ土器（免田式土器）-2
図版88　一括取り上げ土器
図版89　打製石鏃
図版90　打製石斧
図版91　石包丁－1
図版92　石包丁－2
図版93　砥石－1
図版94　砥石－2
図版95　磨石
図版96　敲石
図版97　台石
図版98　鉄器
図版99　青銅製品

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯と経過

１　調査に至る経緯

昭和61年、球磨郡錦町に農林漁業用揮発油税財源替農道整備事業(農免農道)が計画された。この農免農道整備事業は基幹的農道の新設改良であって、受益面積がおおむね50ha以上で、(過疎振興山村は30ha以上)車道幅員が４ｍ以上、かつ総事業が２千万円以上のものである。錦町の事業（木上南２期）は、道路の延長距離1,890ｍで受益面積が220haにおよぶ。

文化課では、建設予定地区内についてくまなく踏査と試掘を行ったが、小字夏女(なつめ)の約2,500㎡の範囲に、弥生時代後期とみられる、集落跡が存在すると推定されたので、農地建設課と協議を行い、この部分について発掘調査を実施した。なお、調査地からは予想外に密集した遺構と遺物が発見されたので、平成元年度の第１次調査に続いて、平成２年度に第２次調査を行った。

２　調査の経過

文化課では下記のような体制で調査を行い、園村辰実が現地調査を担当した。また調査には多くの方が参加され貴重な御助言をいただいた。御芳名を記し、感謝の意を表したい。

調査主体　熊本県教育委員会
調査責任者　江崎　正（文化課長）
調査総括　隈　昭志（教育審議員）
　松本健郎（文化財調査第１係長）
調査担当　園村辰実（文化財保護主事　第１次，２次調査）
　藏𪜈浩一（文化財保護主事　第２次）
　中原幸博（文化財保護主事　試掘調査）
　菖蒲和弘（文化課嘱託　第１次）
　松舟博満（文化課嘱託　第１次）
　坂口圭太郎（文化課嘱託　第１次）
　久保田真（文化課嘱託　第１次）
調査事務　上村忠道（文化課経理係長）

大広美枝子（文化課主事）

調 査 指 導

乙益重隆（国学院大学教授）

原田正史（日本地質学会会員）

渋谷　敦（錦町教育委員長）

調査作業員

藤迫ハマ子　黒木広美　堀井三夫　田中博子　中山ミツ子　佐々すみえ

福田アヤ子　坂田ツル子　山崎ヤエノ　橋本ゆう子　坂田安信　楠浦かおる

3　整理の経過

出土遺物は熊本県文化財収蔵庫に搬入して、整理作業をすすめた。平成3年度に収蔵庫が熊本市千葉城町から渡鹿町に移転したため、一時整理が中断したが、遺跡の重要性および出土遺物の多様性にかんがみ、本報告書の刊行が地元および学界から強く求められた。

平成4年度に最終的な整理を行い、報告書の刊行にこぎつけた。整理について以下の方々の御協力や御助言をいただいた。以下御芳名を記し感謝の意を表したい。

報告書作成責任者　大塚正信（文化課長）

総　括　隈　昭志（教育審議員）

〃　島津義昭（文化財調査第1係長）

報告書担当　園村辰実（文化財保護主事）

〃　木下俊恵（文化課整理嘱託）

〃　中田弥生（文化課整理嘱託）

調 査 事 務　木下英治（文化課経理係主幹）

〃　高浜保子（文化課経理係参事）

調査指導助言　池畑耕一（鹿児島県埋蔵文化財センター文化財主事）

〃　中村直子（鹿児島大学法文学部助手）

〃　最上　敏（熊本県立装飾古墳館学芸員）

整理作業員

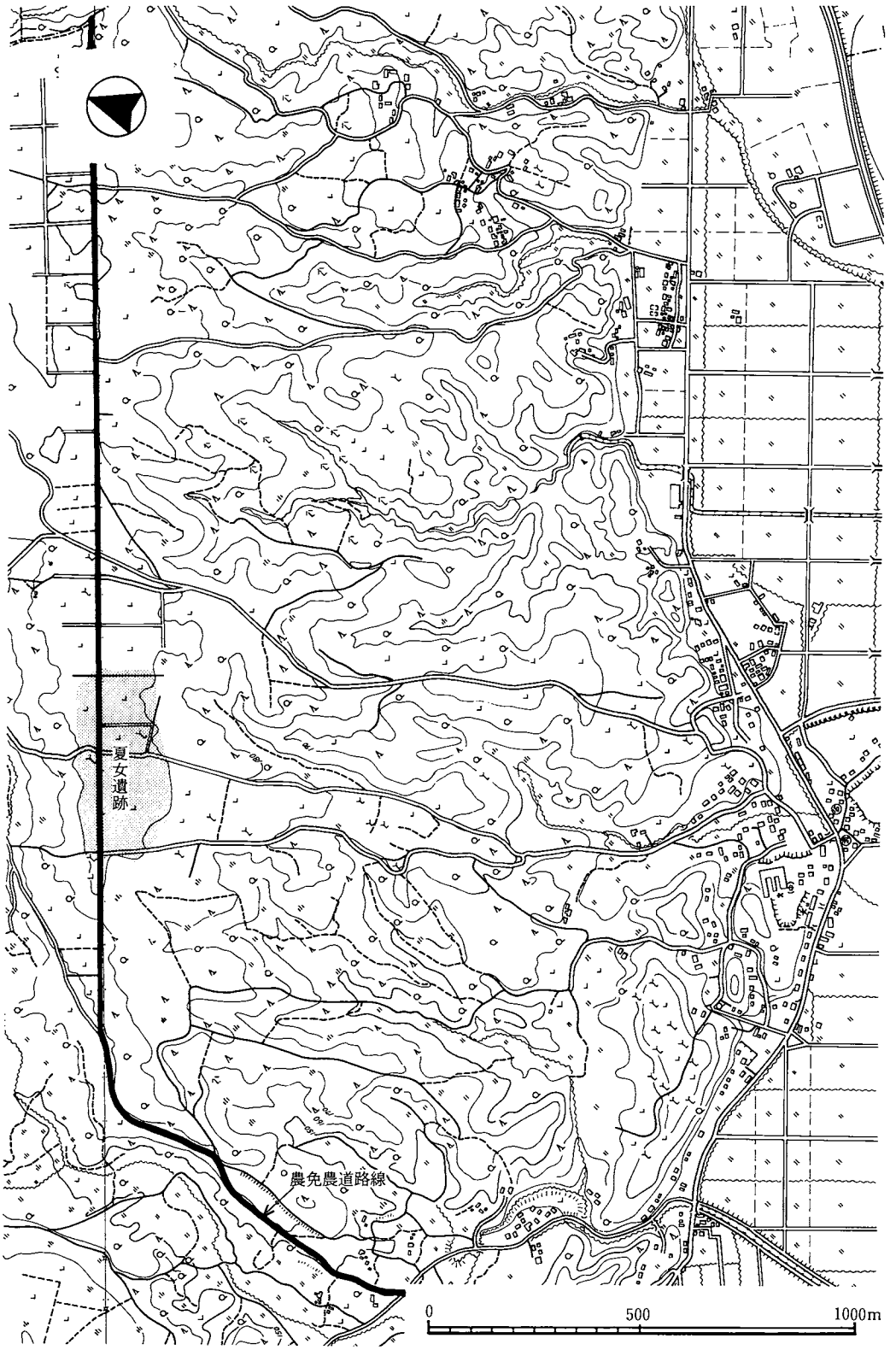
宮田日文　後藤直美　小山正子　上村孝子　渕上慶子　塚本博子　塩田貴美子

水本寿美子　米倉五月　江島園子　重永照代　後藤ちず子　今福英子　吉本清子

勝田智子　大塚磯子　吉田律子　荒牧陽子　河野智子　河崎節子　宇野玲子

安田京子　高橋知栄子　山元友子　山野孝子　藤原ゆり子　徳永みどり　平畑徳子

富永圭子　黒澤　文



第１図　農免農道路線図

第2節　調査の方法

1　調査方法および調査区の設定

本調査に先立ち、昭和63年に予定路線内に合計20本のトレンチを設定して行った試掘調査の結果、遺構の検出がかなり濃密であり、それに伴う遺物の量も相当のものであることが、判明した。本調査ではこの試掘結果をもとに、調査区の設定を行った。遺構および遺物の出土する約360ｍの調査区を二つに分け、平成元年度2年度の二ヶ年にわたり調査を行うこととし、元年度は台地の西側より1区～18区までの約180ｍ、2年度はその続きの19区より36区までの約180ｍの調査を実施した。グリッドの設定は、工事施工設計図により、道路のセンター杭を基準に10ｍを1グリッドとし、西から順に1区～36区と決定した。遺構番号も基本的に西側より1号～68号としたが、切り合い関係から一部前後するものもある。

本調査では、最初に重機により表土を剥いだが、調査区がもともと砂利道であったことと柔らかい地盤であったことから、遺構確認面への砂利等の混入や乱れなどで、遺構確認にかなり困難を期した。この遺跡には遺物を含む包含層が存在しなかったため、分層発掘は行わず純粋に遺構の発掘を実施した。基本的には各遺構の主軸に伴い、個別にポイントを設定し実測を実施したが、遺構の重複するものに関しては、グリッドによる1ｍメッシュによって実測を実施した。

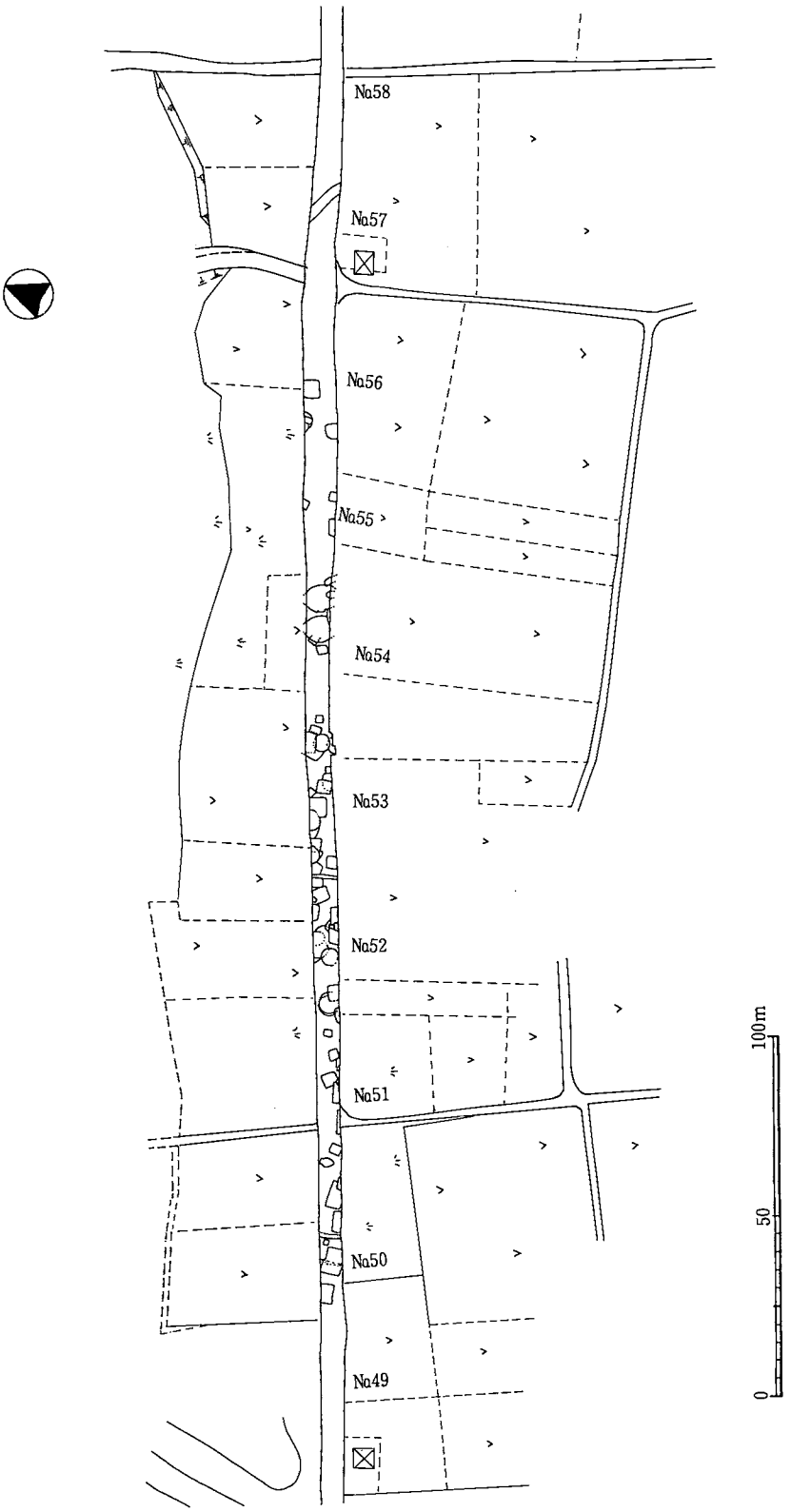
道路建設に伴う調査ということで、幅7～8ｍ、全長360ｍもの長きにわたるものであったが、この遺跡のほんの一部分を垣間見ただけである。東西の遺跡の範囲はおおよその見当はついたものの、南北にわたっては不明である。遺跡の範囲については試掘等で把握する必要があるであろう。

発掘調査は平成元年9月から平成2年2月までの6ヶ月間（第一次調査）、平成2年7月から11月までの5か月間（第二次調査）計11ヶ月を要した。出土した遺物の整理および報告書の作成は、平成4年6月から、熊本県文化財収蔵庫において実施した。

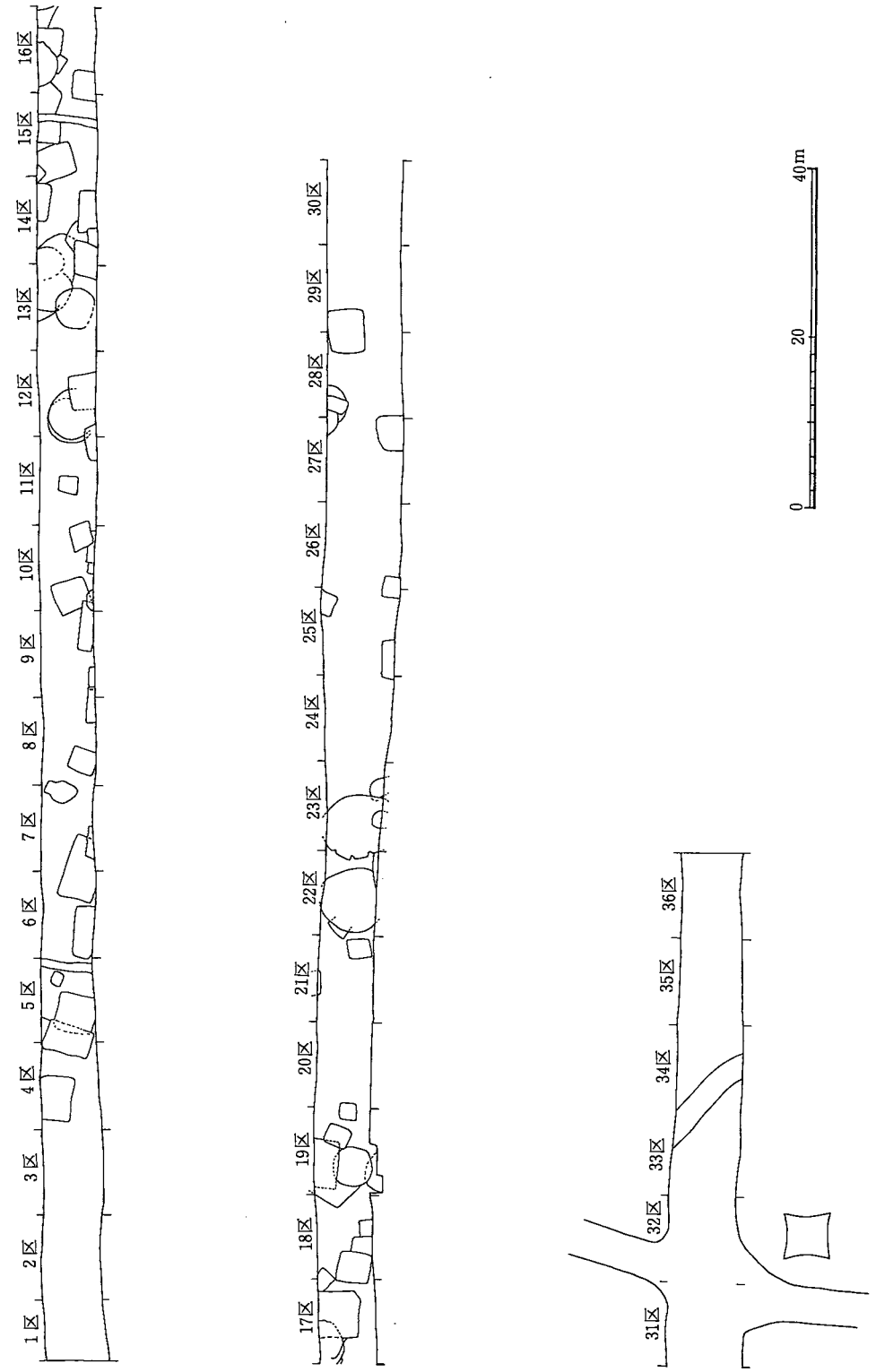
2　遺跡の基本層序（第4図）

遺跡の位置する高原台地は、地層の褶曲が激しく、一部には断層さえもうかがえる。本来Ⅶ層である礫層が場所により、耕作土のすぐ下に確認できるほどである。一概に基本土層といっても無理があるかも知れないが、ここでは3区の南側に設けたトレンチの土層を見てみる。

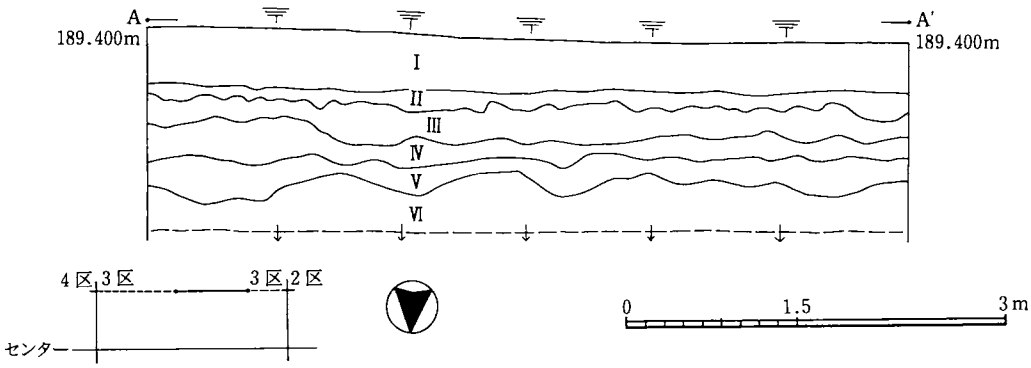
第Ⅰ層　表土層（耕作土）



第2図　地 形 図


1区
2区
3区
4区
5区
6区
7区
8区
9区
10区
11区
12区
13区
14区
15区
16区
17区
18区
19区
20区
21区
22区
23区
24区
25区
26区
27区
28区
29区
30区
31区
32区
33区
34区
35区
36区
0
20
40m

第3図　遺構配置図



第4図　基本土層図

第Ⅱ層　黒色土層

この層はその上位を耕作等により削られている。しまりが無く、全体に軟弱な状態である。この層の形成時代は歴史時代であるが、遺物等の混入は無かった。

第Ⅲ層　黄褐色土層

アカホヤ火山灰の土層である。純粋なアカホヤ火山灰をブロック状に含み、ややしまりがある。この遺跡での遺構はすべてこの層に堀り込まれている。ただこの層自体には遺物は含まない。

第Ⅳ層　黄褐色土層

アカホヤ火山灰の一次堆積による層で、ややしまりがあり、無遺物層である。

第Ⅴ層　黄色土層

ローム層で、ややしまりがあり粘り気は少ない。無遺物層である。

第Ⅵ層　黄色土層

第Ⅴ層に類似しているが、硬くしまり粘り気が強い。無遺物層である。この層の下面のレベルは不明である。

第Ⅶ層　礫層

このトレンチでの確認は出来なかったが、この台地の北側斜面での土層観察によれば、Ⅶ層は礫層となる。拳大の赤色をした砂岩が主を占める。

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の環境

１　地理的環境

九州は、地形的に四つの地域に区分される。北部山地、中部火山地域、中部山地、南部火山地域がそれで、それぞれに独特な地理的特徴をなしている。例えば、北部山地は広い平野部と背振山地を始めとした険しい山地であるし、中部火山地域は阿蘇山や雲仙岳などの火山と熊本平野、中部山地は険しい九州山地、南部火山地域は広大なシラス台地や多くの活火山群と、九州の顔は様変わりしていく。それだけに、そこで生活してきた古以来の人々には、それなりの適応戦略が必要だったであろうし、それぞれの地域の人々との接触にも微妙な影響を与えていたに違いない。

中部山地は、1,700m級の山々が連なった九州山地が地形的な中心をなしている。したがって、平野部はとても狭く、不知火海沿岸や太平洋岸などの海岸線周辺、そして山地内に大きく口を開く人吉盆地にあるのみである。つまり、中部山地は、1,700m級から０mまでという激しい高低差をもち、しかも高山の山間をぬうように大小の川が流れて深い谷を形成するなどとても起伏に富んだ地形をしていることになる。そうした山間を流れる川の一つが、球磨川でおのずとその流れは速くなる。日本三急流に数えられる所以であろう。

人吉盆地は、断層盆地である。この断層に沿って流れる川が球磨川である。その流れは、盆地の東端にある市房山（1,722m）を源にして、盆地内を東西に貫流する。そして、その後に流れが北向きにかわるやいなや中部山地の谷間へと入り込み、複雑に蛇行しながら不知火海へと注ぎ込んでいる。その間の支流は80本、流域面積は1,880㎢と、熊本県総面積の25％を占めている。まさに県下最大規模の河川と言えそうだ。

人吉盆地の地形は、この球磨川とそれに注ぎ込む多くの支流によって作られている。球磨川を中心にして、その南と北でその特徴を概観してみよう。

球磨川の南側の地形展開は、山地→台地→沖積地→球磨川である。山地は、言うまでもなく九州山地であり、生産の場として古くから利用されている場所でもある。この山地の麓には、多くの支流によって幾重にも重なりあった複合扇状地が広がっている。これが台地部で、原始・古代以来の生活舞台の中心となってきた所である。沖積地は、球磨川に沿って広がり、今でも広い耕作地として利用されている。弥生時代以降に中心的な生産の場として利用された所である。

球磨川の北側も、山地→台地・丘陵地→沖積地→球磨川という地形展開をなしている。この山地も生産の場として利用されていた所であるが、川辺川などの支流域には数多くの集落が点在している。台地や丘陵地は、球磨川の支流川辺川によって作られた扇状地と共に、阿蘇溶結凝灰岩や入戸火砕流を基盤とする丘陵部がその両側に広がっている。このために、平坦な南側に対して起伏に富んだ北側という印象を受ける。北側の沖積地は、南のそれと比べると、極端に狭い。そのことが、生産性の問題に発展する。例えば、弥生時代や古墳時代の大規模な遺跡が南側に多いという点は、そのことをある面で暗示しているものだろう。

さて、今回、報告する夏女遺跡は、中部山地の中に口を開けた人吉盆地内にあり、しかもその北側台地である川辺川の扇状地上に位置している。こうした地理的背景の中に、夏女遺跡があるのだが、そうした面を歴史的な環境としてもう一歩踏み込んで検討する必要がある。

2　歴史的環境

(1)先土器時代

夏女遺跡では、先土器時代に属するナイフ形石器１点が出土した。

球磨・人吉地方の先土器時代遺跡は、今日までに42箇所が見つかっている。ナイフ形石器文化以前１遺跡（深田村中里遺跡)、ナイフ形石器文化27遺跡、細石器文化12遺跡、不明６遺跡がその内訳である。

ナイフ形石器文化では、人吉市血気ケ峯遺跡でみつかった石器文化がもっとも古い。台形石器や刃部磨製石斧が伴うもので、今から３万年ほど前のものである。次に古い石器文化が山江村狸谷遺跡で見つかった狸谷Ⅰ石器文化（木﨑・隈1987）である。ナイフ形石器、掻器、削器抉入石器、彫器、磨石・敲石等の多くの石器が出土した。出土層位が入戸火砕流の直下にあり姶良Tn火山灰降灰（以後、ＡＴとする）直前の段階である。この他、球磨村久保遺跡など盆地内でも数遺跡がみつかっている。その意味で、人吉盆地は、ＡＴ直前の様相を知る上での貴重な資料を提供する地域の一つに数えられる。

ＡＴ以後のナイフ形石器文化は、剥片尖頭器や三稜尖頭器、台形石器、切出形ナイフ形石器などによって特徴づけられる。人吉市白鳥平遺跡では、剥片尖頭器や三稜尖頭器が発掘されている。同じく人吉市天道ケ尾遺跡、同市鼓ケ峰遺跡、同市村山・闇谷遺跡、同市血気ケ峯遺跡山江村大丸・藤ノ迫遺跡、同高城遺跡、狸谷遺跡でも関係する石器文化が検出されている。夏女遺跡で見つかったナイフ形石器は、この時期のものである。

細石器文化の遺跡としては、山江村城馬場遺跡があり、たくさんの細石核や細刃器が出土した。また、人吉市白鳥平遺跡でも当該期の資料が出土している。

(2)縄文時代

夏女遺跡では、後期から晩期にかけての石器が出土している。

人吉盆地では、草創期の遺跡が数遺跡見つかっている。もっとも古いものは、山江村狸谷遺跡と多良木町里城遺跡で、隆起線文土器が伴っている。石器としては、前者が細石器で、後者が細石器と石鏃である。次に来るのが白鳥平II遺跡で、爪形文土器が伴っている。石鏃が一緒に出土していて、この時期になると細石器が消滅することがわかる。

早期の遺跡では、球磨村大瀬洞穴遺跡と同村高沢洞穴遺跡が有名である。いずれも石灰岩地帯にある鍾乳洞の遺跡で、骨や貝殻などの保存に適した条件を備えている。出土した動物関係の資料には、鹿の骨の他、アワビ・ハマグリなどの海の貝殻が発掘されている。このように、海との関係を示唆する貝殻が出土したことは、縄文時代早期社会を考える上でとても重要なデータである。早期社会と言えば、山江村狸谷遺跡で当時の竪穴式住居跡が検出されたことが想起される。今後の資料増加によって、さらに細かい検討が可能となろう。また、縄文時代早期の壺形土器が出土したとして有名になった山江村城馬場遺跡、塞ノ神式土器を多く出土した大丸・藤ノ迫遺跡、押型文土器で著名な村山遺跡群、多様な種類の手向山式土器が発掘された天道ケ尾遺跡など、数多くの遺跡が盆地内で見つかっている。その発見される場所は、台地や丘陵地だけではなくて、山地内にもある。球磨・人吉地方でもっもと多くの遺跡が残されている時期である。

前期では、人吉市鼓ケ峯遺跡で轟式土器と曽畑式土器が多く出土している。また、人吉市八峰遺跡で抉状耳飾りが採集されている。伴出土器は、轟式土器が予想される。曽畑式土器は、人吉市棚平遺跡で採集されている。

中期の遺跡では、球磨村の大無田周辺で数遺跡がみつかっているが、表面採集の資料である。発掘資料としては、人吉市鼓ケ峯遺跡や湯前町米山遺跡がそれにあたる。鼓ケ峯遺跡では瀬戸内地方で一般的な船元式土器が出土していて、その人吉盆地への入り方が問題となる。また、この二つの遺跡から見つかった、底部に鯨の脊椎骨の痕跡が残る土器は興味が湧く。ただし、この時期は遺跡数も少なくて、その様子がはっきりしていない。

後期になると遺跡数も増える。発掘例としては、鼓ケ峯遺跡がもっとも古い土器を出土している。南福寺式土器や出水式土器がそれで、このようにまとまって土器が出土したのはこの遺跡の他には、湯前町米山遺跡があるくらいである。天道ケ尾遺跡は、西平式土器が出土しているので、後期の中頃の遺跡である。後期の終わりから晩期にかけての遺跡としては、人吉市中堂遺跡が重要である。辛川式土器、三万田式土器、天城式土器の時期の集落遺跡として著名である。なお、この遺跡では晩期になっても集落は継続し、古閑式土器や黒川式土器の住居跡も発見されている。主な石器や石製品では、十字形石器や円盤状石器など後期末から晩期にかけての特徴的な石器、長崎翡翠製の玉類、及び生業関係の石錘（漁業）や打製石斧、そして佐賀県腰岳からもたらされた黒曜石などがみつかっている。北部九州との関係を考える上でも注目

に値しよう。

上記した中堂遺跡の他、人吉市アンモン山遺跡もある。黒川式土器のほぼ単純な遺跡で、打製石斧も数多く発掘されている。また、球磨村近江原遺跡では、石刀の柄の部分が採集されている。

弥生時代との境あたりの年代の遺跡もある。例えば、相良村の中学校庭からは夜臼式土器の深鉢形土器が出土しているし、多良木町の思川でもその壺形土器が見つかっている。また、黒川式土器の中でもっとも新しい頃の土器が、錦町大原天子遺跡や人吉市七地遺跡などで出土した。特に、大原天子遺跡では、それまで縄文時代には無いと考えられてきた有肩打製石斧が出土していて、物議を醸しだしそうだ。

(3)弥生時代

夏女遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡である。

人吉盆地でもっとも古い弥生式土器は、人吉市荒毛遺跡や多良木町の大久保台地で見つかっている中期初め頃の城ノ越式土器である。しかし、この土器を伴った遺構の発見はない。次に古い年代のものは、人吉市中通遺跡がある。円形の竪穴式住居とともに黒髪式土器と磨製の石鏃が出土している。人吉盆地内での中期遺跡の発見は、画期的なことである。

後期になると遺跡数も増え、重弧文土器の本場のイメージが強い。中でも、Ｖ字溝が発掘されていると共に、多数の重弧文土器が採集されている荒毛遺跡は圧巻である。また、免田町本目・下乙遺跡や市房隠遺跡は、重弧文土器が考古学界で注目され始めるきっかけを作った遺跡で、多量の土器が出土している。このような大規模遺跡の影に隠れた小規模な遺跡も盆地内にはみられる。山江村大丸・藤ノ迫遺跡や人吉市鼓ケ峯遺跡がそれであろう。また、人吉市や五木村の山地部から弥生式土器が出土しているのも見逃すことができない。弥生時代における生業を異にする二つの世界が存在した可能性が高い。

人吉盆地の弥生時代を問題にする時、多良木町の大久保台地にある槍掛松遺跡は見逃せない。それは、この遺跡から細形銅剣が発見されているからである。この銅剣がどのようなルートを辿って当地へもたらされたのか、興味は尽きない。しかも、夏女遺跡でも青銅器が３点出土している。同様の課題が与えられそうである。また、外部との交流の問題では、宮崎県で多く発見される両端が抉れている打製の石包丁がある。盆地内では、水上村や多良木町の大久保台地それに人吉市の泉田周辺で発見されている。二つの地域には何らかの交流が成立していたはずである。また、重弧文土器に関しても、その分布域は相当に広い。当然、そうした問題が浮かび上がってくるであろうし、特に、この種の土器が多く発見されている宇城地方との関係は注意が必要であろう。

(4)古墳時代

夏女遺跡ではこの時代の竪穴式住居跡も出土している。しかし、この頃にまだ古墳は作られ

ず、地下式板石積石室墓などが作られていた。

人吉盆地に古墳が作られるようになるのは、5世紀後半になってからのことである。夏女遺跡と同じ高原台地にある相良村吉野尾古墳群がそれである。石棺系の小型横口式石室を内部主体とする小さな古墳である。須恵器の年代がそれを示している。この時期に近い集落遺跡は、同じ相良村深水・小園遺跡で発掘されている。

人吉盆地で古墳が多く作られるようになるのは、6世紀に入ってからのことである。その中でもっとも有力な古墳が錦町にある亀塚古墳群という3基の前方後円墳であろう。5世紀の終わりから6世紀にかけての年代が考えられるが、当地域では唯一の前方後円墳である。また、同じ錦町には四塚古墳群という、盆地内ではもっとも大きな円墳群があるし、さらに東へ行けば金メッキされた銅鏡や多くの武器・工具類が出土した免田町才園古墳群がある。このように球磨川の南側で、錦町から免田町にかけての一帯は、古墳時代の有力な墓が点在している点で注意が必要な地域である。この他、これらの古墳をめぐる地域では小型の古墳群が作られる場合があった。例えば、相良村石坂鍋野古墳群、山江村別府古墳群、多良木町夫婦塚古墳群、水上村諏訪原古墳群、同村千人塚古墳群などはその例である。古墳時代における人吉盆地内での支配構造を物語るのかもしれない。

6世紀から7世紀にかけては、免田町鬼ノ釜古墳や同村才園古墳という大きめの古墳もあるが、その他は横穴などが穿たれ始める。特に、装飾がある横穴は、古くから注目を集めていた。人吉市村山横穴群、錦町京ケ峯横穴群、相良村小原横穴がそれである。

こうした墓制の他に、宮崎県を中心にして作られていた地下式横穴もある。人吉市天童ケ尾遺跡で見つかったものがそれで、6世紀のものと推定されている。

集落遺跡としては、アンモン山遺跡で6世紀に属する竪穴式住居跡が2基発見されている。南九州系統の成川式土器を伴うもので、当時の文化基盤を考える上で貴重な資料となっている。また、山江村城馬場遺跡でも当該期の住居跡が検出されている。

(5)奈良・平安時代

古代における球磨・人吉地方の中心地域は、依然として盆地中央部にあったと考えられる。このことは、須恵器や瓦の古窯跡（深田村高山古窯跡・錦町下り山古窯跡など）、古瓦出土遺跡（免田町久鹿寺田遺跡）、蔵骨器出土遺跡（上村から免田町にかけて）などが多くこの地域に分布していることからもわかる。ただ、時代が下るに従って人吉市周辺も中心地域の一つに成長していったことは、中世の段階で重要地域一つになっていることからもわかる。ただ、それがどの時期なのかは、まだまだ資料不足のために言及できない。いずれにしても、それ以前の中球磨優位の図式は崩れ、中球磨と人吉とに二極分解していく過程が、古代の人吉盆地内で読み取れそうである。

第５図　夏女遺跡周辺遺跡分布図

第1表　周辺遺跡地名表

※旧－旧石器　縄－縄文　弥－弥生　古－古墳
奈－奈良　平－平安　中－中世　近－近世

番号	遺跡名	時代	備考
1	夏女遺跡	弥～古	弥生後期から古墳前期集落跡
2	天子山遺跡	弥	弥生後期土器　石包丁
3	木上益手遺跡	縄早	縄文早期土器　平成2年度県調査
4	大原天子遺跡	縄後・晩　弥　奈　平	縄文晩期土器　有肩打製石斧
5	平川遺跡	縄	縄文後・晩期土器
6	深田城	中	城跡
7	辰口古塔群		
8	竜口横穴群	古	
9	立野遺跡	弥	
10	高原入口遺跡	弥	
11	荒田横穴群	古	
12	荒田釈迦堂		平安仏　県指定
13	岩城遺跡		石斧
14	岩城	中	
15	岩城横穴群	古後	
16	蔵城跡	中	城跡
17	迫の庚申塔	近	石造物
18	十日市横穴群	古	
19	才園古墳群	古	金環　刀子　轡　管玉　切子玉　丸玉
20	才園遺跡	弥	弥生後期土器
21	永池城跡	中	城跡
22	五本松遺跡	縄早	縄文早期土器
23	四塚遺跡	弥	
24	四塚古墳群	古	
25	松木園遺跡	弥	弥生式土器　土師器
26	本目遺跡	弥	弥生後期土器
27	竹の内遺跡	縄後・晩	縄文後・晩期土器　磨製石斧　石錘
28	土木園遺跡		
29	原村遺跡	弥	有肩打製石斧
30	松尾遺跡	弥	
31	内村遺跡		土師器
32	坊主屋敷遺跡	縄早	
33	覚井遺跡		
34	一乗寺跡		寺院跡
35	一の宮跡		
36	一武城跡	中	城跡
37	東方遺跡		
38	大王原遺跡	縄早・中	
39	亀塚遺跡	弥後	弥生後期土器
40	福堂遺跡	縄　弥	縄文土器　石器　弥生土器
41	亀塚古墳群	古中～後	前方後円墳3基　1号墳は県指定史跡
42	下原遺跡		
43	忠ケ原遺跡		
44	魚地遺跡	縄　弥	縄文　石斧　弥生　石器
45	円鏡庵跡		
46	寺村遺跡		散布地
47	戸平山祭祀遺跡		
48	火口出遺跡		
49	桑原家住宅	近	国指定重要文化財
50	丸目蔵人墓	近	近世初頭の剣客の墓
51	今山船尾祭祀遺跡		

第Ⅲ章　調 査 の 成 果

第１節　　弥生時代以前の遺物

１　旧石器時代の遺物

（１）ナイフ形石器（第６図）

表土剥ぎが終了した後の調査清掃作業の際に、旧石器時代の遺物が出土した。第６図に図示したナイフ形石器(1)がそれである。比較的厚めの幅広剥片を使用素材として、その打面部を右側縁下部に置き、主要剥離面側からの加撃によるブランティングを加えて作っている。全体的な形状は、刃部が石器主軸に直行して基部が尖る、二等辺三角形を呈している。この特徴から、いわゆる「台形様石器」と呼ばれているものに相当するであろう。使用石材は、チャートである。なお、このチャートは、川辺川が造った扇状地(高原台地)に礫層として見られる石材である。

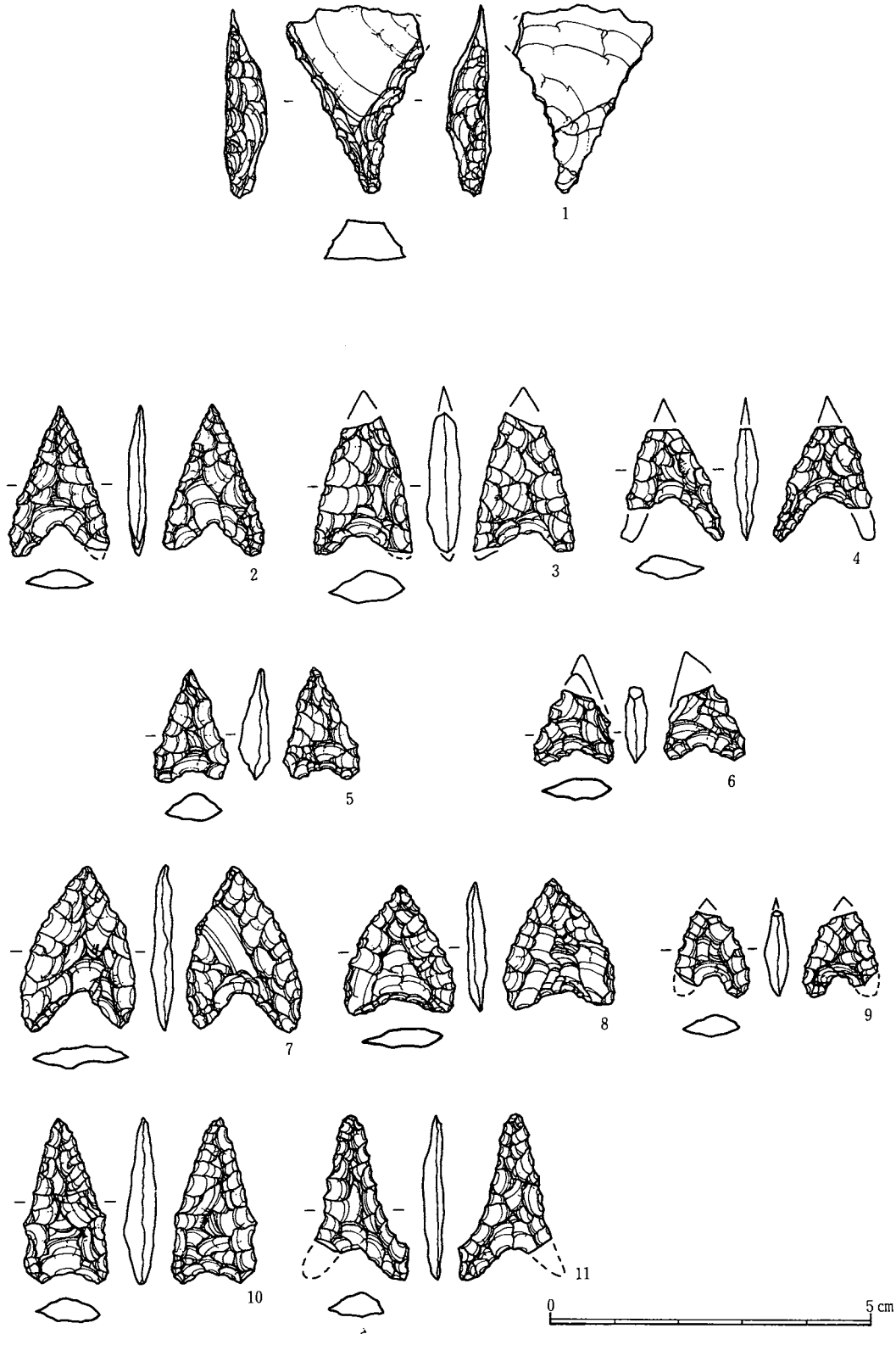
この資料の時期的な位置づけは、その他の共伴資料が不足しているために、はっきりとした所属時期を認定することはできない。ただし、その型式的特徴から判断して、九州ナイフ形石器文化第Ⅲ期（木﨑1988）にあたる可能性がもっとも高い。おそらく、山江村の狸谷遺跡（木﨑隈1987）や大丸・藤ノ迫遺跡（木﨑ほか1986）の資料に近い時期であろう。

２　縄文時代の遺物

（１）打製石鏃（第６図）

縄文時代の遺物として、打製石鏃が10点（２～11）出土している。その出土の状態は、表土剥ぎ後の清掃作業の際に出土したものや住居跡の覆土の中から出土したものがあり、原位置をとどめている資料は１点もなかった。しかし、その出土位置は、調査区の22区から30区までの間、すなわち遺跡の東側に集中して出土しているので、すべての資料はほぼ同一時期のものという評価ができようか。その石材ごとの内訳は、チャート７点（２・３・５・６・９～11)、黒曜石２点（７・８)、安山岩１点（４）である。

出土した石鏃は、すべて凹基形態の基部をもっているが、その平面形状の特徴から、大きく３つに分類される。一つ目は二等辺三角形を呈するもの（２～７・９・10)、二つ目は正三角形を呈するもの（８)、そして三つ目は五角形を呈するもの（10）である。また、二等辺三角形の石鏃は、基部の形状からさらに細分が可能である。弱い抉りが入るもの（３・５・６)、Ｖ字状の抉りのもの（２・７・11)、そして深く抉られているもの（４）である。なお、正三



第６図　ナイフ形石器及び打製石鏃実測図

角形石鏃も五角形石鏃は、弱い抉りの基部形態を呈している。

これらの石鏃の時期は、共伴土器が出土していないので断定はできないが、五角形石鏃の存在から後期ないし晩期にかけての時期という幅で押さえられるだろう。

（2）打製石斧（第7～9図12～36）

打製石斧は、住居跡内、調査区一括を含めて、計25点が出土した。その内、住居跡内からの出土は9点で、おそらく流れ込みであろう。縄文時代の土器の出土及び遺構は皆無であり、遺跡の性格上この遺跡での生産はなされておらず、使用後、および破損による廃棄がほとんどであると考えざるをえない。ここではその形態によって、短冊形で長方形を呈するもの（a類）刃部に比べ基部が尖るもの（b類）、器部に比べ刃部が尖るもの（c類）、器部も刃部も尖るもの（d類）、器部に比べ刃部が広がるもの（e類）、欠損により不明のもの（f類）の6種類に分類した。以下分類ごとに説明を加える。

a類（12～23）

12は1号土器溜から一括で取り上げた砂岩製の打製石斧で、ほぼ完形で、最大長は13.4cmを測る。刃部はかなり使い込まれており、一部に刃こぼれがうかがえる。側面には一部自然面が残り、潰れは認められない。色調は暗灰色を呈する。13は21区で一括で取り上げた安山岩製の打製石斧で、完形で全長14.1cmを測る。おおかたの整形の後、側辺および刃部を作り出している。刃部は使用による潰れがうかがえる。側面には片方に装着痕と思われる潰れも認められ色調は黒色を呈する。14は2区で一括で取り上げた粘板岩製の打製石斧で、刃部および側辺を欠損している。裏面には自然面を残し、明灰色を呈する。15は57号住居跡から出土した砂岩製の打製石斧で、刃部の先端を欠損する。両側は側面には装着痕の痕跡と思われる潰れが認められる。色調は黒褐色を呈する。16は調査区の西側で、周溝の有無を確認する際に出土した砂岩製の打製石斧で、刃部を欠損する。裏面には自然面を残し、両側の側面には装着痕の潰れが認められる。色調は暗灰色を呈する。17は調査区一括の採集資料で、基部を欠損している。刃部はかなり使用されており、潰れが著しい。色調は暗灰色を呈する。18は17号住居跡から出土した粘板岩製の打製石斧で、刃部のみを残して殆ど欠損している。裏面には自然面を残している。刃部はかなり使用されており、潰れが著しい。色調は明灰色を呈する。19は調査区より一括で取り上げた砂岩製の打製石斧で、刃部を欠損している。両側の側面には装着痕の痕跡と思われる潰れが認められる。色調は明灰色を呈する。20は21区で一括で取り上げた砂岩製の打製石斧で、ほぼ完形で、最大長は13.6cmを測る。裏面には自然面を一部に残し、刃部はわずかに使用痕が認められ、両側の側面には装着痕が認められる。色調は黒灰色を呈する。21は調査区で一括で取り上げた砂岩製の打製石斧の完形品で、全長は12.0cmを測る。裏面には一部に自然面を残す。刃部は使用によりかなり潰れており、両側の側面には装着痕の潰れが認められる。色調

は暗灰色を呈する。22は調査区で一括で取り上げた花崗岩製の打製石斧の完形品で、全長は13.5cmを測る。裏面には一部に自然面を残し、刃部はやや潰れがうかがえ、両側の側面には装着痕の潰れが認められる。色調は白灰色を呈する。23は57号住居跡から出土した砂岩製の打製石斧の完形品で、全長12.4cmを測る。両側の側面には装着痕の潰れが顕著に認められる。刃部はわずかに使用の痕跡を残す。色調は暗灰色を呈する。

b類（24～27）

24は土器溜から出土した粘板岩製の打製石斧で、刃部を欠損する。両側の側面には装着痕が認められる。色調は明灰色を呈する。25は21区で一括で取り上げられた砂岩製の打製石斧の完形品で、全長は14.3cmを測る。裏面はほとんど自然面を残す。刃部は潰れが認められ、両側の側面には装着痕が認められる。色調は暗灰色を呈する。26は調査区で一括で取り上げた砂岩製の小型の打製石斧の完形品で、全長9.7cmを測る。刃部は使用による刃こぼれが認められ、両側の側面のほとんどに装着痕が認められる。色調は暗灰色を呈する。27は西側の周溝確認のトレンチから出土した砂岩製の打製石斧の完形品で、全長は10.9cmを測る。裏面はほとんどが自然面である。刃部にはわずかに使用痕が認められ、両側面には装着痕は認められない。色調は暗灰色を呈する。

c類（28）

28は57号住居跡から出土した片岩製の打製石斧の完形品で、全長は11.3cmを測る。刃部は尖る。裏面のほとんどが自然面で、刃部および側辺に加工痕を残す。両側面には装着痕がうかがえる。色調は明灰色を呈する。

d類（29・30）

29は西側拡張部分から出土した砂岩製の打製石斧で、刃部をやや欠損するものの、ほぼ完形品に近く、全長は復元値で14.6cmを測る。刃部および基部は尖っており、一部に自然面を残す。側面には装着痕がうかがえる。30は56号住居跡から出土した片岩製の打製石斧で、刃部を欠損している。刃部および基部は尖っている。裏面には自然面を残しており、側面には一部に装着痕がうかがえる。刃部の欠損は使用時のものであろう。

e類（31）

31は24区から一括で取り上げた砂岩製の打製石斧で、基部を欠損している。裏面には自然面を残し、基部より刃部にかけて広くなり、刃部は尖る。使用による潰れが目立つ。

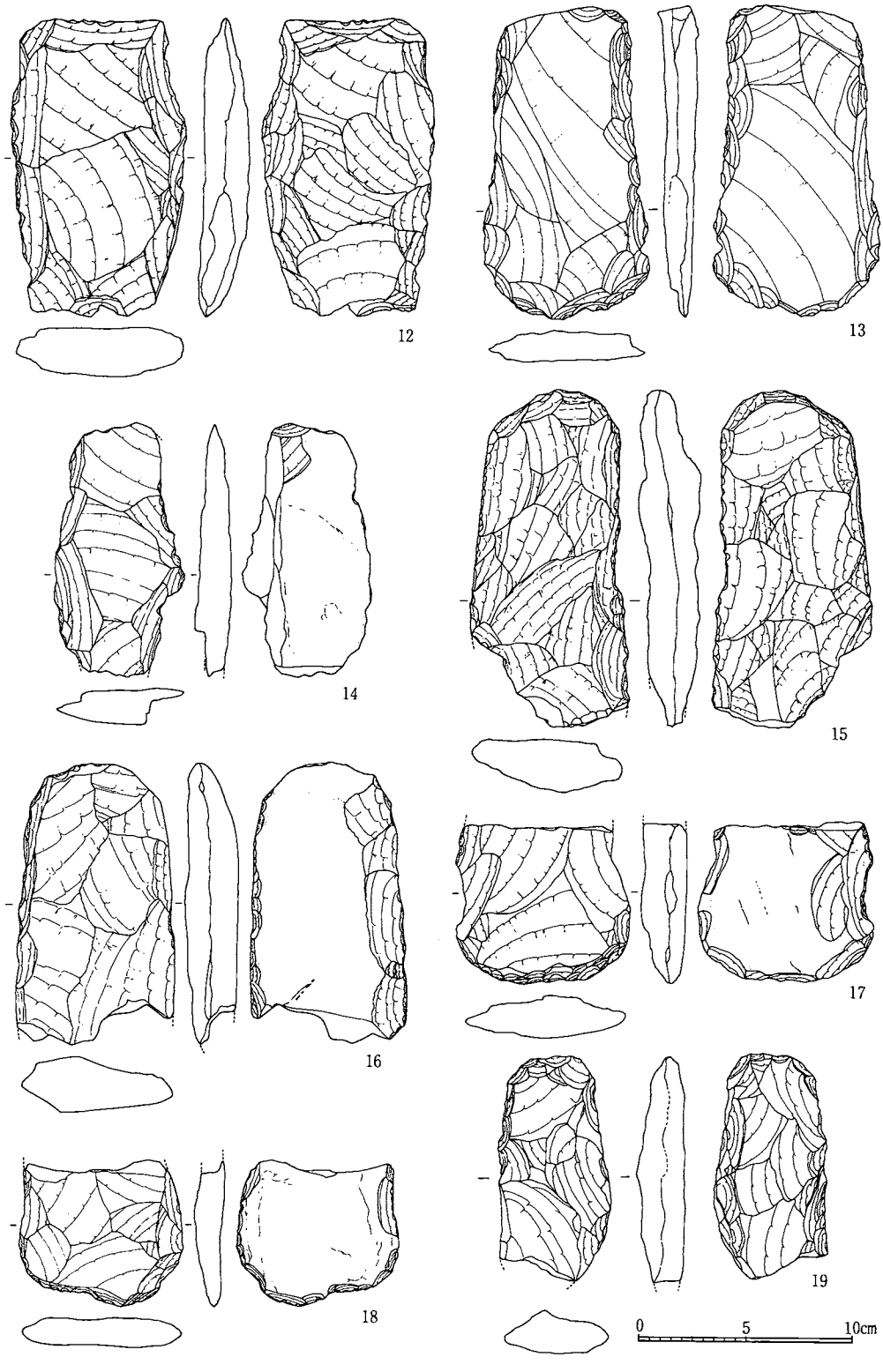
f類（32～36）

32は西側拡張部分から出土した粘板岩製の打製石斧で、基部を欠損している。刃部は丸みをおびており、やや潰れが認められる。色調は明灰色を呈する。33は33号住居跡から出土した砂岩製の打製石斧で、刃部を欠損している。裏面には自然面を残す。側面は加工しており装着痕は認められない。色調は黄灰色を呈する。34は68号住居跡から出土した砂岩製の打製石斧で、

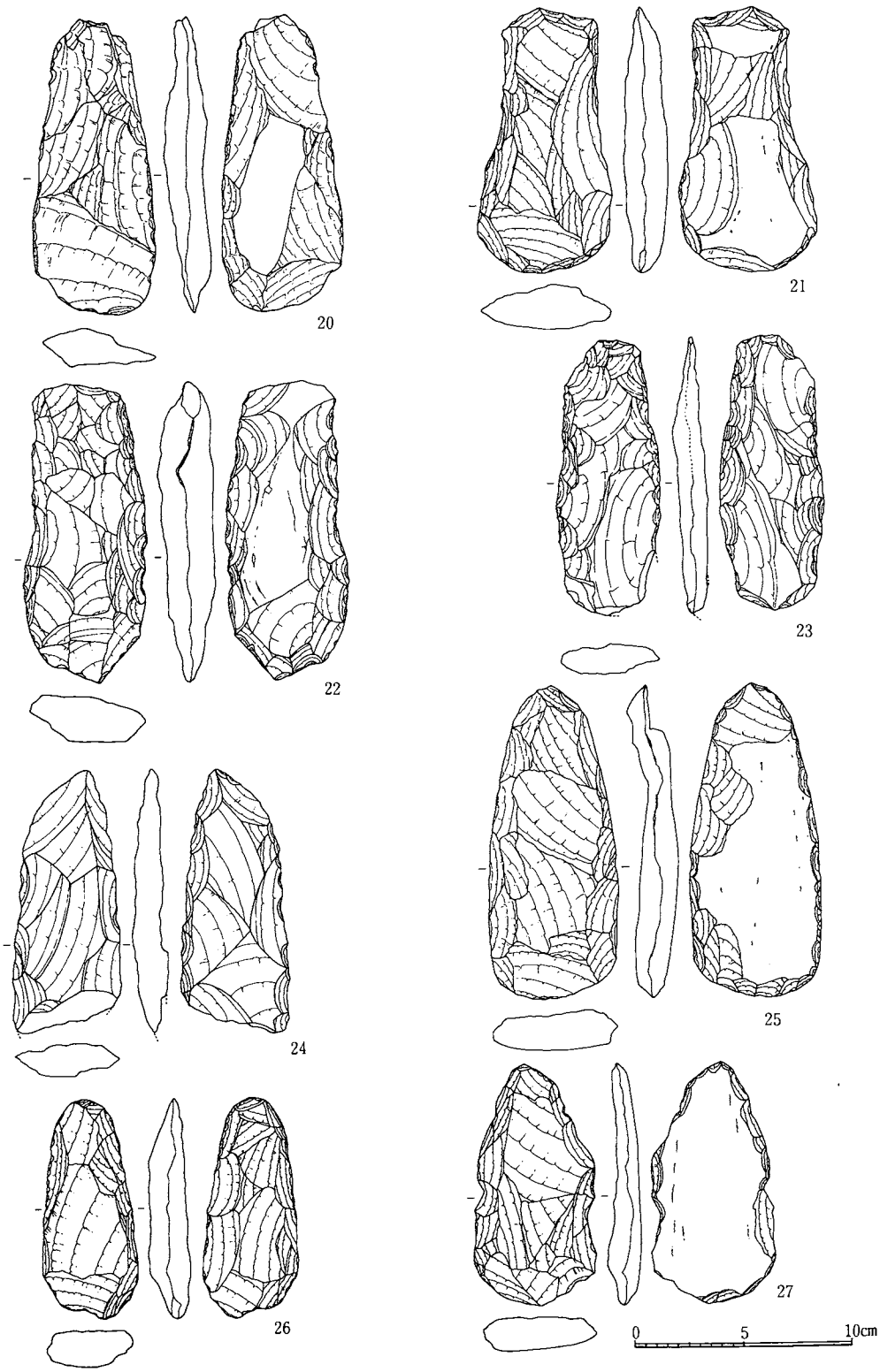
刃部のほとんどを欠損している。側面には装着痕は認められない。暗灰色を呈する。35は30区から一括で取り上げた粘板岩製の小型の打製石斧で、刃部を欠損している。側面には装着痕がわずかに認められる。色調は明灰色を呈する。36は21号住居跡から出土した砂岩製の小型の打製石斧で、刃部を欠損している。裏面には自然面を残しており、側面には装着痕がうかがえる。色調は茶灰色を呈する。

第2表　ナイフ形石器及び打製石鏃計測表

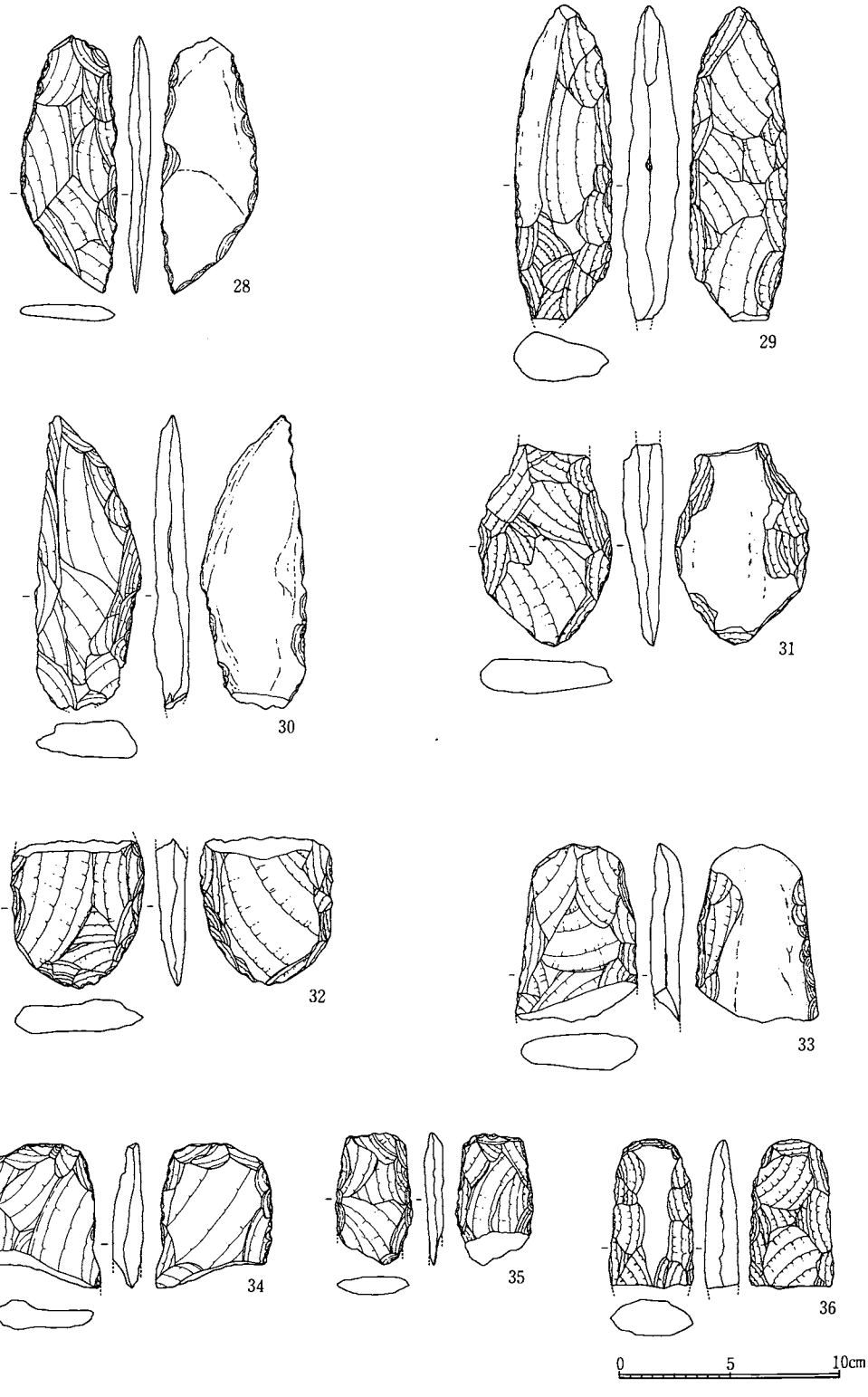
No.	出土地点	器種	石材	全長	幅	厚さ	重さ	先端部角度	備考
1	一　括	ナイフ形石器	チャート	29.0 mm	21.0 mm	6.0 mm	3 g	—	完　形　品
2	30区一括	石鏃	チャート	(23.0) mm	16.0 mm	3.4 mm	0.9 g	41°	右脚部欠損
3	28区一括	石鏃	チャート	—	15.5 mm	4.5 mm	1.8 g	—	先端部欠損 右脚部欠損
4	一　括	石鏃	安山岩	—	(18.0) mm	4.0 mm	0.6 g	—	先端部欠損 左脚部欠損
5	28区一括	石鏃	チャート	17.0 mm	11.5 mm	4.5 mm	0.7 g	56°	完　形　品
6	28区表採	石鏃	チャート	—	12.0 mm	3.5 mm	0.5 g	—	先端部欠損
7	22区一括	〃	黒曜石	25.5 mm	18.0 mm	3.0 mm	1.0 g	74°	完　形　品
8	一　括	石鏃	黒曜石	20.0 mm	18.0 mm	3.5 mm	1.0 g	69°	完　形　品
9	30区一括	石鏃	チャート	—	(12.0) mm	4.0 mm	0.4 g	—	先端部欠損 左脚部欠損
10	22区一括	石鏃	チャート	—	26.0 mm	13.0 mm	1.3 g	34°	完　形　品
11	53号住一括	石鏃	チャート	25.8 mm	(18.0) mm	4.0 mm	0.7 g	28°	左脚部欠損



第７図　打製石斧実測図（１）



第8図　打製石斧実測図（2）



第9図　打製石斧実測図（3）

第3表　打製石斧計測表

No.	実測	遺　構　名	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備　　考
12	800	1号土器溜一括	打製石斧	砂岩	13.4	8.0	2.2	323.3	完形品
13	817	21区一括	打製石斧	安山岩	14.1	7.7	1.5	258.2	完形品
14	812	2区一括	打製石斧	粘板岩	――	――	1.6	108.2	
15	792	57号住No.1110	打製石斧	砂岩	――	7.2	2.7	305.3	
16	793	西側拡張一括	打製石斧	砂岩	――	7.2	2.5	281.0	
17	799	一括	打製石斧	砂岩	――	8.1	2.1	166.0	
18	807	17号住一括	打製石斧	粘板岩	――	7.5	1.3	94.1	
19	796	一括	打製石斧		――	5.1	2.2	135.4	
20	794	21区一括	打製石斧	砂岩	(13.6)	5.6	2.0	149.1	
21	797	一括	打製石斧	砂岩	12.0	6.2	2.1	170.2	完形品
22	816	一括	打製石斧	花崗岩	13.5	5.5	2.1	232.5	完形品
23	791	57号住No.1268	打製石斧	砂岩	12.4	4.8	1.3	95.0	
24	818	1号土器溜No.356	打製石斧	粘板岩	――	5.0	1.6	109.9	
25	795	21区一括	打製石斧	砂岩	(14.3)	6.0	1.8	200.6	
26	803	一括	打製石斧	砂岩	9.7	4.4	1.9	95.3	完形品
27	804	西側拡張一括	打製石斧	砂岩	10.9	5.7	1.5	106.9	完形品
28	813	57号住No.1721	打製石斧	片岩	11.3	4.2	1.0	51.1	完形品
29	805	西側拡張一括	打製石斧	砂岩	(14.6)	4.4	2.3	153.8	
30	814	56号住一括	打製石斧	片岩	――	4.6	1.6	117.6	
31	802	24区一括	打製石斧	砂岩	――	6.0	1.8	95.7	
32	806	西側拡張一括	打製石斧	粘板岩	――	5.9	1.4	71.1	
33	808	33号住No.13	打製石斧	砂岩	――	――	1.9	76.1	
34	809	68号住No.110	打製石斧	砂岩	――	――	――	43.4	
35	815	30区一括	打製石斧（小型）		――	――	――	21.7	
36	801	21号住一括	打製石斧	砂岩	――	3.8	1.5	54.7	

第2節　弥生時代後期から古墳時代にかけての遺構と遺物

1　竪穴式住居跡と出土土器

弥生時代後期から古墳時代にかけての住居跡は全部で68基確認した。道路幅の調査ということで、遺跡の一部分を対象としただけであり、遺構は調査区外にも広がっている。実際に、住居跡の大半がその全容を明らかにできなかった。調査面積と遺構数から推定すると、さらに多くの住居跡の存在が予想できる。

以下、1号から順にみていくことにする。

1号住居跡（第10図）

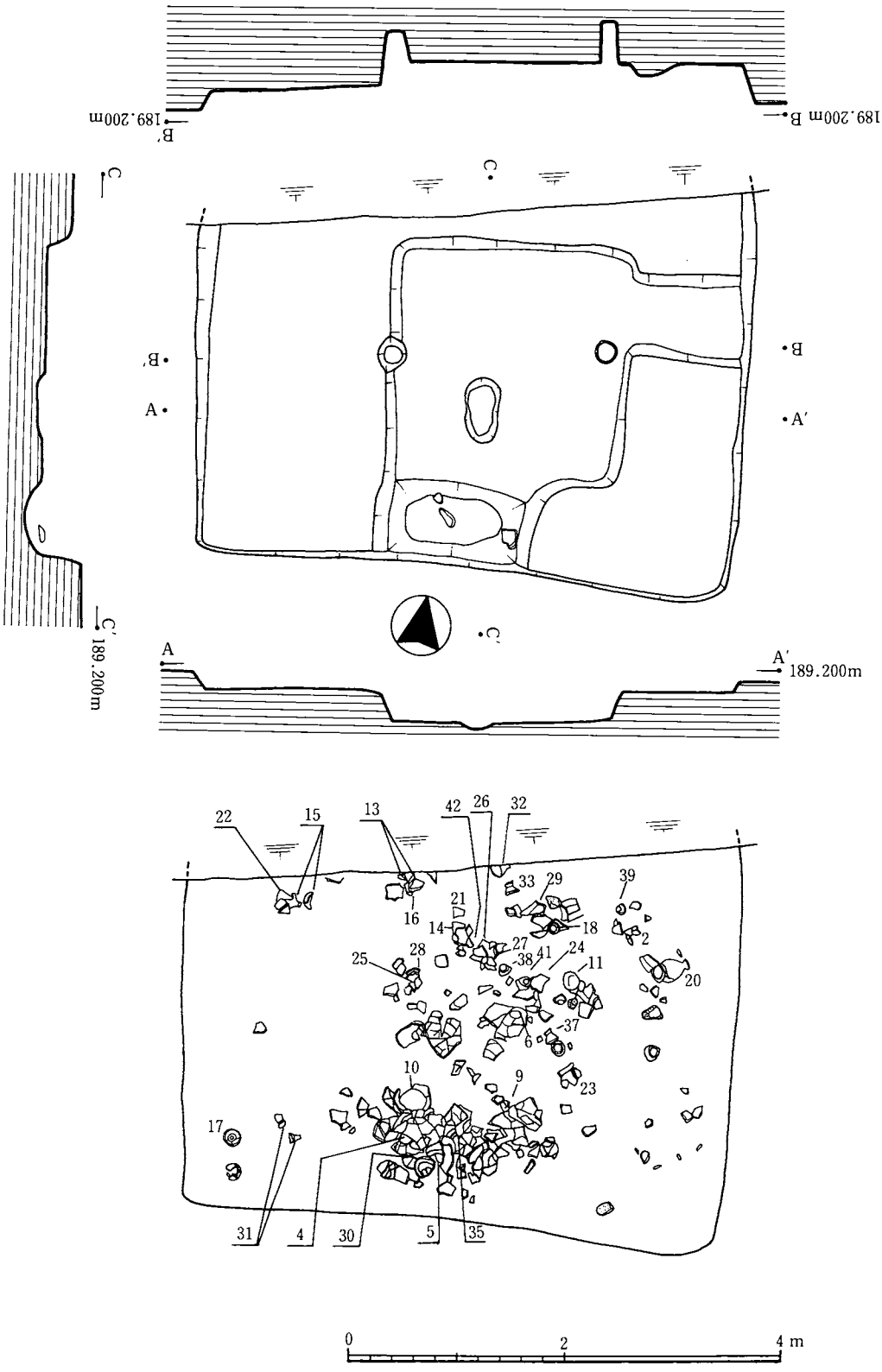
調査区の最西端にある住居跡で、北側部分が調査区外にのびている。平面形態は正方形で東西軸5ｍ10㎝、南北軸4ｍ78㎝（推定値）を測る。南東部分と北東部分から南西部分にかけてＬ字のベッド状遺構を有する。床面とベッド状遺構との比高差は26㎝、ベッド状遺構からの壁高は15㎝である。炉は中央よりやや南側に設けられ、炉内は焼土でみたされていた。その平面形態は60㎝×30㎝の楕円形を呈する。柱穴は、ベッド状遺構の立ち上がる部分に2個穿たれていた。いずれも柱痕跡は確認できなかった。炉と南壁との間、ベッド状遺構が途切れた部分にほぼ長方形を呈する貯蔵穴があり、深さは14㎝を測る。この住居跡からかなりの遺物が出土した。石器では石包丁が1点（47）、敲石が1点（112）、砥石が1点（94）出土した。

〔**土器**〕（第11～16図1～42）

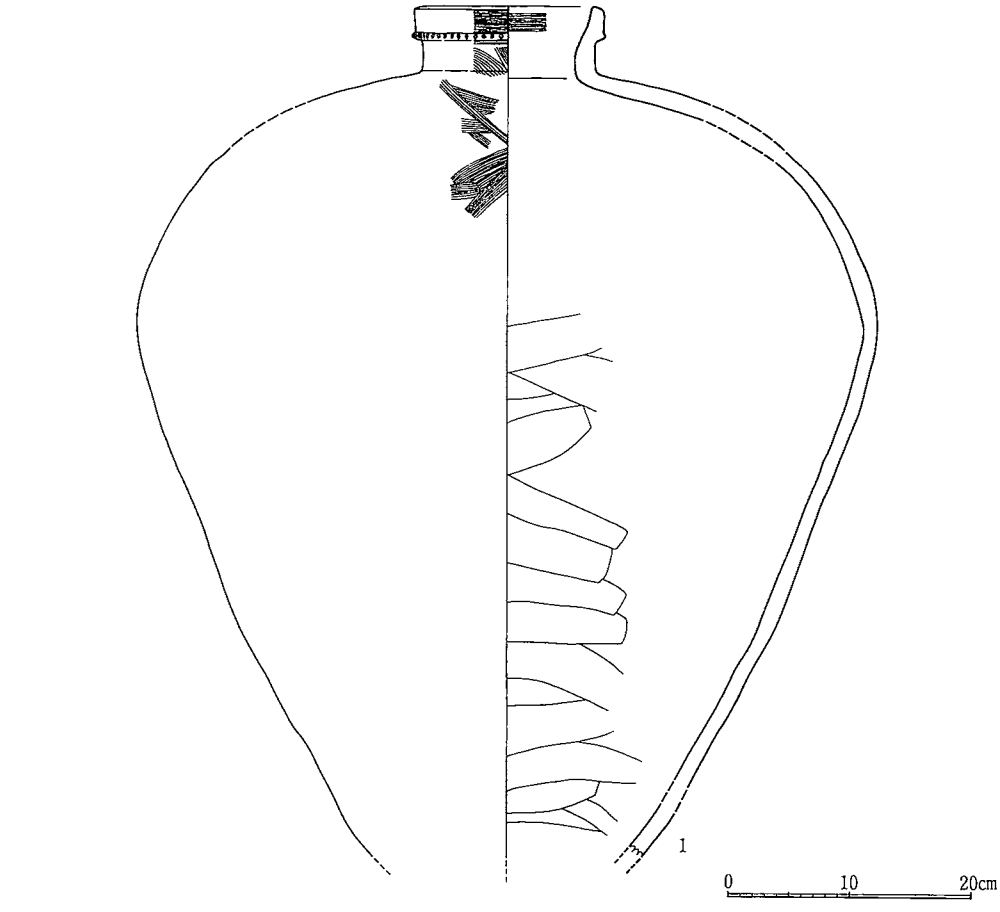
壺形土器（1～8・10）、鉢形土器（9・11～14）、高坏形土器（15～18）、甕形土器（19～42）が出土した。

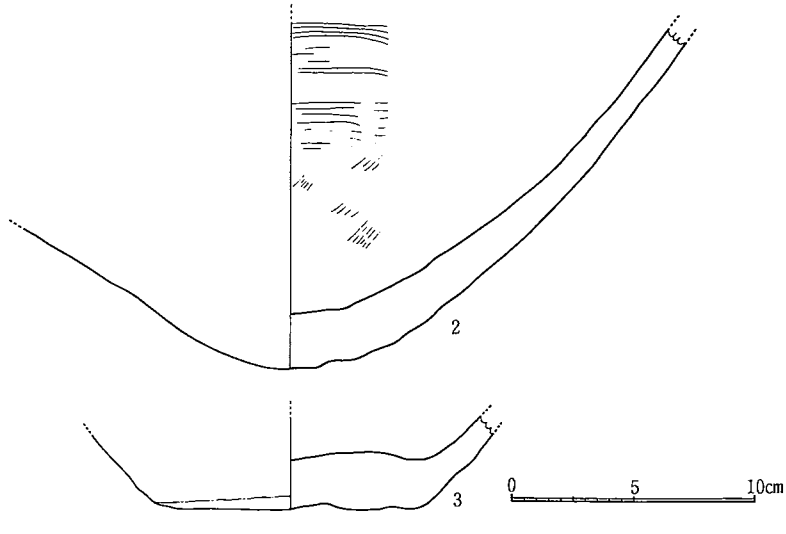
1は大型の壺形土器である。口縁形態は複合口縁で、口縁部に刻目突帯がめぐる。胴部の最大径は上位にあり、頸部から口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。底部は丸底か平底かは不明である。器面調整は外面は細かいハケ目調整、内面はヘラ削りである。2は大型の壺形土器の底部である。丸底で内外面ともナデ調整で内面に一部ハケ目が残る。3は大型の壺形土器の底部で、内外面ともナデ調整を施す。

4は丸底の壺形土器で、胴部のほぼ中央部に最大径がくる。口縁部は頸部よりやや開きながら立ち上がる。器面調整は内外面ともハケ目調整である。5は大型の壺形土器の口縁部である。複合口縁で刻目がめぐり、内外面とも丁寧なハケ目調整が施されている。6は壺形土器である。底部は平底で胴部の中央部に最大径をもつ。器面調整は内外面ともナデ調整で、内面の一部に指頭圧根が残る。

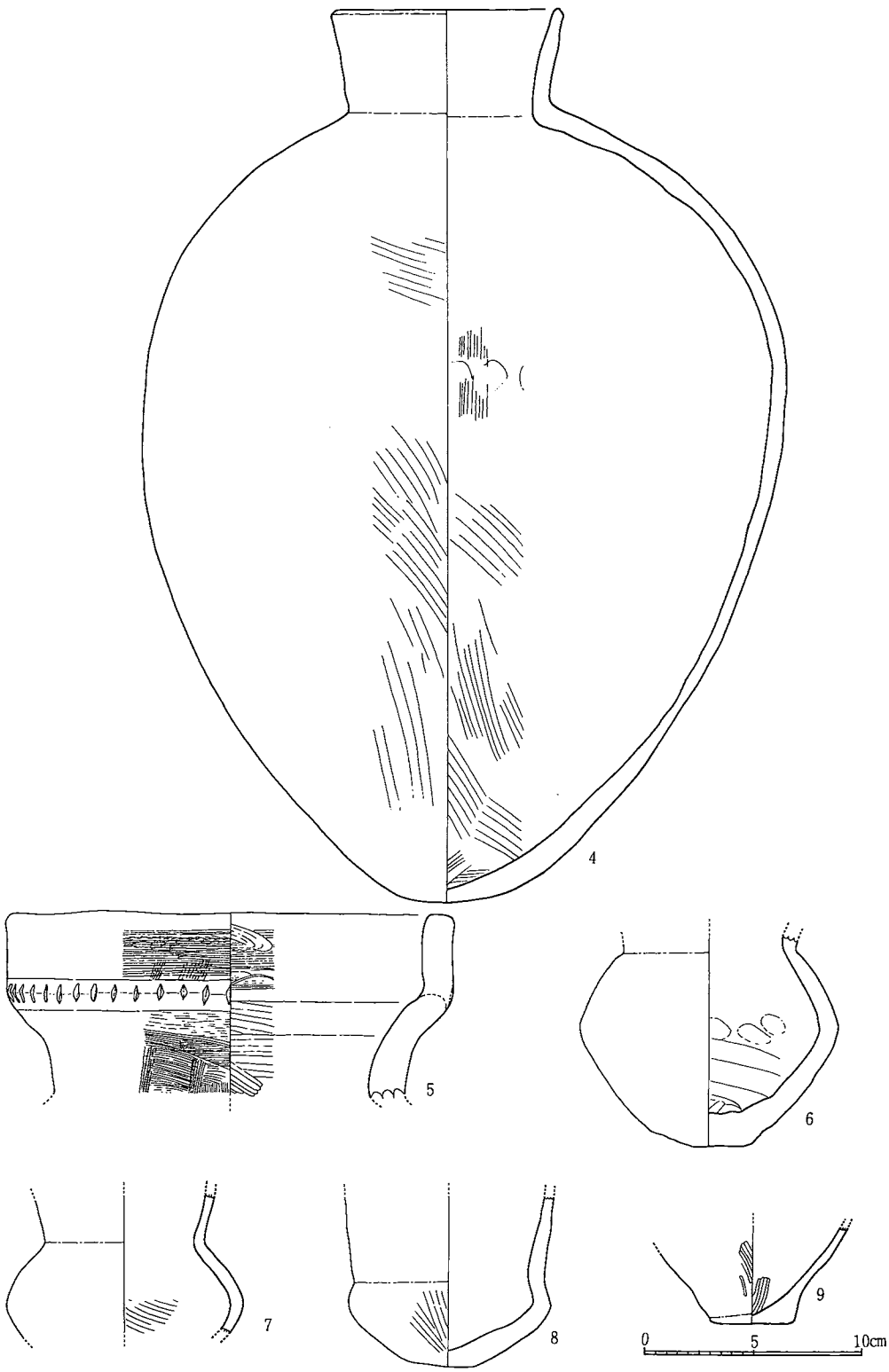


第10図　１号住居跡実測図

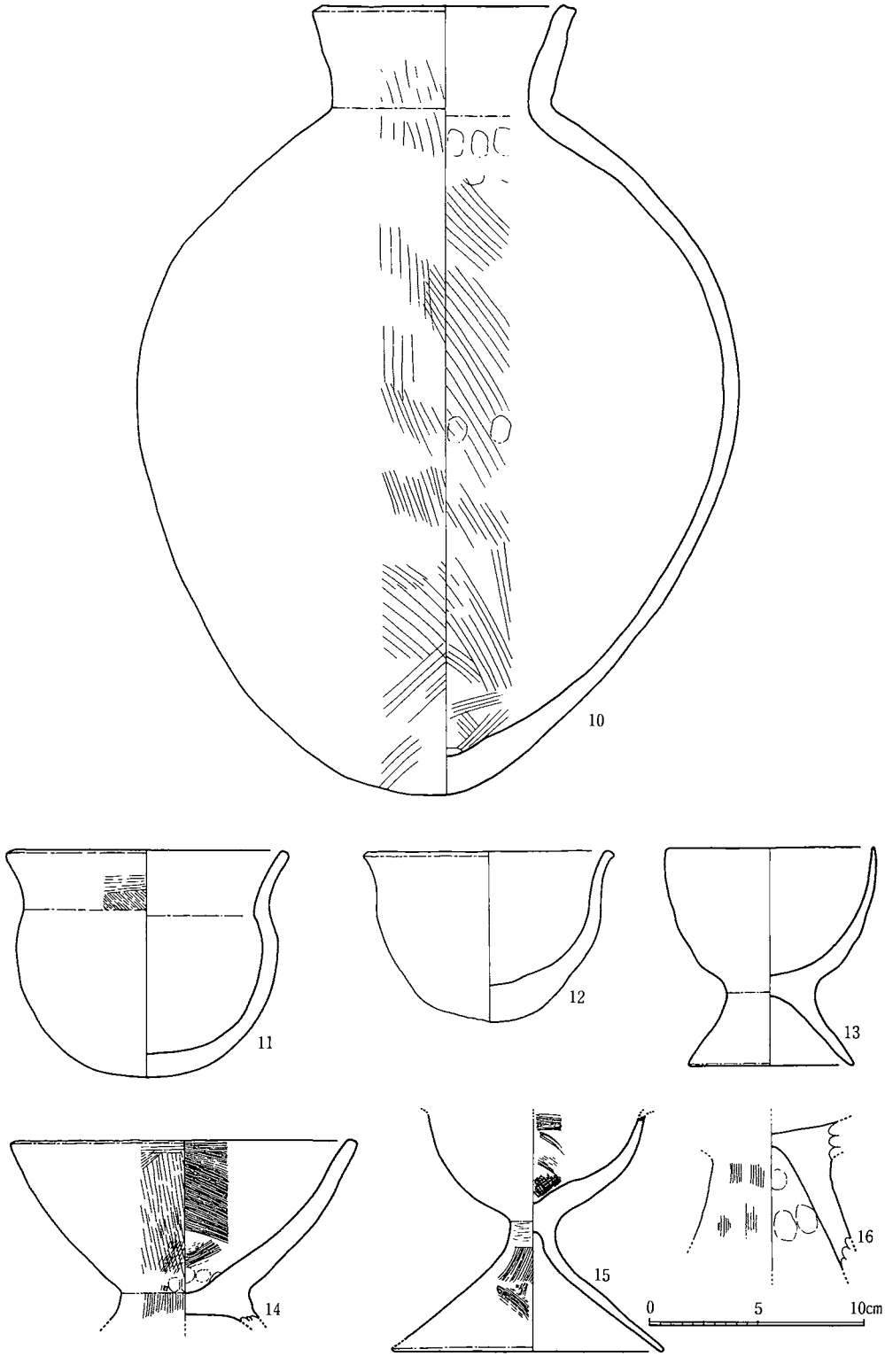




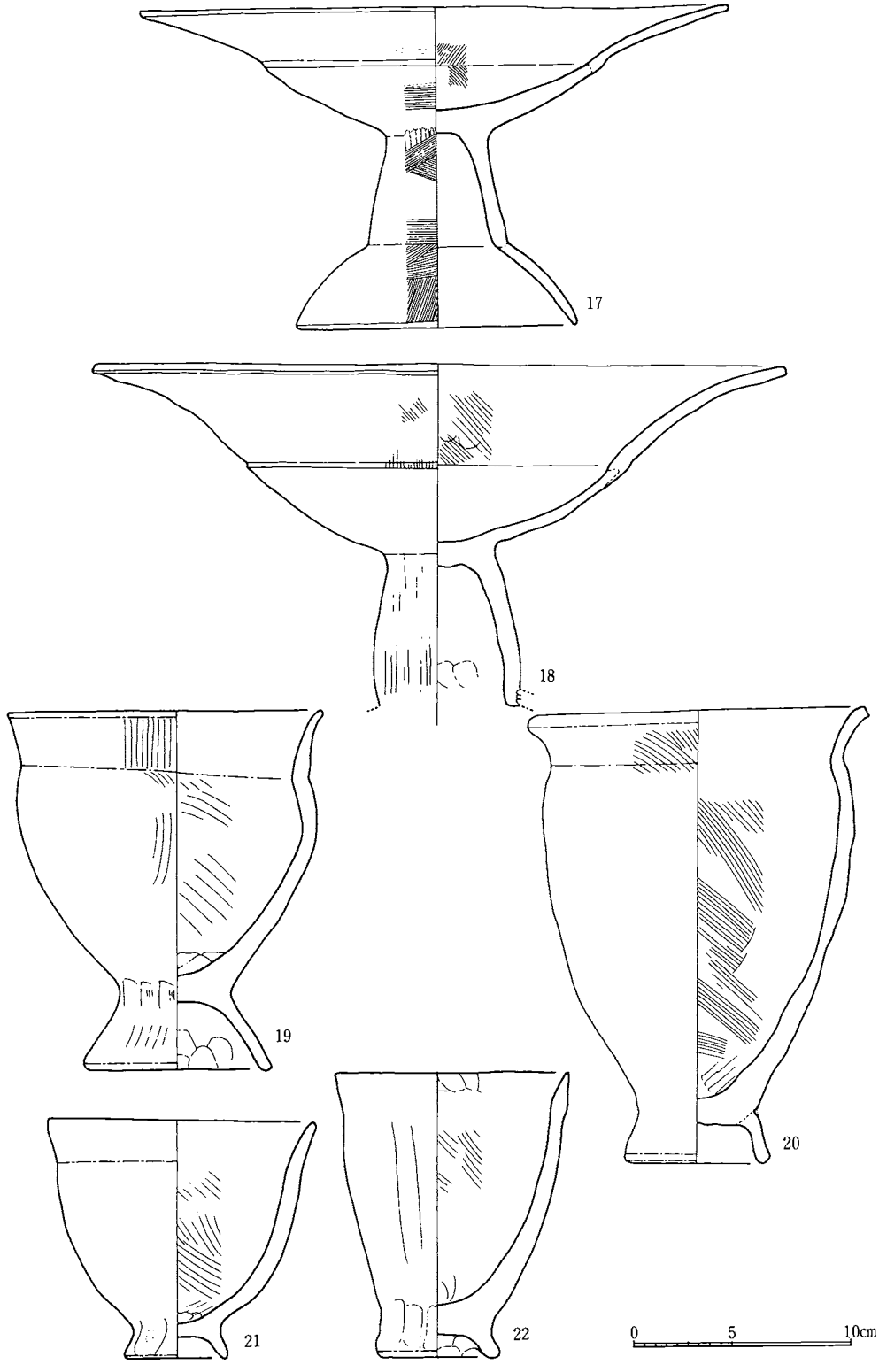
第11図　1号住居跡出土土器実測図（1）



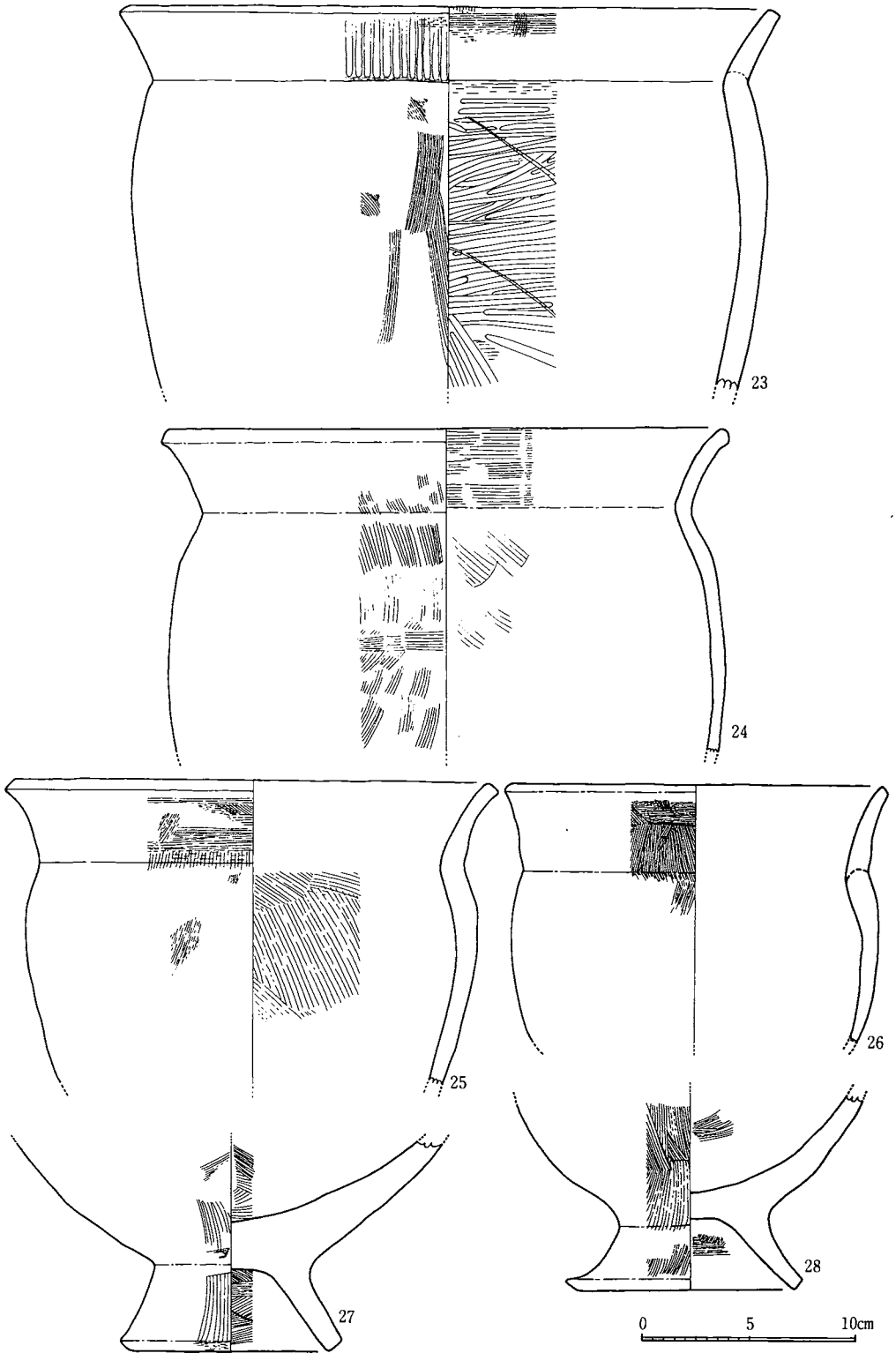
第12図　１号住居跡出土土器実測図（２）



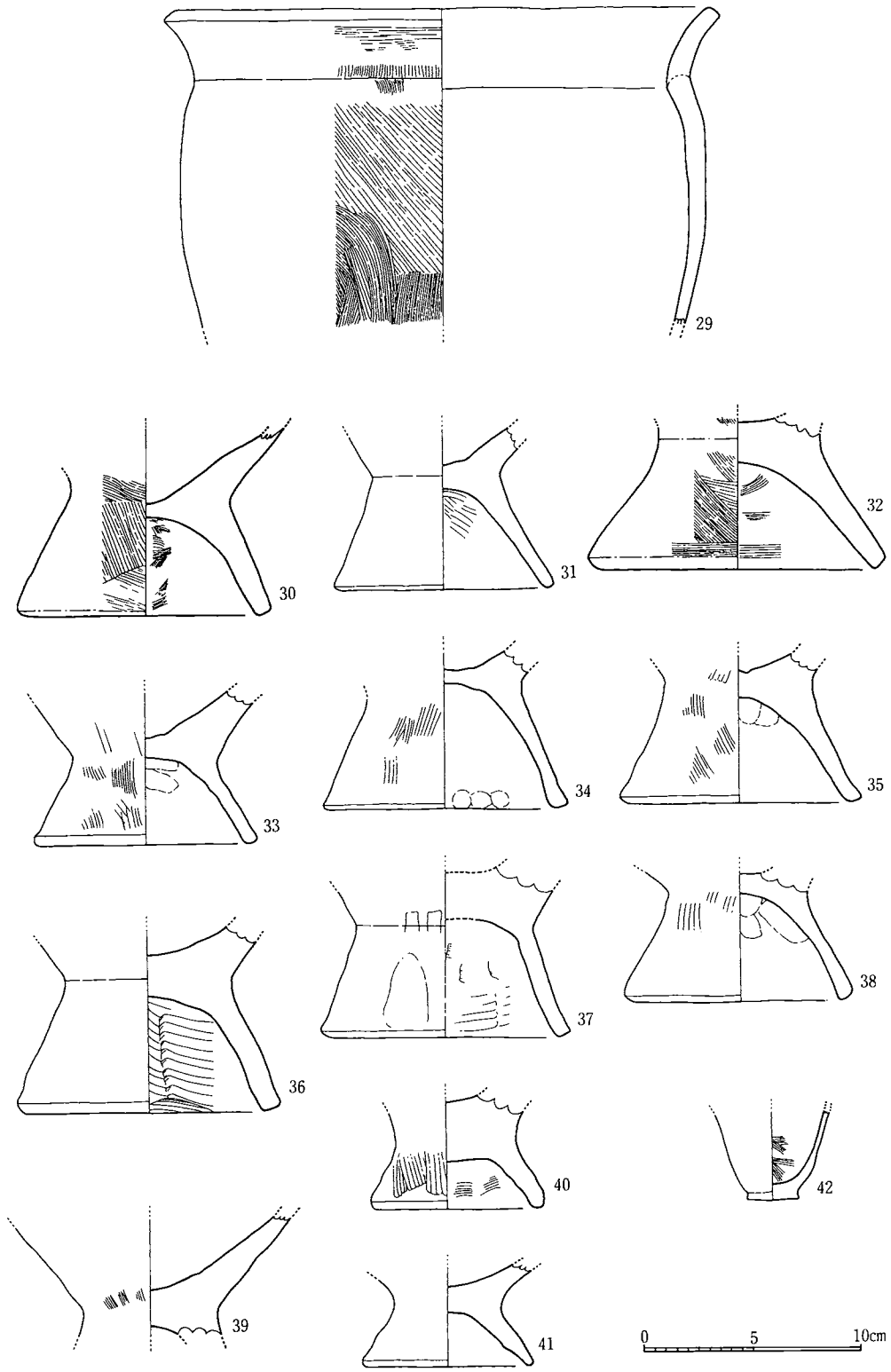
第13図　1号住居跡出土土器実測図（3）



第14図　1号住居跡出土土器実測図（4）



第15図　1号住居跡出土土器実測図（5）



第16図　１号住居跡出土土器実測図（６）

7は小型の壺形土器である。底部は欠損し、頸部はやや内湾ぎみに立ち上がる。器面調整は内外面ともナデ調整で、内面の一部にハケ目が残る。8は小型の壺形土器で、底部はやや尖りぎみで頸部はやや外湾ぎみに立ち上がる。器面調整は内外面とも丁寧なナデ調整を施し、外面の一部にハケ目が残る。10は丸底の壺形土器である。胴部のほぼ中央部に最大径をもち、頸部はやや開きぎみに立ち上がる。口縁端部にはつまみによる調整が観察できる。内外面ともナデ調整でうすくハケ目が残る。

9は鉢形土器である。平底でやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部のみが欠損している。器面調整は、内外面ともハケ目を施した後ナデで仕上げている。11・12は屈曲口縁の鉢形土器である。器面調整はナデ調整を施す。13・14は脚台付の鉢型土器である。13は素口縁で徐々にうすくなりながら立ち上がり、口縁端部はとがっている。器面調整は内外面ともナデ調整である

14は内外面とも、細かなハケ目調整を施す。

15～18は高坏形土器である。15は坏部は深く内湾ぎみに立ち上がる。器面調整は内外面とも細かいハケ目調整である。16は脚部のみの資料で、坏部は欠損している。17・18は広口の浅い坏部を有し、なめらかに内湾し口辺部で外反し口唇部に至る。脚は筒部・裾部とも膨らみをもつ。器面調整は、内外面とも基本的にはハケ目調整であるが、18の内面の一部に指頭圧痕が残る。

19～41は甕形土器である。19は口径と器高がほぼ同じで、脚は内湾ぎみにのび、胴部の最大径は中央より上部に位置する。口縁部はゆるやかに外反しながらのびる。器面調整は内外面ともハケ目調整で口縁部の外面は、太めの刷毛で下から上へかき上げている。20は短い脚をもち上位に最大径をもち、口縁部は外反する。作りは荒く、内外面ともハケ目が残る。21は器高より口径が長く、短い脚をもつ。胴部と口縁部の境が観察出来ないくらいゆるやかに外反する。22も短い脚をもち、胴部はするどく立ち上がり胴部と口縁部との境は不明瞭である。23・24・25・26・29は胴部最大径を上位にもち、口縁部は頸部より直線的に開くが、内面の稜線は不明瞭である。器面調整は外面は細かいハケ目、内面は太いハケ目である。口縁部の外面には刷毛でかきあげた痕跡が残る。

27・28はやや外反ぎみにのびる脚を持つ。器面調整は内外面ともハケ目調整である。

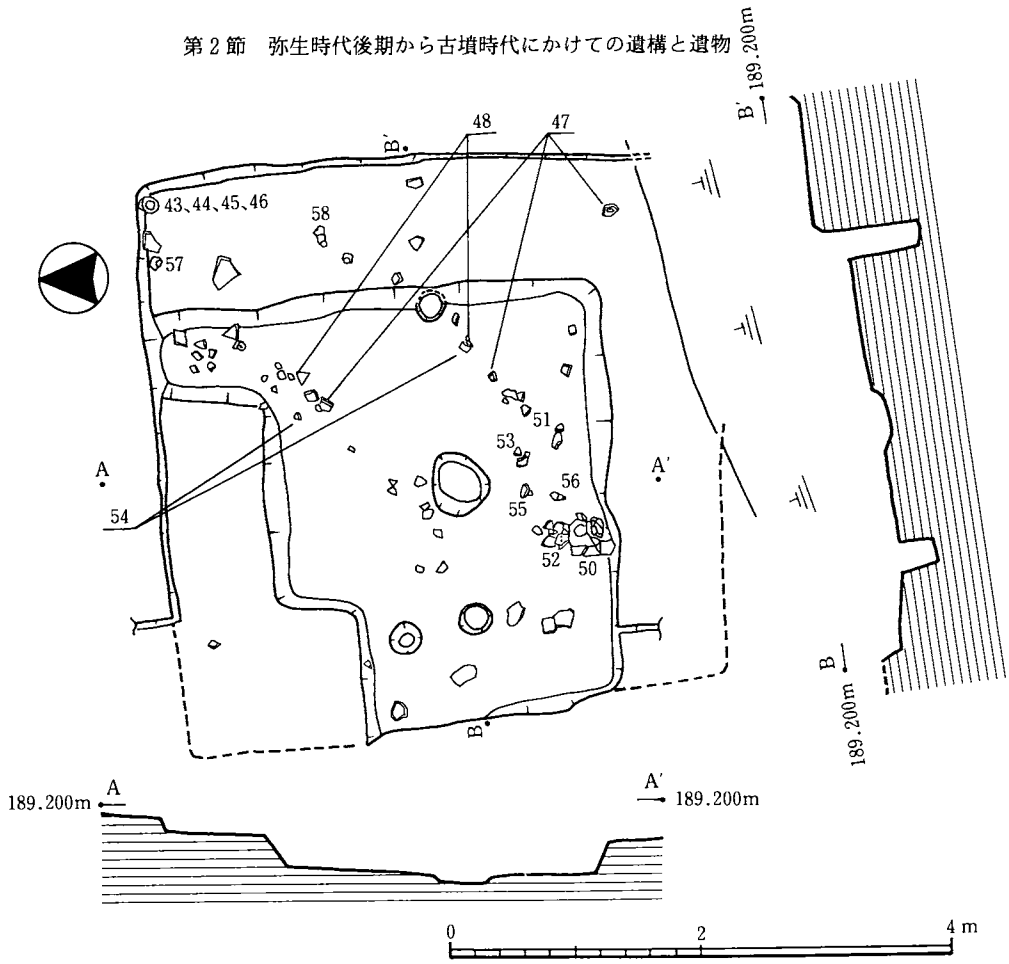
30～39は脚台がやや内湾ぎみにのびる大型の甕形土器の脚部である。基本的に外面はハケ目調整、内面は一部指頭圧痕がみえる。

40・41は小型の甕形土器の脚部である。

42は鉢形のミニチュア土器であろう。

2号住居跡（第17図）

2号住居跡は、遺跡の西側5区に位置し、3号住居跡と切り合っている。南側の上部を削平されているが、平面形態は正方形で、東西軸4ｍ46㎝、南北軸4ｍ46㎝（推定値）を測る。北西部分と南東部分の2ヵ所にＬ字状のベッド状遺構を有する。床面と北西部分との比高差は22



第17図　２号住居跡実測図

cm、南東部分で21cmである。ベッド状遺構からの壁高は８cmである。

炉はほぼ中央に設けられており、炉底には焼土が残る。その平面形態は直径約50cmの円形を呈する。柱穴は炉を中心に東西に２m50cmの間隔で２個穿たれていた。

この住居跡からの出土遺物で特に目についたものに、４個体の小型の土器が組み合わされて住居跡の北東のコーナー部分に、南に約45°傾いた状態で置かれていたことである。

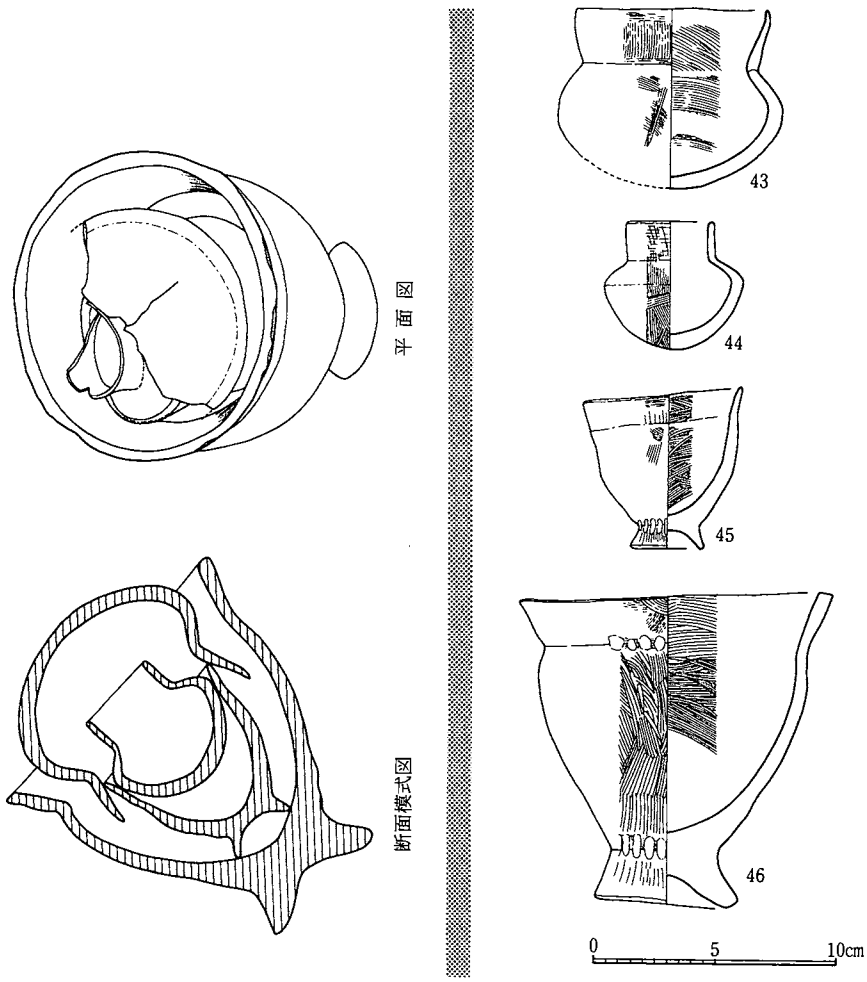
ほかに、石器では一括資料ではあるが、敲石が１点（117）出土した。

〔組み合わされた土器〕（第18図43・44・45・46）

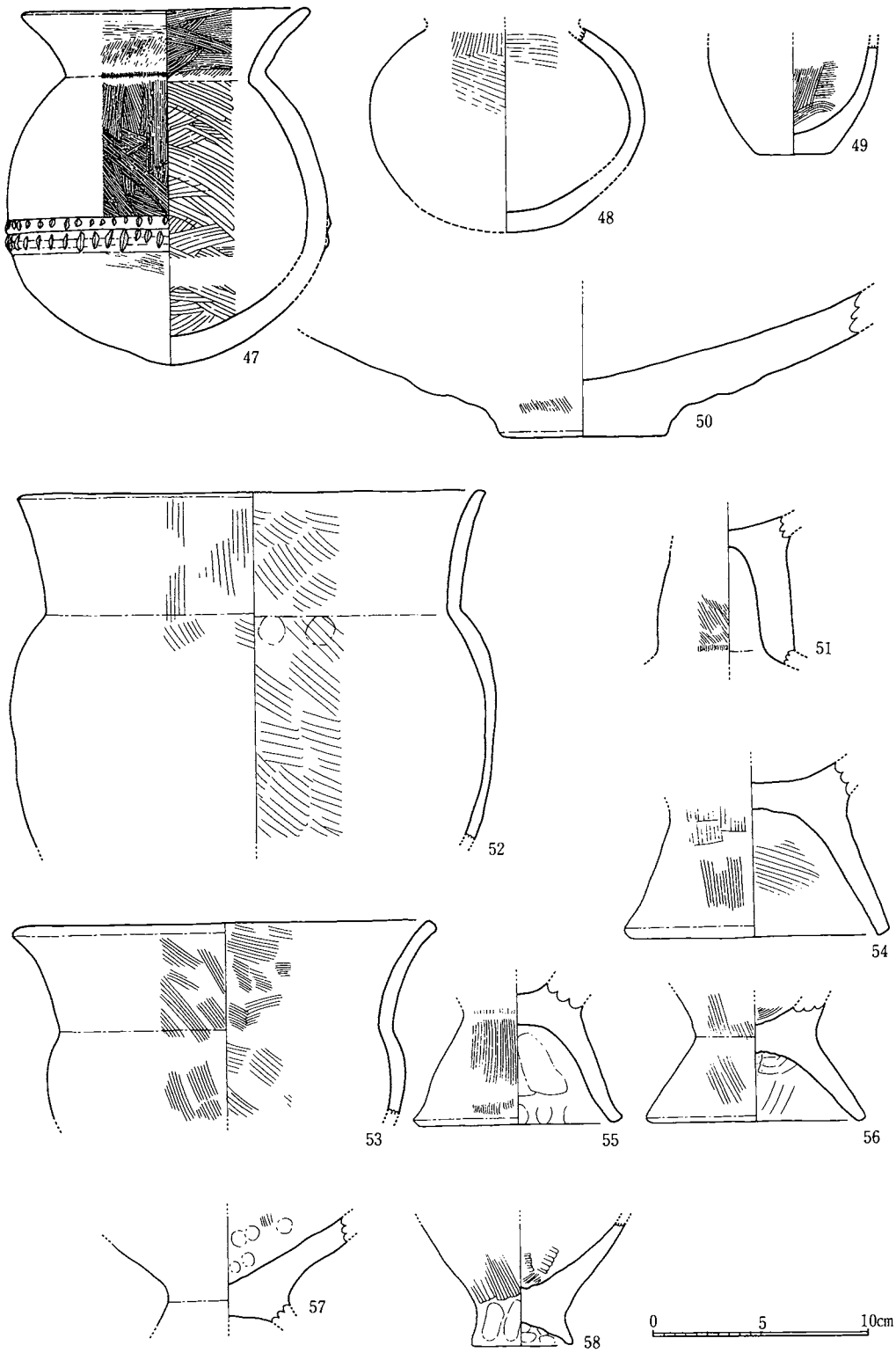
43は小型の壺形土器である。やや尖りぎみの丸底を呈し、頸部はやや内湾ぎみに立ち上がる器面調整は丁寧で、内外面とも細かなハケ目調整である。

44はミニチュアの壺形土器である。丸底を呈し、胴部の上位で肩を張り、頸部は垂直に立ち上がる。器面調整は丁寧で、外面は細かなハケ目調整で、内面は丁寧にナデを施す。

45はミニチュアの甕形土器である。短い脚をもち胴部から口縁部にかけて、内面に稜線をもたずゆるやかに立ち上がる。器面調整は丁寧で、内外面とも細かなハケ目調整を施す。口縁部の外面にかき上げた跡がみられる。



第18図　2号住居跡出土土器実測図（1）



第19図　２号住居跡出土土器実測図（２）

46は小型の甕形土器である。厚く短い脚をもち、45と同じく胴部から口縁部にかけて、内面に稜線をもたず、ゆるやかに立ち上がるが、口縁端部は平らに成形されている。器面調整も丁寧で、内外面とも細かなハケ目調整を施す。脚部から胴部にかけてと、胴部から口縁部にかけて指頭圧痕の痕跡がみられる。

組み合わせ方は、45のミニチュアの甕形土器に44のミニチュアの壺形土器を蓋としてはめこみ、それを46の小型の甕形土器の中に納め、さらに43の小型の壺形土器をさかさにして、蓋としていた。組み合わせ方は、模式図（第18図）のとおりである。

取り上げの時、組み合わせられた土器とは気付かず、正確な断面図を取れなかったのが残念である。

〔土器〕（第19図47～58）

47・48は壺形土器である。胴部はほぼ球形を呈し、底部は丸底である。頸部は外反しながら開く。47は胴部のやや下部に2条の刻目突帯がめぐる。器面調整は内外面ともハケ目調整である。

49は平底の鉢形土器である。器面調整は内面は細かなハケ目、外面はナデである。

50は大型の壺形土器の底部で、形態は平底である。

51は高坏形土器の脚の筒部である。ややふくらみをもち、外面の調整はハケ目調整である。坏部及び裾部は欠損している。

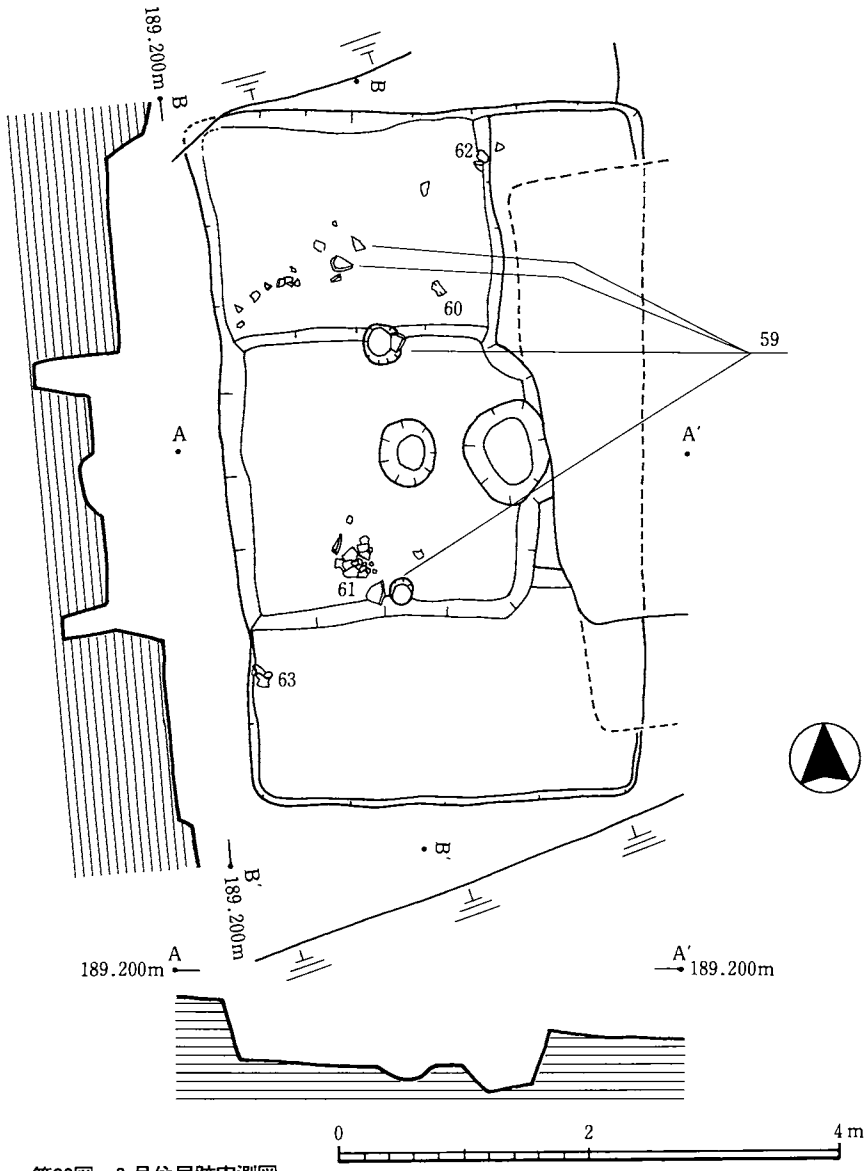
52・53は甕形土器である。胴部は上部に最大径をもち、口縁部は外反しながら立ち上がる。胴部と口縁部との境の稜線は不明瞭で、器面調整はハケ目調整を施す。52には口縁部にかき上げの痕跡がみられ、53は胴部最大径より口径が上回る。

54～58は甕形土器の脚部である。直線的にのびるもの、やや外反ぎみにのびるもの、つまみだしただけのものに分けられる。調整は基本的にハケ目調整で、内面に指頭圧痕が見られるものもある。

3号住居跡（第20図）

3号住居跡は5区に位置し、2号住居跡によって東側の一部を切られている。平面形態は長方形で、東西軸3ｍ36㎝（推定値）、南北軸5ｍ42㎝を測る。北側から東側・南側に「コの字」状のベッド状遺構が設けられており、さらに北東部と東側にもう一段を設け、計2段のベッド状遺構を有している。床面よりの比高差は28㎝、さらにもう1段の比高差は14㎝を測る。床面からの壁高は47㎝である。

炉は住居跡の中央に設けられていた。その炉底は赤く焼けており、平面形態は直径50㎝の円形を呈する。



第20図　３号住居跡実測図

柱穴は南北のベッド状遺構の立ち上がる壁際に２個穿たれている。炉の東側のベッド状遺構の壁際に80cm×70cmの楕円形の貯蔵穴を有する。

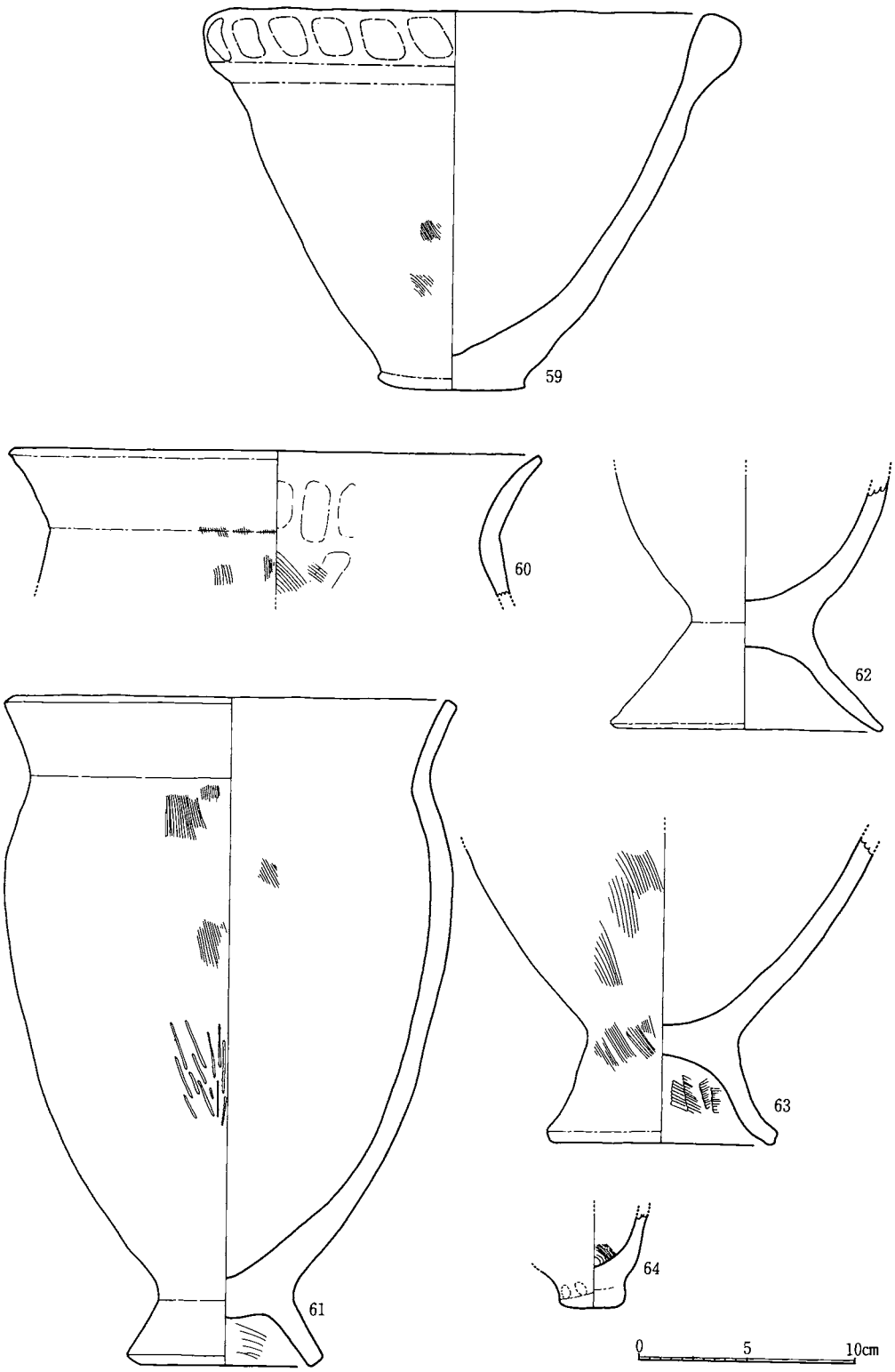
２段のベッド状遺構を有する住居跡は、本調査ではこの１基だけしか確認されていない。

出土遺物は土器のほか、石包丁が１点（78）出土した。

〔土器〕（第21図59～64）

59は平底の鉢形土器である。肉厚で口縁端部が膨らみ、指頭で丁寧に成形している。器面調整はナデ仕上げで、外面の一部にハケ目のあとが残る。

60～63は甕形土である。脚台が直線的にのびるもの（61）と、長く外反してのびるもの（62・63）に区別できる。胴部の上位に最大径をもち、口縁部はゆるやかに外反しながら立ち上がる。



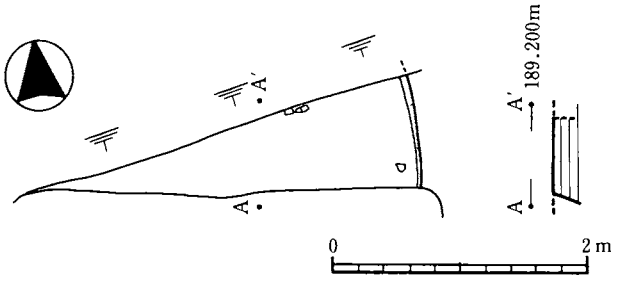
第21図　3号住居跡出土土器実測図

胴部と口縁部との境の内面には、稜線はみられない。

64はミニチュアの平底の鉢形土器であろう。内面にハケ目のあとが残る。

４号住居跡（第22図）

５区に位置する竪穴式住居跡で、南側は３号住居跡に切られ、北側は調査区外にのびている。そのため、プラン及び規模は不明である。東側の壁高は７cmを測る。柱穴及び炉は確認できなかった。土器は数点出土したが、図化にたえられるものはなかった。他に石包丁が１点（81）出土した。



第22図　４号住居跡実測図

５号住居跡（第23図）

６区に位置する竪穴式住居跡である。南側半分が調査区外のため、全容は不明である。平面形態は長方形であろうが、南西部のコーナーが気になるところである。東西軸６ｍを測る。南北軸は不明である。ベッド状遺構を設けているが、このベッド状遺構がどのようにめぐるのかは不明である。北側の床面からの比高差は約25cmである。さらにベッド状遺構からの壁高は28cmである。図中の柱穴の深さは６～12cmとひじょうに浅く、この住居跡の主柱穴だとは考えにくい。調査区外に２本の主柱穴があるものと思われ、炉も同様である。

この住居跡からは、土器のほかは石器や鉄器の出土はなかった。

〔**土器**〕（第24図65～69）

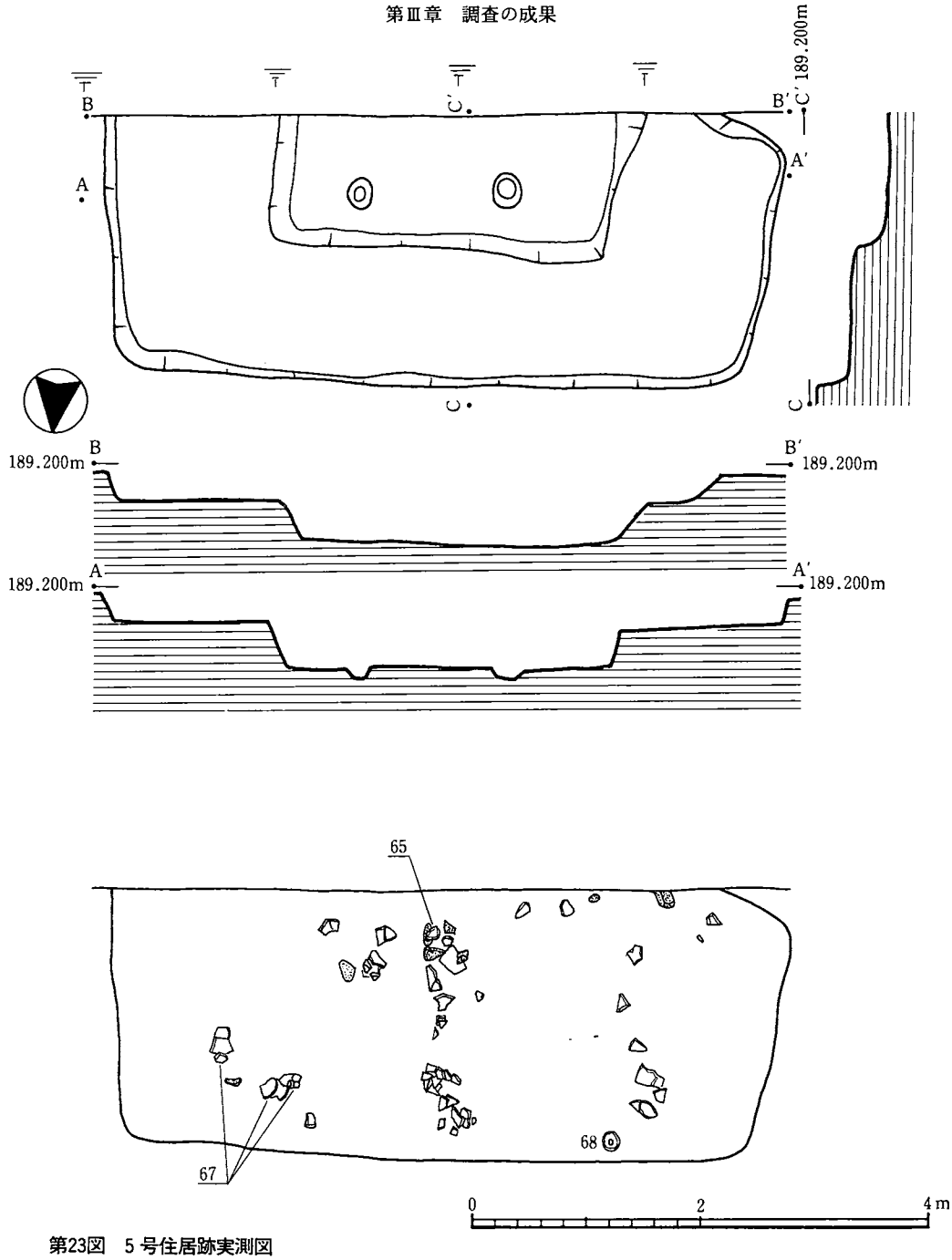
65・66は小型の丸底土器である。頸部は胴部からやや内湾ぎみに立ち上がり、頸端部は薄くとがる。器面調整は丁寧なナデを施し、一部にハケ目が残る。

67は甕形土器である。胴部中央部より上位を欠損する。脚部は直線的に長くのびる。器面調整は内外面ともハケ目調整である。68も同様である。69は小型の甕形土器である。脚部は短く外反する。器面は指頭で調整を施す。

６号住居跡（第25図）

６区から７区にかけて位置する竪穴式住居跡である。７号住居跡と切り合い関係にあり、７号住居跡を切っており、南東部は調査区外にのびてる。平面形態は長方形を呈し、東西軸７ｍ・南北軸４ｍ６cmを測り、ベッド状遺構を有する。ベッド状遺構は住居跡をめぐり、南側の中央部で途切れる。床面からの比高差は約32cmで、さらにベッド状遺構からの壁高は約15cmである。

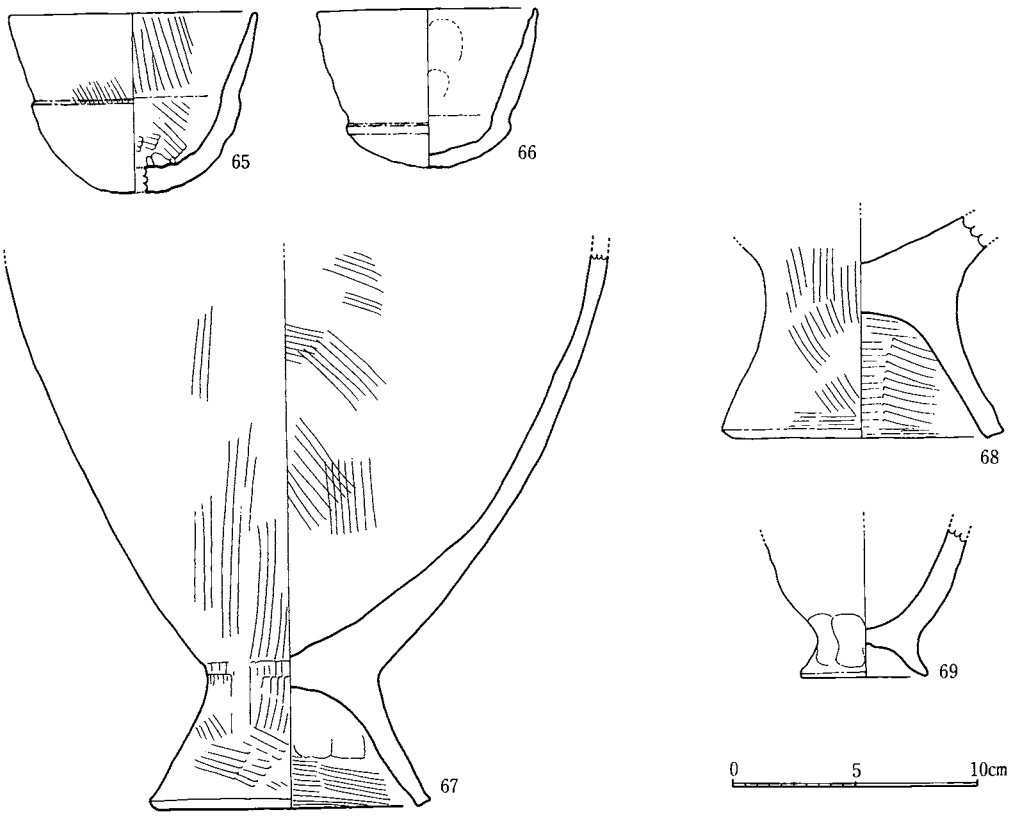
炉は、住居跡のほぼ中央に設けられ、炉内には炭化物や焼土がつまっていた。その平面形態



第23図　5号住居跡実測図

は正方形を呈し、深さは8㎝である。柱穴は中央よりやや北側のベッド状遺構の立ち上がる部分に2個穿たれていた。貯蔵穴は確認できなかったが、住居跡の南側の調査区外に存在するものと思われる。

出土遺物は、土器のほか、石包丁が2点（38・69）、砥石が2点（89・92）、磨石が1点（105）出土した。



第24図　5号住居跡出土土器実測図

〔土器〕（第26～27図70～84）

70は小型の丸底土器である。低い胴部はやや肩を張り、頸部はやや開きながら直線的に立ち上がり、頸端部にいくにしたがってうすくなり、端部で尖る。器面調整は外面がハケ目、内面はナデ調整である。

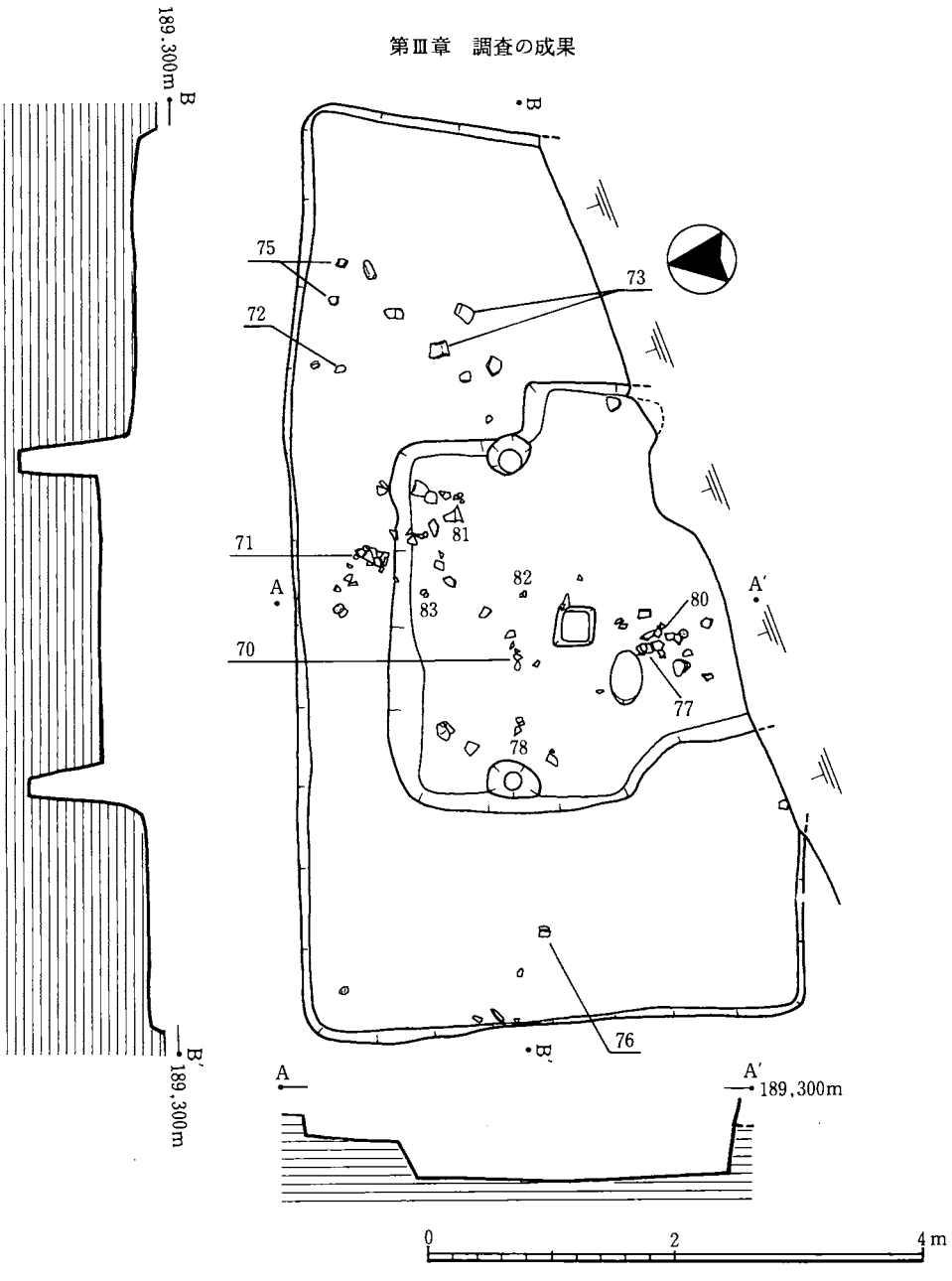
71は大型の壺型土器の底部で、平底である。

72は鉢形土器で、胴部の中央部で屈曲し、内湾ぎみに立ち上がる。脚がつくか否かは不明である。

73・74・80・81は甕形土器である。胴部の上位に最大径をもち、口縁部は、ゆるやかに外反しながら開く。内面の稜線はみられない。器面調整は基本的には、ハケ目調整であり、口縁部の外面には刷毛でかき上げた跡がみられる。

75～79は甕形土器の脚部である。やや外反ぎみにのびる。78・79は脚の上位に面をもっている。調整は内外面とも、ハケ目調整である。

82～84は小型の甕形土器の脚部である。つまみ出しにより、脚を形成している。器面調整はハケ目調整であるが、一部に指頭圧痕がうかがえる。



第25図　6号住居跡実測図

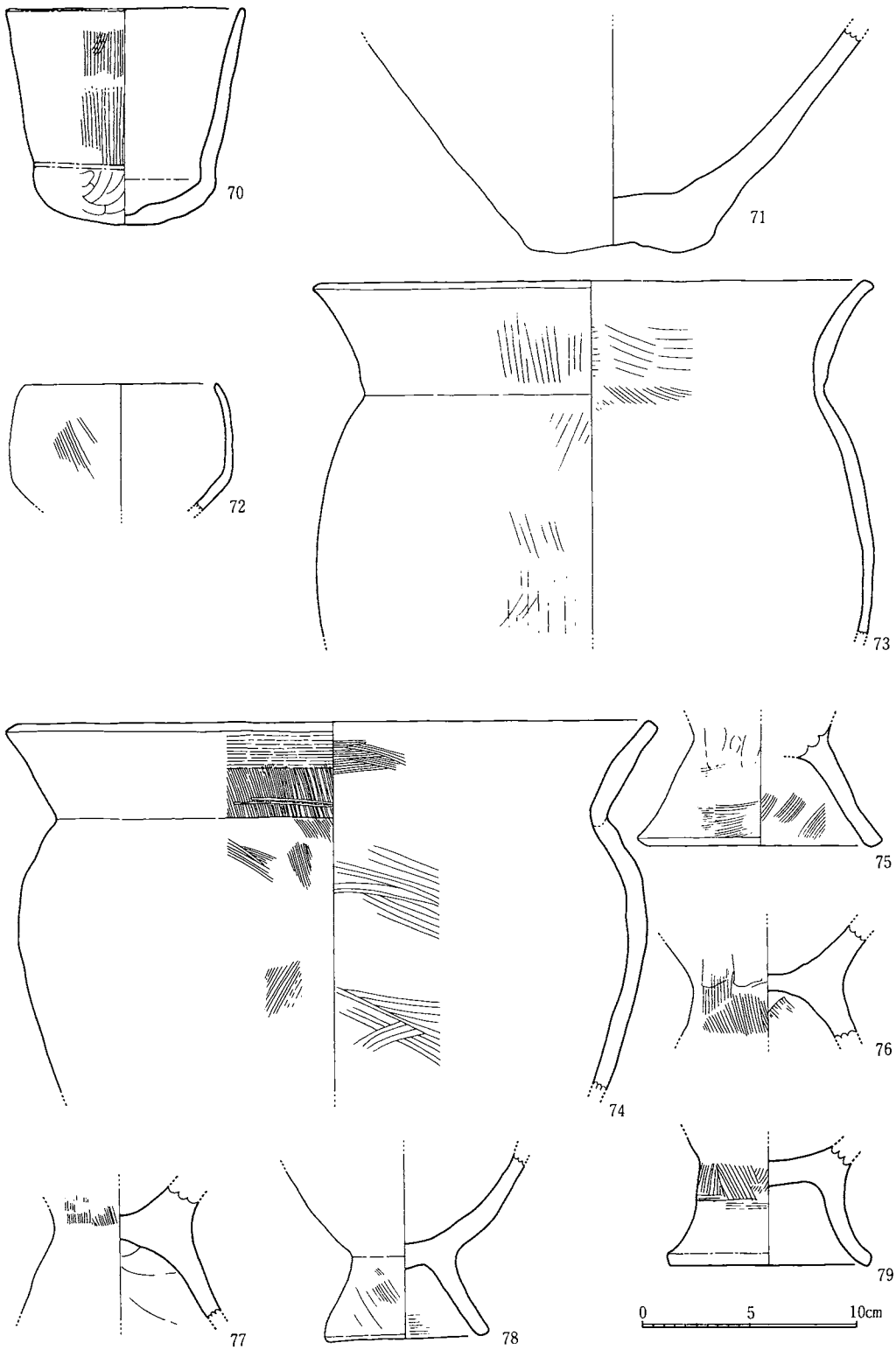
7号住居跡（第28図）

7区に位置する竪穴式住居跡で、南側が調査区外にのび、さらに8号住居跡に西側部分を切られており、かろうじて床面を残している。したがって、その全容は不明である。東側にベッド状遺構がわずかに残り、西側にはその痕跡がうかがえる。ベッド状遺構の比高差は16cmで、それからの壁高は17cmである。柱穴・炉・貯蔵穴は確認できなかった。

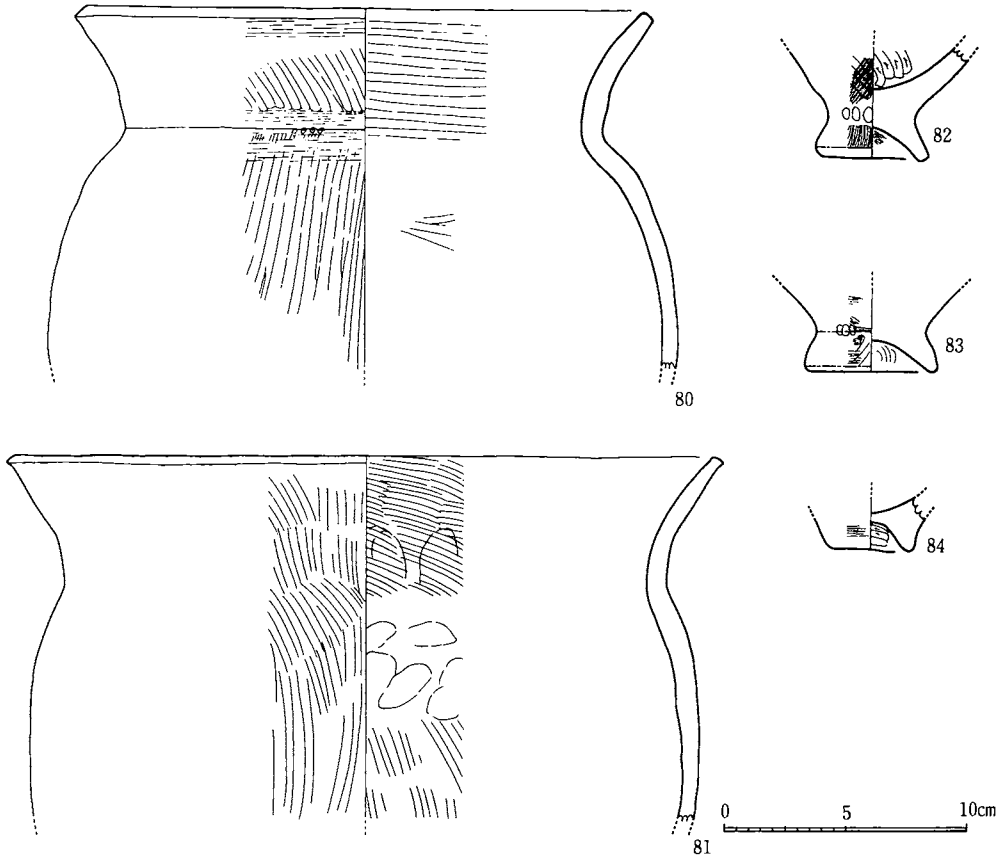
出土遺物は、土器数点と石包丁1点（52）を、一括で取り上げた。

〔**土器**〕（第29図85～88）

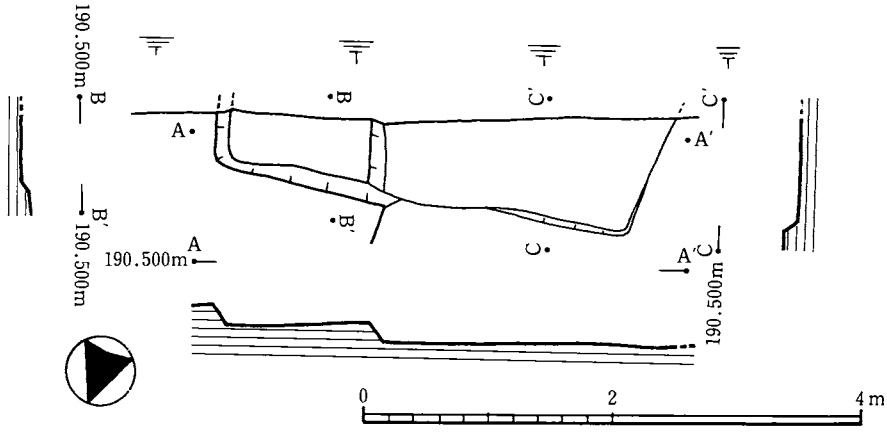
85は小型の丸底土器で、胴部は低く肩はほとんど張らず頸部は直線的にやや開きぎみに立ち



第26図　６号住居跡出土土器実測図（１）



第27図　6号住居跡出土土器実測図（2）



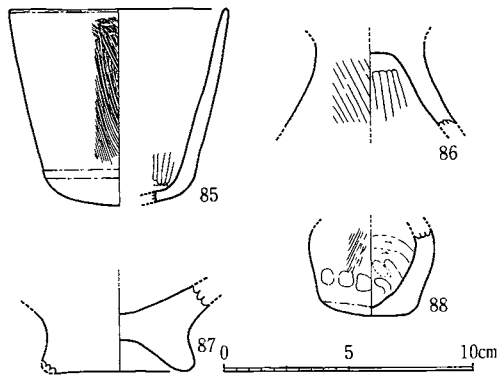
第28図　7号住居跡実測図

上がり、頸端部はうすくとがる。器面調整は細かいハケ目調整である。

86は高坏形土器である。坏部と脚部の下位が欠損している。器面調整は内外面ともハケ目調整である。

87は甕形土器の脚部である。脚は短くつまみ出されている。

88はミニチュアの壺形土器である。外面にはハケ目と指頭圧痕がうかがえる。

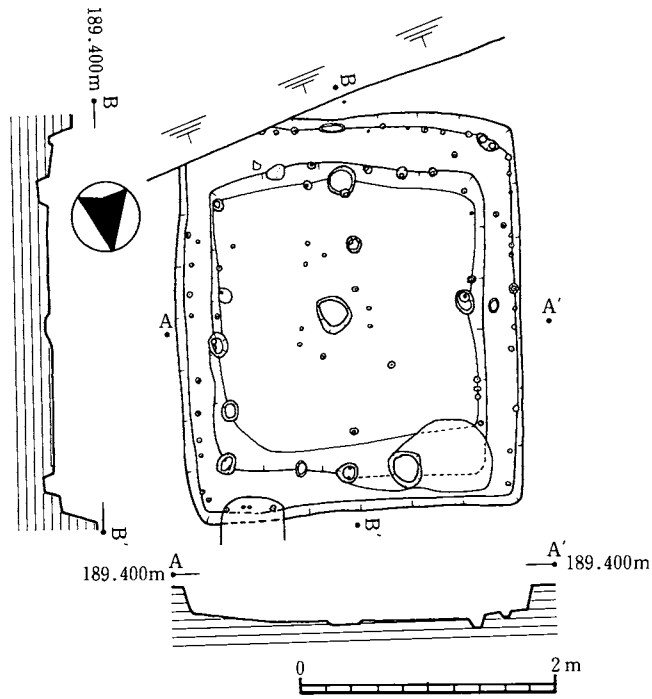


第29図　７号住居跡出土土器実測図

８号住居跡（第30図）

８区に位置する竪穴式住居跡で、一部調査区外にのびる。平面形態はほぼ正方形で、東西軸２ｍ74cm、南北軸３ｍ８cmを測り、壁高は約20cmである。住居跡のほぼ中央に直径約30cmの円形を呈する炉を有する。炉内には炭化物や焼土は存在しなかった。主柱穴は炉を中心に南北に２個穿たれていた。さらに、壁際とその20～30cm内側に２列に67個の小ピットがならび、炉の周辺にも11個の小ピットを確認した。これらの小ピットの用途は不明であるが、住居跡および炉に関連するなんらかの施設と考えてよいだろう。

この住居跡から数点の土器片が出土したが、図化にたえられるものはなかった。



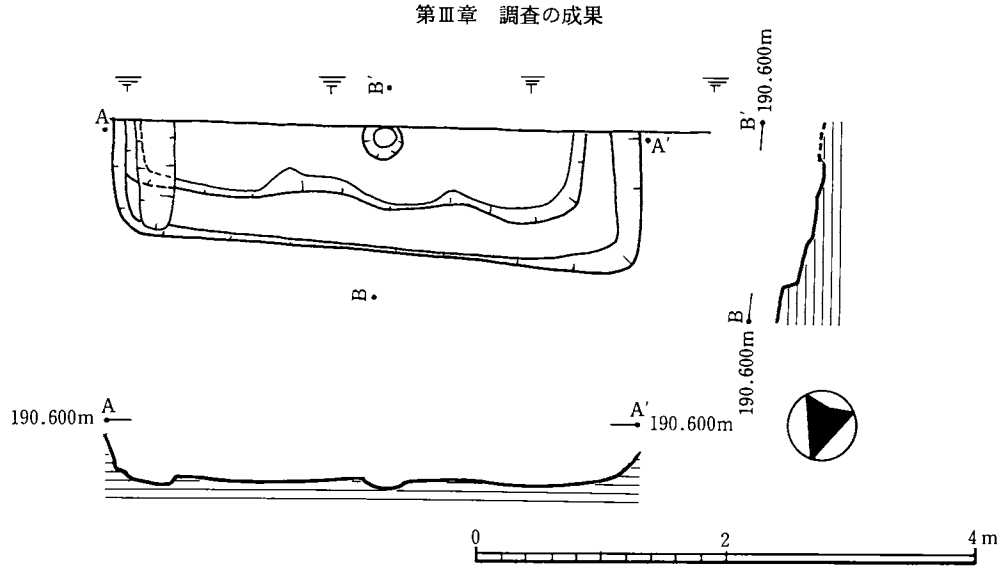
第30図　８号住居跡実測図

９号住居跡（第31図）

８区に位置する竪穴式住居跡である。南側が調査区外のため、その全容は不明である。平面形態は長方形と推定され、東西軸４ｍ24cmを測り、南北軸は不明である。ベッド状遺構が北側から西側に設けてあるが、その平面幅は、22cm～42cmとひじょうにせまい。床面からの比高差は10cmである。床面は一度掘った後再度土を入れ、平らに整形している。

炉は東西の中央、北壁から約90cmのところに設けている。その平面形態は円形で、深さ８cmである。炉の位置から、主柱穴は２本と推定される。

土器は、細片が３点出土したが、図化にたえうるものではなかった。



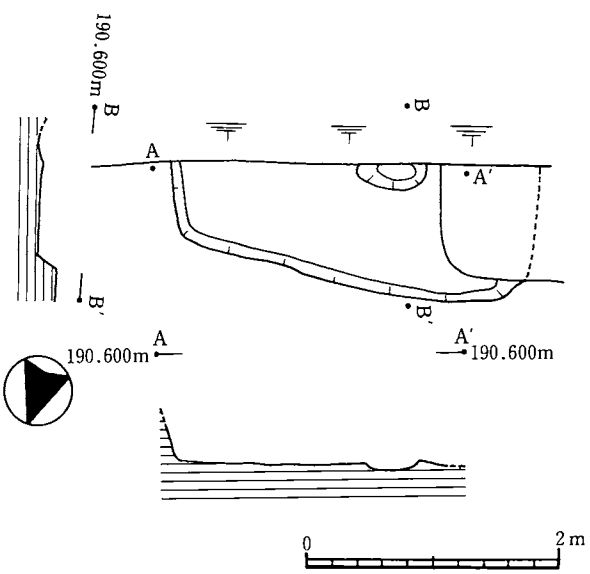
第31図　9号住居跡実測図

10号住居跡（第32図）

8区に位置する竪穴式住居跡である。南側が、調査区外にのびており、さらに西側を9号住居跡に切られているため、全容は不明である。平面形態はおそらく正方形に近いものになるであろう。

炉は中央よりやや西よりに設けられている。平面形態は楕円形を呈し、長軸は55cm、深さは8cmであった。柱穴や貯蔵穴は確認出来なかった。

出土遺物は土器片1点のみで、図化にたえうるものではなかった。



第32図　10号住居跡実測図

11号住居跡（第33図）

9区に位置する竪穴式住居跡で、北側の一部を除き、他は調査区外にのびている。さらに11号住居跡に切られているため、全容は不明である。平面形態は円形になるものと思われる。柱穴および炉は確認できなかった。

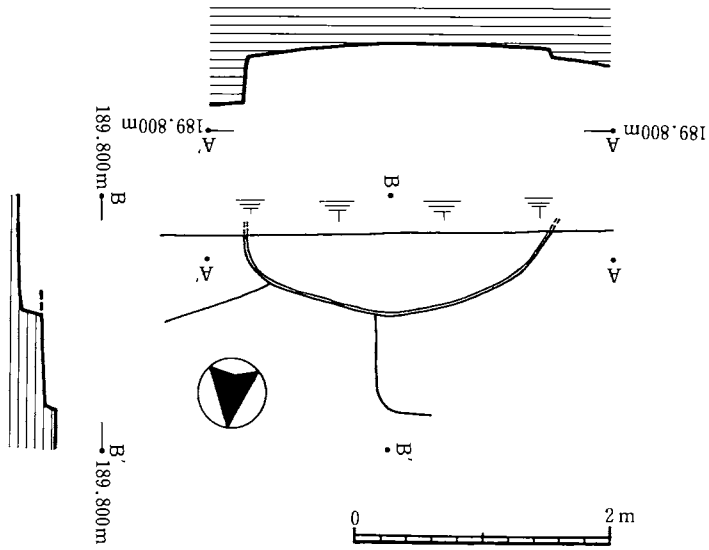
この住居跡はベッド状遺構部分の中段より削平をうけ、床面のみが残ったものとも考えられる。

〔土器〕（第34図89～95）

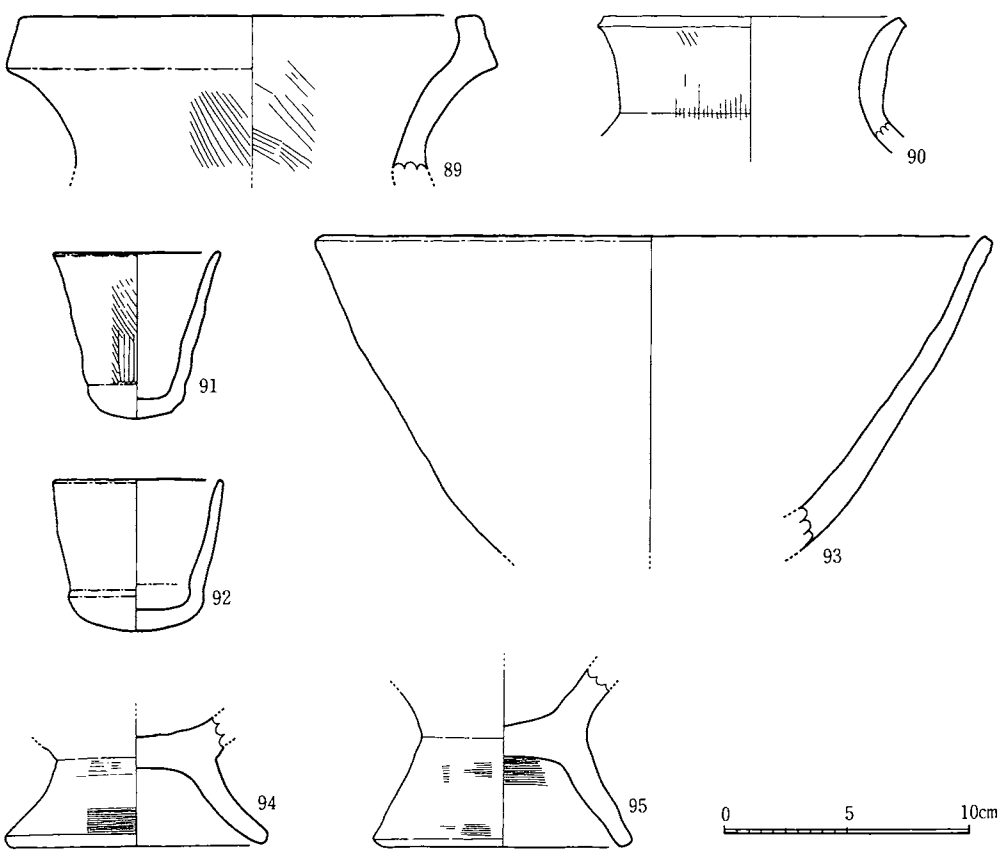
89は複合口縁の壺形土器で、胴部は欠損している。頸部は外反して開き口縁部は強く屈曲し

内傾している。器面調整は、内外面ともハケ目調整である。この資料は13号住居跡と切り合い関係にあるため、混入した可能性も考えられる

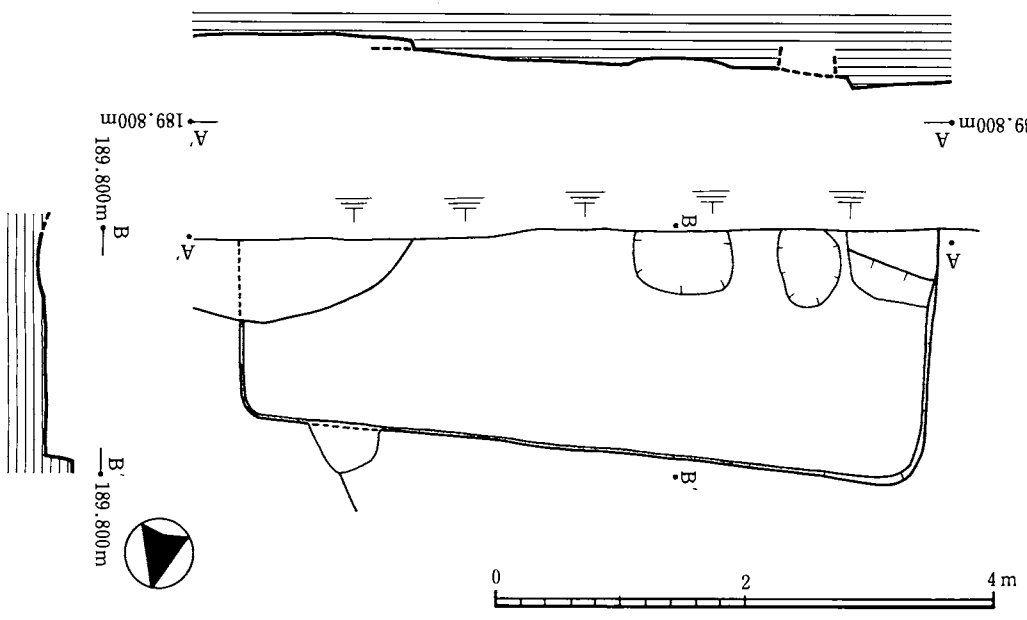
90は素口縁の壺形土器で、胴部は欠損している。頸部は胴部より緩やかに外反しながら立ち上がる。頸部の外面には、下から上へハケ目調整が施されている。



第33図　11号住居跡実測図



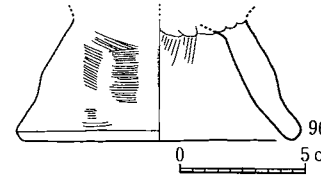
第34図　11号住居跡出土土器実測図



第35図　12号住居跡実測図

91・92は小型の丸底土器である。胴部は低く、わずかに肩を張る。頸部はやや外反しながら立ち上がるものと、やや内湾ぎみに立ち上がり口縁端部で外反するものである。

93は鉢形土器である。胴部の下位を欠損している。胴部は内湾ぎみに立ち上がる。脚台が付くか否かは不明である。



第36図　12号住居跡出土土器実測図

94・95は甕形土器の脚部である。脚は外反しのびる。器面調整はハケ目調整である。

12号住居跡（第35図）

9区に位置する竪穴式住居跡である。南側が調査区外のため、その全容は不明である。平面形態は長方形と推定される。東西軸5m56cmを測り、南北は不明である。

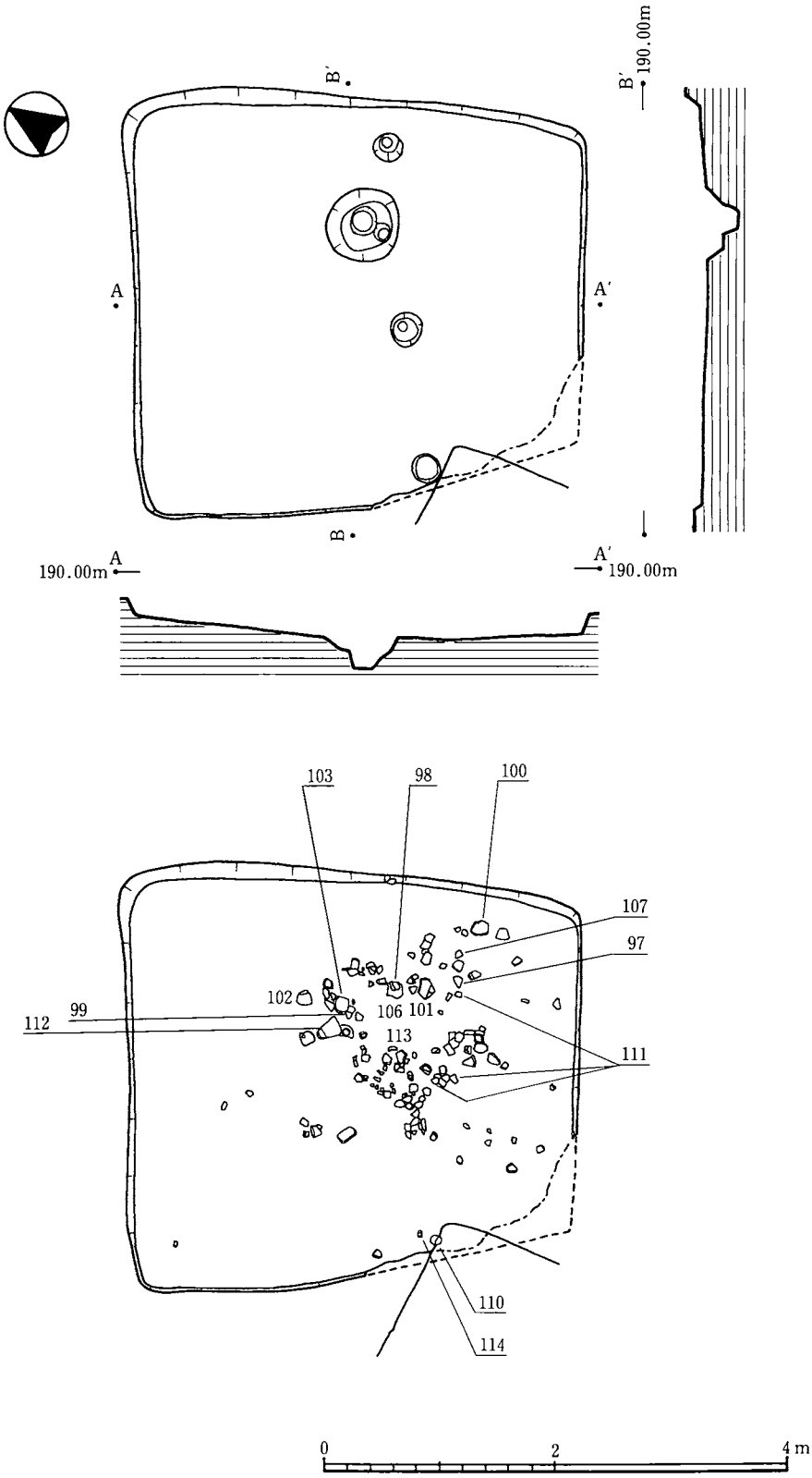
西側の一部に床面より比高差16cmのベッド状遺構の一部がうかがわれるが、それがどう巡るかは不明である。

炉は住居の西寄りに設けられている。平面形態は胴張りの長方形を呈し、長軸80cm、深さ4cmである。主柱穴は2個であると思われるが、確認できなかった。

出土土器は少なかったが、1点だけ図化できた。

〔**土器**〕（第36図96）

96は甕形土器の脚部である。脚は直線的にのび、端部で外反する。器面調整はハケ目調整である。



第37図　13号住居跡実測図

13号住居跡（第37図）

10区に位置し、一部9区にかかる竪穴式住居跡である。南のコーナー部分が11・12号住居跡によって切られている。平面形態はほぼ正方形にちかく、東西軸3ｍ48㎝、南北軸3ｍ96㎝を測る。壁高は6～15㎝である。ベッド状遺構は有しない。あるいは、ベッド状遺構が削平されている可能性もあることを、頭においておかなければならない。炉は中央より北東の壁寄りに有り、炉内には焼土等は確認できなかった。

柱穴は3個確認したが、基本的には2本柱であろう。貯蔵穴は存在しなかった。

土器はかなりの量が出土した。その外、砥石が1点（98）出土した。

〔**土器**〕（第38～39図97～114）

97～103は壺形土器である。97は素口縁の壺形土器の口縁部で、外反しながら立ち上がる。98・99は複合口縁の壺形土器の口縁部で、頸部が外反しながら立ち上がりするどく屈曲し内傾ぎみに端部にいたる（98）とほぼ直線的に開き、屈曲して内傾ぎみに端部にいたる（99）とがある。100は突出した丸底の底部である。101～103は丸底の底部で、大型の壺形土器（101・102）と中型（102）とに分けられる。器面調整は基本的にハケ目調整である。

104・105は高坏形土器である。104は脚部と口縁部の先端を欠損している。坏部はやや深く、するどく屈曲し口縁部にいたる。105は脚部で、坏部と裾部を欠損している。

106～113は甕形土器である。胴部最大径は胴部の中央部に位置する。口縁部は頸部より「くの字」状に外反して開く。頸部の内面には、稜線がうかがえる（106～111）。器面調整は、基本的には、内外面ともハケ目調整である。一部、内面に指頭圧痕が見られるもの（110）、口縁部に刷毛でかきあげた痕跡を残すもの（106）もある。105は肩部に刻目突帯をもつ甕形土器で、口縁部と胴部の上位より以下を欠損している。器面調整は、内外面ともハケ目調整である108は甕形土器の脚部である。

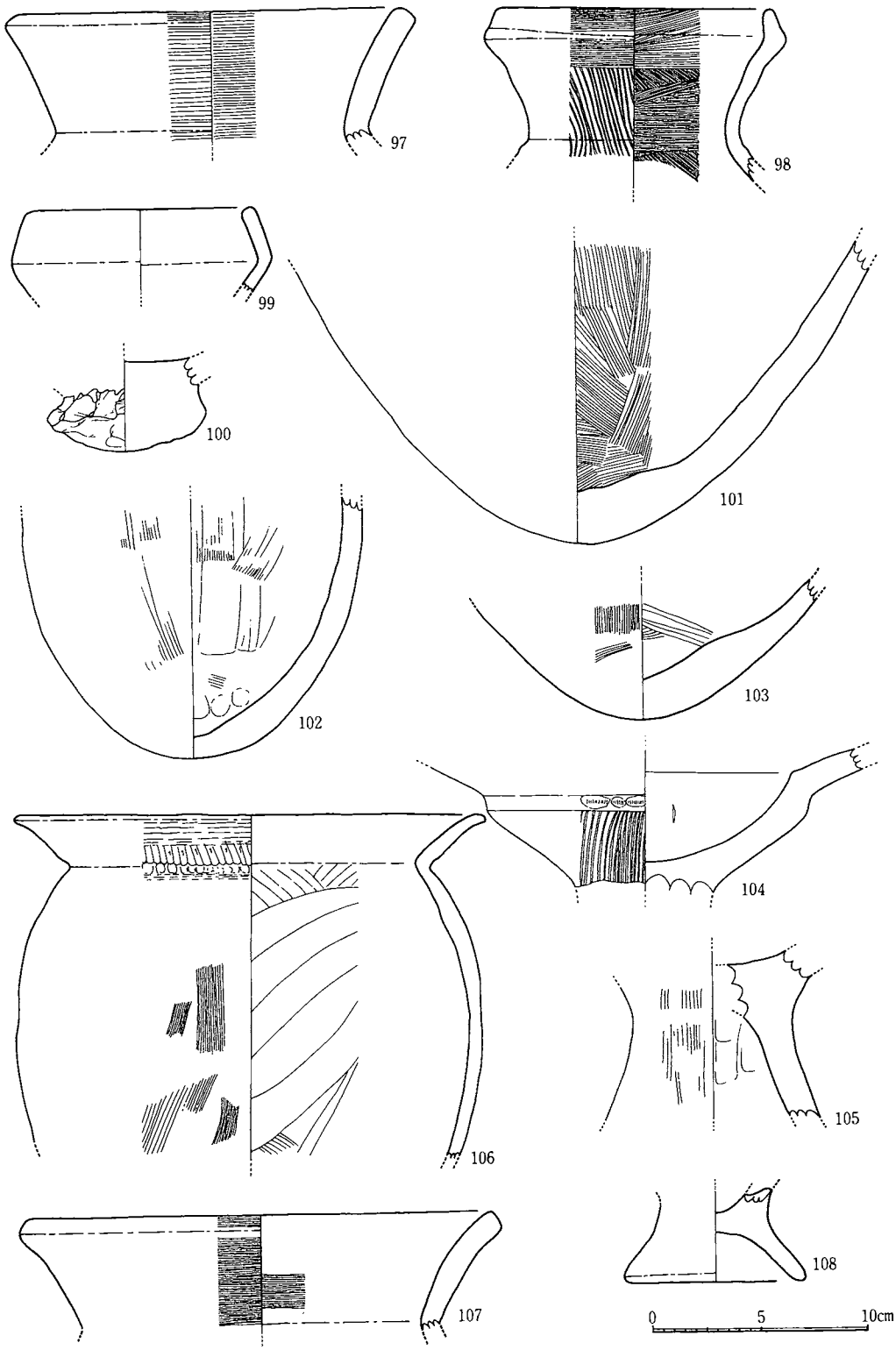
114はミニチュアの高坏形土器の脚部である。

14号住居跡（第40図）

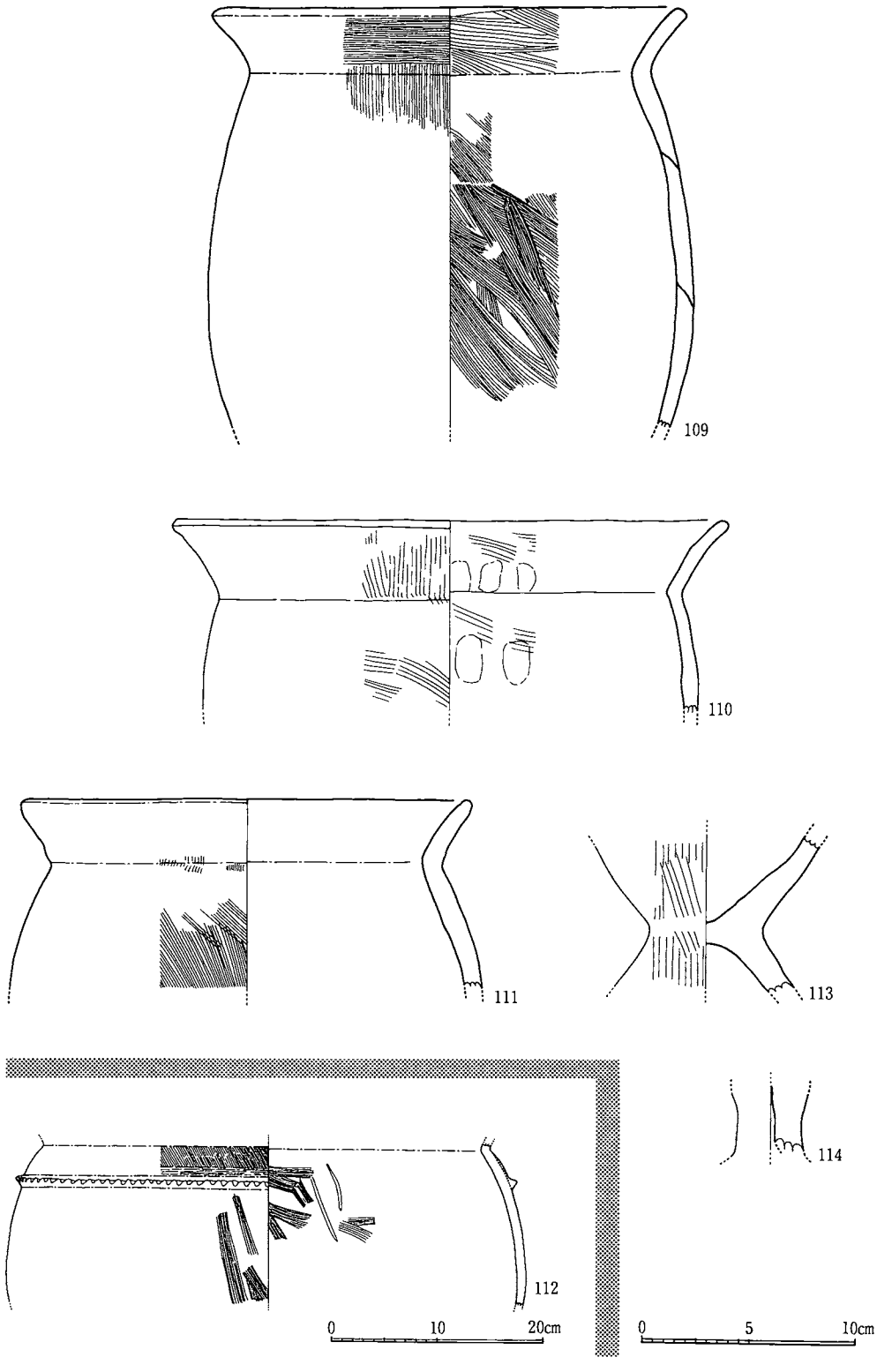
10区に位置する竪穴式住居跡である。平面形態は長方形にちかく、北西部と南東部のコーナーがせりだしている。住居跡の南を近世の溝に、南東部のコーナー部分をイモ穴によって攪乱をうけているが、東西軸2ｍ84㎝、南北軸2ｍ44㎝を測る。壁高は、約25㎝である。中央よりやや北東寄りに炉が設けられており、その平面形態は一辺が64㎝の隅丸の正方形を呈し、深さ7㎝である。柱穴は3個確認したが、もう1個はイモ穴により削平されている可能性がある。柱穴の位置から、ベッド状遺構が削平により、消失したとも考えられる。

出土遺物は、土器のほかは出土しなかった。

〔**土器**〕（第41図115～127）



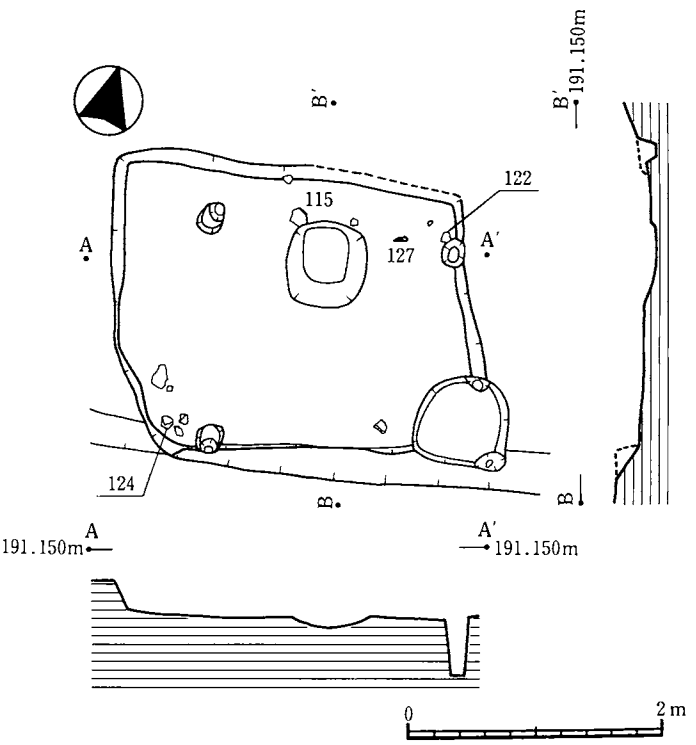
第38図　13号住居跡出土土器実測図（１）



第39図　13号住居跡出土土器実測図（2）

115は大型の壺形土器の底部である。平底で、厚さは4㎝である。116・117は高坏形土器の脚部で、坏部と脚部の下位を欠損している。器面調整は内外面ともハケ目調整である。

118は脚台つきの鉢形土器である。119は甕形土器の口縁部である。口縁はゆるやかに外反して開く。器面調整は、内外面とも細かなハケ目調整である。120～127は甕形土器の脚部で、脚が直線的に開くもの（121・122）と、外反しながら開くもの（120・123・124・125）、内湾しながらのびるもの（126）とに分けられる。127は不明である。器面調整は基本的にハケ目調整であるが、基部に指頭圧痕を施すものもある。



第40図　14号住居跡実測図

15号住居跡（第42図）

10区に位置する竪穴式住居跡である。南側が調査区外にのびており、さらに14号住居跡に切られているため、全容は不明である。平面形態は正方形か長方形かは不明で、東西軸は3ｍ36㎝を測る。壁高は北西コーナー部分で17㎝である。

東側にベッド状遺構の一部がうかがえるが、どう巡るかは不明である。その比高差は10㎝である。柱穴が3個あるが、この住居跡に伴うものではなさそうである。炉および貯蔵穴は確認できなかった。

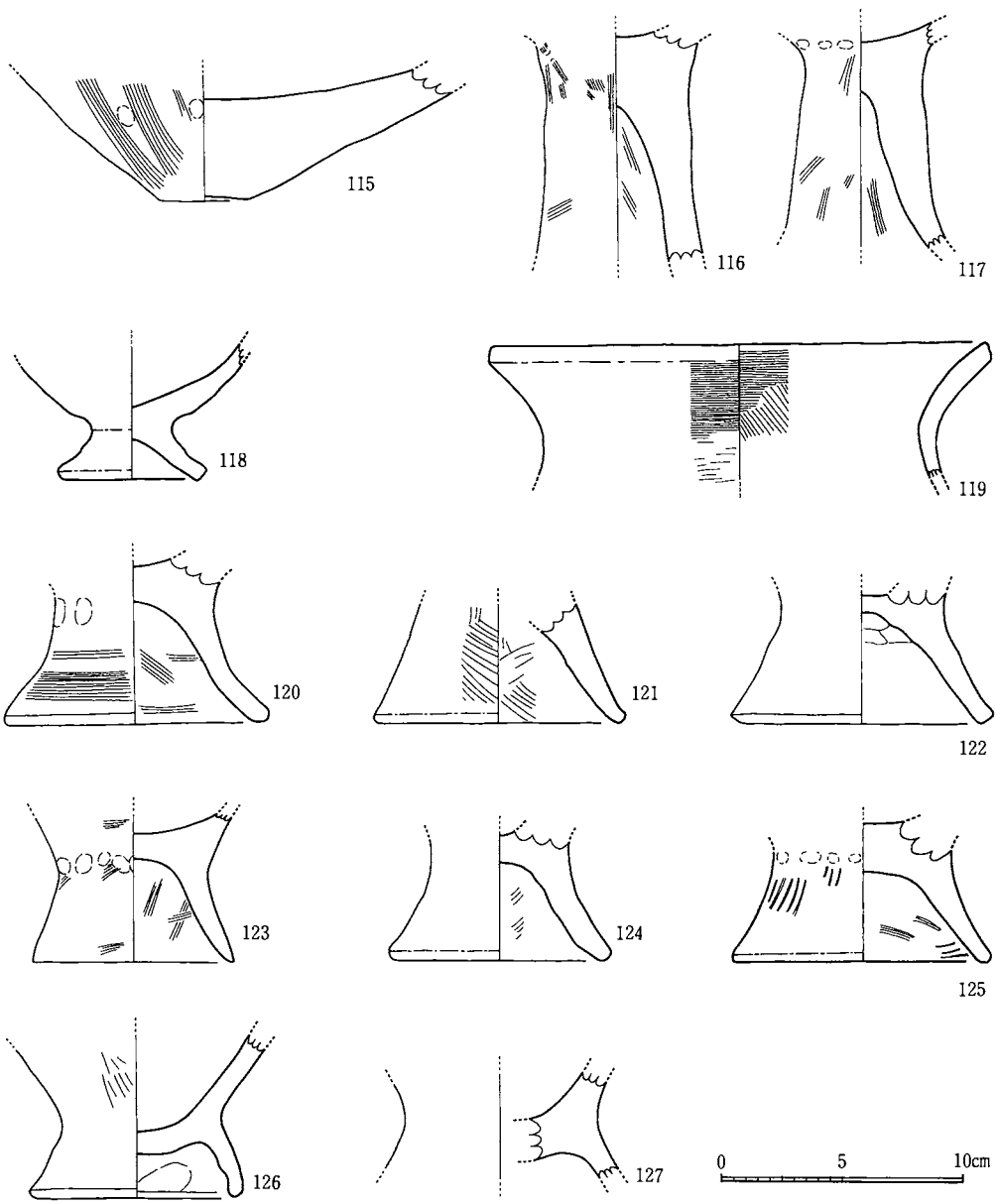
出土遺物は、土器のほかは出土しなかった。

〔**土器**〕（第43図128～133）

128は素口縁の壺形土器の口縁部で、ゆるやかに外反して開く。器面調整は細かなハケ目調整である。

129・130は丸底の鉢形土器で、口縁部がやや内傾するもの（129）と、やや外反するも（130）とがある。

131は甕形土器で、胴部最大径は中心より上位に位置する。口縁部はゆるやかに外反しなが

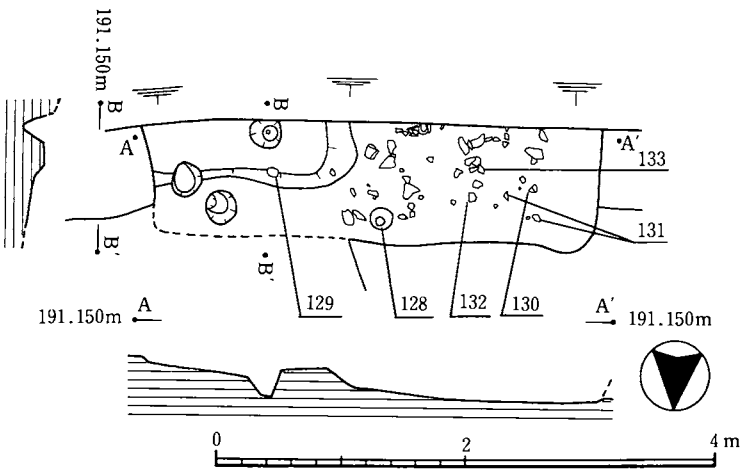


第41図　14号住居跡出土土器実測図

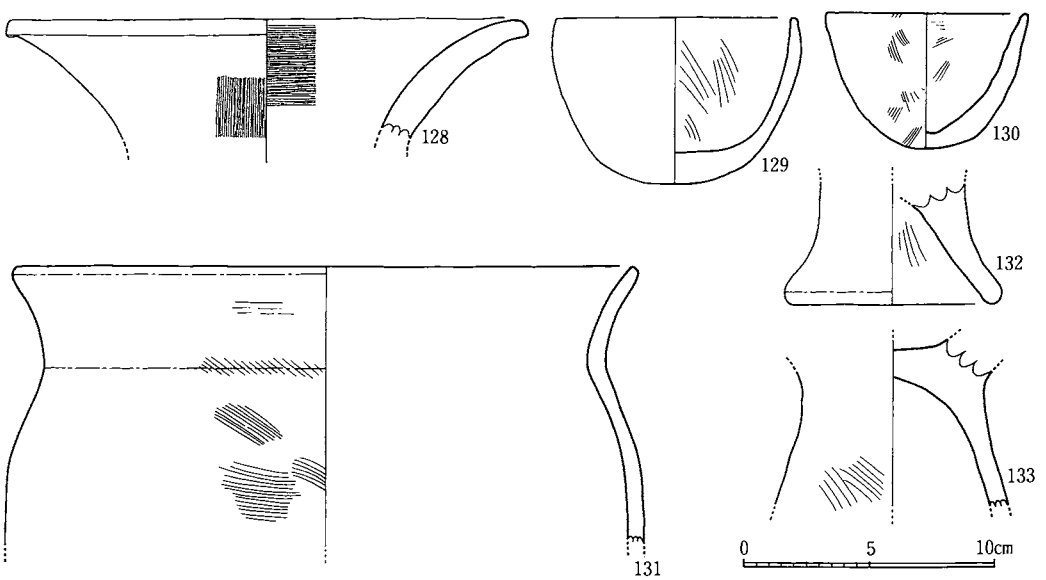
ら立ち上がる。内面の稜線はみられない。器面調整は外面はハケ目で、内面はナデ調整が施されている。

132は甕形土器の脚部である。脚はやや外反しながらのびる。器面調整は外面がナデ、内面はハケ目調整である。

133は高坏形土器である。坏部と脚部の下位は欠損している。外器面にはハケ目調整が施されている。



第42図　15号住居跡実測図



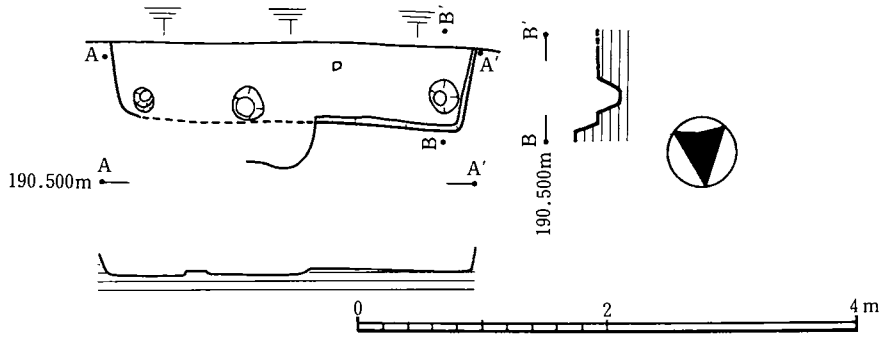
第43図　15号住居跡出土土器実測図

16号住居跡（第44図）

10区に位置する竪穴式住居跡である。南側調査区外にのびており、さらに15号住居跡に切られているため、その全容は不明である。東側にわずかに壁の立ち上がりの痕跡が見うけられる。平面形態は正方形もしくは長方形と推定され、東西軸は２ｍ92㎝でひじょうに小型の住居跡である。この住居跡も削平によりベッド状遺構が消失した可能性も残っている。

柱穴は３個確認したが、この住居跡に伴うものかは不明である。炉および貯蔵穴等は確認できなかった。

出土遺物は土器片が１点出土したが、図化にたえられるものではなかった。

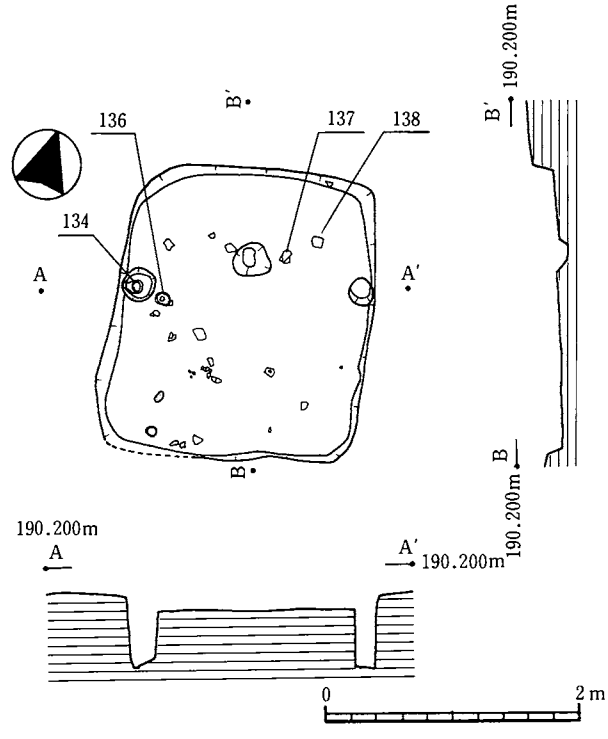


第44図　16号住居跡実測図

17号住居跡（第45図）

11区に位置する竪穴式住居跡である。平面形態は正方形で東西軸２ｍ８㎝、南北軸２ｍ28㎝を測る。壁高は10㎝である。炉は中央より北寄りに設けられており、平面形態はほぼ円形で、直径約30㎝で、深さ７㎝である。柱穴は東西の壁の立ち上がり際に２個穿たれていた。西側の柱穴から、直径10㎝の柱痕跡を確認した。貯蔵穴は存在しなかった。

この住居跡は炉および柱穴の位置から判断して、ベッド状遺構は削平され、床面部分のみが残ったものである。もともとの平面形態は長方形であったであろう。ベッド状遺構が東西の両側につくのか全面に巡るのかは不明である。



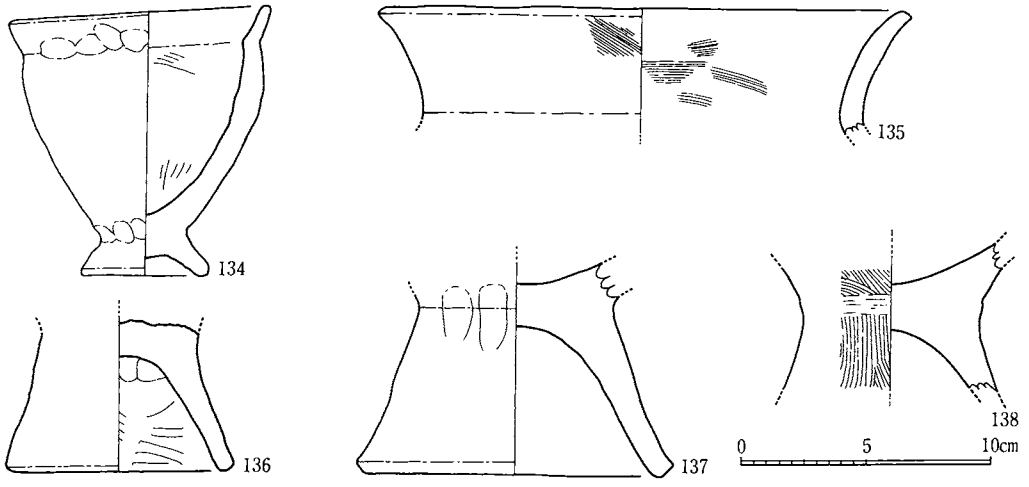
第45図　17号住居跡実測図

出土遺物は土器のほか、石包丁１点（66）、打製石斧１点（18）が出土した。

〔**土器**〕（第46図134～138）

134～138は甕形土器である。134は小型の甕形土器で、西側柱穴内に完形で出土した。胴部最大径は上位にあり口縁部は内反しながら開く。頸部の内面の稜線ははっきりと確認できる。脚は短い。頸部と脚の基部に指頭圧痕がみえる。135は甕形土器の口縁部で、外反しながら開く。内面の稜線は不明瞭で、器面調整はハケ目調整である。

136～138は甕形土器の脚部で直線的にのびる。



第46図　17号住居跡出土土器実測図

18号住居跡（第47図）

12区に位置する竪穴式住居跡である。この住居跡は、19号・20号・21号と複雑な重なりをもっている。それを整理すると、まず19号の建て替えとしてこの18号が建てられ、後に20号および21号に切られている。

平面プランは円形で、直径約５ｍ70㎝を測る。この住居跡もベッド状遺構を有し、ほぼ全周すると推定される。その比高差は18～22㎝で、さらに壁高が10～34㎝である。その南側にステップ状の段が確認された。床面とステップ状の壁に深さ10㎝前後の浅い２個の柱穴が確認できた。これは、ステップ状に伴う何らかの施設であろうと思われる。

炉は中心より北側に設けられ、その平面形態は48㎝の円形を呈し、深さは２㎝と浅い。炉内には焼土が入っていた。柱穴はベッド状遺構が立ち上がる壁際に４個穿たれていた。この４本が主柱穴になるであろう。

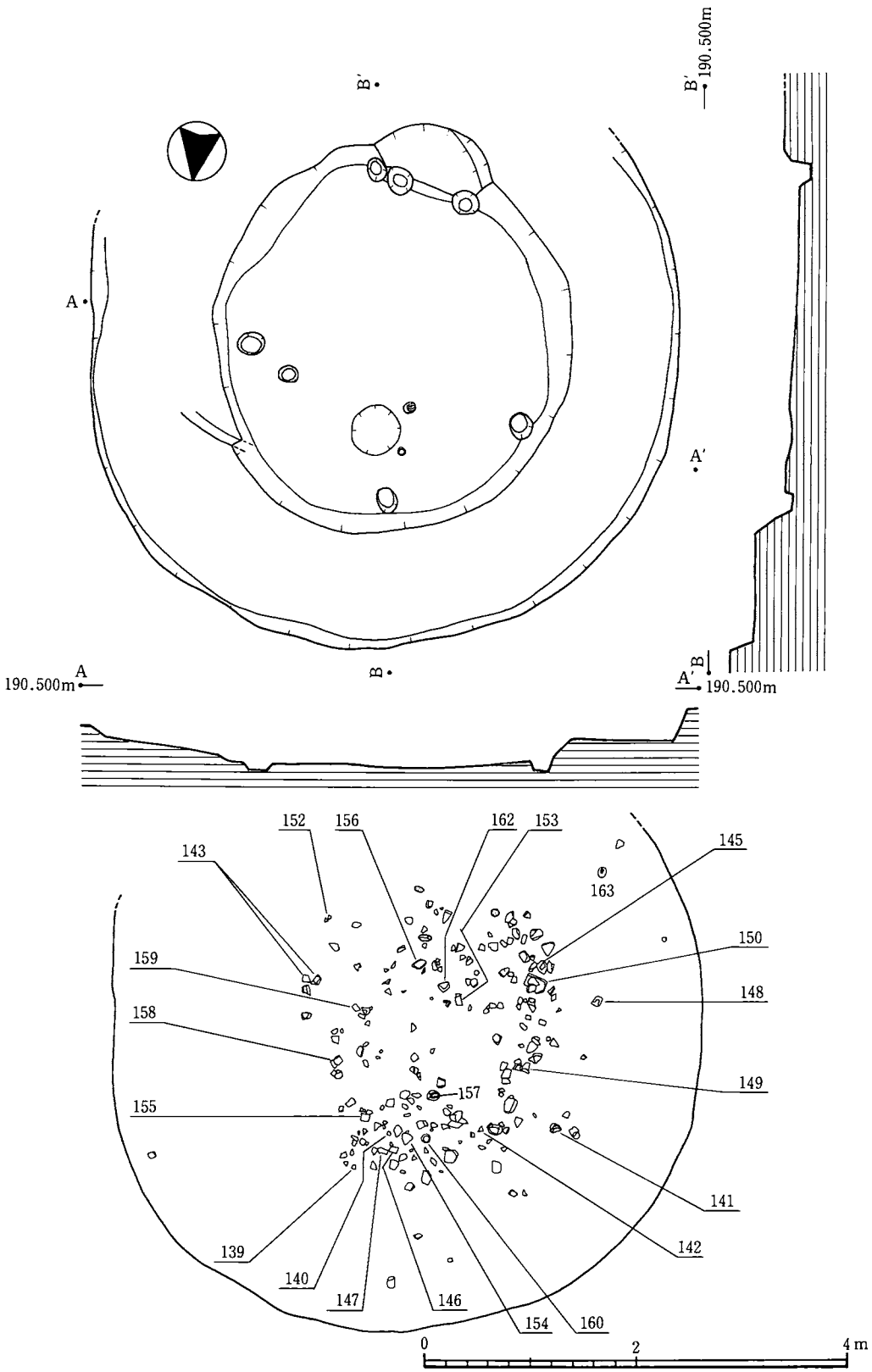
この住居跡からかなりの遺物が出土した。土器のほかには、石包丁が２点（70・73）磨石が２点（103・104）が出土した。

〔**土器**〕（第48～49図139～166）

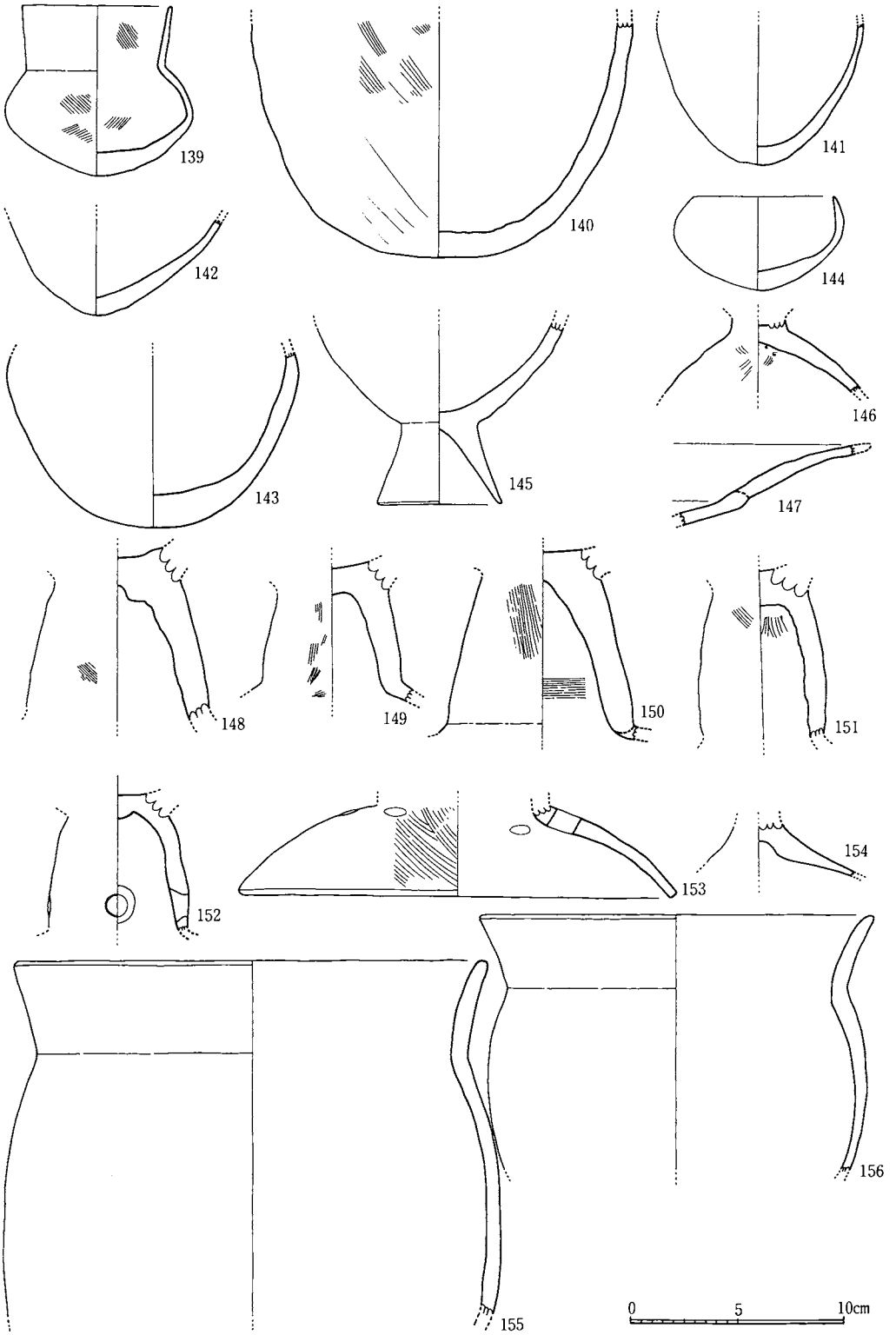
139は小型の丸底壺である。底部はややとがりぎみの丸底を呈し、胴部の中央で肩をはり、頸部は直線的にやや開きぎみに立ち上がる。器面調整はハケ目調整である。140～143は壺形土器の底部である。144はやや平底にちかい。

144・145は鉢形土器である。144は口縁端部がやや内傾する。145は脚台をもつ。

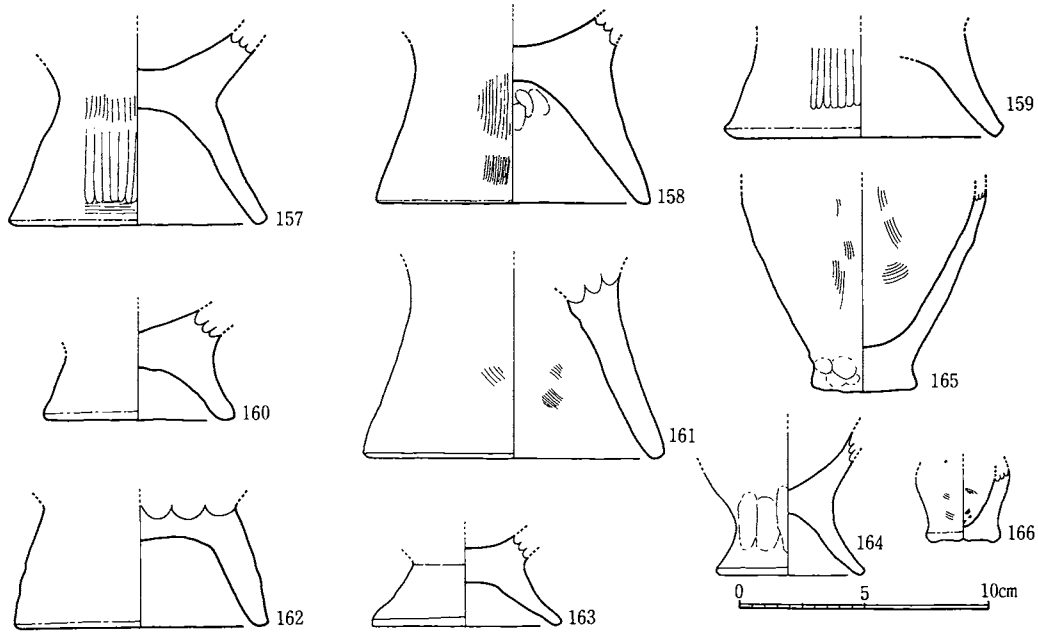
147は坏部が浅い高坏形土器である。口縁部はゆるやかに外反しながら端部にいたる。148～152は高坏形土器の脚の筒部である。ややふくらみぎみに裾部にいたる。152には筒部の下位に対称に４個のすかし穴があけられている。153は高坏形土器の裾部で、裾部の上位に６個のすかし穴があけられている。154はミニチュアの高坏形土器の脚部である。



第47図　18号住居跡実測図



第48図　18号住居跡出土土器実測図（１）



第49図　18号住居跡出土土器実測図（２）

155～165は甕形土器である。155・156は胴部最大径が中央に位置する。口縁部はなめらかにやや外反しながら立ち上がる。頸部の内面には稜線はみられない。器面調整は風化により確認できなかった。157～154は甕形土器の脚部で、脚が外反ぎみにのびる。162はやや内湾しながらのびる。器面調整は基本的にはハケ目を施したのち、ナデ調整をおこなう。165は平底の甕形土器である。底部には指頭圧痕がみられる。166はミニチュアの土器である。

19号住居跡（第50図）

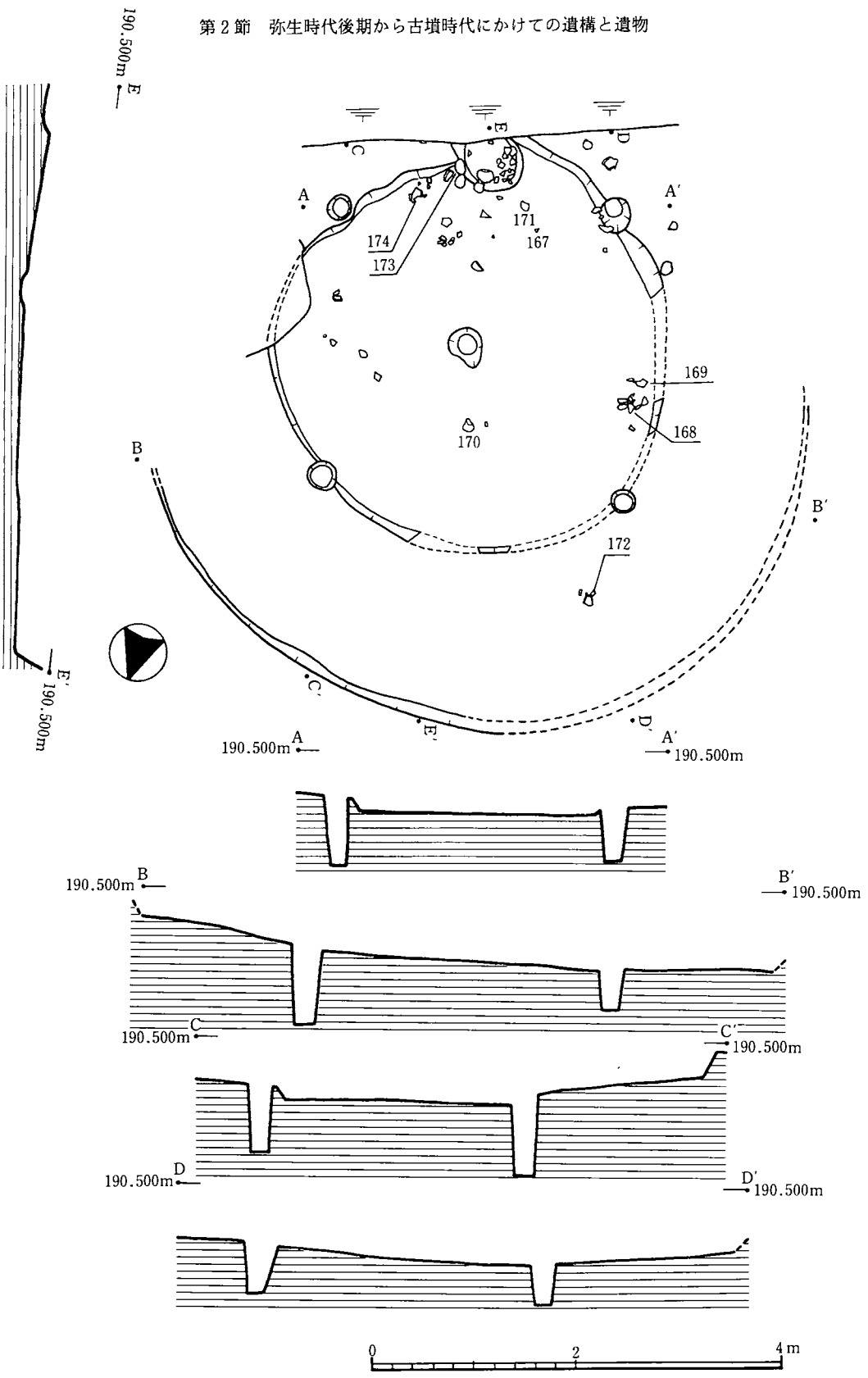
18号住居跡とほぼ重複しており、さらに20・21号住居跡によって切られている。平面形態は円形で、直径は約６ｍ40cm（推定値）を測る。周囲にベッド状遺構を有し、その比高差は７～24cmであり、さらに壁高は12～25cmである。炉はほぼ中央に設けられている。その平面形態は円形に近い形態を呈し、深さは4cmと浅い。炉底は赤く焼けていた。

柱穴は炉を中心に、ベッド状遺構の立ち上がり際に、ほぼ等間隔に４個が確認できた。この４個が主柱穴になることはまちがいない。貯蔵穴は炉の南側の一部ベッド状遺構際に設けられていた。その平面形態は円形で、深さは床面より７cmであった。

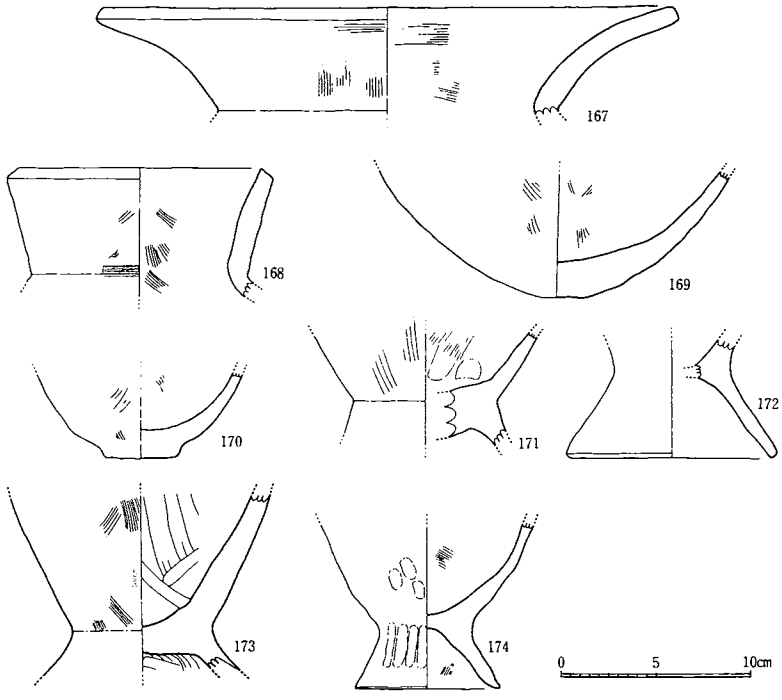
この住居跡から、土器のほかに敲石１点（121）が出土した。

〔**土器**〕（第51図167～174）

167・168は素口縁の壺形土器の口縁部である。167は大きく外反して開き、端部はやや直行



第50図　19号住居跡実測図



第51図　19号住居跡出土土器実測図

する。168はほぼ直線に、やや開きながら立ち上がる。器面調整は内外面ともハケ目調整である。169・170は壺形土器の底部である。169は丸底で170はやや突出した平底である。

171～174は甕形土器の脚部である。脚はほぼ直線的にのび、171・173は脚内部上面に突出した面をもつ。器面調整は内外面とも、ハケ目調整である。174の外面には指頭による調整が施されている。

20号住居跡（第52図）

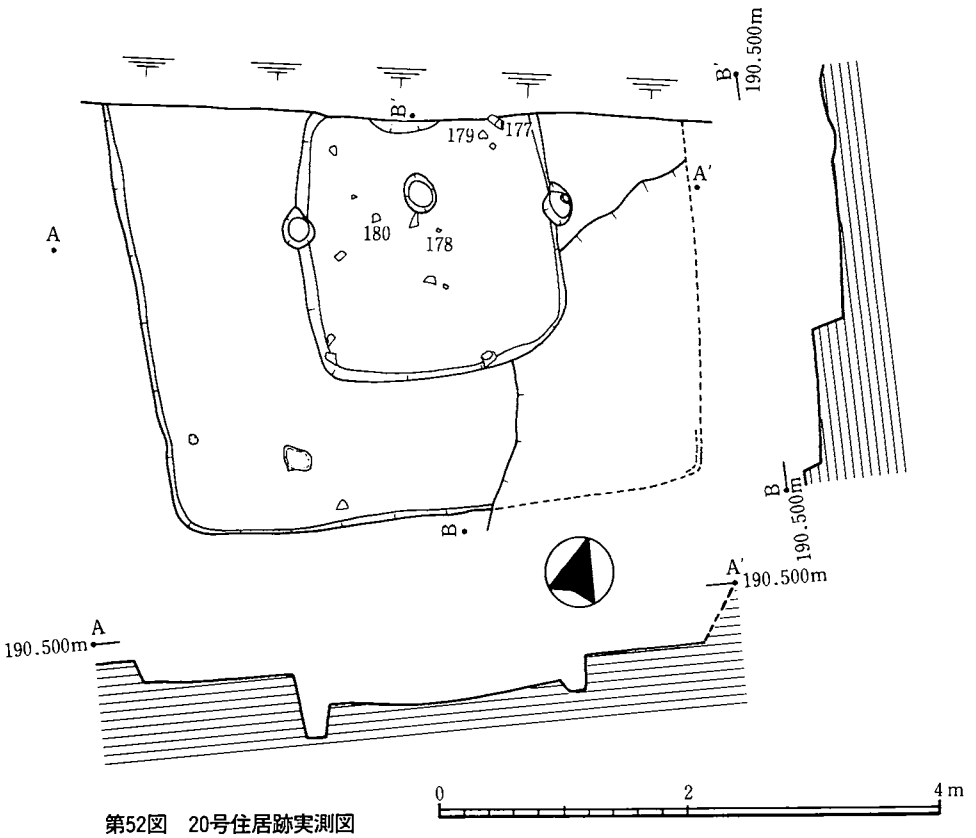
20区に位置する竪穴式住居跡である。西側が18・19号住居跡と切り合っており、新旧関係では、20号住居跡が新しい。さらに南は調査区外である。平面形態は、東西軸４ｍ50㎝（推定値）の正方形もしくは長方形であると推定される。

北と東西にベッド状遺構を設けている。南にどう延びているかは不明である。床面よりの比高差は約26㎝で、さらにそれからの壁高は東側で約18㎝である。炉はほぼ中央部に設けられており、平面形態は長軸18㎝、短軸24㎝の楕円形を呈し、深さは３㎝である。炉には焼土が確認できた。

柱穴は炉をはさみ、ベッド状遺構が立ち上がる際に、２個穿たれていた。さらに、炉の南に貯蔵穴とおもわれる堀込みの一部が確認できた。

〔**土器**〕（第53図175～183）

175は高坏形土器の脚部の一部で、坏部および下位を欠損している。脚内面の上面に張出が



第52図　20号住居跡実測図

みられる。脚部には、不定形のすかし穴が２個を対にし、３か所計６個あけられている。器面調整は内外面ともにハケ目調整が施されている。

176～178は甕形土器である。口縁部は頸部よりゆるやかに外反して開く。内面の稜線は見られない。器面調整は内外面とも、ハケ目調整の後にナデが施されている。179～181は甕形土器の脚部である。180は外反ぎみ181は内湾ぎみにのびる。器面調整は基本的にはハケ目調整であるが、179・180の内面には指頭圧痕がうかがえる。

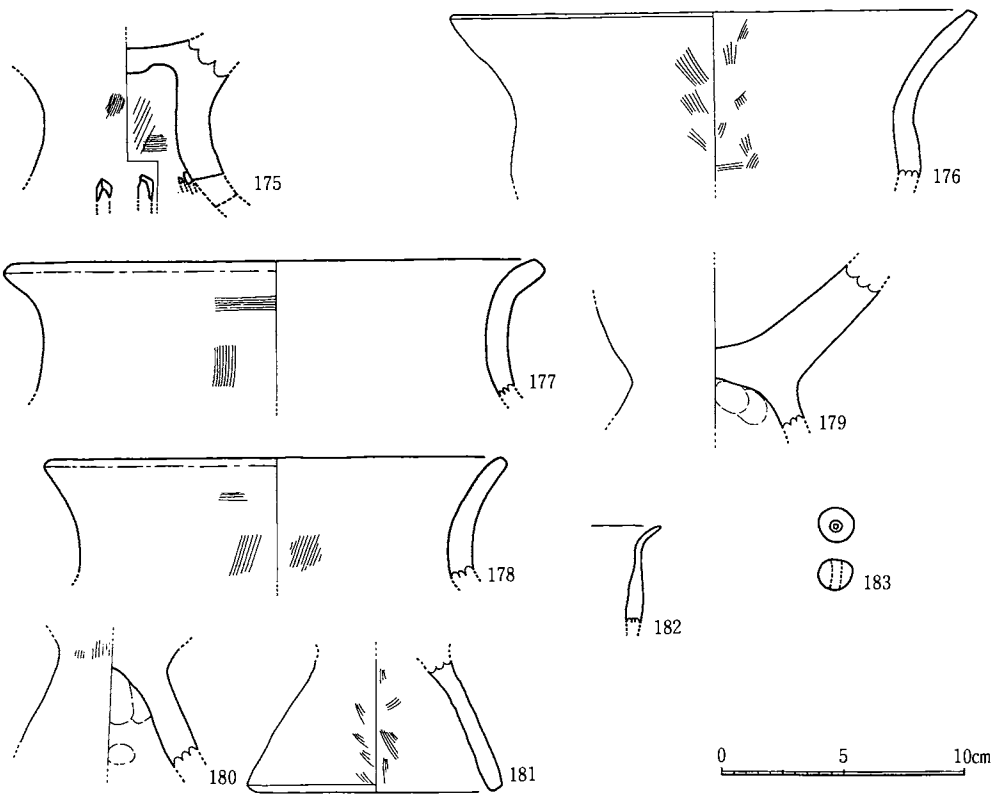
182はミニチュアの甕形土器である。183は穴径５㎜の土玉である。

21号住居跡（第54図）

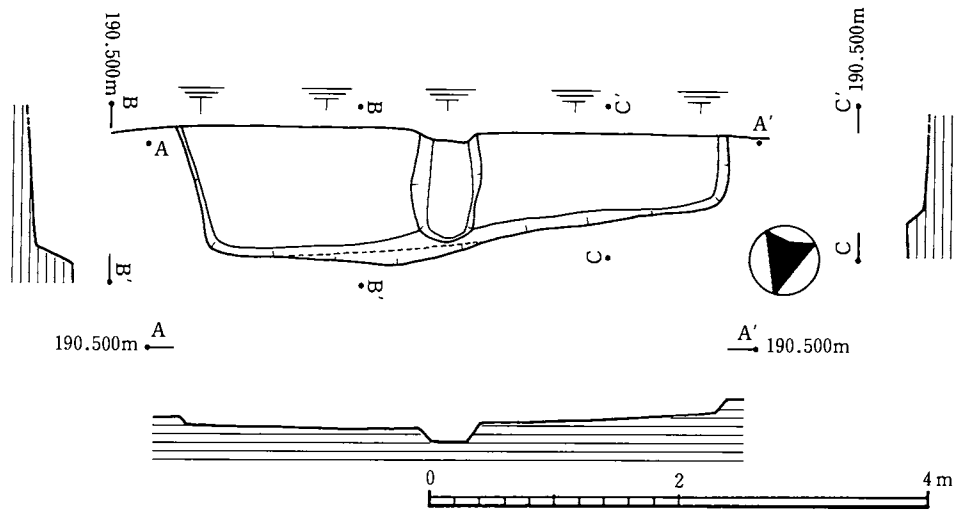
11区から12区にかけて位置する竪穴式住居跡である。南側が調査区外のため、全容は不明である。平面形態は正方形もしくは長方形で東西軸４ｍ28㎝を測る。北側にベッド状遺構をうかがうことができる。その比高差は15㎝で、ベッド状遺構からの壁高は４～24㎝である。炉および柱穴・貯蔵穴は確認できなかった。

この住居跡から１個体分の図化にたえる土器片を一括で取り上げた。石器では、打製石斧が１点（36）出土した。

〔**土器**〕（第55図184）

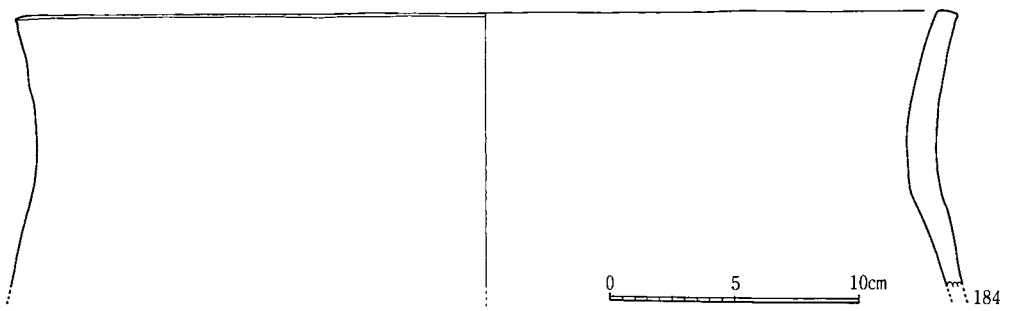


第53図　20号住居跡出土土器実測図

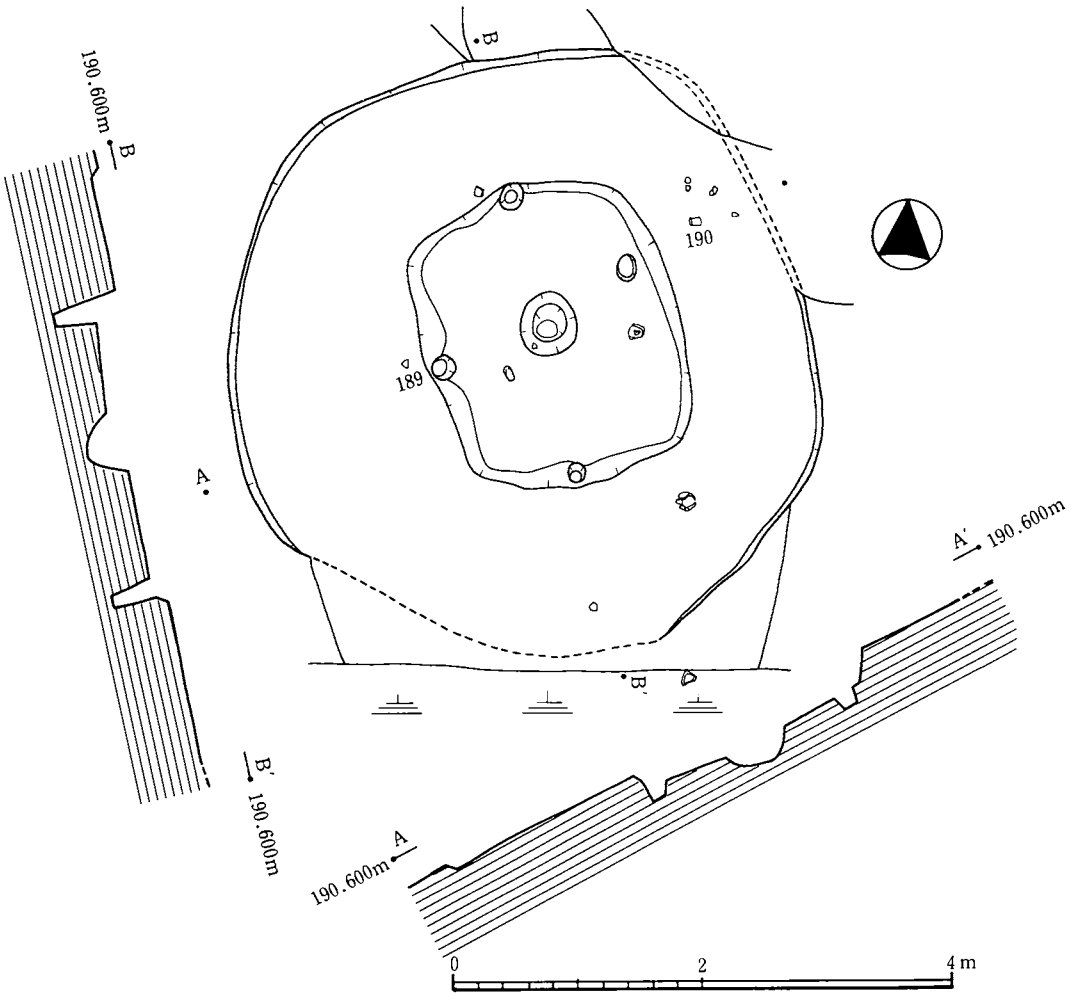


第54図　21号住居跡実測図

184は大型の甕型土器である。胴部から口縁部にかけて、ゆるやかに立ち上がる。内面には稜線はみられない。器面調整は、内外面とも剥離のため確認できない。



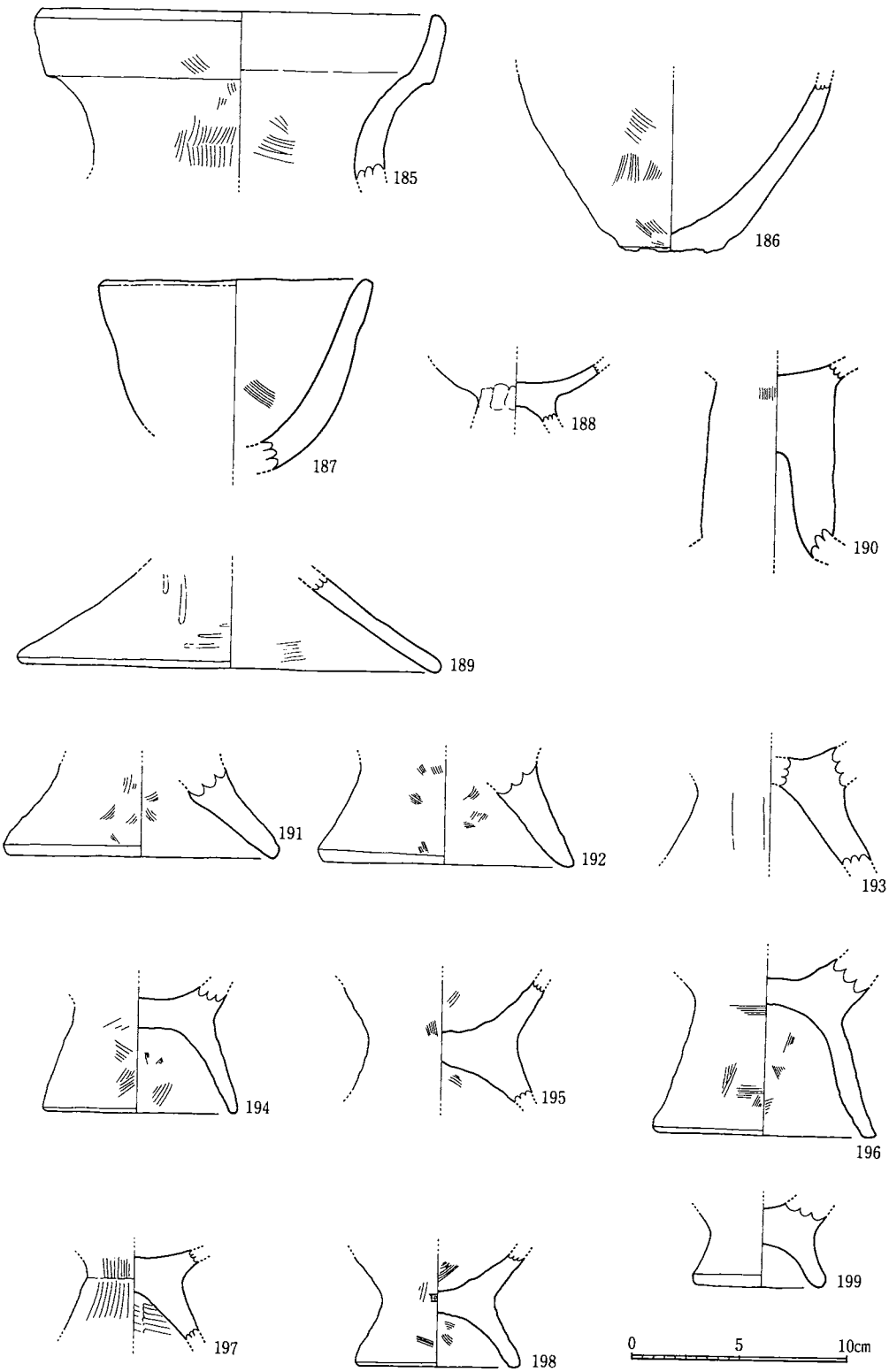
第55図　21号住居跡出土土器実測図



第56図　22号住居跡実測図

22号住居跡（第56図）

13区に位置する竪穴式住居跡である。南側は攪乱を受けているものの、平面形態は円形で、



第57図　22号住居跡出土土器実測図

直径は、約5ｍ70cmを測る。ベッド状遺構が周囲に巡り、ベッド状遺構を除く床面の平面形態は長軸2ｍ22cm、短軸1ｍ88cmを測る長方形を呈する。床面からの比高差は16cmで、さらにベッド状遺構からの壁高は8cmである。

炉はほぼ中央に設けられており、その平面形態は直径約50cm、深さ30cmの円形を呈する。柱穴は長短軸上の、ベッド状遺構の立ち上がる際に4個穿たれている。貯蔵穴は存在しなかった。

出土遺物では、土器のほか、敲石1点（124）、砥石1点（93）が出土した。

〔土器〕（第57図185～199）

185は複合口縁の壺形土器の口縁部である。頸部は外反しながら開き、口縁部で屈曲し内湾ぎみに開きながら立ち上がる。器面調整はハケ目調整である。186は壺形土器の底部である。底部は工具で切り取られた様相を呈し、平底である。外面にハケ目調整の一部がのこる。

187は鉢形土器である。丸底になるか、脚台が付くかは不明で、口縁端部はやや外反する。188も小型の脚台をもつ鉢形土器である。189は鉢形土器の脚部で広くひろがる。

190は高坏形土器の脚部である。坏部および脚の裾部を欠損し、膨らみをもたず、ほぼまっすぐにのびる。器面調整は一部にハケ目の跡が残る。

191～199は甕形土器の脚部である。やや外反してのびるもの（191～193・196・199）、内湾してのびるもの（194・198）とがある。194は内部上面に面をもつ。器面調整は基本的にハケ目調整である。

23号住居跡（第58図）

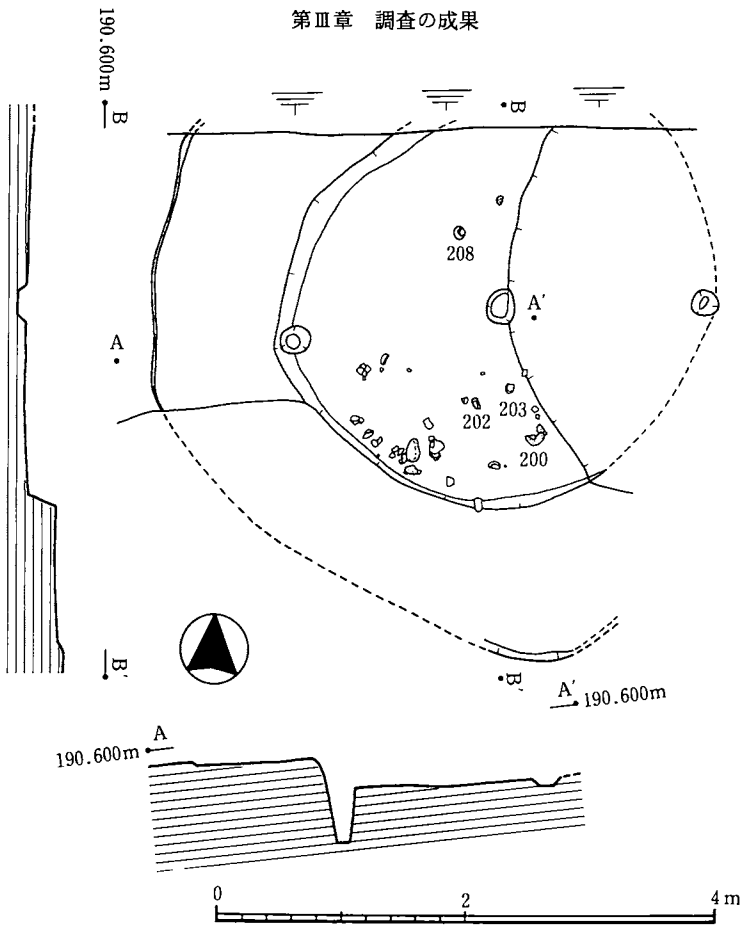
13区に位置する竪穴式住居跡である。この住居跡は21号住居跡と24号住居跡によって切られている。それに北側が調査区外にのびているため、規模は不明である。平面形態は円形である。周囲にベッド状遺構を有すると思われるが、切り合いのため一部しか残存しない。床面よりの比高差は西側で22cmである。さらにベッド状遺構よりの壁高は3cmである。

炉は中央部に設けられており、その平面形態は直径約26cm、深さ8cmの円形を呈する。柱穴は東西のベッド状遺構の際に2個穿たれている。南に存在しないため、この2個が主柱穴になるものと思われる。貯蔵穴は確認できなかった。

出土遺物でとくに注目に値するものに、炉よりやや北西よりに、小型防製鏡（1）が出土したことである。さらに石器では、石包丁が2点（51・79）、鉄器で鉄鏃が3点（4・7・9）、鉇が1点（21）出土した。

〔土器〕（第59図200～208）

200は鉢形土器である。底部は丸底で、口縁部は徐々に薄くなりながら立ち上がる。内外面とも表面が剥離しているため、器面調整は不明である。201～204は甕形土器である。胴部最大径を上位にもち、口縁部は胴部よりゆるやかに外反しながら立ち上がるもの（201～203）と、



第58図　23号住居跡実測図

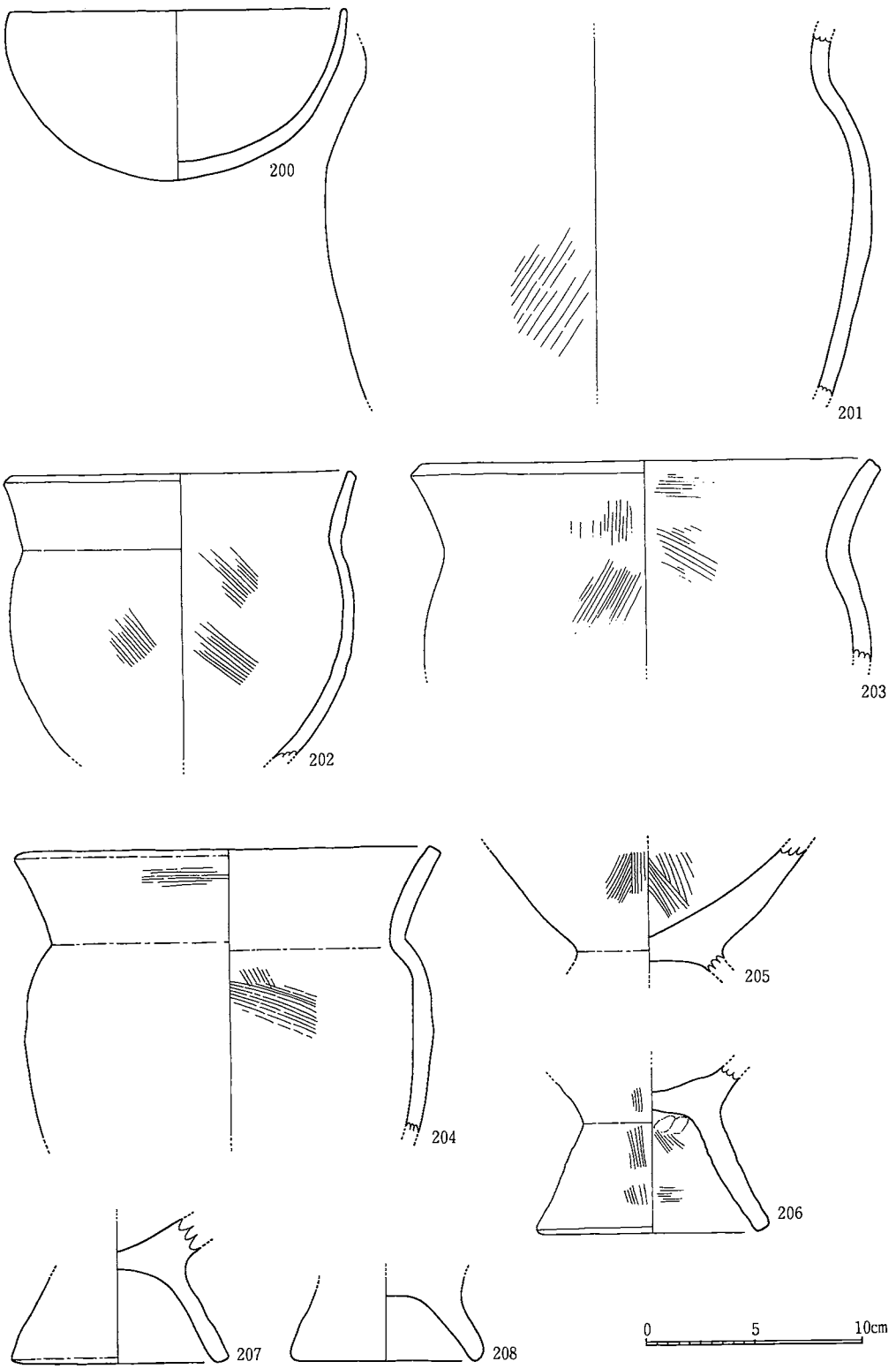
頸部が内側に屈曲しそれから外反して立ち上がるもの（204）とがある。器面調整は内外面ともハケ目調整がのこる。205～208は甕形土器の脚部である。脚が外反してのびるもの（206）と、内湾ぎみにのびるもの（207・208）とがある。器面調整は基本的に内外面ともハケ目調整であるが、表面剥離で確認できないもの（207・208）もある。

24号住居跡（第60図）

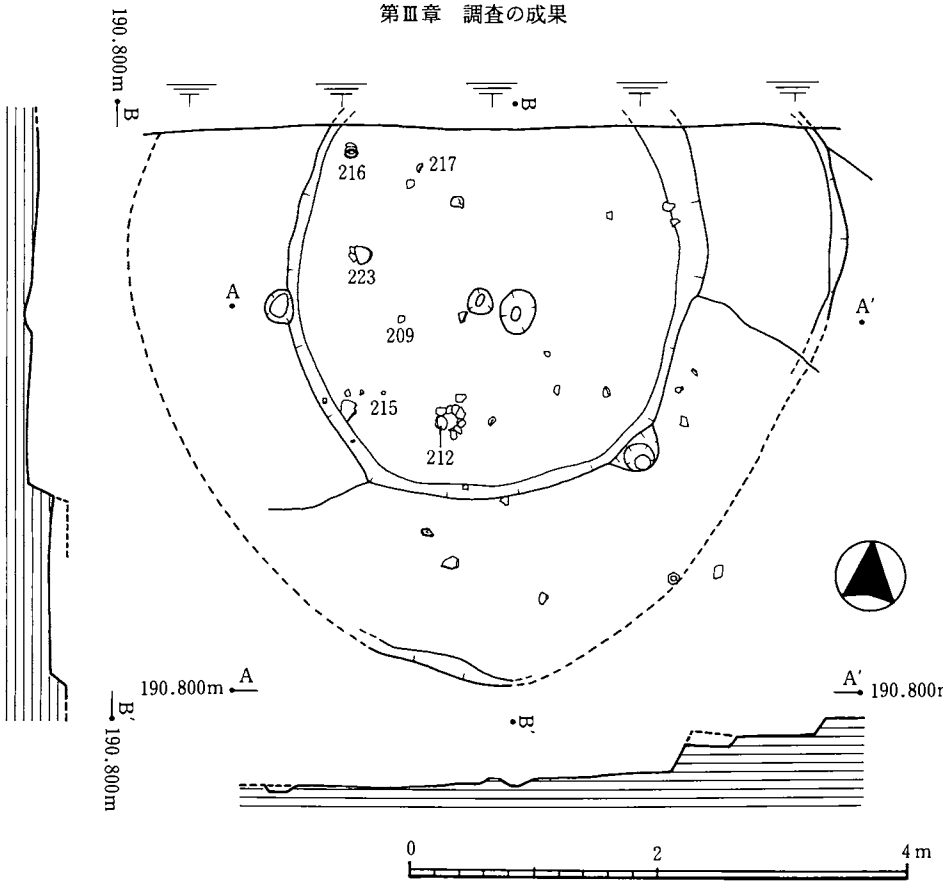
13から14区に位置する竪穴式住居跡である。この住居跡は23号・25号と重複しており、切り合い関係からみると、いちばん新しい。北側は調査区外にのびている。平面形態は円形であり、くぼみの部分とベッド状遺構の一部が東と南に残り、規模は不明である。床面との比高差は28cmで、さらに壁高は12cmである。

炉はほぼ中央に設けられており、その平面形態は長軸34cm、短軸28cmの楕円形を呈し、深さは6cmである。柱穴はベッド状遺構際に2個確認したが、さらに調査区外に存在すると思われる。貯蔵穴は確認できなかった。

出土遺物は、土器のほか石包丁が1点（82）、磨石が1点（109）出土した。



第59図　23号住居跡出土土器実測図



第60図　24号住居跡実測図

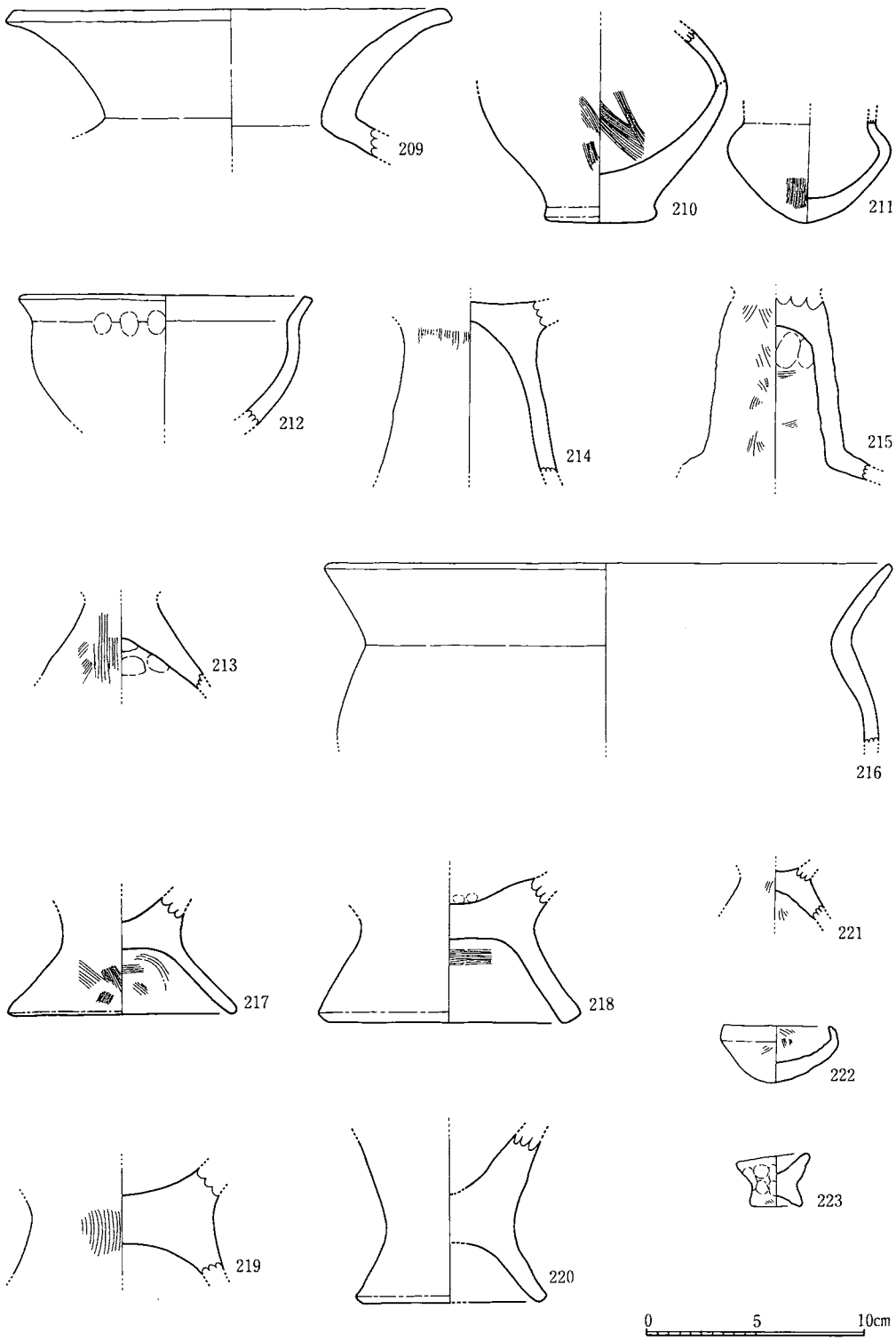
〔土器〕（第61図209～223）

209は壺形土器の口縁部である。頸部からするどく屈曲し、外反しながら大きく開く。器面調整は、器面が剥離しているため不明である。210は平底の壺形土器である。底部は作り出した平底で、丁寧な作りで、器面調整は外面は細かいハケ目、内面はハケ目の後ナデ調製を施している。211は小型の丸底土器である。底部ややとがりぎみで、胴部の上位で肩を張り、頸部は欠損している。

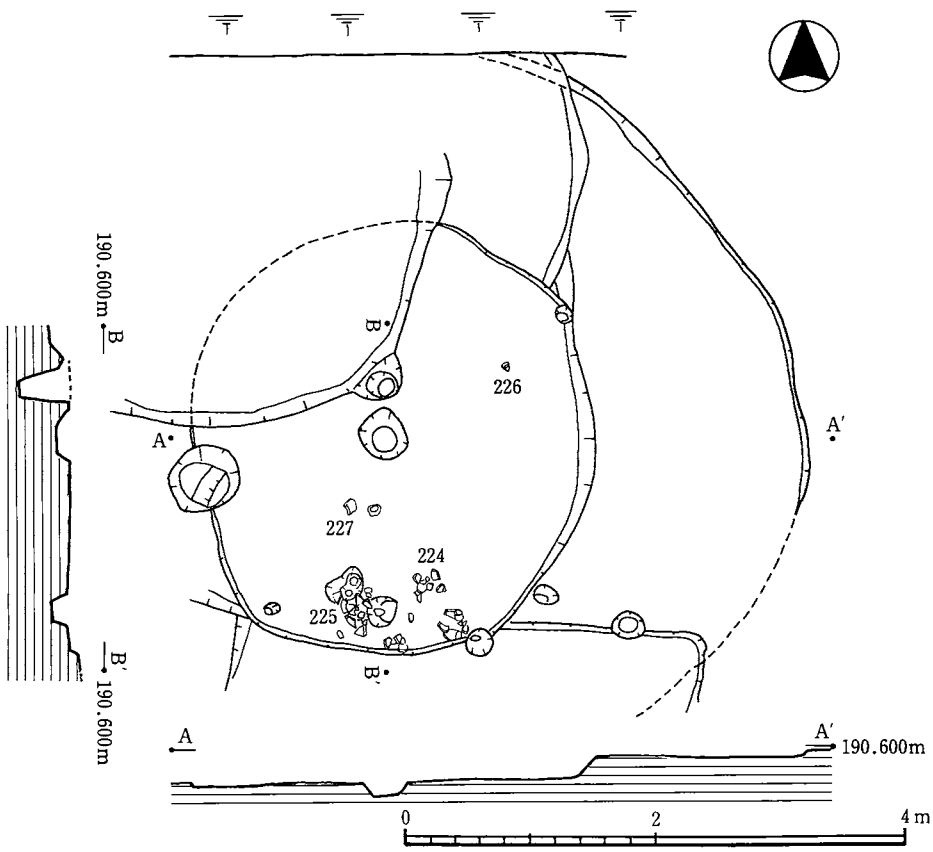
212・213は鉢形土器である。212は胴部の下位を欠損している。口縁部は胴部よりゆるやかに開く。頸部には指頭圧痕がうかがえる。213は脚部で、胴部および脚の下位を欠損している。脚はほぼ直線的に開く。外面はハケ目調整、内面は指頭による調整である。

216は甕形土器である。胴部最大径を上位にもち、口縁部は胴部よりゆるやかに直線的に開く。内面に稜線はみられない。器面調整は内外面とも器面が薄く剥離しており不明である。217～220は甕形土器の脚部である。脚はやや外反しながらのびる。217・218は内部上面に面をもっている。220は胴部がするどく立ち上がっていく。器面調整は基本的にハケ目調整である。

221は胴部と脚部の下位を欠損しているが、ミニチュアの甕形土器であろう。222は鉢形のミニチュア土器、223は手捏土器である。



第61図　24号住居跡出土土器実測図



第62図　25号住居跡実測図

25号住居跡（第62図）

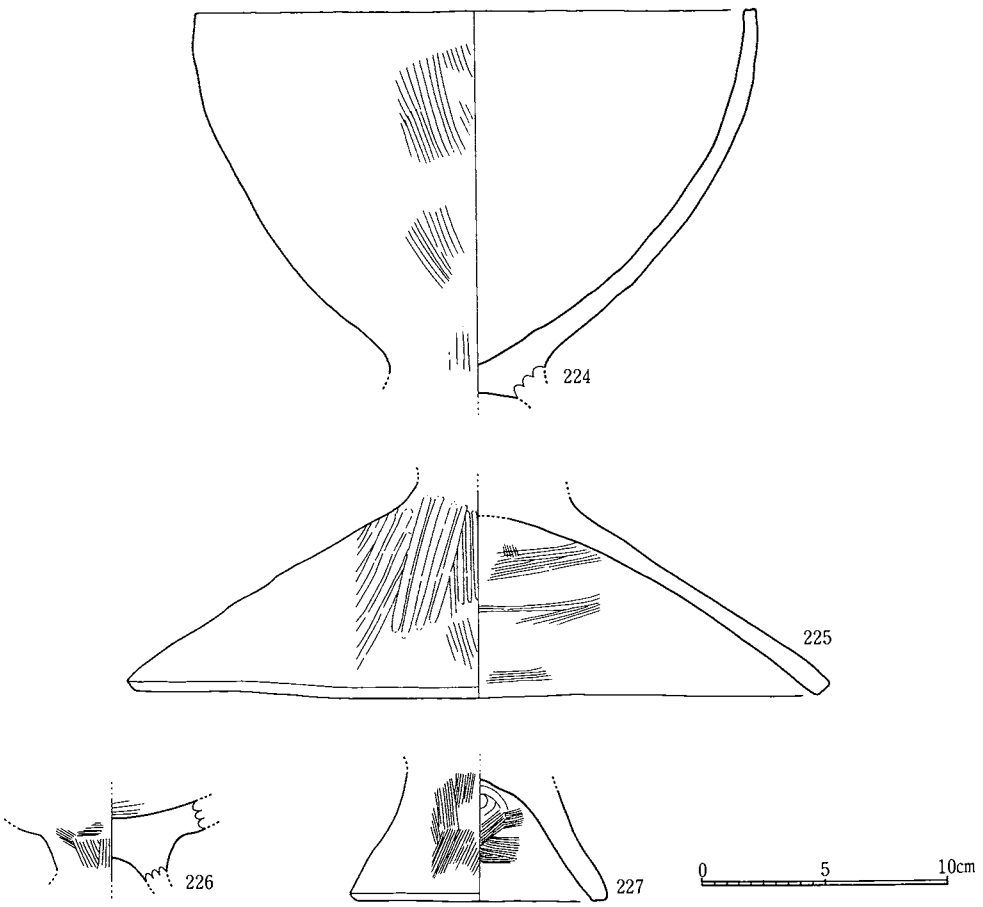
13から14区に位置する竪穴式住居跡で、24号住居跡に切られている。平面形態は円形で、東西軸で直径６ｍ72cm（推定値）を測る。周囲にベッド状遺構をめぐらし、床面よりの比高差は26cmで、さらに壁高は５cmである。

炉は中央に設けられており、その平面形態は直径38cmの円形を呈し、深さ19cmである。炉底には焼土が残っていた。柱穴は周囲に５個確認できたが、どれが住居跡に伴うかは不明である。

出土遺物は土器のほか、石器や鉄器はなかった。

〔土器〕（第63図224～227）

224は脚台つきの鉢形土器で、脚部は欠損している。胴部は口縁端部で立ち上がり、端部は平らに整形している。器面調整は剥離がひどく見づらいが、ハケ目を施したのちナデで仕上げる。225は脚台付の鉢形土器で、胴部を欠損している。脚はゆるやかな曲線で大きく開く。器面調整は内外面ともハケ目調整を施し、224とは別個体である。226も脚台付の鉢形土器で、胴部および脚の先端を欠損している。

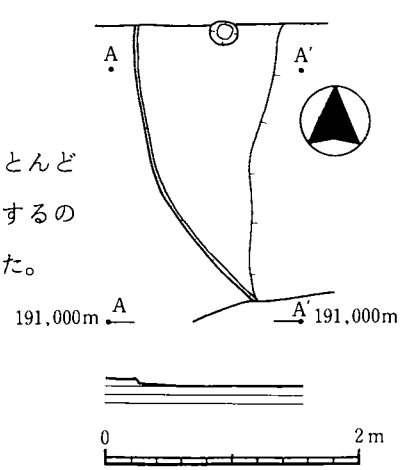


第63図　25号住居跡出土土器実測図

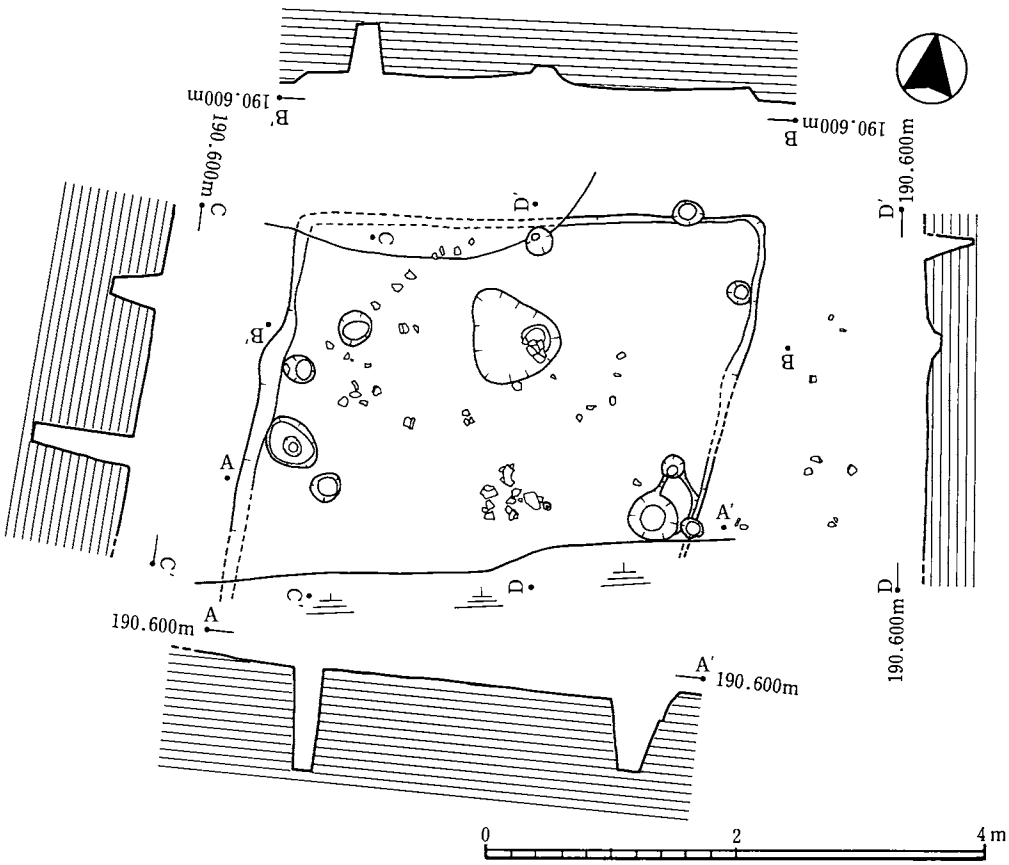
227は甕形土器の脚部である。脚はゆるやかに外反しながらのびる。器面調整は内外面ともハケ目調整を施す。

26号住居跡（第64図）

13区に位置する竪穴式住居跡で22・23号住居跡にそのほとんどを切られ、さらに北側は調査区外にのびるため、一部残存するのみで、その全容はほとんど不明である。出土遺物もなかった。



第64図　26号住居跡実測図



第65図　27号住居跡実測図

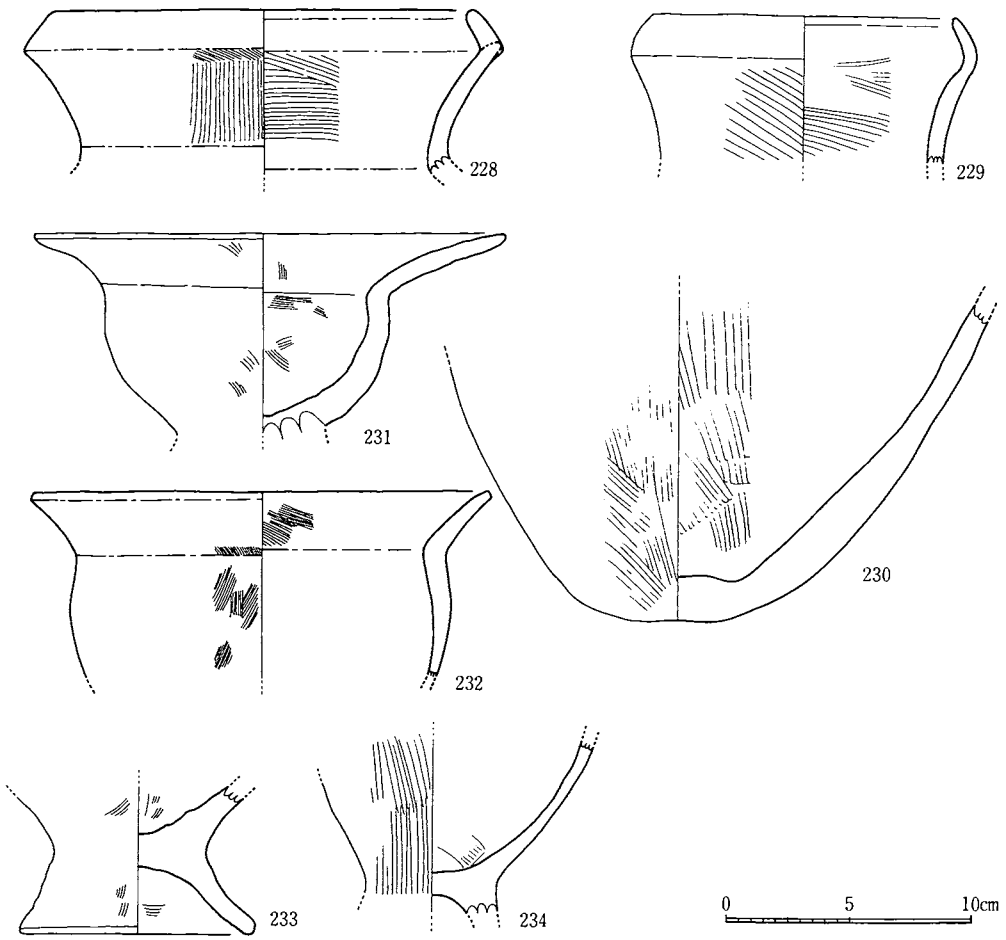
27号住居跡（第65図）

13から14区に位置する竪穴式住居跡である。北側の一部を25号住居跡によって切られており、さらに南側は調査区外にのびているため、全容は不明である。平面形態は北東部がせりだす、不整形の正方形になると推定され、東西軸３ｍ68㎝を測る。壁高は約12㎝である。ベッド状遺構が削平されている可能性もあることを付しておく。

炉は中央より北壁寄りに設けられており、その平面形態は直径約70㎝の不定型を呈し、皿状に掘られている。炉内には焼土がわずかに残っていた。柱穴は10個確認したが、南側の２個が主柱穴になるものと思われる。貯蔵穴は確認できなかった。

〔**土器**〕（第66図228～234）

228・229は複合口縁の壺形土器の口縁部である。228は頸部が外反して立ち上がり、口縁部はするどく内傾する。229は頸部外反ぎみに立ち上がり、口縁部はゆるやかに内傾する。器面調整は内外面ともハケ目調整である。230は壺形土器の底部で、やや平底を呈する。器面調整



第66図　27号住居跡出土土器実測図

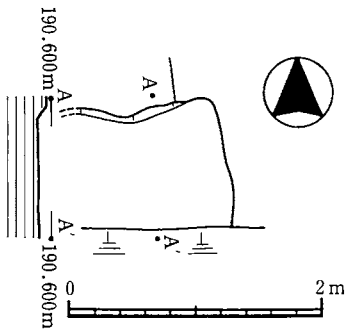
は内外面ともハケ目調整である。

231は脚台付の鉢形土器で、脚部を欠損している。胴部はこぶりで、口縁部はするどく屈曲しやや外反して開く。器面調整は内外面ともハケ目調整である。

232は甕形土器で、胴部最大径を上位にもつ。口縁部はやや屈曲して開く。頸部の稜線はわずかにうかがえる。器面調整は内外面ともハケ目調整である。。233・234は甕形土器の脚部である。233は外反してのびる。234は小型で、器面調整は内外面ともハケ目調整である。

28号住居跡（第67図）

14区に位置する竪穴式住居跡で、大半を27号住居跡によって切られ、さらに南側が調査区外にのびているため、その全容はほとんど不明である。かろうじて残る北側の壁高は8㎝で、平面形態は正方形か長方形になるであろう。遺物の出土もなかった。

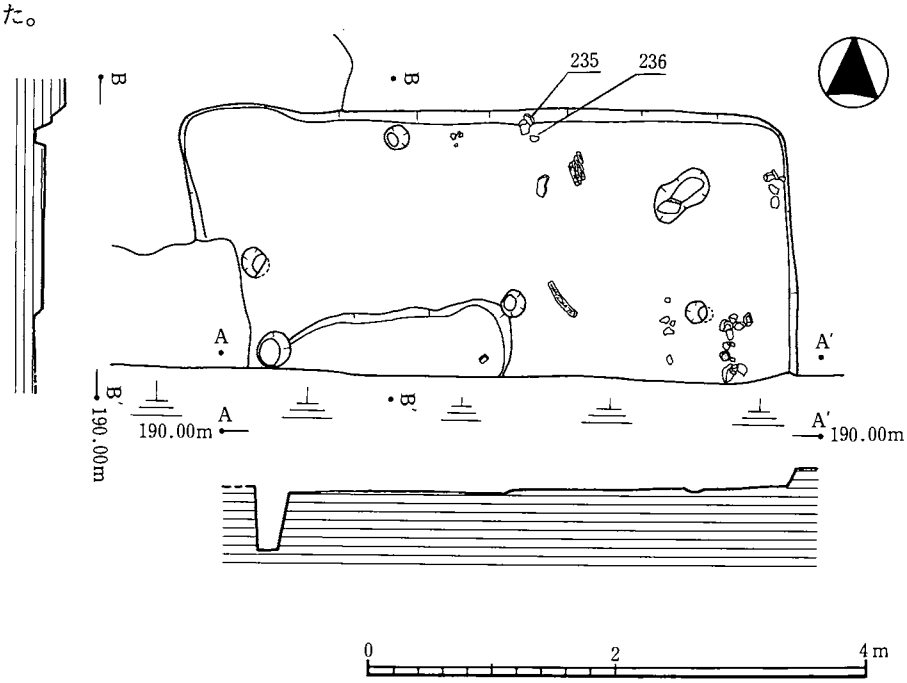


第67図　28号住居跡実測図

29号住居跡（第68図）

14区に位置する竪穴式住居跡である。西側の一部を28号住居跡に切られ、さらに南側は調査区外にのびているため、その全容は不明である。平面形態は長方形と推定され、東西軸4ｍ80㎝を測る。北側と西側にベッド状遺構を設けており、それがどうまわるかは不明である。床面よりの比高差は8㎝で、さらに壁高は11～15㎝である。この住居跡にともなう柱穴および貯蔵穴は不明である。

ベッド状遺構から炭化物が2ヶ所で確認された。出土遺物は土器のほか、鉄鏃が1点（3）出土した。



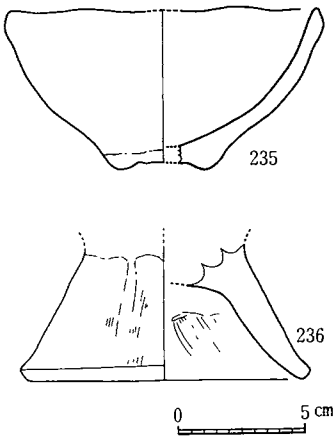
第68図　29号住居跡実測図

〔土器〕（第69図235～236）

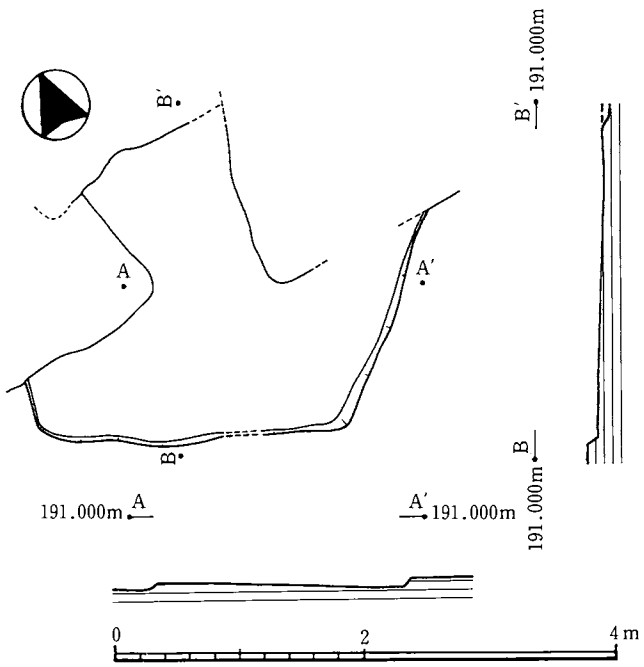
235は鉢形土器である。脚部をわずかではあるが、つまみ出している。胴部はゆるやかに立ち上がり、端部ではつまみ上げたあとがうかがえ、口縁部は波うっている。器面調整はナデ調整を施す。236は甕形土器の脚部である。脚はゆるやかに外反してのびる。器面調整は内外面ともハケ目調整である。

30号住居跡（第70図）

14区に位置する竪穴式住居跡である。この住居跡の大半を27・28・29・号住居跡に切られているため、全容は不明である。壁高は北側で10㎝である。柱穴・炉・貯蔵穴等は確認できず、

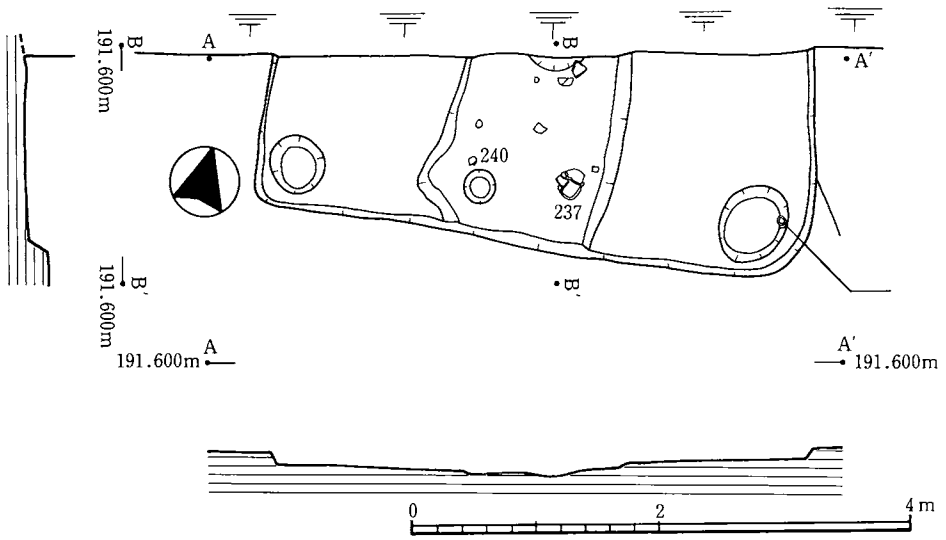


第69図　29号住居跡出土土器実測図



第70図　30号住居跡実測図

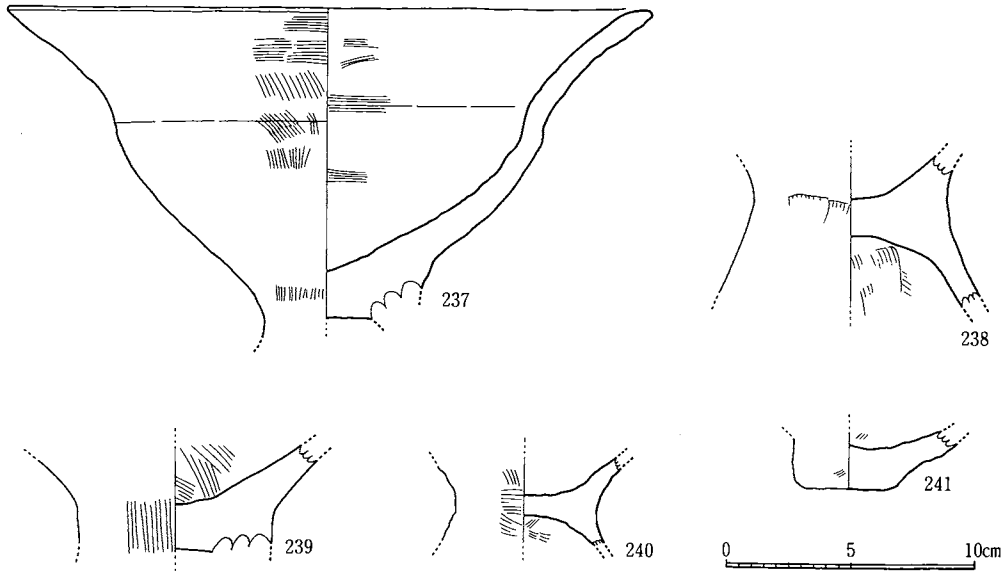
出土遺物もなかった。



第71図　31号住居跡実測図

31号住居跡（第71図）

14区に位置する竪穴式住居跡である。北側約半分が調査区外にのびている。平面形態は長方形と推定され、その規模は東西軸で４ｍ36cmを測る。東西にベッド状遺構が設けられているが、調査区外でどういう形態になるかは不明である。床面からの比高差は５cmで、さらにそれから



第72図　31号住居跡出土土器実測図

の壁高は9㎝である。

炉の一部がかろうじてうかがえる。平面形態は円形になるであろう。ベッド状遺構の南西部と南東部のコーナー部分にある大型の柱穴は、この住居跡に伴うものかどうかは不明である。出土遺物は、土器のほかはなかった。

〔土器〕（第72図237～241）

237は高坏形土器で、脚部は欠損している。坏部は深く、口縁部は外反しながら立ち上がりぎみに開く。器面調整は内外面ともハケ目調整を施す。238～240は甕形土器の脚部である。238は直線的に、240はやや外反しながらのびる。239は脚の内面上部に面をもっている。

241はミニチュアの壺形土器で、平底である。器形は、かなりいびつになっている。

32・33号住居跡（第73図）

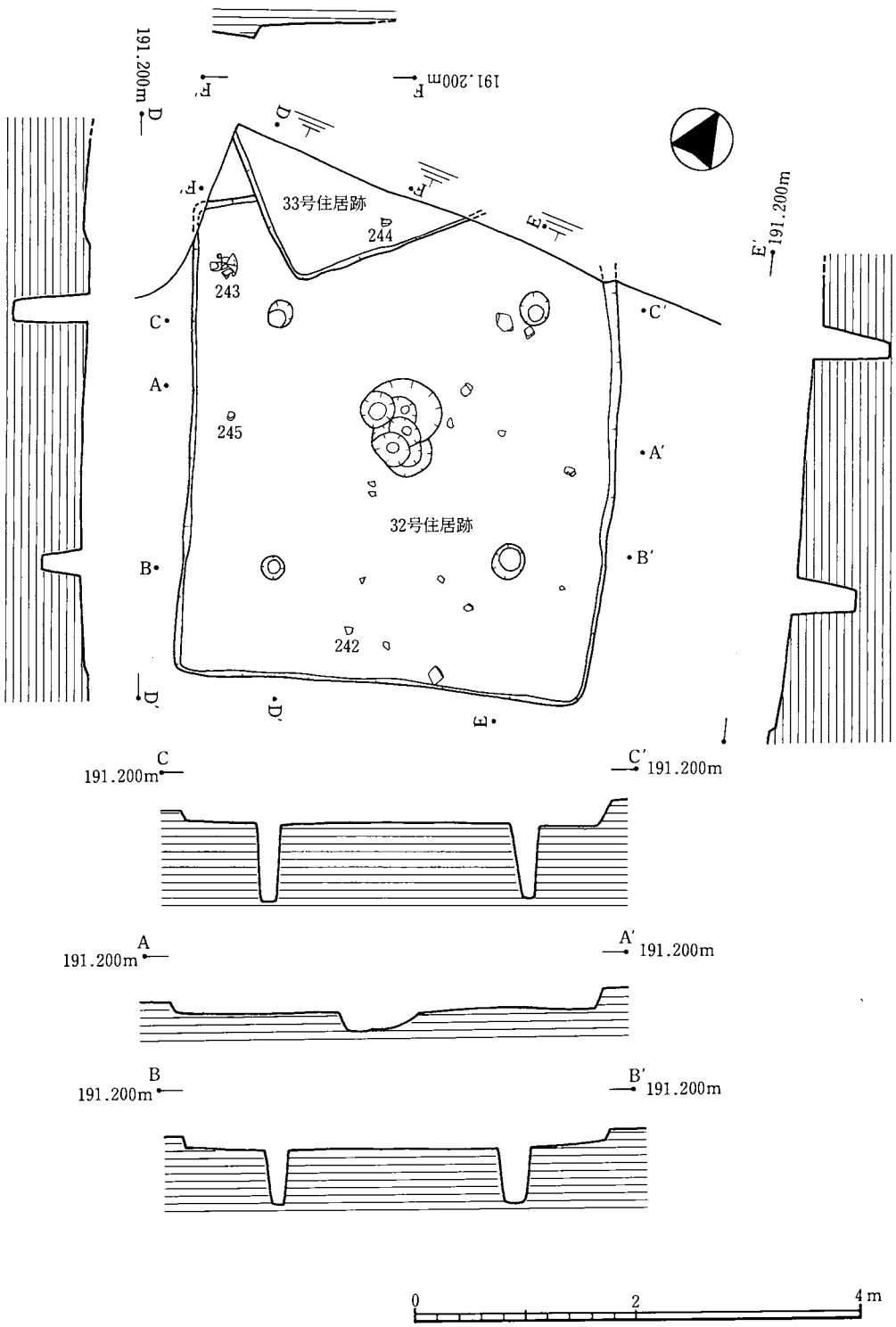
15区に位置する竪穴式住居跡で切り合い関係をもち、32号住居跡は33号住居跡を切っているこの住居跡はほとんどが調査区外にあるため、ほとんどが不明である。

33号住居跡の平面形態は長方形で、東西軸3ｍ86㎝、南北軸4ｍ22㎝を測る。壁高は3～17㎝であり、ベッド状遺構はもっていない。炉はほぼ中央に設けられており、その平面形態は不定形である。柱穴は炉を中心に等間隔に4個穿たれている。貯蔵穴は設けられていない。

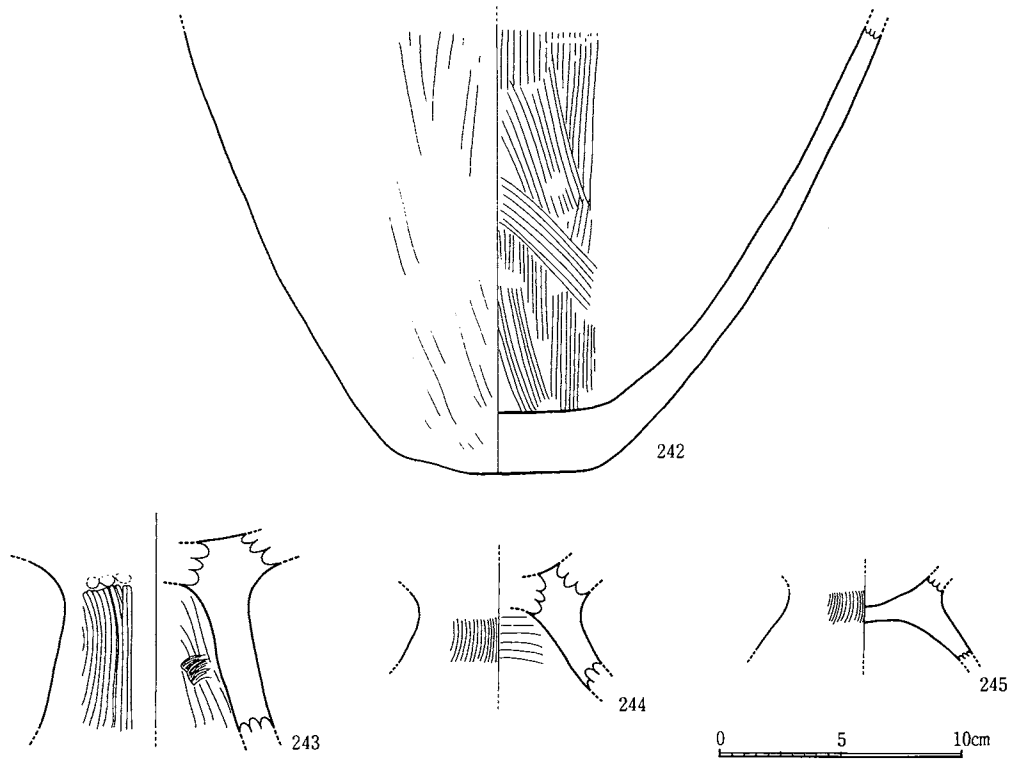
出土遺物は土器のほかに、打製石斧が1点（33）出土した。

〔土器〕（第74図242～245）

242は壺形土器である。胴部より上位は欠損している。底部は平底で、胴部は長胴ぎみであ



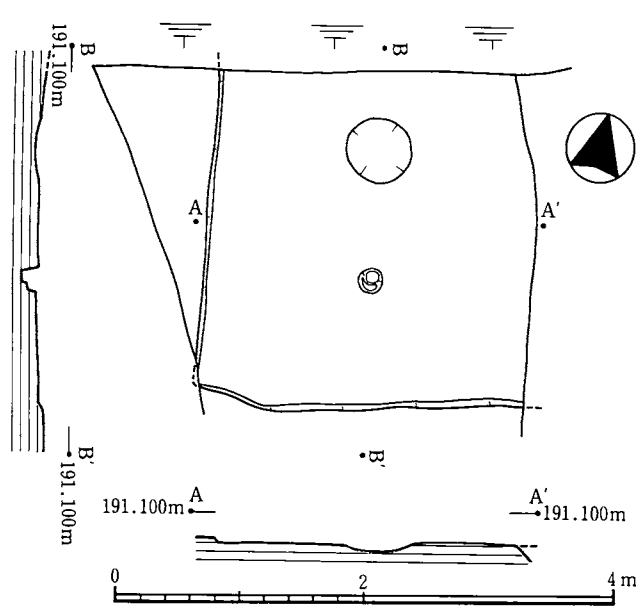
第73図　32・33号住居跡実測図



第74図　33号住居跡出土土器実測図

る器面調整は内外面ともハケ目調整である。243は高坏形土器で、坏部および脚部の下位を欠損している。脚は直線的にやや開きぎみにのびる。器面調整は内外面ともハケ目調整であるが外面の上位に指頭圧痕がうかがえる。

244・245は甕形土器の脚部である。脚は244は外反ぎみにのび、245はやや内湾ぎみにのびる。



第75図　34号住居跡実測図

34号住居跡（第75図）

15区に位置する竪穴式住居跡で、南西部のコーナー部分を33号住居跡に、東側の部分を溝状

遺構によって切られており、さらに北側が調査区外にのびている。平面形態は不明であるが、柱穴と炉の位置から、長方形を呈すると推定される。壁高は４cmとひじょうに浅く、ベッド状遺構は設けていない。

炉は住居跡の中央部に設けているものと思われ、その平面形態は直径約32cmの円形を呈し、その深さは５cmと浅く、皿状に掘られていた。柱穴は炉の南側約１ｍのところに１個が確認できた。もう１個は調査区外に存在するものと思われる。貯蔵穴は確認できなかった。

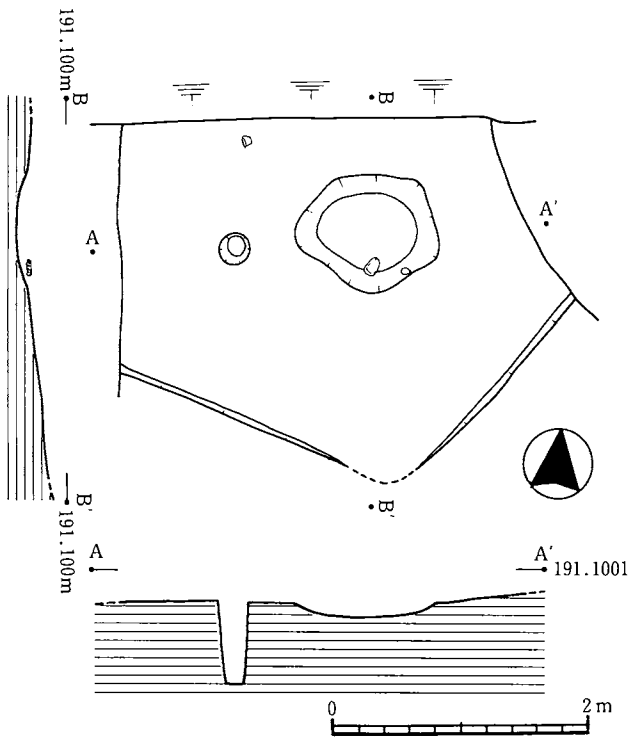
35号住居跡（第76図）

15から16区にかけて位置する竪穴式住居跡で、西側を溝状遺構に、東側を36号住居跡に切られており、さらに北側は調査区外にのびている。平面形態は不明である。炉の平面は不定形で長軸１ｍ16cmと大きく、皿状に堀られており、その炉底には焼土がわずかに残っていた。柱穴は炉の西側に１個、36号に切られた部分に１個、計２個を確認したが、この住居跡にともなうものかどうかは不明である。

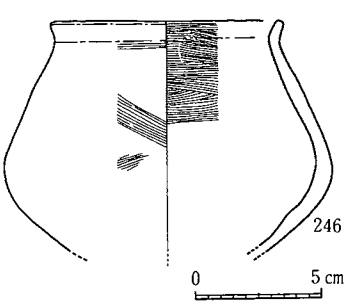
出土遺物は、わずかに土器が出土しただけである

〔土器〕（第77図246）

246は壺形土器である。胴部はかなり横に張り胴部から頸部にかけて直線的に移行し、頸部は彎曲し外に開く短い口縁部をもつ。器面調整は内外面とも細かいハケ目調整が施されている



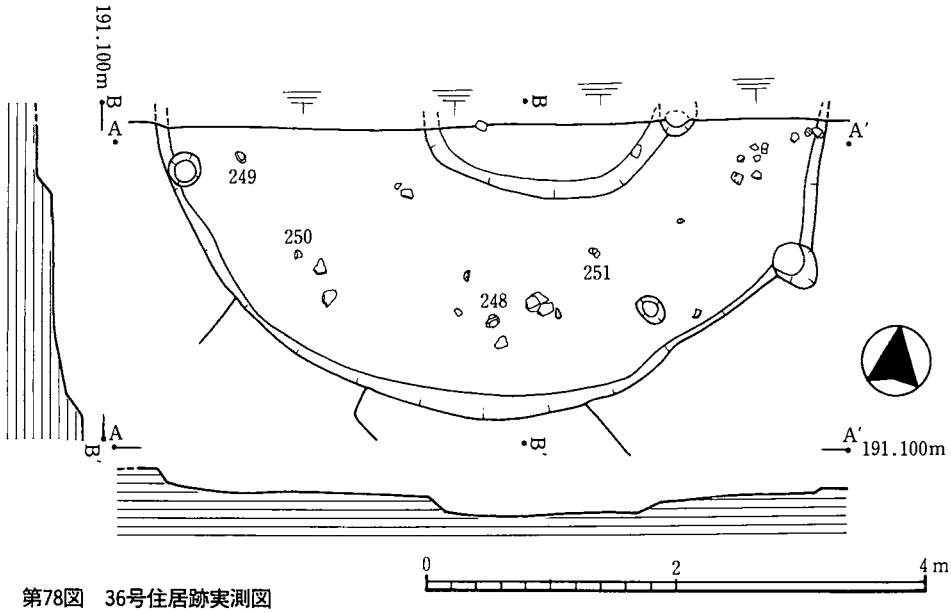
第76図　35号住居跡実測図



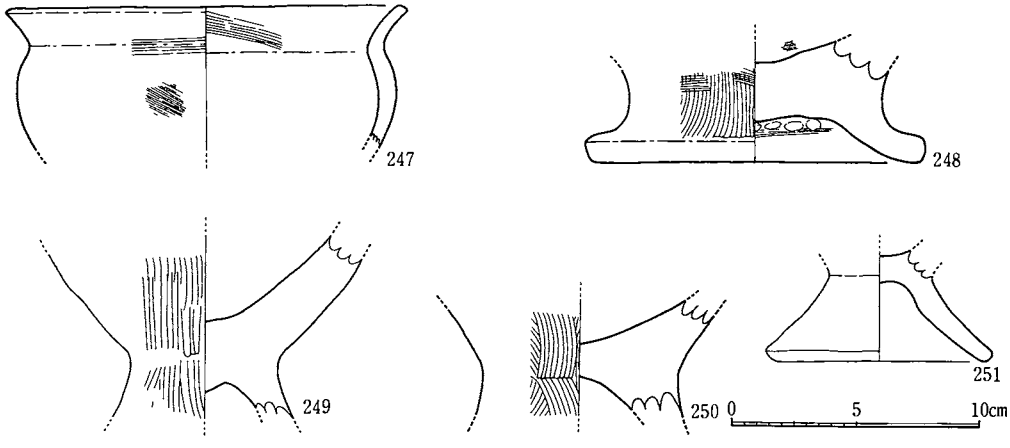
第77図　35号住居跡出土土器実測図

36号住居跡（第78図）

16区に位置する竪穴式住居跡である。北側半分以上が調査区外にのびるが、その平面形態は円形を呈し、推定値ではあるが東西軸で直径約５ｍ50cmを測る。周囲にベッド状遺構を有し、その比高差は11cmである。さらにベッド状遺構からの壁高は、切り合い関係のない南西部で20cmを測る。



第78図　36号住居跡実測図



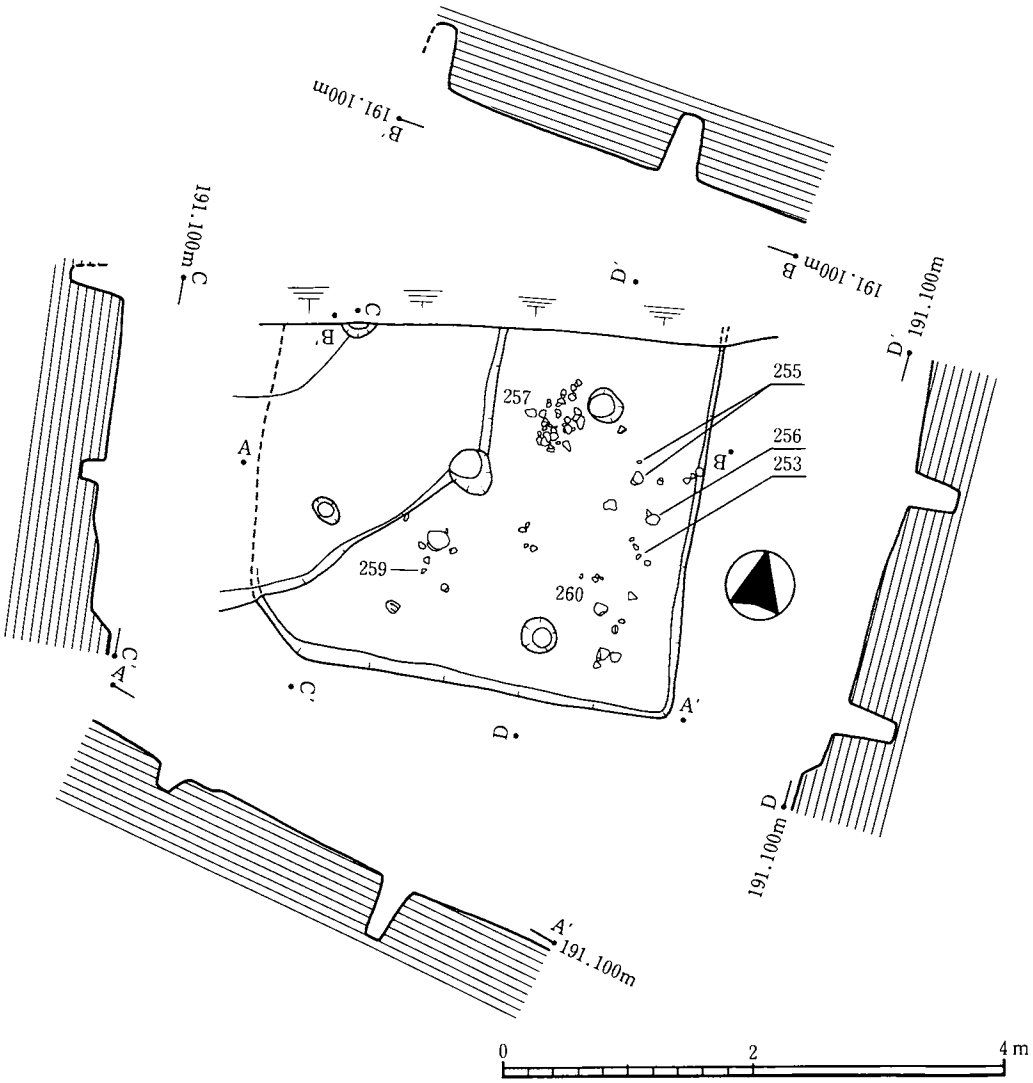
第79図　36号住居跡出土土器実測図

柱穴はベッド状遺構が立ち上がる際に、1個がかろうじてうかがわれるが、36号住居跡のものの可能性もある。炉は調査区外に存在するものと思われる。

出土遺物は、土器のほかに石包丁が1点（37）、敲石が1点（118）出土した。

〔土器〕（第79図247～251）

247は鉢形土器で胴部の下位を欠損している。胴部は上位に最大径をもち、口縁部は頸部よりゆるやかに外反して開く。器面調整は内外面ともハケ目調整の後ナデ調整を施している。248は甕形土器の脚部である。脚はするどく外反して短く開く。器面調整はハケ目で、内面上部には指頭圧痕が観察できた。249～251も甕形土器の脚部である。脚は外反しながらのびる。器面調整は、外器面はハケ目、内器面はナデ調整を施す。249の内面の上部は突出する。



第80図　37号住居跡実測図

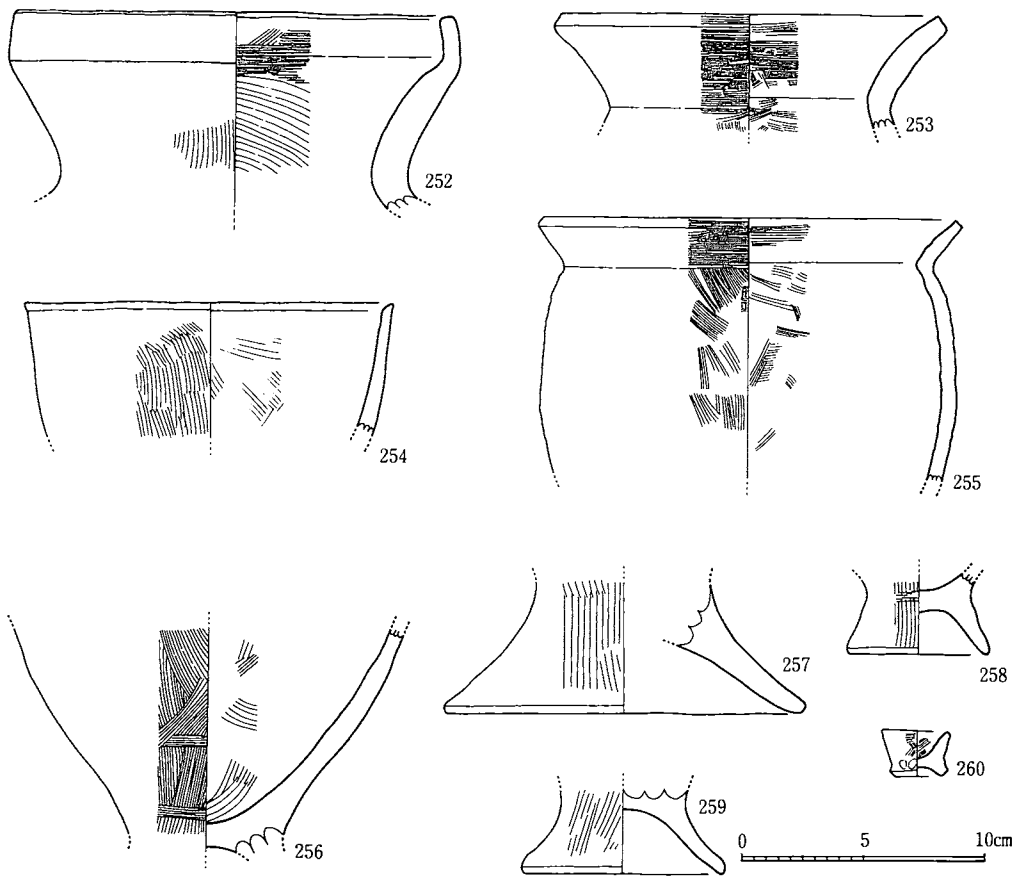
37号住居跡（第80図）

16区に位置する竪穴式住居跡である。西側を36号住居跡によって切られており、さらに北側は調査区外にのびている。平面形態は正方形と推定され、東西軸３ｍ46cmを測る。壁高は南側で12cmである。ベッド状遺構は設けられていない。

炉は36号住居跡によって一部を切られているが、平面形態は短軸34cmの楕円形で、深さは８cmである。柱穴は炉より東側に２個、36号住居跡内に２個存在し、４本柱である。貯蔵穴は確認できなかった。

出土遺物は、土器のほかに石包丁が４点（41・58・61・74）出土した。

〔**土器**〕（第81図252～260）



第81図　37号住居跡出土土器実測図

252は複合口縁の壺形土器で、胴部は欠損している。頸部は外反して立ち上がり、口縁部は急に薄くなり内傾する。器面調整は内外面ともハケ目調整である。253は素口縁の壺形土器で胴部を欠損する。口縁部は外反して開く。器面調整は内外面とも、細かいハケ目調整である。

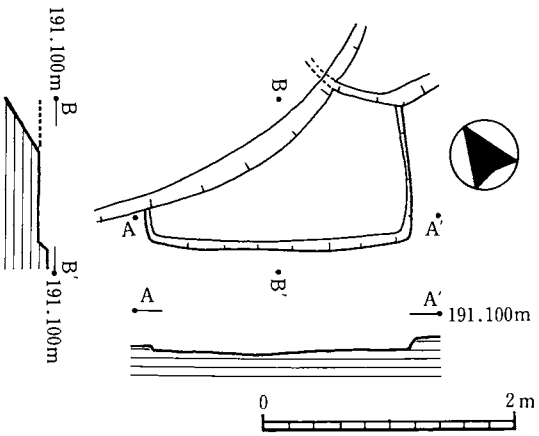
254は鉢形土器で、胴部の下位を欠損する。口縁部に至ってやや外反する。器面調整は内外面ともハケ目調整である。

255～259は甕形土器である。255は胴部の下位を欠損しており、胴部最大径は中心よりやや上位を位置し、口縁部は直線的に開く。内面の稜線ははっきりしている。256は胴の上部と脚部を欠損している。257・258・259は脚部のみで、脚は外反して開く。器面調整は基本的に内外面ともハケ目調整である。

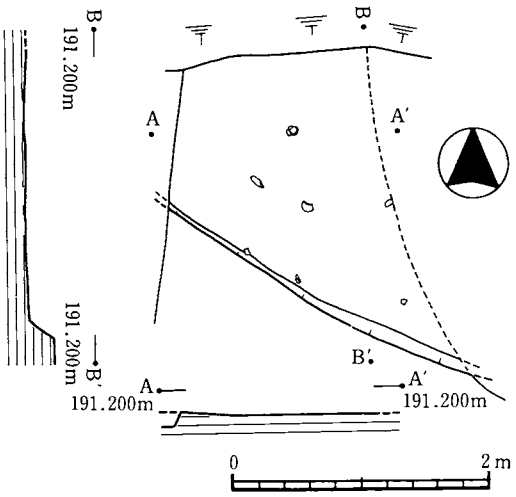
260は鉢形の手捏土器である。

38号住居跡（第82図）

16区に位置する小型の竪穴式住居跡で、36・37号住居跡によって切られている。全容は不明



第82図　38号住居跡実測図



第83図　39号住居跡実測図

だが、平面形態は正方形もしくは長方形で、残存部分で一辺は２ｍ２㎝を測る。壁高は８㎝である。柱穴および炉は確認できなかった。遺物の出土もなかった。

39号住居跡（第83図）

16区に位置する竪穴式住居跡で、37・40住居跡によって切られており、さらに北側は調査区外のため、その全容は不明である。壁高は残存部分で20㎝である。炉および柱穴は確認できなかった。遺物は土器が数点出土したが、図化にたえられるものはなかった。

40号住居跡（第84図）

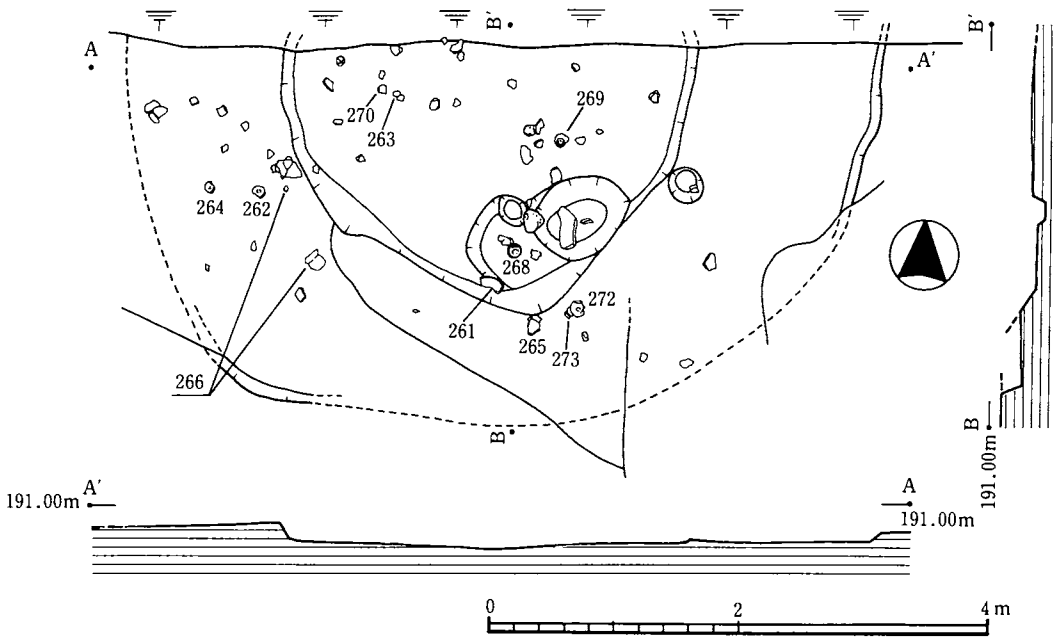
17区に位置する竪穴式住居跡である。この区には多数の住居跡が重複していたため、壁の立ち上がりが一部確認できなかったが、この住居跡が一番新しい。北側半分は、調査区外にのびている。平面形態は円形で、推定ではあるが、直径６m10cmを測る。周囲にはベッド状遺構がめぐっており、床面からの比高差は西側で12～14cm、さらにベッド状遺構よりの壁高は残存している南側で16cmである。

炉は調査区外に存在するであろう。柱穴は１個確認したが、あとは調査区外にあるものと思われ、何本柱になるかは不明である。南側のベッド状遺構の立ち上がり際に貯蔵穴が設けられていた。その平面形態は不定形を呈し、２段堀りで深さ６cm、さらにそれより７cmである。

出土遺物は土器のほかに、石包丁が１点（59）、砥石が１点（83）磨石が１点（101）出土した。

〔土器〕（第85図261～274）

261は複合口縁の壺形土器で、胴部は欠損している。頸部は外反して短く開き、口縁部は垂直に立ち上がる。器面調整はナデ仕上げで、内面端部に一部ハケ目が残る。262は壺形土器の



第84図　40号住居跡実測図

底部で、平底を呈する。

263は鉢形土器である。胴部の下位を欠損しており、脚が付くかどうかは不明である。胴部はゆるやかに立ち上がり、口縁部は短く外反して開く。器面調整はナデ調整である。

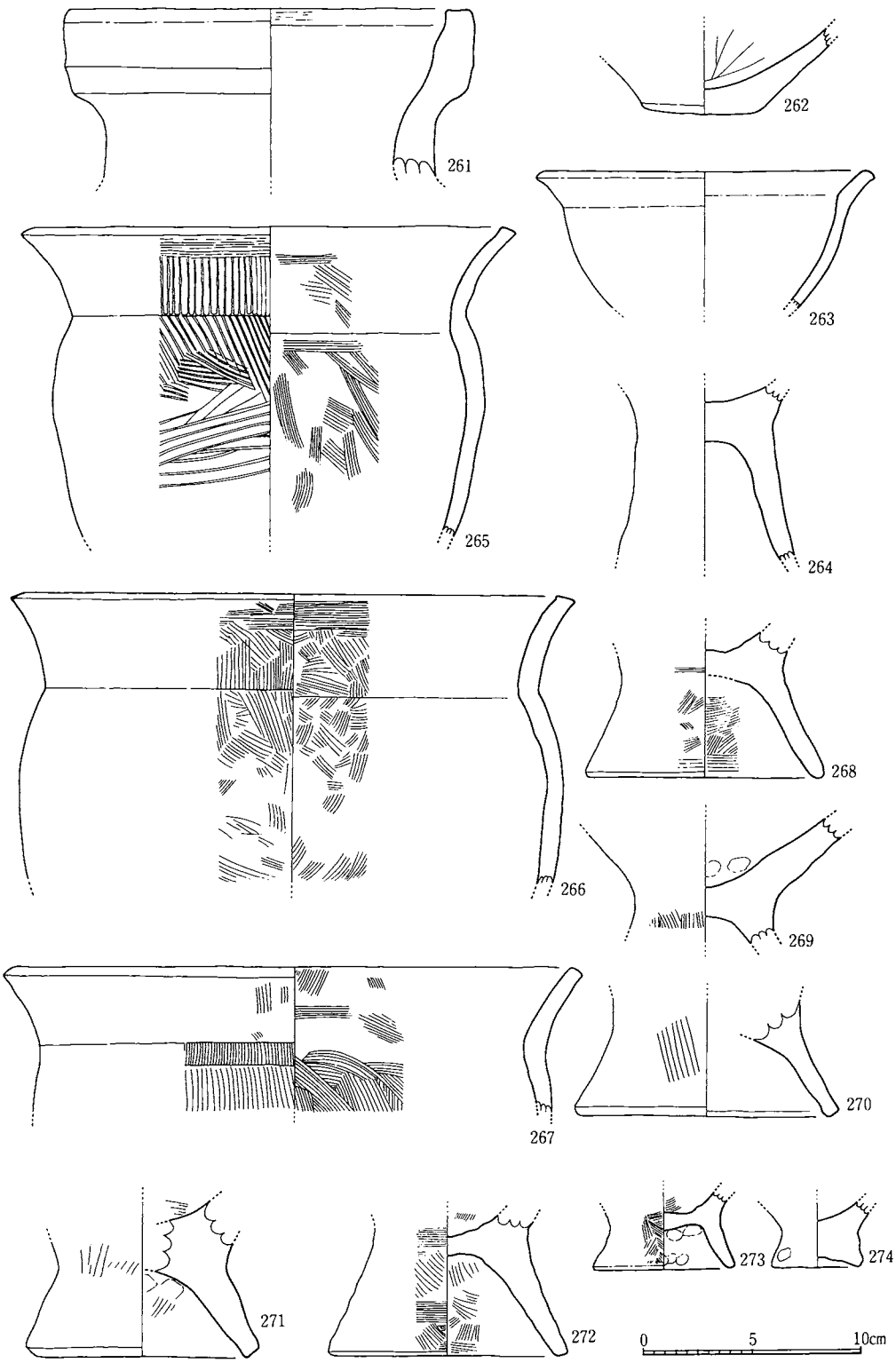
264高坏形土器で、坏部と裾部が欠損している。脚はやや外反して裾部にいたる。器面は剥離しており、調整は不明である。

265～274は甕形土器である。265～267は胴部最大径を上位にもち、口縁部は外反して開き、内面には稜線は見られない。器面調整は、内外面ともハケ目調整である。口縁部を下から上へ刷毛でかき上げている。268～273は甕形土器の脚部である。脚が外反してのびるもの（268・273）と、直線的にのびるもの（270・272・271）、不明（269）とがある。器面調整は基本的にハケ目調整である。273は内部上面に膨らみをもつ。274は手捏土器である。

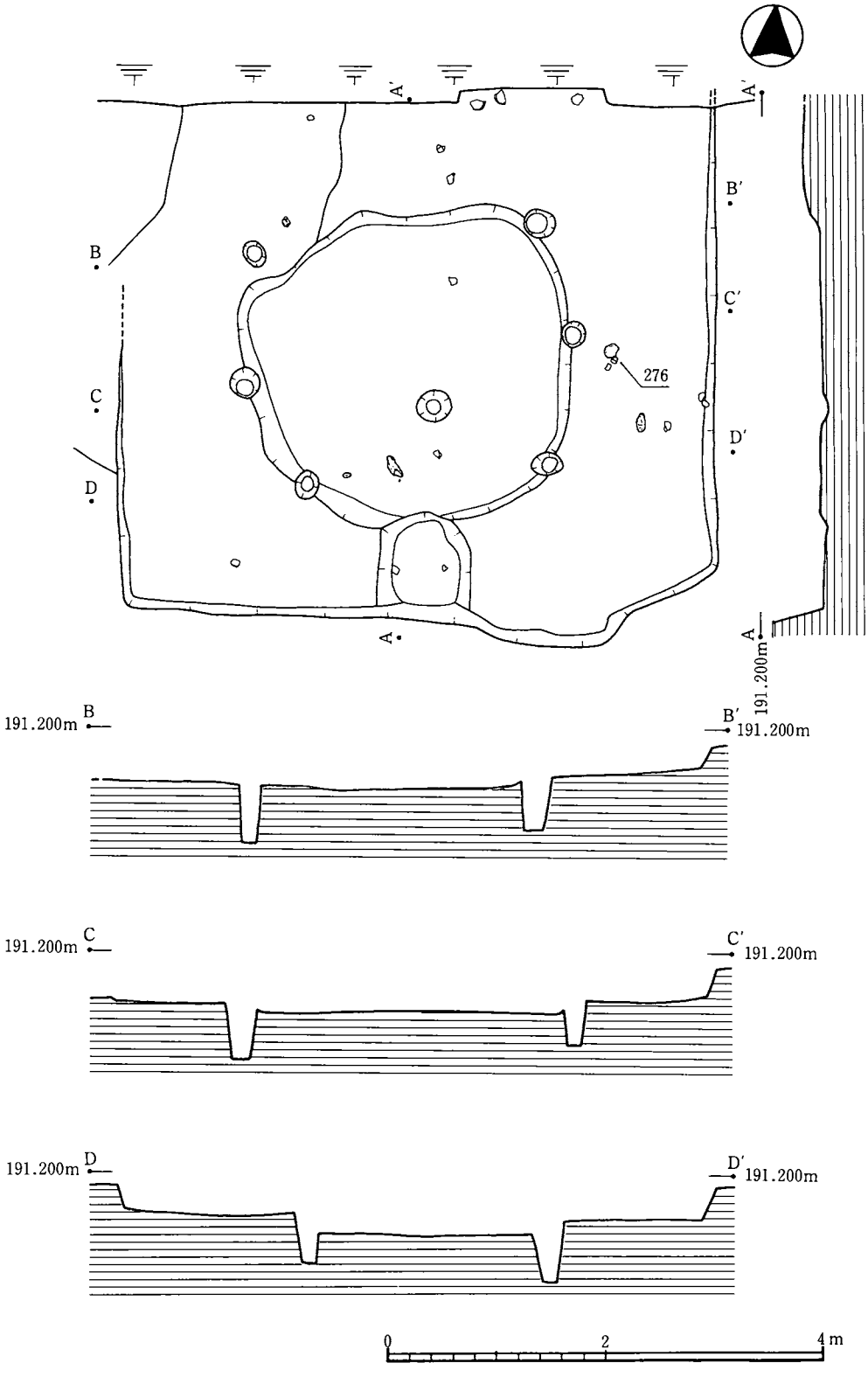
41号住居跡（第86図）

17区に位置する竪穴式住居跡である。北西部を40号住居跡に切られており、北側は調査区外にのびている。平面形態は正方形で、南壁東寄りがわずかに突出し、東西軸5m48cmを測る。周囲にベッド状遺構を有し、南壁中央部分が途切れる。床部の平面形態は円形に近い隅丸方形である。

炉は中央よりやや南寄りに設けられており、その平面形態は直径30cmの円形を呈し、深さ6cmである。柱穴は東西のベッド状遺構の立ち上がり際に3個ずつ、計6個穿たれていた。



第85図　40号住居跡出土土器実測図

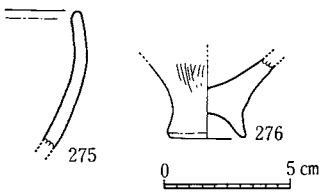


第86図　41号住居跡実測図

貯蔵穴はベッド状遺構が途切れた部分に設けられており、その平面形態は正方形に近く、深さは床面より７cmである。遺物は土器がわずかに出土した。

〔土器〕（第87図275～276）

275は鉢形土器で、胴部はゆるやかに立ち上がり、口縁端部は内傾する。276はミニチュアの甕形土器で、外面にハケ目を施す。

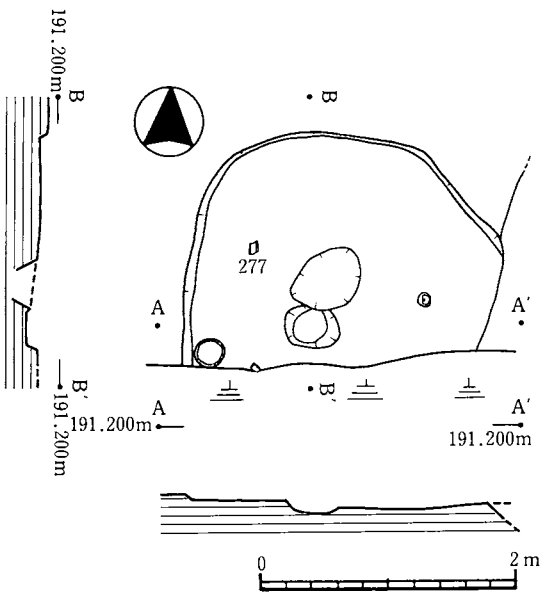


第87図　41号住居跡出土土器実測図

42号住居跡（第88図）

15区に位置する竪穴式住居跡で、南側は調査区外にのびており、さらに東側は２号溝によって切られている。平面形態は円形に近い不定形で、壁高は西側で６cmである。炉は中央に設けられ、一部に攪乱を受けているものの、その平面形態は楕円形を呈し、長軸で約24cm、深さ10cmである。柱穴は西の壁寄りに１個を確認した。この住居跡は、ベッド状遺構を削平された可能性が強い。

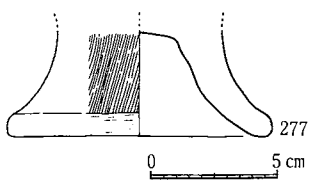
遺物は、土器が数点出土した



第88図　42号住居跡実測図

〔土器〕（第89図277）

277は甕形土器の脚部である。脚はゆるかに外反して開く。内部上面には面をもっている。器面調整は外面はハケ目、内面はナデ調整である。



第89図　42号住居跡出土土器実測図

43号住居跡（第90図）

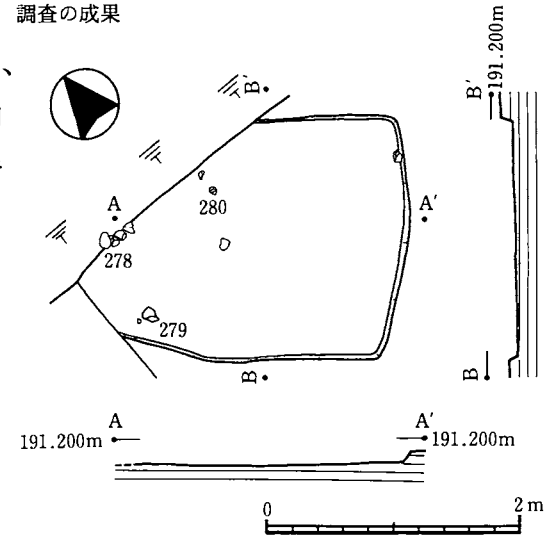
17から18区にかけて位置する竪穴式住居跡で、西側を41号住居跡によって切られ、さらに北側は調査区外にのびている。平面形態は長方形で、短軸で１m90cmを測る小型の住居跡である。

炉および柱穴は存在しなかった。遺物も土器数点以外は出土しなかった。

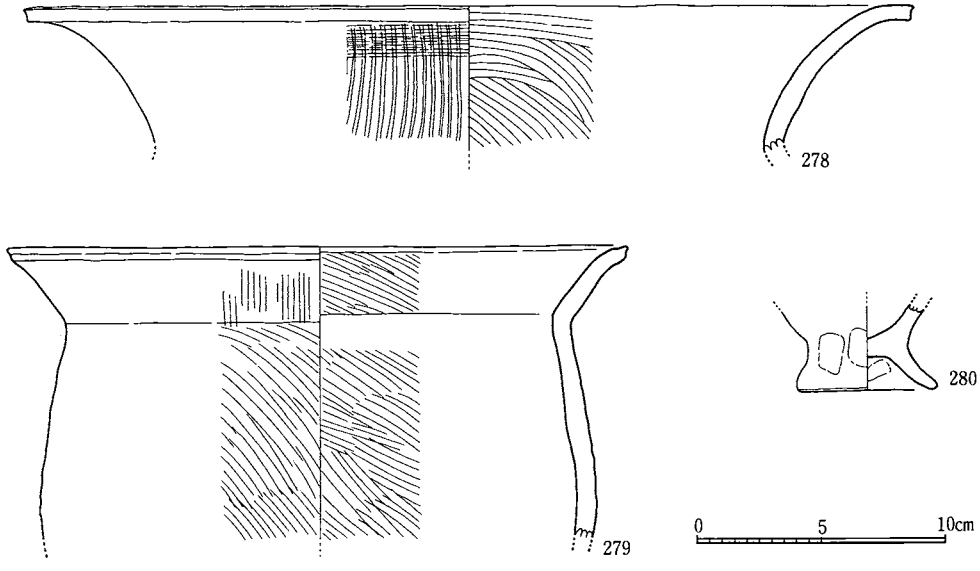
〔土器〕（第91図278～280）

278は大型の壺形土器の口縁部で、大きく外反して開く。器面調整は内外面ともハケ目調整である。279は甕形土器で、胴部の下位は欠損している。胴部最大径は中央よりやや上位に位

置し、口縁部は直線的に開き、端部で外反し、内器面には稜線がうかがえる。器面調整は内外面ともハケ目調整である。280は甕形の手捏土器である。



第90図　43号住居跡実測図



第91図　43号住居跡出土土器実測図

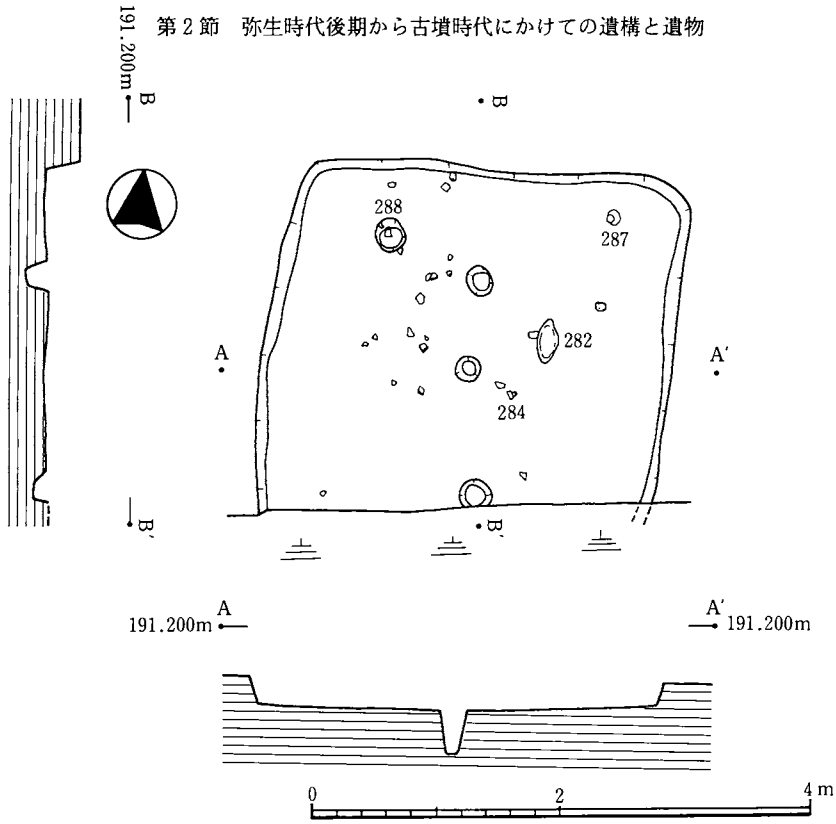
44号住居跡（第92図）

15から16区にかけて位置する竪穴式住居跡で、南側は調査区外にのびている。平面形態は正方形もしくは長方形と推定され、東西軸3m32cmを測る。壁高は20～22cmである。ベッド状遺構は設けられていない。柱穴は4個確認したが、どれが主柱穴になるかは不明である。炉も確認できなかった。

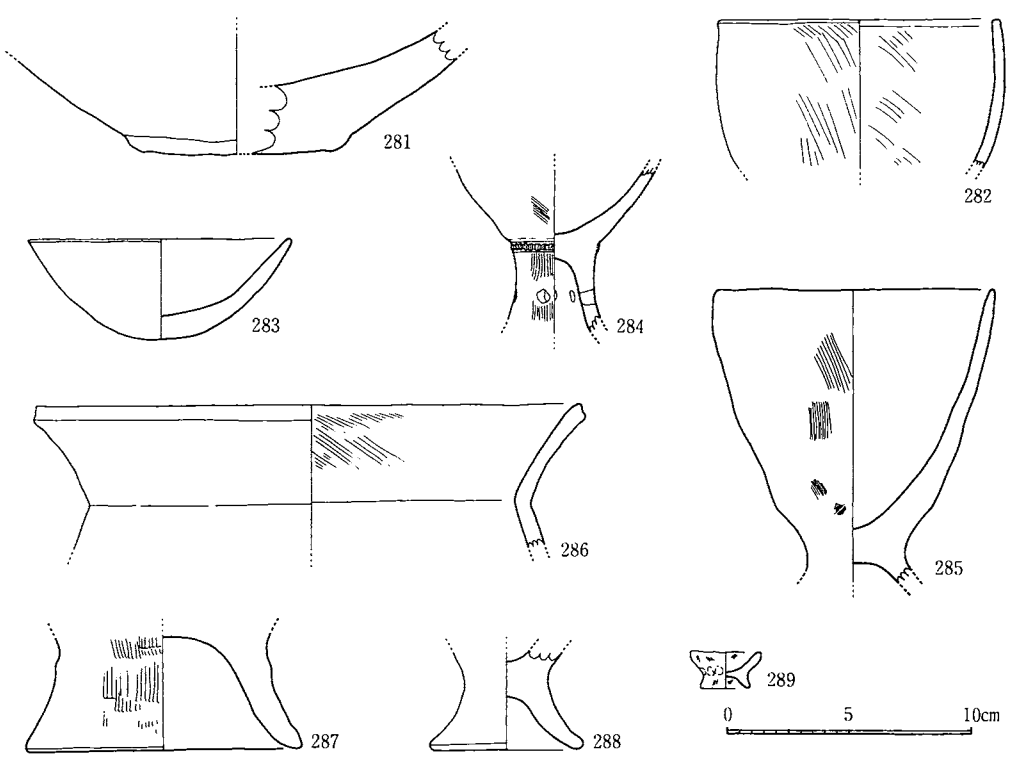
出土遺物は、土器のほか敲石が1点（115）、砥石が1点（86）、磨石が1点（107）出土した。

〔**土器**〕（第93図281～289）

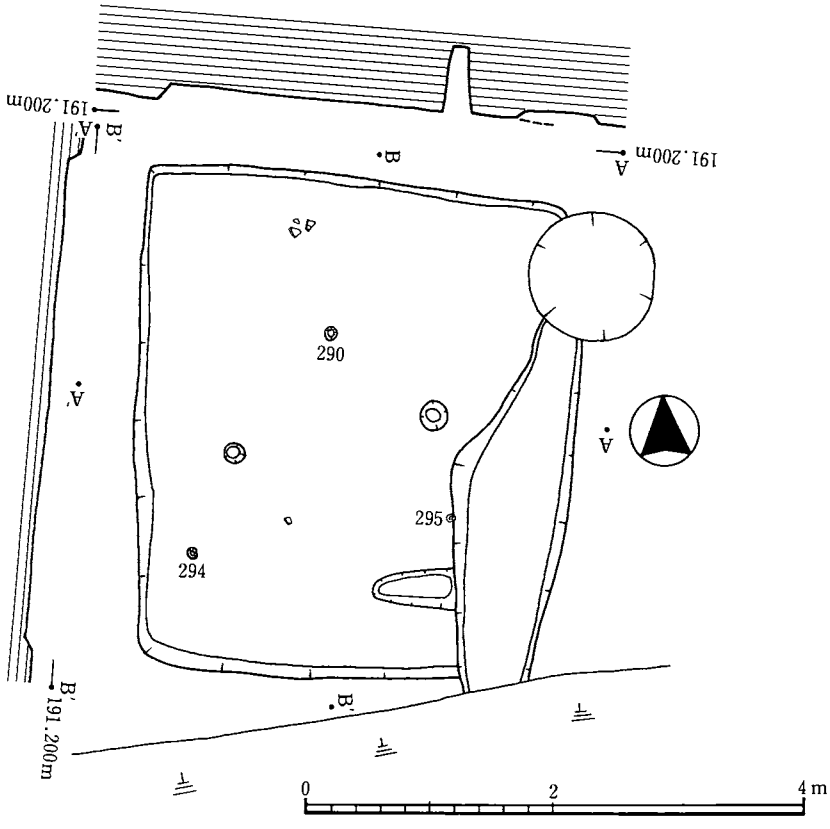
281は壺形土器の底部で、平底を呈する。かなり大型の壺である。282・283・285は鉢形土器



第92図　44号住居跡実測図



第93図　44号住居跡出土土器実測図



第94図　45号住居跡実測図

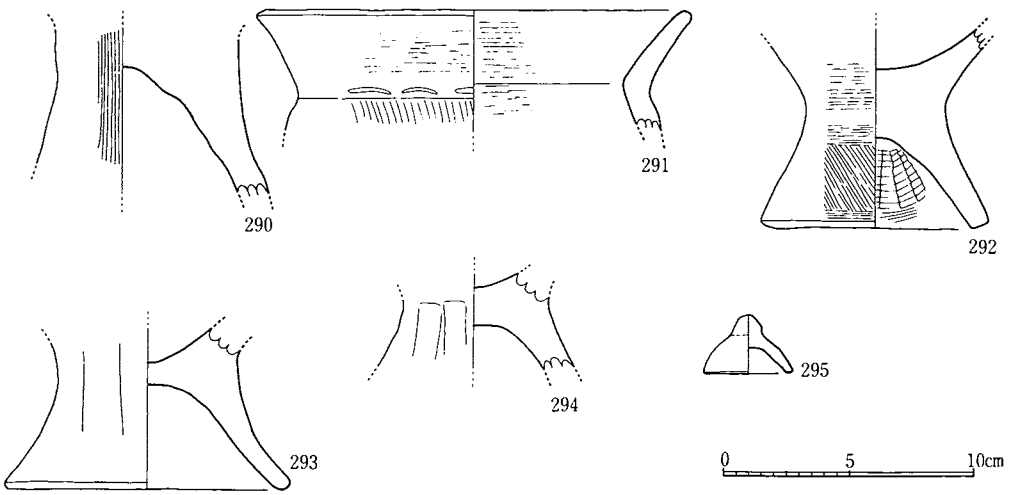
である。282は口縁部がやや内傾し、283は浅く口縁部は開きながら端部にいたる。285は脚台つきの鉢形土器で脚の端部を欠損する。器形は長胴を呈し、口縁はほぼ直立し端部にいたる。284は高坏形土器で、作りはひじょうに丁寧である。坏部は深く、その上位と脚部の下位を欠損している。脚部の上位には1条の刻目突帯をめぐらし、脚部中位には7個のすかし穴が開けられている。器面調整は丁寧で、外面は細かいハケ目調整、内面はナデ調整を施している。

286～288は甕形土器である。286は胴部より下位を欠損しており、口縁部は胴部より屈曲し外反しながら開く。内面には稜線を有する。287・288は甕形土器の脚部である。脚は外反しながらのびる。器面調整は基本的にはハケ目の後ナデ調整を施している。

289は鉢形の手捏土器である。

45号住居跡（第94図）

17～18区にかけて位置する竪穴式住居跡で、46号住居跡と切り合い関係をもつ。西側は攪乱を受けている。平面形態は長方形で、東西軸3m52cm（推定）、南北軸3m90cmを測る。壁高



第95図　45号住居跡出土土器実測図

は10～12cmである。ベッド状遺構は設けられていなかった。炉も確認できなかった。柱穴はほぼ中央、東西の壁より約80cmのところに2個穿たれていた。

遺物は土器のほかにはなかった。

〔土器〕（第95図290～295）

290は高坏形土器である。坏部および脚の下位を欠損しており、ゆがみがはげしい。外面に縦方向にハケ目調整が施されている。291～294は甕形土器である。291は胴部最大径を上位にもち、口縁部は頸部で屈曲し直線的に開く。頸部の内面には稜線がうかがえる。器面調整は内外面ともハケ目調整である。292～294は甕形土器の脚部である。脚が直線的に開くもの（292・294）と、外反して開くもの（293）とがある。器面調整はハケ目の後ナデ調整を施す。

295は蓋を模した手捏土器である。

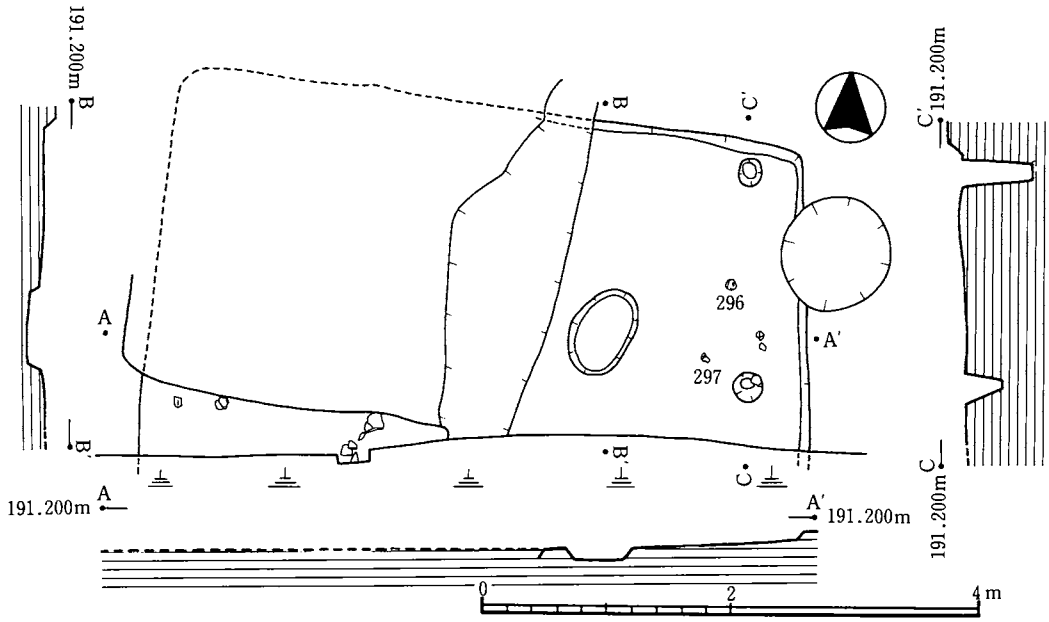
46号住居跡（第96図）

18区に位置する竪穴式住居跡で、北西部を45号住居跡によって切られており、さらに南側が調査区外にのびているため、その全容は不明である。平面形態は長方形と推定され、東西軸約5m38cmを測る。壁高は3～9cmと浅い。ベッド状遺構は設置されていなかった。中央より東寄りに平面形態が長軸72cm、短軸49cm、深さ12cmの長方形を呈する堀込みを確認した。炭化物や焼土がなかったため、炉と呼べるかどうか不明である。柱穴も2個確認したが、住居跡にともなうものかは不明である。

遺物は土器以外は、出土しなかった。

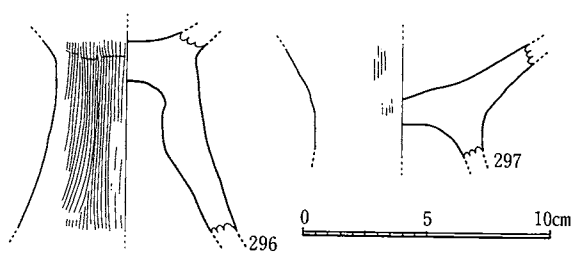
〔土器〕（第97図296～297）

296は高坏形土器で、坏部と脚部の下位を欠損している。脚はやや外反しながら裾部にいた



第96図　46号住居跡実測図

る。器面調整は外面が縦のハケ目調整、内面はナデ調整である。297は甕形土器の脚部である。脚は外反しながらのびるものと思われる。器面調整は外器面はハケ目を施した後にナデ調整を施す。

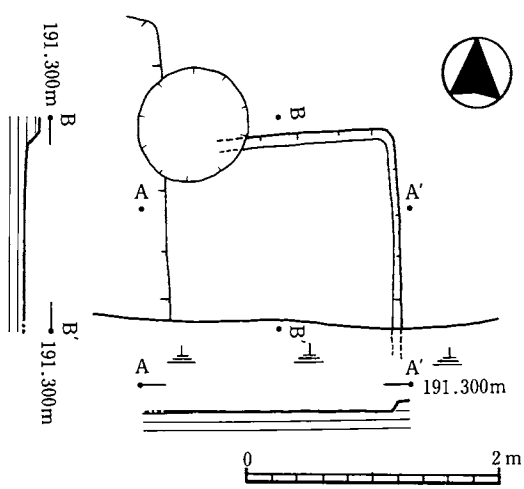


第97図　46号住居跡出土土器実測図

47号住居跡（第98図）

18区に位置する竪穴式住居跡で、46号住居跡によって切られており、南側は調査区外にのびる。平面形態は正方形か長方形かは不明である。規模も不明である。壁高は9～10cmである。

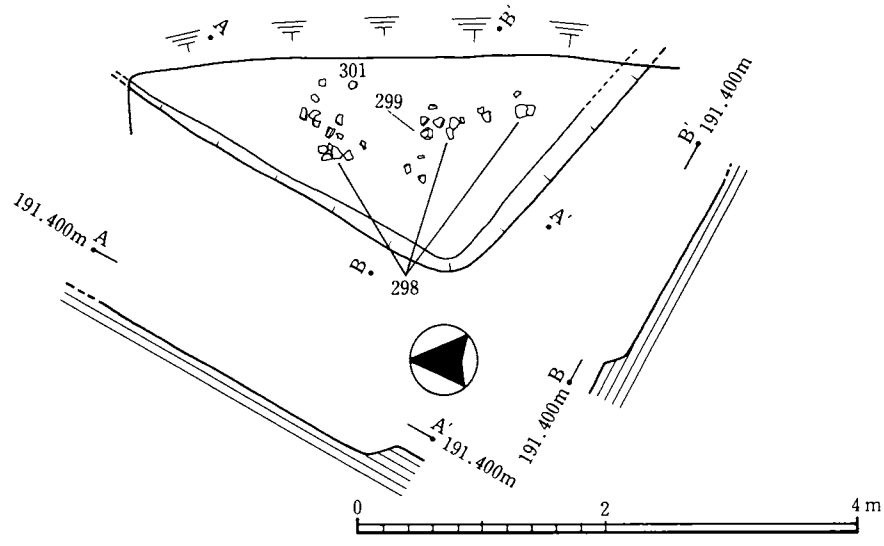
炉および柱穴も不明である。出土土器は図化にたえられるものはなかったが、石包丁が1点（62）出土した。



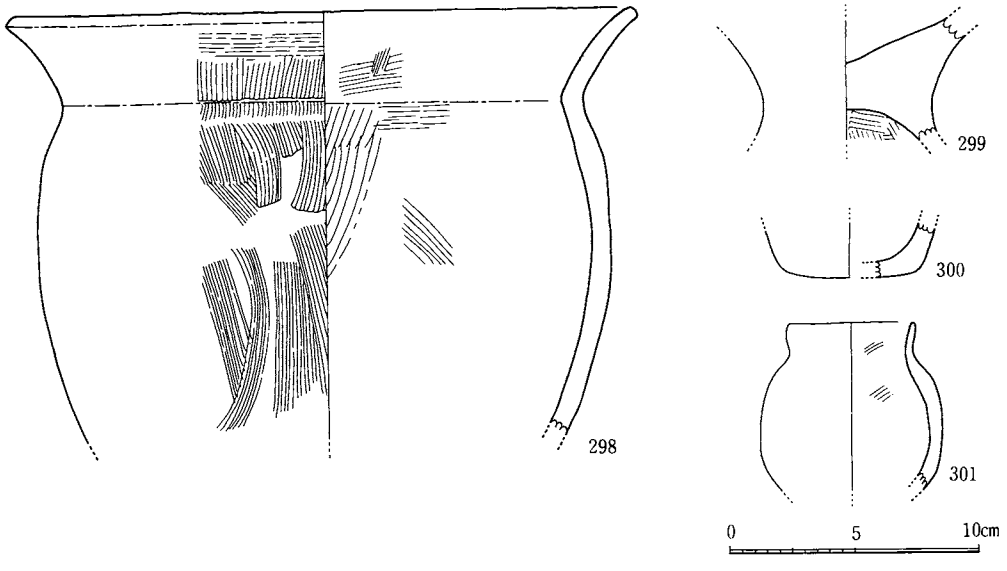
第98図　47号住居跡実測図

48号住居（第99図）

第1次調査の調査区（18区）東端に一部かかる状態で確認された竪穴式住居跡である。第2次調査で19区より調査を行ったが、工事車両の出入り



第99図　48号住居跡実測図



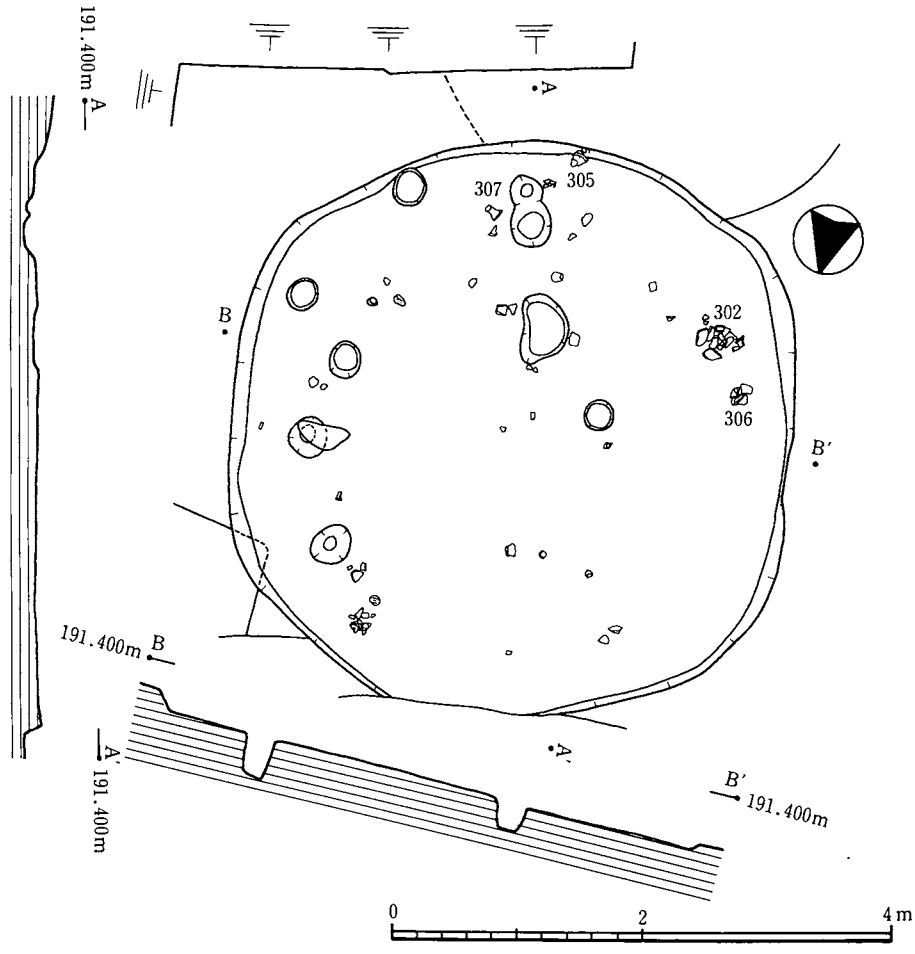
第100図　48号住居跡出土土器実測図

により削平、攪乱がひどく48号住居跡の続きは確認できなかった。

平面形態は正方形もしくは長方形と推定されるが、その規模は不明である。炉および柱穴等は確認できなかった。遺物は土器のほかは出土しなかった。

〔土器〕（第100図298～301）

298は甕形土器で、胴部最大径は上位に位置する。口縁部は頸部より外反して開く。頸部の内面には稜線がわずかにうかがわれる。器面調整は内外面ともハケ目調整で、口縁部の外面に



第101図　49号住居跡実測図

は、頸部から上へ刷毛でかき上げた跡がうかがえる。299は甕形土器の脚部で、脚の端部は欠損している。脚は外反してのびると思われる。

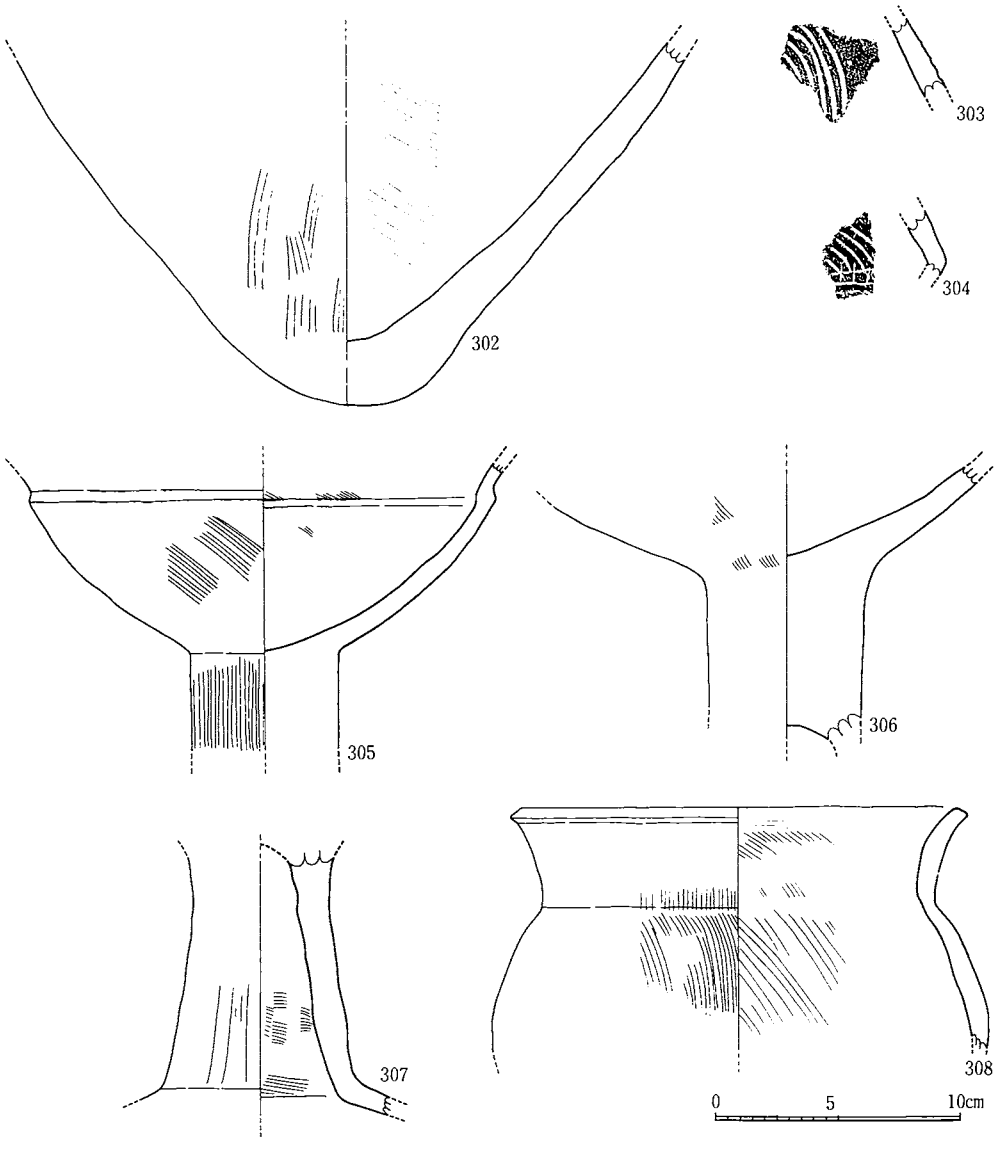
300は小型の鉢形土器である。301は壺形の手捏土器である。

49号住居跡（第101図）

第２次調査区（第１次調査区の続き）の19区に位置する竪穴式住居跡である。西側は削平・攪乱がひどく、48号住居跡との切り合い関係は不明である。

平面形態は円形で東西軸２m50cm、南北軸２m52cmを測る。壁高は16～20cmである。ベッド状遺構が削平された可能性もある。炉は中心よりやや南寄りに設けられており、長軸54cm、短軸34cm、深さ３cmの楕円形に近い形態を呈する。炉底には焼土が確認できた。柱穴は８個確認したが、主柱穴となる柱は確認できなかった。

この住居跡からは、土器の他に石包丁３点（44・56・60）、敲石１点（126）、砥石２点（95・



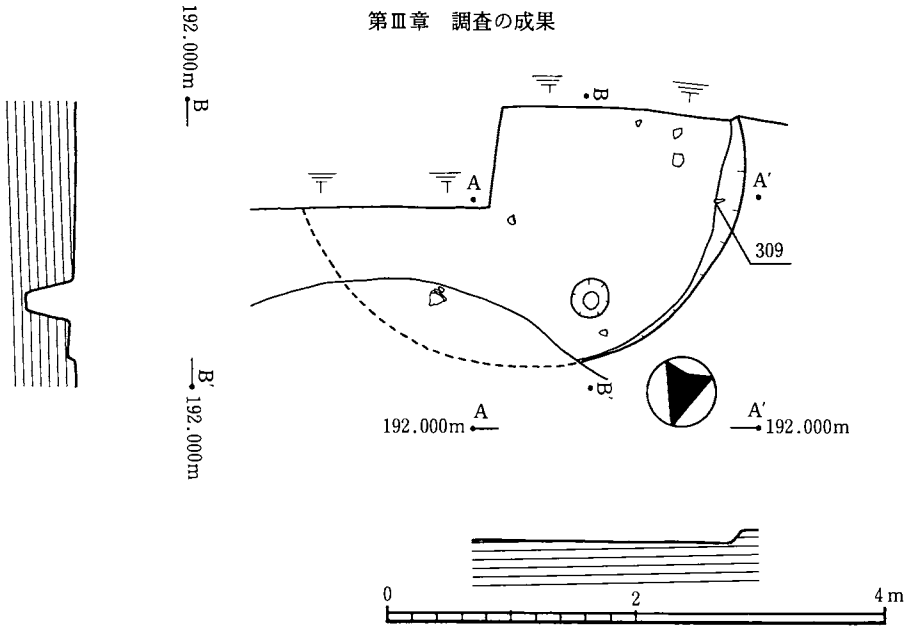
第102図　49号住居跡出土土器実測図

96）鉄器では鉄鏃３点（５・８・10）、鉄片１点（13）が出土した。

〔土器〕（第102図302～308）

302は大型の壺形土器の底部で、とがりぎみの丸底を呈する。器面調整は内外面ともおおまかなハケ目調整である。303・304は重弧文長頸壺の破片である。303は胴部の屈曲部より頸部にかけての部分で、５本の重弧文がうかがえる。304は胴の屈曲部分で、２本の沈線に刻目を施し、５本の重弧文がうかがえる。

305～307は高坏形土器である。305は口縁部と脚部の下位を、306は坏部の上位と脚の裾部を、



第103図　50号住居跡実測図

307は坏部と裾の端部を欠損している。坏部は深く口縁部はやや外反し開く（305）。

305・306の脚は筒状で直線的にのび、裾部にいたる。307はやや開きぎみにのび、裾部にいたる。器面調整は内外面ともハケ目調整を施す。

308は甕形土器で、胴部の下位を欠損する。胴部最大径は中央よりやや上位に位置し、口縁部は外反して立ち上がる。頸部の内面の稜線は不明瞭である。器面調整は内外面ともハケ目調整で、口縁部は頸部より上方にかき上げをおこなう。

50号住居跡（第103図）

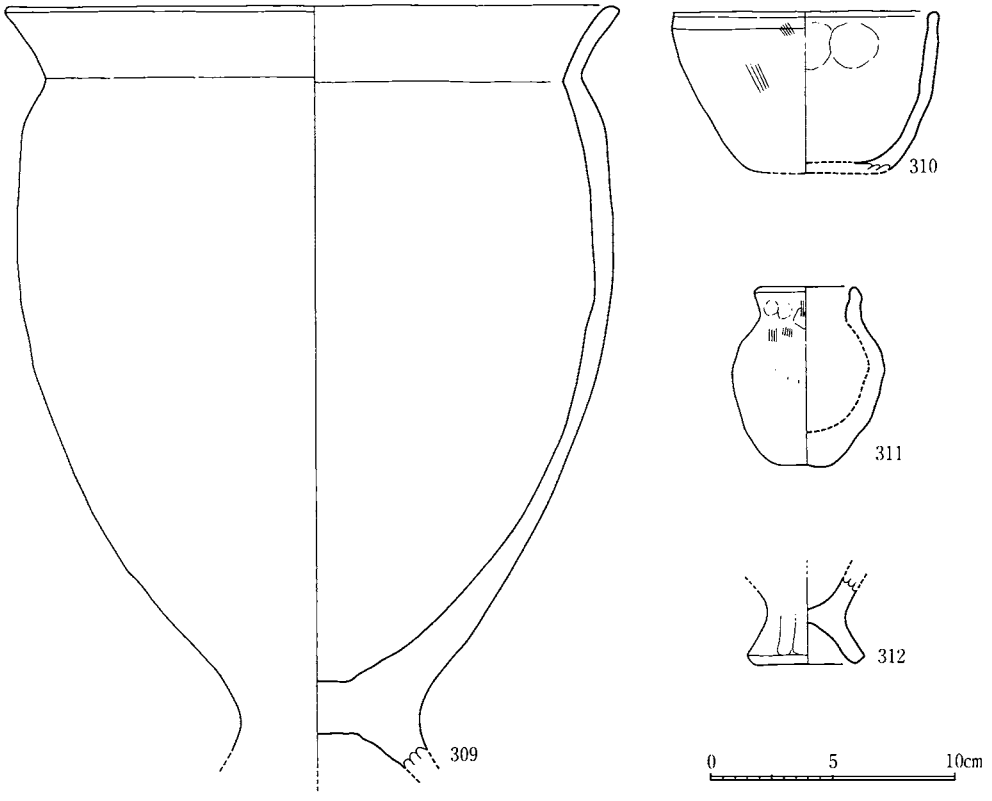
19区に位置する竪穴式住居跡で、49号住居跡を確認するため拡張したところ、偶然に確認できたものである。この住居跡は49号住居跡によって切られており、さらに南側は調査区外にのびている。平面形態は円形を呈するが、その全容は不明である。この住居跡はベッド状遺構を持つ可能性が強く、後世の削平によってそれを失ったものと考えられる。柱穴は1個確認できたが、他は不明不明である。炉も確認できなかった。

出土遺物は、土器のほかに小型の青銅鏡（第198図2）が、ベッド状遺構があったと思われる場所から出土した。

〔**土器**〕（第104図309～312）

309は甕形土器である。胴部最大径を上位にもち、口縁部は頸部より屈曲し、外反しながら開き、頸部内面の稜線は明瞭である。器面調整はナデ調整で、内面には煤が付着している

310はミニチュアの鉢形土器で胴部は底部より立ち上がり、端部にいたる。311は壺形の手捏土器で、312は甕型の手捏土器である。



第104図　50号住居跡出土土器実測図

51号住居跡（第105図）

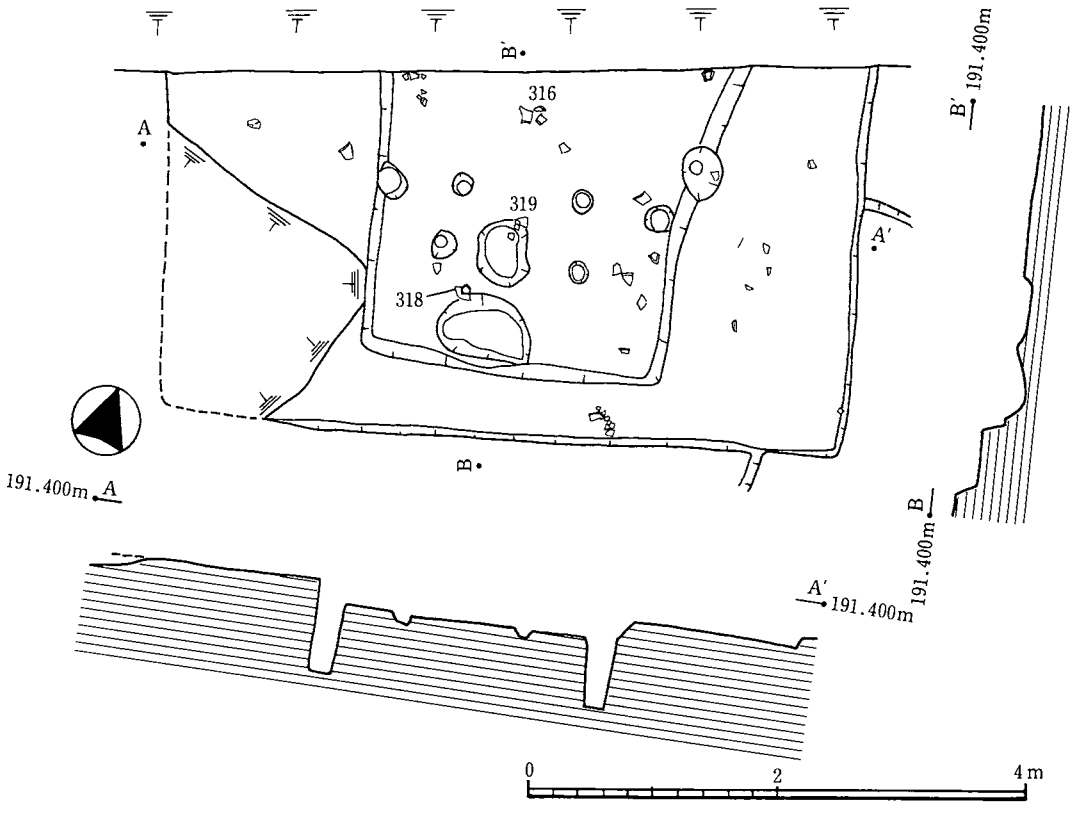
19区に位置する竪穴式住居跡で、49号住居跡、52号住居跡と切り合い関係をもち、49号を切り、52号によって切られている。西側の一部は削平を受け、さらに北側は調査区外にのびている。平面形態は長方形と推定され、東西軸5m72cmを測る。ベッド状遺構を有するが、北側にどうめぐるかは不明で、床面よりの比高差は約20cm、さらにベッド状遺構からの壁高は東壁で21cmである。

炉は中央より南寄りに設けられていた。その平面形態は不定形で、長軸52cm、短軸40cm、深さ7cmである。炉の周囲に4個の柱穴があるが、これは炉に付随する何らかの施設であろう。主柱穴は床面の東西、ベッド状遺構の立ち上がり際に2個穿たれていた。貯蔵穴は床面南側のベッド状遺構寄りに設けられていた。その平面形態は長軸76cm、短軸50cmの楕円形で、深さは14cmである。

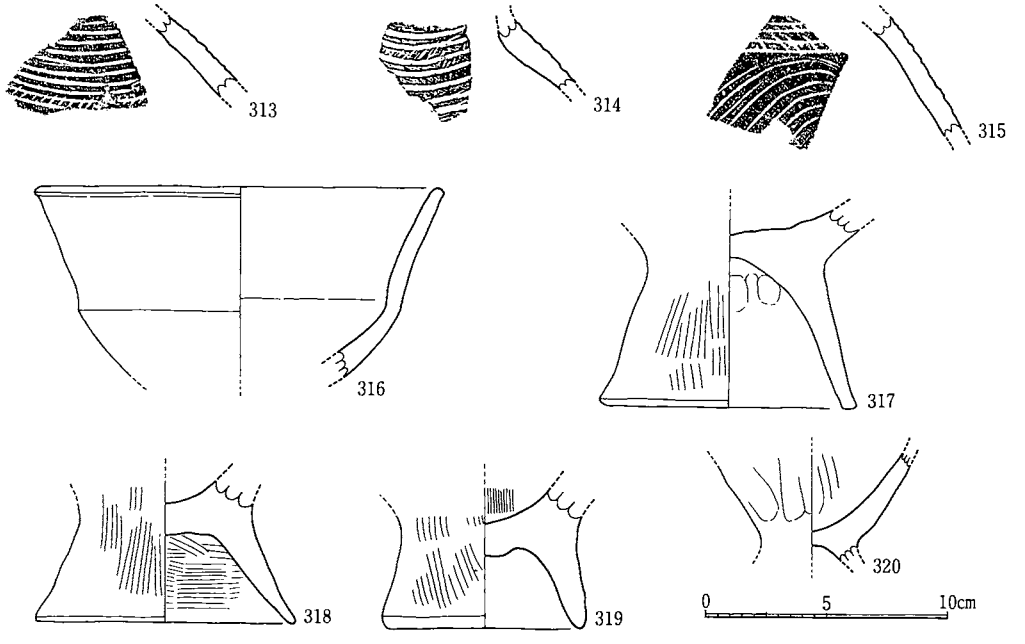
出土遺物は土器のほかに刀子が1点（15）出土した。

〔土器〕（第106図313～320）

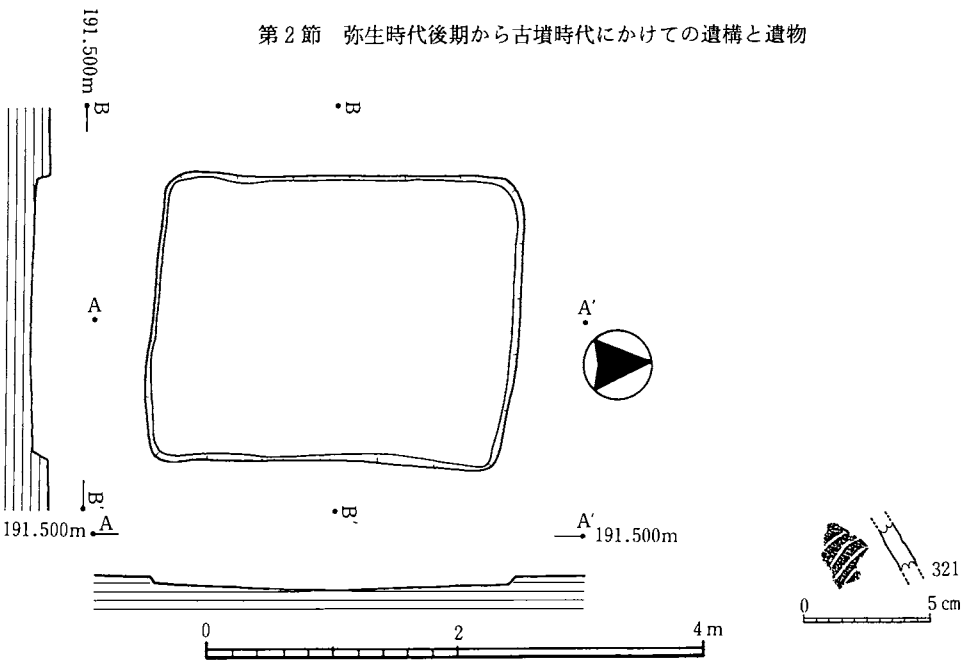
313～315は重弧文土器で、頸部に近い部分である。313は沈線の下位に、314は沈線の上位に



第105図　51号住居跡実測図



第106図　51号住居跡出土土器実測図



第107図　52号住居跡・土器実測図

刻目が施されている。315は重弧文がうかがえる。316は鉢形土器で、底部と脚部を欠損している。口縁部は頸部より外反して立ち上がる。器面調整は内外面ともナデ調整である。

317～320は甕形土器の脚部である。317・318は脚が外反してのび、319はほぼ直線的にのびる。320は脚部を欠損している。器面調整は基本的にはハケ目調整で、内面上位に指頭圧痕がうかがえるもの（317）もある。

52号住居跡（第107図）

19区に位置する小型の竪穴式住居跡で、その平面形態は長方形を呈し、長軸２m94cm、短軸２m26cmを測り、壁高は５～12cmである。炉および柱穴は存在しなかった。出土遺物は少量の土器片と鉈が１点（17）出土した。

〔**土器**〕（第107図321）

321は重弧文土器の破片で、胴屈曲部分よりやや上位の部分で、わずかに重弧文がうかがえる。

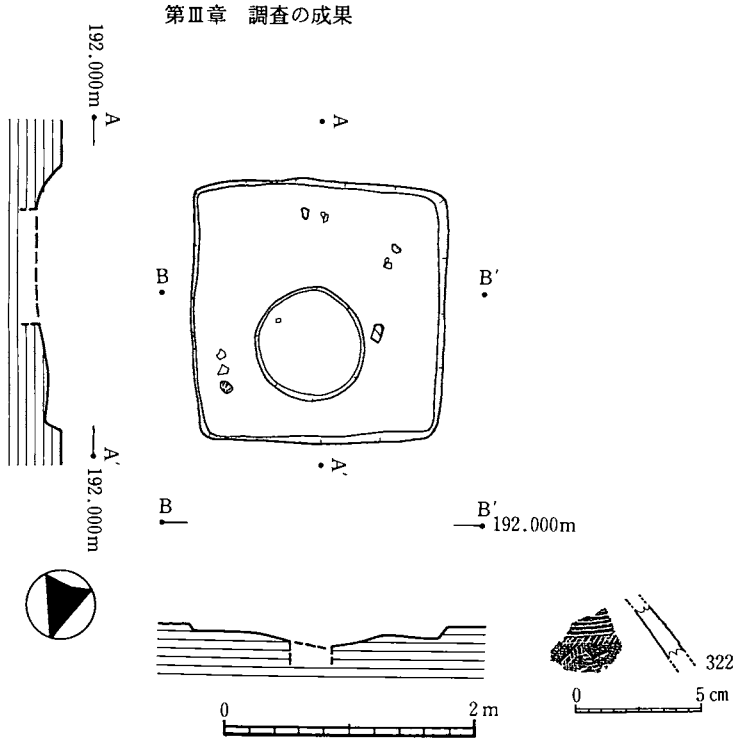
53号住居跡（第108図）

19～20区に位置する小型の竪穴式住居跡で、平面形態は正方形を呈し、一辺が２m６cmを測り、壁高は６～12cmである。中央北寄りの部分を、イモ穴によって切られている。炉および柱穴は存在しなかった。遺物も土器片がわずかに出土した。

〔**土器**〕（第108図322）

322は重弧文土器の一部で、胴部屈曲部より頸部にかけての部分で、細かい沈線とその下位

に刻目を施し、重弧文にあたる部分は、2本の沈線で山形を描き、それに刻目を施しているのが、わずかにうかがえる。



第108図　53号住居跡・土器実測図

54号住居跡

（第109図）

21区に位置する竪穴式住居跡で、そのほとんどが調査区外にのびており、南側にごく一部を残している。全容は不明であるが、その平面形態は正方形もしくは長方形を呈する。規模は東西軸で2m64cmを測り、壁高は南側で23cmである。炉および柱穴は確認できなかった。

出土遺物は土器片がわずかに出土した。

〔土器〕（第109図323）

323は重弧文土器の破片である。頸部に近い部分で、細い沈線が施してある。

55号住居跡（第110図）

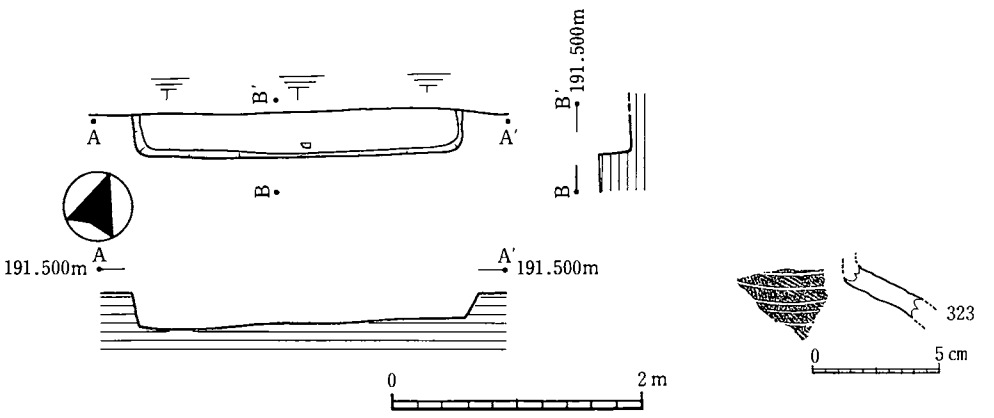
21区に位置する小型の竪穴式住居跡で、その平面形態は長方形を呈し、長軸2m83cm、短軸2m28cmを測る。壁高は17cmである。住居跡内に炉および柱穴は存在しなかった。

遺物は土器のほか、石包丁1点（76）、砥石1点（87）が出土した。

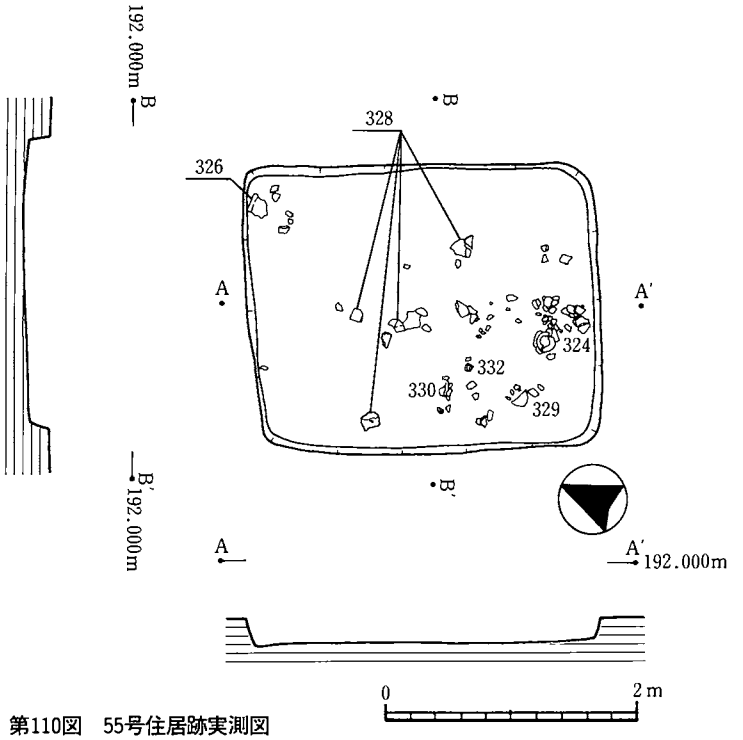
〔土器〕（第111～112図324～332）

325は素口縁の壺形土器で、胴部の下位を欠損している。胴部の最大径はほぼ中位にくるものと思われる。口縁部は頸部より外反して短く開く。頸部の内面には、稜線がはっきりとうかがえる。器面調整は内外面ともハケ目調整である。324は重弧文土器の胴部の屈曲部分である。

326～329は甕形土器である。胴部の最大径は上位に位置し、口縁部はやや外反して開き、口縁端部は外側にわずかに突出する。327は他にくらべ、胴部が短い。頸部内面の稜線は明瞭である。器面調整は内外面ともハケ目調整で、頸部に指頭圧痕がうかがえる。330・331は甕形土器の脚部で、外反してのびる。器面調整はハケ目調整である。



第109図　54号住居跡・土器実測図



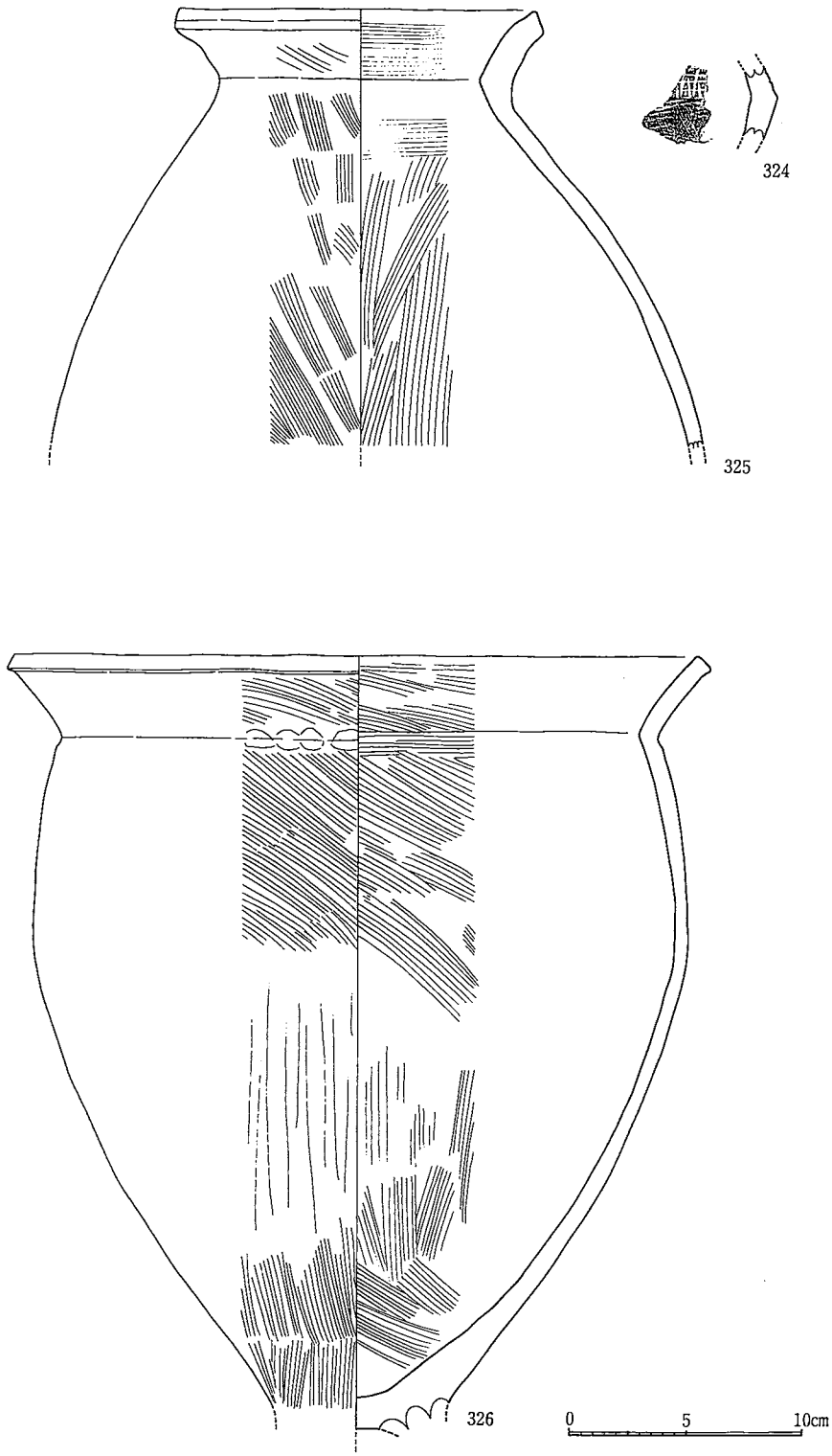
第110図　55号住居跡実測図

332は鉢形の手捏土器である。

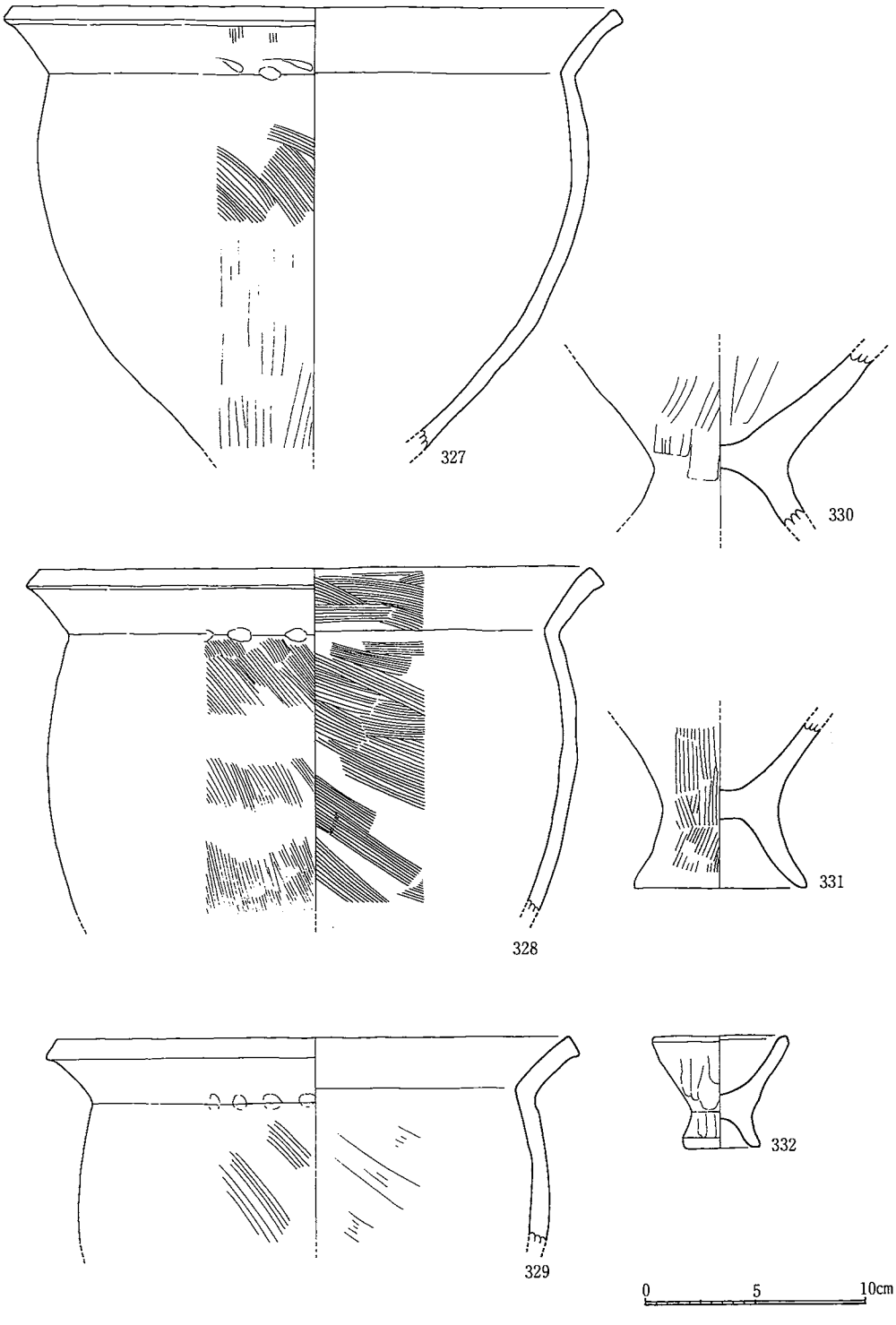
56号住居跡（第113～114図）

22区に位置する竪穴式住居跡である。南側の一部は58号住居跡によって切られている。さらに、北と南は調査区外にのびている。平面形態は円形で、東西軸7m44cmを測る。周囲にベッド状遺構を有し、その形態は、南西部にはベッド状遺構に17cmの段差をもち、らせん状である。床面からの比高差は9～21cmで、さらにベッド状遺構よりに壁高は15～34cmである。

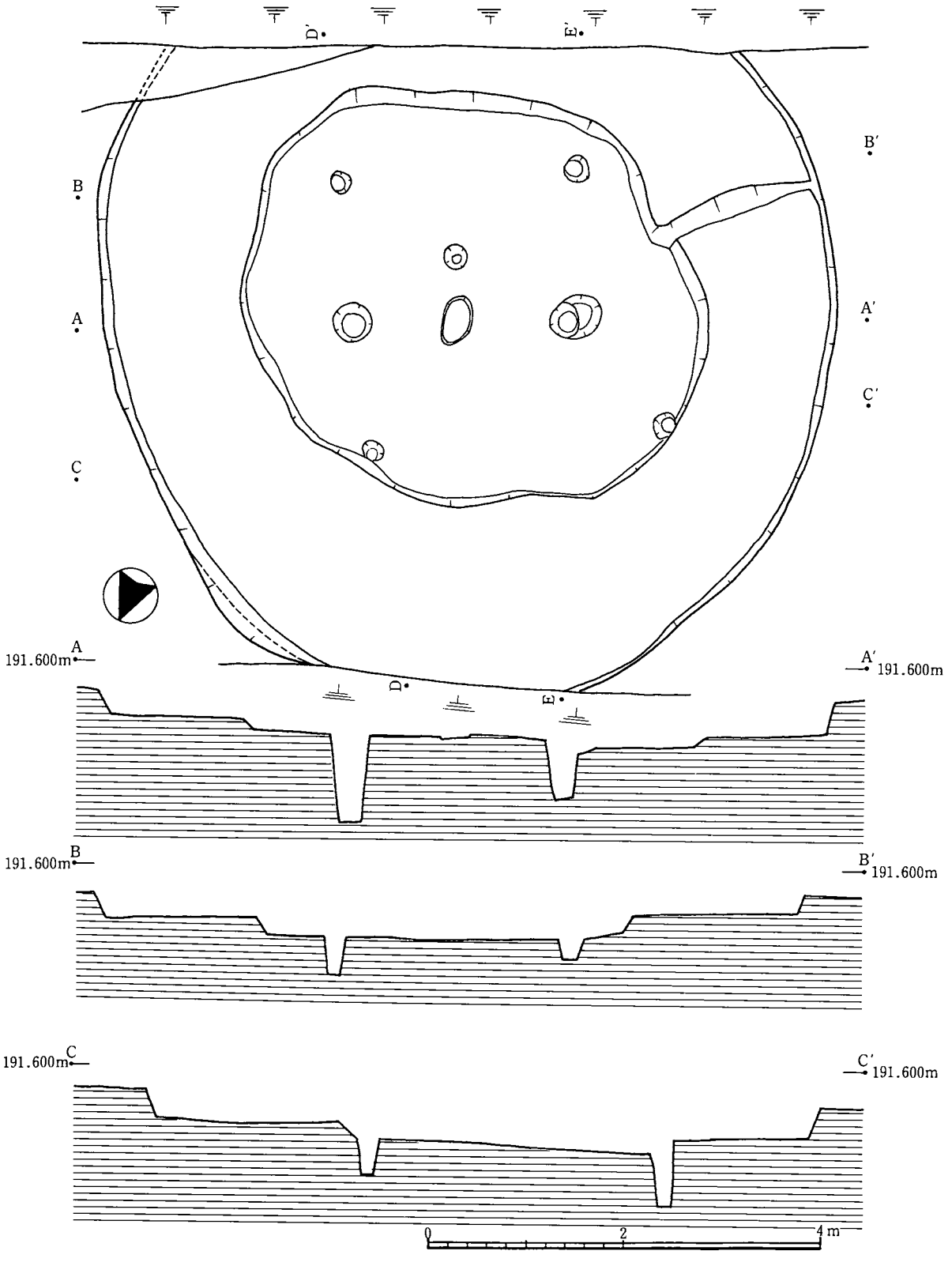
住居のほぼ中央に平面形態が、長軸52cm、短軸31cmの楕円形を呈する炉を有する。炉内に



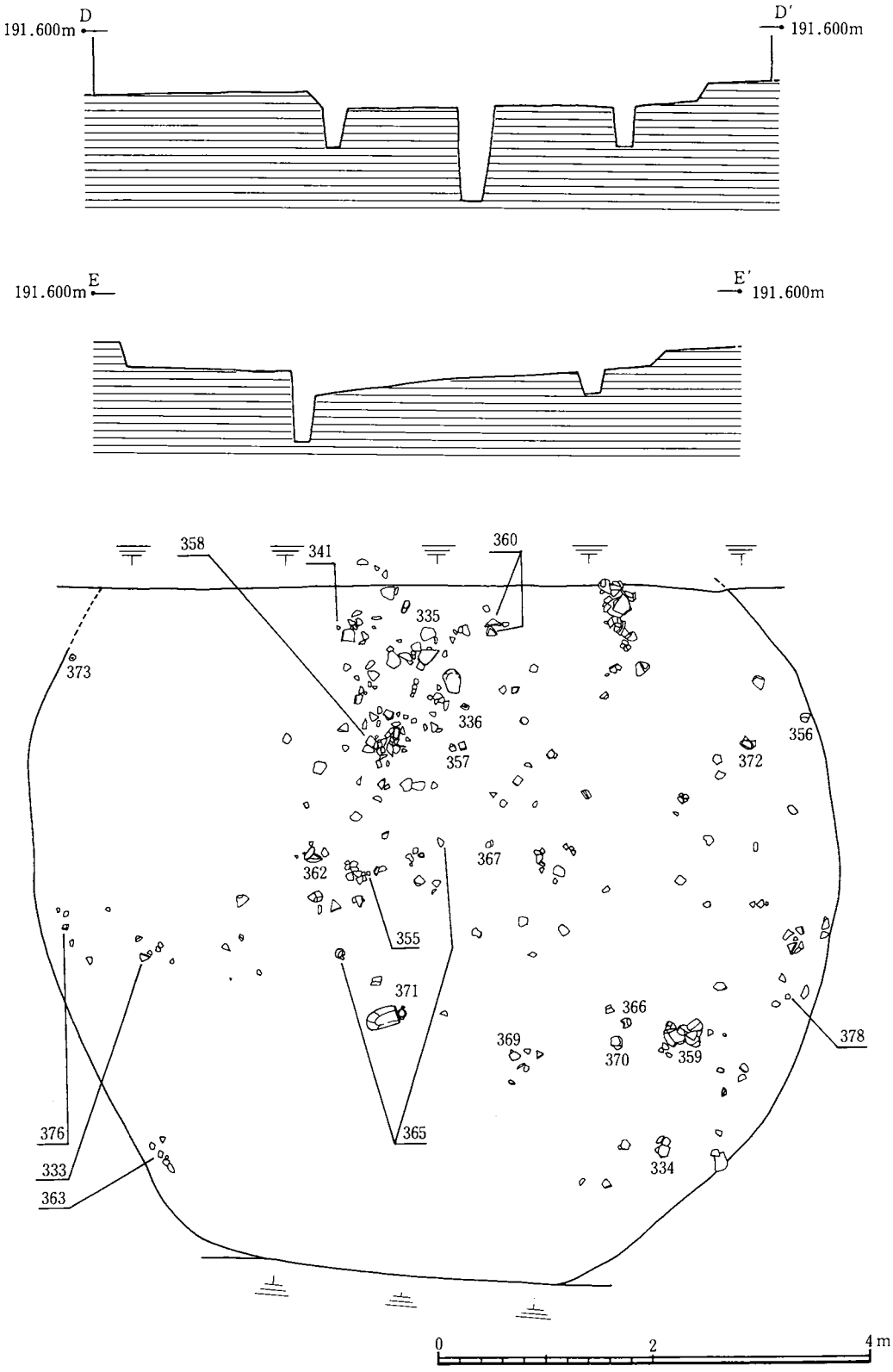
第111図　55号住居跡出土土器実測図（1）



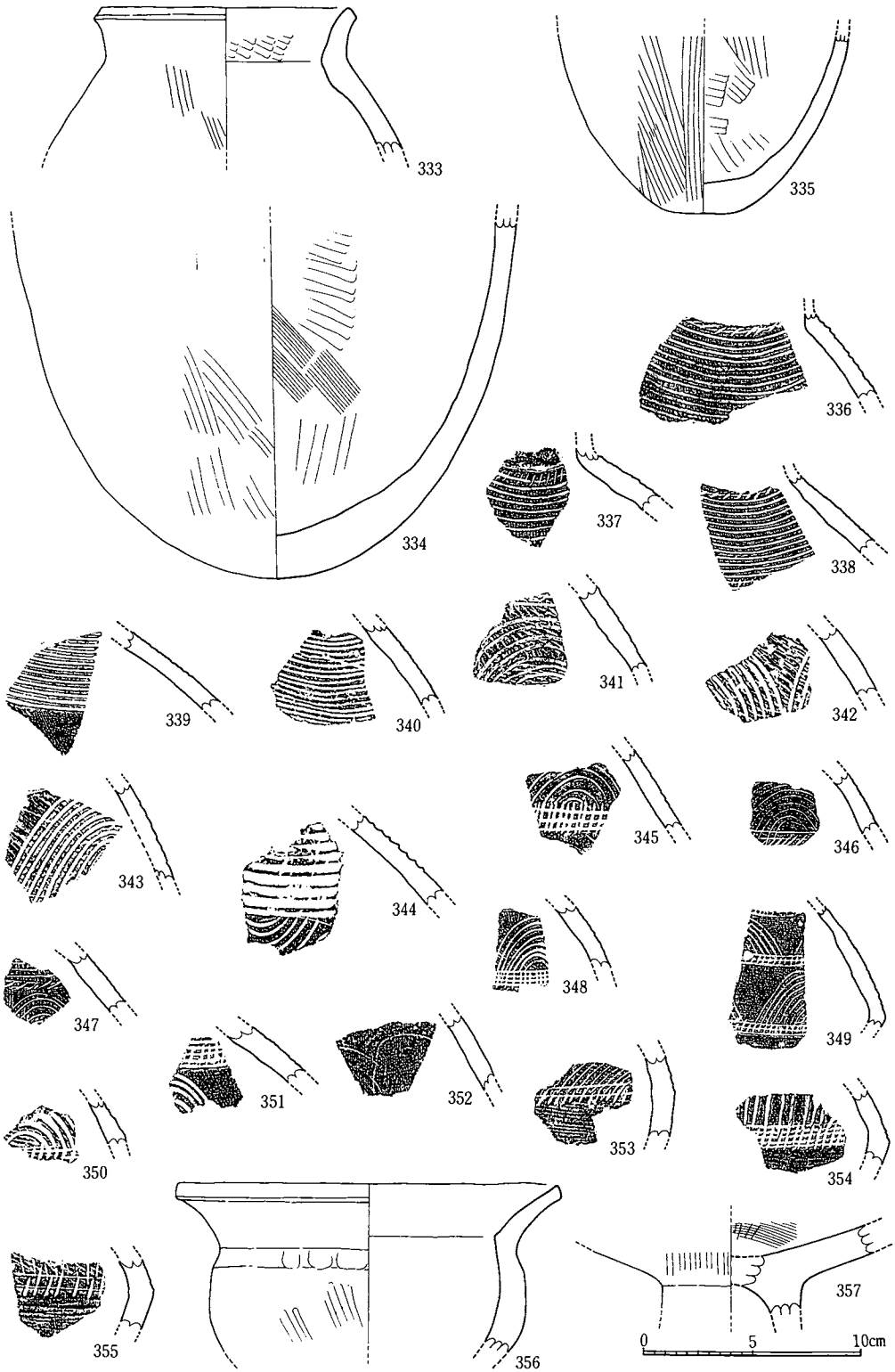
第112図　55号住居跡出土土器実測図（２）



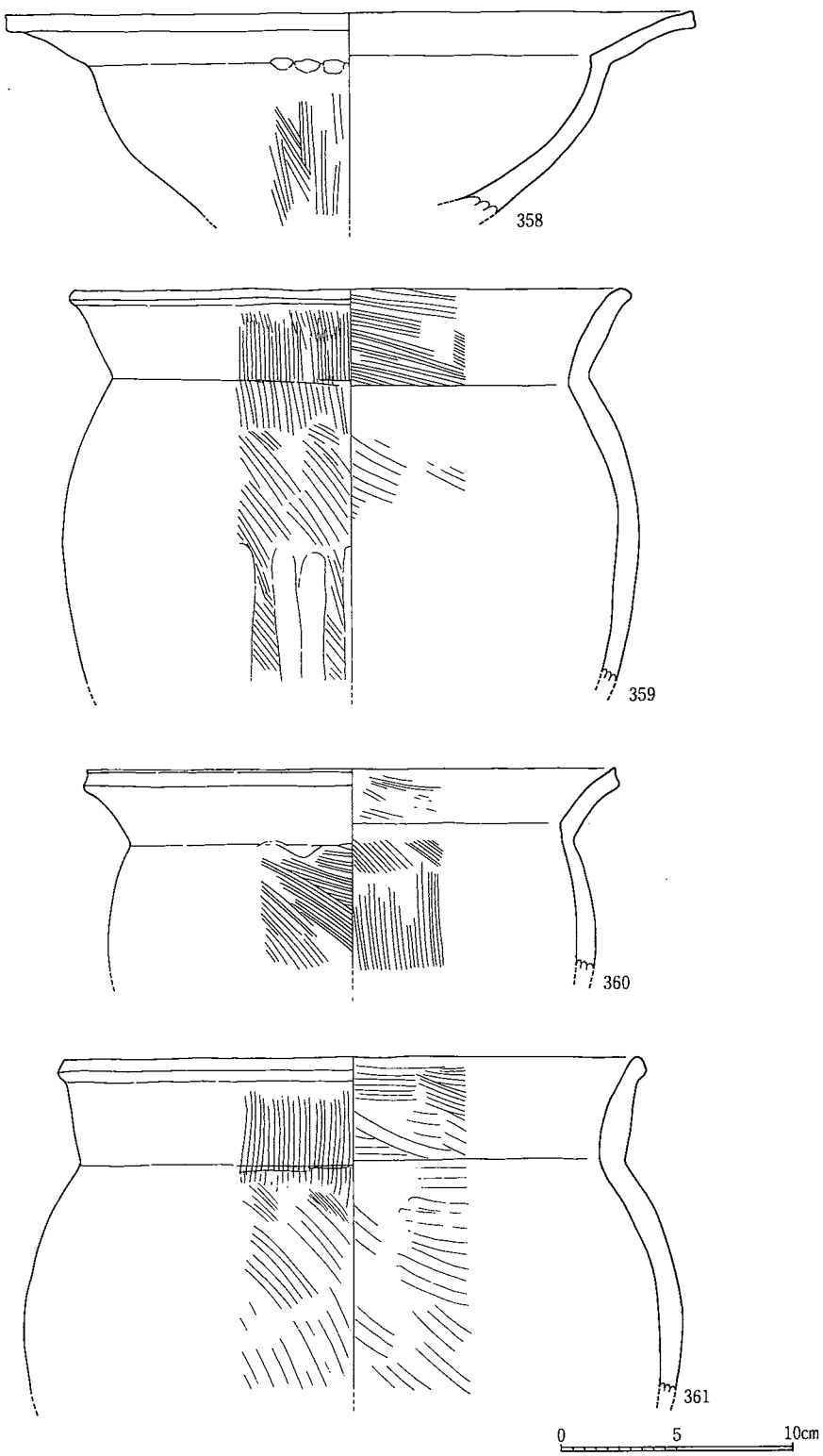
第113図　56号住居跡実測図



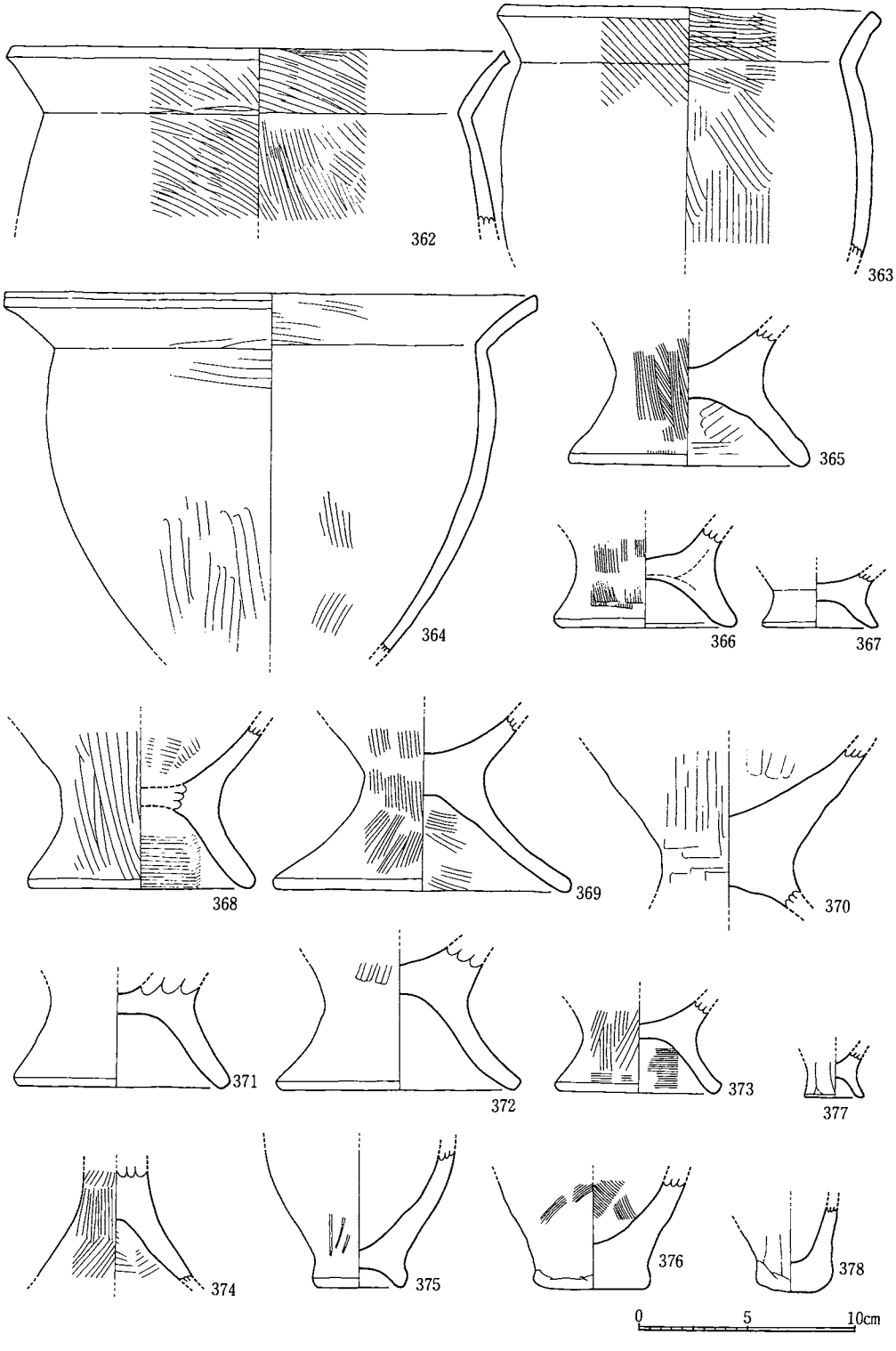
第114図　56号住居跡断面及び遺物出土状況実測図



第115図　56号住居跡出土土器実測図（1）



第116図　56号住居跡出土土器実測図（２）



第117図　56号住居跡出土土器実測図（3）

は焼土が含まれていた。柱穴は炉の東西に2個の主柱穴と、さらにその南北に計4個の補助柱を有する。

出土遺物は土器のほかに、石包丁2点（53・77）、敲石1点（110）、砥石1点（97）、磨石1点（106）、台石1点（129）、打製石斧1点（30）が出土した。

〔土器〕（第115～117図333～378）

333は素口縁の壺形土器で、胴部の下位を欠損する。頸部は胴部よりゆるやかに外反して短く開く。334・335は壺形土器の底部で胴部の中央より上位を欠損する。334は丸底、335は平底を呈する。器面調整は内外面ともハケ目調整である。336～355は　重弧文土器の破片である。336～340は頸部に近い部分で、細い沈線をめぐらし刻目が施されている。341～355は、胴部の屈曲部に近い部分で、重弧文と屈曲部の沈線と刻目がうかがわれる。344は沈線ではなく、つまみ出しによる隆起線で、下向きに重弧文が沈線によって施されている。349は2段にわたって、重弧文が施されている。

356は鉢形土器で、胴部より下位が欠損している。胴部は球形を呈し、口縁部はやや外反して開く。頸部内面の稜線は明瞭である。器面調整は外面はハケ目調整で、頸部には指頭圧痕がうかがえる。内面はナデ調整である。357・358は高坏形土器である。357は坏部および脚部を欠損している。358は坏部の下位以下を欠損している。坏部は深く、口縁部は頸部より屈曲し短く開く。器面調整はハケ目調整である。

359～373は甕形土器である。359～364は胴部の下位を欠損している。胴部の最大径は中央よりやや上位に位置する。口縁部は外反しながら開く。頸部の内面は361を除き、稜線を持つ。361は頸部よりゆるやかに立ち上がり、端部は膨らみをもち、稜線は不明瞭である。器面調整は内外面ともハケ目調整である。359・361の口縁部は、刷毛によりかき上げが見られる365～373は甕形土器の脚部で、365は脚が内湾ぎみにのびる。366～373は外反して開く器面調整はハケ目調整である。

374はミニチュアの高坏形土器で、坏部および脚の端部を欠損する。器面調整は内外面ともハケ目調整である。375はミニチュアの甕形土器で脚はつまみ出している。376はミニチュアの鉢形土器で、平底を呈する。377・378は手捏土器である。

57号住居跡（第118～121図）

22から23区に位置する竪穴式住居跡である。平面形態は基本的には円形で東西軸で直径7m50cmを測る。西側には2～3か所に花弁状の張り出し部分を有し、東側には見られない。周囲にベッド状遺構を設けており、張り出し部分のベッド状遺構は一段高くなっている。ベッド状遺構の比高差は北側部分で12cmである。床面よりの比高差は、張り出しを持つ西側で16cm、張り出しを持たない東側で3～4cmである。南側はベッド状遺構が途切れている。

炉は中央より北寄りに設けられていた。平面形態は長軸76cm、短軸41cm、深さ5cmの楕円

形を呈する。柱穴は炉を中心に、ベッド状遺構寄りに4個穿たれていた。炉の南とその西に浅い堀り込みがあった。貯蔵穴は確認できなかった。

この住居跡からは多量の遺物が出土した。土器のほかは石包丁が2点（55・71）、敲石が5点（111・113・114・122・123）、打製石斧が3点（15・23・28）、鉄器では鉇が1点（18）、刀子が1点（16）、鉄鏃が1点（11）出土した。

〔土器〕（第122～140図379～497）

379～391は素口縁の壺形土器である。379は胴部の下位を欠損するものの最大径をほぼ中位にもち、頸部は短く開く。380は長胴で胴部の最大径は中位に位置し、底部は丸底を呈し、頸部を欠損する。381は胴部の最大径を中央より上位にもち、頸部は短くゆるやかに開く。底部はレンズ状を呈する。382は胴部の下位を欠損するものの、胴部の最大径は中位に位置する。頸部は短く、ゆるやかに立ち上がる。383～390は頸部が外反して開く。391は頸部が直線的に立ち上がる。器面調整は内外面ともハケ目調整である。392～396は複合口縁の壺形土器である。頸部はやや外反ぎみに開き、口縁部は屈曲し内傾する。器面調整は内外面ともハケ目調整である。

397～414は重弧文長頸壺である。397は胴部の屈曲部分より下位を欠損する。胴部の上位はややふくらみをもち、頸部は開きぎみに立ち上がり端部で大きく外反する。胴部上半はハケ目調整の後、上部は連続した14本の沈線文で、最上位に刻目を施す。下部は8本の沈線で山型に近い7個の重弧文をもち、その下位に3本の沈線をめぐらし、刻目を施す。頸部には縦方向に暗文を施す。

398は頸部の上位および胴部の下位を欠損する。胴部上半はハケ目調整の後、上部は12本の沈線文をめぐらし、最上位に刻目を施す。下部は11本の沈線で5個の重弧文をもち、その下部に3本の沈線をめぐらし、刻目を施す。

399は頸部および胴部の屈曲部以下を欠損する。胴部上半はハケ目調整の後、上部は17本の沈線文をめぐらし、最上位と下位に刻目を施す。下部は6本の沈線で12の重弧文をもち、その下部に沈線をめぐらし、刻目を施す。器形はやや偏平ぎみである。

400は胴部の下位を欠損する。胴部上半はややふくらみをもち、頸部は開きぎみに立ち上がり端部で大きく開く。器面全体にハケ目調整を施し、その上から施文する。上部には18本の沈線をめぐらし、その最上位に刻目を施す。下部は13本の沈線で7個の重弧文を施す。その下位に3本の沈線をめぐらし、それに刻目を施す。

401・402は頸部および胴部の下位を欠損する。胴部上半は丸みをおび、ハケ目の後なめらかなナデを施し、その上に施文をおこなう。401は上部は14本の沈線文をめぐらし、その上位と下位に雑な刻目を施す。下部は8本の沈線で重弧文を施す。重弧文は何個になるかは不明である。その下位には2～3本の沈線をめぐらし、刻目を施す。402は19本の沈線文をめぐらし、

刻目は施されていない。重弧文の沈線の数および個数は不明である。

403は頸部および底部を欠損する。胴部はやや丸みをおび、器面全体に丁寧なハケ目調整をおこない、その上に施文を施す。上部は15本の沈線文をめぐらし、その上位と下位に刻目を施す下部は15本の沈線で7個の重弧文を施し、その中心に4本の刻目をもつ。さらにその上位の空間に6本の沈線で下向きに重弧文を施す。胴屈曲部の上位には3本の沈線がめぐる。

404は頸部と胴部の下位を欠損する。胴部上半は丸みをおび、19本の沈線文をめぐらし、その上位と中央よりやや上位に刻目を施す。重弧文は6個で12本の沈線で描く。すべての重弧文の中央に割りつけのために施したと思われる、2個の刻目が施されている。胴部屈曲部の上位には、3本の沈線がめぐる。

405は頸部と胴部の下位を欠損する。胴部の上位はややふくらみ、上位に17本の沈線文がめぐり、刻目はない。重弧文の沈線の数と個数は不明である。406はやや小型で、胴部の上位はほぼまっすぐで、17本の沈線文がめぐり、刻目はない。重弧文の沈線の数と個数は不明である。器面調整はハケ目調整で、後に施文する。407は頸部の下位に突帯をめぐらす。この形態の重弧文土器は唯一の出土である。沈線文は19本で上位と中位に刻目を施す。408は頸部の上位と胴部上半より下位を欠損する。10本の沈線文をめぐらし、その上位に刻目を施す。409は胴部の上半上位と胴部下半下位を欠損する。胴部の器形はふくらみをもつ。7本の沈線で重弧文を施し、その下位に3本の沈線をめぐらし、刻目を施す。

410～414は重弧文長頸壺の頸部である。ゆるやかに開きながら立ち上がり、端部は大きく外反する。器面調整は縦へのハケ目調整である。410はやや小型で、頸部には上向きに暗文を施す。

415～428は胴部上半の頸部に近い部分の拓影で、沈線および刻目を有し、ハケ目調整の後施文を施す。429～463は胴部上半の下位の部分から胴の屈曲部分および胴部下半の上位の拓影で沈線および重弧文、刻目がうかがえる。433・434・440・463は山型に近い重弧文を施す。

449・450は小型の重弧文土器である。453は山型文である。456は重弧文が上向きに2段にわたって施されている。

464・465は鉢形土器である。464は丸底で、口縁部は頸部より屈曲し、外反して開く。器面調整は内外面ともハケ目調整であるが、内面の底には指頭圧痕がうかがえる。465は胴部より下位を欠損している。口縁部は頸部より屈曲し外反して開き、口縁端部はさらに屈曲する器面調整は内外面ともハケ目調整である。

466～471は高坏形土器である。466は脚部以下を欠損し、坏部は浅い。口縁部は頸部より屈曲し、大きく外反して開く。467は焼製時に脚が取れたもので、坏部は深い。口縁部は頸部で屈曲し直線的に開く。468は坏部の下位以下を欠損する。坏部に肩を持ち、口縁部は頸部ですどく屈曲し、外反して開き端部はさらに屈曲する。469は口縁部の上位と脚の裾部を欠損す

る。坏部は深く、口縁部は外反して開く。470・471は坏部および脚の裾部を欠損している。脚は開きぎみにゆるやかに外反してのびる。器面調整は基本的には内外面ともハケ目調整である。

472～485は甕形土器である。どれも胴部より下位を欠損する。胴部最大径は中央よりやや上位に位置する。口縁形態は頸部より屈曲してやや外反して開き、端部がわずかに屈曲するもの（472・474・482・483・484・485）と、直線的に開くもの（473・476）、外反して開くもの（475・477・478・479・481）、外反して開き端部が薄くなるもの（480）とがある。頸部内面の稜線は明確である。484は口径より胴部最大径が上回り、頸部内面の稜線は不明瞭である。器面調整は基本的に内外面ともハケ目調整である。486は甕形土器で、制作時に脚が取れたもので、その後箆で整形している。

487～366は大型の甕形土器である。頸部のすぐ下の部分に1条の刻目突帯をめぐらす。そのほとんどが胴部より下位を、もしくは脚を欠損する。胴部最大径は上位に位置し、口径はそれを上回る。胴部は頸部より丸みをおびて脚にいたるものと、ほぼ直線的に脚にいたるもの（490）とに区分できる。器面調整は内外面ともハケ目調整である。496は甕形土器の胴部より下位の部分である。脚は外反して開く。器面調整は内外面ともハケ目調整で、脚の基部に指頭圧痕がうかがえる。

497は鉢形の手捏土器である。

58号住居跡（第141図）

22区に位置する竪穴式住居跡で、56号・57号住居跡を切っており、そのほとんどが調査区外にのびいている。平面形態は長方形と推定され、その北東部にベッド状遺構の一部がうかがわれる。床面よりの比高差は7㎝で、さらにそれよりの壁高は28㎝である。炉および柱穴は確認できなかった。

出土遺物は土器が1点出土したのみであった。

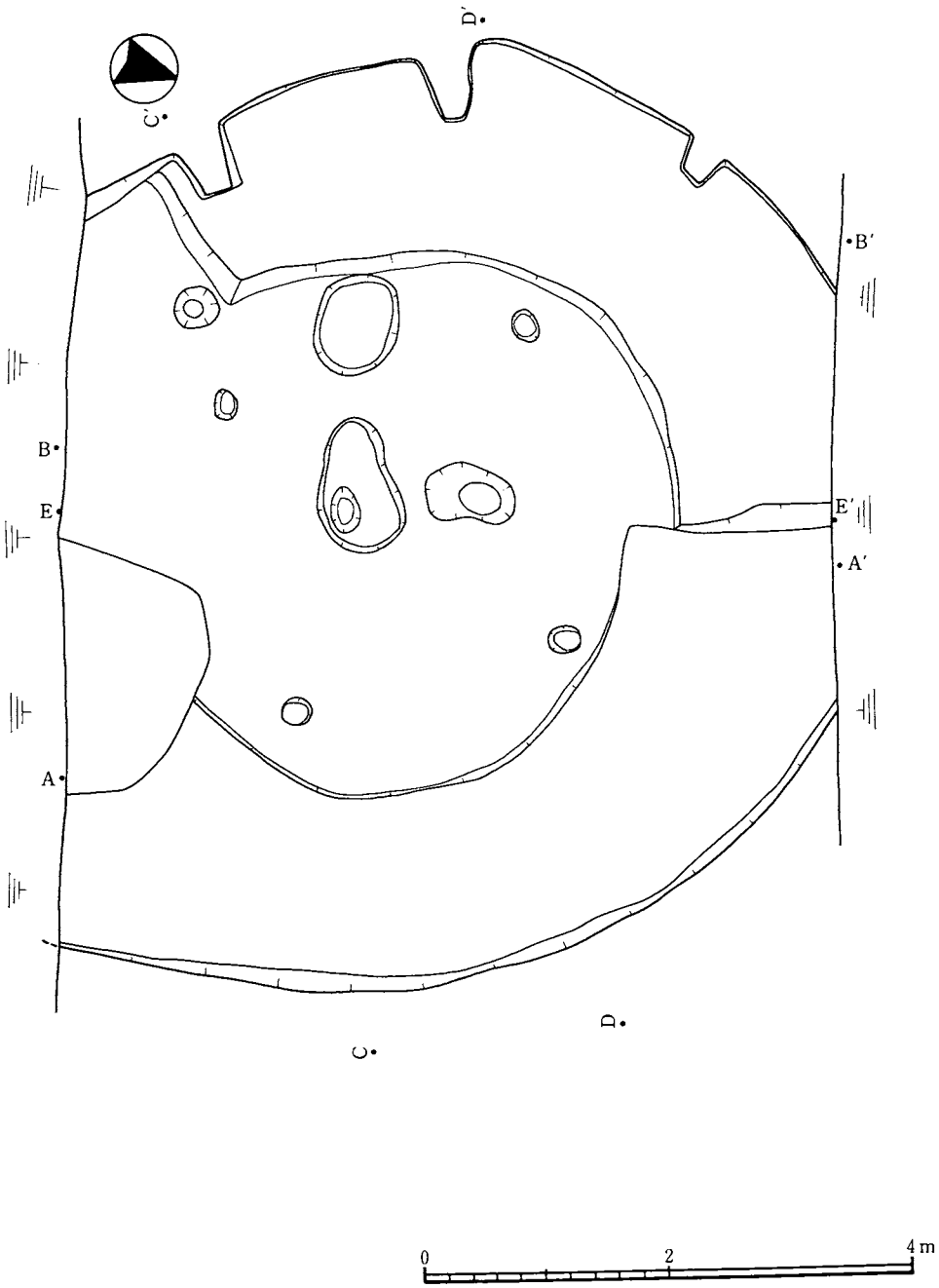
〔土器〕（第141図498）

498は重弧文長頸壺の胴部上半の部分である。細片であるが、重弧文の一部がうかがえる。

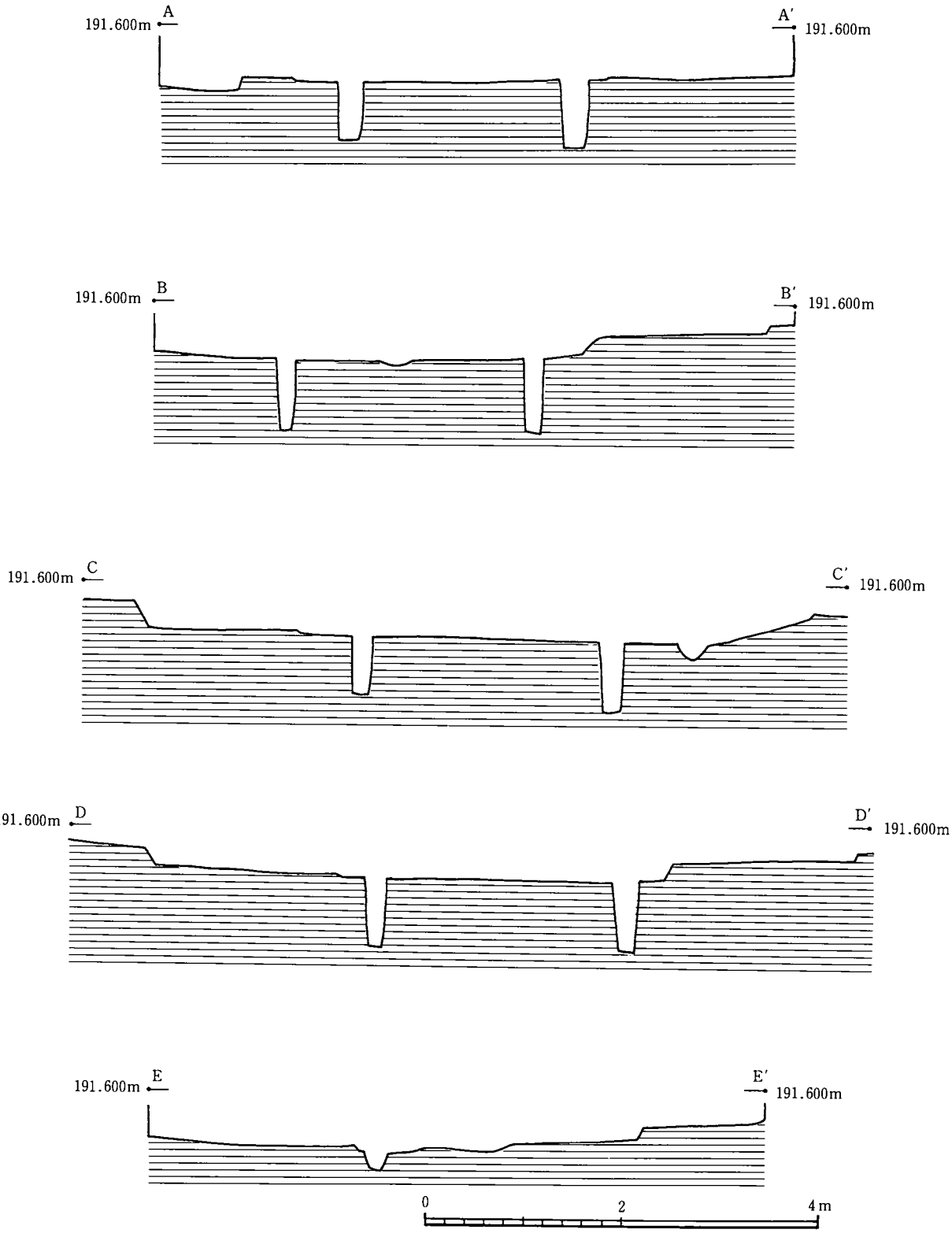
59号住居跡（第142図）

21から22区に位置する竪穴式住居跡で、56号住居跡と切り合い関係をもつ。59号住居跡の方が新しい。切り合い確認時に逆に判断したため、堀り方も逆になってしまい、正確なプランをみいだせなかった。炉の位置より、平面形態は長方形と推測され、短軸で2ｍ56㎝を測る。

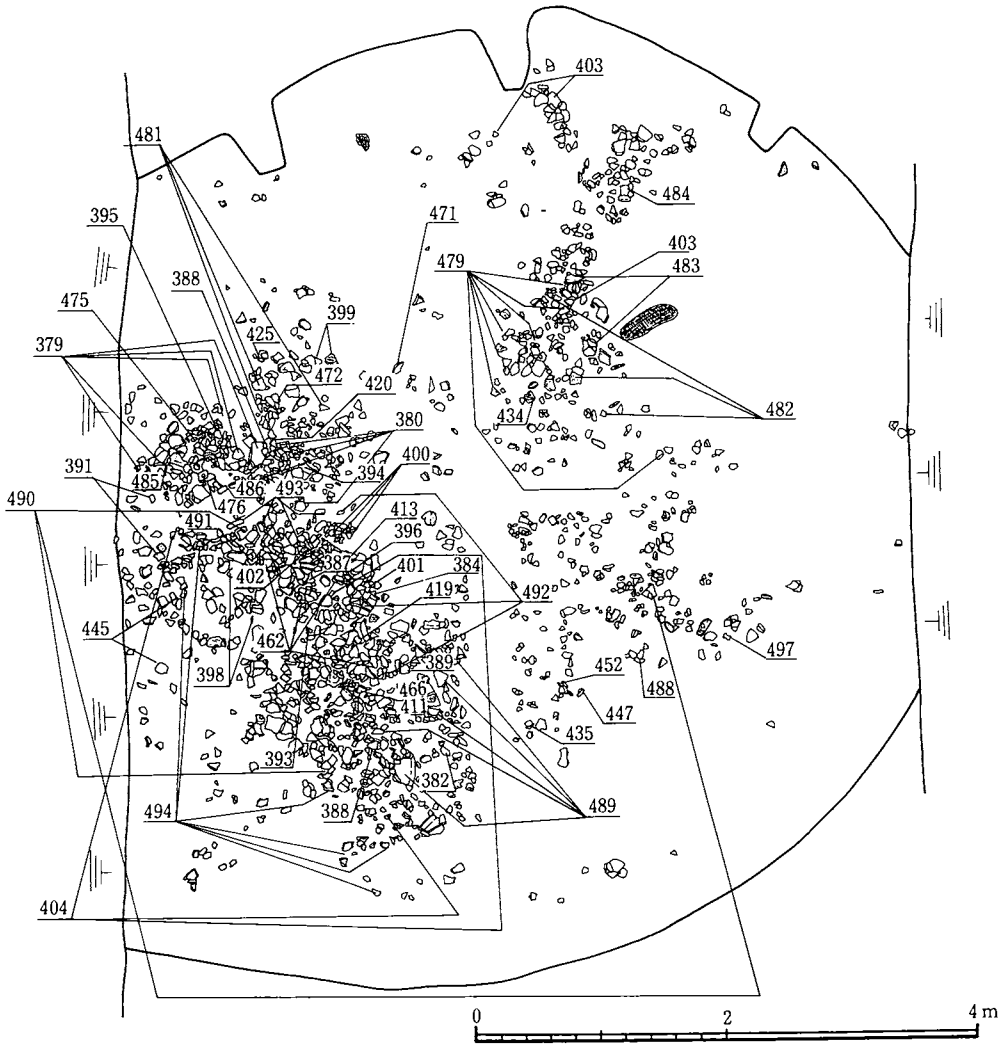
炉の平面形態は長軸50㎝、短軸36㎝で深さは3～5㎝であった。柱穴は切り合って3個確認したが、この住居跡の主柱穴となるものは確認できなかった。遺物は土器が少量出土したが、図化できるものはなかった。土器のほかには砥石が1点（85）出土した。



第118図　57号住居跡実測図



第119図　57号住居跡断面実測図



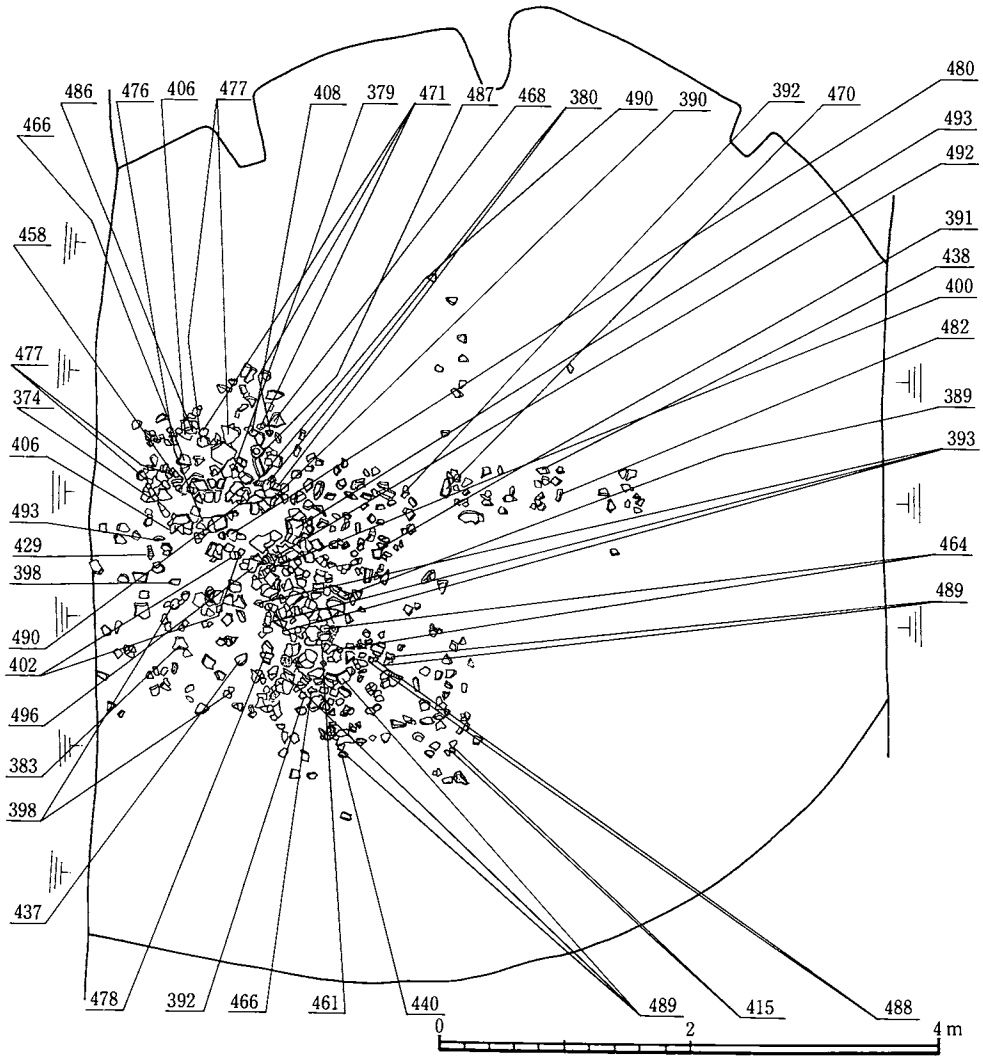
第120図　57号住居跡遺物出土状況実測図（1）

60号住居跡（第143図）

57号住居に収まるかたちで確認した竪穴式住居跡で、57号を切っており、南側は調査区外にのびているため、その全容は不明である。平面形態は不定形で、規模も不明である。炉および柱穴も確認できなかった。出土遺物は57号住居跡からの流れ込みの可能性もあるが、ここではいちおう図示しておく。砥石も１点（90）出土した。

〔**土器**〕（第143図499～503）

499は重弧文長頸壺の頸部で下位以下を欠損している。口縁端部は大きく外反して開く。器面調整は内外面ともハケ目調整を施し、その上に暗文を施す。500～503は重弧文土器の胴部上半および屈曲部の部分の破片である。器面調整はハケ目調整で、後に施文する。



第121図　57号住居跡遺物出土状況実測図（2）

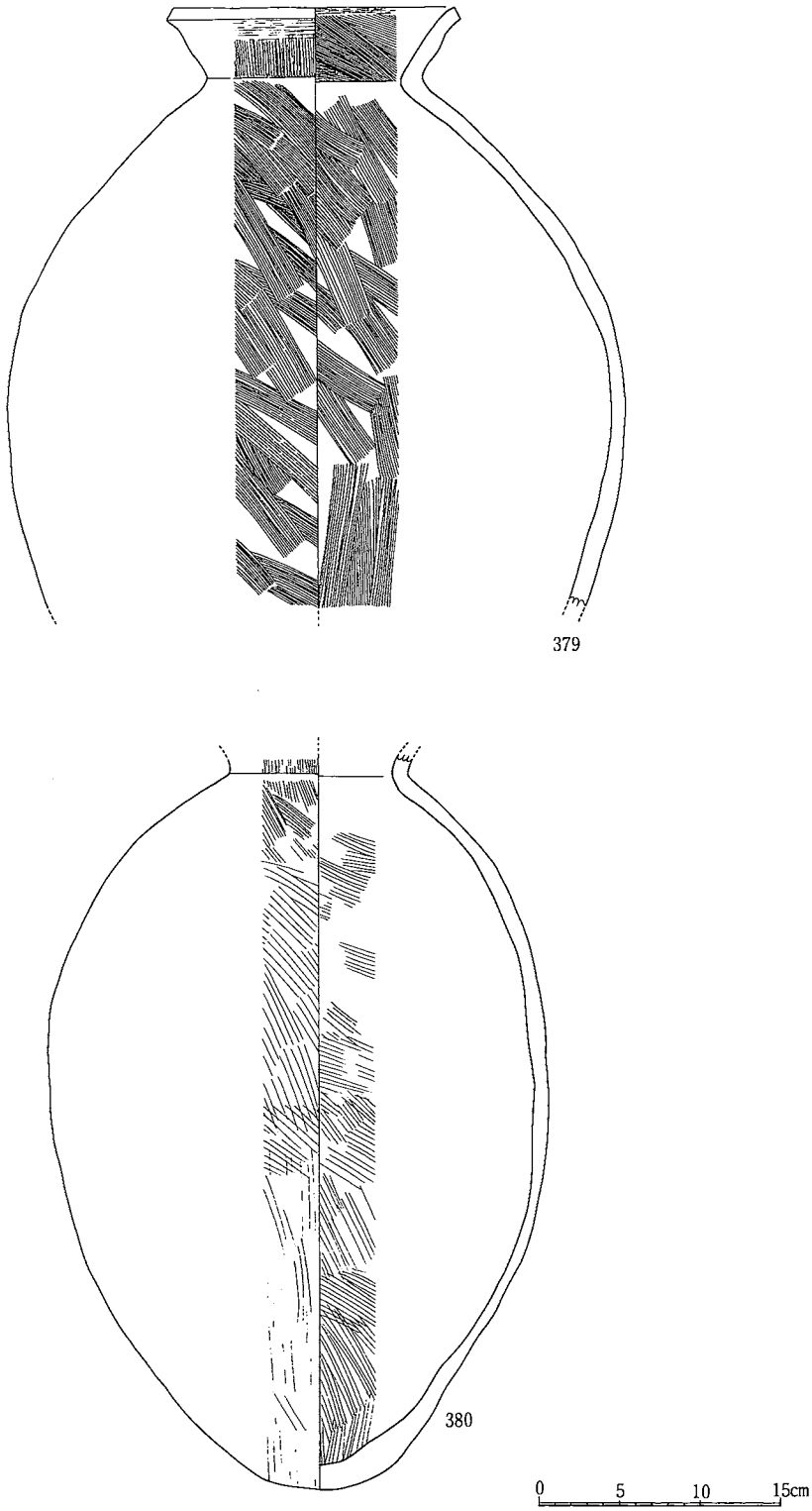
61号住居跡（第144図）

23区に位置する竪穴式住居跡で、西側の一部を57号住居跡によって切られており、南側は調査区外にのびている。平面形態は不定形で、東西軸は2 m35cmを測る。壁高は北側で26cmである。

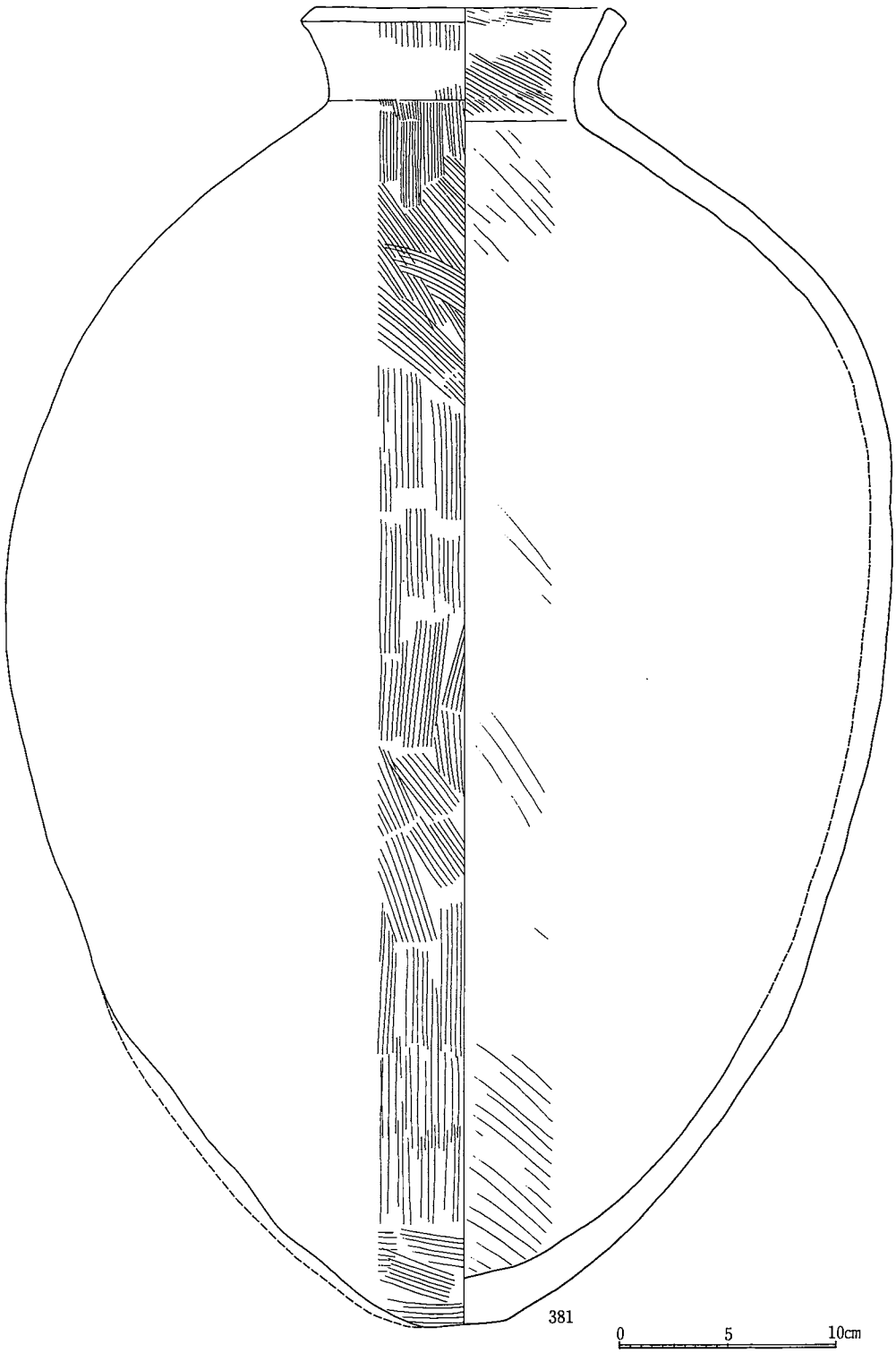
炉および柱穴は存在しなかった。出土遺物は土器が数点出土した。

〔土器〕（第144図504～505）

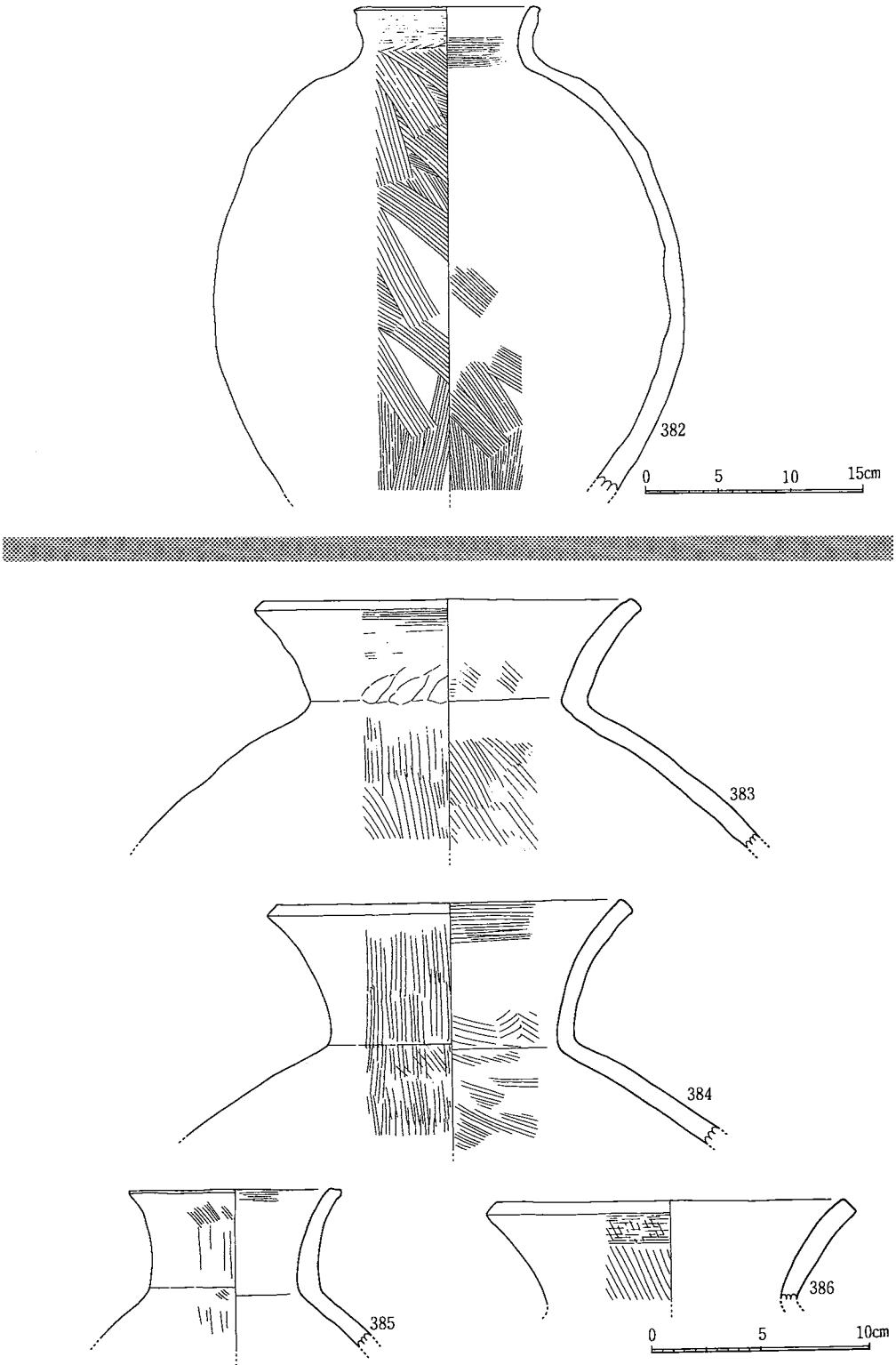
504・505は重弧文長頸壺の胴部上半の部分である。504は頸部に近い部分で、ハケ目調整の後細い沈線文をめぐらす。505は胴部上半の下位の部分で、ハケ目調整を施した後に重弧文を施文している。



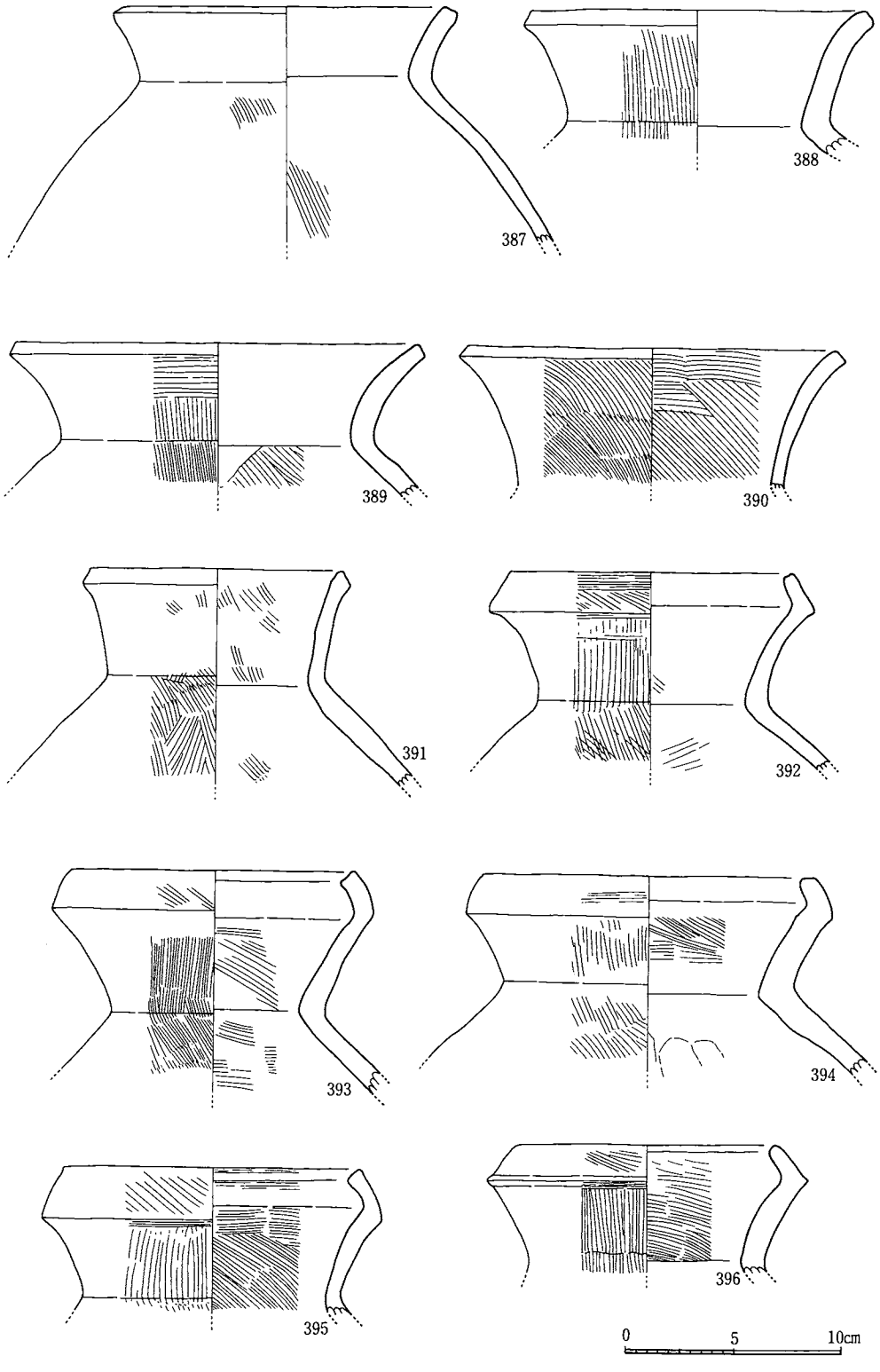
第122図　57号住居跡出土土器実測図（1）



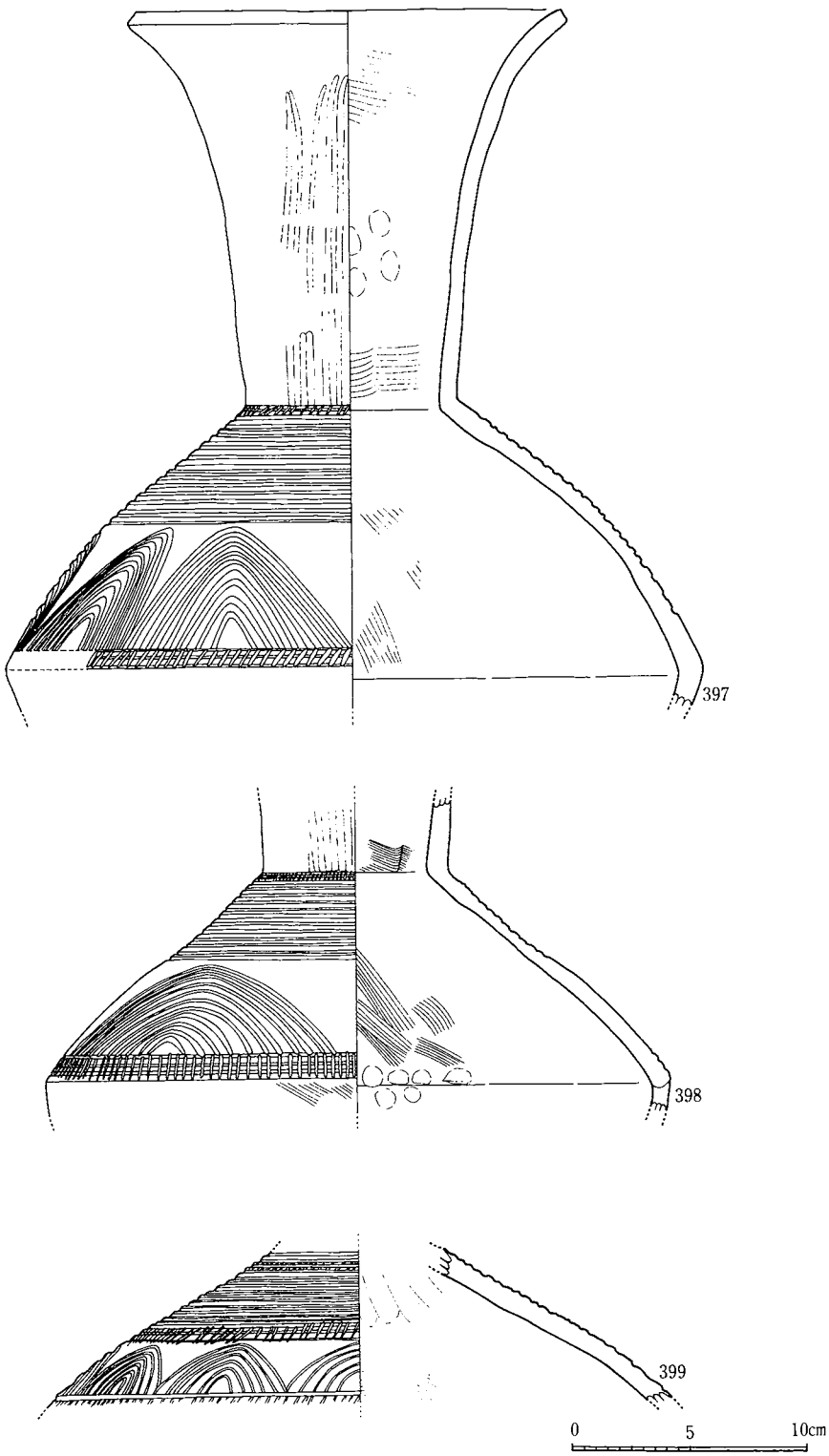
第123図　57号住居跡出土土器実測図（２）



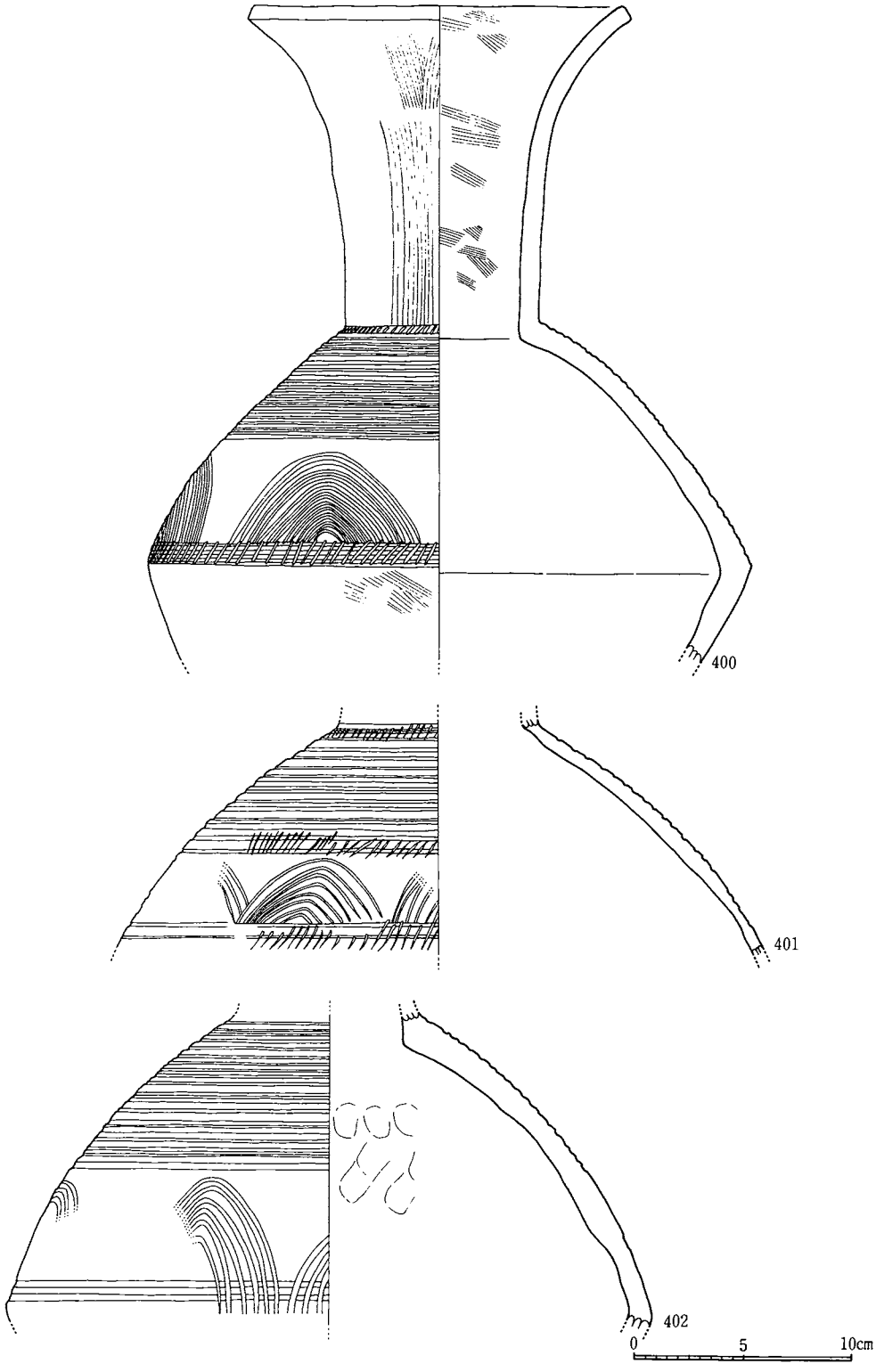
第124図　57号住居跡出土土器実測図（３）



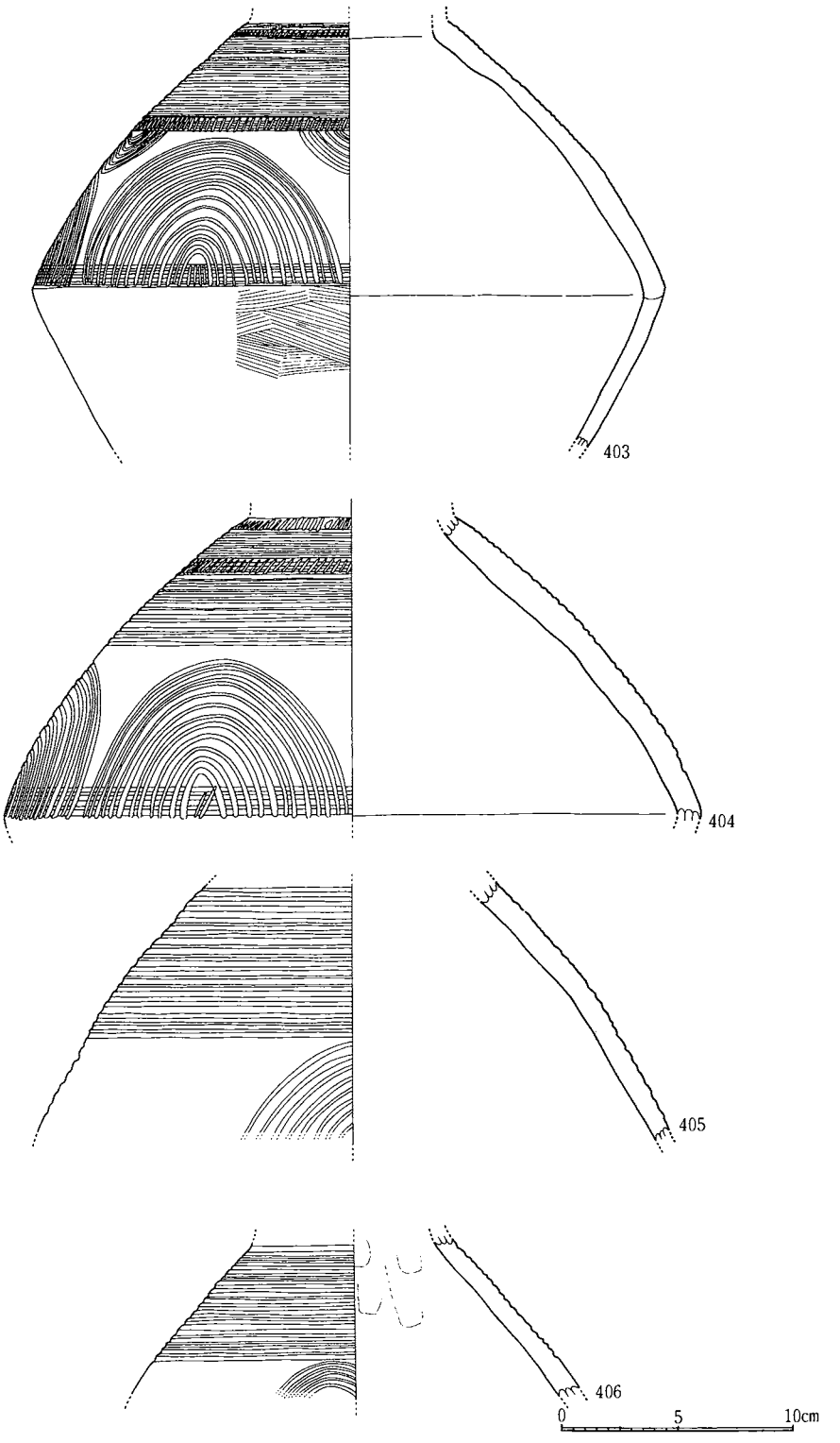
第125図　57号住居跡出土土器実測図（4）



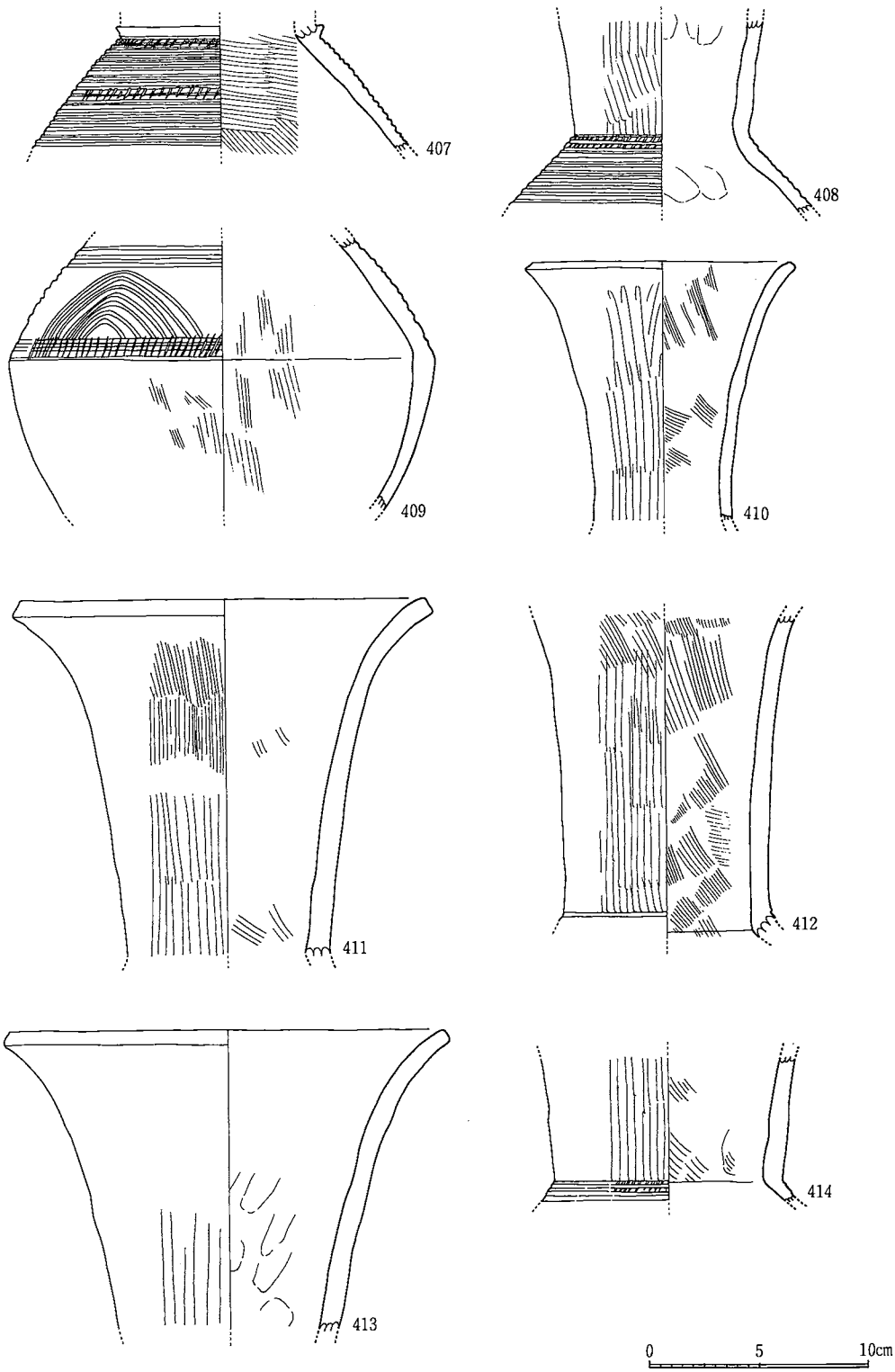
第126図　57号住居跡出土土器実測図（５）



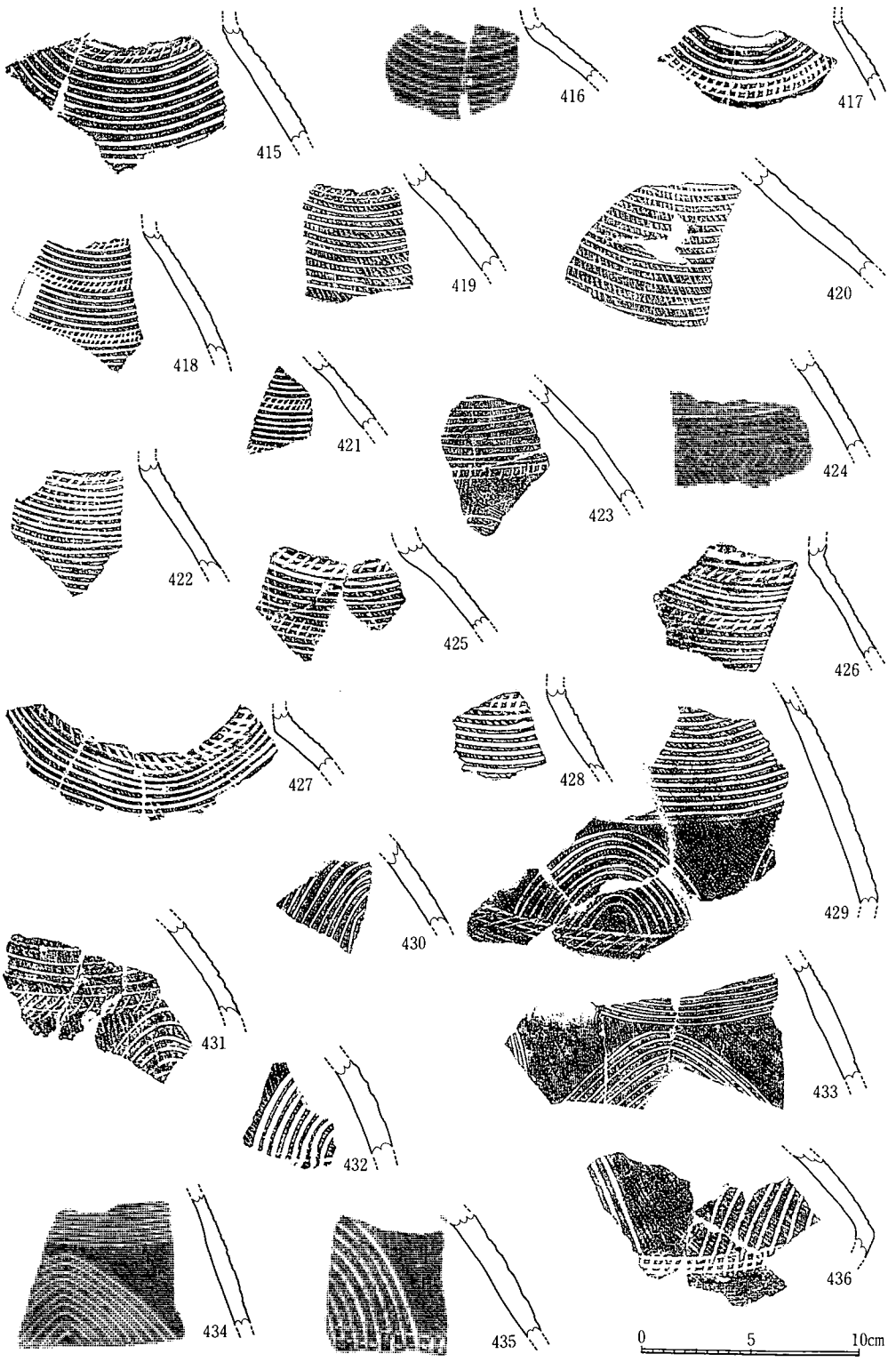
第127図　57号住居跡出土土器実測図（6）



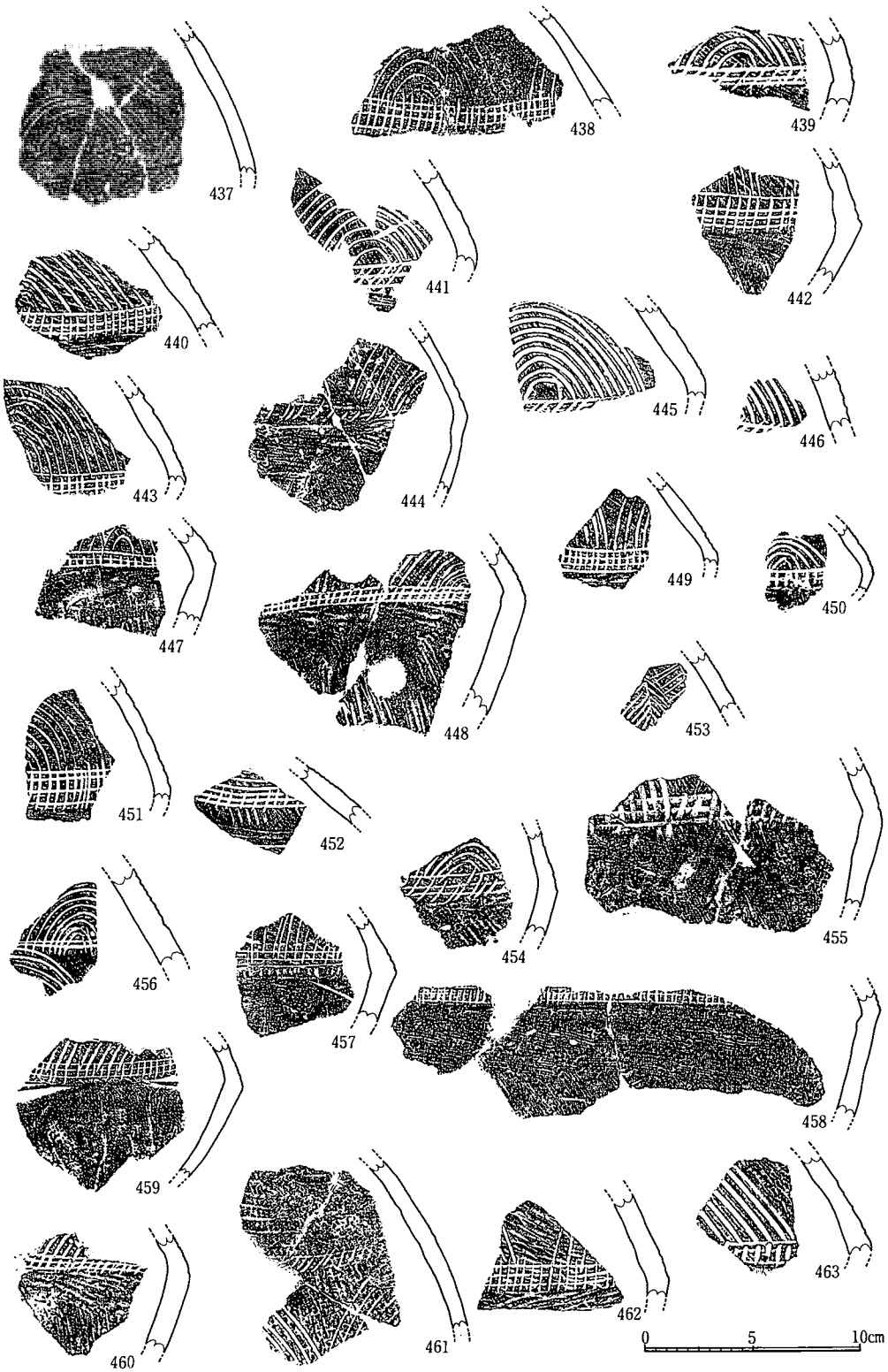
第128図　57号住居跡出土土器実測図（7）



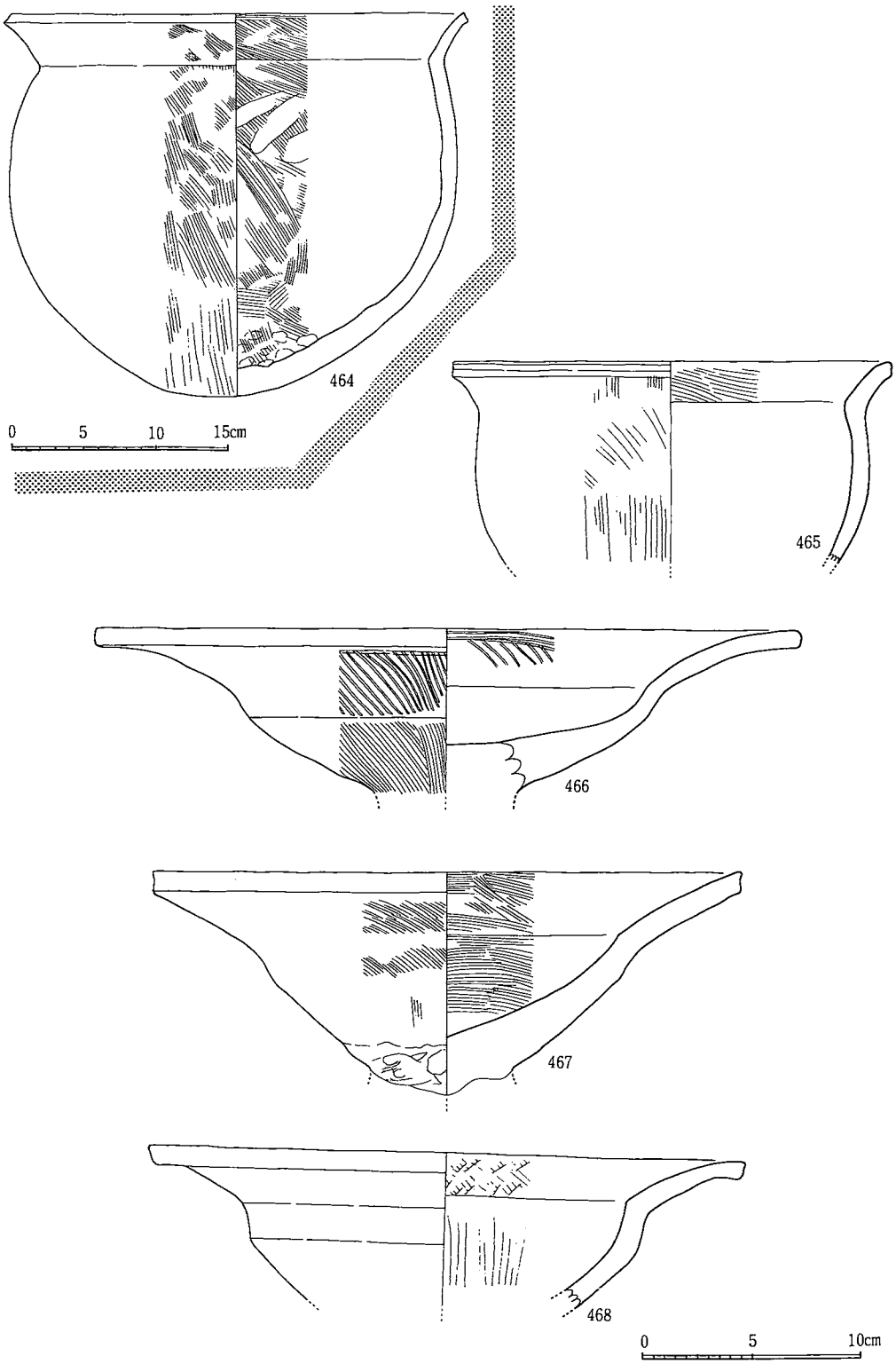
第129図　57号住居跡出土土器実測図（8）



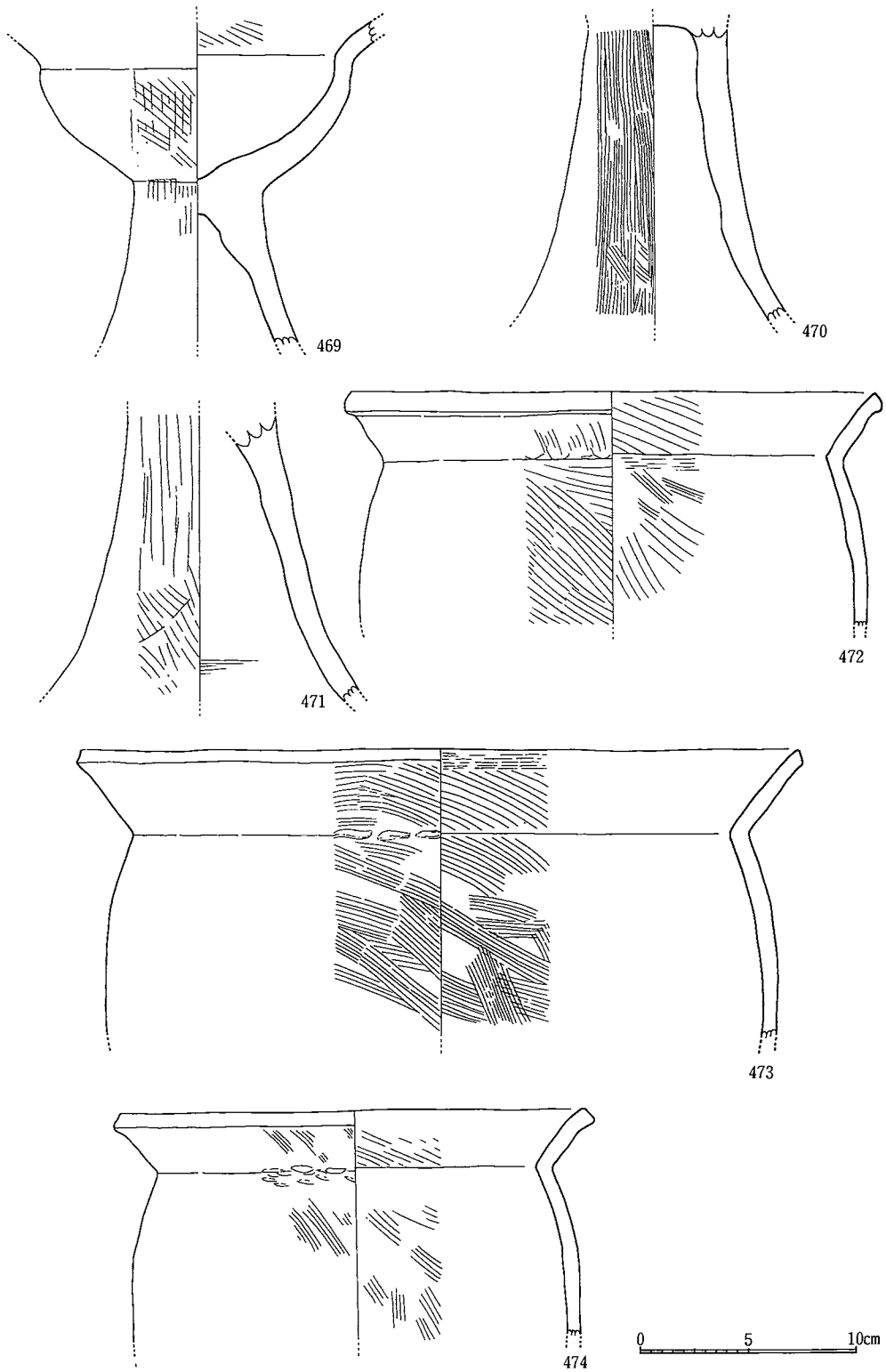
第130図　57号住居跡出土土器実測図（９）



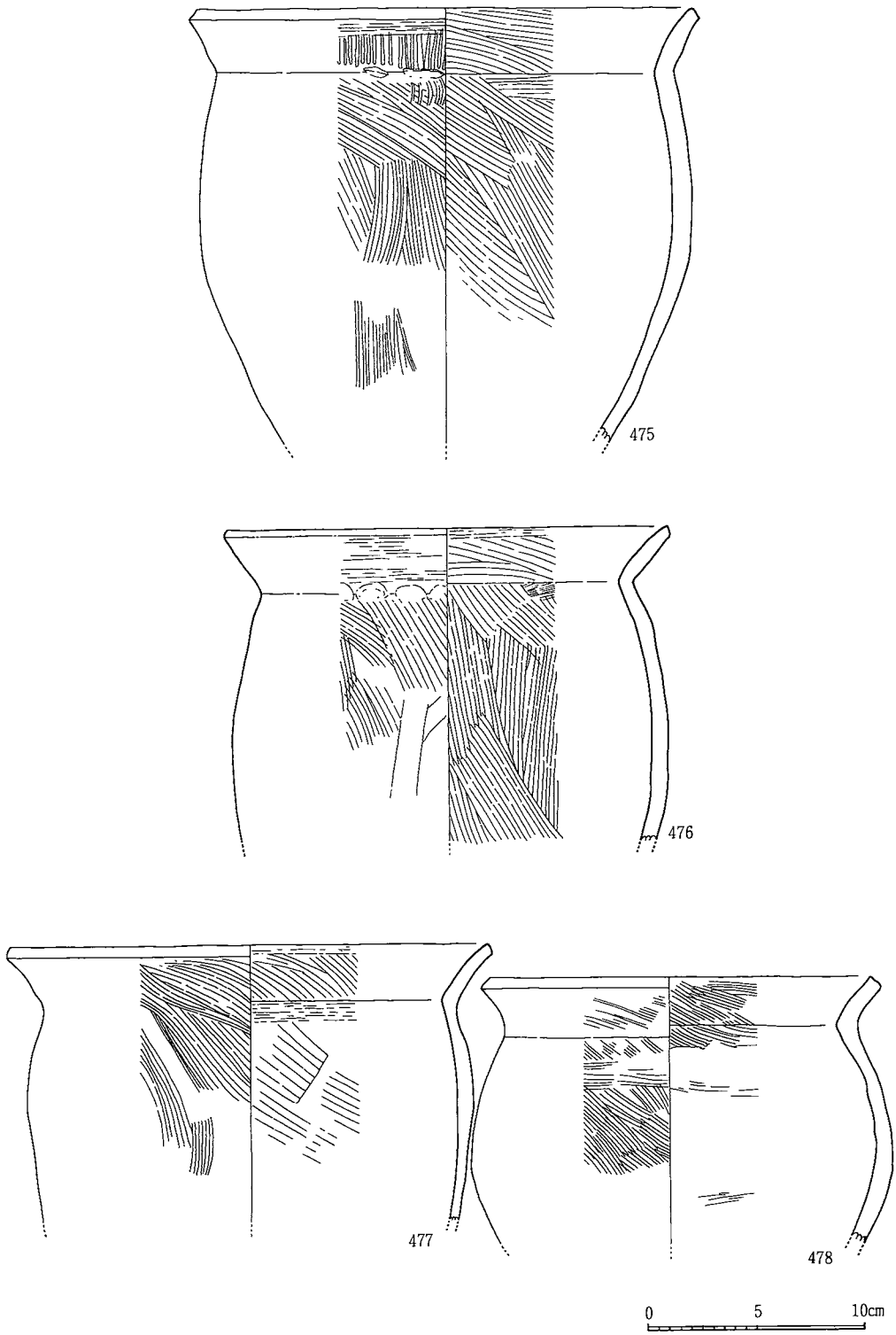
第131図　57号住居跡出土土器実測図（10）



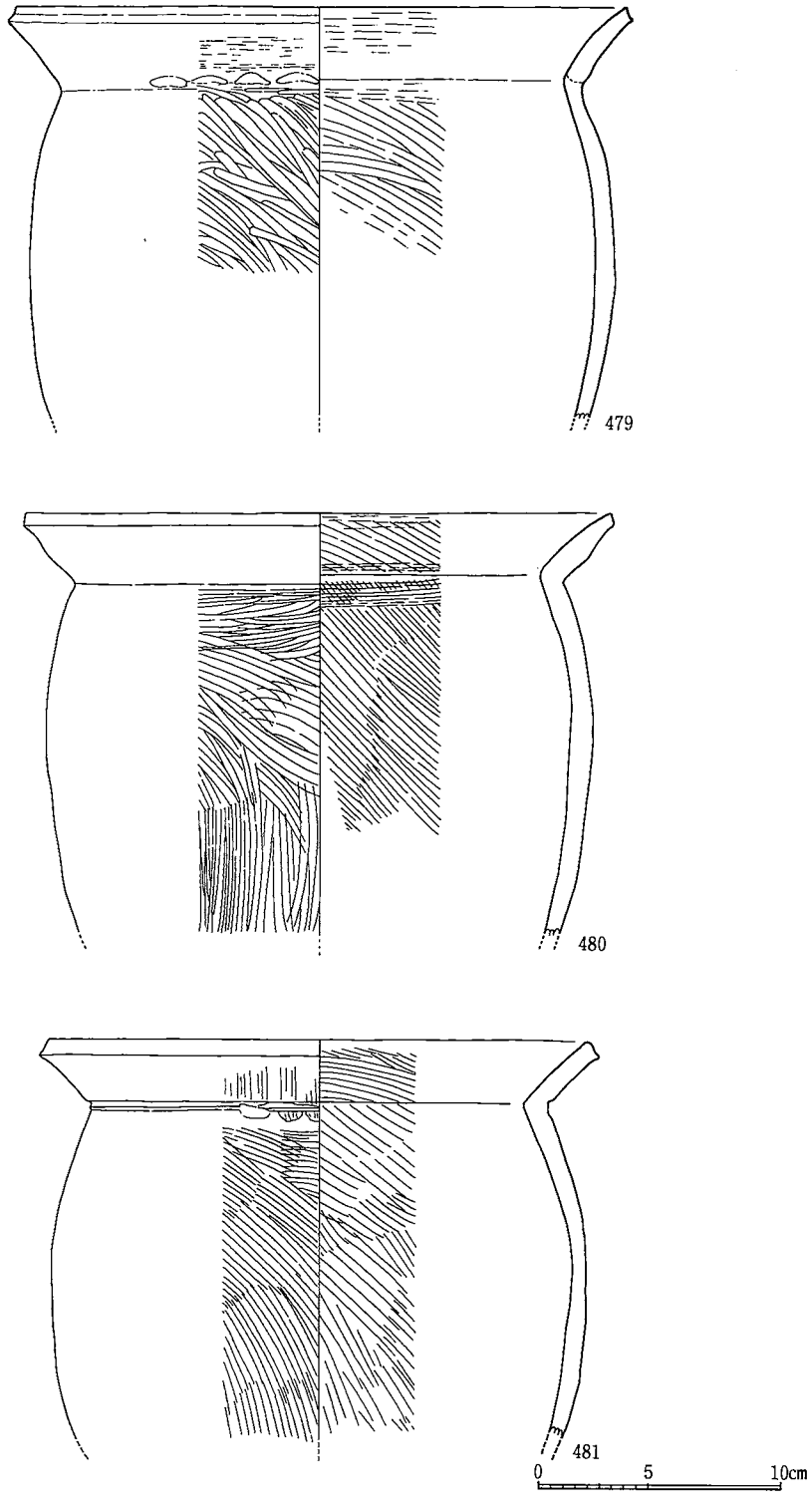
第132図　57号住居跡出土土器実測図（11）



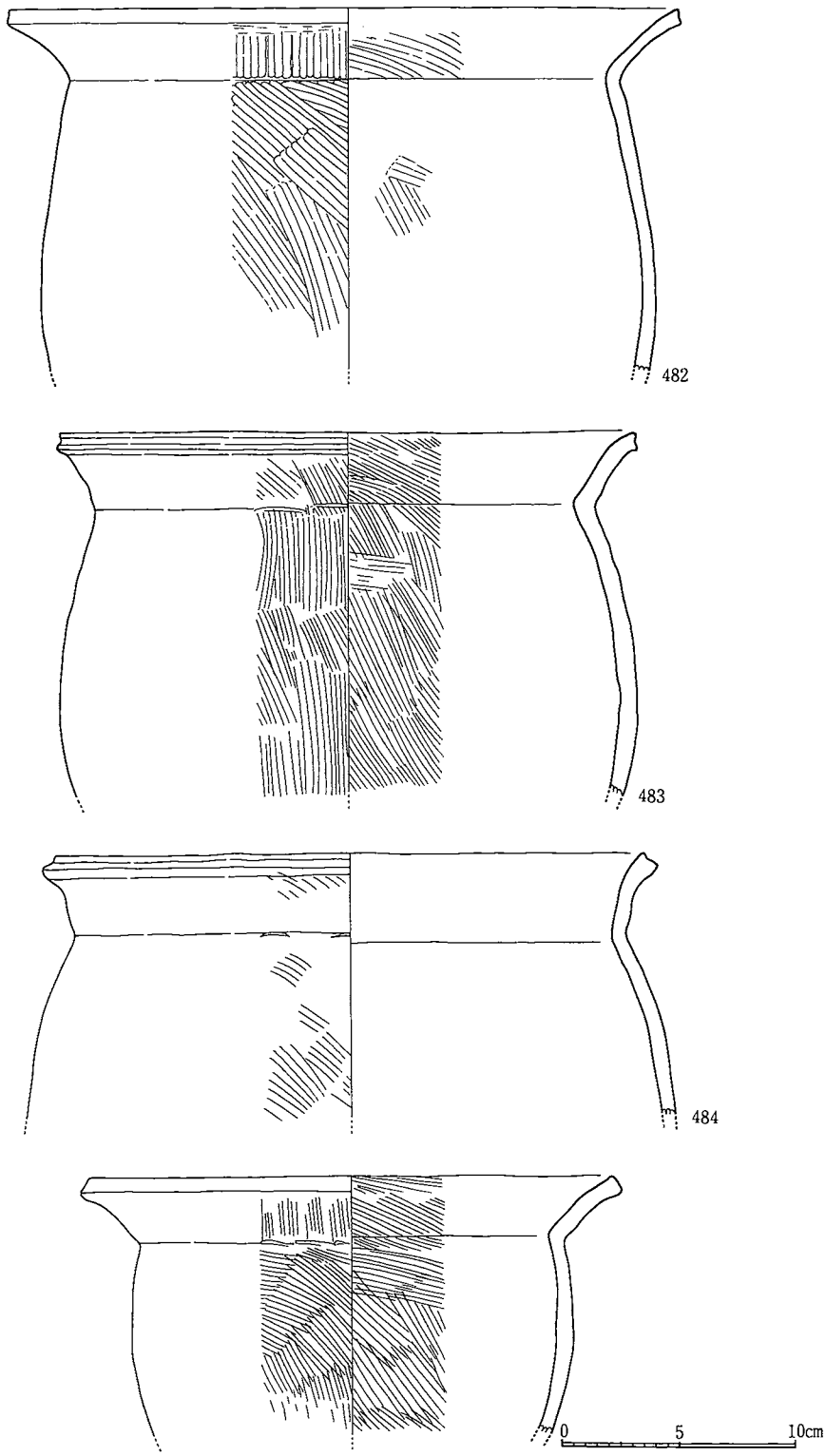
第133図　57号住居跡出土土器実測図（12）



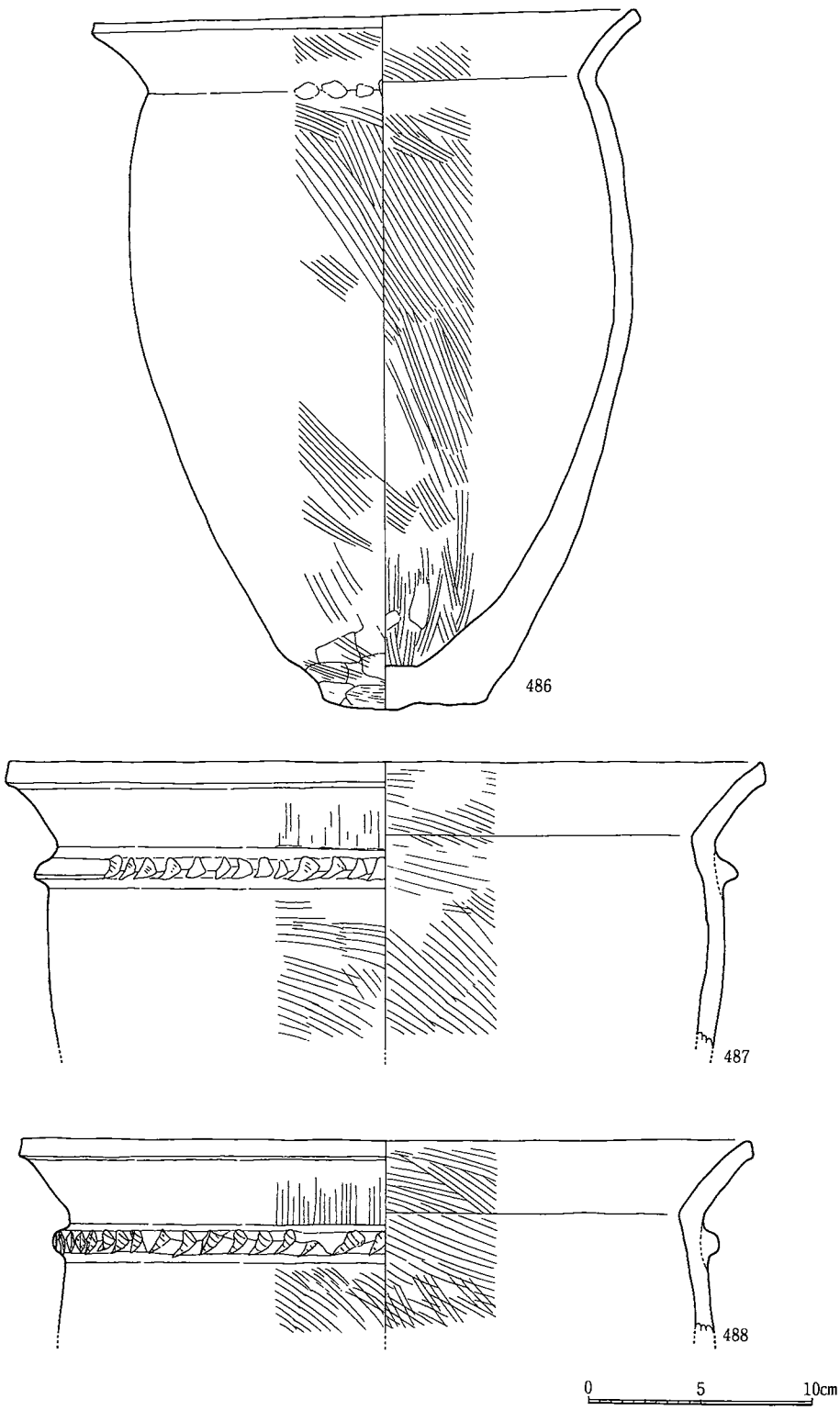
第134図　57号住居跡出土土器実測図（13）



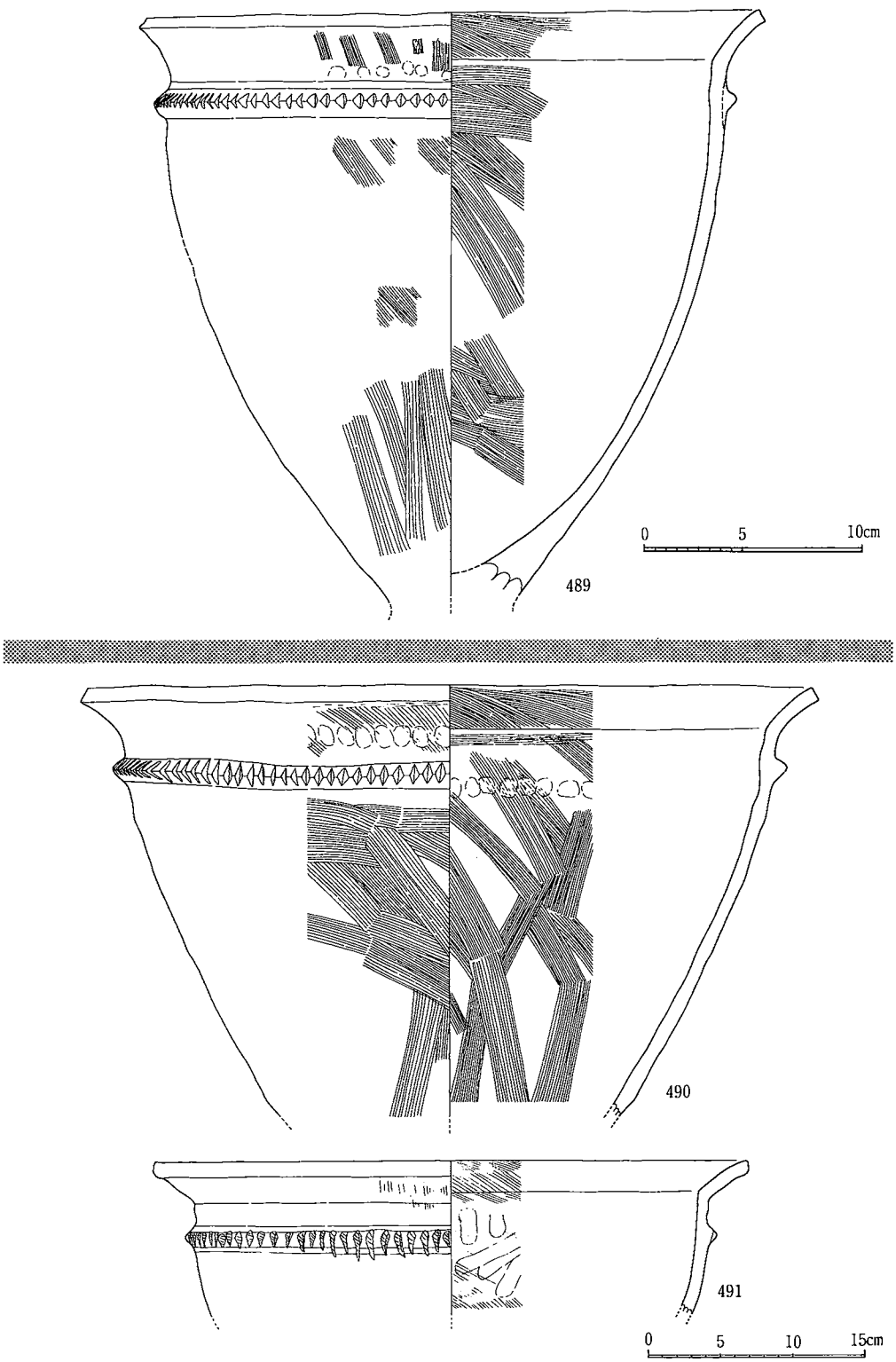
第135図　57号住居跡出土土器実測図（14）



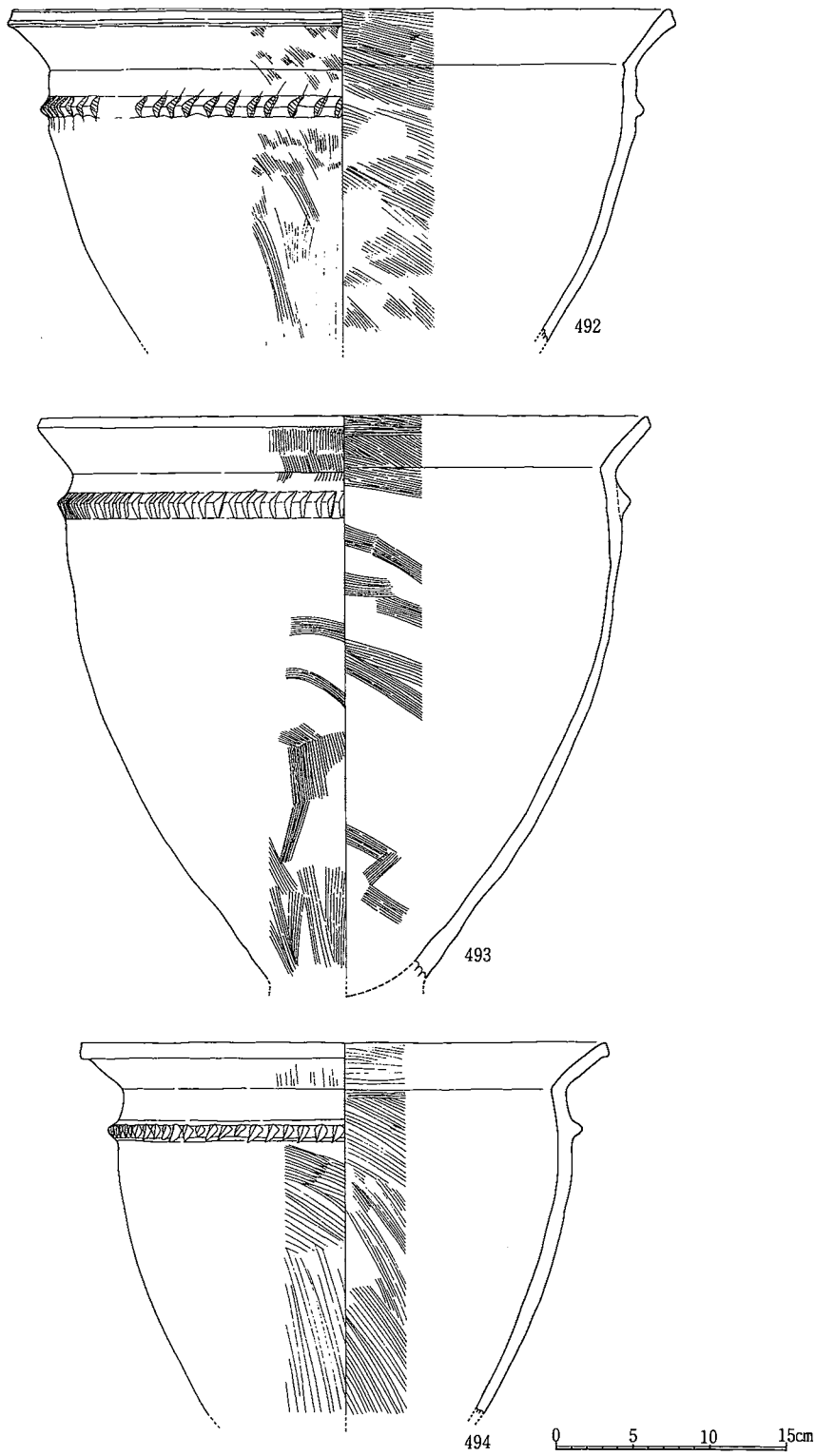
第136図　57号住居跡出土土器実測図（15）



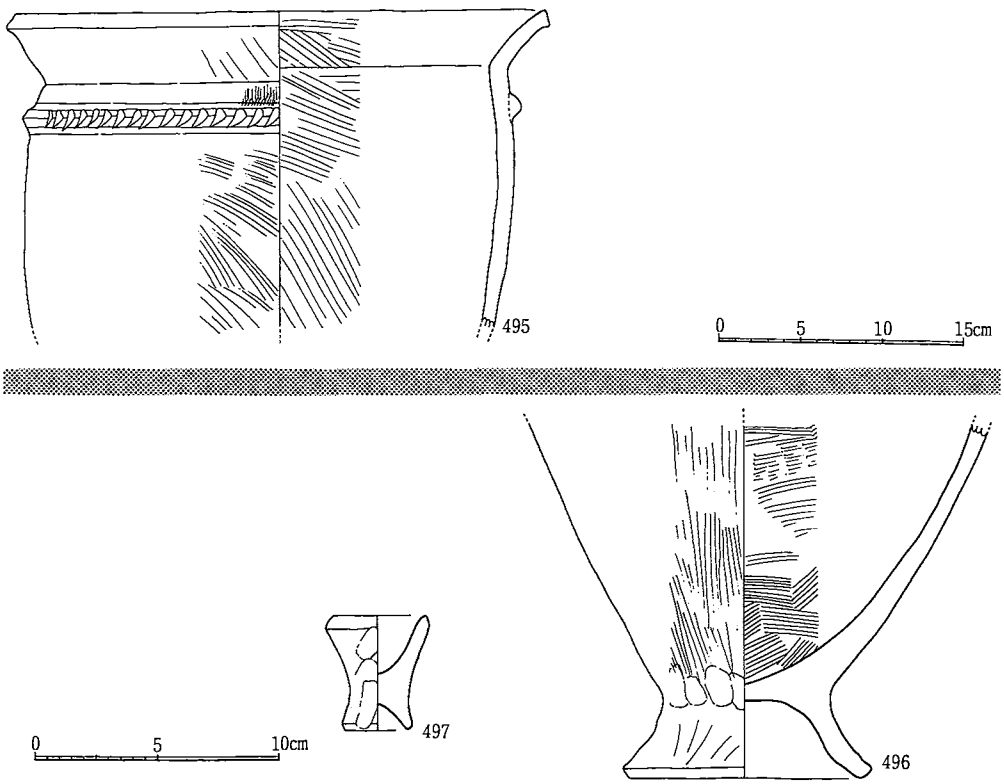
第137図　57号住居跡出土土器実測図（16）



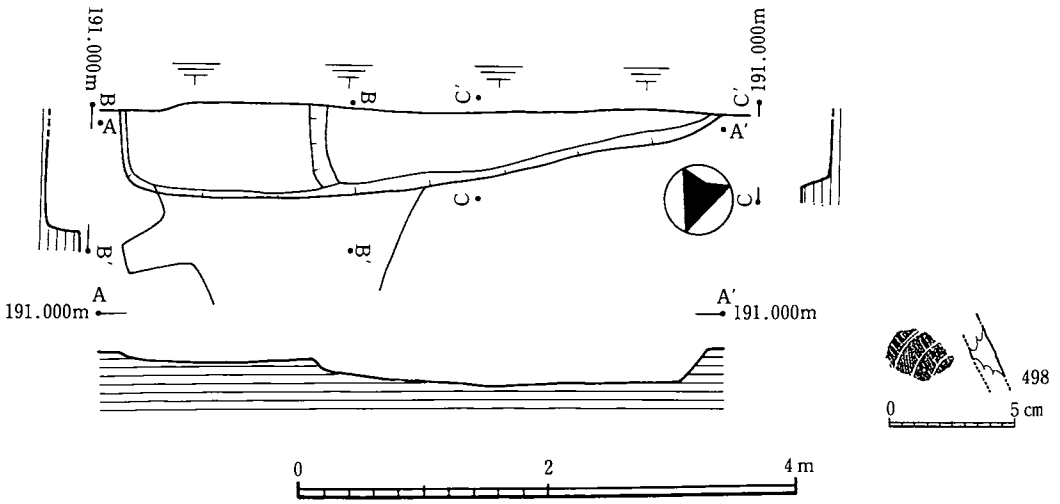
第138図　57号住居跡出土土器実測図（17）



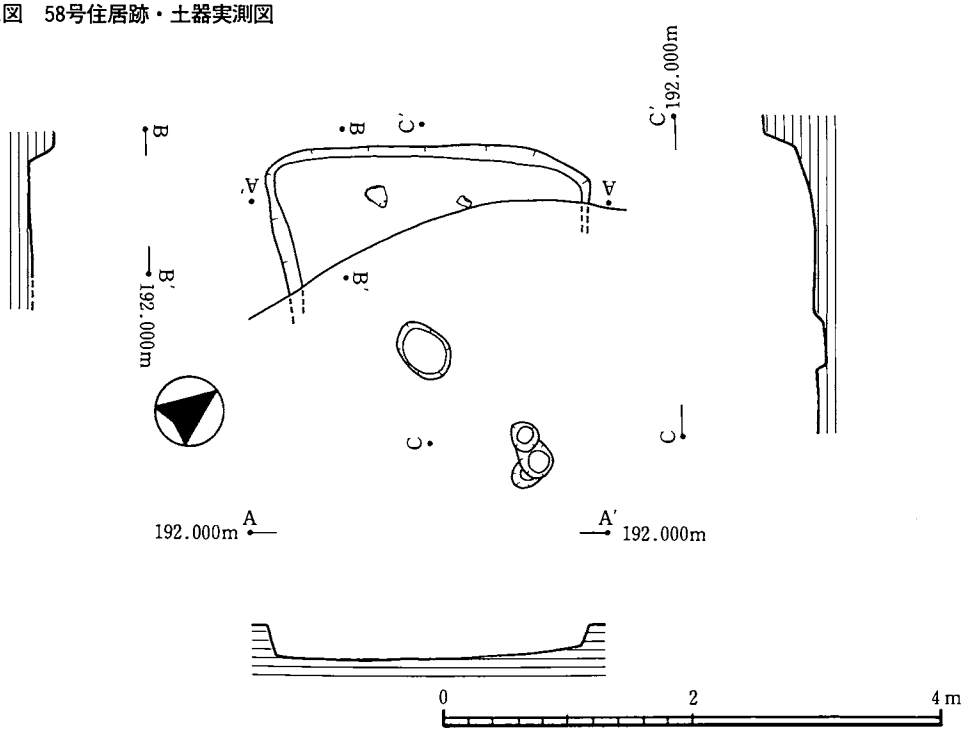
第139図　57号住居跡出土土器実測図（18）



第140図　57号住居跡出土土器実測図（19）



第141図　58号住居跡・土器実測図

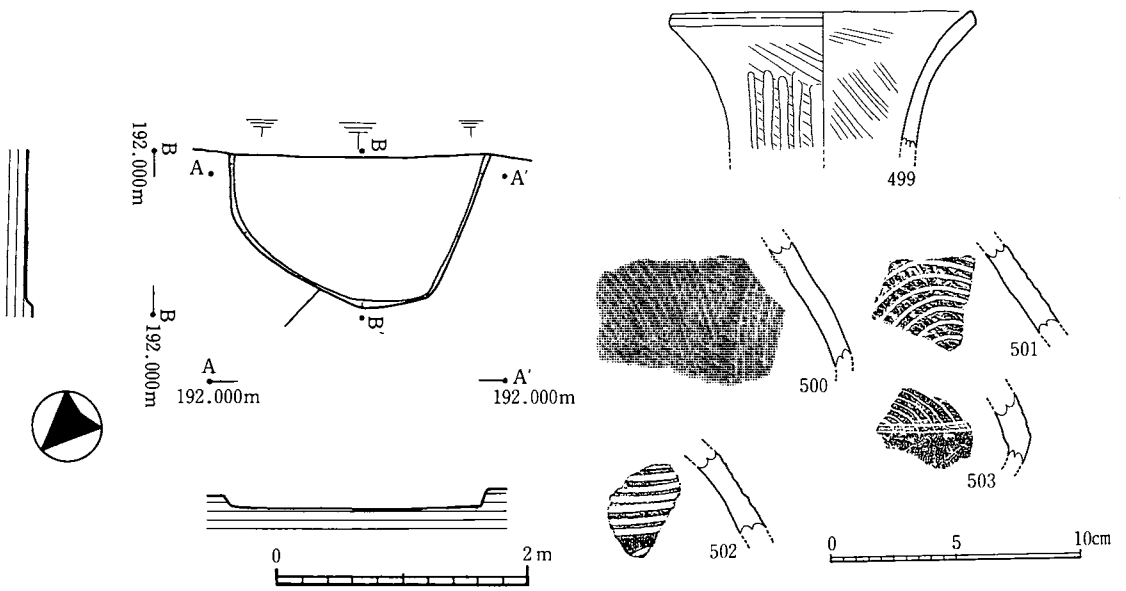


第142図　59号住居跡実測図

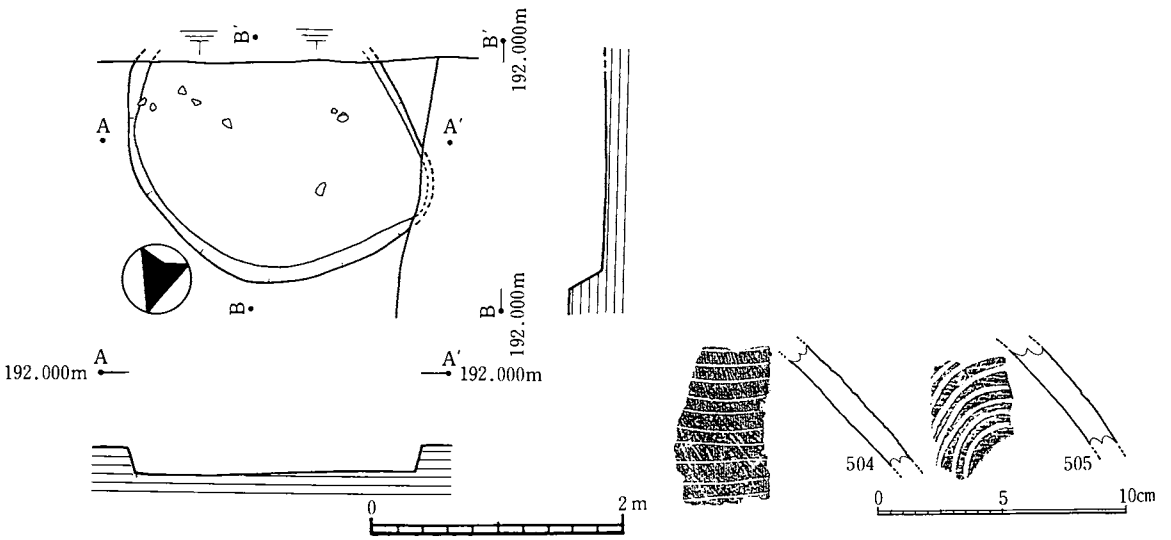
62号住居跡（第145図）

25区に位置する竪穴式住居跡で、南側は調査区外にのびており、その全容は不明である平面形態は長方形と推測され、東西軸で4m50cmを測り、壁高は北側で20cmである。ベッド状遺構は設けていない。

柱穴は4個を確認したが、主柱穴となるかは不明である。炉は調査区外に存在すると思われる。出土遺物は、土器のほかにはなかった。



第143図　60号住居跡・土器実測図

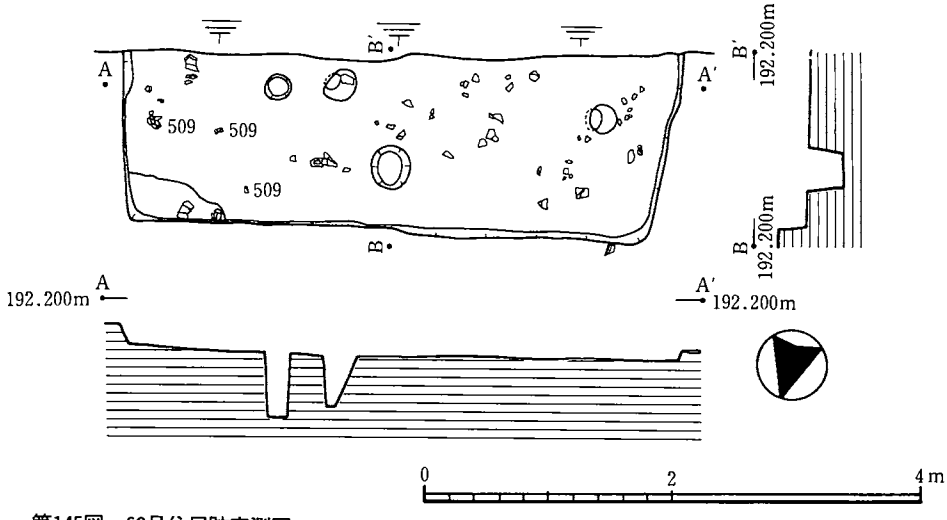


第144図　61号住居跡・土器実測図

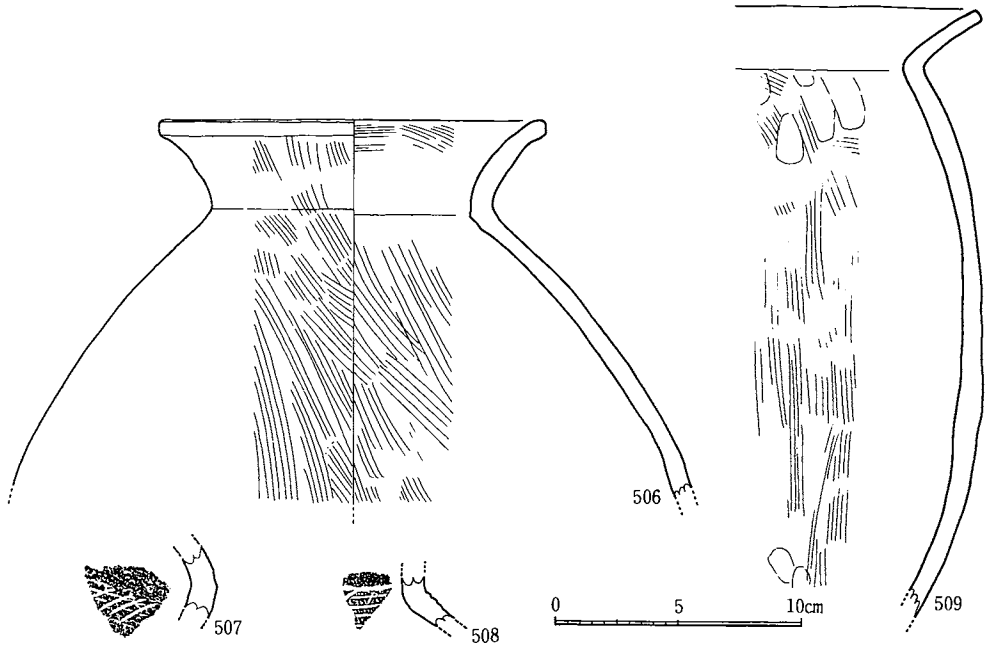
〔土器〕（第146図506～509）

506は素口縁の壺形土器で、胴部中央より下位を欠損する。胴部の最大径はほぼ中央に位置すると推定される。頸部は外反して開く。器面調整は内外面ともハケ目調整である。507・508は重弧文長頸壺の破片である。507は胴部の屈曲部分で、３本の沈線と刻目がうかがえる。508は胴部の最上位の部分で、沈線に刻目がうかがえる。

509は甕形土器で、口径および胴部の最大径は復元できなかった。胴部の最大径はほぼ中央



第145図　62号住居跡実測図

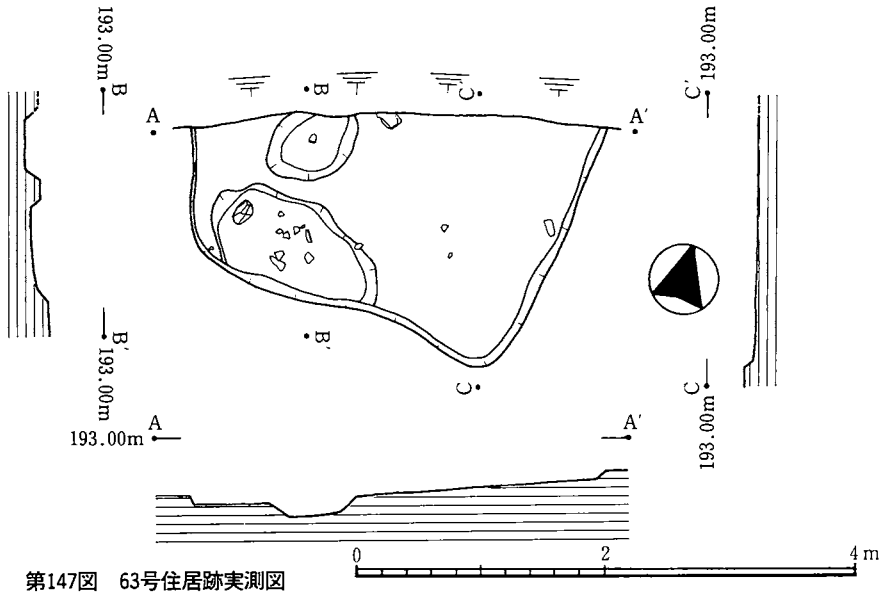


第146図　62号住居跡出土土器実測図

に位置する。口縁部は頸部より直線的に開く。内面の調整は、ハケ目調整である。

63号住居跡（第147図）

25区に位置する竪穴式住居跡で、北側は調査区外にのびており、その全容は不明である。平面形態は正方形に近い不定形で、東西軸は３m12cmを測り、壁高は６～７cmである。住居跡の西寄りに長軸80cm、短軸58cm、深さ10cmの楕円形を呈する堀込みを確認した。焼土や炭化



第147図　63号住居跡実測図

物等は確認できなかったが、炉として使用されたものであろう。貯蔵穴は南の壁際に設けられており、長軸１ｍ50cm、短軸75cmの楕円形を呈する。柱穴は確認できなかった。

出土遺物は土器が少量あったが、図化にたえられなかった。ほかに貯蔵穴より、砥石が１点(88) 出土した。

64号住居跡（第148図）

25から26区に位置する竪穴式住居跡で、南側は調査区外にのびており、その全容は不明である。平面形態は正方形または長方形と推定され、東西軸は２ｍ48cmを測り、壁高は西側は９cmで、東側は比高差はない。北側に炉と思われる長軸82cm、短軸63cmの楕円形を呈する堀込みを確認した。焼土および炭化物はなかった。柱穴は２個確認したが、この住居跡に伴うものかは不明である。

出土遺物は土器が少量あったが、図化にたえられるものはなかった。

65号住居跡（第149図）

27区に位置する竪穴式住居跡で、南は調査区外にのびている。平面形態は方形を呈するものと推定され、東西軸４ｍ10cmを測る。壁高は12～19cmである。炉はやや北寄りに設けられ、その平面形態は三角形を呈し、一辺が約60cmで、深さは５cmと浅い。炉底には焼土が残っていた。柱穴は炉よりやや北寄りに２個が確認できた。炉との位置関係から、もう２個は調査区外に存在するものと思われる。

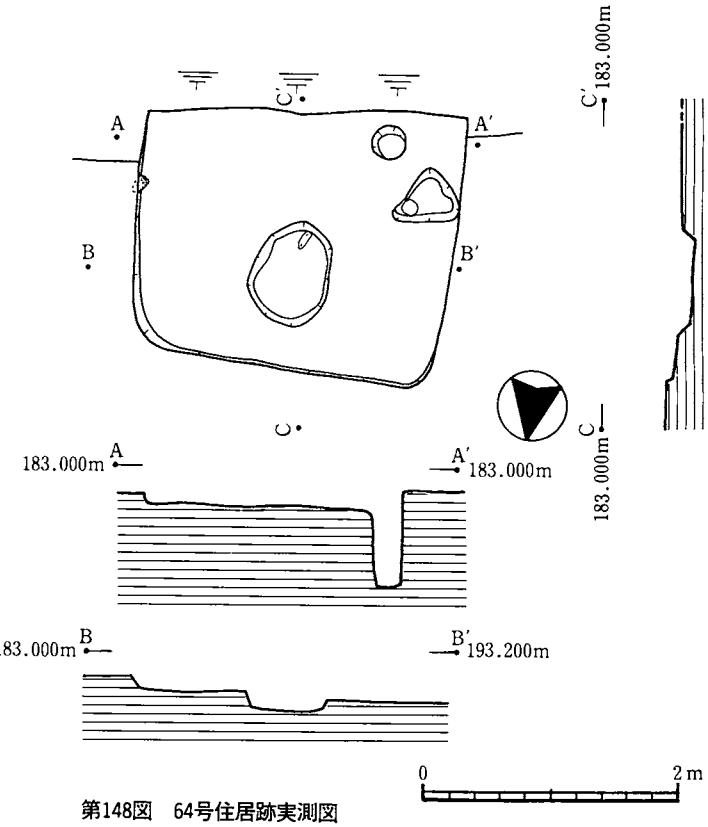
出土遺物は少量の土器のほかに、銅釧（第198図３）が出土した。

〔土器〕（第150図510）

510は高坏形土器で、坏部および脚部の下位を欠損している。脚はほぼ直線的にやや開きながらのびる。器面調整は外面が縦方向のハケ目調整で、内面はハケ目の後、ナデ調整を施す。

66・67号住居跡（第151図）

27から28区に位置する竪穴式住居跡で、66号住居跡は、67号住居跡によって切られ、北側は調査区外にのびている。さらにバックホーにより削平を受け、全容はほとんど不明である。平面形態は円形で、直径は推定値で4ｍ40㎝を測る。壁高は1～4㎝でひじょうに浅い。炉および柱穴は確認できなかった。



第148図　64号住居跡実測図

出土遺物は、図化にたえられるものはなかった。

67号住居跡は北側のほとんどが調査区外にのびている。平面形態は円形で、その規模は不明である。壁高は西側で14cmである。炉および柱穴は確認できなかった。

出土遺物は土器のほか、敲石が1点（116）出土した。

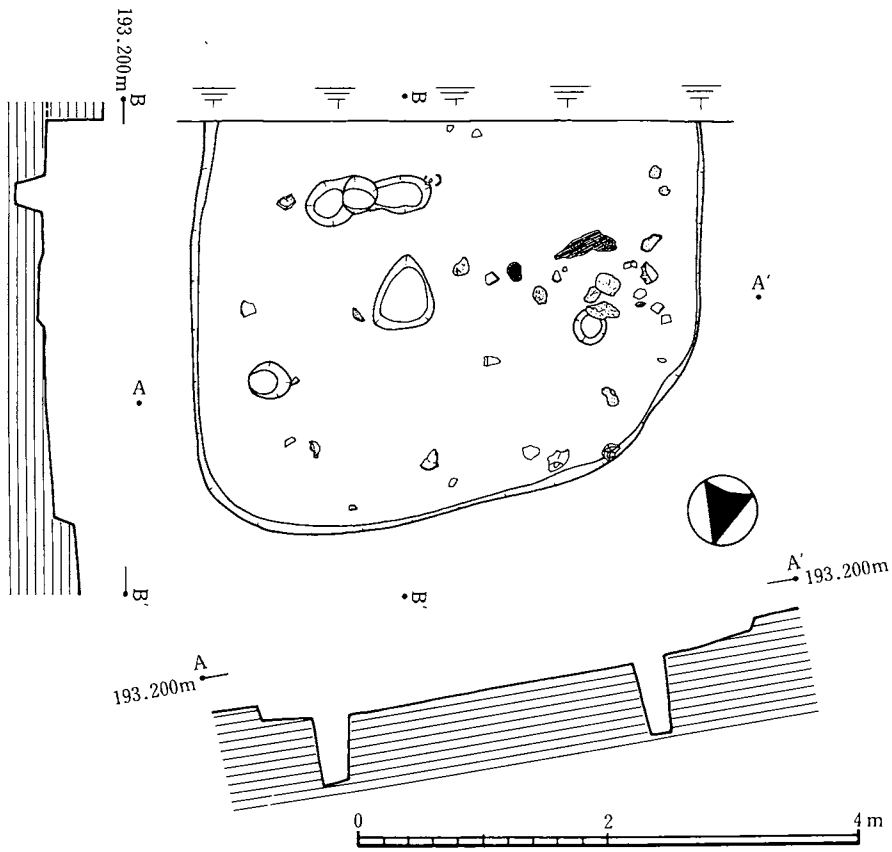
〔土器〕（第154図511）

511は小型の甕形土器で、脚部を欠損している。胴部最大径はほぼ中央に位置する。口縁部は胴部よりゆるやかに屈曲し、短く開く。器面調整は内外面ともハケ目調整である。

68号住居跡（第152図）

28から29区に位置する竪穴式住居跡で、本調査区で確認できたうちで、最東端に位置する。平面形態は、東西軸5ｍ20cm、南北軸4ｍ10cmの長方形を呈する。壁高は18～30cmである。ベッド状遺構は有しない。炉は住居跡の中央に設けられており、その平面形態は長軸68cm、短軸51cmの楕円形で、北側は2段堀になっており、深さは14cmである。焼土は炉の周辺まで広がっていた。柱穴は炉を中心に東西に2個、西壁に貯蔵穴とおもわれる堀込みの中に1個、計3個を確認した。貯蔵穴とおもわれる堀込みは直径62cmの円形を呈し、深さは16cmである。

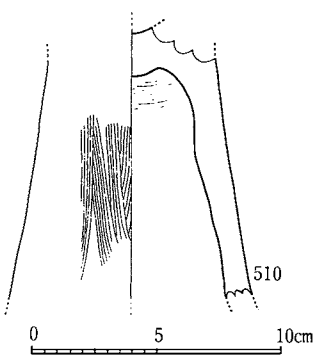
出土遺物はかなりの量におよんだ。土器のほかには、石包丁が4点（43・64・65・68）、打製石斧が1点（34）、鉄鏃が1点（6）出土した。



第149図　65号住居跡実測図

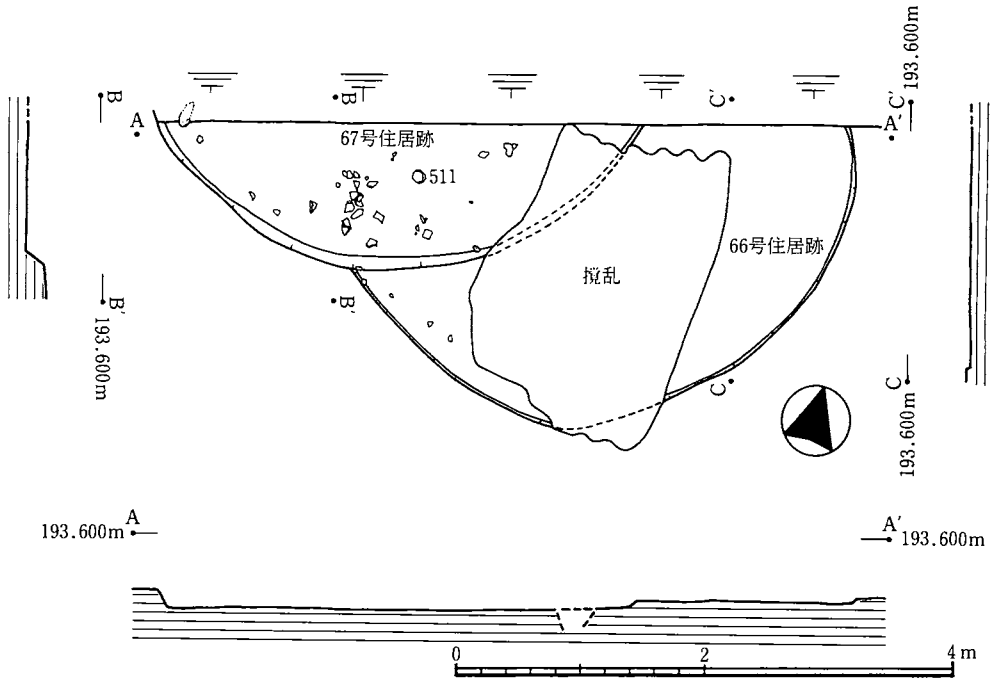
〔土器〕（第154～165図512～551）

512～521は壺形土器で、複合口縁と素口縁とに分けられる。512・513・517・520は複合口縁の壺形土器である。513は胴部を欠損する。胴部の最大径はほぼ中央に位置し、底部は平底で、頸部は外反して開き口縁部でするどく屈曲し内傾する。器面調整は基本的にハケ目調整である。515・516・518は素口縁の壺形土器である。胴部の最大径は中央に位置し、底部は平底である。頸部は外反して開く。518は頸部に突帯をめぐらし、胴部の上位に刻目突帯をめぐらす。器面調整は内外面ともハケ目調整である。514・519・521は胴部上位および頸部を欠損している。底部は平底もしくはレンズ状を呈する。口縁形態は複合口縁になるか、素口縁になるかは不明である。器面調整は内外面ともハケ目調整である。



第150図　65号住居跡出土土器実測図

522は重弧文長頸壺で頸部および胴部下位を欠損する。器形は偏平で胴部上半は、連続した断面三角形の突帯をめぐらし、その下位に浅い5本の沈線で重弧文を施す。胴の屈曲部は1状のつまみ出しによる微隆帯をめぐらす。



第151図　66・67号住居跡実測図

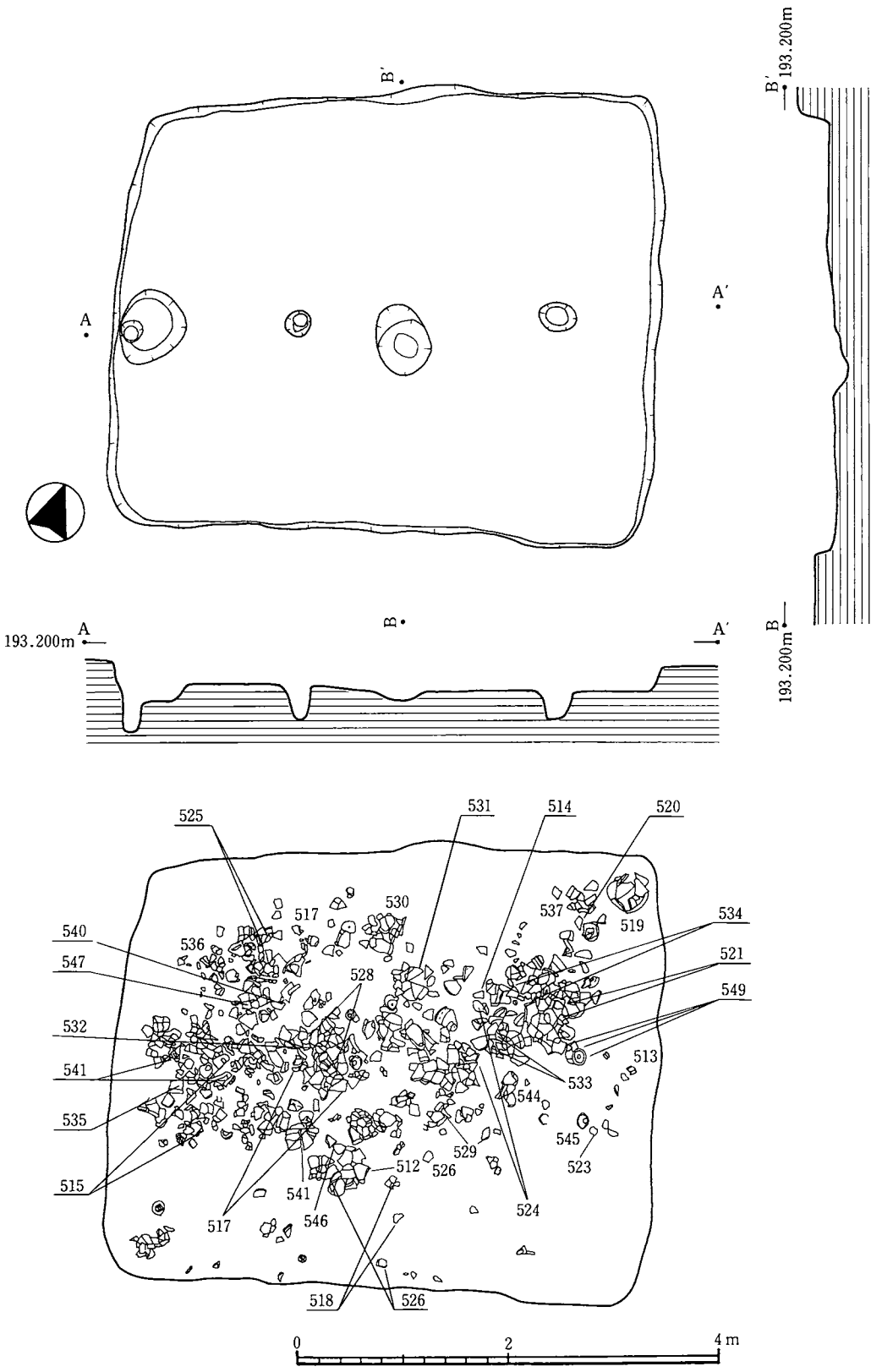
523は鉢形土器である。底部はレンズ状を呈し、胴部はやや丸みをおび、口縁部はやや外反ぎみに立ち上がる。器面調整は外面はハケ目の後ナデを施す。内面はハケ目調整である。

524は高坏形土器で、脚部より以下を欠損する。坏部は深く胴部は直線的に開き、口縁部はするどく屈曲し、大きく外反して開く。器面調整は内外面ともハケ目を施した後、ナデ調整を行う。

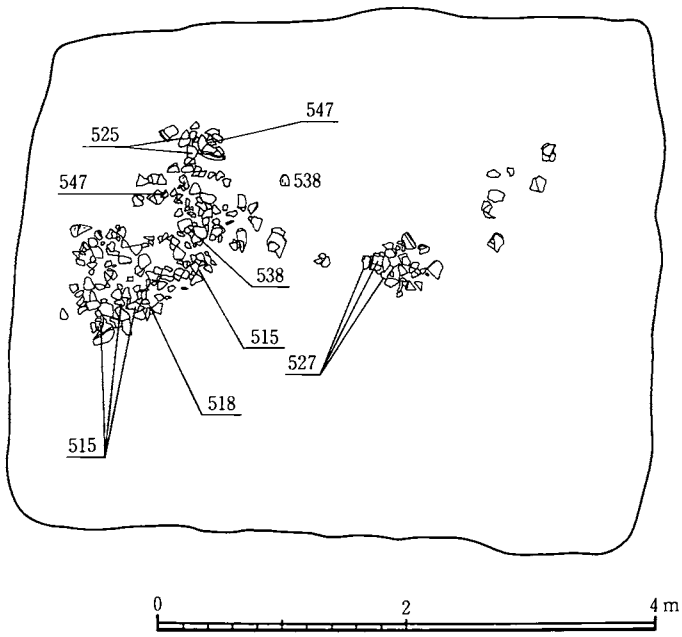
525～550は甕形土器である。525・528は胴部最大径を中央よりやや上位にもち、丸みをおびており、脚は外反しながらのびる。525の口縁部は直線的に開く。528の口縁部は外反して開く。526～527・529～539・541は胴部最大径を上位にもち、ゆるやかな曲線をえがいて脚部にいたる。口縁部は直線的に開くもの（526・527・533・534・535・538）と、外反して開くもの（529・530・531・532・536・537・539・541）とがある。いずれも頸部の内面には稜線が明瞭である。器面調整は内外面ともハケ目の後、ナデ調整を施す。539と540は同一個体である。

540・542～547は甕形土器で、胴部上位を欠損している。脚は外反してのびる。器面調整は基本的にはハケ目調整である。548は小型の甕形土器で、脚部を欠損している。頸部の下位に刻目突帯をめぐらす口縁部は頸部より外反して開く。器面調整はナデ調整である。549は大型の甕形土器である。頸部の下位に１条の刻目突帯をめぐらし、胴部最大形は最上位にもち、直線的に脚部にいたる。脚は短く外反して開く。口縁部は頸部より屈曲し、外反して開く。器面調整は内外面とも細かなハケ目調整で、内器面の底には指頭圧痕がうかがえる。

550はミニチュアの甕形土器で、胴より上位を欠損している。551は土錘である。



第152図　68号住居跡実測図



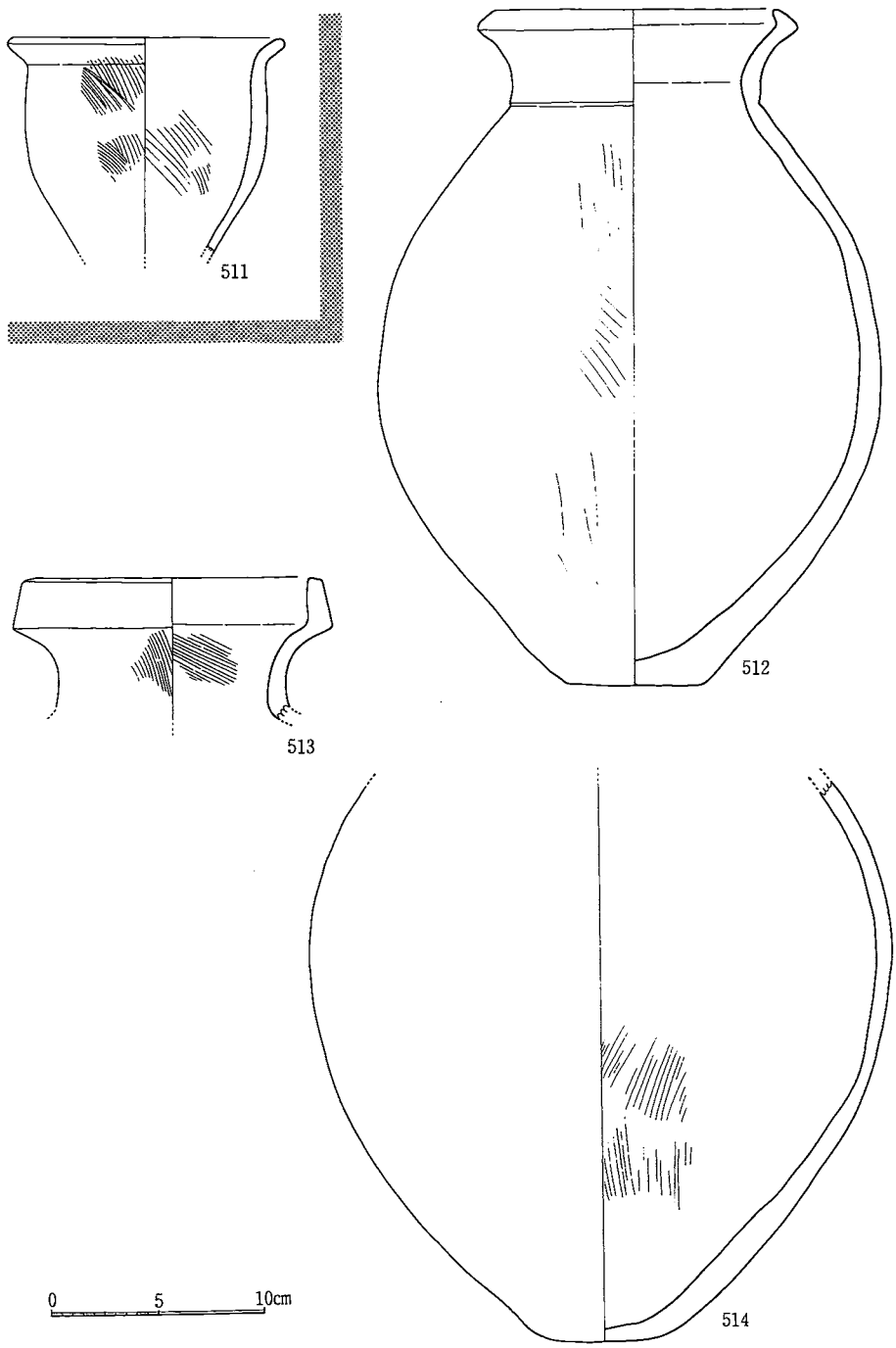
第153図　68号住居跡遺物出土状況実測図

2　土器溜（第166図）

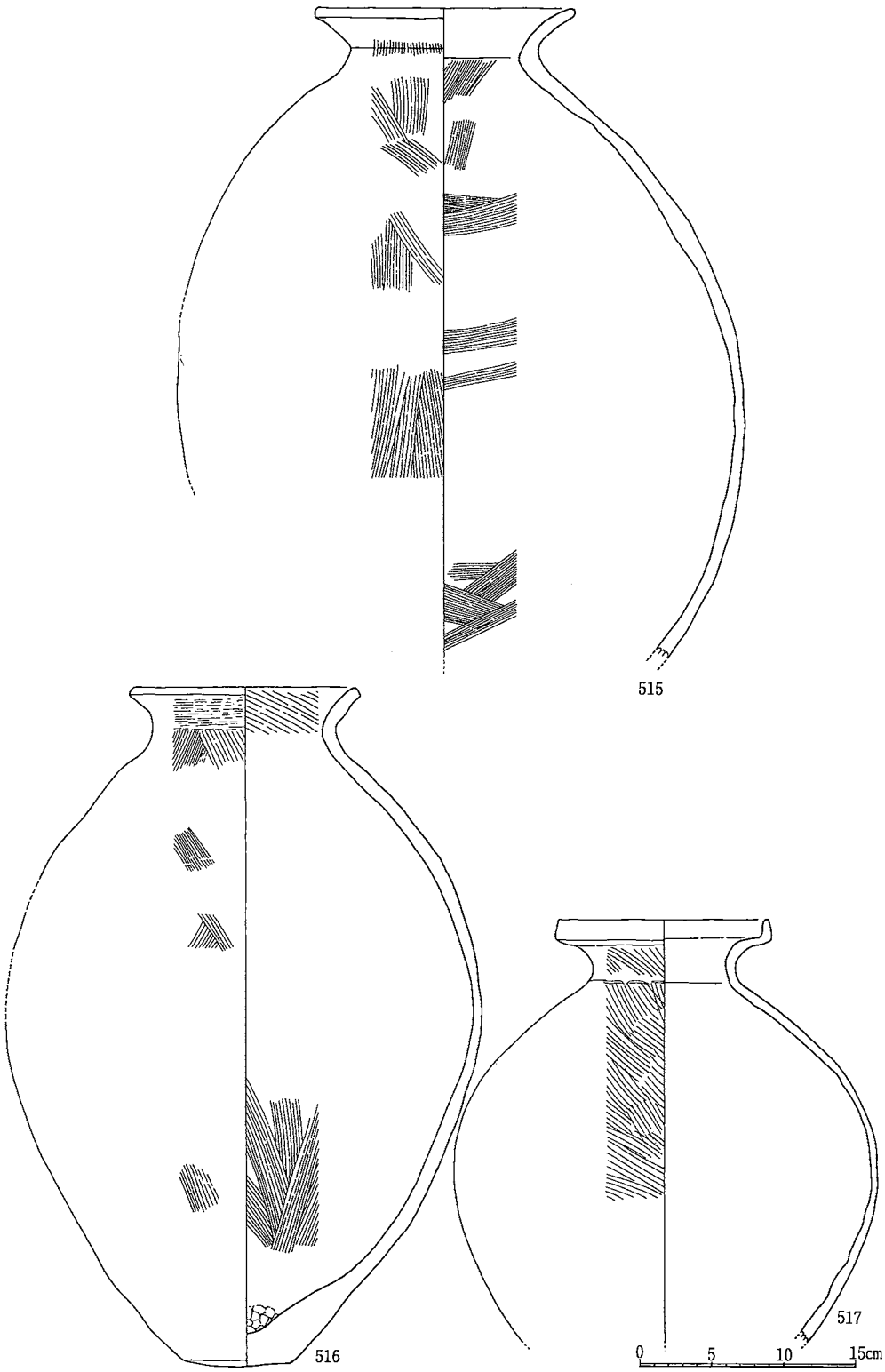
7～8区にかけて位置し、平面形態は不定形を呈し、北側に張り出しを持つ。張り出し部分をふくめて長軸3m66cm、短軸2m50cmを測る。壁高は11～20cmで、南の壁際にさらに楕円形を呈する堀込みを持つ。その規模は長軸85cm、短軸70cmである。土器は堀込みの北側部分と東側部分に集中して、廃棄されていた。多くの遺物は床面より5～10cmほど浮いた状態で集中して出土し、張り出し部分には遺物は見られなかった。

〔出土土器〕（第167～174図552～589）

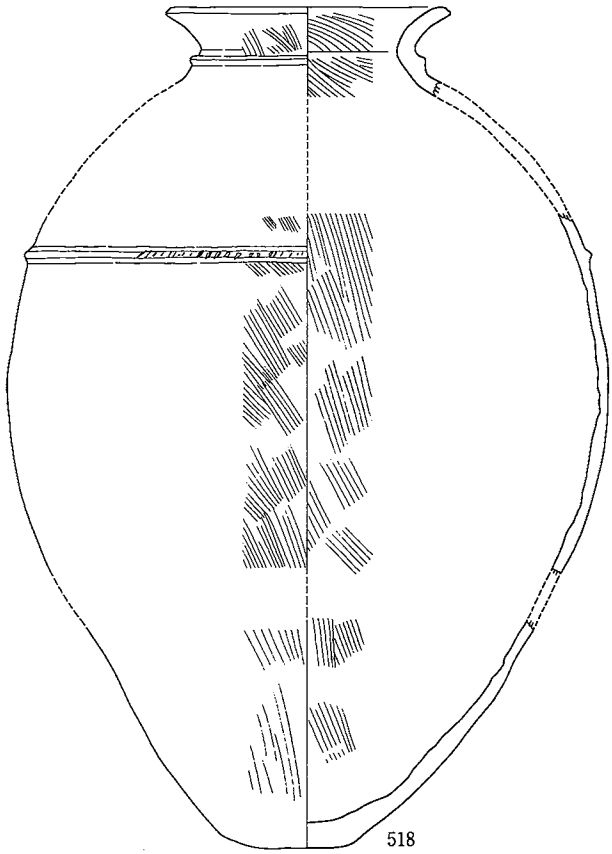
552～558は壺形土器である。552は複合口縁を持つ大型の壺形土器で長胴を呈し、胴部の中央に最大径をもつ。頸部には1条の刻目突帯をめぐらす。頸部は外反して開き、口縁部は屈曲し内傾してのび、その屈曲部に刻目をめぐらす。底部は欠損しており形態は不明である。器面調整は内外面とも細かいハケ目調整を施す。553・554は素口縁の壺形土器で胴部を欠損している。頸部はやや外反ぎみに立ち上がる。器面調整はハケ目調整である。555・556は頸部を欠損している。555は胴部が球形に近い形態を呈し、最大径は中央よりやや上位に位置するものと思われる。底部は丸底である。556は長胴ぎみで、胴部最大径はほぼ中央に位置し、底部は平

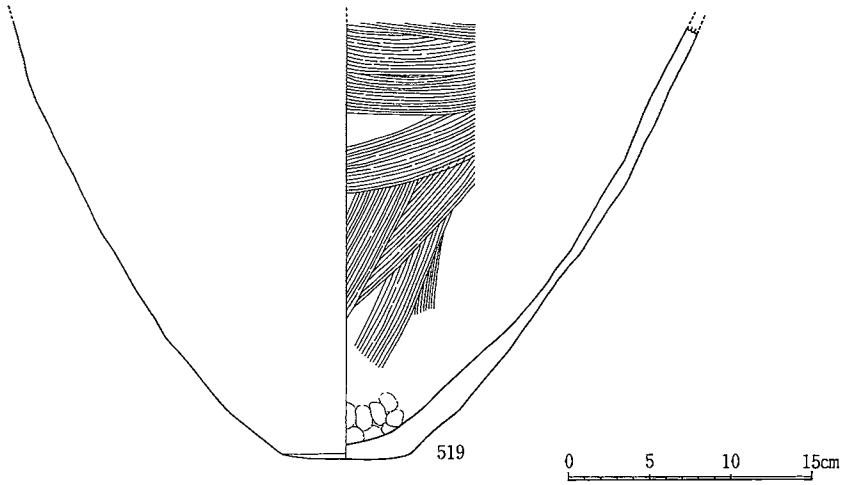


第154図　67・68号住居跡出土土器実測図（1）

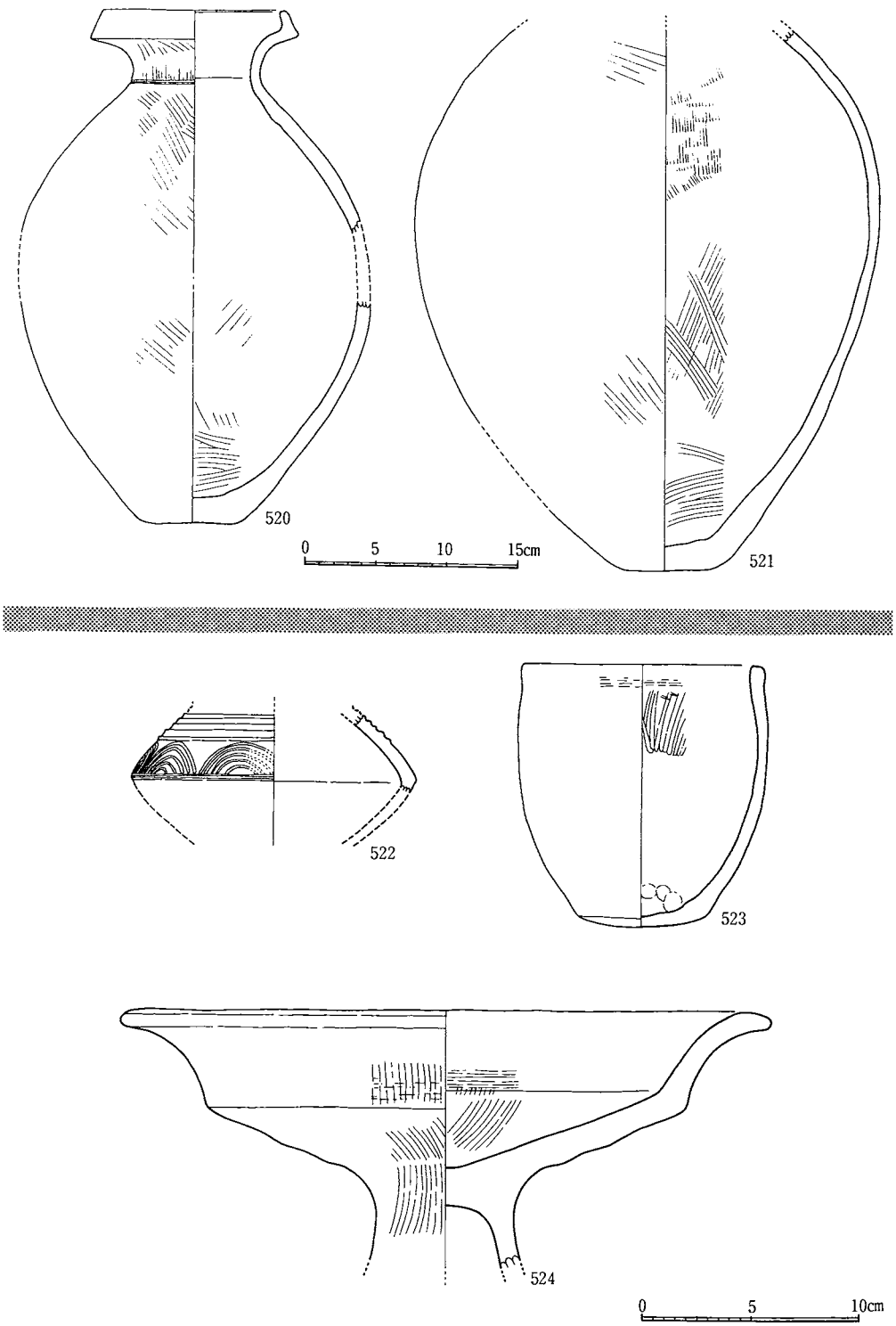


第155図　68号住居跡出土土器実測図（2）

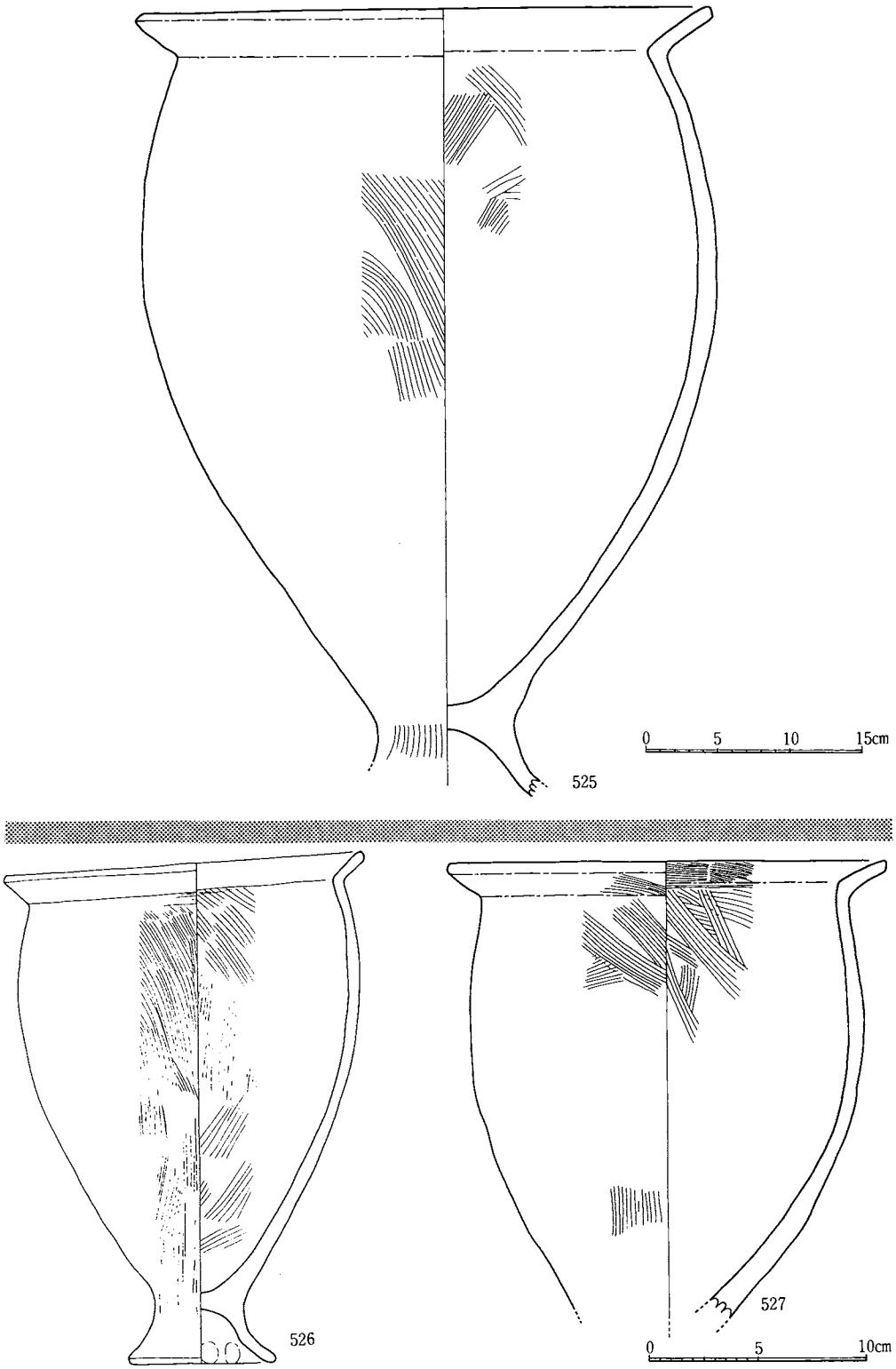




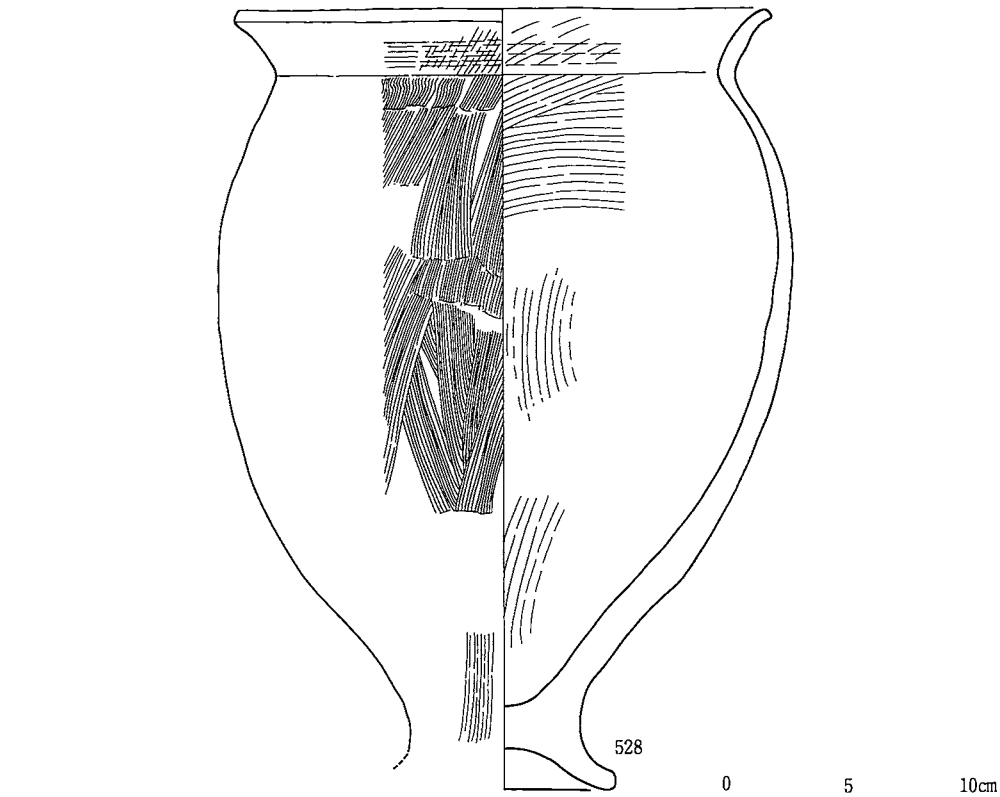
第156図　68号住居跡出土土器実測図（３）

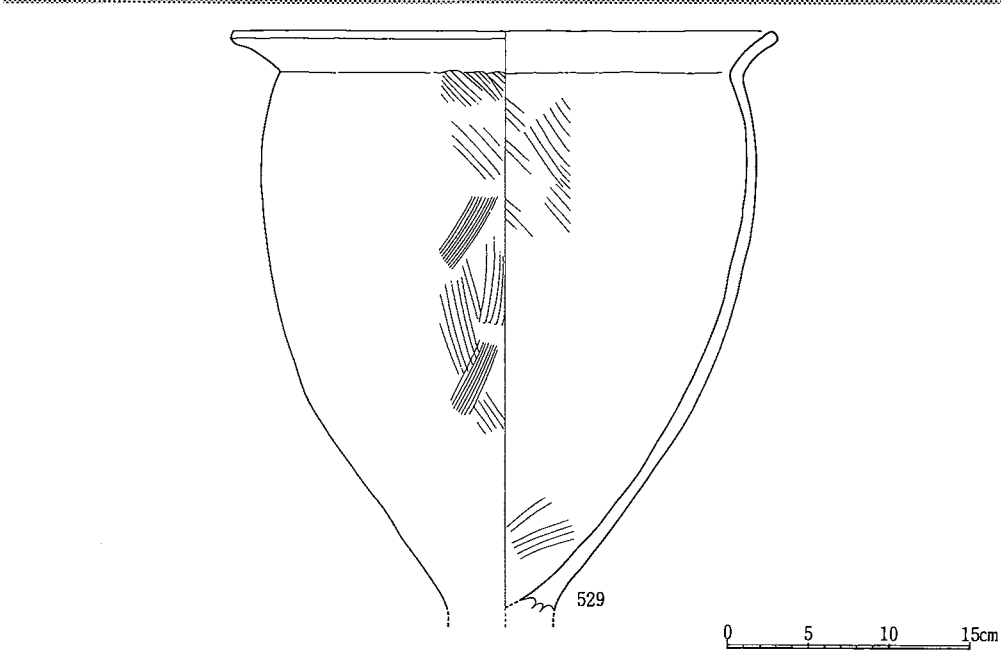


第157図　68号住居跡出土土器実測図（4）

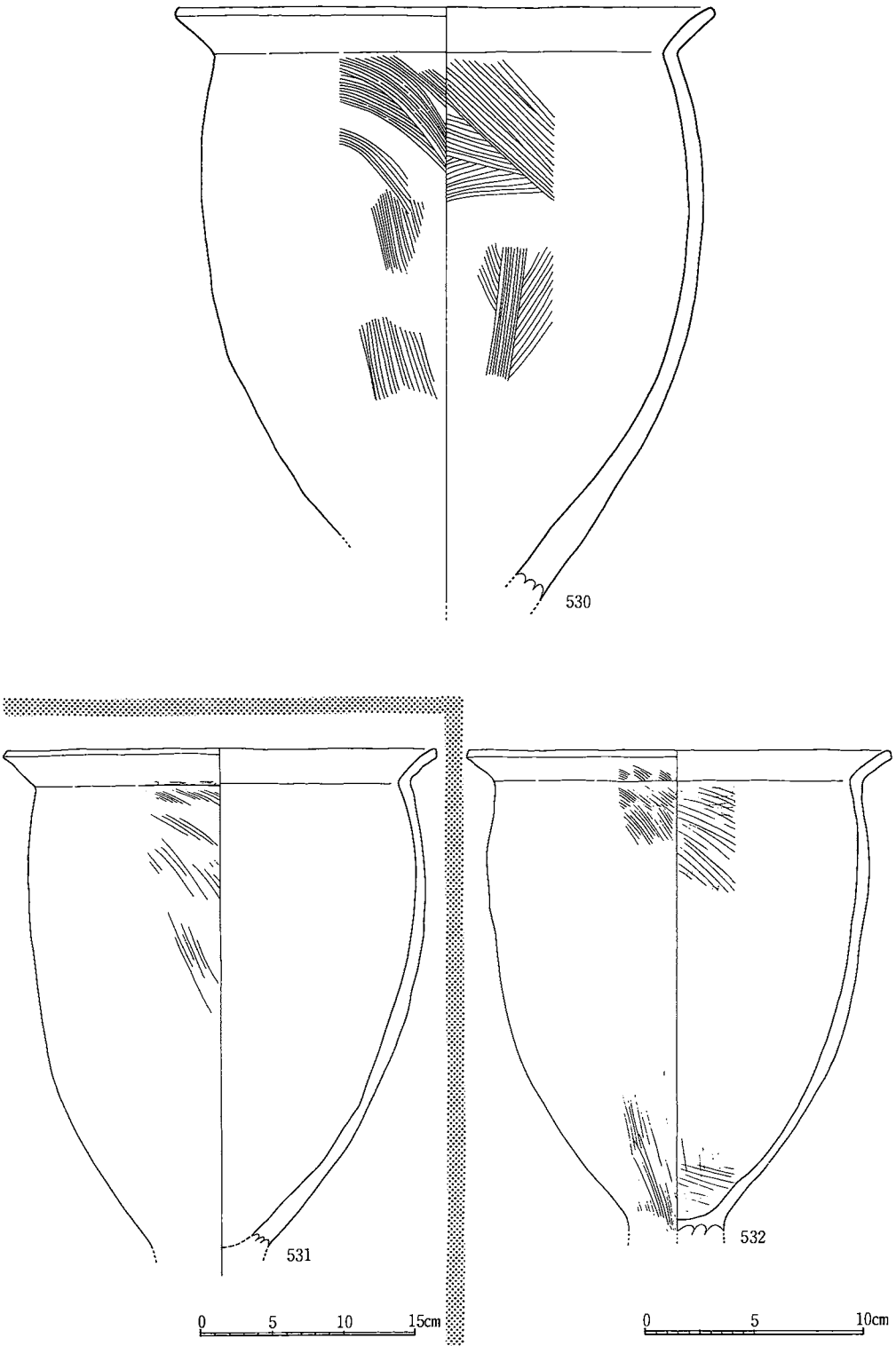


第158図　68号住居跡出土土器実測図（５）

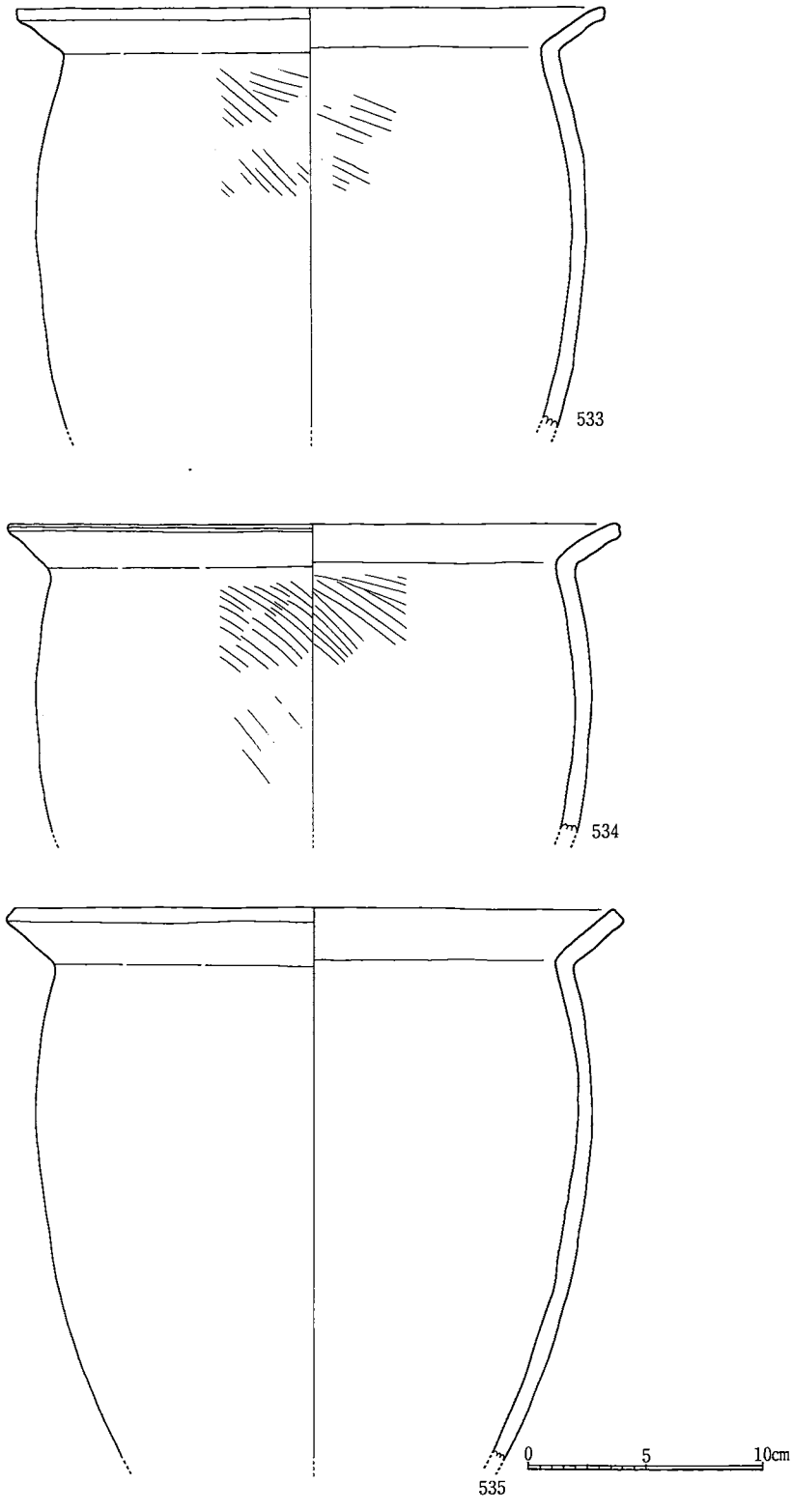




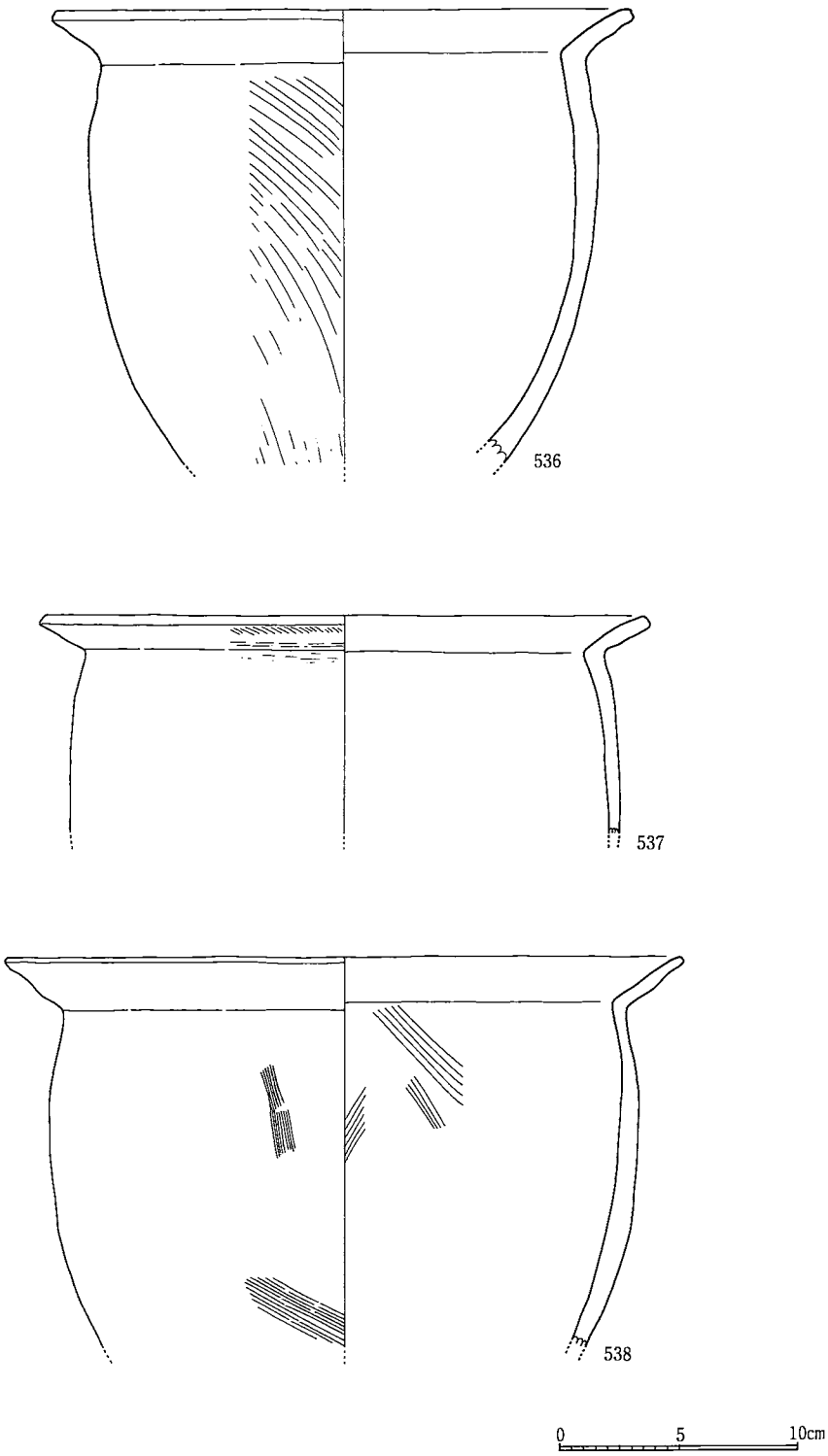
第159図　68号住居跡出土土器実測図（6）



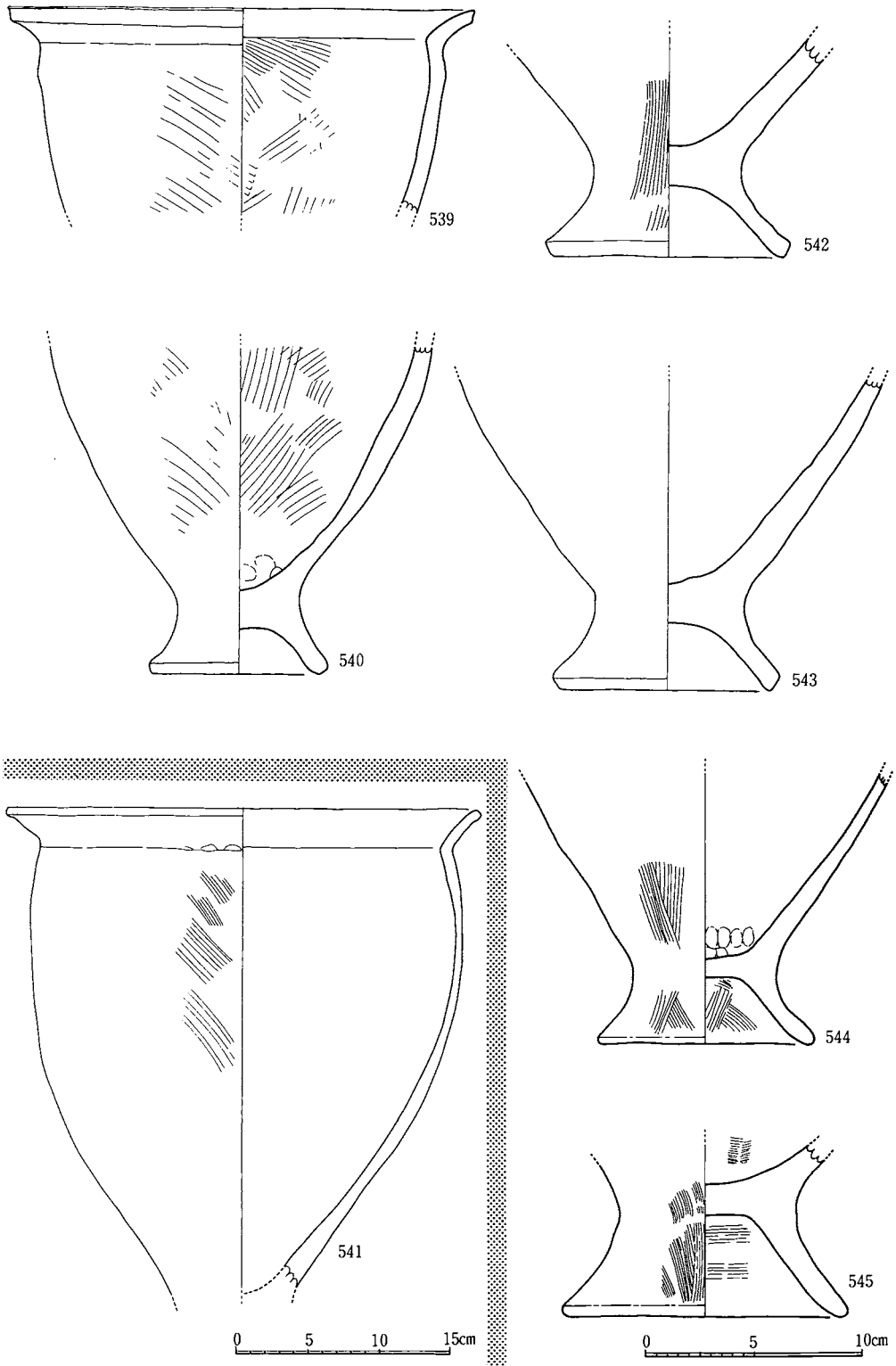
第160図　68号住居跡出土土器実測図（７）



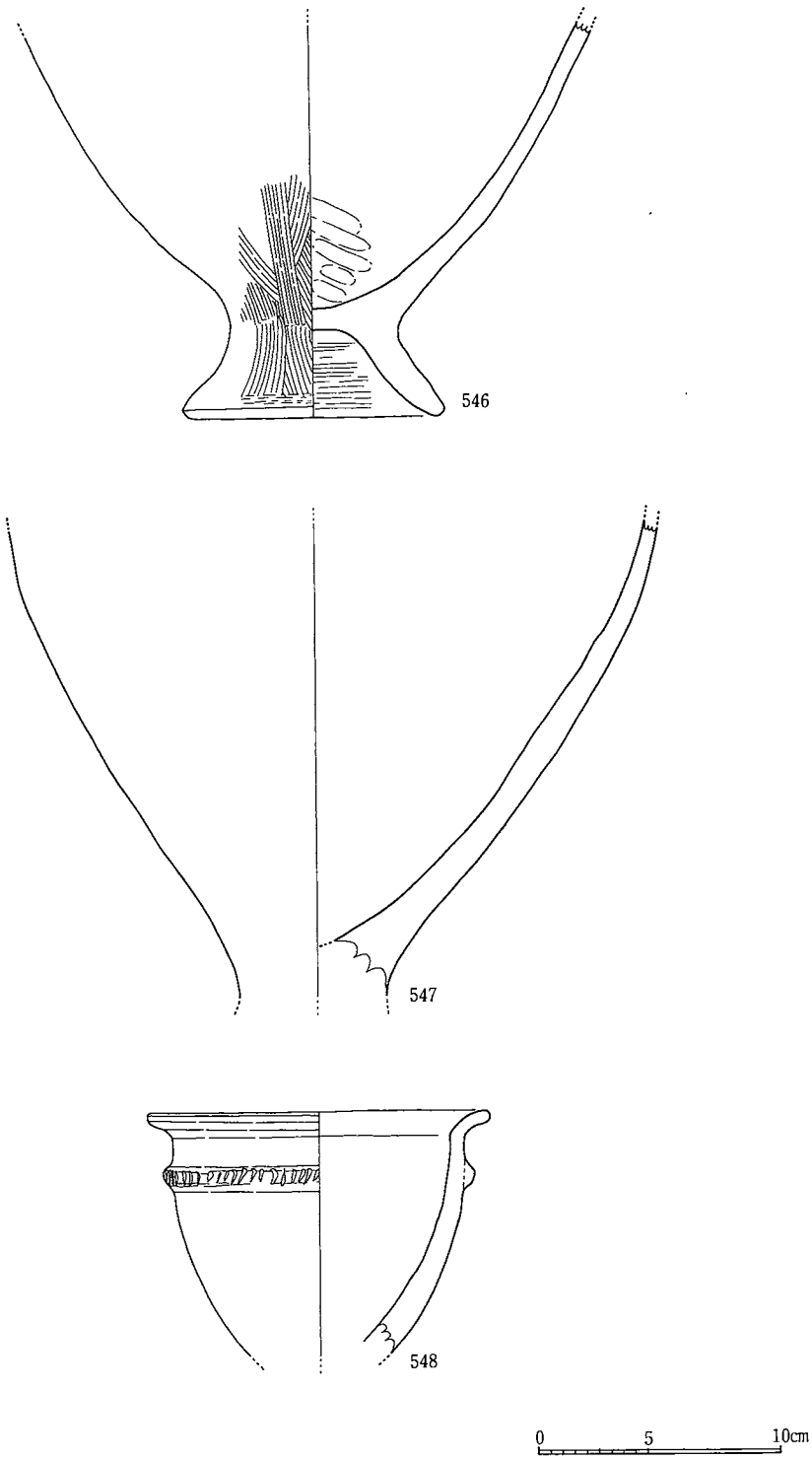
第161図　68号住居跡出土土器実測図（8）



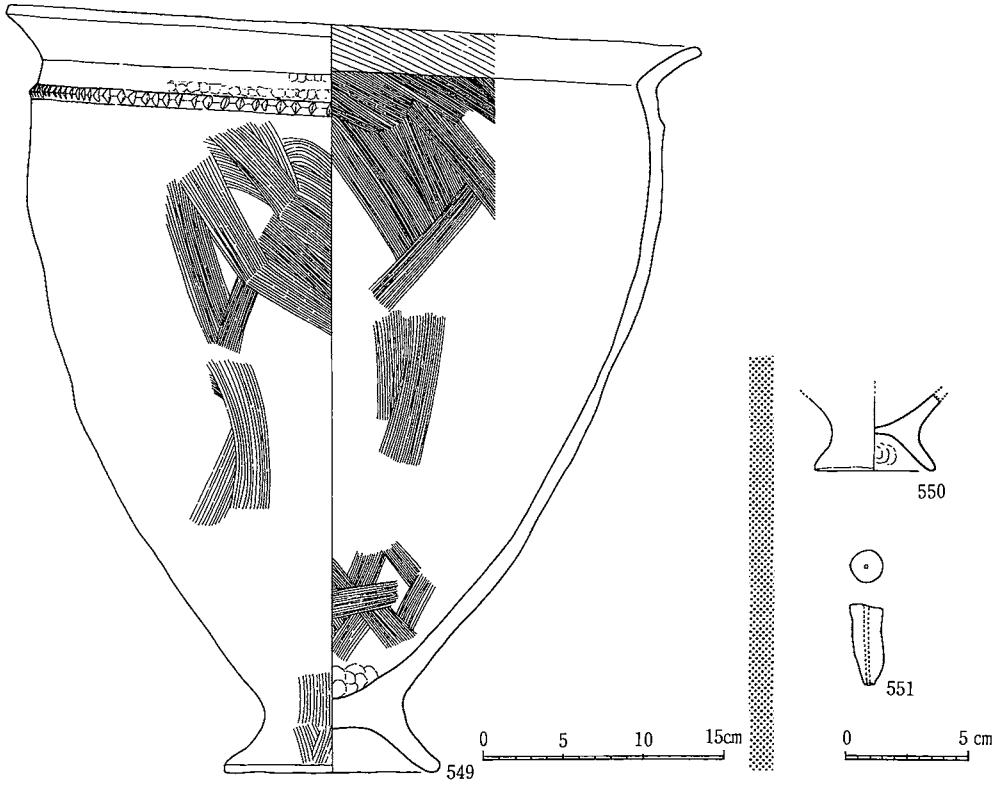
第162図　68号住居跡出土土器実測図（9）



第163図　68号住居跡出土土器実測図（10）



第164図　68号住居跡出土土器実測図（11）



第165図　68号住居跡出土土器実測図（12）

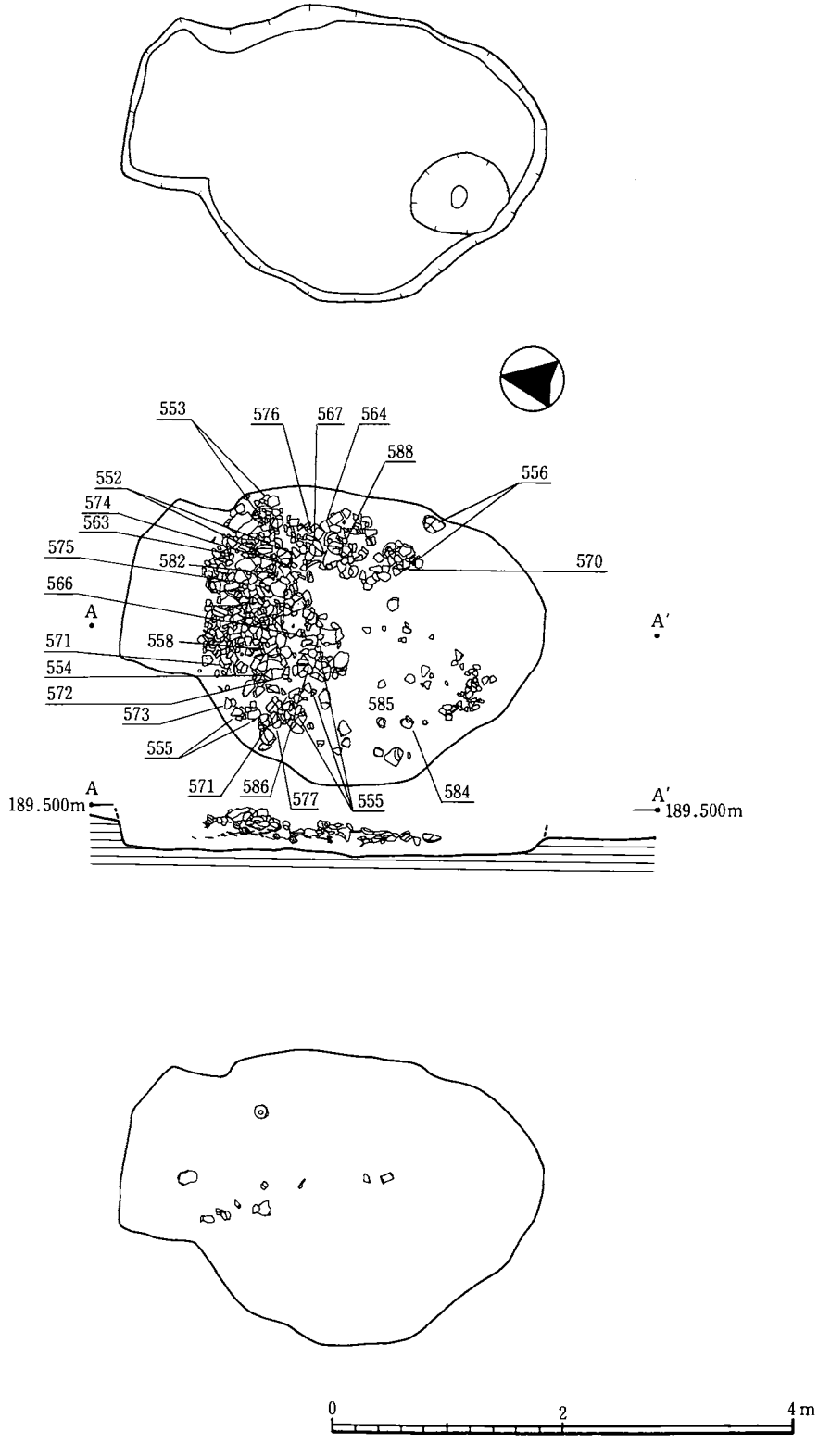
底を呈する。器面調整は内外面ともハケ目調整である。557は複合口縁の壺形土器で胴部最大径は中央よりやや上位に位置する。頸部は外反して開き、口縁部はするどく屈曲し、やや内傾ぎみに立ち上がり、口縁部外面には細い刷毛で波状文を施す。底部は尖がりぎみの丸底である。器面調整は、外面はハケ目を施した後ナデ調整を行う。内面はナデ調整である。558は素口縁の大型の壺形土器で、胴部中央付近より以下を欠損する。胴部の上位で肩をはり、直線的に底部にいたる。頸部は外反して開く。器面調整は内外面とも細かなハケ目調整である。559は胴部の上位を欠損し、底部は丸底を呈する。器面調整は内外面とも荒いハケ目調整である。

560～562は鉢形土器である。560は脚台付の鉢形土器で、口縁部は頸部よりつまみ上げて形成され、極端に薄くなって内湾ぎみに立ち上がる。脚は短く厚い。器面調整は内外面ともハケ目調整で、脚部および内面の底は指頭により整形している。561は底部を欠損し、口縁部はゆるやかに立ち上がり、端部でわずかに外反する。器面調整は内外面ともハケ目調整である。562は底部を欠損しているが、平底を呈すると思われる。口縁端部はわずかに外反し、丸みをおびている。器面調整は内外面ともハケ目調整で、内面の底には指頭圧痕がうかがえる。

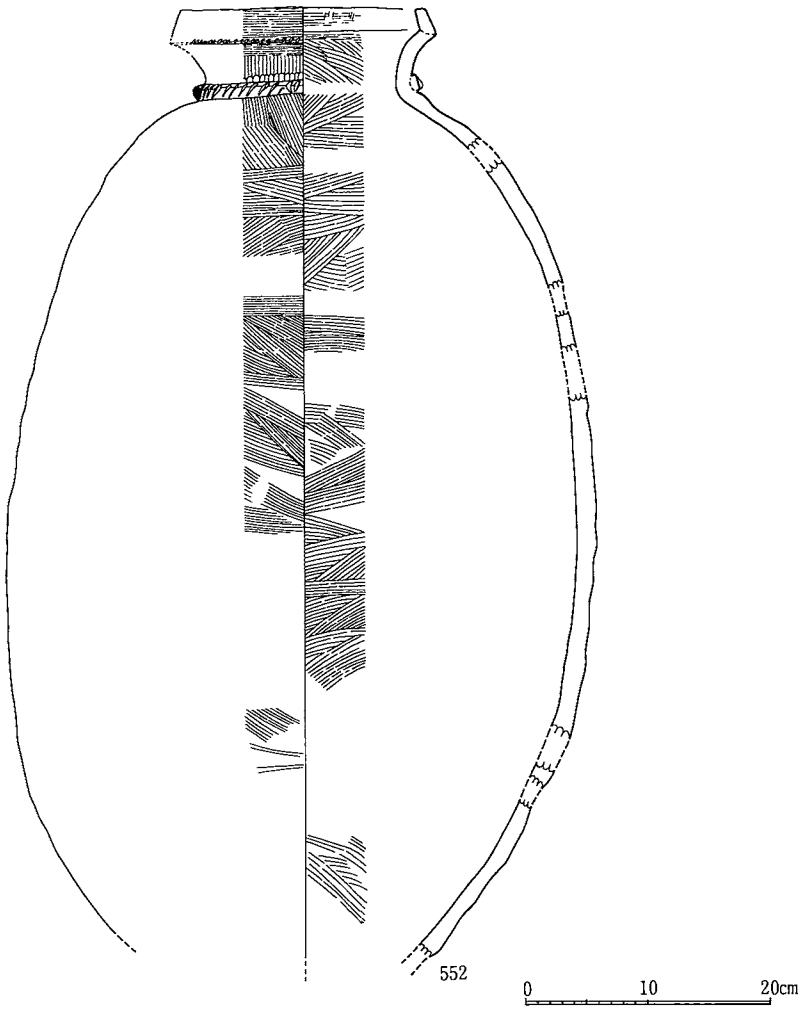
563～565は高坏形土器である。563は坏の口縁部および脚の下位を欠損している。坏部は深く直線的に開き、屈曲して口縁部にいたる。脚部は筒状にのび裾部にいたる。器面調整は内外面ともハケ目調整である。564は坏部と脚の裾部の下位を欠損する。脚部は筒状にのび、屈曲して大きく開く。器面調整は外面にハケ目調整が残る。565は脚部の中位より上部を欠損している。脚は筒状で裾部は大きく内湾ぎみに開き、端部でさらに内湾する。器面調整は内外面ともハケ目調整が残る。

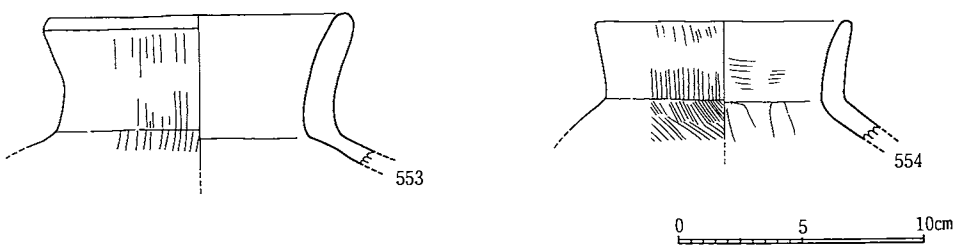
566～573は甕形土器で、胴部及び脚部を欠損する。胴部最大径は胴部の中央よりやや上位に位置する。口縁部は頸部より外反して開く。頸部の内面には稜線がうかがえる。器面調整は基本的に内外面ともハケ目調整である。574～580は甕形土器の胴部の上位を欠損したものである。脚は外反してのび、578は特に大きく開く。器面調整は基本的には内外面ともハケ目調整である。575はハケ目調整の後、丁寧にナデ調整を施す。581は大型の甕形土器で、胴部より下位を欠損する。胴部最大径は最上位に位置し、口径をうわまわる。口縁部は胴部よりゆるやかに、外反ぎみに立ち上がる。頸部の内面には稜線はない。頸部の直下に断面が三角形の刻目突帯をめぐらす。器面調整は外面はハケ目調整、内面はナデ調整である。582は胴部上位と脚部を欠損する甕形土器である。胴部の最大径は中央より上位に位置するものと思われる。器面調整は内面にハケ目調整を施している。583～586は甕形土器の脚部である。脚はやや外反してのびる。器面調整は内外面ともハケ目調整である。

587～589は鉢形の手捏土器である。

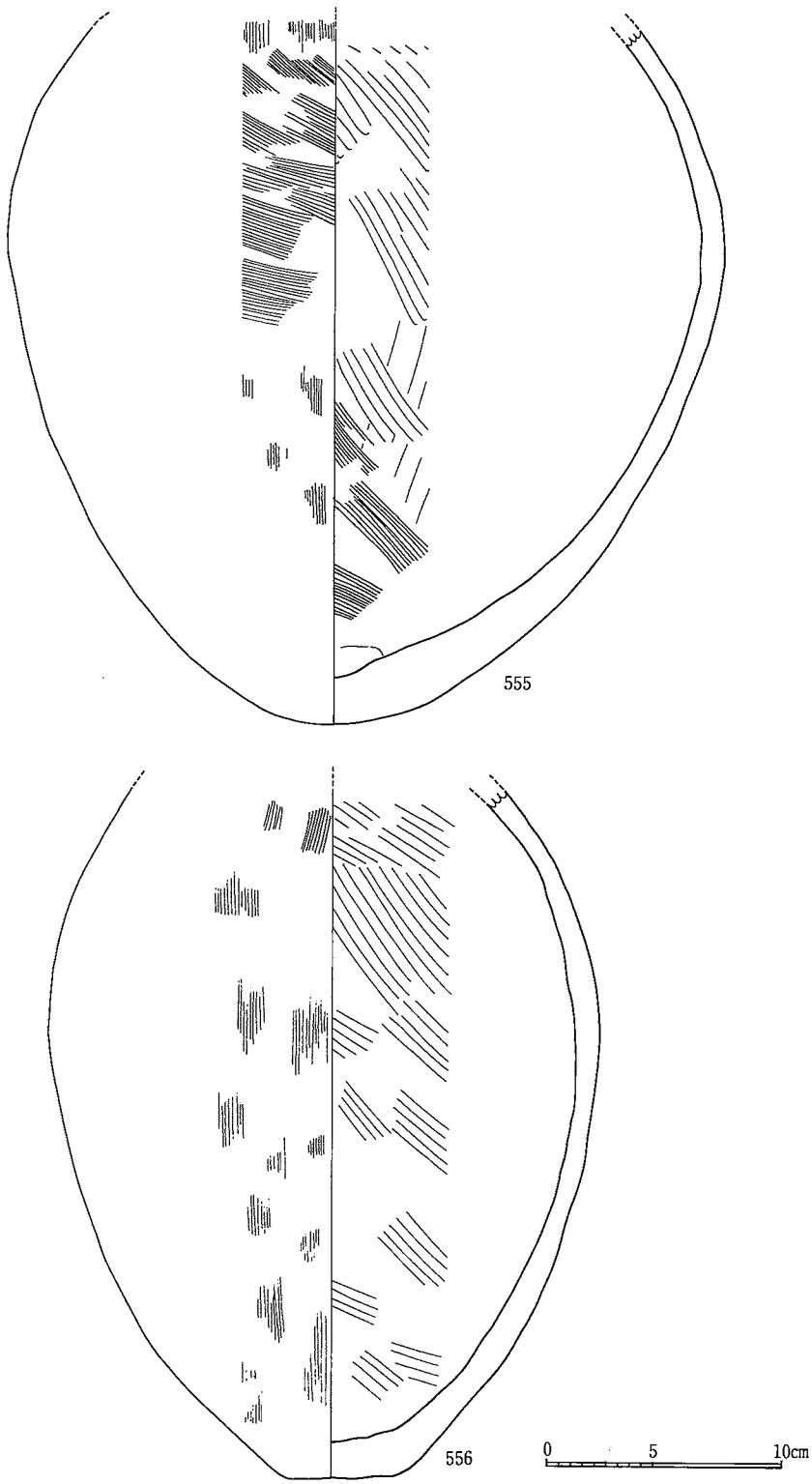


第166図　土器溜実測図

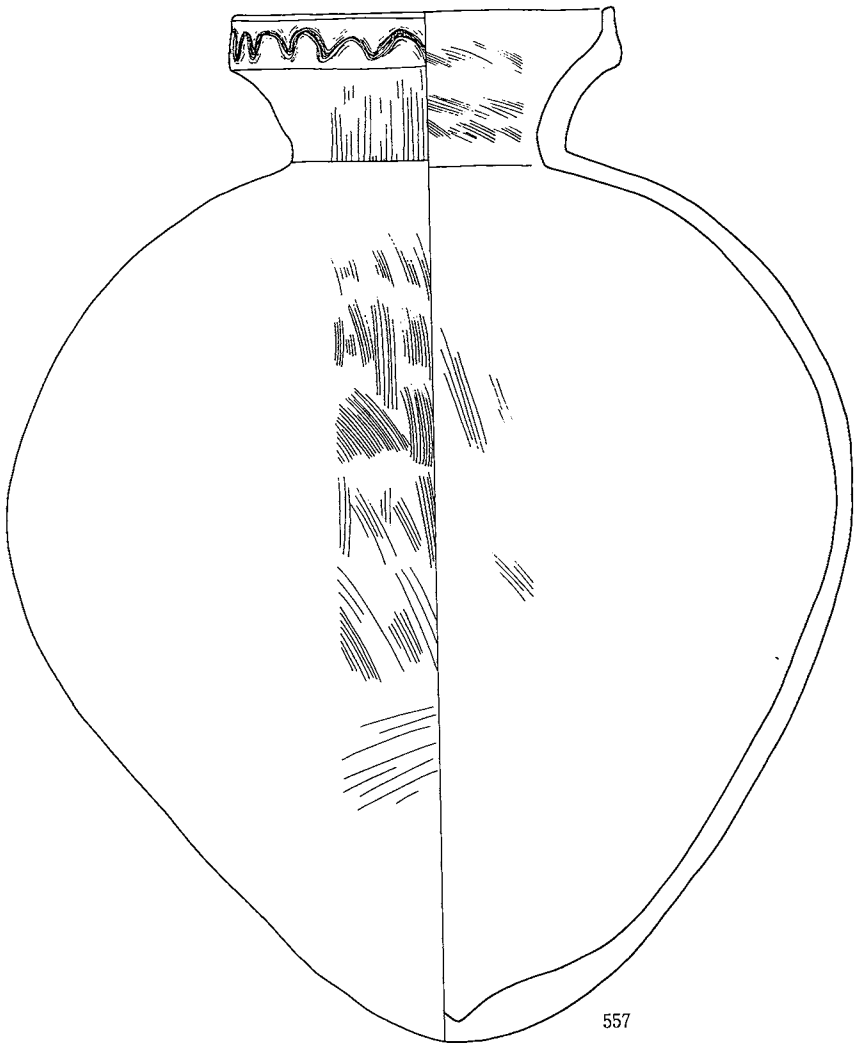




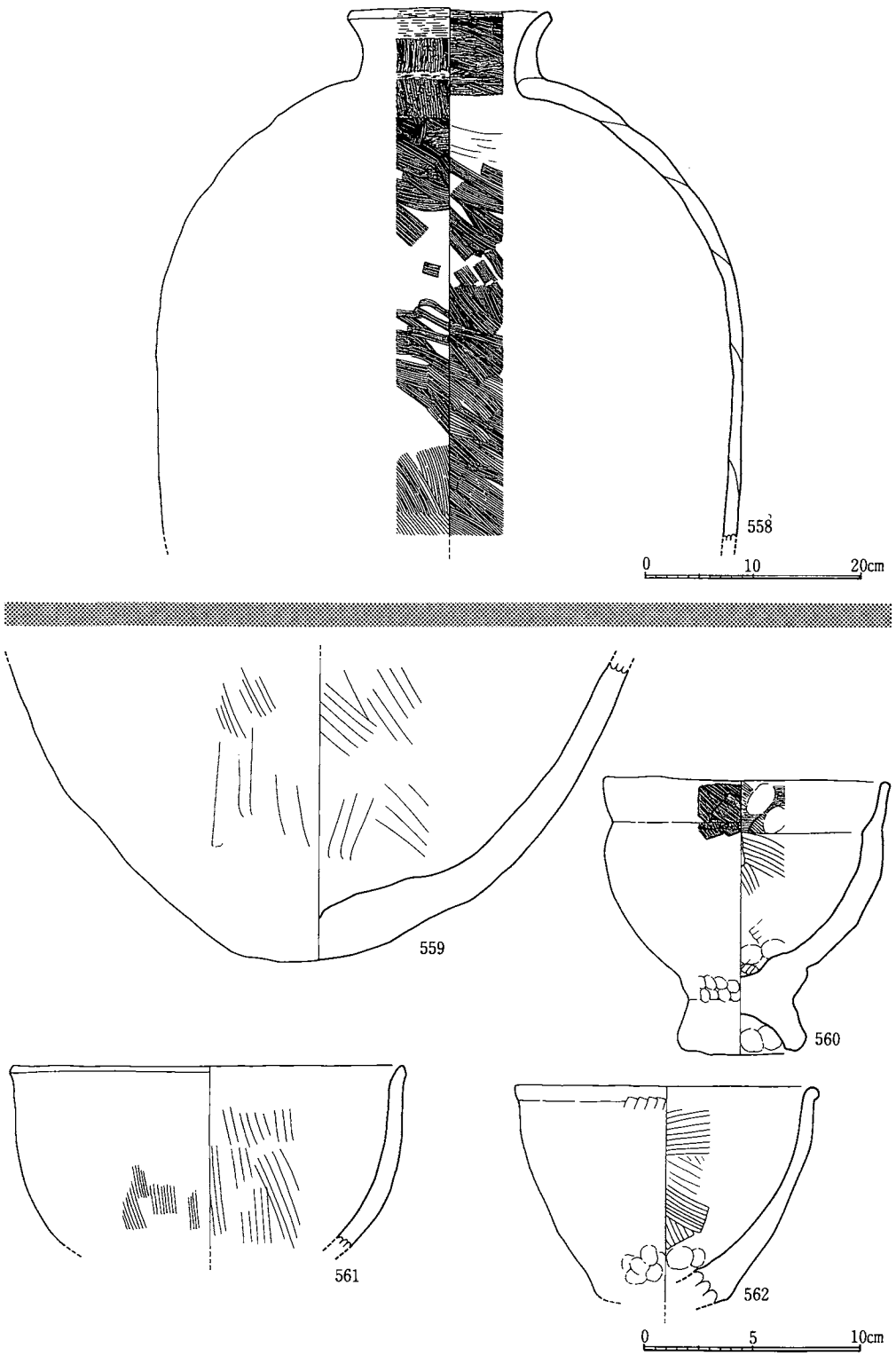
第167図　土器溜出土土器実測図（１）



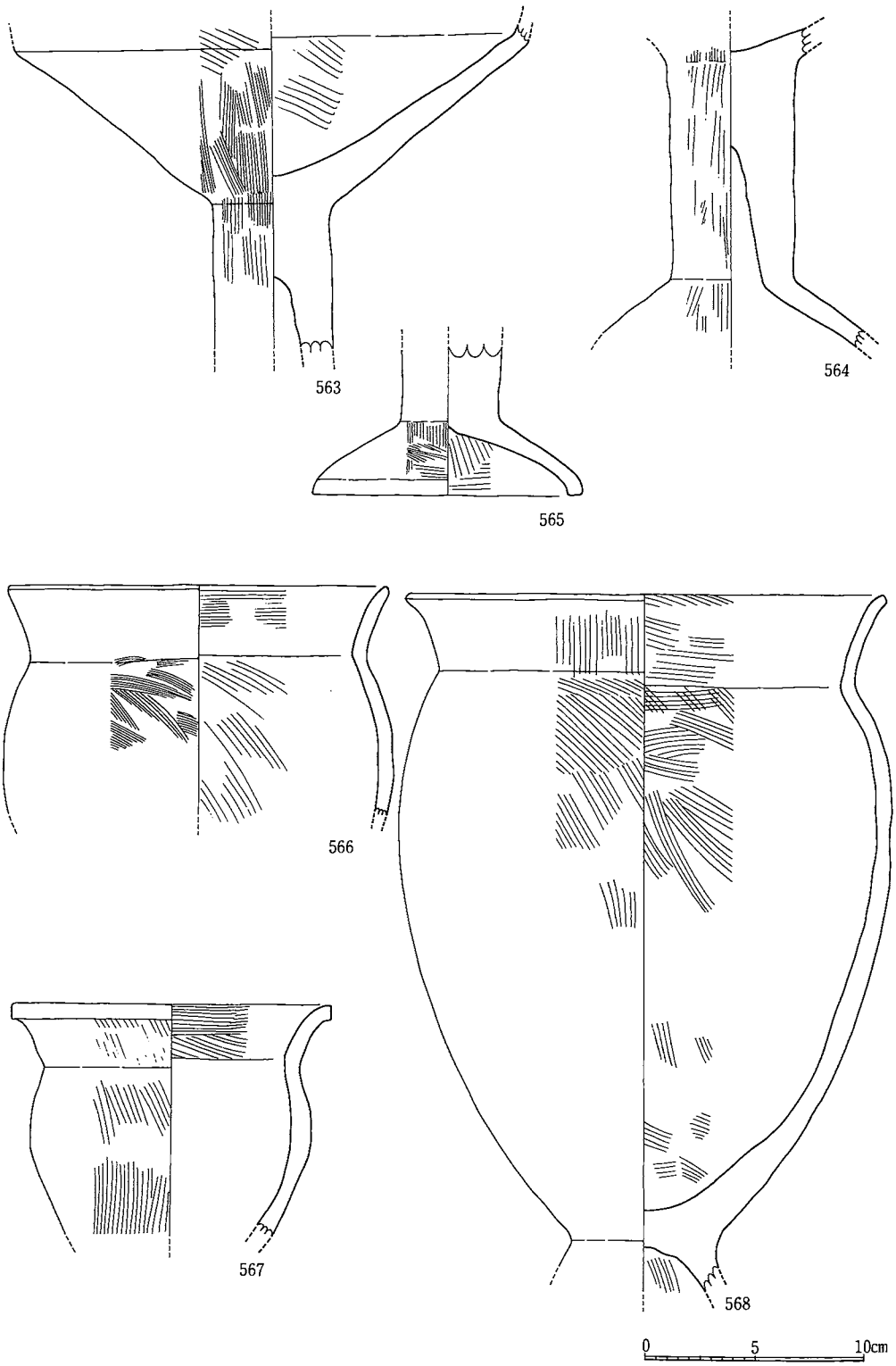
第168図　土器溜出土土器実測図（2）



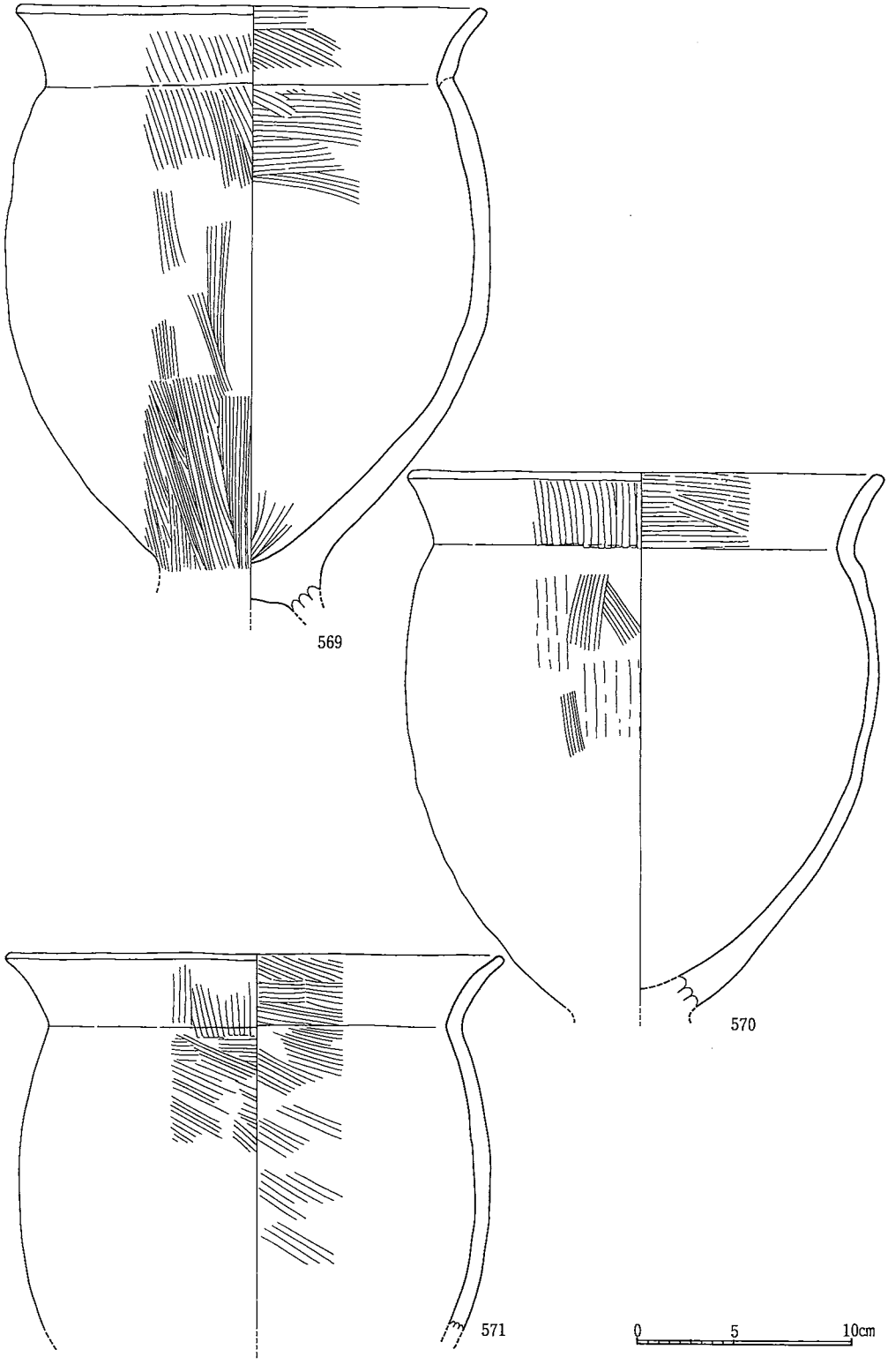
第169図　土器溜出土土器実測図（３）



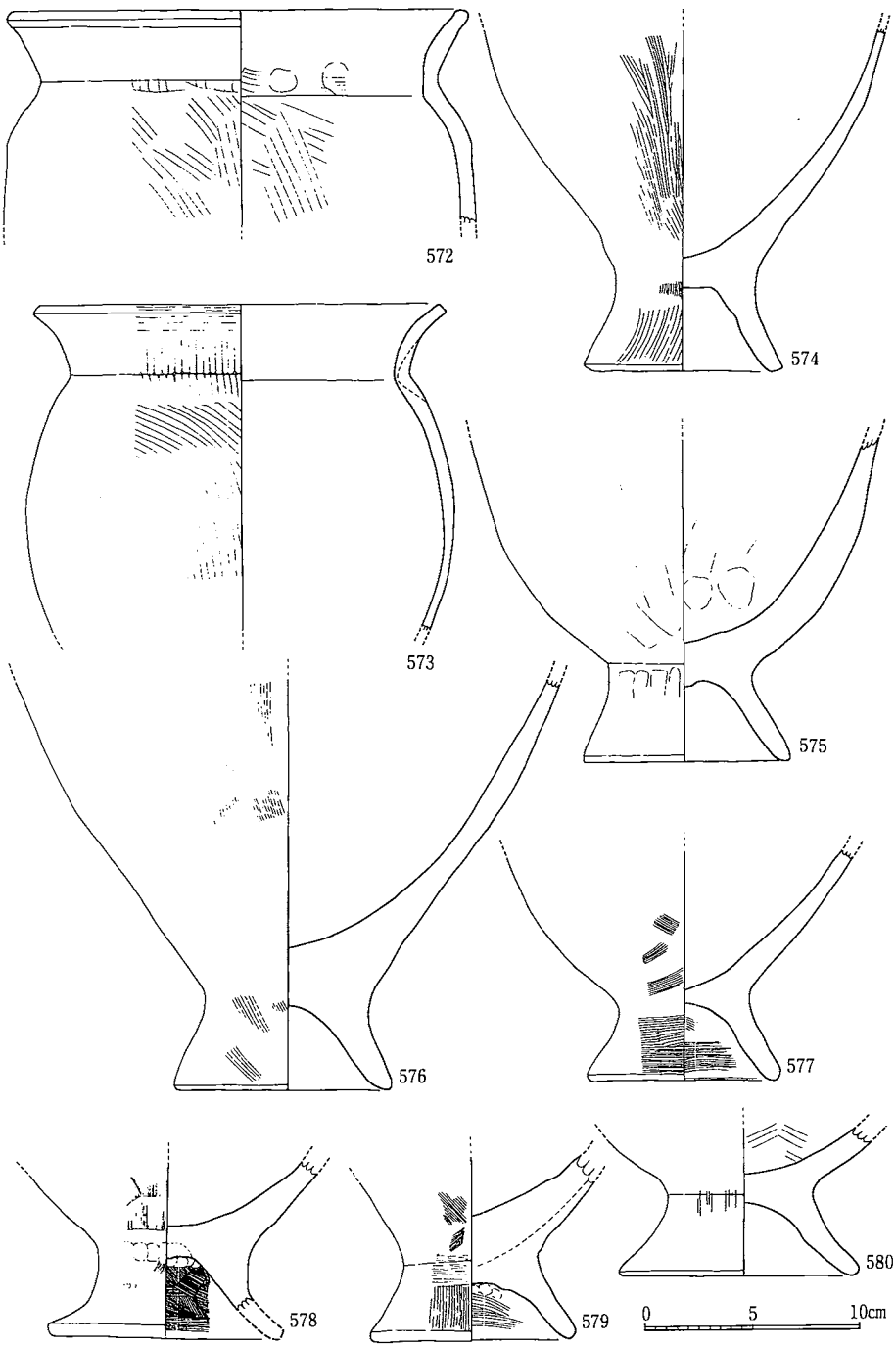
第170図　土器溜出土土器実測図（4）



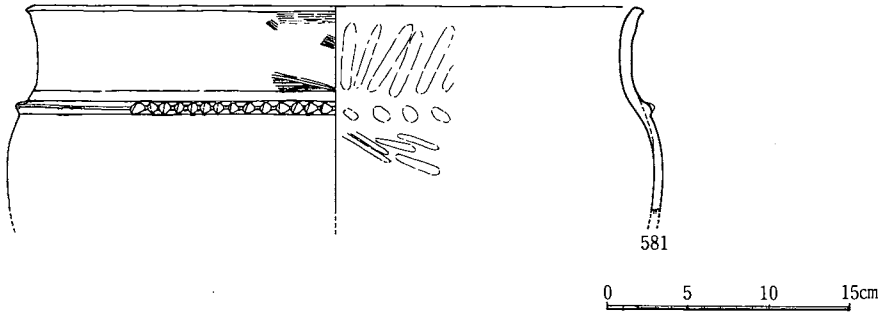
第171図　土器溜出土土器実測図（５）

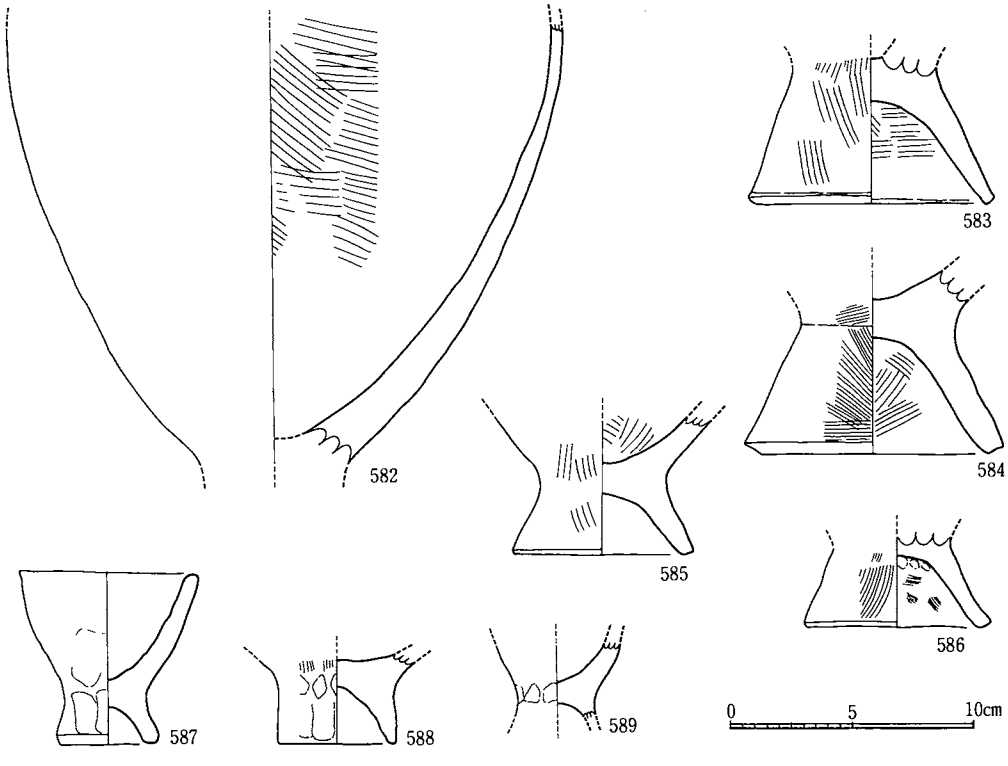


第172図　土器溜出土土器実測図（6）

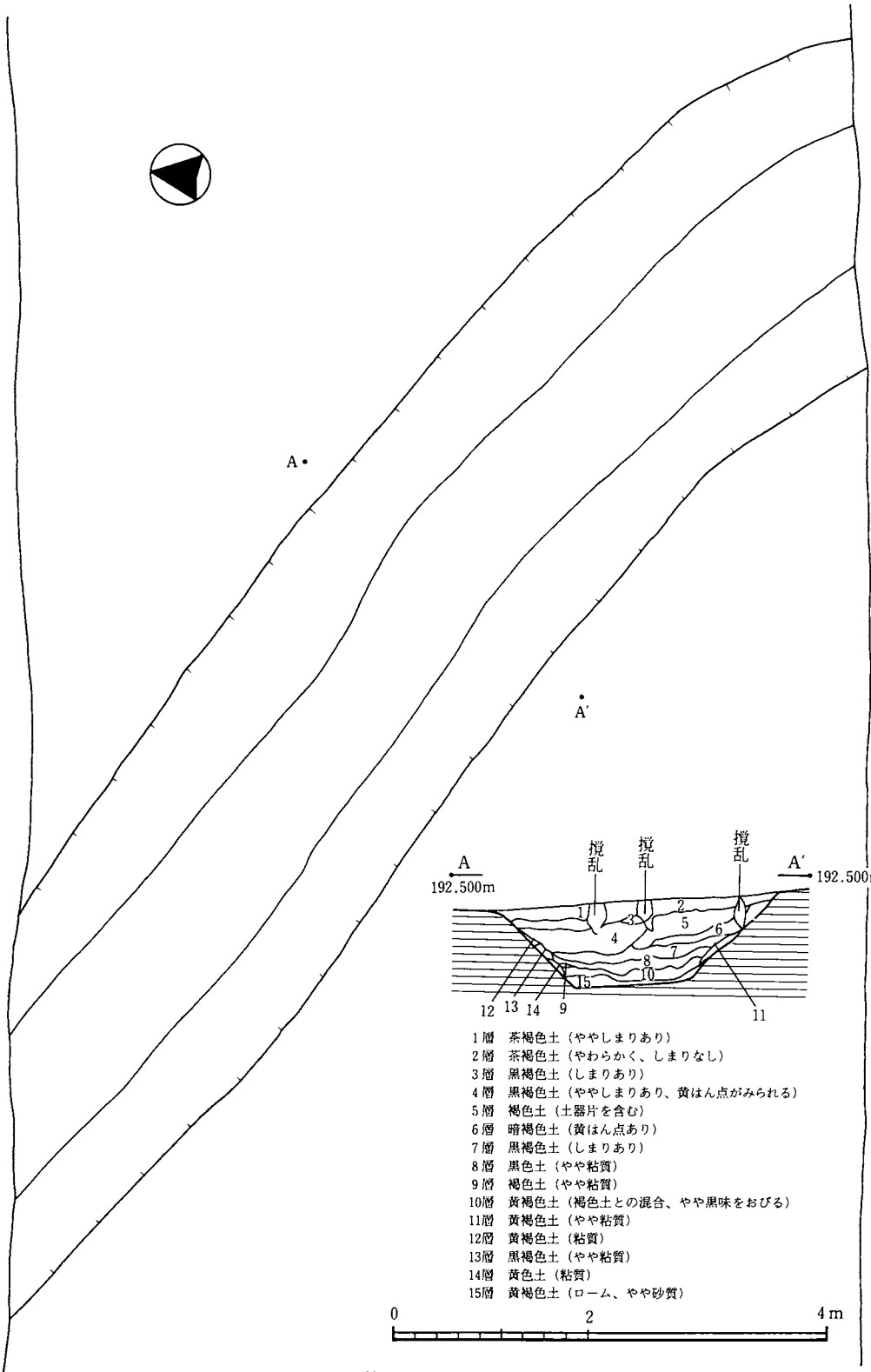


第173図　土器溜出土土器実測図（７）





第174図　土器溜出土土器実測図（8）



第175図　１号溝実測図

3　1号溝〔条溝〕（第175図）

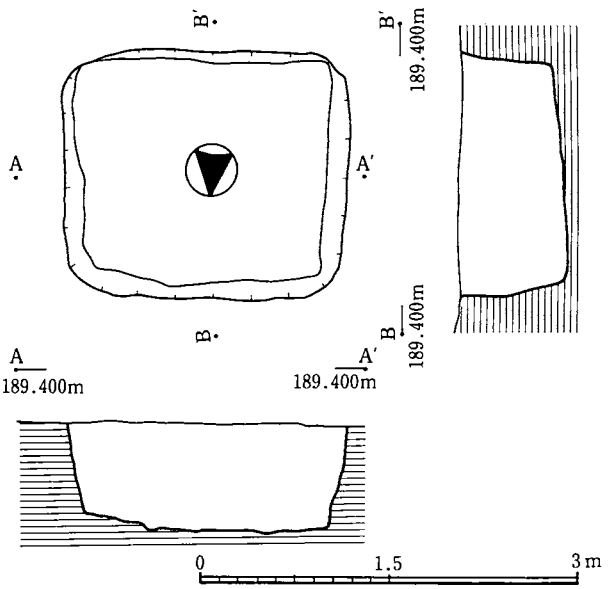
33から34区にかけて調査区を北西から南東になな めに横切る形で確認した。断面形は逆台形を呈し、幅2ｍ59cm、底の幅1ｍ8cm、深さは遺構確認面より86cmを測る。遺物はほとんど出土しなかったが、埋土の土色から住居跡とほぼ同時期と思われる。調査区が限られていたため、この溝がどのようにのびていくのか、どのように巡るのかは不明である。

調査区の周辺の地形を見てみると、集落跡は台地の北寄りに位置し、その台地の北側には川が東西に流れており、それに向かって地形は急激に落ち、その比高差は約40ｍである。東はやや起伏があるものの台地が長く続く。南はゆるやかに傾斜して標高を下げる。西は台地が途切れ急に標高を下げる。このことから推定すると、集落跡は自然の地形をうまく利用し、集落跡の地形が緩やかな東側と南側を巡る条溝である可能性が強い。今後の調査、もしくは試掘調査を待てば集落の規模がつかめるであろう。この溝の埋土は別図に示すとおりである。

第3節　時期不明の遺構

1　土坑（第176図）

5区に位置し、本調査では唯一確認されたものである。平面形態は長方形を呈し、長軸1ｍ49cm、短軸1ｍ28cm、深さ56cmを測る。床はほぼ平坦で、その平面形態も長方形である。この土坑は掘られた後一度に埋められており、断面観察でも分層できなかった。埋土は炭化物とロームを含む黒褐色土である。遺物はほとんど出土せず時期を判定するには至らなかった。用途についても不明である。

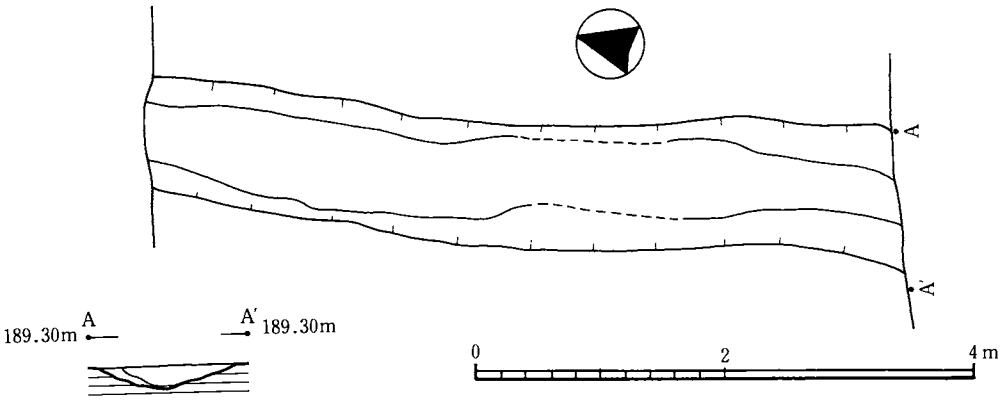


第176図　土坑実測図

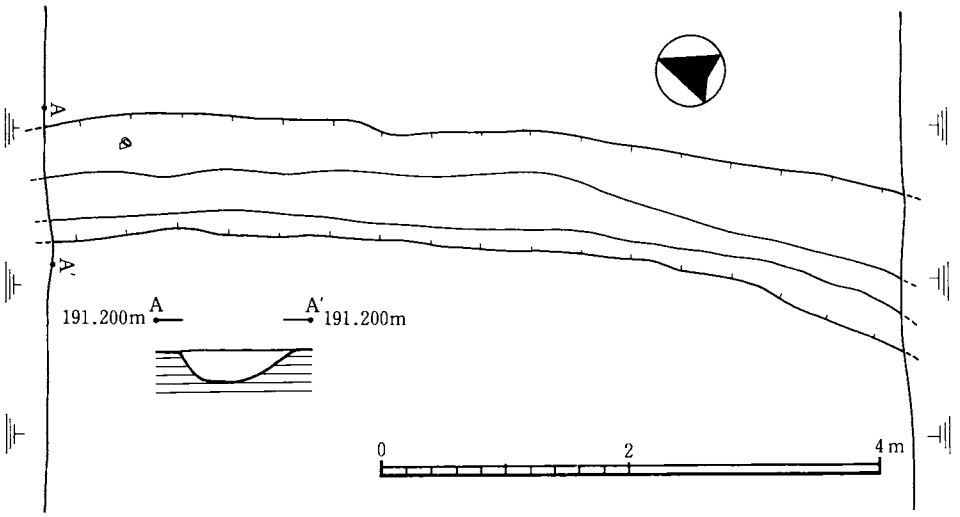
2　溝遺構

2号溝（第177図）

5区に位置し、調査区を南北に横断する形で検出された。他の遺構とは切り合い関係をもっていない。この溝の断面形態は皿状を呈し、幅1ｍ7cm、深さ18cmと非常に浅い。断面観察では2層に分割でき、その埋土は1層が粘質で緻密な黒色土で、2層は粘質で緻密な黒褐色であ



第177図　２号溝実測図



第178図　３号溝実測図

る。１層の上面にわずかに硬化した面を一部確認したが、道路として使用されたかは断定できなかった。遺物がほとんど出土しなかったため、時期を判定するまでに至らなかった。

３号溝（第178図）

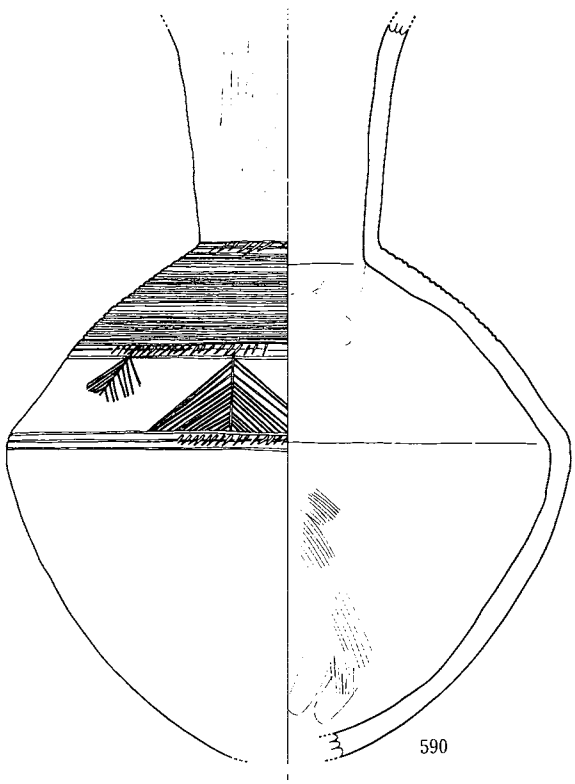
15区に位置し、調査区を南北に横断する形で検出された。この溝は34・35・42号住居跡と切り合い関係をもっており、そのすべてを切っている。断面形態は逆台形を呈し、遺構確認面で幅90㎝、深さ25㎝である。断面観察では３層に分割でき、その埋土は１層がやわらかくしまりのない黒色土、２層は黄色土をブロック状に含む黒色土、３層はきめ細かな褐色土である。底面に一部やや硬化した跡を認めたが、道路として使用されたかは断定できなかった。遺物はほとんど出土しなかったため、時期を判定するまでには至らなかった。

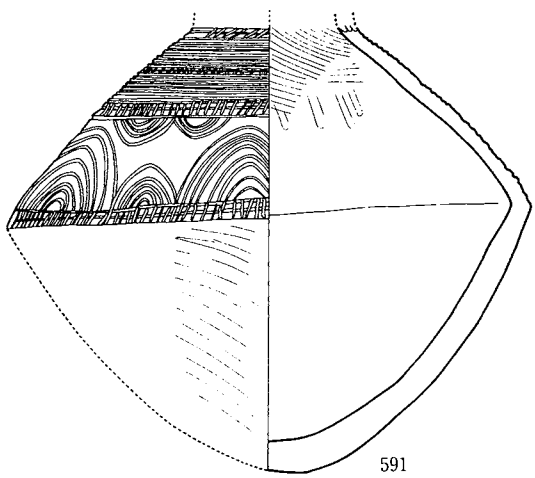
第4節　遺構外出土の土器

この節では、調査区内での表採・表土剥ぎ作業中に採取・遺構確認時に出土した土器で、図化にたえられたもの、及び重弧文土器と確認されたものを取り上げた。出土地点及び法量は観察表で示す。(第175～181図590～643)

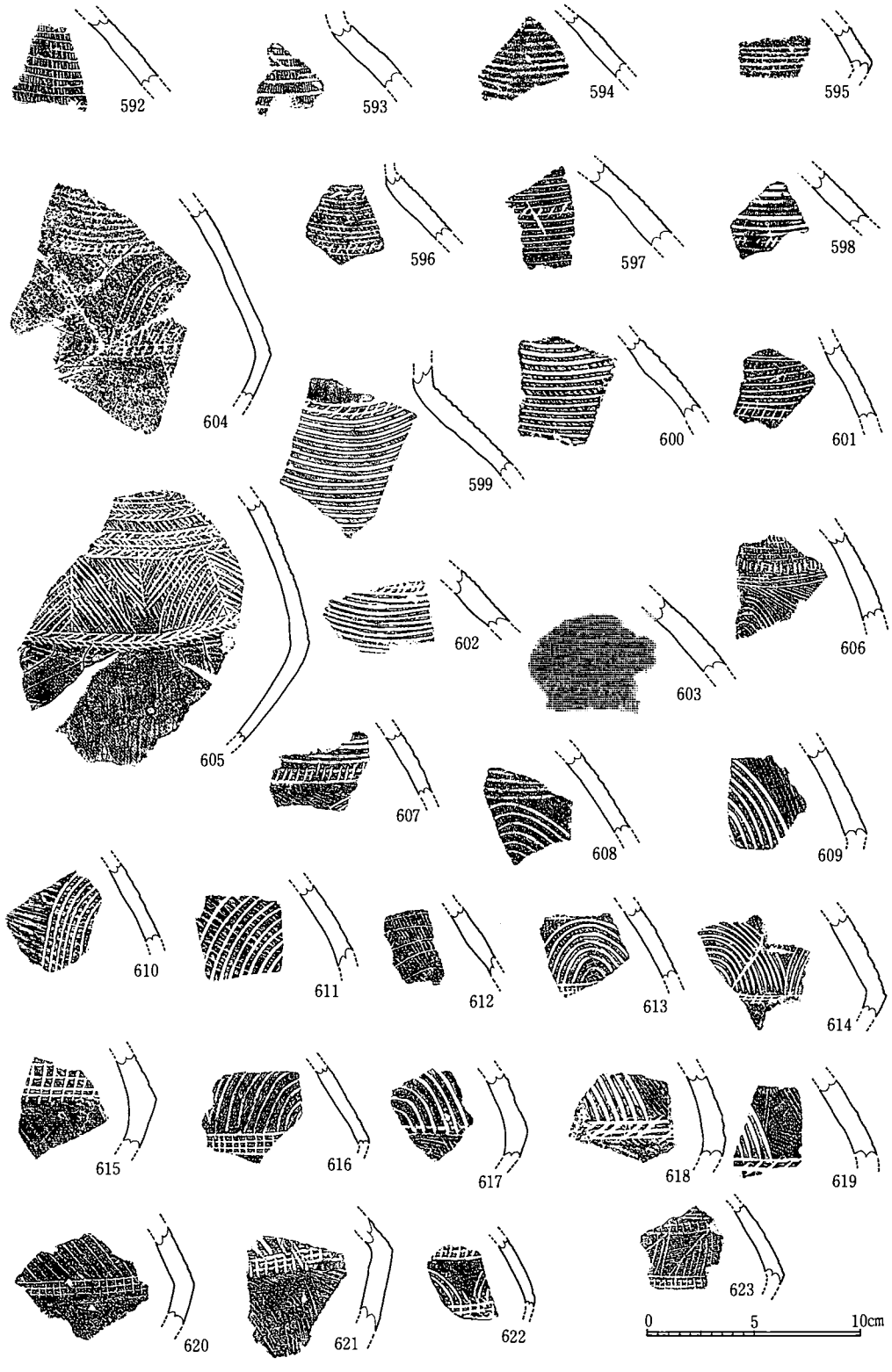
590は重弧文長頸壺で、頸部の端部および底部を欠損する。胴部の屈曲部は中央よりやや上位に位置し、胴部上半及び下半はやや丸みをおびる。頸部は外反しながら立ち上がり、端部付近で大きく開く。胴部上半の上位には25本の連続した沈線文をめぐらし、その上位と下位に左下への刻目を施す。下位には13本の細い沈線で三角文を施し、中央に1本の軸を持つ有軸三角文をめぐらす。この有軸三角文が何個であるかは不明である。胴部の屈曲部には3本の沈線をめぐらし、左下への刻目を施す。施文はハケ目調整の後におこなっている。頸部の調整は下から上へのハケ目調整である。591は頸部を欠損している。胴部の上半は直線的で、下半はやや丸みをおび、底部は丸底である。胴部上半の上位には21本の連続した沈線文をめぐらし、その上位と中位と下位に刻目を施す。下位には8～10本の沈線で8個の重弧文を施し、その接点の空白の部分に5本の沈線で小さな重弧文を施し、計9個で1周する。さらに小さな重弧文の上には、3本の沈線で施した重弧文を2個連続して下向きにもつ。他に、上向きの重弧文の接点の上位の空間に、5本の沈線で重弧文を下向きに描いている。胴部の屈曲部分はするどく、その上位に3本の沈線をめぐらし、それに刻目を施す。器面調整は内外面ともハケ目調整である。

592～623は重弧文土器の拓影である。592～603は胴部上半の上位の部分で、頸部から肩にかけての部分である。まず器面調整としてハケ目調整を施し、その上に連続した沈線文をめぐらしている。596は上位と中位に、597・598・601～603は中位に、599は上位に刻目を施している。602は胴部上半より胴部下半にかけての部分である。連続した沈線文をめぐらしその下位に刻目を施し、重弧文はやや山形にちかい。屈曲部分には3本の沈線をめぐらし、刻目を施す。605も胴上半より胴部下半にかけての部分で、ハケ目調整の後施文している。上位には連続した沈線文をめぐらし、その下位に「ハの字」の刻目を2状にわたってめぐらしており、その直下にさらに左下方向に刻目を施す。上半下位には9本の沈線により、三角文を描き、その中央に1本の沈線で軸を表す有軸三角文がめぐる。さらにその上位の空間に6本の沈線による下向きの有軸三角文が施されている。屈曲部分には3本の沈線をめぐらし、「ハの字」の刻目を施す。屈曲部分はゆるやかである。606～608は上半の沈線部分から重弧文にかけての部分で、608には沈線の下位には刻目は施されていない。609～612は胴部上半の下位の部分で重弧文がうかがわれる。どれもハケ目調整の後に施文している。613～623は胴部上半の下位から胴部下半にかけての部分である。屈曲部分の沈線は1～4本でどれも刻目を施しているが、617は重弧文で刻目を表している。620は有軸三角文であろう。622は小型の重弧文土器である。623も小型で、

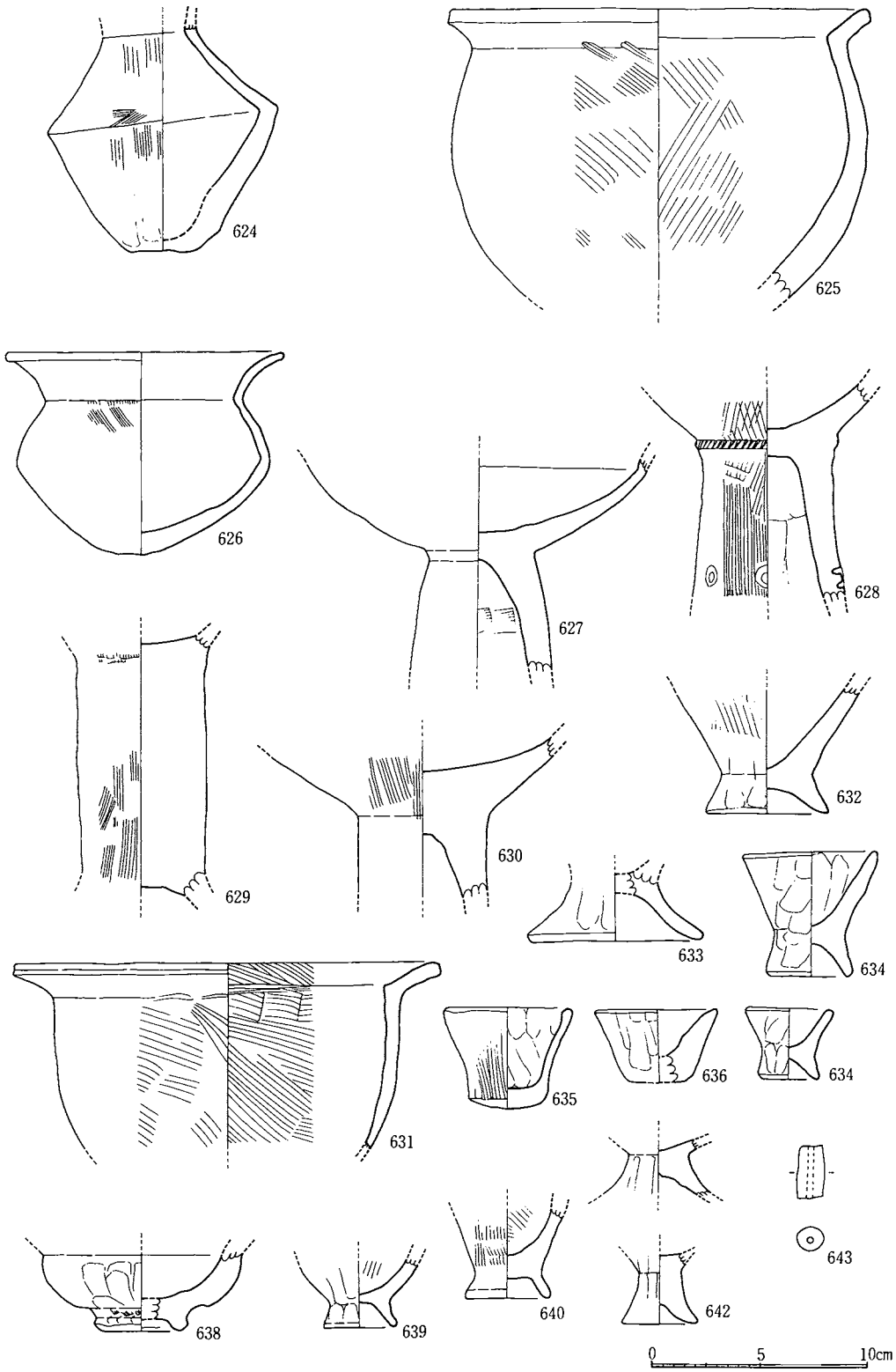




第179図　遺構外出土土器実測図（1）



第180図　遺構外出土土器実測図（2）



第181図　遺構外出土土器実測図（3）

連続した「鋸歯文」をめぐらしている。

624は壺形土器で、頸部が欠損している。頸部より胴部屈曲部にかけて外反し、するどく屈曲し底部にいたり、底部は平底である。器面調整は外面は細かいハケ目を施し、後にナデ調整を施す。内面はナデ調整である。625・626は鉢形土器である。625は底部を欠損しており、器面形態は球形を呈し、口縁部は短く「くの字」に開く。器面調整は内外面ともハケ目調整である。626は胴部で肩を張り底部は丸底を呈する。口縁部は大きく外反して開く。器面調整は外器面にわずかにハケ目が残る。

627～630は高坏形土器である。627は坏部の口縁部と脚部の下位を欠損している。坏部は深く口縁部は大きく外反して開くものと思われる。脚は膨らみをもちながら裾部へといたる。628は坏部の上位と脚部の下位を欠損している。坏部は丸く内湾して立ち上がる。脚は直線的にやや開きながら裾部へいたる。頸部には1条の断面半円形の刻目突帯をめぐらし、脚部には8個の竹管文を施す。器面調整は外面はハケ目調整で、外面はナデ調整である。629は脚の筒部で、筒状に直線的裾部にいたり、内面のえぐりは無い。器面調整はハケ目調整である。630は坏部のほとんどと脚の下位を欠損する。脚は筒状に直線的に裾部にいたる。

631は甕形土器で、胴部の下位を欠損している。胴部最大径を上位にもち、口縁部は鋭く外反し開く。頸部の内面の稜線は明瞭である。器面調整は内外面ともハケ目調整である。

632・633はミニチュアの甕形土器で胴部より上位を欠損する。器面調整はハケ目の後ナデを施す。634～642は手捏土器である。634～639は鉢形土器、640は甕形土器、641・642は高坏形土器を模している。

643は土錘で、器形は円筒形である。

第4表　土器観察表(1)

No.	器　種	出土地点	器高	口径	底径	脚台高	胴最大径	色　調	焼成	登録No.	備考（定形等）
1	壺（大型）	1号住								6	
2	壺（大型、底部）	〃							やや良	33	
3	壺（大型、底部）	〃							やや良	32	
4	壺	〃	40.5	10.2			29.7	(内) 灰色	やや良	5	
5	壺（縁部）	〃	不明	(20.6)				黄褐色	不良	25	
6	壺（小型）	〃							やや良	42	残存率90%
7	壺（小型）	〃							やや良	41	残存高8.2cm
8	壺（広口）	〃					(9.3)		やや良	40	口縁部をのぞく50%
9	鉢（平底）	〃	(4.7)	(8.6)	3.8				良	23	残存率25%
10	壺	〃	35.9	11.2			27.8	黄褐色	やや良	4	残存率50%
11	鉢	〃	10.3	(12.3)	丸底		(11.9)	赤褐色	やや良	24	残存率70%
12	壺（広口）	〃		(11.2)			(10.3)		やや良	39	残存率90%
13	鉢（脚台付）	〃	(9.9)	(9.4)		3.2			良	22	残存率50%
14	鉢（脚台付）	〃		(15.1)		不明		赤褐色	やや良	38	残存率60%
15	高坏	〃		不明		(12.5)		赤褐色	良	21	残存高8.2cm
16	高坏	〃							やや良	30	残存率70%
17	高坏	〃	14.7	(27.2)					良	9	脚の一部
18	高坏	〃		31.9					やや良	8	残存率60%
19	甕	〃	16.1	14.4			13.8	(内) 黄灰色 (外) 黄灰色～褐色	やや良	1	全体の50%
20	甕	〃	20.3	15.0			14.2		やや良	10	完形
21	甕	〃	10.9	12.1			11.0	灰褐色	やや良	2	脚部をわずかに欠損するのみ
22	甕	〃	12.9	10.7			9.5	黄褐色	やや良	3	完形
23	甕（口縁胴一部）	〃		(29.5)			(29.5)	赤褐色	良	37	完形
24	甕	〃		(25.7)					やや良	36	残存率20%
25	甕（口縁胴一部）	〃	不明	(21.4)			(21.0)		やや良	26	口縁部の8%
26	甕（口縁胴一部）	〃	不明	(17.1)			(16.8)	赤褐色	やや良	34	残存率30%
27	甕（底部）	〃	不明	不明		4.0			良	11	残存率20%
28	甕（脚部）	〃		不明		2.9		赤褐色	良	12	残存率20%
29	甕（口縁部・胴一部）	〃		(24.2)			(24.1)	赤褐色	良	35	残存率30%
30	甕（脚部）	〃	不明			5.4			良	16	残存率20%
31	甕	〃							やや良	20	残存高8.5cm
32	甕（脚部）	〃				6.5			良	13	脚部の50%
33	甕	〃							やや良	15	脚部の100%
34	甕（脚付、脚部）	〃							やや良	27	脚部の100%
35	甕（脚付、脚部）	〃							やや良	28	脚部の50%
36	甕	〃							やや良	14	脚部の100%
37	甕	〃							やや良	17	脚部の25%
38	甕	〃							やや良	18	残存率50%
39	甕	〃							やや良	19	脚部の30%
40	手捏土器	〃							やや良	7	残存率60%
41	甕（脚付、一部）	〃		5.5	2.4				やや良	31	
42	鉢（脚付）	〃							やや良	29	残存率70%
43	壺（丸底）	2号住	7.2	7.2			9.1	黄褐色	良	51	残存率85%
44	壺（ミニチュア）	〃	5.1	3.6			5.7	橙褐色	良	53	残存率90%
45	甕（ミニチュア）	〃	6.5	6.4		1.0	5.9	橙褐色	やや良	52	完形
46	甕（小型）	〃	12.7	11.3		2.0	11.5	茶褐色	良	50	完形
47	壺	〃	15.2	12.2			14.4	赤褐色	良	54	残存率80%
48	壺（胴部）	〃					12.1	橙褐色	やや良	55	残存率70%

第５表　土器観察表(2)

No.	器　種	出土地点	器高	口径	底径	脚台高	胴最大径	色　調	焼成	登録No.	備考（定形等）
49	鉢（ミニチュア）	〃			3.4			茶褐色	やや良	58	
50	壺（大型、底部）	〃	不明	不明	(7.5)			赤褐色	やや良	56	残存高6.5cm
51	高坏（脚部のみ）	〃						赤褐色	良	57	残存高6.8cm
52	甕	〃		(21.0)			(22.3)		やや良	43	残存率30%
53	甕	〃		18.7					やや良	44	口縁部の15%
54	甕	〃							やや良	45	脚部の50%
55	甕	〃							やや良	46	底径の30%
56	甕（脚付、底部）	〃							やや良	47	脚部わずか
57	甕（脚付）	〃							やや良	49	
58	甕（脚付、脚部）	〃							やや良	48	脚部の100%
59	鉢	3号住	17.0	21.3	6.8			赤褐色	やや良	59	
60	甕	〃		(23.9)					やや良	60	口縁部の20%
61	甕	〃	30.4	(20.0)		3.3	(20.1)	黄褐色、下半分赤	やや良	62	残存率60%
62	甕	〃							やや良	61	脚部の50%
63	甕	〃							やや良	63	脚部の100%
64	手捏土器(ミニチュア)	〃		不明	2.9			茶褐色	やや良	64	残存率60%
65	壺（小型、丸底）	5号住	7.2	10.0				白っぽい黄褐色	良	73	
66	壺（小型、丸底）	〃						白っぽい黄褐色	良	69	
67	甕	〃							やや良	70	脚部の100%、胴部の50%
68	甕	〃							やや良	71	脚部の100%
69	甕	〃							やや良	72	脚部の100%
70	壺（小型、丸底）	6号住	9.9	(10.8)				白っぽい黄褐色	良	89	
71	壺	〃		(9.0)				暗黄褐色	やや良	83	底部の100%
72	鉢	〃							良	88	胴部の50%
73	甕	〃		21.6					やや良	74	口縁部の20%
74	甕	〃		(29.4)			(29.3)		やや良	78	残存高17.0cm
75	甕（脚部）	〃						灰褐色	やや良	79	
76	甕	〃						褐色	やや良	81	
77	甕（脚付）	〃						灰褐色	やや良	80	
78	甕	〃						茶褐色	やや良	82	脚部の98%
79	甕	〃				49.0		明褐色	やや良	87	
80	甕	〃		(22.8)			25.7	黄褐色	良	75	残存高14.4cm
81	甕	〃		28.4				暗黄灰色	やや良	77	口縁部の20%
82	甕（手捏土器）	〃				1.5		赤褐色	良	84	残存高4.6cm
83	甕（手捏土器）	〃				1.6		乳白色	やや良	85	残存高3.4cm
84	甕（手捏土器）	〃			32.0	1.2		黒褐色	良	86	残存高2.2cm
85	壺（丸型）	7号住	(7.7)	(8.5)				褐色	良	68	
86	甕（脚部）	〃						赤褐色	良	67	
87	甕（脚部）	〃				1.5		白っぽい黄褐色	やや良	66	
88	ミニチュア土器	〃			3.4			赤褐色	やや良	65	
89	壺	11号住		(18.6)				茶褐色	やや良	97	
90	壺（口縁部）	〃		(11.8)				褐色	不良	93	口縁部の20%
91	壺（小型、丸底）	〃	6.7	(6.6)				白っぽい赤褐色	良	95	
92	壺（小型、丸底）	〃	6.1	(6.7)				赤褐色	やや良	94	
93	鉢	〃						暗褐色	不良	96	残存率25%
94	甕	〃						茶褐色	やや良	91	脚部の45%
95	甕（脚付、脚部）	〃						灰褐色	やや良	92	底径の25%
96	甕	12号住						暗褐色	良	90	脚部の20%
97	甕	13号住		(17.6)				明茶褐色	やや良	101	残存高6.3cm
98	壺	〃		12.6				赤褐色	やや良	106	残存高8.3cm

第６表　土器観察表(3)

No.	器　種	出土地点	器高	口径	底径	脚台高	胴最大径	色　調	焼成	登録No.	備考（定形等）
99	壺	〃		10.2				白褐色	良	107	残存高3.9cm
100	壺（底部）	〃						黄褐色	良	110	
101	壺（底部）	〃						褐色	良	108	底径の30%
102	壺	〃						黄灰色	良	111	底径の50%
103	壺	〃						明褐色土	良	109	底部6.3cm
104	高坏	〃						やや暗い褐色	やや良	112	残存高6.6cm
105	甕（脚付）	〃						褐色	良	104	
106	甕(口縁および胴の一部)	〃		(21.8)			(21.6)	赤褐色	やや良	98	残存高15.6cm
107	壺	〃		21.6				やや暗い褐色	やや良	105	残存高5.4cm
108	（脚）	〃				3.2		暗い黄褐色	良	102	残存高4.3cm
109	甕（口縁部）	〃		(21.0)			(22.4)	明黄褐色	やや良	100	残存高19.1cm
110	甕（口縁部）	〃		(26.2)				淡黄色	良	113	
111	甕	〃		(20.1)				灰褐色	やや良	99	口径の22%
112	甕（胴部、一部頸部）	〃					(48.6)	赤褐色	良	115	残存高14.8cm
113	甕（脚付）	〃						淡褐色	良	103	
114	高坏（芯部から脚部）	〃						黄褐色	やや良	114	
115	壺（底部）	14号住			3.6			茶褐色	やや良	117	残存高6.6cm
116	高坏（脚部）	〃						明褐色	やや良	123	残存高11.7cm、残存率20%
117	高坏（脚部）	〃						明茶褐色	やや良	120	残存高9.2cm、残存率30%
118	鉢（台付）	〃				2.0		明褐色	やや良	128	残存高5.5cm
119	甕	〃		(10.0)				やや暗い褐色	やや良	119	残存高5.5cm
120	甕（脚部）	〃				5.0		茶褐色	やや良	116	残存高6.7cm、残存率20%
121	甕（脚付、脚部）	〃						茶褐色	やや良	118	残存率43%
122	甕（脚付、脚部）	〃						暗褐色	やや良	126	脚径の20%
123	甕（脚部）	〃				4.2		暗褐色	やや良	124	残存高5.2cm、残存率10%
124	甕（脚付、脚部）	〃						茶褐色	やや良	121	残存率50%
125	甕（脚部）	〃				(3.7)		淡褐色	やや良	127	残存高5.9cm、残存率10%
126	甕（脚付、脚部）	〃				3.0		茶褐色	やや良	122	脚部の100%
127	甕（脚付、くびれ部）	〃						黄褐色	やや良	125	最大径の30%
128	高坏	15号住						灰褐色	やや良	129	残存高5.0cm
129	鉢	〃		(9.6)				茶褐色・黒褐色	やや良	132	残存率45%
130	鉢	〃		(7.9)				茶褐色	やや良	133	残存率80%
131	甕・壺	〃		(24.5)				やや暗い褐色	良	130	残存高11cm
132	甕（脚付、脚部）	〃						茶褐色	やや良	131	脚部の25%
133	甕（脚部）	〃						黄褐色	良	134	最大径の30%
134	甕	17号住		10.2				茶褐色	やや良	135	残存率90%
135	甕（口縁部）	〃		(20.6)				黄褐色	不良	139	
136	（脚部）	〃						黄褐色	やや良	137	底径の100%、6.0cm
137	（脚部）	〃						暗褐色	やや良	138	脚のくびれ部の70%、8.3cm
138	甕（脚部）	〃						赤褐色		136	
139	壺（小型、丸底）	18号住		7.0				茶褐色	良	152	残存率75%
140	壺（底部）	〃						黄褐色	良	151	残存高12.5cm
141	壺（底部）	〃						黄灰色	やや良	153	全体の70%
142	壺（小型、底部）	〃						黄褐色	やや良	161	
143	鉢（底部）	〃						黄褐色	不良	150	胴部の30%
144	鉢	〃	4.4					黄褐色	やや良	165	全体の70%
145	鉢（台付）	〃				3.8		黄灰色	不良	163	底径の30%
146	高坏（脚の裾部）	〃						黄褐色	やや良	162	脚の裾部の55%
147	高坏	〃						赤褐色	やや良	154	
148	高坏（脚部）	〃						茶褐色	やや良	156	脚部の60%

第７表　土器観察表(4)

No.	器　種	出土地点	器高	口径	底径	脚台高	胴最大径	色　調	焼成	登録No.	備考（定形等）
149	高坏（脚部）	〃						黒みがかった茶褐色	不良	157	脚部の70%
150	高坏（筒部）	〃						赤褐色	やや良	155	残存高8.8cm
151	高坏（脚の筒部）	〃						黒みがかった茶褐色	不良	158	筒部の45%
152	高坏（脚の筒部）	〃						赤褐色	不良	159	残存率30%
153	高坏（脚の裾部）	〃						赤黄褐色	良	160	スカシ６コ
154	高坏（脚の裾部）	〃						黒色	不良	164	残存高2.3cm
155	壺	〃		(21.9)				暗黄色	やや良	149	最大径の10%
156	壺	〃		(18.4)				茶褐色	不良	140	口径部の30%
157	甕（脚部）	〃				5.0		赤褐色	不良	141	
158	甕（脚部）	〃				5.4		赤褐色	不良	147	
159	甕（脚部）	〃						黄褐色	やや良	143	
160	甕（脚部）	〃						黄灰色	不良	146	脚径をわずかに損なう
161	甕（脚部）	〃						黄褐色	やや良	148	脚部の30%
162	甕（脚部）	〃						茶褐色	不良	142	残存率80%
163	甕（脚部）	〃						黄褐色	やや良	144	底径の100%
164	甕（脚部）	〃						褐色	不良	145	
165	鉢	〃						茶褐色	やや良	166	底径の100%
166	鉢	〃						茶系の暗褐色	やや良	167	底径の55%
167	壺（口縁部）	19号住		29.8				淡黄色	やや良	176	残存率７%
168	壺	〃		13.4				茶褐色	やや良	175	口縁部の10%
169	壺（底部）	〃						黄褐色	良	172	
170	鉢	〃						黄褐色および黒褐色	やや良	173	脚部の100%
171	甕（脚部）	〃						明褐色	やや良	171	最大径の30%
172	甕（脚付、脚部）	〃						褐色	やや良	170	
173	甕（脚部・一部胴部）	〃						灰褐色・黄褐色	やや良	169	残存高12.2cm、残存率20%
174	甕	〃				2.9		赤褐色	やや良	168	残存高8.5cm
175	高坏（脚の筒部）	20号住						茶褐色	良	184	残存率30%、スカシ６コ
176	壺	〃		(21.6)				すすけた茶褐色	やや良	177	口縁部の15%
177	甕（口縁部）	〃		(21.2)				赤褐色	不良	181	残存高6.5cm
178	甕（口縁部）	〃		(18.2)				赤褐色	不良	182	残存高4.9cm
179	甕（脚部）	〃						黄褐色	やや良	178	
180	甕（脚部）	〃						褐色	やや良	179	
181	鉢の脚部	〃						黄褐色	やや良	180	脚部の85%
182	ミニチュア土器(甕型)	〃						赤褐色	不良	183	残存高3.9cm、残存率10%
183	土玉	〃						黒色	良	185	完形
184	甕	21号住		(36.5)				暗褐色	やや良	186	口径の９%
185	壺（口縁部）	22号住		(19.0)				茶褐色	やや良	190	
186	鉢	〃						茶褐色	不良	201	
187	鉢	〃	(8.8)	12.0				茶褐色	不良	200	
188	鉢（脚付）	〃						暗黄色	やや良	192	
189	高坏（脚裾部）	〃		19.1				褐色～暗褐色	やや良	199	
190	高坏（筒部）	〃						黄褐色	不良	196	脚筒部の100%
191	鉢（脚部）	〃						やや赤い茶褐色	やや良	189	脚部の10%
192	甕（脚付）	〃						くすんだ黄褐色	やや良	197	
193	甕（脚付）	〃						黄褐色	やや良	194	
194	甕（脚付、脚部）	〃						明るい茶褐色	やや良	187	
195	甕（脚付）	〃						茶褐色	やや良	195	頸部７cm
196	甕（脚付、脚部）	〃						くすんだ茶褐色	不良	188	
197	鉢（脚付）	〃						暗褐色	やや良	193	
198	甕（脚付、脚部）	〃						ややくすんだ茶褐色	やや良	191	脚部の30%

第8表　土器観察表(5)

No.	器　種	出土地点	器高	口径	底径	脚台高	胴最大径	色　調	焼成	登録No.	備考（定形等）
199	甕（脚部）	〃						黄褐色	やや良	198	
200	鉢	23号住	7.7	15.3				(内) 茶褐色	不良	209	残存率95%
								(外) 白っぽい茶褐色			
201	壺	〃						暗黄色	やや良	208	頸部径の11%、胴部径の15%
202	甕	〃		(15.5)			(15.8)	淡黄色	やや良	206	口径の25%
203	壺	〃		20.5				暗茶褐色	やや良	202	口径の20%
204	甕（口縁部および胴部）	〃		(18.6)			(18.8)	赤色	やや良	203	残存率40%
205	甕（脚部から胴部）	〃						(内) 黒褐色	やや良	207	残存率20%
								(外) 黄褐色			
206	甕（脚付）	〃						くすんだ黄褐色	やや良	210	脚部の100%
207	甕（脚部）	〃				(4.5)		(内) 黒褐色	やや良	204	
								(外) うすい茶褐色			
208	甕（脚部）	〃				3.0		橙褐色	不良	205	脚部の100%
209	壺	24号住		(19.6)				暗褐色	やや良	216	口径の11%、頸部径の30%
210	壺	〃						赤褐色	やや良	220	残存率60%
211	壺（ミニチュア）	〃						(内外) 赤褐色	やや良	222	残存率60%
212	鉢	〃	12.5					(内) 黒色(黒斑状)	やや良	223	最大径の10%
								(外) 淡黄色			
213	鉢（脚部）	〃						暗黄色	やや良	219	
214	高坏（脚の筒部）	〃						褐色～黄褐色	良	218	
215	高坏	〃						茶褐色	不良	217	筒部の90%
216	壺	〃		(25.7)				淡黄色	不良	211	口縁部わずか、頸部径の20%
217	甕（脚部）	〃				3.6		黄褐色	やや良	214	
218	甕（脚部）	〃				4.1		茶褐色	やや良	212	残存高6.6cm
219	甕（脚部）	〃						黄褐色	やや良	215	くびれ部の90%
220	甕（脚部）	〃				(3.2)		灰褐色	良好	213	残存高7.4cm
221	甕（脚付）	〃						ややくすんだ茶褐色	やや良	221	頸部の60%
222	鉢（ミニチュア）	〃						くすんだ茶褐色		224	口縁部の25%
223	鉢（ミニチュア）	〃		3.3				やや白っぽい茶褐色		225	残存率85%（口縁部では70%）
224	鉢	25号住		22.7				暗黄色	やや良	301	残存率70%
225	鉢（脚台付、脚部）	〃				8.2		(内外) 茶褐色	良	302	
226	鉢（脚台付）	〃						(内) 赤褐色、灰褐色	やや良	300	残存高3.3cm
227	甕（脚部）	〃				5.2		淡褐色	良	299	
228	壺（口縁部）	27号住		(16.8)						230	残存率５%
229	壺	〃		(12.2)				褐色	やや良	229	口縁部の15%
230	壺（底部）	〃						暗褐色	良	231	底部の100%
231	高坏	〃						茶褐色	やや良	232	脚径の12%
232	甕（口縁部）	〃		(18.4)			(15.9)	(内) 茶褐色	やや良	226	残存率10%
								(外) 黄褐色			
233	甕	〃						くすんだ濃い茶褐色	やや良	228	脚部の50%
234	甕	〃						黄褐色	やや良	227	脚部～胴のくびれ部の径の100%
235	鉢	29号住	6.3	(12.2)				(内外) 茶褐色	やや良	233	残存率40%
236	甕（脚付、脚部）	〃						茶褐色	やや良	234	底径の20%
237	高坏	31号住						茶褐色	良	239	脚径の35%
238	甕	〃						暗褐色	やや良	237	くびれ部の100%
239	甕	〃						暗褐色	良	238	くびれ部の30%
240	甕（脚部）	〃						茶褐色	やや良	235	頸部の50%
241	壺（ミニチュア）	〃						ややくすんだ茶褐色	不良	236	脚部の80%
242	壺	33号住						暗褐色	やや良	242	底部の30%
243	高坏（脚筒部）	〃						暗茶褐色	良	243	残存率80%

第９表　土器観察表(6)

No.	器　種	出土地点	器高	口径	底径	脚台高	胴最大径	色　調	焼成	登録No.	備考（定形等）
244	甕（脚部）	〃						茶褐色	良	241	残存率５％
245	甕（脚部）	〃						暗茶褐色	良		残存率５％
246	壺	35号住		(8.8)			(12.9)	黒褐色	やや良	244	残存率20％
247	鉢型土器	36号住		(14.5)				(内）黄褐色	良	245	残存率10％
								(外）暗褐色			
248	甕（脚部）	〃				2.4		(内外）赤褐色	良	246	残存高4.7cm
249	甕	〃						(内）黒色（外）褐色	良	249	
250	甕（脚部）	〃						白っぽい褐色	良	247	残存高4.6cm
251	甕							灰白色	普通	248	
252	壺（口縁部）	37号住		(17.4)				(内）茶褐色	良	266	残存高7.8cm
								(外）赤褐色			
253	壺	〃						茶褐色	良	259	口縁部の10％
254	鉢	〃		(14.8)				黄灰白色	良	267	口縁部の10％
255	壺	〃		(19.4)				茶系の暗褐色	やや良	261	口縁部の20％
256	甕（脚部～胴部）	〃						(内外）暗茶褐色	良	260	残存率20％
257	甕	〃						黄褐色	やや良	263	くびれ部の20％、脚部の縁わずか
258	甕（小型、脚部）	〃				2.5		(内）赤褐色	良	262	残存高3.3cm
								(外）暗褐色			
259	甕	〃						灰白色	良	264	脚部の縁の25％
260	鉢型手捏土器	〃		2.8				白っぽい茶色	やや良	265	全体の８％、脚部の20％
261	壺（口縁部）	40号住		(18.2)				淡赤褐色	やや良	281	口縁部の50％
262	壺（底部）	〃			5.5			(内）黒褐色	良	277	残存高3.9cm
								(外）淡赤褐色			
263	鉢	〃		(14.8)				黄褐色	やや良	280	胴部の15％、口縁部わずか
264	高坏（脚部）	〃						黄褐色	やや良	278	くびれ部の100％
265	甕(口縁部および胴部)	〃		(21.3)			(19.7)	(内）赤褐色	良	270	残存高14.0cm
								(外）黒褐色			
266	甕	〃		(26.0)				茶褐色	やや良	269	口縁部の30％
267	甕（口縁部）	〃		(25.4)			(23.7)	暗黄褐色	良	268	残存率５～10％
268	甕（脚付）	〃						茶褐色	やや良	271	脚部の95％
269	甕（脚付）	〃						明褐色	やや良	276	くびれ部の100％
270	甕	〃						黄褐色	やや良	273	脚径の10％
271	甕	〃						黄褐色	やや良	274	脚径の10％、くびれ部の30％
272	甕（脚付）	〃						茶褐色	やや良	272	脚部の55％
273	甕	〃						くすんだ茶褐色	やや良	275	脚部の95％
274	甕型土器(手捏土器)	〃				1.7		暗灰褐色	やや良	279	残存高3.0cm
275	鉢	41号住						黄灰白色	やや良	283	
276	ミニチュア土器	〃						灰白色	やや良	282	くびれ部の100％
277	甕（脚部）	42号住				4.2		(内）明褐色	良	306	脚部の50％
								(外）暗褐色			
278	壺（口縁部）	43号住		35.6				(内）暗茶褐色	良	304	残存高5.8cm
								(外）茶褐色			
279	甕	〃		(24.7)				黄褐色	良	303	残存率20％
280	甕	〃						黄灰白色	良	305	脚径の80％、くびれ部の100％
281	壺（大型、底部）	44号住			(8.4)			(内）灰白色	不良	254	底部の25％
								(外）淡黄色			
282	鉢	〃		(11.3)				(外）黄褐色	良	257	口径の25％
283	鉢	〃		(10.6)				黄褐色	良	258	口縁部の20％、底部の100％
284	高坏（ミニチュア）	〃						褐色	良	255	50％、6.6cm、すかし穴７コ
285	鉢（脚台付）	〃		11.0				赤褐色	不良	253	残存率90％

第10表　土器観察表(7)

No.	器　種	出土地点	器高	口径	底径	脚台高	胴最大径	色　調	焼成	登録No.	備考（定形等）
286	甕	〃		(22.2)				暗褐色	良	250	口縁部の20%
287	甕	〃						暗黄褐色	良	251	
288	甕	〃						黄褐色	良	252	
289	鉢（ミニチュア）	〃		2.9				茶褐色	やや良	256	口縁部の55%、脚部の40%
290	甕（脚部）	45号住						淡赤褐色	良	288	残存高6.5cm
291	甕（口縁部）	〃		(16.7)				(内) 暗茶褐色	良	284	残存高4.8cm
								(外) 黒褐色			
292	甕（脚部）	〃				4.6		淡赤褐色	良	285	脚部の80%
293	甕（脚付）	〃						褐色	良	286	底径の15%、くびれ部の100%
294	甕（脚付）	〃						(内) 黒斑に近い黒色	良	287	くびれ部の100%
								(外) 黄褐色			
295	手捏土器	〃	2.3	3.5				褐色	良	289	完形
296	高坏（脚の筒部）	46号住						黄灰白色	良	291	くびれ部の100%
297	甕（脚付）	〃						褐色	やや良	290	くびれ部の85%
298	甕（口縁および胴部）	48号住		(24.6)			22.8	(内) 褐色	良	292	残存高18.1cm
								(外) 暗褐色			
299	甕（脚付）	〃						灰褐色	やや良	293	くびれ部の15%
300	ミニチュア土器片	〃			5.3			暗褐色	良	296	底径の25%
301	壺（ミニチュア）	〃								295	
302	壺	49号住						暗褐色	良	435	底径の100%
303	壺	〃						黄褐色	良	仮106	
304	壺	〃						黄褐に薄い黒斑様のもの	良	仮107	
305	高坏	〃						褐色	やや良	437	くびれ部で直径の100%
306	高坏	〃	11.0					褐色	良	438	筒部～くびれ部で直径の100%
307	高坏	〃						(内) 黒色	良	439	筒部で直径の100%
								(外) 灰白色			
308	甕	〃		17.2				(内) 黒斑様の黒色	良	436	口径の18%
								(外) 明褐色			
309	甕	50号住		(24.5)				暗黄褐色	やや良	445	最大径の33%
310	鉢	〃		(10.2)				明褐色	良	446	口縁部の40%
311	壺（ミニチュア）	〃	7.2	3.9				灰色	良	448	口縁部を50%欠損するのみ
312	甕	〃						灰褐色	良	447	口径の54%
313	壺	51号住						(内) 灰白色	良	仮109	
								(外) 明黄白色			
314	壺	〃						(内) 灰色	良	仮108	
								(外) 淡黄色			
315	壺	〃						淡黄褐色	良	仮110	
316	鉢	〃	(直径16.2)					灰白色	良	442	口径の47%
317	甕（脚部）	〃						黄褐色	やや良	444	
318	甕（脚部）	〃						黄褐色～褐色	やや良	441	底径の35%
319	甕（脚部）	〃						黄灰白色～灰色	良	440	底径の70%
320	甕	〃						灰白色	良	443	くびれ部で直径の100%
321	重弧文土器	52号住						(内) 灰色 (外) 淡黄色	良	仮105	
322	重弧文土器	53号住						(内) 灰白色	良	仮104	
								(外) 淡黄褐色			
323	重弧文土器	54号住						(内) 黄褐色	良	仮115	
								(外) 暗黄褐色			
324	壺	55号住		15.2				暗褐色	良	433	口縁部の100%
325	重弧文土器	〃						淡黄褐色	良	仮103	
326	甕	〃		(29.1)			(26.0)	暗黄褐色～黒色	良	428	口縁部の33%

第11表　土器観察表(8)

No.	器　種	出土地点	器高	口径	底径	脚台高	胴最大径	色　調	焼成	登録No.	備考（定形等）
327	甕	〃		(27.5)			(25.1)	明褐色	良	427	口縁部の27%
328	甕	〃		25.1			24.2	黄褐色	良	429	残存率28%
329	甕	〃		(23.9)			(21.5)	暗灰色	良	430	残存率25%
330	甕（脚付）	〃						淡黄褐色	良	431	くびれ部の100%
331	甕	〃						明褐色	良	432	くびれ部の32%
332	手捏ミニチュア土器	〃	5.0	6.0				灰黄褐色	良	434	脚部がわずかに欠損するのみ
333	壺	56号住						明褐色	良	417	残存率27%
334	壺	〃						(内) 白褐色 (外) 暗褐色	良	419	底部の100%
335	壺	〃						黄褐色	良	418	底部の100%
336	重弧文土器	〃						(内) 淡黄色 (外) 暗黄褐色	良	仮83	
337	重弧文土器	〃						(内)黒色 (外)黄褐色	良	仮97	
338	重弧文土器	〃						(内) 黄白色 (外) 暗黄色	良	仮94	
339	重弧文土器	〃						(内) 黄白色 (外) 暗灰色	良	仮95	
340	重弧文土器	〃						(内) 淡灰色 (外) 淡黄褐色	良	仮100	
341	重弧文土器	〃						黄褐色	良	仮85	
342	重弧文土器	〃						(内) 黒色 (外) 淡黄褐色	良	仮87	
343	重弧文土器	〃						(内)黒色 (外)淡黄色	良	仮86	
344	重弧文土器	〃						(内)黒色 (外)暗褐色	良	仮96	
345	重弧文土器	〃						黒色	良	仮101	
346	重弧文土器	〃						(内) 淡黄褐色 (外) 黒色	良	仮93	
347	重弧文土器	〃						(内) 灰色 (外) 黒色～灰色	良	仮89	
348	重弧文土器	〃						暗黄褐色	良	仮90	
349	重弧文土器	〃						(内) 灰色 (外) 暗黄褐色	良	仮99	
350	重弧文土器	〃						黄灰白色	良	仮92	
351	重弧文土器	〃						(内) 灰色 (外) 暗黄褐色	良	仮98	
352	重弧文土器	〃						淡黄褐色	良	仮88	
353	重弧文土器	〃						暗白褐色	良	仮102	
354	重弧文土器	〃						黄褐色～暗黄褐色	良	仮91	
355	重弧文土器	〃						黄褐色	良	仮84	
356	鉢	〃		(17.4)				淡黄色	良	415	残存率14%
357	高坏	〃						(内)褐色 (外)暗褐色	良	416	くびれ部の42%
358	高坏	〃		(29.8)				黄褐色	良	397	残存率30%
359	甕	〃		23.8			25.0	暗灰色	良	402	口縁部の26%
360	甕	〃		(23.0)				灰白色	良	403	口縁部の40%
361	甕	〃		(24.8)			(28.6)	暗黄褐色	良	401	残存率35%
362	甕	〃		(22.7)				淡褐色	良	404	口縁部の33%
363	甕	〃		(16.8)				明褐色	良	414	残存率13%、頸部の23%
364	甕	〃		(24.4)			(20.7)		良	405	
365	甕	〃						明褐色	良	407	残存率85%
366	甕	〃						灰白褐色	良	409	残存率30%

第12表　土器観察表(9)

No.	器　種	出土地点	器高	口径	底径	脚台高	胴最大径	色　調	焼成	登録No.	備考（定形等）
367	ミニチュア土器	〃						淡黄色	良	423	残存率80%
368	甕	〃						灰色～暗褐色	良	412	残存率77%
369	甕	〃						淡黄褐色	良	406	残存率23%
370	甕	〃						黄褐色	良	413	くびれ部の100%
371	甕	〃						淡褐色	良	408	残存率45%
372	甕	〃						灰色	良	411	くびれ部の100%
373	甕	〃						淡褐色	良	410	残存率80%
374	高坏（ミニチュア）	〃						淡黄褐色	良	422	くびれ部の100%
375	甕（ミニチュア）	〃						暗黄褐色	良	421	残存率37%
376	鉢（ミニチュア）	〃						暗褐色	良	420	底部の100%
377	手捏土器	〃						黄褐色	良	425	脚部の100%
378	手捏土器	〃			3.4			暗灰色	良	424	底部の100%
379	壺	57号住		(17.2)			(37.7)	淡赤褐色	良	375	残存率70%
380	壺	〃					(30.8)	明褐色	良	376	残存率ほぼ50%（破片の集合）
381	壺（素口縁）	〃	59.3	13.5			39.6	黄灰白色	良	追1	残存率50%
382	壺	〃		(11.7)			32.4	暗茶褐色	良	391	残存高32.1cm
383	壺（素口縁）	〃		(16.9)				淡褐色	良	378	口縁部の35%
384	壺（素口縁）	〃		(15.9)				淡褐色	良	377	口縁部について48%
385	壺（素口縁）	〃		9.6				明褐色	良	390	
386	壺（口縁部）	〃		15.9				茶褐色	良	379	
387	壺（口縁部～胴部）	〃		(14.6)				暗黄褐色	やや良	380	残存高10.7cm
388	壺（口縁部）	〃		(15.3)				暗褐色	良	383	口縁部の65%
389	壺（口縁部）	〃		(18.6)				淡赤褐色	良	381	口縁部の50%
390	壺	〃		(17.0)				赤褐色	良	382	口縁部の50%
391	壺（口縁部）	〃		(11.6)				明褐色	良	384	頭部の33%
392	壺（複合口縁）	〃		12.9				暗褐色	良	387	残存率72%
393	壺（複合口縁）	〃		(13.0)				暗褐色	良	388	口縁部の84%
394	壺（複合口縁）	〃		(15.2)				黄褐色	良	389	残存率41%
395	壺（複合口縁）	〃		13.7				淡黄灰色	良	385	残存率35%
396	壺（複合口縁）	〃		(11.8)				暗灰色	やや良	386	残存率35%
397	重弧文土器	〃		18.9			(29.9)	黒褐色	良好	仮2	重弧文10コ
398	重弧文土器	〃					(26.6)	(内) 暗褐色 (外) 淡黄褐色	良好	仮10	重弧文5コ
399	重弧文土器	〃						(内)灰白色～灰色 (外) 黄灰白色	良	仮6	重弧文12コ
400	重弧文土器	〃		16.9			27.9	赤褐色	良好	仮1	重弧文6コ
401	重弧文土器	〃						灰色～黒色	良	仮7	残存率15%
402	重弧文土器	〃						(内)灰色 (外)灰白色	良	仮9	残存わずか
403	重弧文土器	〃					(27.5)	(外) 赤褐色	良好	仮8	胴部の70%、重弧文大7コ小7コ
404	重弧文土器	〃					(30.2)	(外) 茶褐色	良好	仮3	残存高13.3cm、重弧文6コ
405	重弧文土器	〃						(内)灰色 (外)淡褐色	良	仮14	残存率17%
406	重弧文土器	〃						暗褐色（黒に近い）	良	仮13	残存率40%
407	重弧文土器	〃						(内) 灰色～黒色 (外) 明褐色	良	仮12	頸部の30%
408	重弧文土器	〃						暗褐色	良	仮15	残存率20%
409	重弧文土器	〃						暗褐色	良	仮11	残存率20%
410	重弧文土器	〃						暗褐色	良	仮18	残存率30%
411	重弧文土器	〃						淡褐色	良	仮20	口縁部の45%
412	重弧文土器	〃						明褐色	良	仮17	残存率70%
413	重弧文土器	〃						淡黄色	やや良	仮19	残存率16%

第13表　土器観察表(10)

No.	器　種	出土地点	器高	口径	底径	脚台高	胴最大径	色　調	焼成	登録No.	備考（定形等）
414	重弧文土器	〃						黄褐色	良	仮16	残存率38%
415	重弧文土器	〃						淡黄褐色	良	仮64	
416	重弧文土器	〃						(内) 灰白色	良	仮66	
								(外) 淡黄褐色～			
								暗黄褐色			
417	重弧文土器	〃						(内)灰色 (外)淡黄色	良	仮67	
418	重弧文土器	〃						(内)黒斑様の黒色	良	仮60	
								(外) 淡黄褐色			
419	重弧文土器	〃						黄褐色	良	仮33	
420	重弧文土器	〃						黄褐色、黒斑少し	良	仮44	
421	重弧文土器	〃						(内) 黄灰白色	良	仮63	
								(外) 濃い灰色			
422	重弧文土器	〃						暗褐色	良	仮59	
423	重弧文土器	〃						暗褐色	良	仮62	
424	重弧文土器	〃						淡黄褐色に灰がかぶる	良	仮68	
425	重弧文土器	〃						(内)灰色 (外)黒色	良	仮42	
426	重弧文土器	〃						(内) 黒色	良	仮41	
								(外) 黄灰白色			
427	重弧文土器	〃						淡褐色	良	仮65	
428	重弧文土器	〃						暗褐色	良	仮61	
429	重弧文土器	〃						(内) 黒色	良	仮49	
								(外) 淡黄褐色			
430	重弧文土器	〃						黒色	良	仮39	
431	重弧文土器	〃						暗黄色	良	仮70	
432	重弧文土器	〃						黄褐色	良	仮71	
433	重弧文土器	〃						(内) 灰白色	良	仮50	
								(外) 淡黄褐色			
434	重弧文土器	〃						(内) 灰色	良	仮43	
								(外)黒斑の黒色～灰色			
435	重弧文土器	〃						(内)灰白色 (外)灰色	良	仮35	
436	重弧文土器	〃						暗灰色	良	仮78	
437	重弧文土器	〃						明黄褐色	やや良	仮40	
438	重弧文土器	〃						淡黄褐色	やや良	仮38	
439	重弧文土器	〃						黄褐色	良	仮69	
440	重弧文土器	〃						黄褐色	良	仮46	
441	重弧文土器	〃						(内)茶褐色 (外)黒色	良	仮34	
442	重弧文土器	〃						褐色	良	仮56	
443	重弧文土器	〃						(内)黒色 (外)暗褐色	良	仮74	
444	重弧文土器	〃						(内)黒色 (外)黄灰色	良	仮48	
445	重弧文土器	〃						(内)灰色 (外)黄褐色	良	仮45	
446	重弧文土器	〃						淡黄褐色	良	仮58	
447	重弧文土器	〃						(内) 黒色	良	仮37	
								(外) 明黄褐色			
448	重弧文土器	〃						(内) 黒色	良	仮76	
								(外) 暗黄褐色			
449	重弧文土器	〃						暗黄色	良	仮81	
450	重弧文土器	〃						明黄褐色	良	仮80	
451	重弧文土器	〃						黄褐色～黒色	良	仮75	
452	重弧文土器	〃						黄褐色	良	仮36	
453	重弧文土器	〃						(内) 褐色	良	仮57	

第14表　土器観察表(11)

No.	器　種	出土地点	器高	口径	底径	脚台高	胴最大径	色　調	焼成	登録No.	備考（定形等）
								(外)黒斑様の黒色			
454	重弧文土器	〃						灰色～黒色	良	仮54	
455	重弧文土器	〃						(内) 灰白色	良	仮77	
								(外) 淡明褐色			
456	重弧文土器	〃						(内) 暗黄色	良	仮72	
								(外) 淡黄色			
457	重弧文土器	〃						(内) 淡灰褐色	やや良	仮52	
								(外) 黒色			
458	重弧文土器	〃						(内) 黄灰白色	良	仮51	
								(外) 暗褐色			
459	重弧文土器	〃						黄灰白色	良	仮53	
460	重弧文土器	〃						黒斑様の黒色	良	仮55	
461	重弧文土器	〃						(内)黒色 (外)黄灰色	良	仮47	
462	重弧文土器	〃						(内) 暗灰色	良	仮79	
								(外) 明黄褐色			
463	重弧文土器	〃						(内) 暗黄色	良	仮73	
								(外) 黒色			
464	重弧文土器	〃	25.8	31.4			(31.0)	黄灰白色	やや良	399	残存率50%、口縁部50%
465	重弧文土器	〃		(19.9)			(18.0)	明褐色	良	365	残存率20%
466	高坏（坏部）	〃						(内) 淡褐色	良	392	残存高7.4cm
								(外) 赤褐色			
467	高坏（坏部）	〃		(27.1)				(内)黒斑、煤状の黒	良	396	残存率30%、口縁部わずか
								(外) 黄褐色			
468	高坏	〃		(27.3)				淡黄色	良	393	残存率50%
469	高坏	〃						黄灰白色	良	398	脚のくびれ部100%、杯部40%
											口縁部０%
470	高坏（脚、筒部）	〃						明褐色～黄褐色	良	394	完形
471	高坏（脚、筒部）	〃						明褐色～黄褐色	良	395	
472	甕	〃		24.1				(内) 黄褐色	良	363	口径について17%
								(外) 黒黄褐色			
473	甕	〃		(32.9)			(30.9)	赤褐色	良	361	残存率20%
474	甕	〃		(21.4)			(21.7)	(内) 黄褐色	良	356	残存率20%
								(外)黄灰白色に黒煤			
475	甕	〃		(22.8)			(22.7)	(内) 赤褐色	良	357	残存率25%
								(外) 黒褐色			
476	甕	〃		20.2			20.1	(内) 淡赤褐色	良	350	残存率60%
								(外) 淡茶褐色			
477	甕	〃		(21.9)			20.5	(内) 黄褐色	良	351	残存高13.0cm
								(外) 黒褐色			
478	甕	〃		(17.5)			(19.3)	暗灰色	良	362	脚部の20%、口縁部の11%
479	甕（口縁部～胴部）	〃		24.9			23.9	淡赤褐色	良	349	残存率50%
480	甕	〃		24.0			22.4	淡茶褐色	良	355	残存高17.3cm
481	甕	〃		(22.1)			(22.0)	(内) 黄褐色	良	358	口径の15%
								(外) 暗褐色			
482	甕	〃		28.5			26.2	淡褐色	良	353	
483	甕	〃		(24.7)			(24.9)	暗灰白色	良	354	口縁部の50%
484	甕	〃		25.3				(内) 黄灰褐色	良	364	胴部の10%
								(外) 黒褐色			
485	甕	〃		(22.4)			(19.0)	暗黄褐色	良	360	残存率17%
486	甕	〃	30.2	(24.1)			(22.5)	暗黄褐色	良	352	口縁部の20%、胴部の60%

第15表　土器観察表(12)

No.	器種	出土地点	器高	口径	底径	脚台高	胴最大径	色調	焼成	登録No.	備考（定形等）
											底部の50%
487	甕	〃		33.4				黄褐色	良	367	残存率20%
488	甕	〃		(32.5)				(内) 明褐色	良	368	頸部の25%
								(外) 暗黄褐色			
489	甕(刻目突帯、脚台付)	〃		41.7			38.7	(内) 暗赤褐色	良	372	残存率90%
								(外) 灰白色			
490	甕	〃		(50.2)				黒褐色	良	374	残存高29.0cm
491	甕	〃		(41.3)				(内)灰色 (外)黄白色	良	369	突帯部の25%、口縁部わずか
492	甕	〃		(42.5)				灰白色	良	373	残存率60%
493	甕 (刻目突帯付)	〃		(38.8)			(35.8)	(内) 黒褐色	良	370	残存率40%
								(外) 淡黄褐色			
494	甕	〃		(34.0)				(内) 黄褐色	良	371	口縁部の45%
								(外) 黒褐色			
495	甕	〃		32.6			30.1	黄褐色、煤付着	良	366	口縁部の60%、脚部の50%
496	甕	〃						(内) 黒煤付着	良	359	脚径の90%、くびれ部の100%
								(外)褐色に煤付着			
497	手捏土器(ミニチュア)	〃	4.6	3.8						400	完形
498	重弧文土器	58号住						(内) 明褐色	良	仮82	
								(外) 黄褐色			
499	壺	60号住						明褐色	良	449	口縁部の22%
500	重弧文土器	〃						(内) 灰色	良	仮111	
								(外) 淡黄褐色			
501	重弧文土器	〃						(内) 黄灰色	良	仮112	
								(外) 暗黄褐色			
502	重弧文土器	〃						黄褐色	良	仮113	
503	重弧文土器	〃						黒色	良	仮114	
504	重弧文土器	61号住						暗黄色	良	仮116	
505	重弧文土器	〃						(内) 黄白色	良	仮117	
								(外) 黄褐色			
506	壺	62号住		(15.3)				白褐色	良	348	口縁部の45%
507	重弧文土器	〃						(内)黒色 (外)黄褐色	やや良	仮31	
508	重弧文土器	〃						黄褐色	良	仮32	
509	甕	〃						黒褐色	やや良	347	
510	高坏 (脚筒部)	65号住						橙褐色	やや良	308	脚筒部の50%
511	甕 (小型)	67号住		(12.4)			(11.2)	(内) 淡褐色	やや良	307	残存高10.0cm
								(外) 赤褐色			
512	壺	68号住	31.2	(13.1)				(内)灰色 (外)淡黄色	不良	333	胴部の80%、底部の100%
513	壺 (口縁部)	〃		(12.8)				茶褐色	やや良	334	残存高5.6cm
514	壺	〃						褐色	やや良	332	底部の100%
515	壺	〃		17.5			38.8	赤褐色	やや良	338	残存率70%
516	壺	〃	46.5	15.1	7.5		42.7	(内) 暗褐色	やや良	329	
								(外) 淡茶褐色			
517	壺	〃		(14.4)				黄白色	不良	330	口径の50%、胴部の30%
518	壺	〃		(16.7)				褐色	やや良	337	頸部の50%、胴部の20%、底部の30%
519	壺 (大型)	〃			8.0			淡黄褐色	不良	336	
520	壺	〃		12.4				黄灰白色	不良	335	口縁部の100%、胴部の25%、底部の100%
521	壺	〃						黄褐色	やや良	345	残存率50%
522	重弧文土器	〃						茶褐色	やや良	仮21	残存率10%、重弧文8～9コ

第16表　土器観察表(13)

No.	器　種	出土地点	器高	口径	底径	脚台高	胴最大径	色　調	焼成	登録No.	備考（定形等）
523	鉢	〃	11.8	(10.4)	(5.7)			黒褐色	やや良	346	
524	高坏	〃		(29.8)				暗褐色	良	339	残存率50%
525	甕	〃		26.0			26.4	赤褐色	やや良	308	残存率90%
526	甕	〃	34.2	24.3			23.4	暗褐色	やや良	343	口縁部の80%、脚部の100%
527	甕	〃		20.0			18.0	赤褐色、下半分赤色	やや良	310	残存高20.6cm
528	甕	〃		21.5		2.4	23.5	(内) 茶褐色 (外) 赤褐色	良	314	残存率90%
529	甕	〃		33.2			30.4	黄灰色	やや良	319	口縁部の50%、胴部の70%
530	甕	〃		24.6			23.2	茶褐色	やや良	312	残存率80%
531	甕	〃		29.1			26.9	暗褐色	やや良	313	口縁部の90%、胴部の90%
532	甕	〃		(28.7)			(26.2)	黄褐色	やや良	316	残存率40%
533	甕	〃		(24.9)			(23.3)	暗褐色	やや良	331	口縁部の25%
534	甕	〃		(25.9)			(22.9)	(内)灰褐色 (外)黒色	やや良	328	口径の50%
535	甕	〃		(25.5)			(23.6)	暗褐色	やや良	323	口径の30%
536	甕	〃		24.1			21.9	褐色	やや良	318	口縁部の30%、 胴部の30～50%
537	甕	〃		(25.0)			(23.0)	(内) 黄褐色 (外) 暗褐色	やや良	321	残存高14.3cm
538	甕	〃		(28.0)			(24.6)		やや良	322	残存率20%
539	甕	〃									
540	(同一体)	〃	(21.4)	(21.2)			(18.7)	灰褐色	やや良	325	口径の30%、他の50%
541	甕（脚付）	〃					29.6	褐色	やや良	317	口縁部の80%、胴部の90%
542	甕	〃				3.7		(内外) 淡赤褐色	良	324	残存高9.9cm
543	甕	〃						(内)暗褐色 (外)褐色	やや良	311	脚径の100%
544	甕	〃				30.0		茶褐色	やや良	326	残存率30%
545	甕（脚部）	〃				4.5		黄褐色	良	327	残存高7.9cm
546	甕	〃				3.6		(内)褐色 (外)暗褐色	良	315	残存率30%
547	甕（脚付）	〃						(内)黒色 (外)暗褐色	やや良	309	
548	甕	〃		(14)				黄灰白色	やや良	341	頸部の20%
549	甕	〃	43.9～ 46.5	41.9		3.3～ 4.1	38.6	(内) 淡赤褐色 (外) 褐色	良	320	残存率98%
550	ミニチュア土器(甕型)	〃						赤褐色	やや良	340	
551	土錘	〃	3.3	1.4				茶褐色	良	343	
552	壺（大型）	土器溜	82.7	18.4			4.8	暗褐色	良	478	残存高77.2cm
553	壺	〃		12.1				褐色	良	470	口縁部の57%
554	壺	〃		(10.3)				暗黄褐色	良	471	口縁部の32%
555	壺（胴部）	〃						暗灰色	良	482	残存率80%
556	壺	〃					23.3	灰褐色	良	472	胴部の36%
557	壺	〃	41.3	15.5				暗褐色	良	追2	残存率80%
558	壺（大型）	〃		18.4			(54.4)	(内) 暗茶褐色 (外) 茶褐色	良	486	残存高48.5cm
559	壺	〃						黄灰色	良	473	底部の100%
560	甕（脚付）	〃	12.4	12.2				黄褐色	良	483	
561	鉢	〃		17.9				灰～灰白色	良	477	口縁部の34%、他の20%
562	鉢（脚付）	〃		13.2				黄褐色	良	485	残存高9.8cm
563	高坏	〃						黄灰白褐色	良	474	くびれ部の100%
564	高坏	〃						茶褐色	良	475	筒部の100%
565	高坏	〃						灰褐色	良	476	脚部の100%
566	甕	〃		(17.2)			(17.8)	暗褐色	やや良	455	口縁部の39%
567	甕	〃		(14.5)				褐色	良	469	口縁部の20%

第17表　土器観察表(14)

No.	器種	出土地点	器高	口径	底径	脚台高	胴最大径	色調	焼成	登録No.	備考（定形等）
568	甕	〃		(21.6)			22.5	黄灰白色	やや良	451	口縁部の47%
569	甕	〃		21.3			22.5	(内) 暗褐色	良	452	残存高27.7cm
								(外) 赤褐色			
570	甕	〃		21.5			22.1	(内外) 茶褐色	やや良	450	残存率80%
571	甕	〃		22.8			21.9	黄灰白色～灰色	良	453	口縁部の31%
572	甕	〃		(21.0)				灰白色	良	468	口縁部の16%
573	甕	〃		(18.6)			(20.0)	(内)褐色 (外)暗褐色	良	454	残存率40%
574	甕	〃				(4.4)		(内) 暗褐色	良	458	残存高17.0cm
								(外) 黄灰褐色			
575	甕	〃						(内) 灰色	良	459	脚部の78%
								(外) 黄灰白色			
576	甕	〃						(内) 灰白色	良	457	くびれ部の100%
								(外) 黄褐色			
577	甕	〃						(内) 黒褐色	良	460	残存高10.7cm
								(外) 黄褐色			
578	甕（脚台付）	〃						黄褐色	やや良	484	
579	甕	〃				3.5～		(内) 黒褐色	良	462	残存高8.6cm
						4.0		(外) 茶褐色			
580	甕	〃						黄褐色	良	466	脚径の25%
581	甕	〃		(49.2)			(54.2)	茶褐色	良	456	残存率10%
582	甕（脚部）	〃	17.5					灰色	良	467	残存率60%
583	甕	〃						黄灰褐色	良	464	脚径の45%
584	甕	〃				5.3		(内外) 赤褐色	良	461	残存高7.4cm
585	甕	〃						黄灰白色	良	465	くびれ部の100%
586	甕（小型）	〃				8.2		(内外) 灰褐色	良	463	残存高3.7cm
587	手捏土器	〃	6.9	7.1				明褐色	良	479	胴部下半分の100%
588	ミニチュア土器	〃						黄灰白色	良	480	くびれ部の100%
589	手捏土器	〃						淡黄褐色	良	481	くびれ部の100%
590	重弧文壺（長頸）	道構外	29.5					(内)黒色 (外)茶褐色	良	仮5	残存率25%、くびれ部の30%
591	重弧文壺（長頸）	〃						黄褐色	良	仮4	残存率75%
592	重弧文土器	〃						(内) 黒色	良	仮119	
								(外) 暗黄褐色			
593	重弧文土器	〃						淡黄褐色	良	仮120	
594	重弧文土器	〃						(内)黒色 (外)黄白色	やや良	仮121	
595	重弧文土器	〃						(内)黒色 (外)明褐色	やや良	仮122	
596	重弧文土器	〃						淡黄褐色	良	仮124	
597	重弧文土器	〃						黄褐色	良	仮126	
598	重弧文土器	〃						暗褐色	良	仮139	
599	重弧文土器	〃						(内)黒色 (外)明褐色	良	仮132	
600	重弧文土器	〃						濃灰色	良	仮128	
601	重弧文土器	〃						(内) 淡黄色	良	仮129	
								(外) 明褐色			
602	重弧文土器	〃						(内) 黄灰色	良	仮134	
								(外) 暗黄褐色			
603	重弧文土器	〃						(外)黒色 (内)淡黄色	良	仮135	
604	重弧文土器	〃						黒色	やや良	仮123	
605	重弧文土器	〃						(内) 暗灰褐色	良	仮131	
								(外) 淡黄褐色			
606	重弧文土器	〃						(内)黒色 (外)淡黄色	良	仮133	
607	重弧文土器	〃						茶褐色	良	仮136	

第18表　土器観察表(15)

No.	器　種	出土地点	器高	口径	底径	脚台高	胴最大径	色　調	焼成	登録No.	備考（定形等）
608	重弧文土器	〃						黄褐色	良	仮127	
609	重弧文土器	〃						暗黄褐色	良	仮143	
610	重弧文土器	〃						暗黄色	良	仮140	
611	重弧文土器	〃						暗褐色	良	仮141	
612	重弧文土器	〃						黄褐色	良	仮142	
613	重弧文土器	〃						(内)灰色 (外)黒色	良	仮137	
614	重弧文土器	〃						暗黄色	良	仮140	
615	重弧文土器	〃						黄褐色	良	仮138	
616	重弧文土器	〃						黄白色	良	仮144	
617	重弧文土器	〃						黄褐色	良	仮148	
618	重弧文土器	〃						暗黄褐色	良	仮146	
619	重弧文土器	〃						黄褐色	良	仮149	
620	重弧文土器	〃						暗褐色	良	仮147	
621	重弧文土器	〃						(内) 黒色 (外) 黄灰白色	良	仮125	
622	重弧文土器	〃						(内) 灰白色 (外) 黄白色	良	仮150	
623	重弧文土器	〃						黄白色	良	仮145	
624	壺	〃						褐色	良	491	口縁部が欠損するのみ
625	鉢	〃		(19.0)				黄褐色	良	507	口縁部の36%
626	鉢	〃	9.2	(12.7)				黄褐色	やや良	509	残存率60%
627	高坏	〃						黄褐色	やや良	487	くびれ部の100%
628	高坏	〃						赤褐色	良	489	くびれ部の100%
629	高坏（筒部）	〃						淡黄色	良	490	
630	高坏	〃						黄褐色	良	488	くびれ部の100%
631	甕	〃		(19.5)				灰褐色	良	508	口縁部の20%
632	甕（ミニチュア）	〃						黄褐色	良	492	くびれ部の42%
633	甕（ミニチュア）	〃						黄褐色	良	493	残存率17%
634	手捏土器	〃	5.7	6.0				灰白褐色	良	495	残存率75%
635	手捏土器	〃		(5.6)	3.5			暗黄褐色	良	498	口縁部の50%、底径の100%
636	手捏土器	〃		5.6	2.6			淡黄褐色	良	497	残存率30%
637	手捏土器	〃	3.3	(3.7)				明褐色	やや良	501	口縁部の30%、くびれ部・脚部の100%
638	手捏土器	〃						灰白褐色	良	496	残存率24%
639	手捏土器	〃						黄灰色	良	499	脚部の38%、くびれ部の100%
640	甕（手捏）	〃						(内)灰色 (外)明褐色	良	494	くびれ部の100%
641	手捏土器	〃						(内)黒色 (外)黄褐色	良	502	くびれ部の100%
642	手捏土器	〃						灰白色	良	500	くびれ部の100%
643	土錘	〃						茶褐色	やや良	503	

第５節　弥生時代から古墳時代にかけての石器

この節では、本調査で弥生時代から古墳時代にかけての遺構内出土および一括採取、表採資料の石器をまとめて記載する。その内訳は石包丁46点、砥石18点、磨石９点、敲石17点、台石３点である。法量等は観察表に記載した。

１　石包丁（第182～184図・37～85）

石包丁は遺構内、遺構確認時の一括をあわせて46点出土した。その中には石包丁の制作課程を示す未製品も出土している。このことから、この集落で石包丁を制作していたことがうかがえる。

石包丁はその形状から、背部が直線で肩は尖り、刃部が半円形を呈するもの（ａ類)、背部が直線で、その両端が丸く下がり肩はやや尖り、刃部は半円形を呈するもの（ｂ類)、背部が直線でその両端が丸くゆるやかに刃部にいたるもの（ｃ類)、背部が直線で肩は尖り、全体形が台形を呈するもの（ｄ類)、背部は丸みをおびており、肩は尖り刃部も中央部がやや尖るもの（ｅ類)、背部が波状になっているもの（ｆ類）の６形態に分類できる。形態分類とは異なるが、紐孔を持たないもの（ｇ類)、制作課程途中の未製品（ｈ類）とし、以下分類ごとに説明を加える。

ａ類（37～50）

37は36号住居跡の埋土から出土し、肩部を一部欠損する。刃部は両刃で半円形を呈する。紐孔は身幅の中央に両側より穿孔されており、孔間は心心で2.6㎝を測る。紐孔の上縁に紐擦れが認められる。石材は粘板岩で、にぶい暗灰色を呈する。38は６号住居跡から出土し、両肩の一部を欠損する。刃部は両刃で細長の半円形を呈する。紐孔は身幅の中央に両側より穿孔されており、孔間は心心で2.8㎝を測る。紐孔の上縁に紐擦れが認められる。石材は粘板岩で、明灰色を呈する。39は１区で一括で取り上げた資料である。身の約３分の１を欠損している。刃部は両刃で半円形を呈する。紐孔は身幅の中央に穿孔されており、孔間は心心で3.5㎝を測る。紐孔の上縁には紐擦れが認められる。石材は粘板岩で暗灰色を呈する。40は22区一括で取り上げた資料で、約３分の１を欠損する。刃部は両刃で半円形を呈する。紐孔は身幅の中央に穿孔されており、孔間は心心で2.3㎝を測る。紐孔の上縁には紐擦れが認められる。石材は粘板岩で、緑灰色を呈する。41は37号住居跡の埋土から出土し、紐孔部より折れ約３分の２を欠損する。刃部は両刃で半円形を呈する。石材は粘板岩で、黒灰色を呈する。42は21区で一括で取り上げた資料で、約２分の１を欠損する。刃部は両刃で半円形を呈する。紐孔の上縁には紐擦れが認められる。石材は粘板岩で、暗灰色を呈する。43は68号住居跡の埋土から出土した小型の

完形品である。刃部は両刃で細長の円形を呈する。紐孔は身幅の中央に両側より穿孔されており、孔間は心心で1.9cmを測る。紐孔の上縁に紐擦れが認められる。右側の紐孔の下部に1個、裏面の刃部寄りに2個途中まで穿孔した跡が見受けられる。石材は粘板岩で、明灰色を呈する。44は49号住居跡の埋土中から出土し、紐孔部分より端部にかけて残存する。刃部は両刃である。石材は粘板岩で、明灰色を呈する。45は22区で一括で取り上げた資料で、身の中央の刃部寄りの部分のみ残存する。刃部は両刃で、半円形を呈する。石材は粘板岩で、暗灰色を呈する。46は24区で一括で取り上げた資料で、紐孔部分より折れ、さらに肩部を欠損する。刃部は両刃で紐孔は両側より穿孔される。石材は粘板岩で、暗灰色を呈する。47は1号住居跡の埋土中より出土し、刃部のみ残存する。刃部は両刃で、半円形を呈する。石材は粘板岩で、黄褐色を呈する。48は22区で一括で取り上げた資料で、紐孔部分より折れさらに肩部が欠損している。刃部は両刃で、紐孔は両側から穿孔している。石材は粘板岩で、暗灰色を呈する。49は19号住居跡の埋土中から出土した。2個の途中まで穿孔した痕跡がうかがえる。研磨の後穿孔する途中で破損したものであろう。石材は千枚岩で、暗灰色を呈する。50は表採資料で、紐孔部分より欠損しており、一部に穿孔部分がうかがえる。刃部は両刃である。石材は粘板岩で、黄灰色を呈する。

b類（51～65）

51は23号住居跡の埋土から出土し、紐孔部分から3分の1を欠損している。紐孔は身の中央上位に両側から穿孔し、孔間は心心で2.9cmを測る。刃部は両刃で、紐孔の上縁に紐擦れが認められる。石材は粘板岩で、明灰色を呈する。52は7号住居跡の埋土中から出土し、紐孔部分より欠損している。紐孔は両側から穿孔しており、孔間は心心で2.1cmを測る。刃部は両刃である。石材は粘板岩で、黄褐色を呈する。53は56号住居跡の埋土中から出土し、紐孔部分より折れ約2分の1を欠損する。刃部は両刃で、紐孔は身の上位両側から穿孔し、紐孔の上縁には紐擦れが認められる。石材は粘板岩で、黒灰色を呈する。54は19区で一括で取り上げた資料で紐孔部分より欠損し、さらに肩部を欠損している。紐孔は両側より穿孔され、刃部は両刃である。石材は粘板岩で、明灰色を呈する。55は57号住居跡の埋土中から出土し、紐孔部分より折れている。身はほとんどが剥離しており、紐孔は両側より穿孔され、刃部は両刃である。石材は泥岩で、黄褐色を呈する。56は49号住居跡の埋土中から出土し、紐孔部分のみを残しあとは欠損している。紐孔は両側から穿孔され、孔間は心心で1.6cmを測る。石材は粘板岩で明灰色を呈する。57は20区で一括で取り上げた資料で、紐孔部分のみが残存する。紐孔は両側から穿孔している。石材は粘板岩で、明灰色を呈する。58は37号住居跡の埋土中から出土し、紐孔部分より約3分の2を欠損している。紐孔は両側から穿孔され、刃部は両刃である。石材は粘板岩で、暗灰色を呈する。59は40号住居跡の埋土中から出土し、肩部の下位の刃部のみが残存し紐孔の一部分がわずかに残る。紐孔は両側から穿孔しており、刃部は両刃である。石材は粘板

岩で、明灰色を呈する。60は49号住居跡の埋土中から出土し、肩部のみで、ほとんどが欠損している。刃部は両刃である。石材は粘板岩で、茶灰色を呈する。61は37号住居跡の埋土中から出土し、肩部のみで、ほとんどが欠損する。刃部は両刃である。石材は粘板岩で、明灰色を呈する。62は47号住居跡から出土し、刃部のみが残存する。刃部は両刃で、石材は粘板岩で、黄褐色を呈する。63は21区で一括で取り上げた資料で、肩部から刃部にかけての部分のみが残存し、そのほとんどが欠損している。一部に穿孔しかけた跡が確認できる。刃部は両刃である。石材は粘板岩で、明灰色を呈する。64は68号住居跡で出土したもので、肩部が一部欠損しており、1個途中まで穿孔した跡が確認できる。石材は粘板岩で、明灰色を呈する。65は68号住居跡の埋土中から一括で取り上げたもので、約3分の2を欠損している。紐孔の一部がわずかに確認でき、刃部は両刃である。石材は泥岩で、乳白色を呈する。

c類（66・67）

66は17号住居跡から出土し、完形品である。刃部は両刃で、台形に近い形態を呈する。紐孔は身幅の中央に両側から穿孔しており、孔間は心心で2.5cmを測る。紐孔の上縁には紐擦れの跡が認められる。石材は粘板岩で、緑灰色を呈する。67は22区で一括で取り上げた資料で、紐孔部分より折れ、そのほとんどを欠損する。紐孔は両側から穿孔しており、刃部は両刃である。石材は粘板岩で、光沢のある明灰色を呈する。

d類（68）

68は68号住居跡から出土しており、完形品である。刃部は両刃で中央部でやや尖る。紐孔は身幅の中央に両側から穿孔しており、孔間は心心で2.0cmを測る。紐孔の上部にわずかに紐擦れが確認できる。石材は粘板岩で、明灰色を呈する。

e類（69・70）

69は6号住居跡の埋土中から出土し、約2分の1を欠損する。刃部は両刃で、台形を呈する。紐孔は両側から穿孔され、その上縁に紐擦れの跡が認められる。石材は粘板岩で、明灰色を呈する。70は18・19号住居跡の切り合い関係を確認中に出土した。肩の部分のみでほとんどを欠損し、紐孔がわずかに認められる。刃部は両刃である。石材は粘板岩で、暗灰色を呈する。

f類（71～76）

71は57号住居跡から一括で取り上げられ、肩部と刃部に一部を残し欠損し、紐孔が一部残る。紐孔は両側から穿孔されており、その上縁に紐擦れの跡が認められる。刃部は両刃である。石材は千枚岩で、暗灰色を呈する。72は22区で一括で取り上げた資料で、両肩の部分を欠損する。紐孔は両側から穿孔されており、孔間は心心で2.2cmを測る。その上縁に紐擦れの跡が認められる。刃部は両刃である。石材は粘板岩で、黒灰色を呈する。73は18号住居跡から出土したもので、紐孔の部分から折れ、約3分の1を欠損する。紐孔は身幅の中央上位に両側から穿孔されており、孔間は心心で、2.8cmを測る。その上縁には紐擦れの跡が認められる。刃部は両刃

である。石材は粘板岩で、明灰色を呈する。74は37号住居跡から一括で取り上げた資料で、紐孔部分が残存する。紐孔は両側から穿孔している。刃部は両刃である。石材は粘板岩で、暗灰色を呈する。75は28区で一括で取り上げた資料で、約3分の2を欠損している。紐孔は両側から穿孔され、孔間は心心で1.8cmを測る。その上縁には紐擦れの跡が認められる。刃部は両刃である。石材は粘板岩で、明灰色を呈する。76は55号住居跡から出土し、紐孔部分をわずかに残し、そのほとんどを欠損する。紐孔は両側から穿孔している。石材は粘板岩で、緑灰色を呈する。

g類（77）

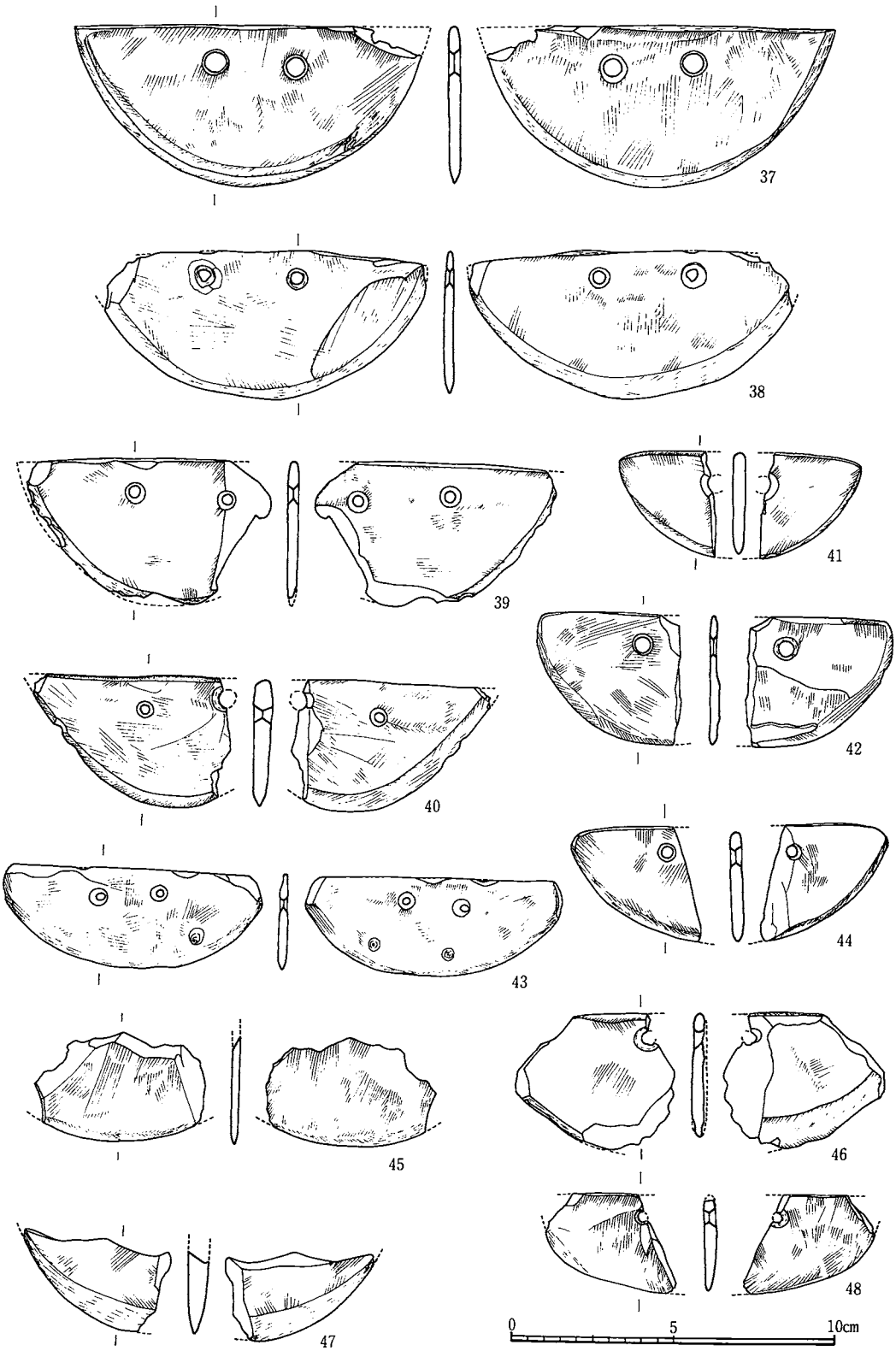
77は56号住居跡から出土し、肩部から刃部にかけて一部欠損する。紐孔はもたず、刃部は両刃で、所々に刃こぼれが認められる。石材は粘板岩で、明灰色を呈する。49・64も途中までの穿孔はあるものの、g類に含めてよいかもしれない。

h類（78～82）

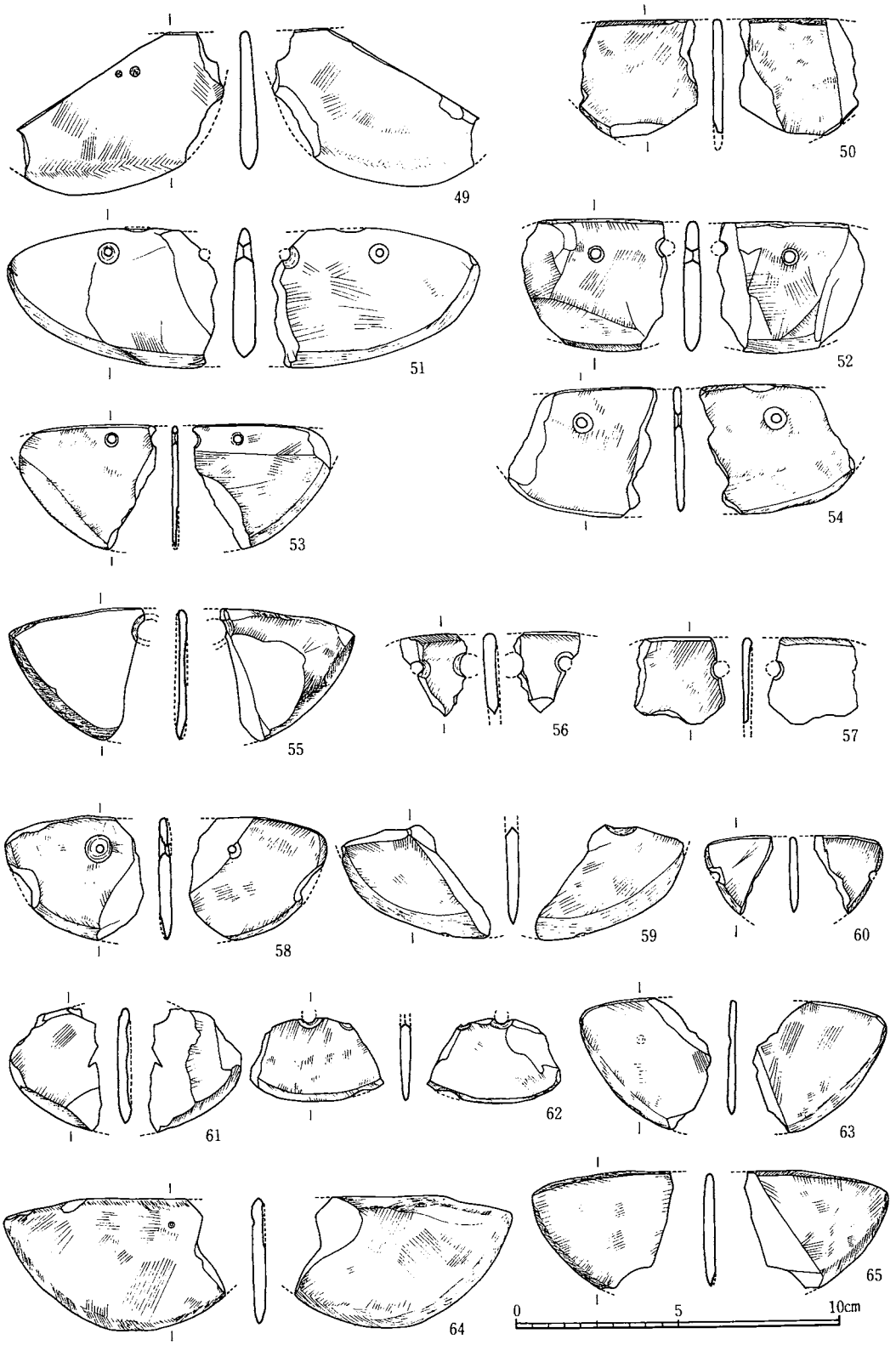
78は3号住居跡から出土し、石材を加工し薄く剥ぎ取り、おおかた整形を終えた段階で折れている。研磨および穿孔は施されていない。石材は粘板岩で、明灰色を呈する。79は23号住居跡から出土した。おおかたの整形を終えた段階で、研磨および穿孔は施されていない。石材は粘板岩で、明灰色を呈する。80は表採資料である。整形の途中のものである。石材は粘板岩で明灰色を呈する。81は4号住居跡から出土したもので、薄く剥ぎ取った後、整形を加えている途中で折れたものである。研磨および穿孔は施されていない。石材は粘板岩で、明灰色を呈する。82は24号住居跡から出土した。おおかたの加工を終え、形は整っている。研磨および穿孔は施していない。石材は粘板岩で、明灰色を呈する。

2　砥石（第186～188図83～100）

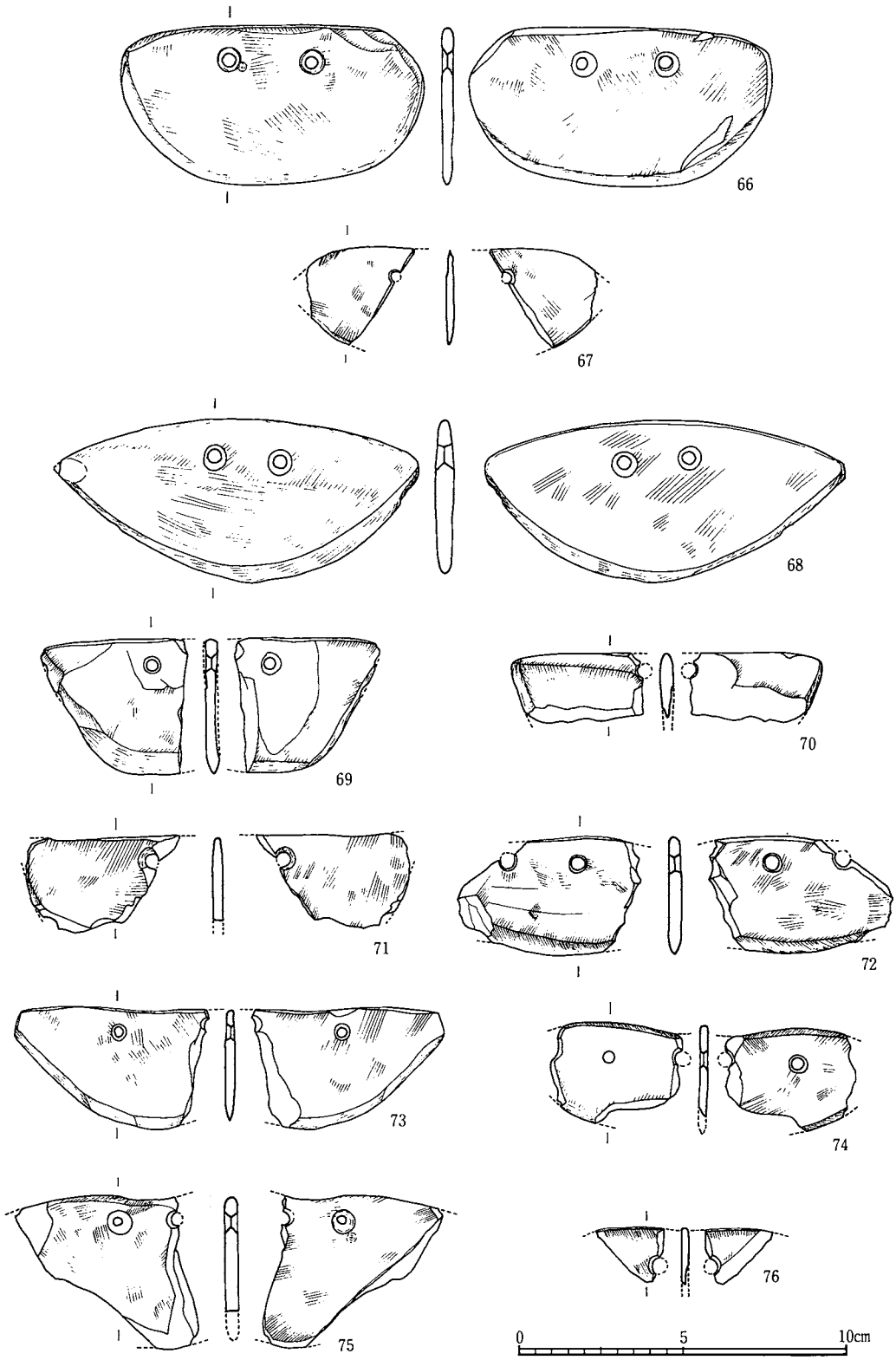
83は40号住居跡から出土した砂岩製の砥石で、残存部で全長30.4cmを測る。研磨面は5面で磨痕が残り、中央部がやや窪む。84は調査区の一括として採集されたものである。これは安山岩製の磨製石斧が破損した後に、砥石に転用されたもので、全長15.6cmを測る。刃部に近い部分は特に研磨されており、中央部が窪んでいる。85は59号住居跡から出土し、研磨面は3面である。これも安山岩製の石斧からの転用と思われ、研磨面はなめらかで、中央部がわずかに窪む。86は44号住居跡から出土した砂岩製の砥石で、全長33.8cmを測る。研磨面は4面である。87は55号住居跡から出土した安山岩製の砥石で、残存部で全長15.0cmを測る。これも、磨製石斧が破損した後に、砥石に転用されたものである。研磨面は表裏1面ずつで、研磨面の中央は窪んでいる。88は63号住居跡から出土した砂岩製の砥石で、破損しており、残存部で全長19.6cmを測る。研磨面は10面で、どれもよく使用され、大きく窪む。89は6号住居跡から出土した



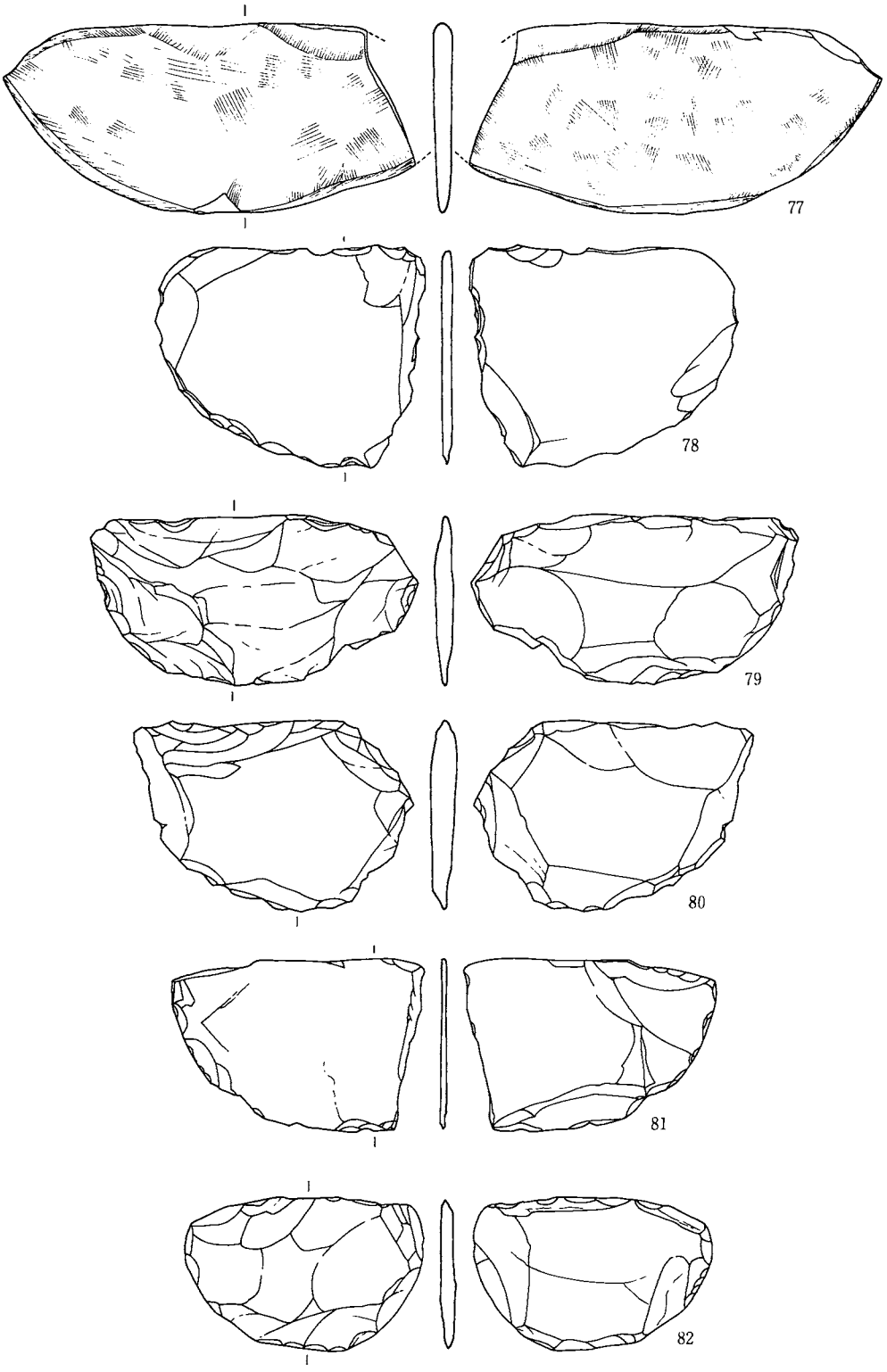
第182図　石包丁実測図（1）



第183図　石包丁実測図（2）



第184図　石包丁実測図（3）



第185図　石包丁実測図（4）

安山岩製の砥石で、全長13.3cmを測る。研磨面は3面で、わずかに磨痕がうかがえる。90は60号住居跡から一括資料として取り上げた、粘板岩製の砥石で、一部欠損しているが、残存部で全長7.0cmを測る。研磨面は両側面を含めて4面で、平面の一方はわずかに窪む。91は調査区で採集された一括資料で、粘板岩製の砥石である。端部が欠損しているが残存部で全長8.4cmを測る。研磨面は3面でうち1面はわずかに窪む。92は6号住居跡から出土した砂岩製の砥石で、その形態は直方体を呈し、全長6.5cmを測る。研磨面は全面の6面である。93は22号住居跡から出土した砂岩製の砥石で、途中より欠損している。残存部の長さで11.1cmを測る。研磨面は両側にもち、両面とも中央がわずかに窪む。94は1号住居跡から出土した粘板岩製の砥石で、途中より欠損しており、残存部での長さは8.4cmを測る。研磨面は1面のみで、中央部がわずかに窪む。95は49号住居跡から出土した大型の砂岩製の砥石で、全長41.2cmを測る。研磨面は5面で磨痕がよく残る。96は49号住居跡から出土した粘板岩製の砥石で、そのほとんどを欠損している。残存部での長さは7.6cmを測る。研磨面は1面のみで、ほぼ平坦である。97は56号住居跡から出土した砂岩製の砥石で、縁部を一部欠損している。研磨面は両面の2面であるが、研ぎ分けが認められる。98は13号住居跡から出土した砂岩製の砥石であるが、その多くを欠損している。研磨面は残存部で6面を観察できる。うち、中央部の研磨面はその中央部が大きく窪んでいる。99は土器溜から一括で取り上げた砂岩製の砥石で、そのほとんどを欠損している。研磨面は1面が残っており、その中央はわずかに窪む。100も土器溜から一括で取り上げた砂岩製の砥石で、一部が欠損している。研磨面は1面で、その中央は窪んでいる。

3　磨石（第189～190図101～109）

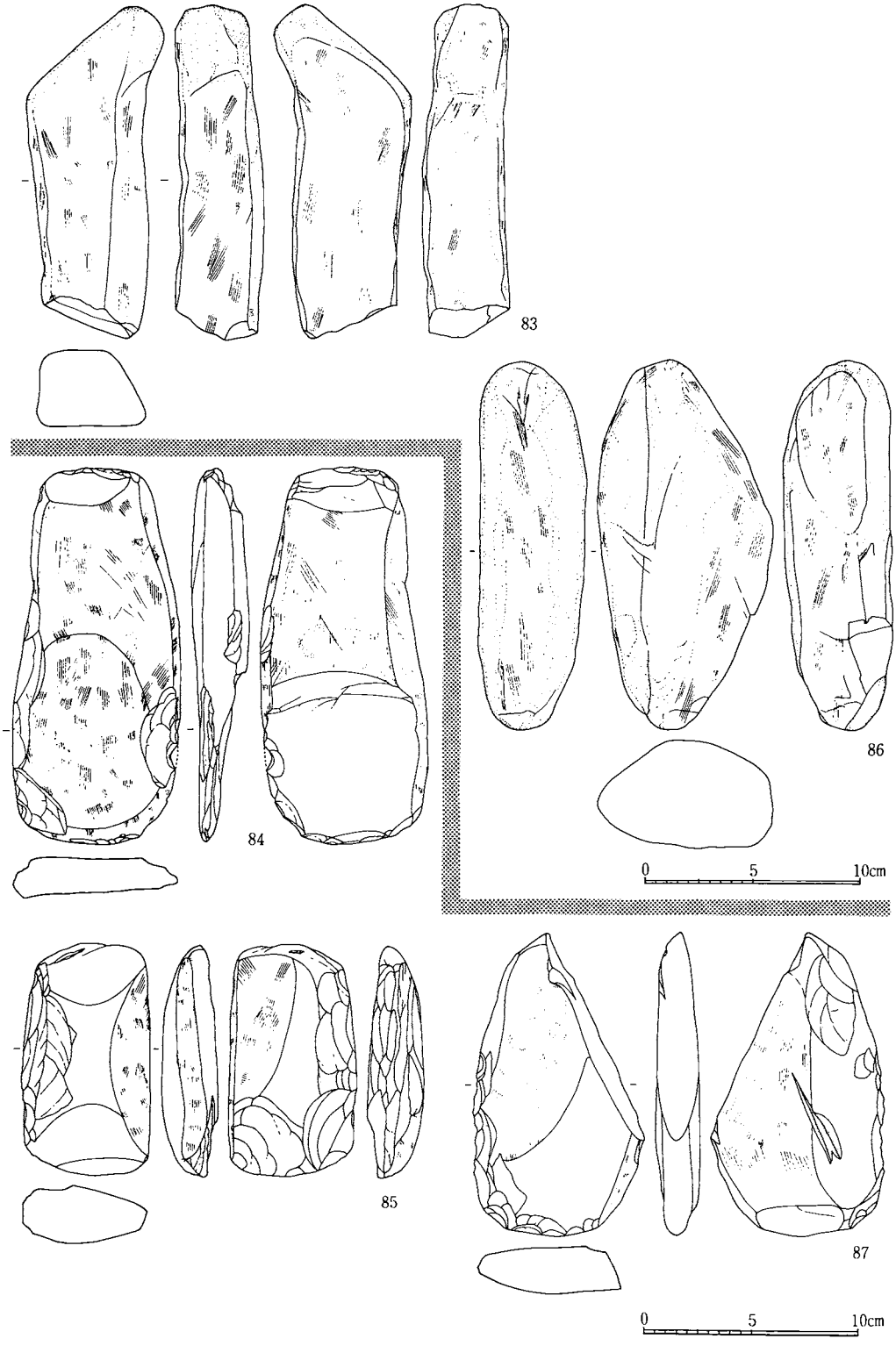
磨石は全部で9個出土したが、そのほとんどが住居跡からの出土であった。これらは大型で断面形が偏平なもの（a類）、握り拳大でその側面に敲打痕を持つもの（b類）、握り拳大でほぼ球形を呈し側面に敲打痕を持たないもの（c類）の3つに分類できる。

a類（101～103）

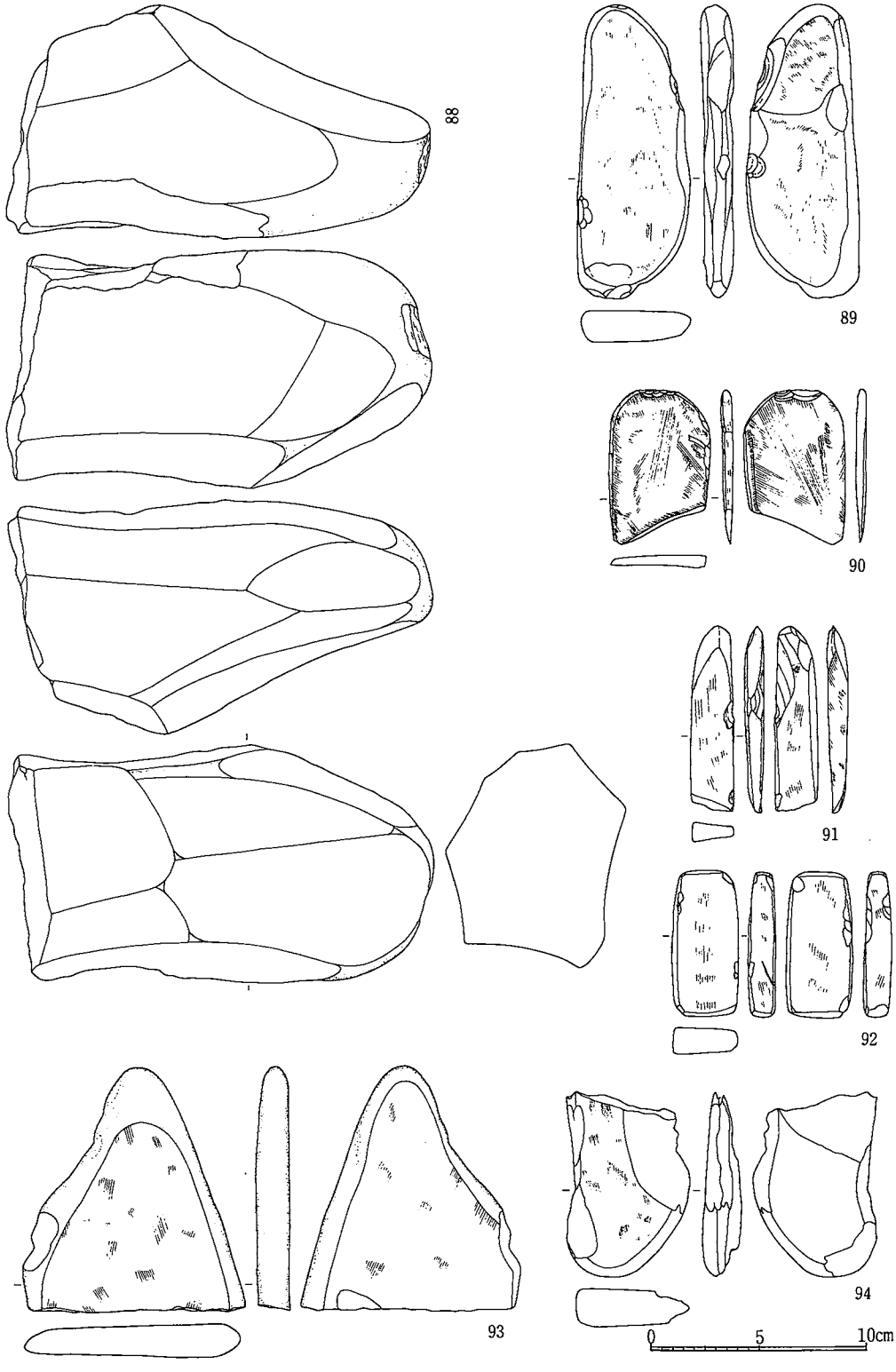
101は40号住居跡から出土した花崗岩製の磨石で、一部を欠損している。その平面形態および断面形態は楕円形を呈し、長軸で11.5cmを測る。磨痕は両面に認められる。102は8号住居跡から出土した砂岩製の磨石で、その平面形態は円形に近く、断面形は三角形に近い楕円形である。ほぼ全面にわたって磨痕がうかがえ、なめらかである。104は18号住居跡から出土した砂岩製の磨石で、その平面形態および断面形態は楕円形を呈し、長軸で9.7cmを測る。磨痕は両面に認められ、側面には磨痕は見られない。

b類（105・106）

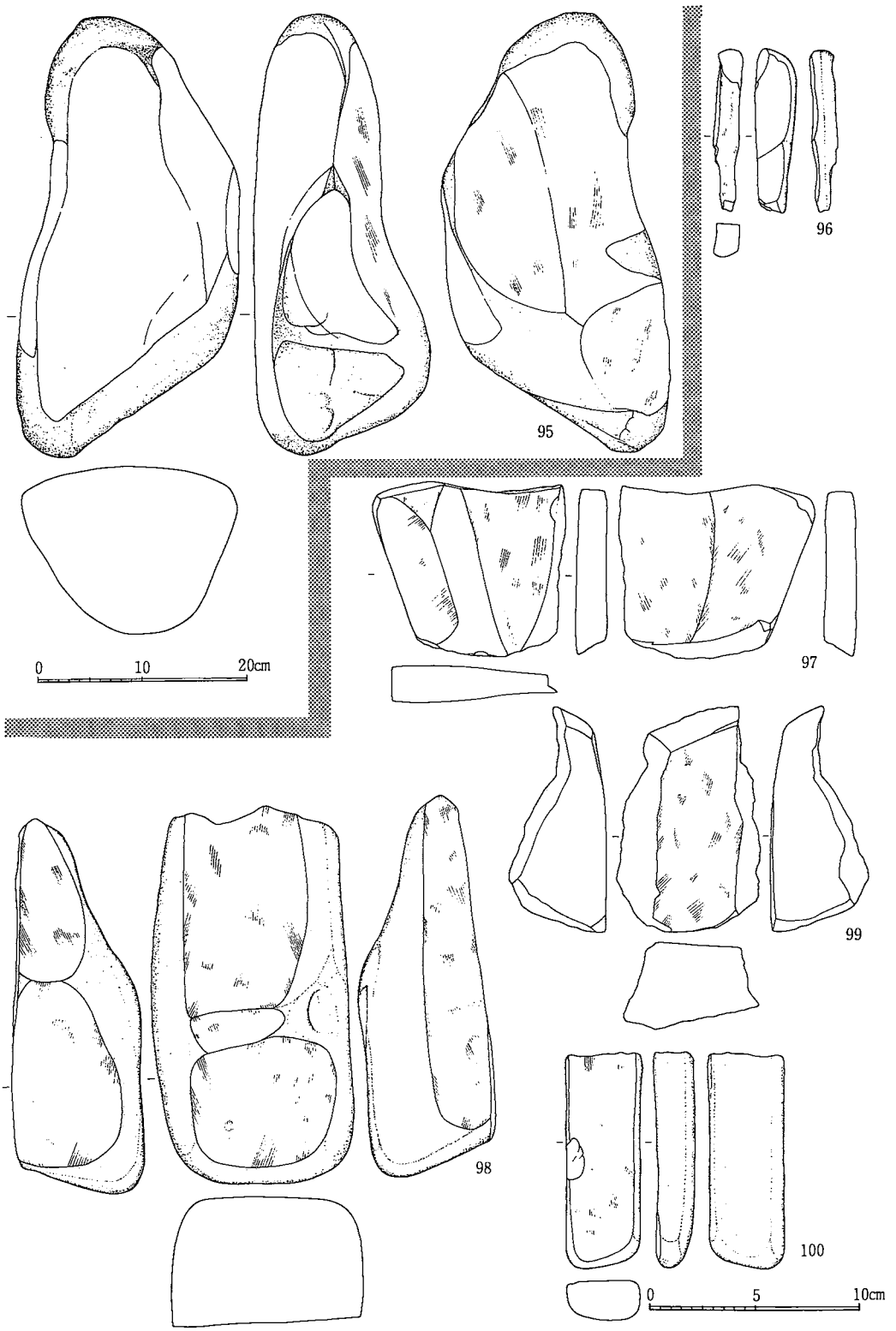
105は18号住居跡から出土した砂岩製の磨石で、一部を欠損している。その平面形態は円形



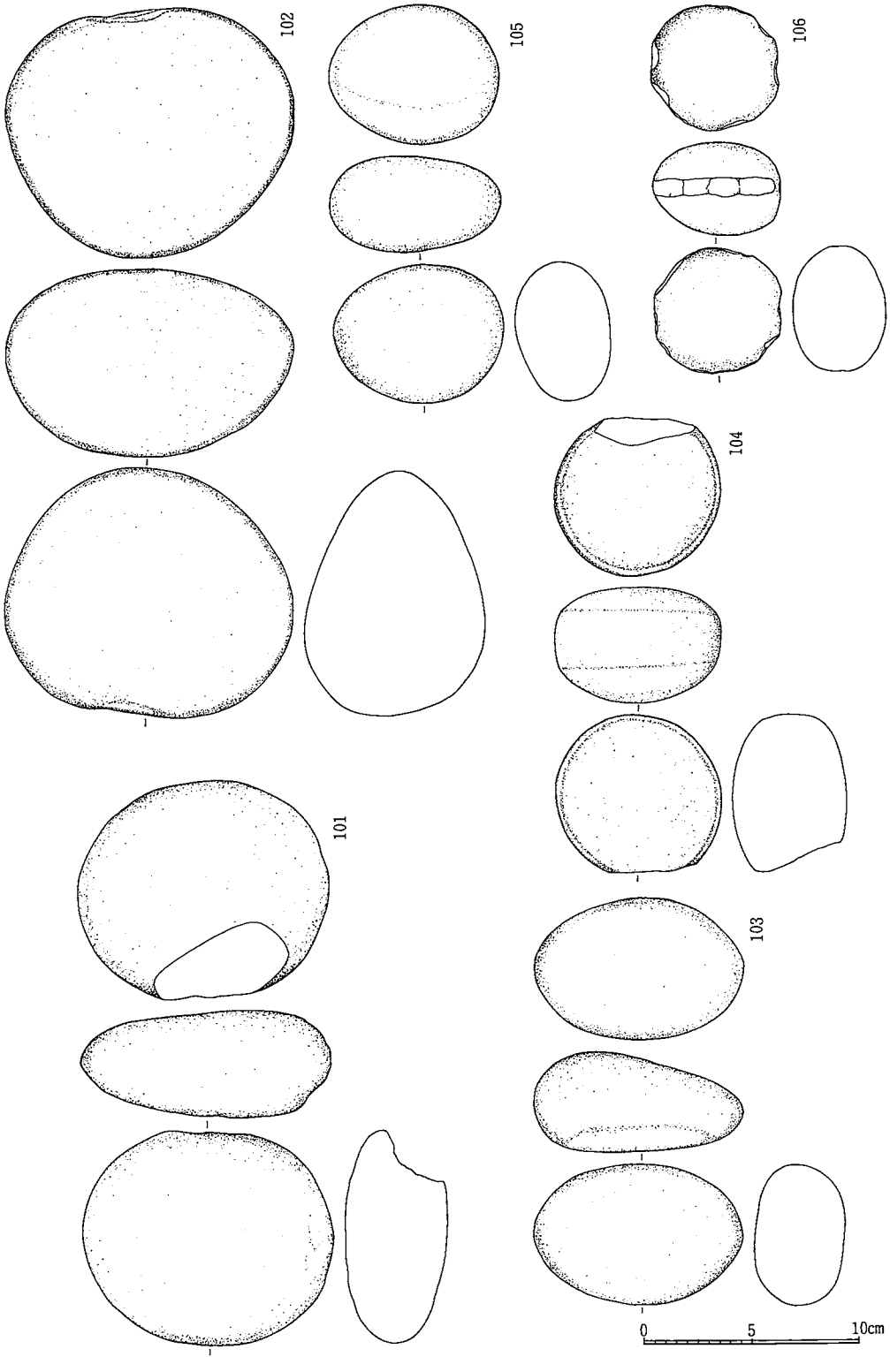
第186図　砥石実測図（１）



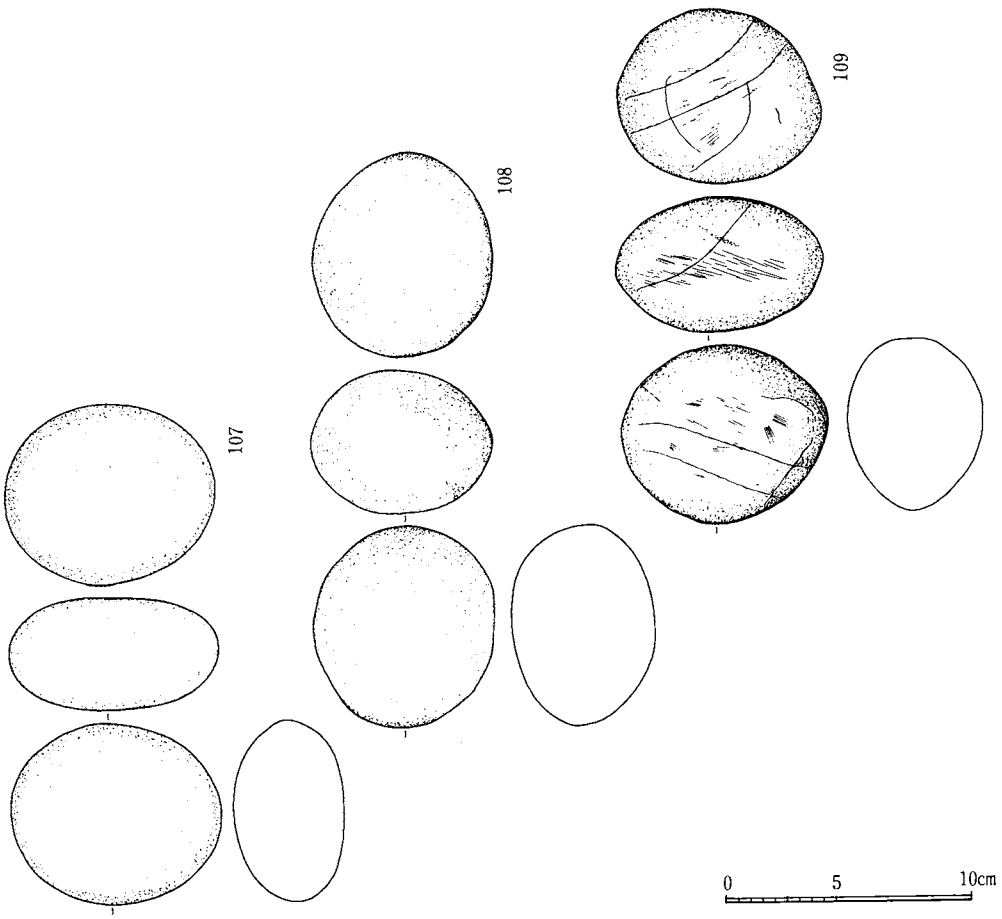
第187図　砥石実測図（2）



第188図　砥石実測図（3）



第189図　磨石実測図（1）



第190図　磨石実測図（2）

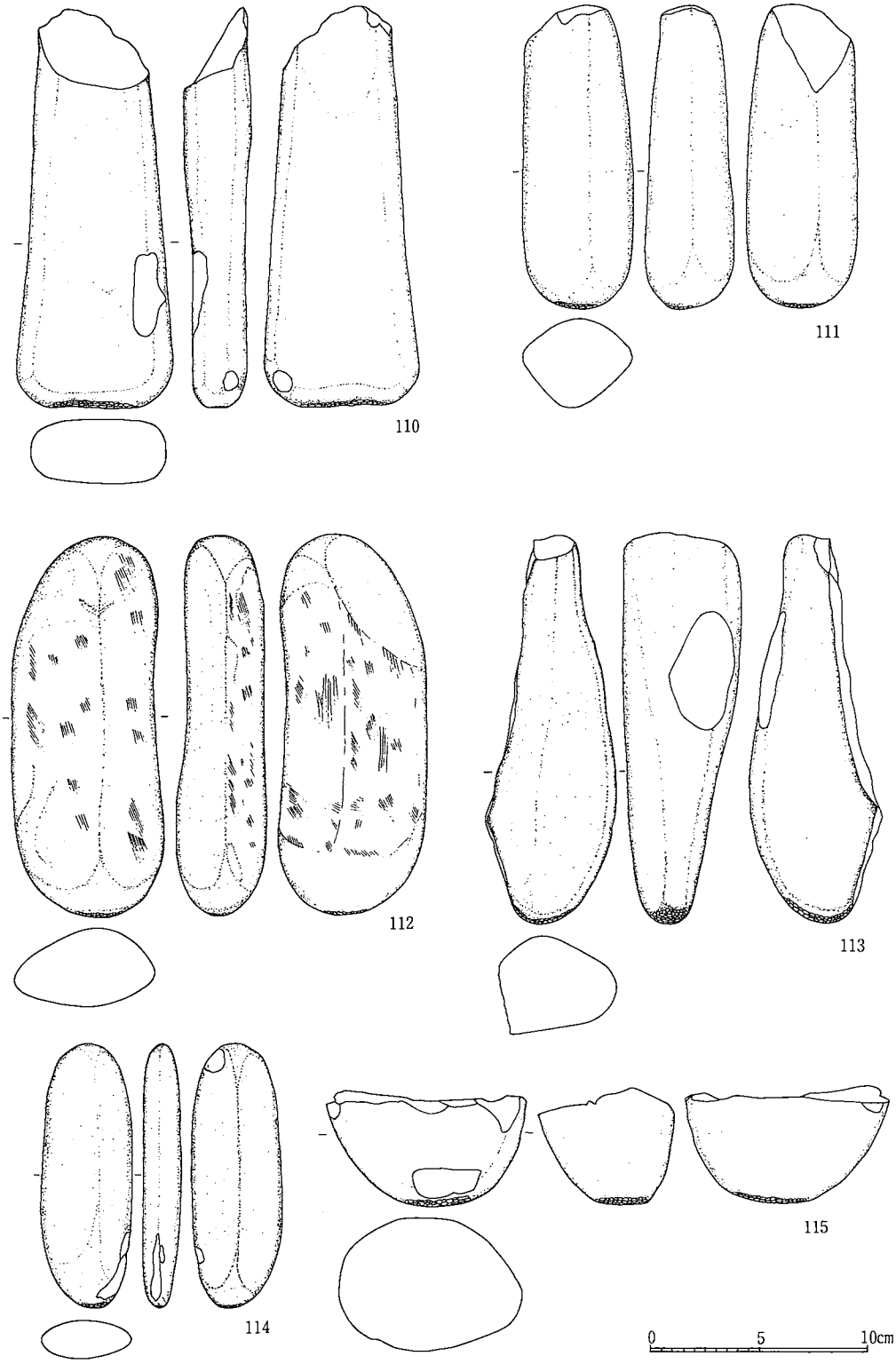
で直径7.7cmを測る。両面は磨痕が見受けられ、さらに側面は敲打による潰れでかなり磨滅し、稜線がはっきりと見受けられる。106は56号住居跡から出土した花崗岩製の磨石で、平面形態は円形を呈し、直径5.8cmを測る。両面はわずかに磨痕がうかがえ、側面は敲打による潰れが著しい。

c類（107～109）

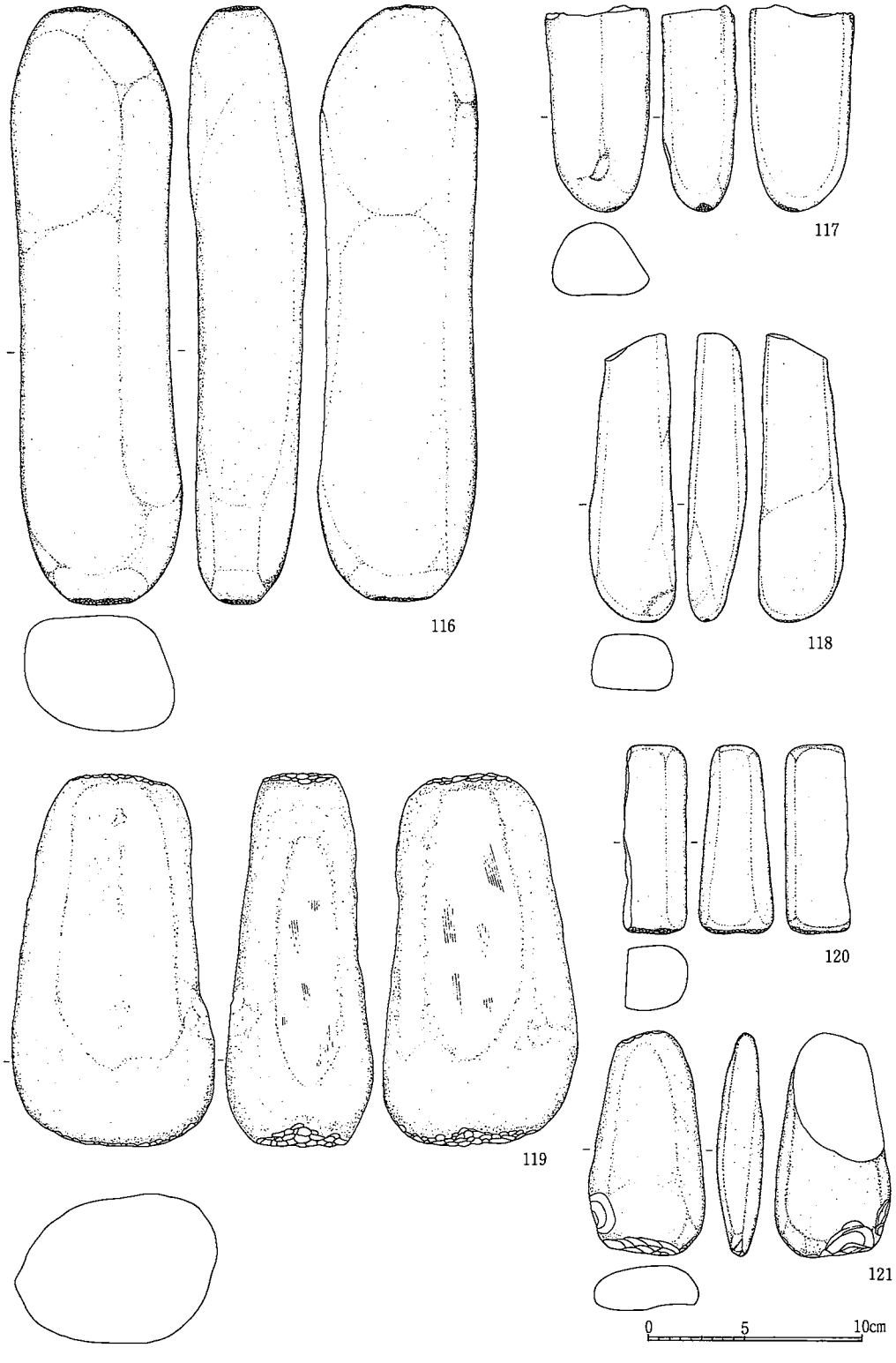
107は44号住居跡から出土した砂岩製の磨石で、平面形態および断面形態は楕円形を呈し、その長軸は8.5cmを測る。両面はわずかな磨痕が認められ、側面には敲打痕等は見受けられない。108は20号住居跡から出土した砂岩製の磨石で、ほぼ球形を呈し直径は8.1cmを測る。全面に熱を受けた痕跡がうかがわれ、赤変している。両面にはわずかな磨痕が認められ、側面には敲打痕等は見受けられない。109は24号住居跡から出土した砂岩製の磨石で、平面形態は楕円形に近い円形を呈し、直径約8.4cmを測る。両面にはわずかな磨痕が認められ、側面には敲打痕等は見受けられない。

4　敲石（第191～193図110～126）

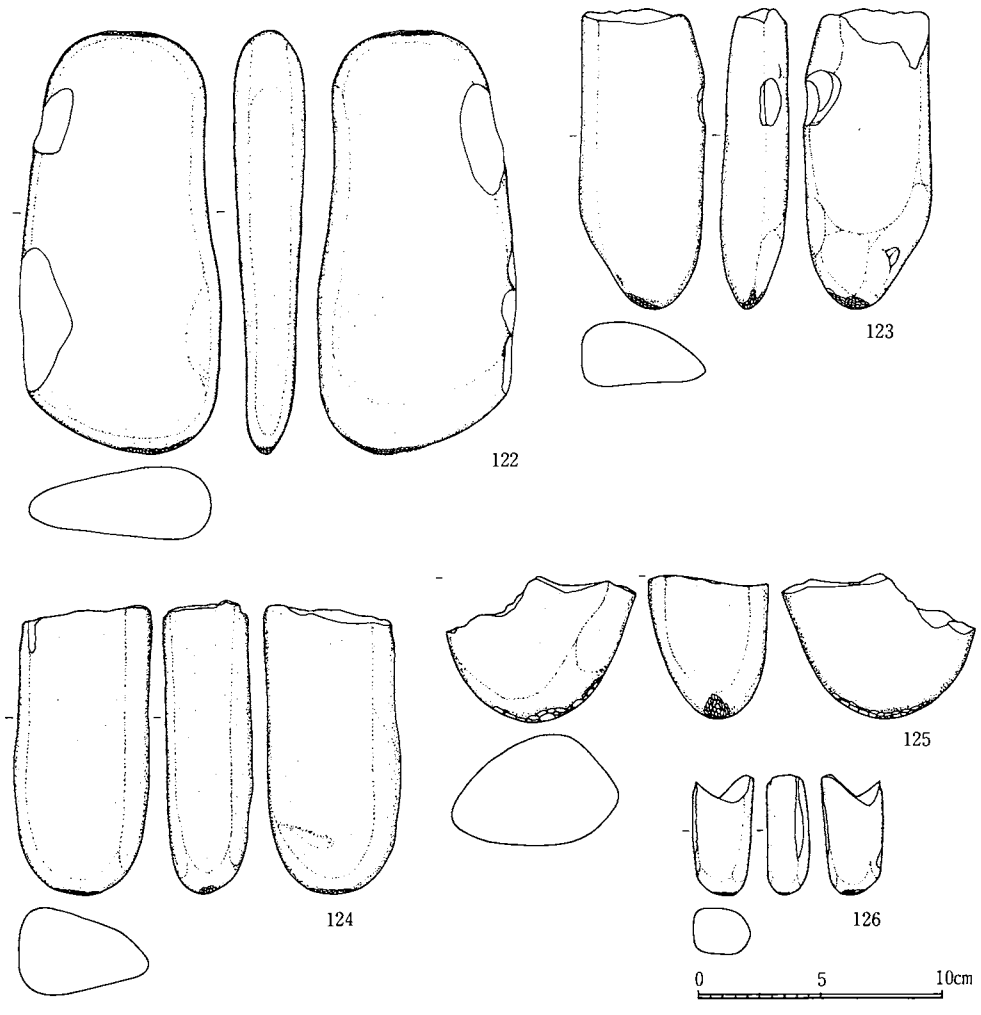
110は56号住居跡から出土した砂岩製の敲石で、一部を欠損する。形態は棒状を呈し、敲打痕は端部に認められる。111は57号住居跡から出土した砂岩製の敲石で、片方の端部を欠損する。形態は棒状を呈し、端部に敲打痕が認められる。112は1号住居跡から出土した安山岩製の敲石で、完形で全長は17.3cmを測る。片方の端部に敲打痕が認められる。側面には一部に研磨面がうかがわれ、砥石としても使用されていたと思われる。113は57号住居跡から出土した砂岩製の敲石で、片方の端部および側面を欠損している。敲打痕は端部に認められる。114は57号住居跡から出土した安山岩製の敲石で、一部を欠損するものの、ほぼ完形で、全長は12.1cmを測る。敲打痕は片方の端部に認められる。115は44号住居跡から出土した砂岩製の敲石で、端部を残しほとんどを欠損している。敲打痕は端部にあり、かなり潰れている。また、破損の後に熱を受け、赤く焼けている。116は67号住居跡から出土した砂岩製の敲石で、形態は棒状を呈し、完形で全長は26.8cmを測る。敲打痕は両方の端部に認められ、かなり潰れている。117は2号住居跡から出土した砂岩製の敲石で形態は棒状を呈し、端部の一方を欠損している。敲打痕は端部にわずかに認められる。118は36号住居跡から出土した砂岩製の敲石で、形態は棒状を呈し、一方の端部を欠損している。敲打痕は端部にわずかに認められる。119は調査区から一括として採集された、砂岩製の敲石で、完形で全長16.9cmを測る。敲打面は両端部で確認でき、かなり潰れている。さらにこれは砥石としても使用されており、研磨面を3面持つ。砥石の部に入れてもよかったが、ここでは敲石として取り扱った。120は2・3号住居跡の切り合い関係の確認中に出土したもので、砂岩製の小型の敲石で、側面を欠損してる。敲打面は一方の端部に認められ潰れにより中央部が窪んでいる。121は19号住居跡から出土した砂岩製の敲石で、一部が欠損しており、偏平である。敲打痕は両端に認められ、敲打により一部破損している。122は57号住居跡から出土した砂岩製の敲石で、側面の一部をわずかに欠損するもののほぼ完形で、全長16.9cmを計る。敲打痕は両端に認められる。123は57号住居跡から出土した砂岩製の敲石で、一方の端部および側面の一部を欠損する。敲打痕は端部の尖った部分に認められる。124は22号住居跡から出土した砂岩製の敲石で、形態は棒状で、一方の端部を欠損している。敲打痕は端部に認められ、わずかに潰れる。125は1号住居跡から出土した砂岩製の敲石で、端部をわずかに残す。敲打痕は端部に認められ、潰れている。126は49号住居跡から出土した砂岩製の小型の敲石で、一方の端部を欠損している。形態は棒状で、敲打痕は端部の先端にわずかに認められる。



第191図　敲石実測図（1）



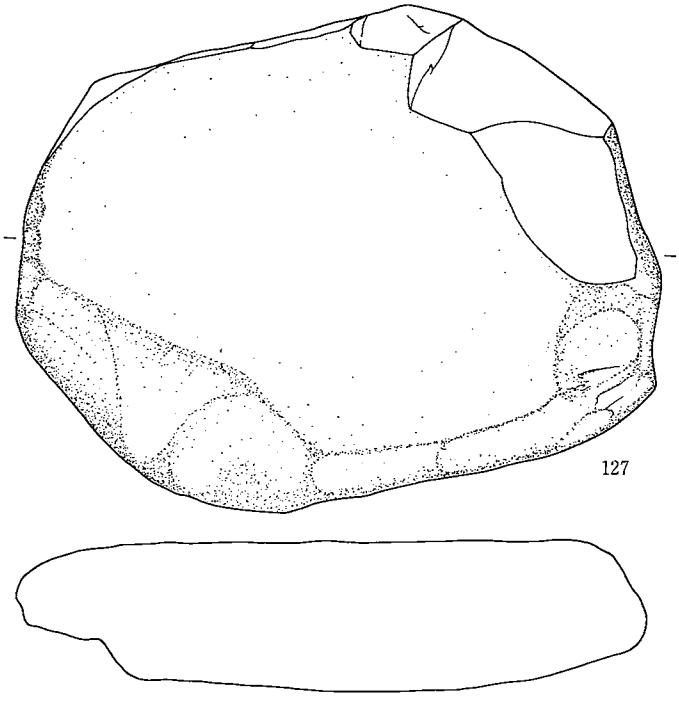
第192図　敲石実測図（2）

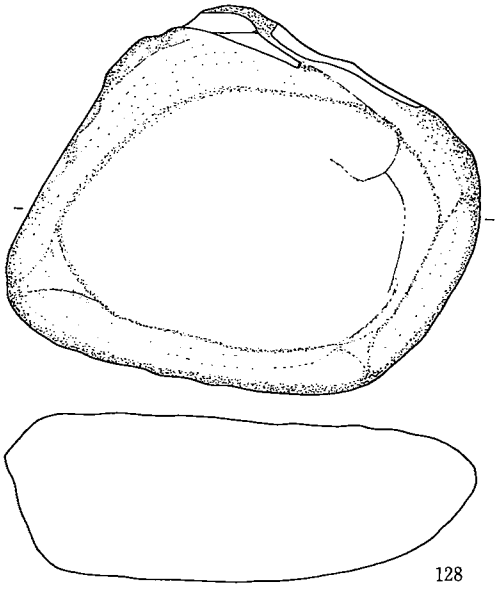


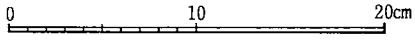
第193図　敲石実測図（3）

5　台石（第194～195図127～129）

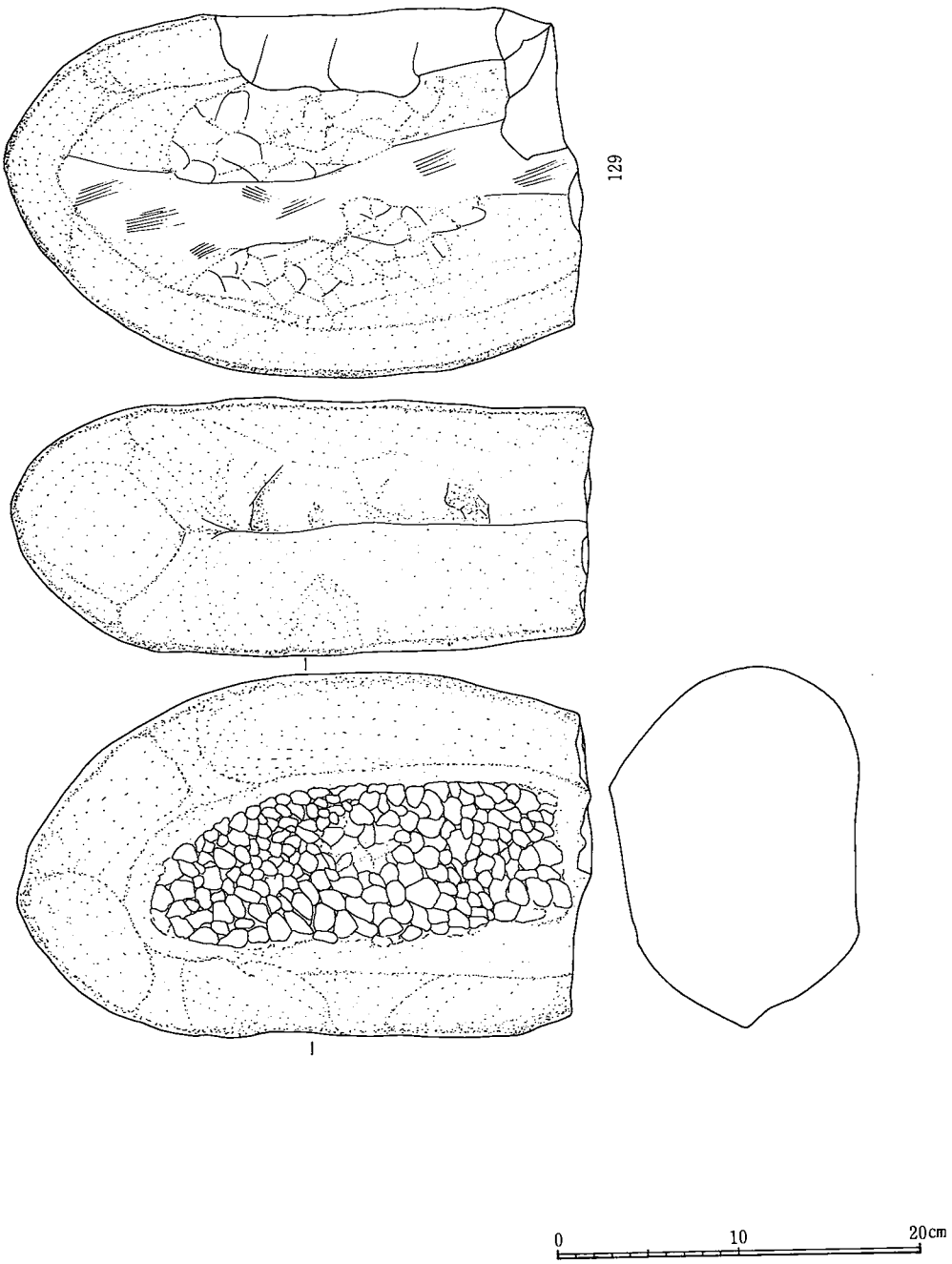
127は6号住居跡の炉の南西部分の床面直上から出土した安山岩製の台石で、形態は不定形で、側辺の一部を欠損する。上下面は平らで最大幅33.6cm、厚さ7.8cmを測る。研磨は、表裏2面とも施されている。128は20号住居跡の北側のベッド状遺構から出土した砂岩製の台石で、その形態は不定形で、最大幅24.8cm、厚さ8.6cmを測る。研磨は、表裏2面とも施されている。129は56号住居跡の北側のベッド状遺構から出土した砂岩製の台石で、形態は不定形で、端部の一部を欠損している。表裏の両面には敲打痕が明確に認められ、作業台として使用されたものであろう。研磨面も片面の一部に認められる。







第194図　台石実測図（1）



第195図　台石実測図（2）

第19表　石器計測表(1)

No.	実測No.	遺　構　名	器 種	石 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備　　考
37	716	36号住	石包丁	粘板岩	(11.0)	5.0	0.4	28.9	
38	718	6号住No.1	石包丁	粘板岩	(10.4)	4.6	0.4	30.0	
39	728	1区一括	石包丁	粘板岩	(10.2)	(4.5)	0.4	20.5	
40	701	22区一括	石包丁	粘板岩	(10.1)	4.1	0.7	25.0	
41	726	37号住一括	石包丁	粘板岩	―	(3.3)	0.4	5.2	
42	705	21区一括	石包丁	粘板岩	―	4.1	0.4	0.8	
43	703	68号住No.104	石包丁	粘板岩	(8.5)	3.5	0.2	10.8	
44	714	49号住No.44	石包丁	粘板岩	―	3.6	0.4	6.2	
45	709	22号住一括	石包丁	粘板岩	―	―	―	7.2	
46	740	24区一括	石包丁	粘板岩	―	―	―	14.1	
47	737	1号住一括	石包丁	粘板岩	―	―	―	7.9	
48	707	22区一括	石包丁	粘板岩	―	(3.1)	0.4	4.4	
49	731	19号住No.9	石包丁	千枚岩	―	(5.0)	0.6	20.6	
50	733	一括	石包丁	粘板岩	―	―	―	8.0	
51	719	23号住No.5	石包丁	粘板岩	(9.3)	4.3	0.7	29.5	
52	721	7号住	石包丁	粘板岩	(7.0)	4.0	0.6	13.8	
53	729	56号住No.201	石包丁	粘板岩	(7.2)	(4.0)	0.2	7.1	
54	727	19区一括	石包丁	粘板岩	―	4.0	0.4	9.1	
55	711	57号住一括	石包丁	泥　岩	―	―	(0.4)	6.8	
56	722	49号住	石包丁	粘板岩	―	―	(0.4)	2.8	
57	732	20区一括	石包丁	粘板岩	―	―	―	3.2	
58	725	37号住No.30	石包丁	粘板岩	―	(4.0)	0.4	9.9	
59	738	40号住No.55	石包丁	粘板岩	―	―	―	7.1	
60	723	49号住一括	石包丁	粘板岩	―	―	―	1.3	
61	741	37号住一括	石包丁	粘板岩	―	―	―	4.9	
62	739	47号住No.1	石包丁	粘板岩	―	―	―	4.5	
63	713	21区	石包丁	粘板岩	―	―	0.3	6.1	
64	710	68号住No.105	石包丁	粘板岩	―	4.0	0.5	7.5	
65	712	68号住一括	石包丁	泥　岩	―	―	0.4	7.8	
66	717	17号住No.1	石包丁	粘板岩	9.3	4.8	0.4	27.3	完形品
67	708	22区一括	石包丁	粘板岩	―	―	―	3.6	
68	702	68号住No.106	石包丁	粘板岩	11.2	5.0	0.6	42.0	完形品
69	720	6号住	石包丁	粘板岩	―	4.1	0.4	10.8	
70	734	18・19号住一括	石包丁	粘板岩	―	―	―	6.2	
71	715	57号住一括	石包丁	千枚岩	―	―	0.4	7.2	
72	704	22区一括	石包丁	粘板岩	―	3.6	0.4	12.8	
73	724	18号住No.118	石包丁	粘板岩	(10.7)	3.6	0.3	9.9	
74	736	37号住一括	石包丁	粘板岩	―	―	0.3	5.9	
75	706	28区一括	石包丁	粘板岩	―	4.7	0.4	2.5	
76	735	55号住No.10	石包丁	粘板岩	―	―	―	0.8	
77	730	56号住No.218	石包丁	粘板岩	―	5.5	0.6	52.7	
78	743	3号住No.16	石包丁	粘板岩	―	6.5	0.3	26.4	
79	742	23号住No.29	石包丁	粘板岩	―	5.0	0.6	32.8	
80	745	一括	石包丁	粘板岩	―	5.7	0.8	45.1	
81	744	4号住一括	石包丁	粘板岩	―	5.1	0.2	13.5	
82	746	24号住No.10	石包丁	粘板岩	―	4.6	0.5	28.0	
83	811	40号住No.42	砥　石	砂　岩	―	10.8	7.0	4.0	

第19表　石器計測表(2)

No.	実測No.	遺　構　名	器　種	石　材	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備　　考
84	747	一括	砥　石	安山岩	17.2	7.8	1.7	514.8	
85	749	59号住No.1	砥　石	安山岩	10.6	6.1	2.8	261.5	
86	810	44号住No.9	砥　石	砂　岩	33.8	16.0	4.8	7.3	
87	748	55号住No.13	砥　石	安山岩	――	(8.0)	2.1	295.7	
88	754	63号住No.15	砥　石	砂　岩	10.7	10.2	7.5	――	
89	786	６号住No.3	砥　石	安山岩	13.2	5.1	1.5	168.2	
90	751	60号住一括	砥　石	粘板岩	――	4.6	0.6	33.3	
91	753	一括	砥　石	粘板岩	――	2.0	0.9	22.2	
92	752	６号住No.5	砥　石	砂　岩	6.6	3.1	1.3	45.9	完形品
93	787	22号住No.12	砥　石	砂　岩	――	――	1.5	214.3	
94	788	１号住No.119	砥　石	粘板岩	――	――	1.8	113.4	
95	790	49号住No.46	砥　石	砂　岩	41.2	20.2	15.6	14.7	完形品
96	781	49号住一括	砥　石	粘板岩	――	――	1.6	25.0	
97	750	56号住No.52	砥　石	砂　岩	――	――	1.7	177.8	
98	771	13号住No.107	砥　石	砂　岩	――	9.1	――	1575.0	
99	783	１号土器溜	砥　石	砂　岩	――	――	――	341.4	
100	779	１号土器溜	砥　石	砂　岩	――	3.7	1.9	134.2	
101	762	40住No.33	磨　石	花崗岩	11.5	9.8	4.8	750.0	
102	772	８号住	磨　石	砂　岩	13.2	11.2	8.5	1770.0	完形品
103	760	18号住No.177	磨　石	砂　岩	9.7	6.4	4.2	405.2	完形品
104	755	18号住No.214	磨　石	砂　岩	7.7	――	5.3	449.3	
105	759	６号住No.34	磨　石	砂　岩	8.0	6.3	4.4	304.3	完形品
106	761	56号住No.166	磨　石	花崗岩	5.8	5.7	4.4	204.2	完形品
107	757	44号住No.10	磨　石	砂　岩	8.5	7.3	4.5	411.5	完形品
108	758	20号住No.1	磨　石	砂　岩	8.1	7.5	5.9	463.7	完形品
109	756	24号住No.32	磨　石	砂　岩	8.4	7.2	5.6	444.0	完形品
110	773	56号住No.70	敲　石	砂　岩	――	6.2	3.0	620.0	
111	765	57号住一括	敲　石	砂　岩	――	5.1	4.0	421.7	
112	769	１号住No.120	敲　石	安山岩	17.3	6.8	3.5	750.0	完形品
113	767	57号住No.1688	敲　石	砂　岩	――	――	4.4	630.0	
114	766	57号住No.1104	敲　石	安山岩	12.1	4.2	1.8	139.7	完形品
115	789	44号住一括	敲　石	砂　岩	――	――	――	299.8	
116	763	67号住No.34	敲　石	砂　岩	26.8	7.5	5.3	1765.0	完形品
117	774	２号住No.10	敲　石	砂　岩	――	4.8	3.3	239.0	
118	785	36号住一括	敲　石	砂　岩	――	4.0	2.6	215.8	
119	770	一括	敲　石	砂　岩	16.9	9.3	6.9	1470.0	完形品 砥石としても使用
120	782	2.3号住一括	敲　石	砂　岩	8.6	2.9	2.9	146.0	
121	768	19号住No.15	敲　石	砂　岩	(10.3)	5.4	(2.0)	151.6	
122	764	57号住一括	敲　石	砂　岩	16.9	8.1	2.9	577.9	
123	776	57号住No.1118	敲　石	砂　岩	――	5.1	2.7	250.2	
124	778	22号住No.2	敲　石	砂　岩	――	5.6	3.5	403.3	
125	777	１号住一括	敲　石	砂　岩	――	――	4.9	218.3	
126	784	49号住一括	敲　石	砂　岩	――	2.4	1.8	35.6	
127	780	６号住	台　石	安山岩	33.6	24.8	7.8	11.0	
128	775	20号住No.2	台　石	砂　岩	24.8	20.0	8.6	6.3	ほぼ完形品
129	798	56号住No.31	台　石	砂　岩	――	19.6	14.1	14.3	

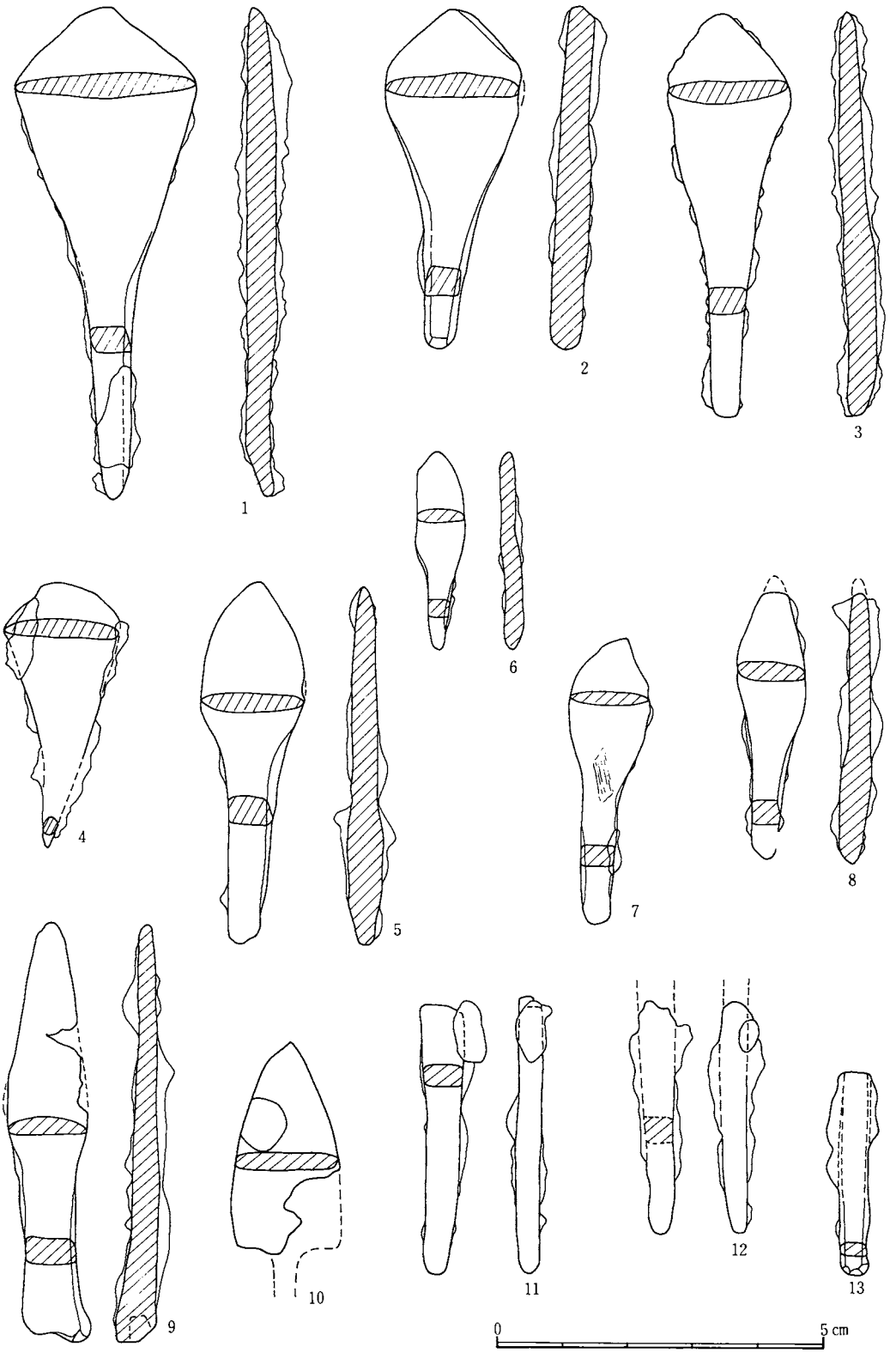
第6節　鉄器（第196図）

1　鉄鏃（1～13）

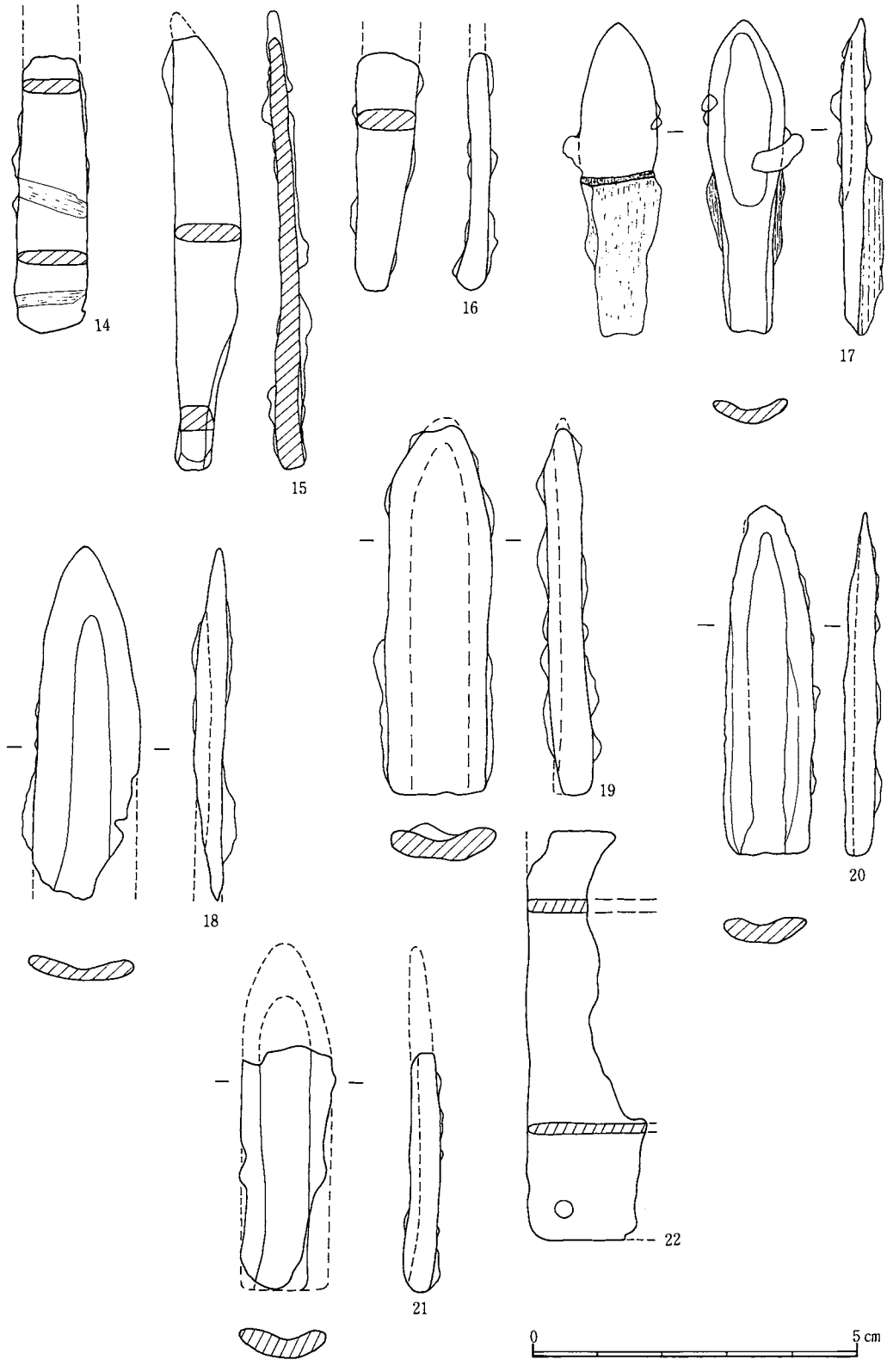
1は1号住居跡から出土し、一括で取り上げた圭頭式の鉄鏃で、ほぼ完形品である。茎部の断面形は長方形を呈し、身部は本来薄いレンズ状の断面をもつと思われるが、若干錆ぶくれがあり片丸に見える。2は21区で一括で取り上げた圭頭式の鉄鏃で、完形品である。茎部の断面形は台形を呈し、身部は錆ぶくれがあるものの片丸の断面をもつ。3は29号住居跡から出土した圭頭式の鉄鏃で完形品である。茎部の断面形は正方形に近く、身部は片丸の断面形をもち、左右対称ではない。4は23号住居跡から出土した圭頭式の鉄鏃の未製品であろうか。完形品であるが、茎部の断面形は円形を呈する。5は49号住居跡から出土した有茎三角式の鉄鏃で、完形品である。茎部の断面形は長方形を呈し、身部の断面形はレンズ状で、先端部は尖る。6は68号住居跡から一括で取り上げた小型の鉄鏃で、完形品である。茎部の断面形は正方形を呈し身部の断面形は長方形である。7は23号住居跡から出土した有茎三角式の鉄鏃で、完形品である。茎部の断面形は長方形を呈し、身部の断面形はレンズ状で、身部と茎部の関部の一部に木質が残る。8は49号住居跡から一括で取り上げた有茎三角式の鉄鏃で身部の先端部を僅かに欠損するものの、ほぼ完形品である。茎部の断面形は正方形を呈し、身部の断面形はレンズ状である。9は24号住居跡から出土した柳葉式の鉄鏃で、ほぼ完形品である。茎部の断面形は長方形を呈し、身部は片丸の断面をもつ。10は49号住居跡から出土した有茎三角式の鉄鏃で、身部の一部および茎部を欠損しており、身部の断面形はレンズ状を呈する。11～13は鉄鏃の茎部でその断面形は11・13は長方形、12は正方形を呈する。11・12は57号住居跡、13は49号住居跡から出土した。

2　刀子（14～16）

14は1号土器溜から出土し、一括で取り上げた。鋒部を欠損しており柄部には木質が残存する。15は51号住居跡から出土し、刃部の先端部を僅かに欠損するもののほぼ完形品である。柄部の断面形は長方形を、身部は長楕円形を呈し、刃部は大きく内湾する。16は57号住居跡から一括で取り上げた資料で、鋒部を欠損する。柄部はやや外反しており、その断面形は長楕円形を呈する。



第196図　鉄器実測図（1）



第197図　鉄器実測図（2）

3　鉇（17～21）

17は52号住居跡から出土した完形品で、基部に木質が残っている。断面形は凹字状を呈する。裏すきは先端部にのみ見られ、身部は僅かに反る。18は57号住居跡から一括で取り上げた資料で、基部を欠損し、断面形は裏すきが僅かに窪み、反りは殆どない。19は44号住居跡から出土した。刃部の先端部分を欠損するもほぼ完形品で、その断面形は凹字状を呈する。裏面左側には研ぎ減りが見られ、身部の反りは殆ど見られない。20は24号住居跡から出土した完形品で、全体が使用・研ぎ減りにより短くなったものである。断面形は凹字状を呈しており、裏すきは比較的浅い。また身部の反りも殆どない。裏側の左側刃部には研ぎ減りが見られる。21は23号住居跡から出土し、刃部の先端部分および基部の一部を欠損する。断面形は凹字状を呈し、基部が僅かに反る。

第21表　鉄器計測表

No.	出土地点	器種	長さ	身幅	茎幅	身の長さ	重量	備考
1	1号住	鉄鏃	7.5cm	2.8cm	0.6cm	4.2cm	16.1g	完形品
2	21区一括	鉄鏃	5.2cm	2.15cm	0.7cm	3.1cm	8.0g	完形品
3	29号住No.1	鉄鏃	6.1cm	1.9cm	0.65cm	3.5cm	6.6g	完形品
4	23号住No.2	鉄鏃	4.0cm	1.8cm	0.2cm	−	4.0g	完形品（未製品）
5	49号住No.45	鉄鏃	5.5cm	1.6cm	0.6cm	2.6cm	5.3g	完形品
6	68号住一括	鉄鏃	3.0cm	0.8cm	0.3cm	1.8cm	8.0g	完形品
7	23号住No.4	鉄鏃	4.3cm	1.8cm	1.3cm	0.6cm	2.3g	完形品
8	49号住一括	鉄鏃	(4.3)cm	1.1cm	0.4cm	(2.5)cm	2.8g	先端部欠損
9	23号住No.3	鉄鏃	(6.4)cm	1.3cm	0.8cm	3.7cm	5.5g	わずかに欠失
10	49号住一括	鉄鏃	−	1.6cm	−	3.2cm	2.1g	茎部欠損
11	57号住一括	鉄鏃	−	−	0.7cm	−	2.5g	鉄鏃の茎？
12	57号住一括	鉄片	−	−	0.4cm	−	2.1g	鉄鏃の茎？
13	49号住	鉄片	−	−	0.5cm	−	1.7g	鉄鏃の茎？
14	1号土坑	鉄製品	−	−	−	−	2.3g	刀子？
15	51号住No.17	刀子	(6.9)cm	1.0cm	0.5cm	−	4.2g	先端部欠損
16	57号住一括	鉄製品	−	0.9cm	−	−	1.9g	刀子？
17	52号住No.1	鉇	4.8cm	1.2cm	−	−	3.3g	完形品木質部付着
18	57号住一括	鉇	(5.35)cm	1.6cm	−	−	4.5g	ほぼ完形品
19	44号住	鉇	(5.6)cm	1.6cm	−	−	9.2g	完形品
20	24号住No.1	鉇	5.3cm	1.3cm	−	−	6.0g	完形品
21	23号住No.2	鉇	−	1.5cm	−	−	4.0g	先端部欠損
22	24号住一括	鉄製品	−	−	−	−	7.2g	時代下る？

4　その他（22）

22は23区から一括で取り上げた鉄製品で、器種は不明である。現存幅は1.8cmを測る。基部には目釘穴であろうか、一個の穿孔が窺える。

第７節　青銅器（第198図）

1　青銅鏡（１～２）

１は23号住居跡から出土した、小型仿製鏡である。出土状況は、住居跡のほぼ中央に位置する炉より約30cm北寄りの位置、床面より15cm浮いて出土した。鏡は裏面を上にし、西側にやや傾斜した状況であった。

直径8.0cm、縁分は幅広の平縁でその幅は0.7cmを測り、縁端部は丸く収まる。その内側には斜行櫛歯文帯をめぐらす。斜行櫛歯文帯の幅は0.4cmであるが、表面全体が磨滅あるいは劣化のため朦朧としており、櫛歯文帯の刻目単位は確認できない。内区は非常に劣化がひどく、文様は確認できない。素文である可能性も強い。鈕は欠損しているが、鈕直径は1.3cm、鈕孔径は２mm(推定)である。また、斜行櫛歯文帯に接して２孔の穿孔が存在する。その径は右側が0.4cm、左側が0.5cm、左側の１孔には紐等を通したと思われる擦れが認められる。

穿孔を有する完形の小型仿製鏡は県内からは出土しておらず、全国で出土した小型仿製鏡から最も類似するものとして、東京都宇津木向原遺跡出土の小型仿製鏡があるが。

２は、50号住居跡が調査区に一部かかる状態で確認されたため、その平面形態を把握するため調査区の拡張をスコップにより行っていて、偶然に発見したものである。そのため鏡の一部を破損することとなったが、もとは完形品であった。その出土状態は、住居跡のベッド状遺構の部分であったと思われる地点から裏面を上にした状態でほぼ水平の状態であった。

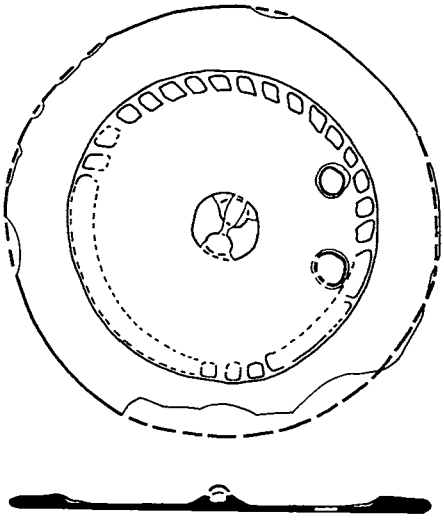
直径8.0cmの小型仿製鏡の内行花文鏡である。縁部は幅広の平縁で端部は丸く収まり、その幅は0.7cmを測る。その内側には３～５本を一単位として刻まれた斜行櫛歯文帯をめぐらす。斜行櫛歯文帯の幅は0.5cmであるが、腐食のためその全体は確認できない。内行花文帯の花文数は９～10個であろうと推定され、フリーハンドによる図文の割り付け刻み込みと思われ不揃いである。さらに内側には蕨手文が施されているのが僅かにうかがえる。渦文部は内に巻き込んでおり、他の一端は認識できない。その類例を見ると、本県の山鹿市にある方保田白石遺跡のそれと類似しているが、Ｓ字文とはならないであろう。鈕は円座鈕で、直径1.2cmを測る。

鈕孔の孔径は2.5㎜を測り、その左上向に紐擦れが僅かにうかがえる。さらに鈕の周囲に一重の円圏をもつ。

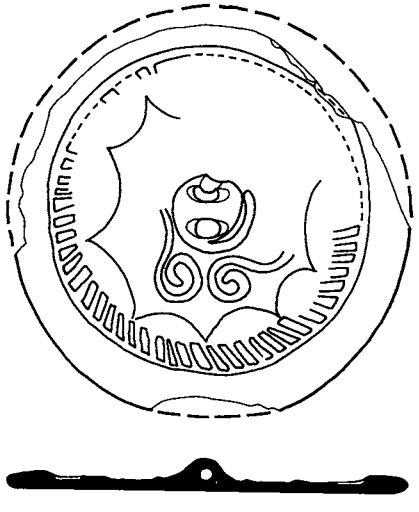
2　銅釧(3)

3は65号住居跡から出土した。65号住居跡は隅丸方形に近い不定形の住居跡で、炉の南側のピットのすぐ近くから、割れ口を東に向け横たえた状態で、床から約15㎝浮いて出土した。銅釧は約7分の3が残存しており、その形態は円形を呈すると思われる。直径が内傾で8.0㎝、外径で10.2㎝を測り、重さは15.9gで、その断面形態は楕円形を呈する。表面は丁寧に研磨されており、研磨痕等は観察できなかった。色調は深い緑黒色呈し、光沢を保っている。

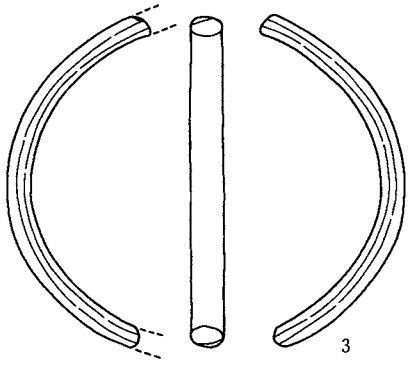
取り上げた後、不注意にもひびの部分から折れ、制作当時の断面を観察することができた。断面は白銅色に近い黄銅色を呈しており、光沢を持っていた。また、表面の錆びた部分が0,1㎜程進んでおり、錆の部分と明確に分かれている。かなり良質の銅製品であると言える。本県からは住居跡からの出土例はなく、全国的にも非常に珍しい。



1



2



3

第198図　青銅器実測図

第Ⅳ章　　ま　と　め

第１節　竪穴式住居跡について

本調査地区は調査方法および調査区の設定でも述べているが、農免農道整備ということで、その道路幅のみの調査で、遺跡全体のほんの僅かを見ただけにとどまっている。その僅かの調査区から68軒もの住居跡が検出できたことは特筆に値する。しかし、調査区の限定さらに遺構の濃密な重複から、住居跡の形態及び規模等に関して正確な把握が困難であったことは、前述したとおりである。しかし球磨地方における弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての、集落の変遷および、その性格を僅かながらではあるが、垣間見ることができた。ここではこれらを念頭において、球磨地方の代表的遺跡となりうる夏女遺跡の様子について触れてみることにする。

１　竪穴式住居跡の平面形態およびその内部構造

検出された住居跡の平面形態は大きく円形・方形・不定形の３つに大別される。さらにこれらの内部構造（ベッド状遺構等）を考慮すると、さらに細分が可能である。

Ⅰ類　　大型の長方形プラン
　ａ類　ベッド状遺構を有する
　ｂ類　ベッド状遺構を有しない
Ⅱ類　　大型の正方形プラン
Ⅲ類　　小型の長方形プラン
Ⅳ類　　小型の正方形プラン
Ⅴ類　　大型の円形プラン
　ａ類　ベッド状遺構を有する
　ｂ類　ベッド状遺構を有しない
　ｃ類　ベッド状遺構を有するが、壁の一方が花弁状を呈する。
Ⅵ類　　プランが不定形である。
Ⅶ類　　プランが不明である。

以上の７類に分類が可能である。68軒内の内訳は、Ⅰ－ａ類に属するものが３、５、６、12 29、号住居跡、Ⅰ－ｂ類に属するものが32、68住居跡、Ⅱ類に属するものが１、２、41号住居跡、Ⅲ類に属するものが８、13、17、43、45、52、55号住居跡、Ⅳ類に属するものが53号住居跡、Ⅴ－ａ類に属するものが18、19、22、23、24、25、36、40住居跡、Ⅴ－ｂ類に属するものが49号住居跡、Ⅴ－ｃ類に属するものが57号住居跡、Ⅵ類に属するものが14、27、63、65号住

居跡で、あとはすべてⅦ類に属する。これは前述したとおり、調査区の制限及び住居跡の重複により、確認不可能な住居跡が殆どであり、これらはⅠ～Ⅵ類のいずれかに属するものと思われる。このことは、この分類が遺跡の性格をそのまま示すものではなく、プランによって住居跡の数を検討するには無理があることを述べておく。

Ⅰ－ａ類について見てみると、長軸が５～８ｍであり、この遺跡では大型の部類にはいる。柱穴はすべて２本柱で、炉穴及び貯蔵穴を有する。なおベッド状遺構はその比高差が20～40㎝と県内のそれと比較しても、非常に高い。

Ⅰ－ｂ類は、長軸が４～５ｍの規模で、柱穴の数は32号が４本、68号が２本と異なっている。貯蔵穴は68号に関して、柱穴の軸上の壁際に存在する。このように、この二つの住居跡を形態上同類として挙げたが、一線を画したほうがよさそうである。

Ⅱ類は、どれも完全に平面プランを確認してはいないが、ベッド状遺構の幅等より推定しての分類である。一辺が５ｍ前後で、柱穴は２本柱、41号にいたっては６本柱である。

Ⅲ類は、長軸が2.2～４ｍと小型で、明確な主柱穴は持たない。８号に関しては、小ピットが多数確認され、他とは性格が異なる。

Ⅳ類は、一辺が２ｍと非常に小型である。柱穴等の内部施設は持たず住居跡と認識するか否か微妙ではあるが、ここではⅣ類として分類することとした。

Ⅴ－ａ類は、大型の円形住居跡でその直径は4.5～８ｍを測る。ベッド状遺構はほぼ全周しており、主柱穴は２本、４本、６本で４本が基本となる。炉を有し、貯蔵穴も存在する。

Ⅴ－ｂ類は49号住居跡のみのわずか１軒のみの出土である。ここで注意しなければならないのは、この住居跡のベッド状遺構を削平により消失したものととらえると、Ⅴ－ａ類に属するものとなる。

Ⅴ－ｃ類は、本遺跡から唯一特異なものとして確認されたものである。調査当時としては、本県からの出土は初めてであり、その類例は宮崎県に日向市周辺にうかがうことができる。また、この住居跡からはかなりの量の土器等の遺物が出土し、とくに、免田式土器と呼ばれている重弧文長頸壺がまとまって出土したことは、注目に値する。

Ⅵ類は、その平面形態が平行四辺形を呈するものおよび隅丸方形を呈する等、方形および円形に属さないものを、取りまとめた。この中で、65号住居跡から銅釧が出土したのは注目に値する。なお、住居跡からの出土例は初めてであり、全国に目を向けても非常に珍しいといえる。

Ⅶ類は、前述したとおり、平面プランの確認が出来なかったもの、不明のものを一括して取りまとめたものである。

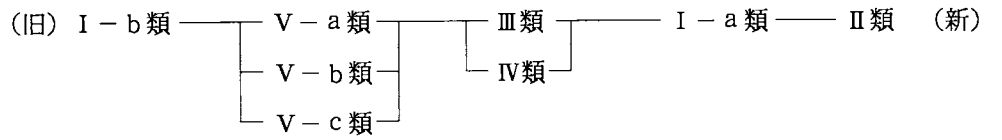
以上分類ごとに述べてきたが、各分類をみてもさらに多種におよぶ。本遺跡の時間的変遷を見ると短時間にさまざまな形態に住居跡が出現し、変化していったことがうかがえる。

2　住居跡の分布と時期の変遷

それでは、分類ごとの住居跡の分布状態を見てみると、その形態ごとにまとまりがあることがうかがえる。遺跡全体のうち、東西において線的にしかうかがえないが、分布の移動および住居跡の切り合い関係から、時期の変遷が僅かであるが、うかがうことができる。調査区の東端から順にそのまとまりを見てみることにする。

まず、調査区で東端（28～29区）に位置するのはⅠ－ｂ類である。これに類する住居跡は数も少なく、それ以外には15区に32号住居跡があるのみである。次に遺跡のほぼ中央部（12～28区）に広く分布するのがⅤ類に属する円形の住居跡である。この類はお互いに重複しており、建て替えが数度行われたことを物語っている。また、遺跡の西側には存在しない。遺跡の西側（４～14区）に分布するのはⅠ－ａ類に属する大型の住居跡である。この類の住居跡は15区以東には存在しない。さらに、Ⅰ－ａ類と重複する形でⅡ類が存在する。一部17区に１軒あるものの、西側に集中するとみてよい。Ⅲ類、Ⅳ類に関しては、８区より以東に広く存在している。

このように、大まかではあるが、グループごとにその変遷が見えてくる。さらに、これらのグループに属する住居跡の切り合い関係を見てみると、一部不明確な面もあるが、以下のような新旧関係が浮かび上がる。



つまり、この遺跡の変遷は東側から西側に向かって移動、もしくは拡大していったものと解釈できる。ただ住居跡の形態のみで、その変遷を決めつけると大きな誤解を招くことになる。そこで、住居跡の形態および、出土遺物を関連づけて検討する必要がある。

第２節　出土土器

各住居跡の中から、かなりの量の土器が出土した。その器形は甕・壺・高坏・鉢・手捏土器等で、数千点にも及ぶ。本報告書に掲載出来たのは、その一部である。

夏女遺跡が存在する球磨地方は、中九州及び南九州の接点ともいえる位置にあり、当然両地域からの影響を受けたことは確かである。よって文化様式においても、多分に影響を受けていたと考えられる。また、それらの影響を受けつつも、独自の文化を受け継いでいたともいえる。土器についてもこのことが伺い知れる。

ただ、球磨地方における弥生時代の遺跡の発掘例が乏しく、他遺跡との対比が出来なかった

こと、中九州及び南九州の土器との単純な比較が出来なかったことなどから、明確な時期判断が出来なかった。このような理由により、「弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて…」と曖昧な時期判断をせざるを得なかった。

ここでは、第1節で分類した住居跡のうち、おもな住居跡を選出し、それから出土した土器を比較することで、時期の変遷を見てみることとする。なお選出した住居跡は次のとおりである。

Ⅰ－ｂ類　68号住居跡（ベッド状遺構を持たない大型の長方形プラン）
Ⅴ類　　57号住居跡（ベッド状遺構を持つ円形プラン、花弁形）
Ⅰ類　　6号住居跡（ベッド状遺構を持つ大型の長方形プラン）
Ⅱ類　　1号住居跡（ベッド状遺構を持つ大型の正方形プラン）

1　甕

Ⅰ－ｂ類出土の甕は胴部最大径を上位に持ち、口縁部は頸部よりするどく屈曲し、直線的に開くもの（525、526、527等）とやや外反ぎみに開くもの（528、529等）があるが、その内面の稜線はいずれも明確である。脚部は短く外反ぎみに開く。

Ⅴ類は胴部最大径を上位に持ち、口縁部は立ち上がりぎみにやや外反して開く。内面の稜線は僅かではあるがうかがえる（359、360、363）。脚は外反ぎみにのびる傾向がうかがえる（368、369、371、372）。

Ⅰ類は胴部最大径は上位に位置するものの、口縁部はゆるやかに外反して開く（73、74、80、81）。内面の稜線は、ほとんど不明瞭である。脚は直線的にのびる傾向がある（75、77、78）。

Ⅱ類は胴部と口縁部の境がほとんど見られないもの（21、22）が現れる。脚部は内湾ぎみにのびるもの（30、34、36）が多くをしめている。

このように甕は、口縁部にいたっては南部九州の成川式土器の口縁部の変化に類似する。

2　壺

Ⅰ－ｂ類の壺は素口縁と複合口縁との2種類があり、胴部最大径はほぼ中位に位置する。素口縁は短く外反する（515、516、518）。518にいたっては胴部上位に刻目突帯を有する。複合口縁は頸部より外反し、口縁部はするどく内側に屈曲する（512、517）。

Ⅱ類は素口縁の壺のみの出土で、口縁部はわずかに外反し長くのびる傾向にある（383、384、385、386）。

Ⅰ類は小型丸底壺（70）のみの出土で、胴部は短く頸部は長くのびる。

V類は素口縁(4)と複合口縁（1.5）の2種類があり、素口縁はほぼ直線的にたちあがる。複合口縁は大型の壺で、頸部はゆるやかに外反し、わずかに屈曲して立ち上がる。なお屈曲部分には刻目突帯を有する。

このように、壺における変化をみると、素口縁の口縁部にいたっては短く外反するものから、長く上方に立ち上がるものへと。複合口縁は口縁部がするどく内側に屈曲するものから、ゆるやかに屈曲し上方にのびる傾向があることがうかがえる。

3　重弧文長頸壺（免田式土器）

重弧文長頸壺はかなりの数が出土したが、そのほとんどがV類に属する円形住居跡から出土した。その胴部文様の形態は様々であるが大きく分類すると、以下の5類に分類できる。

1類　上向きの重弧文と下向きの重弧文を組み合わせたもの

2類　上向きの重弧文

3類　山形に近い上向きの重弧文

4類　三角形の単位文様を連ねたもの（鋸歯文）

5類　山形の単位文様を連ねたもので、その中央に1本の沈線を垂直に施したもの（有軸三角文）

Ⅰ－b類に属する68号住居跡からは小型の重弧文長頸壺が1点（522）が出土した。その胴部形態は偏平で、屈曲部分にはつまみ出しによる微隆帯をめぐらし、重弧文は非常に浅い沈線で施されており、頸部に近い部分は沈線ではなく断面三角形の隆帯をめぐらす。これは免田式土器の中でも古い形式に編年されているものである。

2～3類に属すものはそのほとんどがV類に属する住居跡（57号住居跡）から出土した。図化出来なかったものも含めると数百点におよぶ。Ⅰ類・Ⅱ類に属する住居跡からは、ほとんど出土は無かった。

このことから、1～5類が同一住居跡から、その数の割合は異なるものの、一括出土していることから、文様形態での時期差は認められなかった。

〔参考文献〕

島津義昭・高谷和生　『下山西遺跡』　熊本県文化財調査報告第88集　1987

木﨑康弘・隈　昭志・中原由子　『大丸・藤ノ迫遺跡』　熊本県文化財調査報告第80集　1986

隈　昭志・木﨑康弘　『狸谷遺跡』　熊本県文化財調査報告第90集　1987

木﨑　康弘　「九州ナイフ形石器文化の研究－その編年と展開」『旧石器考古学』　37　旧石器文化談話会　京都　1988

中村　直子　「免田式土器考」　『人類史研究』第７号　1988

中村　直子　「成川式土器再考」　『鹿大考古』第６号　1987

吉本　正典　「幅広突帯」を有する壺形土器の研究　『鹿大考古』第６号　1987

吉本　正典　「中津野式」土器の検討　『鹿大考古』第３号　1985

平田　信芳　『萩原遺跡』　姶良町教育委員会　1978

鹿児島県考古学会　『鹿児島県下の弥生土器』　鹿児島県考古学秋季大会資料　1992

樋口　隆康　『古鏡』　新潮社　1979

平岡勝昭・鶴島俊彦　『梅ノ木遺跡』　熊本県文化財調査報告第62集　1983

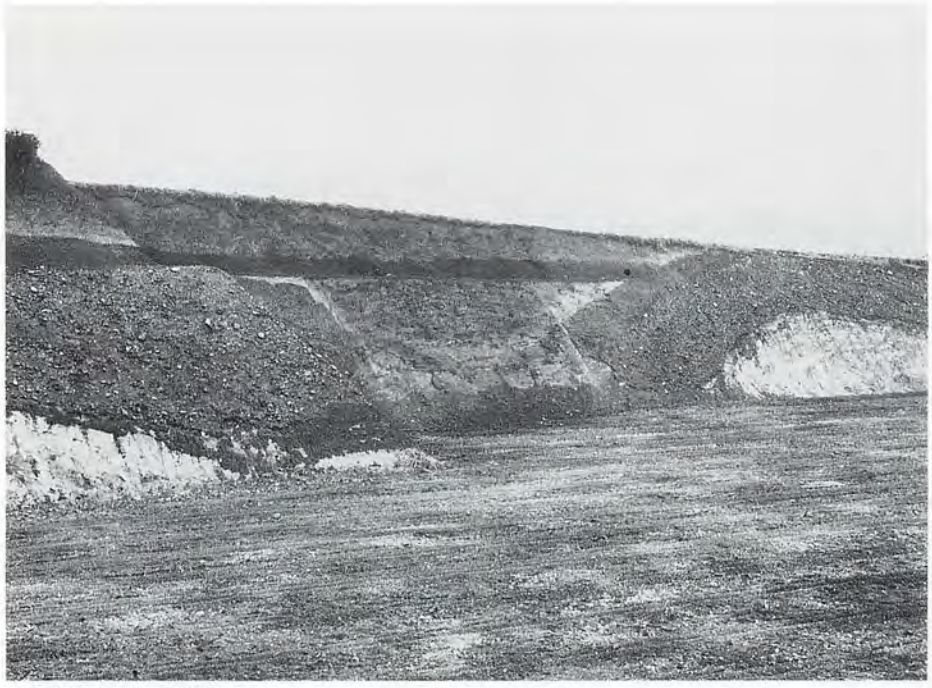
平岡勝昭・丸山伸治　『竜田陣内遺跡』　熊本県文化財調査報告第98集　1988

写真図版

北より夏女遺跡を望む

夏女遺跡近景〔第 1 次調査〕(東より)

図版 2



夏女遺跡北側土層断面

基本土層

1 号住居跡（南より）

1 号住居跡　遺物出土状況

図版 4

2・3号住居跡（東より）

2・3号住居跡　遺物出土状況（西より）

2 号住居跡　組み合わせ土器出土状況

2 号住居跡　土器出土状況

図版 6

4 号住居跡　遺物出土状況

4 号住居跡　遺物出土状況（接写）

5 号住居跡（北より）

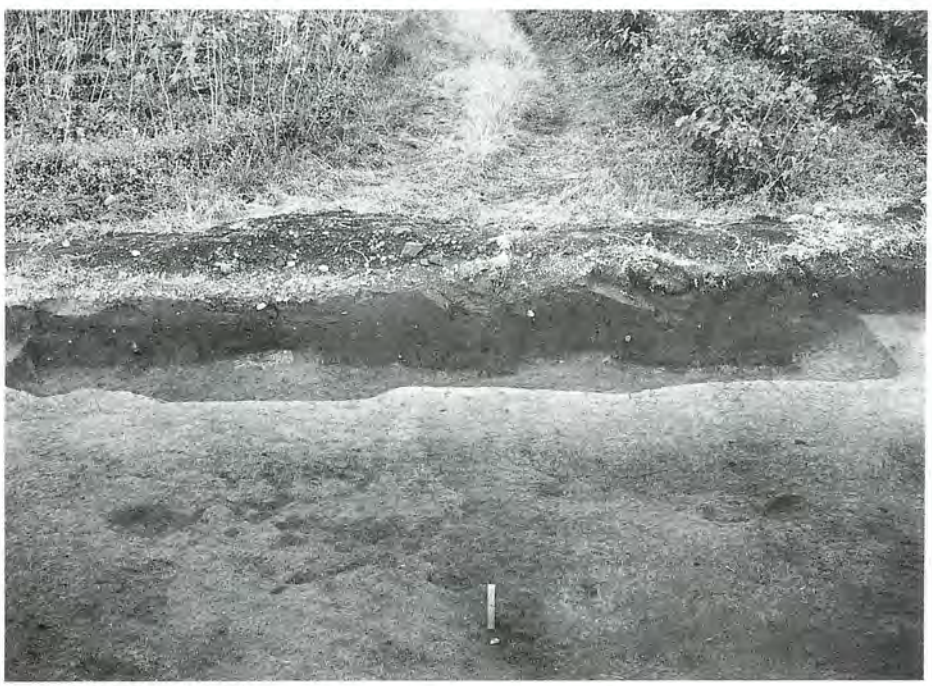
5 号住居跡　遺物出土状況

図版 8

6 号住居跡（北より）

6 号住居跡　遺物出土状況

8 号住居跡（西より）

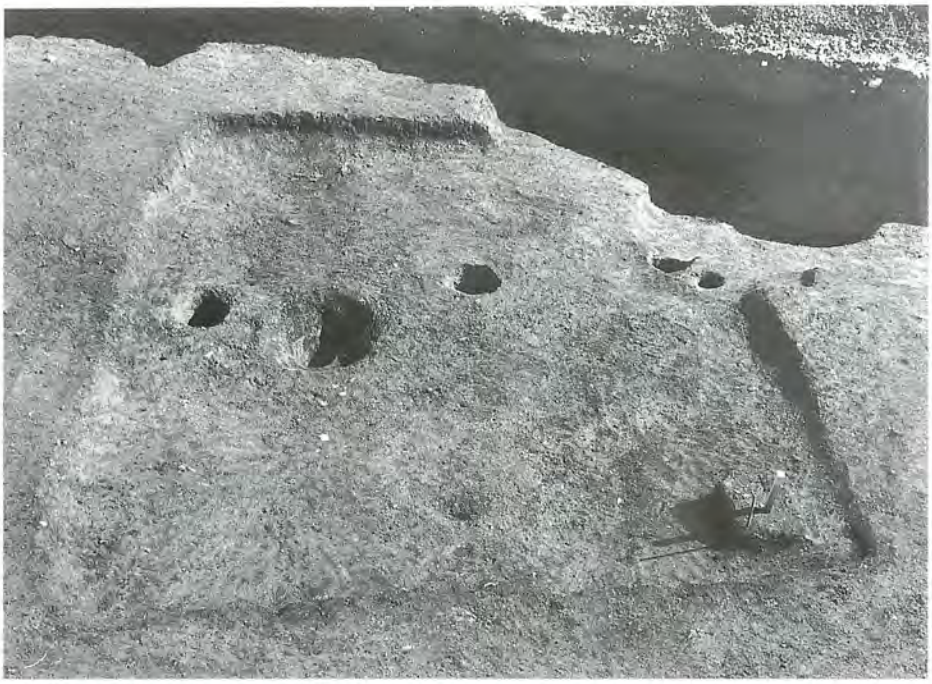


9・10号住居跡（北より）

図版10

11号住居跡（西より）

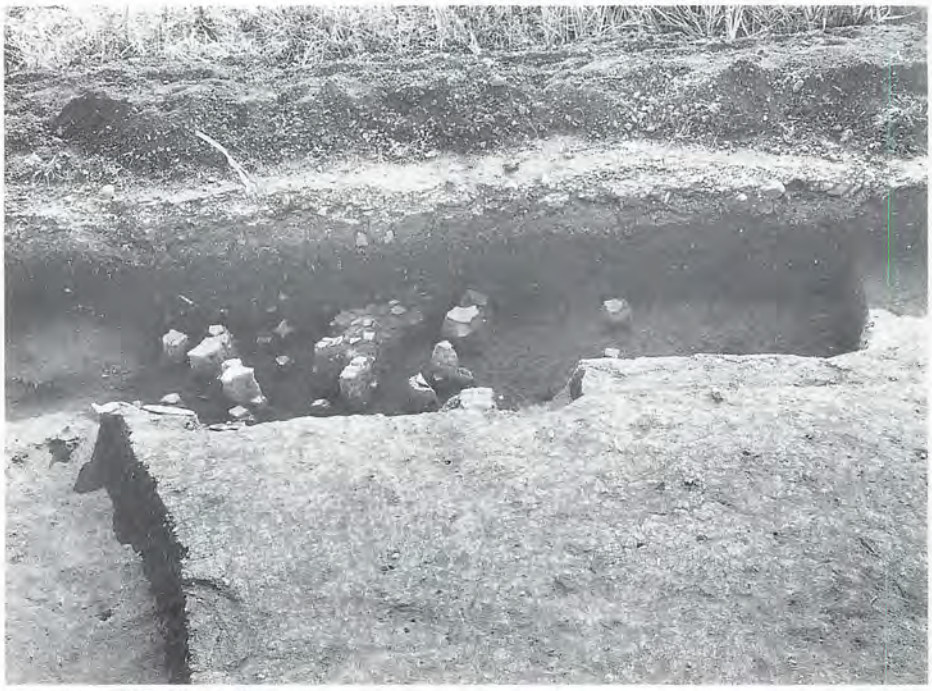
12号住居跡（西より）



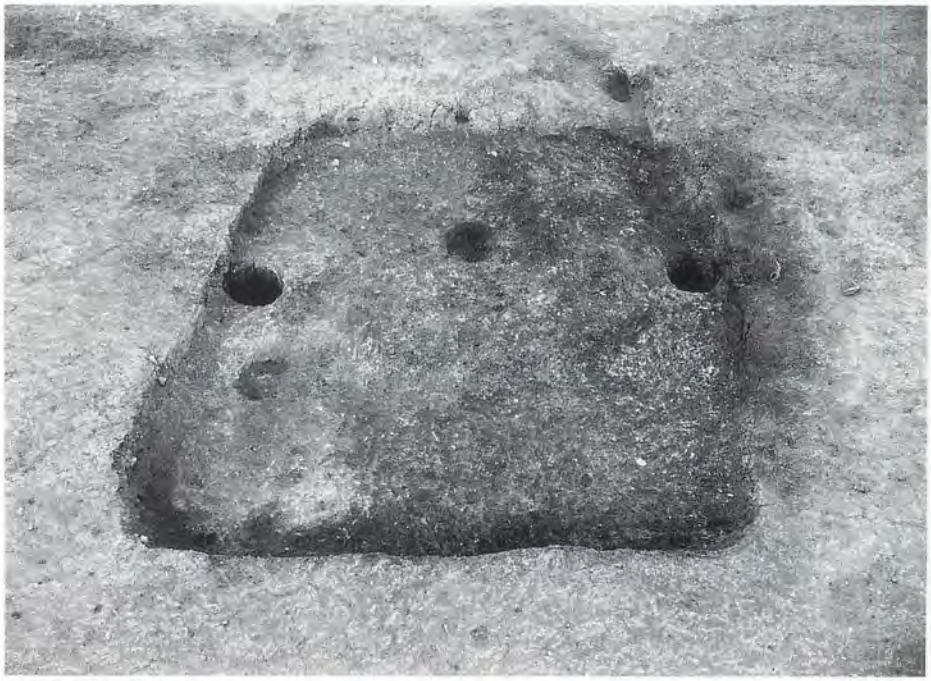
13号住居跡（北より）

14号住居跡（北より）

図版12

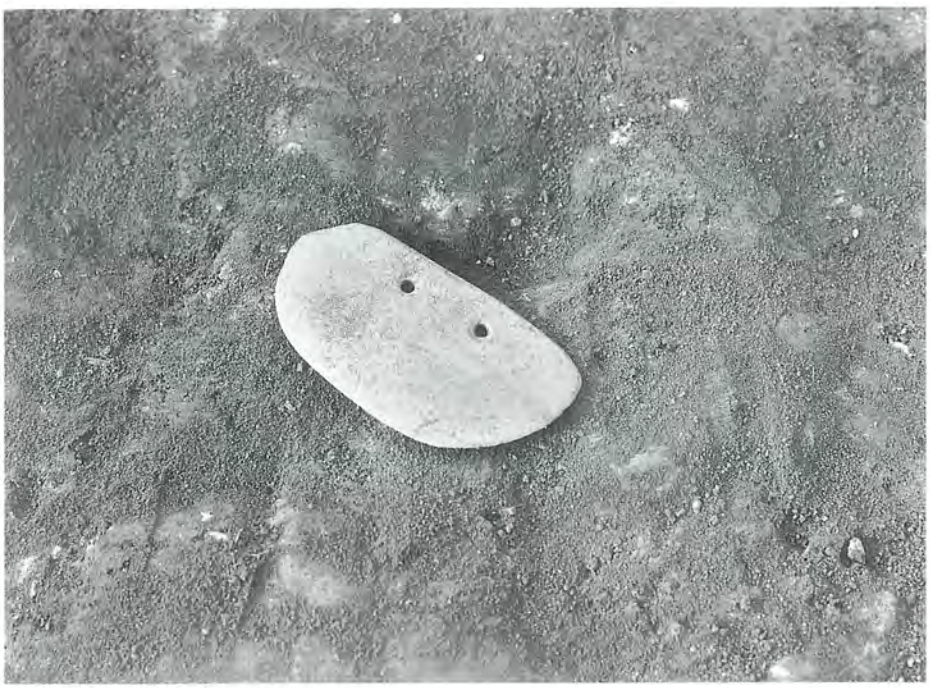


15・16号住居跡（北より）



17号住居跡（南より）

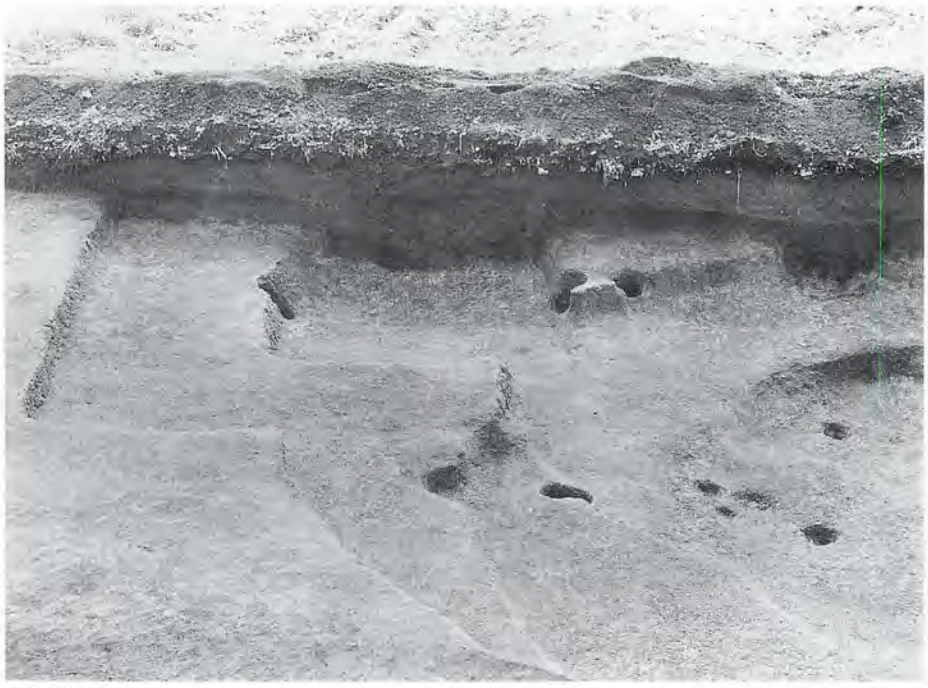
17号住居跡　土器出土状況



17号住居跡　石包丁出土状況

図版14

18・19号住居跡（北東より）



20号住居跡（北より）

21号住居跡（東より）

22号住居跡（南東より）

図版16

23・24・26号住居跡（北東より）

25・27号住居跡（北より）

29・30号住居跡（北より）

31号住居跡（東より）

図版18

32・33号住居跡（東より）

34号住居跡（東より）

35号住居跡（東より）

36・37・38号住居跡（南東より）

図版20

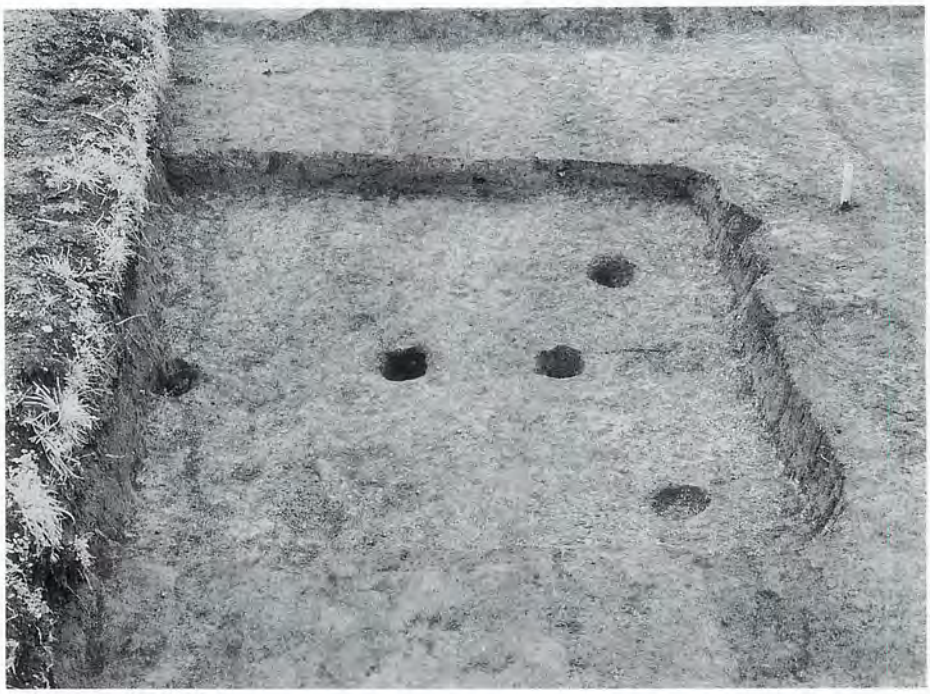
39号住居跡（東より）

40・41号住居跡（東より）

42号住居跡（北西より）

43号住居跡（南より）

図版22



44号住居跡（東より）

45号住居跡（北より）

46・47号住居跡（西より）

48号住居跡（南西より）

図版24

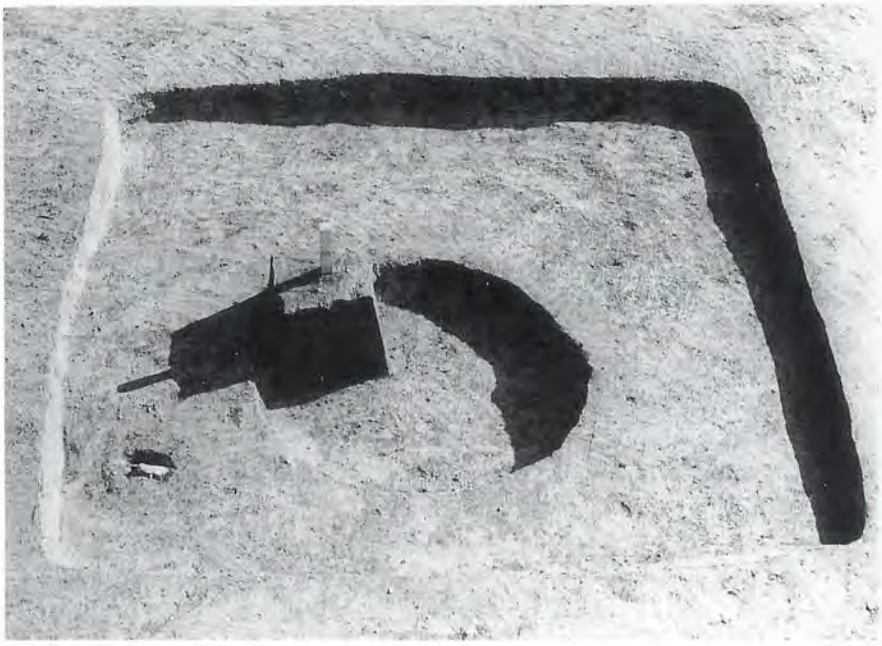
49号住居跡（北より）

50号住居跡（北より）

51号住居跡（北より）

52号住居跡（東より）

図版26



53号住居跡（北より）

54号住居跡（南より）

55号住居跡　遺物出土状況（西より）

56号住居跡（北より）

図版28

57号住居跡（東より）

57号住居跡　遺物出土状況（北東より）

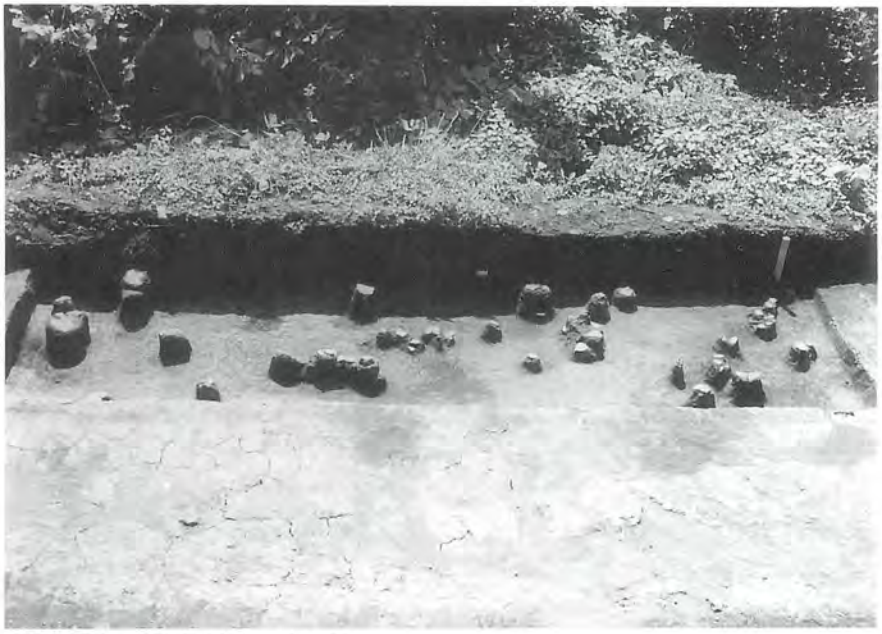
58号住居跡（北より）

59号住居跡（東より）

図版30

60号住居跡（北より）

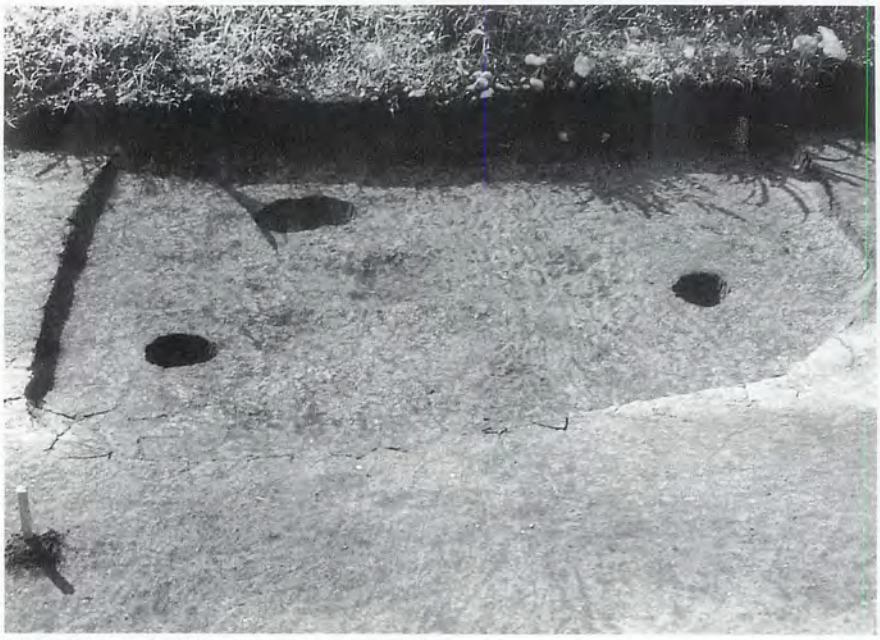
61号住居跡　遺物出土状況（北より）



62号住居跡　遺物出土状況（北より）

63号住居跡　遺物出土状況（南より）

図版32



65号住居跡（北より）

65号住居跡　銅釧出土状況

66・67号住居跡（南より）

68号住居跡（南より）

図版34

68号住居跡　遺物出土状況（南より）

68号住居跡　砲丁出土状況

土器溜（東より）

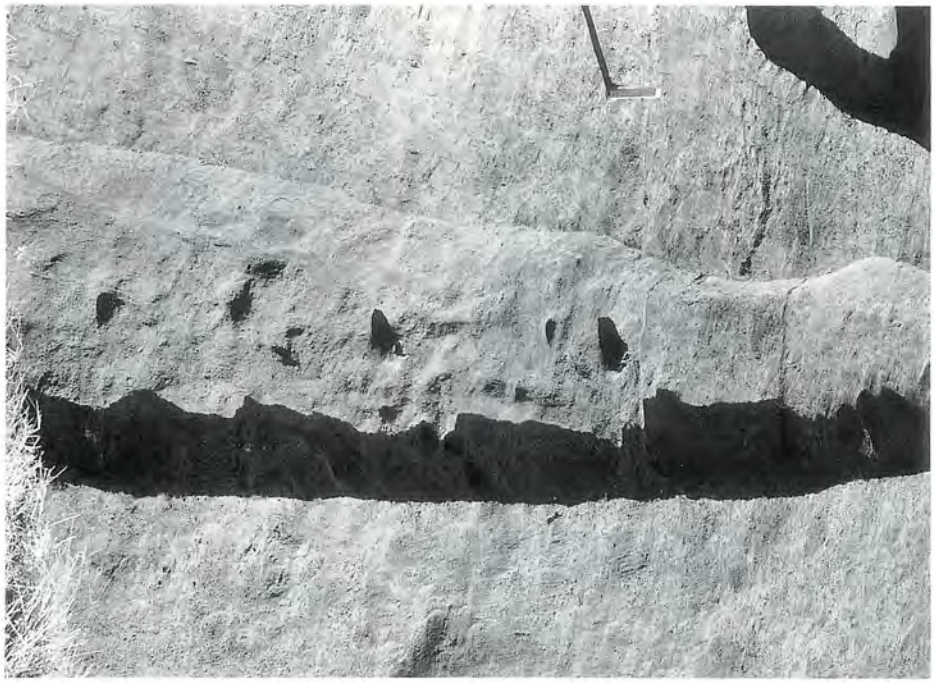
土器溜　遺物出土状況（西より）

図版36

1号溝〔条溝〕(北より)

1号溝〔条溝〕断面

1号土坑



2号溝

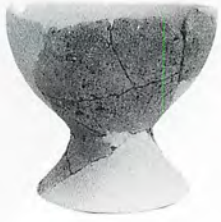
図版38

3号溝（南より）

住居跡・発掘調査風景

1号住居跡　出土土器－1

図版40



1号住居跡　出土土器－2

1号住居跡　出土土器－3

図版42

2号住居跡　出土土器

3号住居跡　出土土器

5号住居跡　出土土器

図版44

6 号住居跡　出土土器

7 号住居跡　出土土器

11号住居跡　出土土器

13号住居跡　出土土器

図版46

14号住居跡　出土土器

15号住居跡　出土土器

17号住居跡　出土土器

図版48

18号住居跡　出土土器

19号住居跡　出土土器

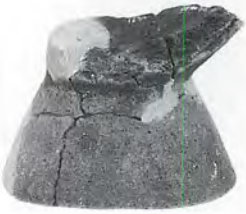
図版50

20号住居跡　出土土器

21号住居跡　出土土器

22号住居跡　出土土器

図版52



23号住居跡　出土土器

24号住居跡　出土土器

図版54

25号住居跡　出土土器

27号住居跡　出土土器

29号住居跡　出土土器

図版56

31号住居跡　出土土器

33号住居跡　出土土器

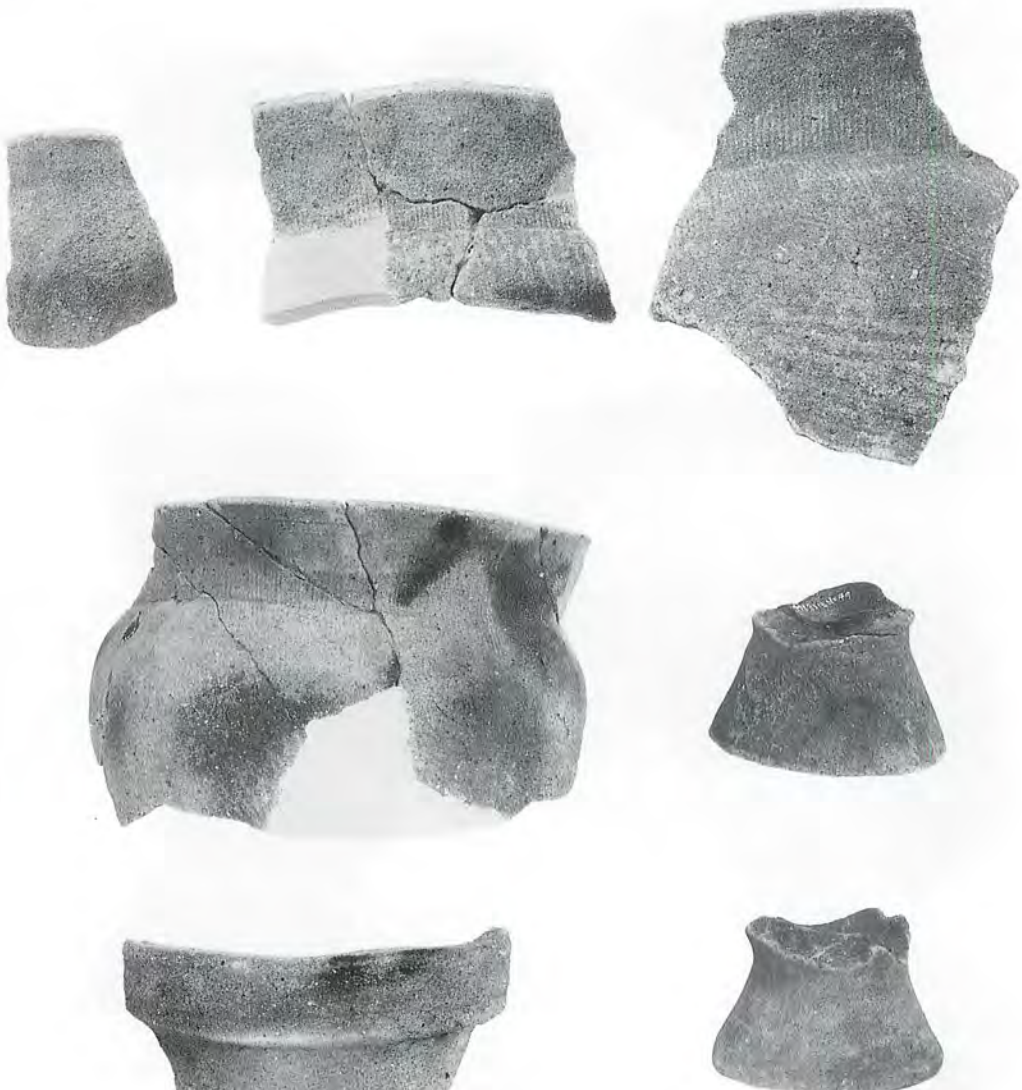
34号住居跡　出土土器

35号住居跡　出土土器

36号住居跡　出土土器

37号住居跡　出土土器

図版58



40号住居跡　出土土器

42号住居跡　出土土器

43号住居跡　出土土器

44号住居跡　出土土器

45号住居跡　出土土器

図版60

45号住居跡　出土土器

46号住居跡　出土土器

49号住居跡　出土土器

図版62

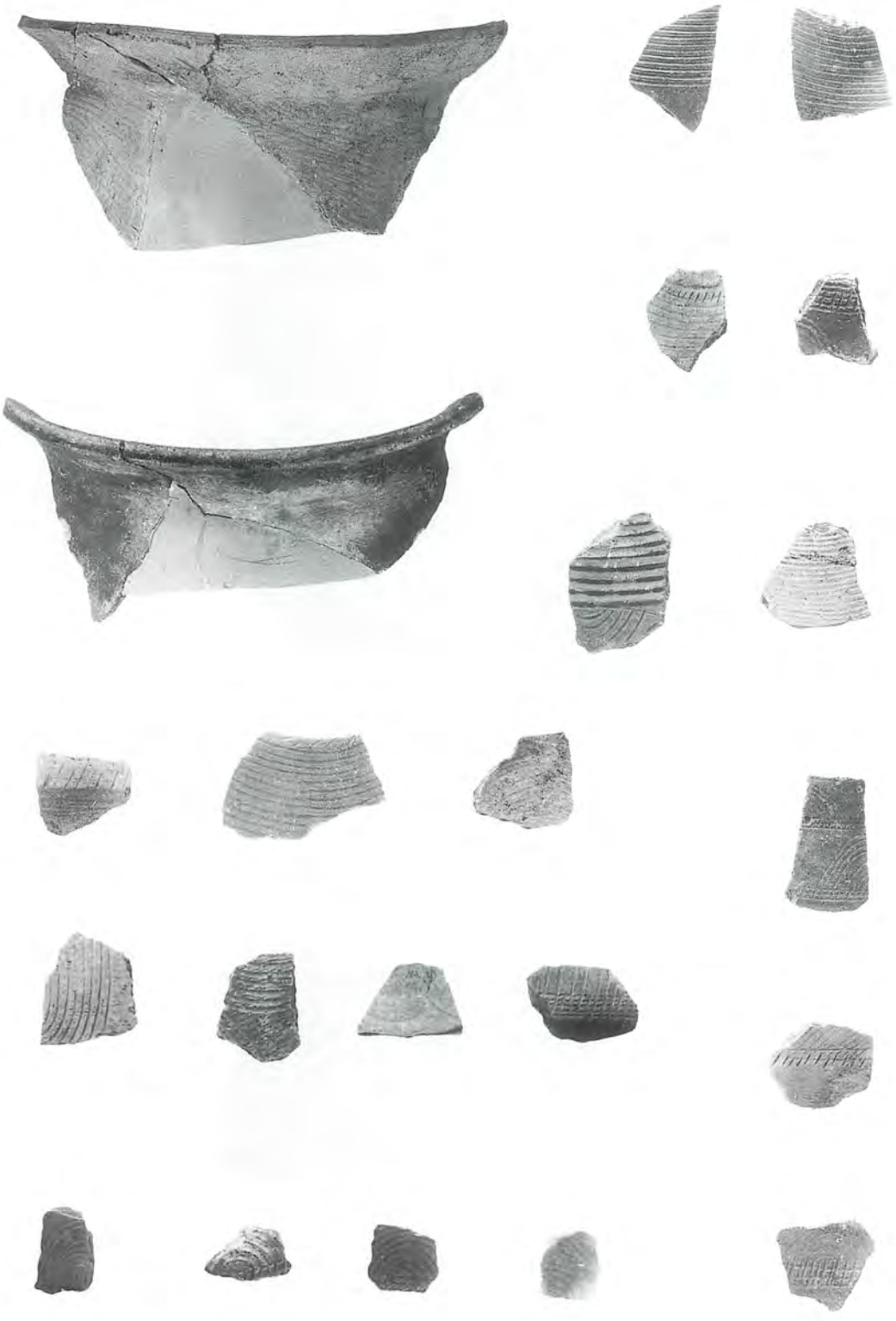
50号住居跡　出土土器

51号住居跡　出土土器

55号住居跡　出土土器

図版64

56号住居跡　出土土器－1



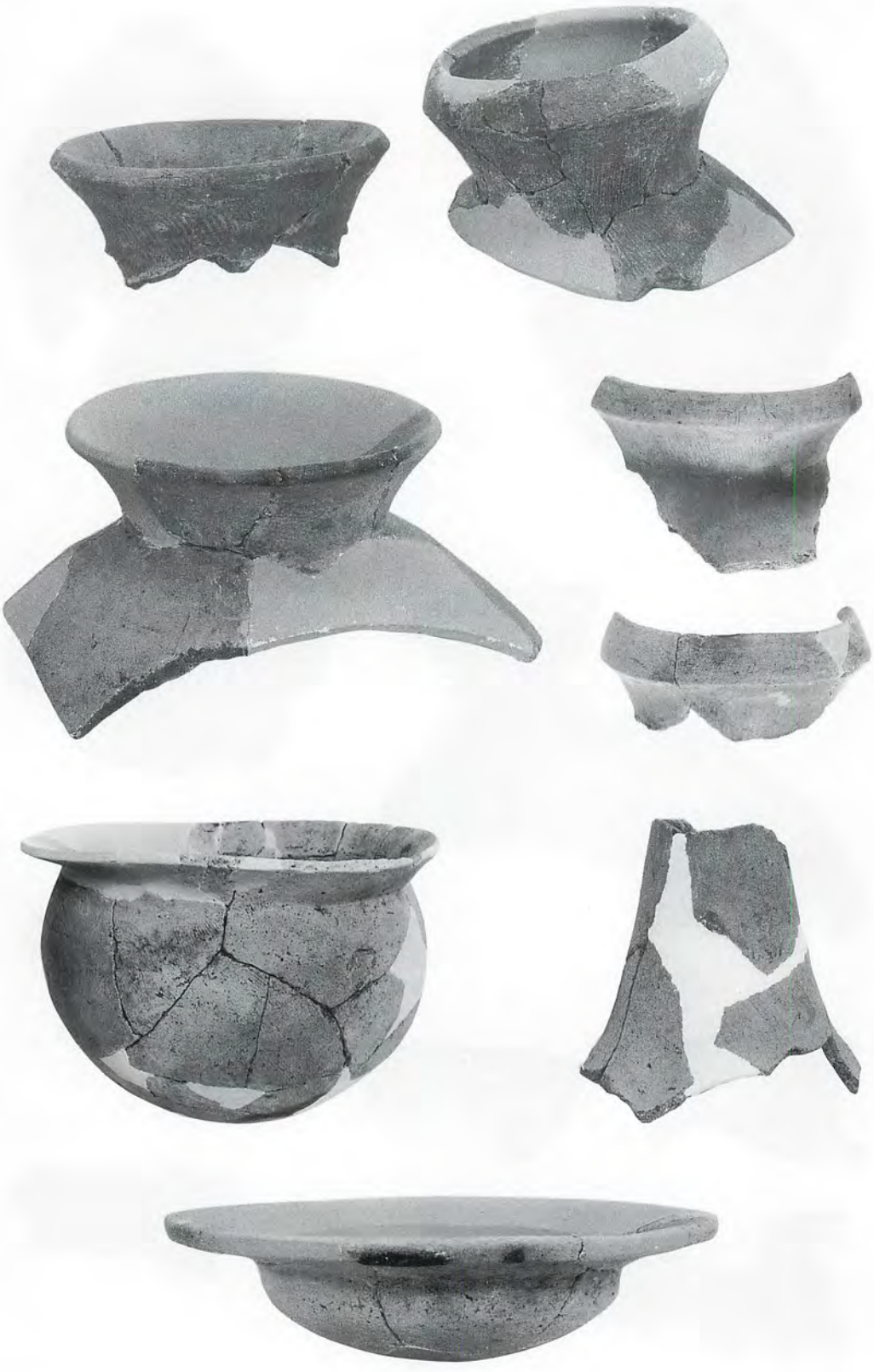
56号住居跡　出土土器－2

図版66

57号住居跡　出土土器－1

57号住居跡　出土土器－2

図版68

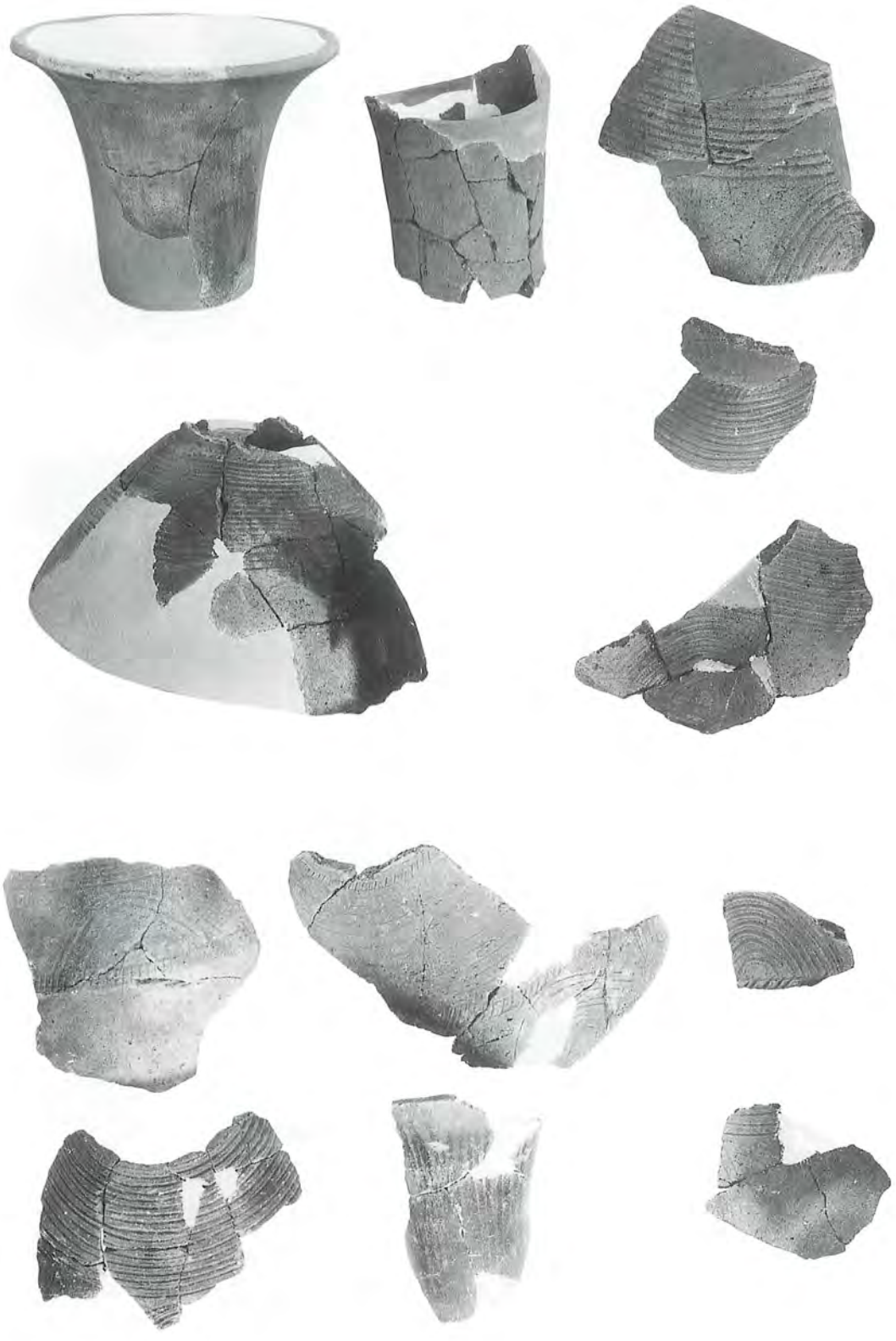


57号住居跡　出土土器－3

57号住居跡　出土土器－4

図版70

57号住居跡　出土土器－5



57号住居跡　出土土器－6

図版72

57号住居跡　出土土器－7

57号住居跡　出土土器－8

図版74

57号住居跡　出土土器－9

57号住居跡　出土土器－10

図版76

60号住居跡　出土土器

61号住居跡　出土土器

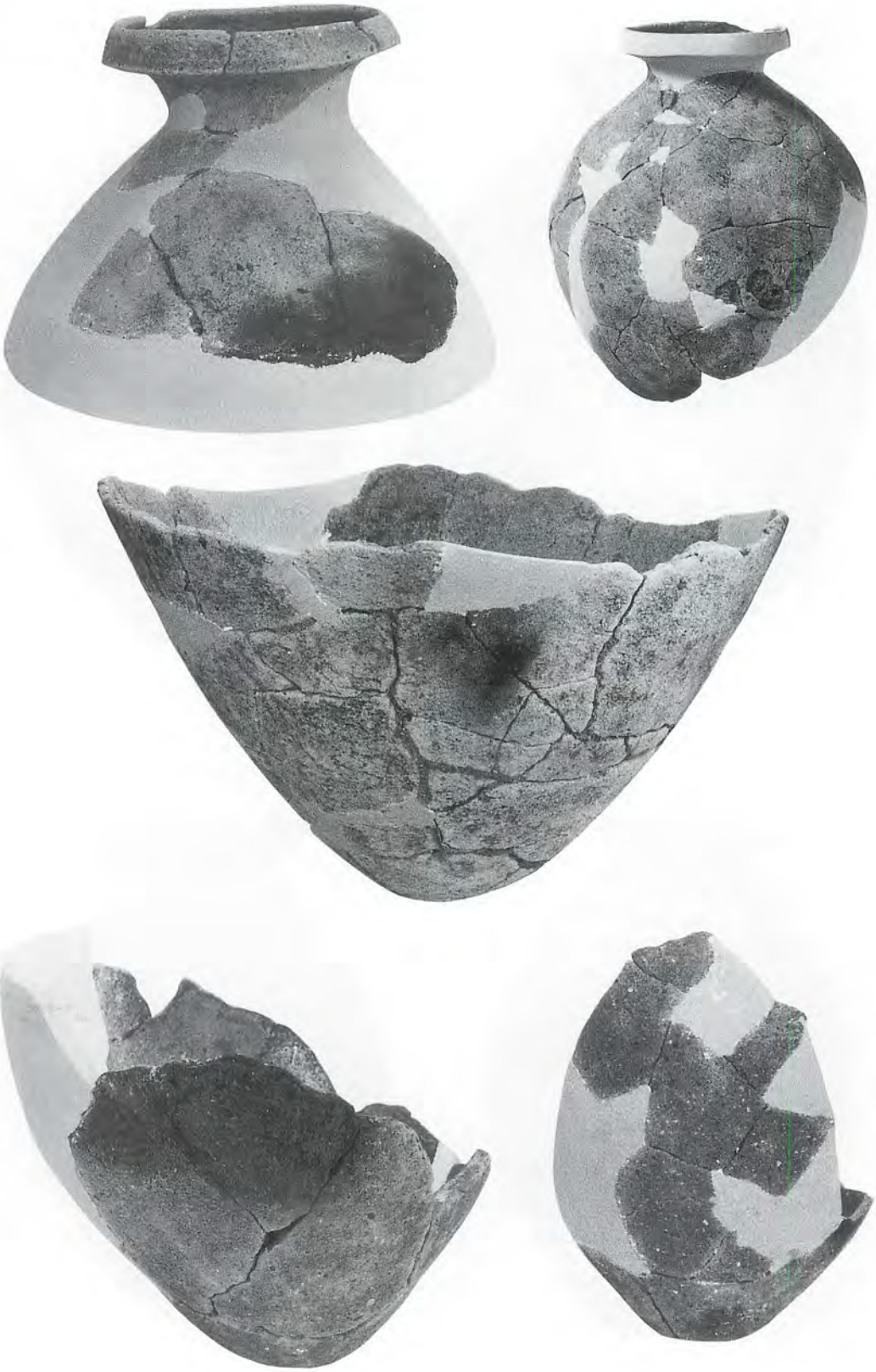
65号住居跡　出土土器

62号住居跡　出土土器

67号住居跡　出土土器

68号住居跡　出土土器－1

図版78



68号住居跡　出土土器－2

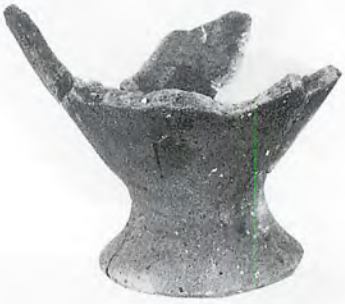
68号住居跡　出土土器－3

図版80

68号住居跡　出土土器－4

68号住居跡　出土土器－5

図版82



68号住居跡　出土土器－6

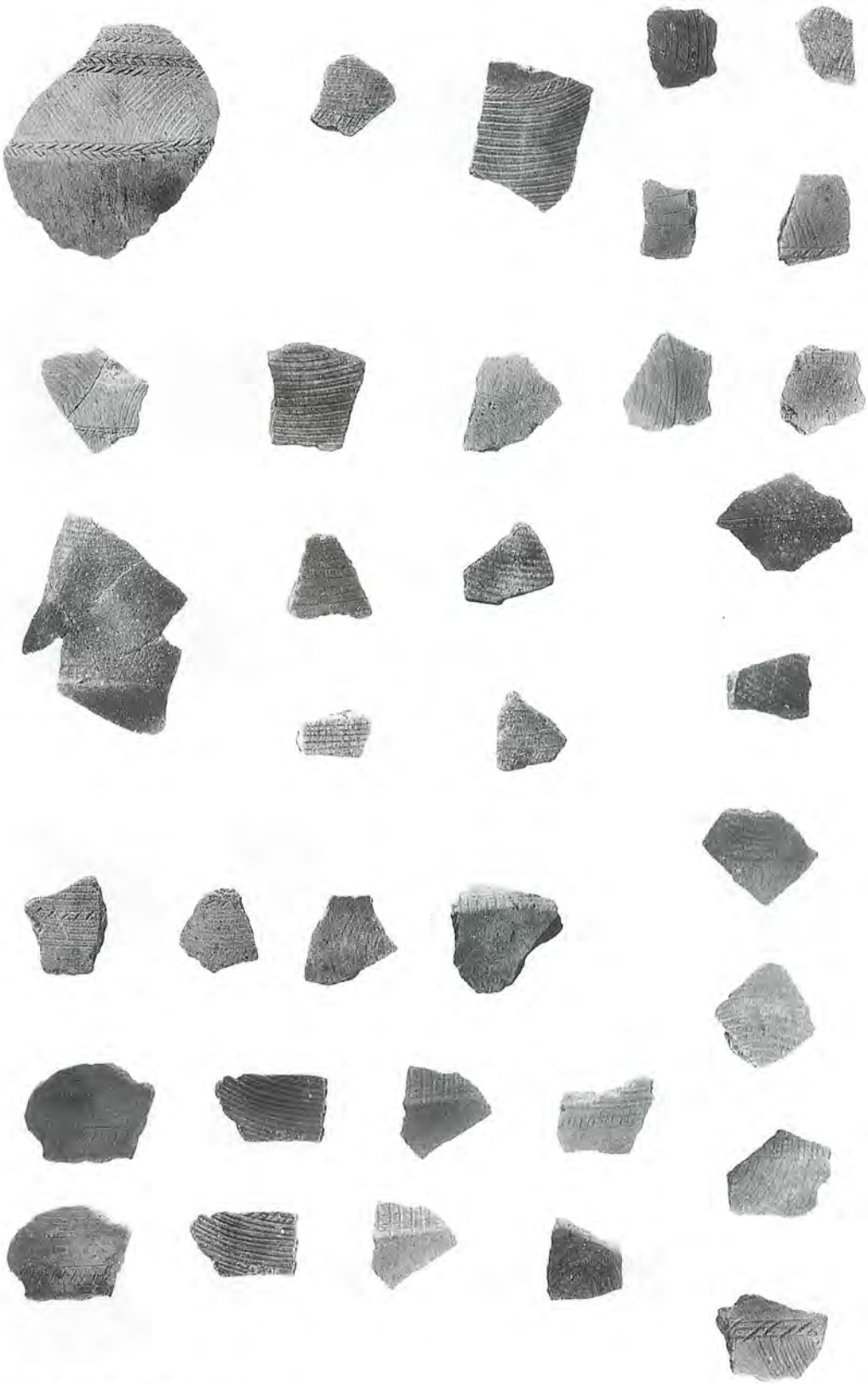
土器溜　出土土器－1

図版84

土器溜　出土土器－2

図版86

一括取り上げ土器（免田式土器）－1



一括取り上げ土器（免田式土器）－2

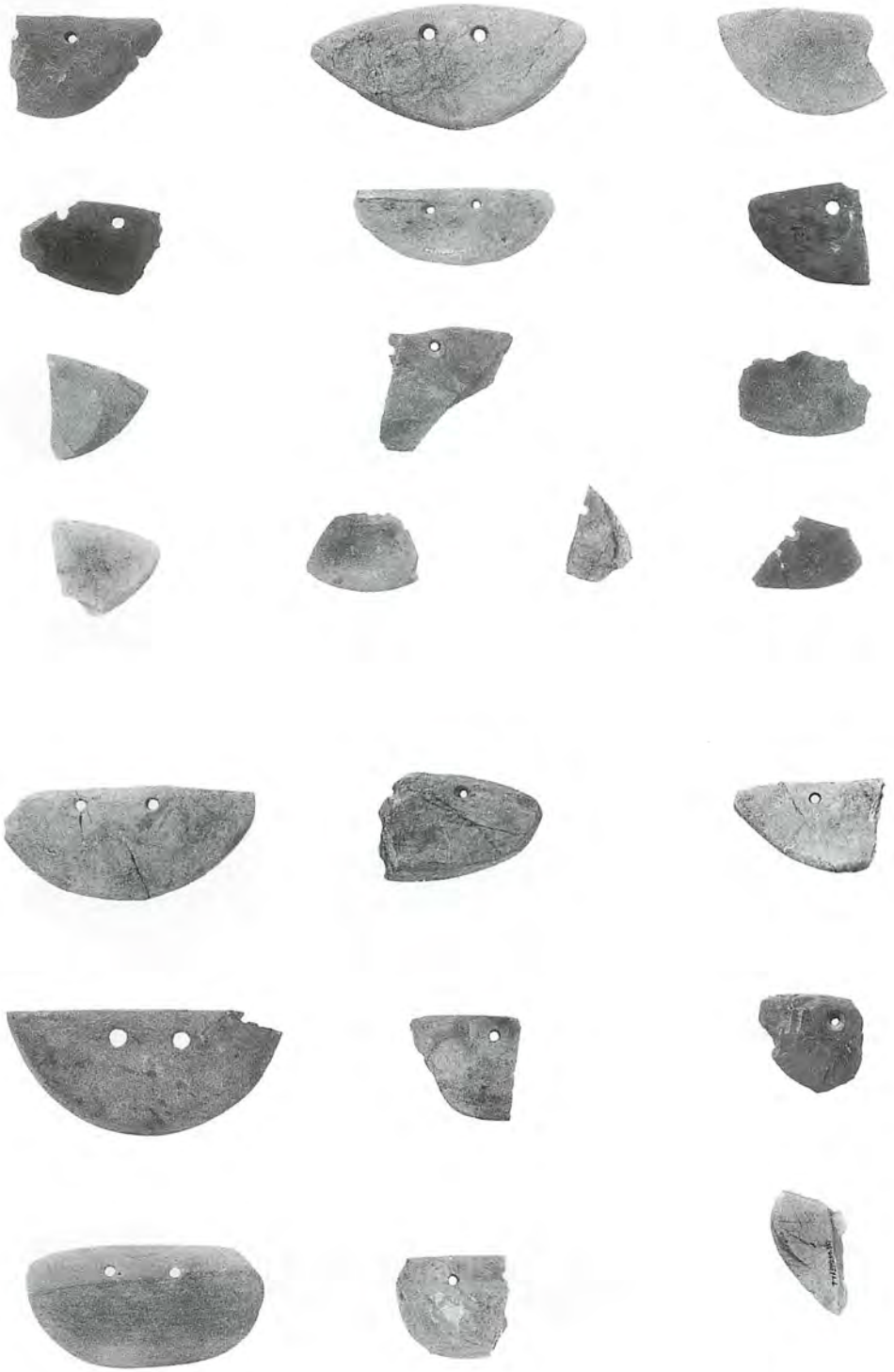
図版88

一括取り上げ土器

打製石鏃

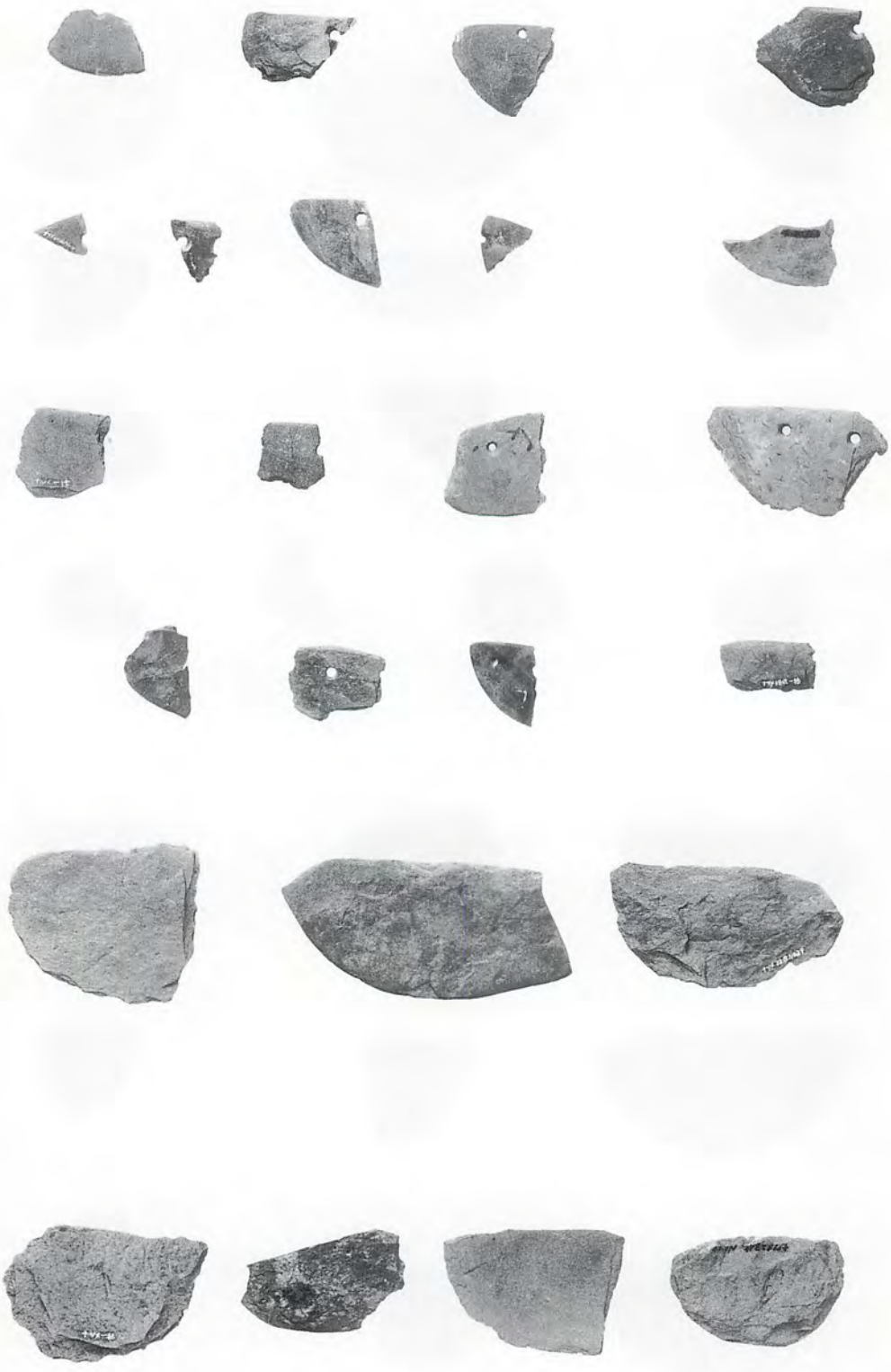
図版90

打製石斧



石包丁－1

図版92



石包丁－2

砥石－1

図版94

砥石－2

磨石

図版96

敲石

台石

図版98

鉄器

青銅製品

報 告 書 抄 録

書　　名	夏女遺跡
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第128集
編 著 者 名	園村辰実
編 集 機 関	熊本県教育委員会
所　在　地	〒862　熊本市水前寺６丁目18番１号
発行年月日	1993年３月31日

所収遺跡名	所　在　地	コード 市町村：遺跡番号	調 査 期 間	調査面積	調査原因
夏女（なつめ）	球磨郡錦町 大字木上字夏女	435015：75-2-2	198909－199002 199007－199011	約2500㎡	農免農道

主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
先土器時代 縄文時代 弥生時代後期から古墳時代前期にかけて	竪穴式住居跡，土器溜，条溝	ナイフ形石器 打製石鏃，打製石斧 弥生土器（壺，鉢，高坏，甕，ミニチュア土器，手捏土器） 免田式土器 石器（石包丁，砥石，磨石，敲石，台石） 小型仿製鏡２面，銅釧 鉄器（鉄鏃，鉇，刀子）	夏女遺跡は人吉球磨地方の弥生時代の拠点集落であろう 同一遺跡から２面の青銅鏡の出土は県内では初 弥生時代の住居跡からの銅釧の出土は県内初

熊本県文化財調査報告　第128集

夏　女　遺　跡

平成５年３月31日

編集
発行　熊本県教育委員会

〒862 熊本市水前寺６丁目18番１号

印刷　白木印刷株式会社

〒862 熊本市九品寺５丁目９－35

04 教委 教文
②007

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 128 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：夏女遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。
熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/